

# ワカバの導き手

星月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ワカバタウンに住む一人の少年・シユンは特殊な力を持っていた。彼はその力とポケモンを率い、仮面の男を倒す為、旅立ちの時を迎える。

巨悪に敗れた友の行方を捜すため。大切な存在を守るため。一人のトレーナーがジョウト地方を揺るがす戦いに身を投じていく。

# 目次

## 第一章 ジムリーダー捜査編

第一話	V S エレキッド	もう一つの始まり	1
第二話	V S ヒノアラシ	迫る決断、パートナー出現	15
第三話	V S アーボック	急襲、秘められた力	27
第四話	V S マダツボミ	戦いに向けて	38
第五話	V S エアームド	戦士は空高く	52
第六話	V S サンド	読めぬ心、サツキの神秘	69
第七話	V S ラプラス	闇夜での述懐、覚悟と約束と	82
第八話	V S ピカチュウ	過去の記憶	99
第九話	V S イシツブテ	成長の兆し	110
第十話	V S スターミー	欲への誘惑	121
キャラクター・ポケモン紹介			134
第十一話	V S バタフリー	動き出す悪意	140
第十二話	V S ストライク	束の間の平穏	151
第十三話	V S オクタン	襲い来る災厄	161
第十四話	V S キリンリキ	忍び寄る闇	170
第十五話	V S デリバード	慈悲なき心	178
第十六話	V S イーブイ	戦う理由	188
第十七話	V S ミルタンクI	シユンの不覚	204
第十八話	V S ミルタンクII	力を打ち破れ	216
第十九話	V S ベロリンガ	招かれざる使者	229
第二十話	V S ベロリンガII	食い違い	239
第二十一話	V S ゴルバット	空の大乱戦	249
第二十二話	V S マグマラシ	サツキ救出戦	256

第二十三話 V S デリバードⅡ ひとつの終わり 264

第二十四話 V S ハッサム 新たなるステージへ 271

第二章 激闘、開幕

第二章の登場人物 280

第二十五話 V S ベロリンガⅢ 集結の時 286

第二十六話 V S テツポウオ 海神降臨 298

第二十七話 V S ルギアⅠ 再起の時 314

第二十八話 V S ルギアⅡ 共闘 そして 328

第二十九話 V S デリバードⅡ 三度目の悲劇 347

第三十話 V S ウリムー 消失 364

第三十一話 V S ラッタ 巨悪の野望 387

第三十二話 V S デリバードⅢ 味方なき戦い 405

第三十三話 V S バクフーン エンジュの攻防 414

第三十四話 V S スターミーⅡ 闇に堕ちた聖女 425

第三十五話 V S スターミーⅢ 白の系譜 438

第三十六話 V S メタグロス せめて微笑みとともに 451

第三十七話 V S ニドクイン 最期の咆哮 467

第三十八話 V S ヤミカラス のこされたもの 478

第三十九話 V S フーデイン 孵す者 492

第四十話 V S ラプラスⅡ 時間のはざま 503

第四十一話 V S メタグロスⅡ ならば悪友とともに 515

第四十二話 V S メタグロスⅢ 導く者 526

第四十三話 V S ??? 真相 533

第四十四話 V S ピカチュウⅡ 過去からの刺客 544

第四十五話 V S ギャラドス I F の世界 551

第四十六話	V S エレキッドII	終わりの始まり	561
第四十七話	V S バンギラス	破壊の果てに	569
第四十八話	V S バクフーンII	覚悟の差	577
第四十九話	V S メタグロスII	最後の奇跡	584

# 第一章 ジムリーダー捜査編

## 第一話 VSエレキッド もう一つの始まり

ジョウト地方某所。

辺りには木々が生い茂り、中央部には大きな湖が広がっていた場所。

——そう、広がっていた場所である。

今となつてはその自然豊かな光景はもはや見る影もない。その広大な湖全体が、その水辺を生息としているポケモン達までもが完全に凍りついており、かつての面影は微塵も感じられなかった。

そしてその凍った湖の上に一人の少年がいた。

旅の途中であるのだろうか、軽装に身を包み、バッグを背負っている。

……しかし、彼の体はボロボロであった。

服はあちこちが鋭利な刃物で切り裂かれたのであろうか切り刻まれており、彼が被っている帽子の間からは血が流れ出している。息も絶え絶えだ。付近には彼の手持ちポケモンであろうエイパムもいたが、彼もすでに傷ついていて戦闘不能寸前の状態である。

そんな少年を見下すように、付近にできている巨体な氷柱に身を委ねている者がいた。

何者かはわからない。顔は不気味な仮面で隠し、体全体を大きな黒いマントで覆っている。声も無機質な声を発しているために男なのか女なのかさえわからない。

ただ一つわかることがあるとすれば——この仮面を被った者が湖を凍らせ、さらにこの少年を傷つけたということだ。この災害とも呼べるほどの事件の元凶であるということだ。

「所詮はその程度か。あれほど『私を倒す』などと戯れ言を吐いていたわりには随分とたわいないものだな」

「てんめえ……！」

仮面の者は少年をどこまでも蔑むような口調で話す。

少年はエイパムを気遣いながらもにらみ返す。……しかし、それだけだ。反撃もしなければ言い返そうともしない。

彼はわかってしまったのだ。今の自分の実力では勝ち目がないのだ。すでに万策尽きた。もう、打つ手は残っていない。勝機などものはや信じる気にもなれやしない。

全力で戦っているというのに、それでもなお届かない。相手は遥か高みにいる。

それが悔しくて、悲しくて……ひたすら歯を食いしばった。

「安心しろ。そう悔しがる必要はない……今すぐにあいつの後を追わせてやろう」

そう言って仮面の者は振り返る。その先には一部分だけ氷が溶けている場所が——否、砕けている場所があった。

しかも、わずかに見える水面には気泡が見える。つまり、その下には誰か生きている人がいるということだ。そしてこの者の話から想定するに沈んでいったのは……

「……何故だ？ もうテメーとの決着はついていただろ。あいつにはもう戦う力は残っていなかった。それなのに、……それなのに何故※※※※にとどめを刺した!？」

……考えるまでもない、少年の仲間だ。だが何故かその仲間の名前の部分が聞き取れない。まるで最初からなかったかのように、音が完全に消されているのだ。

戦いに敗れ、力尽きた仲間にとどめを刺した仮面の者を理解できずに少年は問いかける。

それを仮面の者は戸惑うこともなくあつさりと答えた。少年の怒りをよりいっそう沸き立たせる言葉を。

「答えるまでもなからう。あやつは敵だ。敵を生かしておく理由がどこにある?。」

それがさも当然とばかりに少年に向かって言い放つ。

自然と握った拳に力がこもる。——なぜ、自分は何もできないんだ!?! 怒りをどこかにぶつけることさえできずに、心の中で少しづつ膨張していく。

「それに、」

「……あ？」

「やつは私の元を去った裏切り者だ。私の駒にもなれないような使えない男。……殺して当然であろう」

「なっ……！」

「……今この者はなんと言った？ 少年は思わず自分の耳を疑ってしまった。」

駒、だと？ 使えない、だと？ こいつは人のことを何だと思ってるんだ？

大切な仲間のことをそんな一言で済まされて、それで平然といられるほど彼は冷静でもなければ非道な人間でもなかった。

「……ざげんな。ふざげんじゃねーよ!!」

他人の存在価値を、テメー一人の価値観で決めつけるんじゃねえ!!」

ありったけの声で叫んだ。相手に届くように。

……だが、凍りついた仮面の心にはその少年の一途な思いさえも届きはしなかった。そのような言葉は聞きたくもないと、仮面の者は少年から視線をそらし、右腕を静かに上空へと掲げた。まるで何かに合図を送るかのよう。

突如少年の足元に移った巨大な影。

気付いた時にはもはやすべてが手遅れ。異変に気づいてとつさに見上げたときには……巨大な氷塊が目の前に迫っていた。

少年の絶叫は虚しく響き——そして消えていった。

誰もいなくなった湖でただ一人、仮面の者だけが立っていた。

しばし湖面を見続けたあと、何事もなかったようにその場を去っていった。もうこの場所に用はないのだと、そう示すように……。

「……うわあああああ!!」

自分の脳裏に映った映像が信じられず、またその衝撃に動揺を隠し



切れずに、俺は大声を上げて目を覚ました。突っ伏していた上半身は完全に身を起こし、脳も目覚めたばかりとは信じられないほど覚醒している。

……あたりを見回して、心を落ち着かせている間に今のは夢だということに気づいた。

「なんだ、夢かよ。……あんまり良い目覚めとは言えないな。あんなものを見せられたとあつたら……」

前髪をかきあげながら自嘲気味につぶやく。荒れた息も少しずつ落ち着いてきた。

我ながらどこかおかしいと感じる。まさか夢にうなされて起きるだなんて信じられない。

……だが、先ほど見た夢の内容もとても信じられないような内容だった。

(夢に出てきた少年は、おそらくはゴールドだった。そしてそのゴールドが……ッ!!)

最悪の考えを打ち消すように拳を思いっきり壁に殴りつける。

ドンツ、と鈍い音が部屋に響く。壁はびくともしないが、俺を落ち着かせる効果はあったようだ。……拳がとても痛くなるが。

……信じるよ。自分の友達くらい。

ゴールドは俺の同郷の友達だ。——いや、正確に言えば友達というよりも後輩と言った方が正しいのだろうか。俺が年上だからだろうか、あいつは俺のことを『シユン先輩』と、先輩付けで呼んでいるし。

昔はよくお互いのポケモンをつれて遊んだものだ(他者からすればいたずらとも言えるかもしれないが)。とにかく俺にとっては心を許せる親しい存在だ。

そのゴールドは数週間ほど前に旅に出て、今このワカバタウンにはいない。目的はよく知らないけれど、あの有名なポケモンの権威・オーキド博士からポケモン図鑑を受けとったと聞いている。おそらくあいつも図鑑完成を託されたのだろう。……もっとも、あいつがまともに行動するかどうかは甚だ疑問に感じる。

しかしその冒険の最中に最近復活したと囁かれている巨大犯罪組

織・ロケット団と遭遇したり、そしてなぞの強敵——仮面をつけた男と対峙したと聞いている。

以前俺達の連絡手段であるポケギア越しにその話を聞いたときも、ゴールドにしては珍しく本気だった。

そして、今の夢。……ゴールドが戦っていた相手も仮面をつけていた。夢にしてはできすぎていると思える。まさかとは思うが……

「ピー、カ……」

「うん？ ああ、すまないピカチュウ。起こしてしまったか？」

隣から聞こえてきた眠たそうな鳴き声が聞こえてくる。——俺の手持ちポケモンであるピカチュウだ。俺が初めてゲットしたポケモンでもある。もつと小さいころにカントー地方に遊びに行ったことがあるのだが、その時に怪我しているこのピカチュウを助けたのだ。そんな俺に恩を覚えたのか俺についてきて……そのまま俺のポケモンになった。ゆえにゲットしたというのには少し語弊がある。

どうやら考えに集中しすぎたようだ。まさか起きていることに気づいていなかったなんて。

一言謝罪するが、ピカチュウは大丈夫だと言わんばかりに笑って手を振った。

そのかわいらしい仕草にやられて俺はピカチュウの頭を撫でた。昔からこいつはこうすると喜ぶ。今日もうれしそうに笑みを見せている。

「シユーン!? 朝ごはんの時間よー!」

「あ、わかった! すぐに行く!!」

一階から母さんの呼び声が聞こえてきた。どうやら思っていたよりも時間がたっていたようだ。

すぐさま寝巻きから着替え、ピカチュウを連れて一階へと降りていく。

食卓にはすでに朝食が並んでいた。

母さんも椅子に座って俺達の到着を待っている。

「遅いからもう並べておいたわよ。ヨーギラスも手伝ってくれたんだから、ちゃんと礼を言いなさい」

「そっか。ありがとな、ヨーギラス」

母さんの言葉を受けて、俺は床に座っていたヨーギラスへと声をかける。ヨーギラスは俺の声に反応して無言で首を縦に振った。

このヨーギラスも俺の手持ちポケモンである。手持ち第二号だ。もともと生息場所はシロガネ山という険しい場所なのだが、おそらくどこからか迷い込んでしまったのだろうがワカバタウンに傷ついた状態で倒れていた。それを俺が介抱し――それ以降俺になついたために俺の手持ちとなつている。

……あれ？ よく考えたら俺ってまだ一回もポケモンをゲットしていないのでは？

「あら？ どうしたのシユン？ ご飯が進んでいないけど……どこか体調でも悪いの？ そういえばさつき悲鳴のような声が聞こえたけど……」

「ああ、いや。なんでもない」

俺が知りたくなかった事実気づいて落ち込んでいるのを勘違いしたのか、母さんに心配をかけてしまった。

いかんいかん。食えるときは食えることだけに集中しないと。夢のことも気になるが、それはあとだ。どちらにせよゴールドに連絡すればわかること。

「そうそう、そろそろポケモンフードがなくなりそうだから、あとで買ってきてくれるかしら？」

「いいよ。どうせ今日は特に予定もないしね」

ポケモンフードというのはポケモンの食べ物のことだ。ポケモンたちは木の実や普通の食べ物も食べるけれど、ポケモンの栄養バランスを考えた食事も頻繁に摂取する。

街の中央部に行かないといけないが……別にかまいはしない。

朝食を済ませ、後片付けをした俺は早速外に出かける。

ヨーギラスはボールに戻し、腰のベルトにつけた。ピカチュウはそのまま連れ歩いている。

さっさと用事を済ませて、早めに戻るとするか。

ジョウト地方の街の一つ、ワカバタウン。

この街には同地方のコガネシティのラジオ塔やエンジュシティの  
すずの塔のような街のシンボルのようなものはないけれど、住まう  
人々の交流は盛んで目だった犯罪もほとんどない。今日も中心部は  
大勢の人で賑わっている。

そんな街の中心部に、彼はいた。

彼の手持ちのポケモンであろう、ピカチュウを連れ添って歩く茶髪  
の少年。

ピカチュウと共に、とある店の前で立ち止まった。

「おじさーん！ 俺です、いつものください！」

「お、シユン君かい？ あいよ、ちよつと待ってな」

男店員に呼ばれた少年——シユン。この店の常連客だ。

この街の人間には慕われているようで、待っている間に通りすがり  
の人達には何度も声をかけられていた。本人もそれを嫌悪している  
そぶりは見せず、むしろ好ましいように手を振って呼びかけに応えて  
いた。連れのピカチュウも嬉しそうに笑っている。

「ほら、これだろう？」

「ありがとうございます」

店員が持ってきたのは袋いっぱい詰まったポケモンフード——  
つまりポケモン専用の食べ物だ。

さらにもう一つの袋には木の実も多数入っている。

「あれ……木の実の量がいつもよりも多いように見えますけど……」

「そいつはサービスだよ。ピカチュウ達へのプレゼントだ。これから  
も鼻屑にしてくれよな？」

「当たり前ですよー」

木の実の量が普段よりも多い事に気づいたシユンだったが、店員の  
サービスということに気づいてお礼を言った。

早速そのうちの一つをピカチュウに食べさせる。ピカチュウもこ  
の味が好きなようでどんどん頬張りはじめた。

「ははは。本当に美味しそうに食ってくれるな」

「この味をいっつも食べてますからね。愛着もわいてるんですよ」

「嬉しいこと言うね。どうだ、もう一個……」

店員も商品を嬉しそうに食べてくれるピカチュウに喜びを感じて、さらにもう一個木の実を与えようとしたが……

「うわああああ!!」

「ツ!」

「なんだ!」

突如店の付近から悲鳴が聞こえてきた。

シユンが声が聞こえてきた方向に振り返ると、少し先のところでポケモントレーナーがポケモンと一緒に倒れていた。しかも同じ方向から一匹のポケモンがかけだしてくる。

黄色の体に黒いラインが数本入った特徴的な見た目。——エレキッドだ。

あちこちに電気を放ちながらこちらに向かって走ってきている。おそらくあのトレーナーはこのエレキッドに倒されたのだろう。

「大変ですよ! 突然野生のポケモンが店に現れて暴れ初めて、トレーナーが対処しようとしてるんだけど皆返り討ちにされちゃって……」

「野生のエレキッドですか」

近くから現場を見ていた人が現状を知らせてくれた。

どうやら野生のエレキッドがこのワカバタウンに入り込んで暴れているらしい。しかもトレーナーまで撃退され、このままでは被害が増える一方だと言う。

「おじさんすみません、荷物を一旦預かっていてください。あとで来ますから」

「え? ……あ、おい!」

「いくぞ、ピカチュウ!」

事態を聞いたシユンは店員の呼びかけにも応じずにすぐに行動に移す。

先ほど買ったばかりの品物を全て店員に預けて、シユンはピカチュウ

ウと共に駆けだした。

相手との距離が残りおよそ25メートル付近にまで近づいたところで、シユンたちの接近に気づいたのであろうエレキッドの頭から電気が放出された。

電気はシユンたちに真直ぐに向かってくる。——威力から考えるに“でんきショック”だ。技の威力はそれほどでもない分コントロールは容易い。

「行ってこい、ヨーギラス！」

その電気が命中する前に、シユンは腰のボールを手にとってポケモンを繰り出した。

緑色の体と頭から生えている一本の角が特徴のポケモン——ヨーギラスである。

エレキッドが放ったでんきショックは出現したヨーギラスに命中し……そしてかき消された。

自慢の電気の攻撃がいつも簡単に防がれたこと、かき消されたことにエレキッドの余裕の表情が崩れる。

「悪いな。残念ながらヨーギラスは岩・地面の二つのタイプを持っていて。この体は電気を完全に封じ込む。いくらお前が電気をぶつけてこようとも、ヨーギラスにダメージを与えることはできない」

タイプ相性がシユンに完全に味方した。自慢の武器である電気が封じ込まれたことに動揺するエレキッド。

そしてその隙をシユンが逃すはずもなく、続けざまにヨーギラスに技の指示を与える。

「ヨーギラス、“いわおとし”!!」

ヨーギラスは巨大な岩を次々とエレキッドに向けて放った。

多量の岩をよけきれないと判断したエレキッドは腕を前方で組んで防御の構えをとり、ダメージを最小限に抑えようとするが……攻撃が終わったところでいわおとしの真の目的に気づいた。

降り注がれた岩は自分をほとんど傷つけていない。目を開けると……いつのまにか、自分の周りを多くの岩が囲っていたのだから。

「さあ、これでお前の逃げ場はなくなった」

そう、さきほどのいわなだれは攻撃だけではなく、エレキツドの逃げ場所を防ぐために使用した。スピードに優れているエレキツドでも、退路を塞がれては逃げるにも逃げられない。

作戦の成功を確認したシユンはヨーギラスを手持ちに返し、ピカチュウを戦闘体勢に入らせた。

「ピカチュウ、でんきショック！」

すぐさまピカチュウの体からでんきショックが放たれた。

エレキツドが避けるか受け止めるか考えている間に、電気はエレキツドの体を襲った。

強い電撃を受けて、さらに追加効果で体が麻痺してしまった。エレキツドの体がよろけている。体力ももう限界なのだろう。

「よし、仕上げだ。ボールに収まれ！」

エレキツドが弱ったことを確認してシユンは空のモンスターボールをエレキツド目掛けて投げた。

ボールはしっかりとエレキツドに命中し、エレキツドの体はボールの中へと吸い込まれていく。

完全にボールに収まった後、最後の抵抗と言わんばかりにボールが2、3回ほど左右に揺れるが、その後はゲットを示すようにボールの動きは停止した。

「エレキツド……ゲット！」

「おお、やった！」

「さすがはシユンだぜ!!」

「いやいやそれほどでも。(……よしっ!!)」

動きが収まったことを確認してシユンはボールを手取る。

エレキツドが捕まったことを知ると、見ていた人たちからも歓喜の声があがった。その声に応えるようにシユンも手を振り返した。心の中では一人激しくガッツポーズをしているが……よほど朝の出来事が響いているようだ。

「いやー、突然すみませんねおじさん」

「何を言ってるんだ。礼を言うならば俺達の方からだ。はいよ」  
「どうも」

商品を預かってもらっていたおじさんから商品を受け取る。

久しぶりに野生ポケモンと遭遇した。たまに野生ポケモンが街に入り込んでくることがあるんだよな。食料を求めたり、いたずらをしたり、ただ暴れまわったり……と。目的もポケモンの種類も様々だ。

そんなポケモン達は基本的に街にいる俺や他のポケモントレーナーが対処する事になっている。対処といってもあまり強いポケモンは出てこないためにそれほど危険では無い。

昔は俺以外にもあいつが——ゴールドがいたんだけど……もう旅立ってしまったのだから、俺が被害が出る前に率先してやるしかない。

……そういえばまだあいつに連絡していなかったな。しばらく連絡をとっていなかったしちようどいい。俺はすぐさまゴールドのポケギアへ電話をかける。……しかし、いくら電話をかけてもゴールドのポケギアにつながることはなかった。

「……マジかよ」

とたんに不安がいつそう増してくる。先ほど心配していた嫌な予想が的中してしまったのではないかと。——いや、まだわからない。あいつはよく連絡が取れない時期が続いているときがあったし、今回だってあいつの気まぐれなのかもしれない。

そうだよ。たかが夢なんかに惑わされることはない。

「……それに、あいつのことだからなんとかして危機を乗り越えるだろう」

ゴールドは昔から相手を翻弄するトリツキーな動きを見せた。

実力差を埋めるためにも有効な手であるし十分通用することだろう。まともに戦ったらどうなるかはわからないけれど……俺は大丈夫だと信じている。

下手に考えるのはもうやめよう。いくら俺が悩んだところでゴールドがどうにかなるとかそういう問題ではないのだから。



その後は何もハプニング等は起こらず、無事に家に帰ることができた。

なんだかんだ言ってももうすぐお昼時だ。ピカチュウ達もお腹がすいているようだ。

「ただいまー。ポケモンフードと、念のために木の実も買ってきたよ」「おかえり。お昼ごはんももうすぐできるから、少し待っててね」

テーブルの上に買い物袋を置き、俺は部屋へと戻った。

そして手持ちの三体——先ほど捕まえたエレキッドも含めて全員をボールから出した。

「エレキッド。今日からここがお前の家だ」

エレキッドは物珍しそうにあたりを見回す。……男の部屋には別にろくなものは置いていないのだが、野性のポケモンからしてみればやはり別物なのだろう。

「こつちがピカチュウ。そしてこいつがヨーギラスだ。お前らもちやんと仲良くしろよ」

二匹にも言い聞かせて、握手をさせる。先ほどまでは戦っていた間柄とはいえ、今日からは仲間なのだから仲良くしてもらわないと。

ヨーギラスとエレキッドがまず握手を交わす。続いてピカチュウが手を差し出すが……いきなりエレキッドが電撃を放った。

「なっ……エレキッド!?!」

ピカチュウの体が麻痺の痺れによつて震えている。同じ電気ポケモンといえど、強力な電気を他者から放たれればそれは体を傷つける立派な攻撃となる。

こいつ……ヨーギラスには電気が通じないとわかっていたからピカチュウだけをねらっていたのか!

いたずらに成功した子供のようにエレキッドははしゃいでいる。手に入れたばかりのポケモンは言うことを聞きにくいとはいえ、さすがにこれはトレーナーとして黙ってはいられない。俺はそんなこ

いつを問い詰めようとしたが……そのままエレキッドは知ったことではないと言わんばかりに階下へと降りていってしまった。

「ま、待てエレキッド！ そっちには母さんが……！」

俺の制止を振り切ってエレキッドが階段をすべるように下りていく。

……仕方がない。俺はピカチュウにここにいるように言つてヨーギラスとともに一階へと降りていく。

なんとか間に合つてほしい、そう思っていたが……時すでに遅し。

一匹の断末魔が、家中に響き渡つた。

「もーシユンつたら。ポケモンをゲットしたなら先に報告しなさいよ」

「……うん。いや、ご飯のときに報告しようと思つたんだよ」

俺に話しかけてくる母さんの口調はご機嫌そのものだ。俺がはじめてポケモンをゲットしたのが嬉しいのだろう。

そんな母さんの横の椅子にはエレキッドが座っている。……心なしか、体が震えているように見える。先ほどまでの強がった姿勢は完全に身を潜めていた。さつき聞こえた悲鳴は間違いなくエレキッドのものだったのだが……一体何があつたんだ？

「シユン。命つて大切よね？」

「マツタクモツテソノトオリデス」

凍るような殺気(?)が俺の体を包み込む。……今度から、母さんには絶対はむかわらないようにしよう。

握っている箸が震える……しっかりしろ！ 早くこの場から逃げ出すためにも、早く食べ終わらなければ!!

「あ、そういうえばシユン。あなたに言い忘れていたことがあるんだけど……」

「何でしようか、お母様!？」

俺は食べるのをやめて敬礼のポーズをとり、敬愛してやまない母君

のありがたいお言葉に耳を傾けることに全力を注ぐことにした。ここで無礼を働くようなことがあってはならない。シユン、ここは戦場なんだ。一つの過ちが自らの命を絶つと思え……！ 一言一句聞き逃すな、わずかな動作も見逃すな……

「さつきウツギ博士があなたのことを探していたわよ。なんでも、あなたに頼みたいことがあるんだって」

「……え？」

だが聞こえてきたのは予想外の言葉。俺は思わず姿勢を崩してしまふ。

——ウツギ博士。この街では有名なポケモンの研究者だ。かの有名なオーキド博士にもその実績を認められているとの話もある。

……そのウツギ博士が俺に頼みたいことだと？

ゴールドにヒノアラシを託した、あの人が……

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます………

主人公：シユン

持っているバッジ：0個

手持ちポケモン

ピカチュウ♂ Lv8

エレキッド♂ Lv7

ヨーギラス♂ Lv22

レポートに書き込みました!!

## 第二話 VS ヒノアラシ 迫る決断、パートナー出現

「ウツギ博士があなたのことを探していたわよ。なんでも、あなたに頼みたいことがあるんだって」

母さんからその話を聞いた後、俺はすぐさま食事を終わらせてポケモン達を連れて自室へと戻っていた。

ウツギ博士からの突然の呼び出し。……何かひっかかる。俺の脳裏に浮かぶのは今朝方見た夢のことだ。

ゴールドはウツギ博士からヒノアラシを譲り受けて冒険へと旅立った。その後も二人は何度か連絡を取り合っていたという話も聞いている。

逆に俺はウツギ博士とはそれほど交流はない。家が近いということやゴールド繋がりで何度か話をしたことはあったが、それでも俺一人を指名して呼び出すほどの間柄ではないはずだ。

そこで思い当たるのがゴールドだ。ゴールドと俺が仲がいいというところで俺に何か情報を求めているのか。……はたまた、博士が俺のことを知っていて、俺の力を頼りに何かをさせようとしているのか。どちらにせよ、ゴールドが関係しているということはまず間違いないだろう。

ただそうなると気になるのは——ウツギ博士がどこまで俺のことを知っているのか、だ。

ゴールドには俺の力のことは教えてあるものの、あいつが他人に秘密をばらすとは考えられない。ゴールドはふざけたようでそういうところはちゃんとしている。それは他でもない俺が良く知っている。

……俺の力を知っていてそれでもなお頼むというのなら、それだけこの度の事件が大事ということになる。そうならば俺も力を貸さずにはいられない。

ま、行くだけ行ってみるか。俺から行かなくても向こうが来るかもしれないが、それはさすがに失礼だろう。

可愛い後輩が率先して強大な犯罪組織に立ち向かったのだ。ならば先輩である俺が引き下がるわけにはいかない。出遅れてしまった

ようで情けないが致し方ない。俺も行くとするか。  
まずは話を伺って、それからだ……

さて、何事もなくウツギ博士ポケモン研究所に到着。

「……失礼しまーす」

俺は覚悟を決めて研究所へと入っていく。ポケモン達は全員ポールに入れて腰のベルトにつけている。

こいつらを見ていたら余計な感情が入ってしまうかもしれないかな。だからこそ、話し合いには俺だけで挑む。

「あつ、シユン君。よかった。君が来てくれるのを待ってたんだよ!!」  
「お久しぶりです、ウツギ博士」

研究所に入ると、ウツギ博士が出迎えてくれた。

こうして博士と会うのも一週間ぶりくらいだろうか？　そういえば前にゴールドのことで呼び出されたこともあったな。……今考えると、地元のちよつとした有名人である博士と交流がある俺って、結構顔が広いな。

「ほう。なるほど、君がシユン君じゃな」

「え？　……オーキド博士!?!」

「その通り。わしがオーキドじゃ。君のようなトレーナーも知っているとは……わしもなかなかどうして有名になったもんじゃな」

物影から現れたその姿に驚くしかない。

なぜか研究所にはここにいないはずのオーキド博士までいたのだから。オーキド博士といえばカントーポケモン研究者の第一人者だ。ポケモン図鑑を作ったのもオーキド博士である。

たしか今は別件でワカバタウンの隣町であるヨシノシティに住まいを用意して住んでいると聞いていたが……俺の用件と何か関係があるのだろうか？

「一体何の用件ですか？　オーキド博士までいらっしやるということ  
は、……ただ事ではなさそうですね」

「……シユン君。これから言うことは他言無用でお願いしたい。君が僕達の要望に答えて旅にでる・でないに関わらずだ」

「……わかりました」

ウツギ博士がいつもの穏やかな顔から、真剣な表情へと変わった。それだけで今回の話がただ事ではないということに察することができる。どうやら俺の嫌な予感が当たってしまったのか……ひとまず俺は了承の返事を出した。

「たしか君も、ゴールド君が旅立ったことは知っているね？」

「はい。いつも連れていたエイパムと一緒に旅に出たと聞いてます」

「実は、昨日から彼と連絡がとれなくなっているんだ」

「ッ!？」

やはり、ゴールドのことか。思わず自分の拳を力いっぱい握り締めてしまう。

俺と同様、博士達でさえもあいつとの連絡が取れない状況か。俺の電話もウツギ博士の電話も出ないとなると……考えられる状況は自然と絞られてくる。

「彼がこちらからの通信に反応しないのはそれほど珍しいことではない。ただ……ゴールド君には、つい最近になって活動を再会していたロケット団の調査も頼んでいたんだ。そして敵の情報についてゴールド君に知らせた後……彼との連絡が完全に途絶えてしまった」

「そんな。それじゃあまさか、ゴールドは……」

「それについてはなんとも言えん。連絡が取れない場所にいるだけなのかもしれないからな。あの男はこちらから電話しなければまともに連絡もよこさんからのう……」

今までの状況を思い出してオーキド博士はあいつの性格を嘆きながら呟いた。

……いや違う。オーキド博士はそう言うが違う。おそらくゴールドは、本当に連絡が取れない状況に陥っているんだ。そうでなければ、いくらあいつでも俺には連絡の一つはするはずだ。

「それで今回の頼みんだけど……君はゴールド君を捜しつつ、各

地のジムリーダーを探って欲しい」

「……なぜ、ジムリーダーを？」

ウツギ博士の言葉に疑問を感じずにはいられない。

ジムリーダーといえば、各地方に8個存在するジムのリーダーだ。当然のことながら彼らの実力は並外れていて、並大抵なトレーナーでは勝利を得ることはできないといわれている。

そんな実力者を探るだと？　今はゴールドの搜索が優先であるはずなのに、一体どういう理由で……

「ロケット団のボスと思われる人物は、普段は仮面で顔を隠しているため正体は不明なんじゃが……以前ゴールドが戦ったとき、その人物のものと思われるジムバツジの金属粉が検出されたのじゃ。しかも、純正なジムリーダー用のがな」

「なっ……！」

ロケット団のボスが、ジムリーダー……!?　本当に実力者なのかよ。それじゃあゴールドが負けてもおかしくない！

それに仮面をつけている……？　それってまるで、俺が今朝見た夢のようじゃないか！　だとすると、ゴールドは本当にやられて……ッ！

「君以外に頼める者はいない。君はゴールドとも面識がある上に、ワカバタウンに代々つたわるあの力もある。

……どうか、引き受けてはくれぬか？　これはもはや、このジョウト地方そのものに関する事件なのじゃ」

「なるほど。俺のことを知った上で、それでもなお俺に協力を要請しているんですね、オーキド博士」

一方的な願いを言う博士に対して、俺は力の限りにらみつける。

一瞬ひるむ様子を見せたものの、すぐに持ち直して無言で首を縦に振った。……なるほど。よほど博士達もこのことを重要視しているように見える。

……別にかまわないけどな。言われずとも、仮面の男の話聞いたときにすでに選択肢は決まっている。

相手がジムリーダーほどの人物だというのならばなおさらゴール

ドが心配だ。そして後輩の危機ピンチに先輩が黙ってみているわけにはいかない。

しかし、俺一人で大丈夫なのかという不安要素もある。俺だっていまだに旅の経験もない上にポケモン達の実力もまだまだだ。ポケモントレーナーとしての実力は半人前もいところだろう。

そんな俺がジムリーダーを相手に戦えるかどうかという心配がある。誰かパートナーでもいればいいのだが……というか、一人で旅立ちとか心細い。

その一点が俺を悩ませる。

すると俺の悩んでいる姿が迷っていると判断したのか、オーキド博士がさらなる提示をしてきた。

「シユン君。つらいのはわかる。だが別に無理はしなくてもいい。いざというときは彼女を頼ってくれ」

「え？……彼女？」

彼女という言葉に何もピンとこない。

自分で言うのもなんだが俺には彼女なんていない。ほしいけどいない。それが現実だ。

つまりここで言う彼女とは誰か博士の知り合いのことなのだろうが……誰のことだろう？ 俺の知り合いのなかにはそれほど仲のよい女性はいないはずなんだが……

「実は、今回はもう一人協力者がいるんだ。君は彼女と協力して捜査に当たって欲しい。……入ってきてくれ」

「……協力者？」

ウツギ博士の言葉を聞いて2階から誰か女性が降りてくる。

……というか、俺達が話している間ずっと2階で待機していたのだろうか？ 俺は視線を降りてくる女性へと移す。

「……………」

……俺は言葉を失って、その女性に釘つけとなった。

綺麗に整えられた蒼いロングストレート。

透き通るような白い肌、絶妙のプロポーション。

そこにはすばらしい美貌をまとった天使がいらっしやいました。



もろタイプだ。

思わず女性に見惚れてしまった。頬が緩んでしまうのがわかってしまう。……落ち着け、落ち着け俺！

「紹介するよ。今回のロケット団の噂を聞きつけてカントー地方から来てくれた、サツキ君だ」

「はじめまして。よろしくね、シユン君」

この美しい女性はサツキさんとおっしゃるそうです。

サツキさんの俺に向けられた笑みを見るだけで、なんだかすぐく心が浄化されていく。……これほどまでに綺麗な方は初めて見た！別に美しい女性に弱いとかそういう弱点は身に覚えがないが、なんというかサツキさんからは吸い込まれるような、魅力を感じる。

しかも美貌だけではないな。

この人、只者じゃない。かなりできる。……戦闘力が——上から90、62、84……

……たまには冒険してみるのもいいかもしれない。

うん、そうだ。多少の危険を冒しても若いうちに色々やってみるべきだとよく言うからな。どうせ旅なんだから、少しは楽しまないと。

と言うか、博士達の言い分だとすでに俺が旅に出る事を前提に話しているみたいだし。

「彼女は1年前の事件の時も独自に捜査に協力してくれてな。今回も……」

「……わかりました。全力で引き受けさせていただきます」

「おお！ 引き受けてくれるか!!」

「はい。今回は俺の知り合いにも関することですから。こちらこそよろしく願います、サツキさん！」

「うん、よろしくね」

そう言つてサツキさんと握手した。……指、やわらかいな。なんと  
いうか、気持ちいいです。

そんな俺の心境を知ってか知らずか、二人の博士が俺へと再び話を振ってくる。……もう少しそのままいさせてくれてもいいじゃない！

「それじゃあシユン君。旅立ちにあたってわしからはポケモン図鑑を

……」

「僕からはポケモンを一匹あげるよ。旅のお供としてね。くさのポケモン、チコリータ。あるいはほのおのポケモン、ヒノアラシ。好きなポケモンを選んでくれ」

「……え？」

ポケモン図鑑と……ヒノアラシ？

あれ？ おかしいな。たしか聞いた話ではヒノアラシはゴールドが譲り受けた。図鑑もゴールドが一つ、そしてもう一つは盗まれ、残る図鑑は一個のはずなんだが……それを俺がもらっていいのだろうか？

「博士。図鑑は奪われたんじゃないですか？ それなのに最後の一機を俺なんかに託していいんですか？」

それに、ヒノアラシだってゴールドが旅立ちの際に連れていったのでは……」

「ああ、それは別物だ。図鑑はウツギ君の協力もあって新しくもう一機を作り直したのじゃ。おかげで苦労したぞ……」

「このヒノアラシは、どうも誰かに捨てられたポケモンみたいだね。ワカバタウンをさまよっていたんだ」

「……へえ」

図鑑って新しく作れるものなのか。最近の技術はすごいな。

そしてヒノアラシ。……ゴールドも貰ったポケモンだ。誰かに捨てられた、か。そんな話を聞いちゃなあ……

そうして俺はオーキド博士からポケモン図鑑を、ウツギ博士の助手からモンスターボールとキズぐすり、さらにウツギ博士からはヒノアラシの入ったボールをもらった。

……後輩ゴールドと同じってのもそうだけど、どうもああいう話を聞いたら放つてけないんだよな。

ま、個人的にもヒノアラシに思うところがあるし、好きだから何も問題はない。むしろヒノアラシを手に入れたことは、旅立ちを決めた中で本当によかったことだと思う。

「よしっ……でてこい、ヒノアラシ!!」

ウツギ博士の許可を得て、早速ボールからヒノアラシを出してみる。俺の新しい仲間を。

まぶしいほどの光がやんでいくと……小さなねずみのような容貌、背中には四つのオレンジ色の斑点を持ったポケモンが見えた。そこにはたしかにヒノアラシがいた。

実物を見るのは初めてだな。一度見たのは写真だったし、ゴールドのヒノアラシとは結局会うことなくゴールドが旅立ってしまった。こうして見てみると実物もやはり、「可愛いー！ー！！」そう、可愛い……って、

「この子、ヒノアラシっていうんですか。可愛いですね！」

モンスターボールから出るや否や、サツキさんがヒノアラシに近づいて胸元に抱きかかえる。……あの、そいつ一応俺のポケモンなんですけど。

ヒノアラシはヒノアラシで、サツキさんに押し付けられた2つの巨大なモンスターボールの感触と撫でられている感触からか、ずいぶん幸せそうな顔をしている。ひよつとしてこいつ♂か!? ♀なのか!? やっぱりポケモンにもそういう感情が芽生えているのか!?

……ちくしょう! どうして俺はヒノアラシに生まれなかったんだ! 俺もヒノアラシに生まれたかった!! もう今からでもヒノアラシになりたい!!

悔しさを隠し切れずに、俺はひざについて床を思いつきり殴りつける。……痛い。心も、腕も痛い。

「……まあ、仕方がないよシユン君。彼女はポケモンに好かれる傾向があるからね。大丈夫。ヒノアラシもすぐ君に懐くさ」

ウツギ博士がうなだれている俺の肩をぽんと叩き、声をかけてきた。おそらく、ヒノアラシがサツキさんに懐いているのを見て、がっかりしていると思ったのだろう。

……けどすみませんウツギ博士。俺はあなたが考えているほど純粹無垢な青少年ではないですよ。

ヒノアラシに懐かれているサツキさんに嫉妬するどころか、むしろサツキさんに懐いているヒノアラシに嫉妬しているような、そんな男

ですよ。

その後、俺はウツギ博士とオーキド博士の電話番号をポケギアに登録。

研究所を出た後にサツキさんと一度別れて、自宅へと戻って行く。ここまでの情報を整理するため、そして母さんに旅に出る許可をもらうためだ。……ただ、相談もなしに了承してしまったけれど、母さんは俺の旅立ちを許してくれるだろうか？

「……と言うわけで、旅立つことになったんだけど……」

「旅？ 別に構わないわよ。気をつけてね」

「うん、そうだよ。いきなりこんなこと言って俺も悪いと思うけど……って、いいの!？」

決断するの早っ！ 説明を一度しただけで、母さんは二つ返事です承してくれた。実の子供が旅立つというのにやけにずいぶんあっさりしてるな！ こういうときは親の説得で長引くだろうに、むしろ俺の説明のほうが圧倒的に長いぞ！

もう少し、ふりでもいいから悲しむそぶりの一つや二つ、見せてくれてもいいと思うんだけどな。

「大人になったら旅なんてできないから、今できるときにやっておきなさい。ひよっとしたら素敵な出会いもあるかもしれないわよ？

私もお父さんとは旅の途中で出会ったのよ」

「……そうなんだ」

特に知りたくなかった新事実。ちなみに現在その父はどこかの地方を放浪しているはずなのだが。どうでもいいけど。

……まあ確かに、旅の途中ではなく旅のはじめではあったけれど素敵な出会いならたしかにあるな。

「でも、いつでも帰ってきていいということは忘れないでね。ここはあなたの家なんだから。」

ポケギアにも、すでに私の電話番号は登録してあるから、いつでも

連絡してね。私からもたまに連絡するから」

「うん。わかってる」

帰ってくる場所があると考えるのはありがたい。精神的にも余裕ができる。

今までずっとここに住んでいたからわからないけれど……やっぱ  
りここが俺の原点なんだな。

「それともう一つ。……絶対に死なないでね」

「……うん」

敵のこと、そして俺の力を察しての忠告——いや警告だ。

先ほどまでののんきな、穏やかな顔が一切なくなつて俺に言つてくる。  
る。

……わかつてる。もとより死ぬ気なんてない。ただ後輩を助け  
にいくついでに犯罪組織を倒すだけだからな。

「そう。……それとポケモンはどうする？ 四体とも連れて行くの  
？」

「……そうだなー。たしかにそれが問題だな」

ボールから出ている4匹の手持ちを順に見渡す。

ピカチュウ・ヨーギラス・エレキッド・ヒノアラシ。バランス的に  
考えればピカチュウかエレキッドのどちらかは残しておいたほうが  
よいのかもしれないが……そうだな。

「いや、三体。一体は家においていくよ。ボディーガードの役割も含  
めてね」

「なら、エレキッドをおいていかない？」

「え？ エレキッド？」

母さんからなぜかご指名が入った。

……当のエレキッドはと言うと、突如死刑宣告を食らつた犯罪者の  
ような、死んだ顔をしている。お前、一体何をされたんだ？

だがバランスを考えるとたしかにそれが理想的ではある。ピカ  
チュウは俺の一番古い付き合いであるし、コンビネーションは今のと  
ころ一番よい。

そんな風に考えると、エレキッドが俺のズボンの裾を引っ張つて涙

ながら命乞いをしていた。おい、ちよつと待て。お前先ほどまでの反抗的な姿勢はどこに消えた？

「……そうだね。じゃあ母さん、エレキッドを頼むよ」

「……ッ!?!?」

「ええ。私がしつかり良い子になるように調教きょういくしておくわ」

俺の言葉がどうやらエレキッドにはとどめの一言だったようだ。その場で固まっている。

逆に母さんは満足げに力強く頷いた。……どこかニユアンスが変だったような気がするが、気のせいだよな？

だがこれで旅立ち前に考えることはもうない。

「それじゃあ行ってきなさい、シユンー!」

「うん。……行ってきます!!」

全ての準備を済ませ、リュックを背負い、俺は母さんに別れの挨拶を告げて家から旅立つ。

ひとまずはヒノアラシ、ピカチュウ、ヨーギラス。俺の全ポケモンをそのまま引き連れて街の郊外へと出る。

「こつから俺のスタートだ。お前達、よろしく頼むぞ」

何も言わずに俺の言葉にコクリと頷いて答えるポケモン達。

まだ3体、小粒なメンバーばかり。ここから俺の冒険は始まるんだ。

「準備はいいかしら、シユン君?」

「……ええ。行きましょう、サツキさん」

サツキさんと合流して、俺は生まれ育ったワカバタウンを後にした。

まず最初の目的地はキキョウシティ。キキョウシティジムリーダー——ハヤトだ。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：0個

手持ちポケモン

ヒノアラシ♂ Lv7

ピカチュウ♂ Lv8

ヨーギラス♂ Lv22

レポートに書き込みました!!

### 第三話 VSアーボック 急襲、秘められた力

—— 29番道路 ——

ワカバタウンとヨシノシテイを繋ぐ一本道、29番道路。俺も何度かこの道を通ったことはあるが、あれはあくまでも旅などではなく隣町へのちよつとした用事だとか、そんな理由であった。それゆえに当時はバトルのことも一切考えていなかった。

だが今回は違う。旅するにあたってここは初心者トレーナーでも道に迷うことはないだろうが、道端には自慢のポケモンを引き連れたトレーナー達はいる。さらにポケモンを鍛えようと勝負を仕掛けてくる者達がいる。

そしてポケモントレーナーならば受けた挑戦から逃げるわけにはいかない。……まさに今の状況であるのだが。

「マダツボミ、はっばカッター!!」

「ヒノアラシ、ひのこ!!」

相手のマダツボミの体から放たれる無数の鋭利な葉の刃。

対してヒノアラシは背中から炎を出して臨戦体系に入る。そして「はっばカッター」を迎え撃つように、ヒノアラシの口から一直線に炎が噴出した。

炎はまっすぐ相手に向かって行き、全てのはっばをいとも簡単に飲み込んでいく。

そしてそのまま勢いは衰えることなく、炎はマダツボミの体を襲った。炎はあつという間に体中に広がり、その体を飲み込んでいく。

「マダツボミ!!」

マダツボミのトレーナーの短パン小僧が声をかけるが……炎が消えるとともに、マダツボミは倒れた。

これで相手のポケモンは全て戦闘不能。勝負終了だ。

……たしかにこちらとしてもポケモンを鍛えられてよいのだが、それにしてもトレーナーの数が多くないか？

ワカバタウンを出発してすでに三人目のトレーナーとの勝負。一応全勝しているが……今まで野生のポケモンとの勝負なら話は別だ



が、トレーナーとのバトルなどめつたにしたことがなかったために、  
いまだ慣れやしない。

「……僕の負けだ。はい、賞金だよ」

短パン小僧から戦いの賞金をもらう。

……賞金といっても、負かした相手から現金を手渡しでもらうと  
か、そういうものではない。

お互いがお互いのトレーナーカードを取り出し、近づける。賞金の  
やり取りは手渡しではなく、ポケモン交換のように通信してやり取り  
を行うのだ。このトレーナーカードはポケモン図鑑と同等の技術を  
誇り、なかなか精密にできているらしい。(サツキさん談)しかもカー  
ドには指紋も登録しており、犯罪防止も徹底されている。

さらに口座を作っておけば別の口座に振り込んだり、賞金を分ける  
こともできる。俺も母さん(というか自宅)の口座はあるが……俺は  
していない。なんか関係のない物の購入に使われるのでは、と疑問が  
浮かぶからだ。というよりも以前あったのだ。

ちなみにこのバトルで俺の口座の残金は4200円となった。(最  
初は3000円だった)旅を始めてさつそく1200円稼いだとい  
うことになる。

受け渡しが終わると、短パン小僧はポケモンセンターに行くのだ  
ろう。マタツボミをボールに戻して立ち去っていく。「次は負けない  
からな!」などと言っているが、おそらく会うこともないだろうな。  
……セリフが完全にかませ役だよ。

「お疲れ様、シュン君」

「待たせましたね、サツキさん。さあヨシノシティへ行きましょうか」  
傍で戦いを見守っていたサツキさんに声をかけて再び先を目指す。  
野生のポケモンやトレーナーとの戦いの時は安全な場所で俺のこと  
を見ていてくれる。時にアドバイスをくれることもあった。

できることならば今日中にキキョウシティに着きたいと考えてい  
るから、あまり長居はしたくない。

「ところでサツキさん、一つ聞いておきたいことがあるんですけど」

「ん? 何かな?」

ヨシノシテイに向かって歩きながらサツキさんに疑問を問いかける。

オーキド博士やウツギ博士が信用しているくらいなのだからサツキさんもそれなりの実力者なのだろうが、少なくとも俺は今日会うまで彼女のことを全然知らなかった。博士は一年前にも手伝ってもらったと言っていたものの、一年前の事件で活躍していたと聞いているのはレッド・グリーン・ブルー・イエローといったカントー凶鑑所有者くらいのものであり、まったく情報がないのだ。

だからこそ、早いうちにこの人のことを色々知っておきたい。

「サツキさんって、出身はどこなんですか？ オーキド博士は、サツキさんが以前カントー地方の事件を調査していたって言っていましたけど……」

「ああそっか。そういえばシュン君には私のことは話していなかったんだっけ」

サツキさんはうーんと唸って、口元に右手の人差し指を持っていく。その仕草が妙に色つぼく見える。

何かを考えているようだが、すぐに答えてくれた。……やっぱり彼女にも何か秘密があるのだろうか？

「そうだね。シュン君も少しは知っておかないと不安だよね」

「……まあ、個人的に知りたいという好奇心はあります」

「じゃあ教えるよ。私は君の想像どおり、カントー地方出身よ。故郷はマサラタウン。オーキド博士の研究所がある街」

「マサラタウン!?!」

「ん？ そうだけど、どうかした？」

想像外の地名が出てきた事に、思わず声を上げてしまった。

俺の反応を不思議に思ったのか、サツキさんが顔を覗き込んでくる。

「あ、いえ。……まさか、チャンピオンとなったレッドさん達と同じ故郷だとは思わなくて……」

「そういえば彼らも有名人になったもんね」

マサラタウンはカントー地方の小さな町ではあるのだが、かなり有

名だ。マサラタウンはかなりの実力を持ったポケモントレーナー達の故郷であり、全大会の覇者・レッドもマサラの出身だ。

それならオーキド博士との関係も理解できる。オーキド博士はもともマサラタウンでポケモンの研究を行っていた。同じ街に住むということ、いろいろつながりもあったのだろう。

「でも、残念ながら私は彼らとは会った事ないのよね。故郷の有名人と会いたいとは思っただけ、その前にこのジョウト地方のニュースを聞いてここに来たのよ」

「え？ レッドさん達と会ったことないんですか？」

「うん。彼らが活躍していたとき、私は少し用があつてここから離れた地——ハウエン地方に行つてたの」

「……ハウエン地方」

ハウエン地方はジョウト地方やカントー地方から遠い場所にある、自然豊かな土地だ。

なるほど、それでレッドさん達との交流はないのか。となると俺が凶鑑所有者の中では初めてサツキさんに会つたつてことになる。

「シユン君は行つたことないかな？ あそこも自然あふれるいい場所だったわよ」

「そうですね。いつか……この事件が解決したら、是非とも行つてみたいですよ」

もつとも、今のところそんな余裕はないですけどね。

でも、この事件が終わつたら俺も他の地方にも旅してみたいな。再会したらゴールドとかにも声をかけてみるとするか。

「……あらっ？」

「え？… どうかしました？」

俺が一人で決意を固めていると、サツキさんが突然立ち止まった。

そして警戒するように、辺りを見回す。俺には何かなんだかわからなかったが……すると、俺の耳にも何か聞こえてきた。

「……何か聞こえない？」

「はい、聞こえます」

……バサバサ、と耳を澄ますと何かが飛んでいるような音が聞こえ

る。しかも、その音がだんだん大きくなっている。ひよつとしてこちらに近づいてきているのか!?

「! 来るわ!!」  
「なっ!?!」

すると、突如木々の間から大量のポツポが勢いよく飛び出してきた。

撃退も考えたがさすがに量が多すぎる。攻撃を受けないように頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。

「……な、なんだ!?!」

だが、決して俺達に襲いかかってこない。ポツポの集団は俺達の上空を横切ってそのままどこかに行ってしまった。

「……集団での移動? そういう時期なのかしら? それにしても……」

「! サツキさん、危ない!!」

「え……きやつ!?!」

咄嗟の判断でサツキさんを抱えて横に飛んだ。

サツキさんは意味がわからないのか、目を丸くしていたが……その直後、先ほどまでいたサツキさんがいた場所に細い針のようなものが打ち込まれていた。

しかも、これはただの針ではない。……一本一本に強力な毒が含まれている。どくばりだ。相手の攻撃の意思を感じ取り、すぐに体勢を立て直す。

「……ッ。なるほど、さつきのポツポ達はこいつから逃げていたみたいですね」

「——『コブラポケモン』、アーボック!」

毒タイプを象徴する紫色のボディ、そして蛇を思わせる尻尾。アーボックだ。

……まさか旅を始めて早々にこんな相手に出くわすとは思わなかった。さすがに今の手持ちでは分が悪いか?

「サツキさん、下がっててくださいい! ……ピカチュウ!!」

威力が弱くてもあの毒の攻撃を人間が受けるのは危険すぎる。

サツキさんは俺の意図をよんですぐに後ろに下がった。そして俺はピカチュウを繰り出す。

……今回はレベル差もあるだろうし、力押しは難しいだろう。ならば……

「ピカチュウ、 でんきショック!!」

最初に牽制ででんきショックを放つ。

読みどおりこれは難なくかわされて、逆に口から毒針を打ち返してきた。

しかしピカチュウはそのすばやさを活かし、回避行動を取る。

毒針をかわしたものの、アーボックは体を大きく動かして尻尾を振り回してきた。

「飛んで、そこからもう一度 でんきショック!!」

ブウンツと音をたてながら勢いよく振るわれる尻尾。

しかし、ピカチュウは空中に逃れて攻撃を回避し、そこから仕返しのでんきショックが放たれた。

攻撃直後で隙が大きいアーボックに命中したものの……やはり駄目だ。ダメージが小さく決定打には至らない。むしろアーボックの怒りをあおってしまったようだ。

「やっぱり、倒すのは厳しいな」

なにせ向こうは進化も経験しているんだ。実力差がありすぎる。

……よし、やっぱりあの作戦を使うとしよう。

「相手の足元めがけて でんきショック だ！」

今度はアーボックの足元めがけて でんきショック を放つ。

だが、アーボックはその場から跳躍してこちらへ一気に向かって来た。

……やっぱりだ！ 威力が小さいからあまり利いていないだろうが、それでも自分の攻撃が当たらず、逆に電撃を浴びてアーボックはイラついている。だから、一気に勝負をつけるべくこちらに突進してきたのだろう。

「よしー ピカチュウ、 でんじは!!」

近づいてきたところで、ピカチュウの尻尾から放たれた電気の塊が

アーボックに直撃する。至近距離だったためにアーボックはまともに受けてしまう。

威力はないけれど、当たれば確実に相手を麻痺させる。でんじはだ。これでアーボックの動きは痺れで鈍くなった。動くのもつらそうに、ただその場で尻尾を振っているのが伺える。

「下がれ、ピカチュウ！ ヒノアラシ、えんまくだ！」

ピカチュウを手元に退かせて、今度はヒノアラシを繰り出す。

登場したヒノアラシの背中からはもくもくと黒い煙が出現し、その煙がアーボックを包み込み、相手の視覚を封じる。

「仕上げだ！ ……ヨーギラス、いわおとし」で壁を作れ!!」

さらに交代し、ヒノアラシを下げた今度はヨーギラスを出した。

ヨーギラスが放った「いわおとし」はこちらとアーボックを隔てるように、岩の壁を作る。

「OK！ サツキさん、ここは逃げますよ!!」

「う、うんっ！」

アーボックが動けない今がチャンスだ！ サツキさんの手を引いて一目散にかけだす。

レベルが高い相手と下手に戦ったところで、こちらの消耗が激しすぎる。ならばダメージを受けないうちに退いたほうがいい。野生のポケモンに無理して勝つ理由はないのだから。

そこで編み出した作戦が今の業だ。

最初にピカチュウの「でんじは」で相手の動きを鈍らせ、そこにヒノアラシが「えんまく」を放って相手を惑わせる。そして相手の視覚が回復する前に仕上げのヨーギラスが「いわおとし」を放てば、追おうにも障害が多すぎて相手はこちらを追うことはできない。

……完璧だ！ まさに完璧な作戦だ!!

「我ながら恐ろしい作戦を考えたもんだぜ……」

「……オ……ポオ……」

「……ん？」

走っていた足を止めて俺は横に立ち並んでいる木々の間へと視線を移す。

今、何か掠れた鳴き声のようなものが聞こえたような気が……

「どうしたの?」

「今、何か聞こえませんでした?」

「え? いえ、何も聞こえなかったけど」

「たしかこの辺りから……」

「え、シユン君!」

俺にしか聞こえなかったようだが、俺はひとまず周辺の草むらへと駆けて行く。サツキさんは止めるものの、無視するわけにはいかなかった。

先ほどのアーボックの仲間がいたら危険だが、今はそれよりも先ほどの鳴き声について知りたい。生えている草むらをかきわけて奥へと進んで行く。

……すると、一羽のポツポが地面に倒れていた。

「やっぱり、今のはポツポの鳴き声だったか。大丈夫か!」

ポツポの小さい体を抱え込む。……どうやら右の翼を怪我しているようだ。骨に異常がなければよいのだが、さすがにここではわからない。……ひよつとしたらこのポツポも先ほどのアーボックにやられてしまったのかもしれない。それで群れと逸れてしまったのか。

「悪いな。少し我慢していてくれ。さすがにここで治療するのは危険すぎる」

俺はポツポを抱き構えたまま走り出した。ポツポも抵抗せずに収まってくれたから助かる。

そしてサツキさんと合流し、俺達はこの場を離れて行く……

しばらく走り続けたところで、立ち止まって休憩する事にした。

「……ここまでくればヨシノシティも目の前だし、大丈夫でしょう」

「そうですね。まずはポツポの治療を……」

ポツポの怪我している右翼を見してみる。外傷は特に見当たらないところを考えると、骨をやられてしまったのかもしれないな。大方、アーボックに地面にたたきつけられたりしたのだろう。

「どうする、キズぐすりを……」

「いや、いいです」

サツキさんがキズぐすりを取り出そうとするが、それを俺が止める。

たしかに外傷を負ったときや筋肉へのダメージを負ったときはキズぐすりは有効だが、骨など内側まで損傷していると治療効果は半減してしまう。

だからこそ、今は道具には頼らずに俺がやろう。

右腕を負傷しているポツポの右翼へと当てて。……意識を全て右腕だけに集中する。力を対外に放出するイメージで……

「……ッ！ なっ……!?!」

俺の目の前で眩いほどの光が放たれているのが感じられる。

サツキさんがなにか驚いている声が聞こえた気がしたが、今は他に意識を向けている余裕がない。

……約20秒ほどで、俺は力の供給をやめた。短い間ではあるが、やはり力の影響で息が少し荒くなってしまった。

「はあ、はあ。……ふう。もう大丈夫だろう」

治ったことを確認したのか、ポツポも嬉しそうに羽を羽ばたかせている。

……しかし、やはりこれはかなり疲れるな。自分の気力を一気に持っていかれる感じだ。

「……シユン君。今のは何？ まさか、トキワの力……?」

「いいえ、違います。知っているでしょうけど俺はワカバタウン出身ですから。ポケモンの治療なんてできやしませんよ」

カントー地方のトキワシティに伝わる『癒しの力』をサツキさんはおそらく思い出したのだろう。

だが、俺がやったことはまったく違う。だいたいトキワの『癒しの力』は外側からポケモンの体に働きかけ、傷一つ残すことなくポケモンを治療するのだろうが、俺の場合はまったく逆だ。現にポツポの体にはいまだ若干の傷が治りきらずに残っている。

「で、でも現に今ポツポを……」

「……ま、それはまだ秘密ということだ」

どうやら事情を知っているオーキド博士も俺の力については彼女



に話していいようだ。

……それは助かる。俺の力は決して乱用していいものではないからな。過信されたら困る。

「それじゃあポツポ。傷も癒えたことだし、お前は仲間と合流しな」  
ポツポの地面において、仲間と合流するように促す。……のだが、  
「……」

もう飛べるはずなのにポツポは一向に飛び立つ姿勢を見せず、むしろ無言で俺の脚に擦り寄ってきた。

痛みはさきほどの反応からみてもないはずだし、これ以上ここに居座る理由はないはず。それなのにこうやって俺に寄り添ってくるということは……

「……まさか、俺と一緒に来る気か？」

俺の問いにポツポは無言で頷く。

……確かに少しでも戦力は欲しい。ポツポも成長すればピジョットに進化し、空中戦力としては申し分ない最高レベルにもなるだろう。だが……

「いいんじゃないかしら、シユン君」

「……言っておくが、俺達はこれから想像もつかないような戦いに挑もうとしている。それでも、来るというのか？」

サツキさんがそう言う気持ちは理解できるものの、俺はやはりまだ納得できない。確かに今のポツポは完全に傷が治っていないし、今から仲間の群れに合流しろというのも酷な話なのかもしれない。

だがしかし、俺の旅について行くということはそれ以上に酷だ。何せこれから相手にしようとしているのはロケット団を率いている実力者だ。いつ死んでもおかしくないような環境になるだろう。だからこそ下手に巻き込みたくはない。

ポツポはしばし考えるような動作を見せたが……力強く頷いた。俺についてくる、と。そういわんばかりに。

「そっか。……わかった。なら、これ以上言わない。一緒についてこい」

俺は空のモンスターボールを一個取り出す。

そしてポツポに向けて放り投げた。ポツポも飛んで自分からボールへと向かっていく。

……一回、二回、三回とボールが左右に揺れる。

そしてボールはカチツと小さく音を立てて、動きを止めた。

ポツポのゲット完了。俺は早速ボールからポツポを出し、他の三体もボールから出す。

「よし！ さっそく仲間が増えたんだ。これからよろしく頼むぞ、皆！」

旅だつて早速仲間が増えた。ポケモンたちは皆笑つて頷いてくれたし、サツキさんも祝福してくれた。

……このままどんどん頼れる仲間を増やさないと。たとえ誰が相手であろうと負けないように……

「それじゃ、このままヨシノシティへ行くぞ!!」

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：0個

手持ちポケモン

ヒノアラシ♂ Lv10

ポツポ♀ Lv9

ピカチュウ♂ Lv11

ヨーギラス♂ Lv23

レポートに書き込みました!!

## 第四話 VS マダツボミ 戦いに向けて

トレーナーとの戦いや野生ポケモンとの戦いはあったものの、その後は（先ほどのアーボックによる急襲のような）ハプニングもなく無事にヨシノシテイまでたどり着いた。……しかし、隣町とはいえども今回はバトルが多かったために時間がかかってしまった。普段はそれほど時間もかからないのだが、今はワカバタウンを出発してもう2時間ほどが経過している。

そのおかげでポケモンたちのレベルが上がったのはいい事だが……最初から内容が濃すぎる。ここまで戦っていたポケモン達にも疲労が伺える。

「まずはポケモンセンターへ行きましょう。ポケモンたちを回復させて、私達も少し休まないかね」

「賛成です。さっそく行きましょう」

サツキさんの提案に了承して街に入ってすぐのポケモンセンターへ足を向ける。

思ったよりも大きく、ポケモンセンター内には多くの人がいた。ポケモンセンターは各地域に展開しているもののワカバタウンにはセンターは存在しないので、俺にとっては物珍しいのだ。

「こんにちは、トレーナーさん。こちらではポケモンの体力を回復します。あなたのポケモンをお預かりしますか？」

「はい、お願いします」

俺は四個のモンスターボールを取り出し、受付のジョーイさんに預ける。

自分の力で回復ができないこともないのだが、外傷を治すならばセンターに預けたほうがいい。それに俺の場合は自身の体力の問題もある。だからこれから可能な限りは回復はセンターを利用することにしよう。

「あら、彼女とご一緒ですか？ よろしかったらそちらの方も一緒に預かりますよ？」

「あ、わかります？ そうなんd……」

「いえ。私は彼の旅に同行しているだけです。バトルもしていないので、けっこうです」

「……」

うん、わかっていたけどね。でも夢を見るくらいはいいと思うんだ。許されることだと思うんだ。だからそんなにはつきりと言わなくていいと思いますよ。……いかん。悲しくて自然と涙が……

「それでは、ポケモン達が回復するまでしばらくお待ちください」

身分証明のトレーナーカードを登録して、俺達はひとまず近くの長椅子に腰掛ける。

……自動販売機で買ったおいしい水が本当に美味しい。ひんやりと冷えていて疲れた体を癒してくれる。アーボックの襲撃の際にけっこう走ったので汗もたまっていたのだ。

「ねえ、シュン君」

「はい？　なんですか？」

「……さつきは、助けてくれてありがとうございます」

「……ああ、アーボックのことですか」

突如サツキさんが俺にお礼を言ってきた。

先ほどの急襲のことだろう。何せ毒を持っている相手だ。生身の人間が受ければ、へたすれば命にも関わる。

あの時は俺も焦ったけれど、反応できなかったサツキさんにとってはその以上に深刻なことだったようだ。

「礼を言われることではないですよ。それに、結局のところ倒すどころか敵に背を向けて逃げだしましたから。……格好悪いところを見せちゃいましたね」

「そんなことないわよ。野生ポケモン相手に、果敢に立ち向かっていく姿……格好良かったよ」

そう言つて素敵な笑顔で微笑むサツキさん。

……直視できずに思わず目を逸らしてしまった。その笑みは反則です。

駄目だ。このままでは変な空気になってしまう。何か別の話を持ちかけないと……

「……そ、それにしてもポケモンセンターって便利ですよ。無料でポケモンの回復してくれるなんて。一体資金はどこから来てるんでしょうかね?」

「ポケモンセンターの収入源は、ポケモン協会が関わっているわ。『ポケモンセンター運営費』という形で協会から資金を支給されているの。ジムリーダーと一緒に」

「世の中便利なものですね」

よし、なんとかばれずに済んだ。

センターもポケモン協会が関与しているのか。たしかにポケモンセンターも公共施設となっているわけだし、不思議なことではない。協会の資金源は不明だけど。

「……ああ、そうだシユン君。ポケモンセンターで思いだしたけど、ポケモンの捕獲については気をつけてほしいの」

「え? 捕獲、ですか? どうして……」

捕獲に気をつけるという意味がわからない。

凶鑑所有者としてはポケモン凶鑑の記録を埋めるためにもポケモンの捕獲は欠かせない仕事のようなものだ。(別に出会うだけでも問題は無いのだが、ポケモンを捕まえたほうがより詳しい生態情報を得られるためである)

それに自分の手持ちをより層のあるメンバーで固めるためでもある。ゆえにポケモンの捕獲はメリットばかりで特に気をつけるようなことはないはずなのだが……

「聞いてないかしら? 最近ジョウト地方全域でデータ通信が不通なのよ。そのせいでポケモン転送システムも使用が不可能になっている。だから、6体以上のポケモンを持っているときに別のポケモンを捕まえたとしても、連れ歩くしなくなる。……そのことだけは、覚えておいて」

「……………あ!!」

忘れてた! そして思いだした!

そういえば、たしかにワールドがニョロモを取り戻した時に通信がどうのこうの言っていたな。それでウツギ博士の助手がわざわざ

ゴールドの所に直接出向いたとか言っていたし。……あんな細かいことみんな忘れていたよ。というか、もう直っているものだと思っていた。

……そして、すでに俺の手持ちポケモンはピカチュウ・ヨーギラス・ヒノアラシ・ポツポの四体。つまり手持ちメンバーにはあと2体しか余裕がないというわけだ。それ以上捕まえると本当に連れ歩くしかなくなる。

参ったな。少なくとも海上の移動のために水タイプを一体はいいたいと思っているし、そうなるかとあと一体をどうするかだ。手持ちのやり取りが困難となると、捕獲にも気を配らないといけない。

「オーキド博士達も解決に向けて動いているけれど、そう簡単には直らないみたい。だから、これからポケモンを捕まえるときは気をつけてね」

「……はい」

サツキさんの言うとおりで。いちいちワカバタウンに戻るわけにはいかないからな。

となると、やはり通信システムが普及するまでは手持ちの数には注意しなければならぬ。

しかし今教えてもらってよかった。後でシステムを使えないと言われても混乱するだけだからな。サツキさんがいてくれて大助かりだ。もしもいなかったら……何も知らずにポケモンをとにかくゲットしていたのかもしれない。やっぱり一人じゃなくてよかった！

「シユンさん。ポケモンの回復が終了しましたよ」

「あ、はい!!」

ジョーイさんが呼んでいる。意外と回復は早くすんだ。

俺は四体のボールを確認して受けとり、ベルトに装着した。

「ありがとうございます」

「いいえ。またのご利用、お待ちしております」

ジョーイさんにお礼を言って、サツキさんと合流する。

飲み終えたボトルを片付けてポケモンセンターを後にした。

「今日はこのままキキョウシティにまで行っちゃおう?」

「ええ。今日中にキキョウシティに行き、明日ジムに行こうと思っています」

まだ時間は16時だ。このまま真っ直ぐ行けば、辺りが暗くなる前にキキョウシティにはたどり着くだろう。

フレンドリイショップできずぐすりを3個買って準備を整え、ヨシノシティを出発した。この先は30番道路・31番道路。俺にとってここから先は未開の地だ。

—— 30・31番道路 ——

ヨシノシティからキキョウシティへの道のりはワカバタウンからヨシノシティへの距離よりも長い。地タウンマップ図を見ればわかるだろうが、およそ2倍は見積もってもおかしくはないだろう。

その分トレーナーとの戦いも多くはなるのだが……それがわかっていても、どうしても俺は納得できない。今にも怒りで爆発してしまいう。なぜなら……とにかくここまでの状況を振り返ってみよう。

短パン小僧が勝負を仕掛けてきた。

短パン小僧が勝負を仕掛けて (ry

短パン小僧が勝負を (ry

短パン小僧 (ry

短パン (ry

た (ry

t (ry

「お前らどんだけ短パンが好きなんだよ!？」

「シユン君!？」

そう叫んでしまった俺に罪はない。勝負を仕掛けてくるやつが全員短パンだなんて、最近の子供が元気すぎるんだよ。だからサツキさん、そんな変な人を見るような目で見ないでください。

レベルを上げるには丁度いいのだが、いい加減にしろと言いたい。数が多すぎる!! アーボックみたいな強ポケ出るよりはいいけどね。

だがその分学ぶことも多かったわけだが。……やはり現実と理論はまったくの別物ということだ。

「ほ、ほらー！ もうキキョウシティも見えているし、早く行こう!!」  
サツキさんが俺の手を引いて歩き出す。

……その優しさがなぜか痛い！ 俺はいたって正常だと言うのに  
!!

短パン小僧がしよ u ( r y

「くどい!!」

挑んできた短パン小僧を瞬殺し、先を急ぐ俺達だった。

—— キキョウシティ ——

ゲートを通り、ようやくキキョウシティにたどり着いた。

到着早々、ポケモンセンターに入る。それほどダメージはないが、連戦だったからな。みんな疲れている。もつとも俺の場合は身体的疲労だけではなく精神的疲労もはなはだしいのだが……

「お願いします」

「はい、お預かりします」

四つのモンスターボールを預け、ソファアに座る。

ポケギアを見ると……時間はもう18時になろうとしていた。この時間からジムは(体力的にも)厳しいし、宿泊場所を探すでしょう。

ジョーイさんから回復したポケモンを受け取って、二人で今日の宿泊場所を探し始めた。

そして探し当てたのは懐にも優しく、不満なく寝付けれるホテル。

一応部屋は別々だ。……ちよつと残念だが、当然か。14歳ともなれば家族でもない限り男女を一緒にするわけないとわかっていても、どこかやりきれない感がある……

ちなみにホテル代はオーキド博士が別に作った口座から支払っている。

旅立ちにあたって、博士達が財政面でもきっちりサポートしてくれ



たのだ。そういった気配りからも、今回の仮面の男をかなり警戒していることが伺える。

「さて、そろそろ行くか」

部屋を整理し、最低限の荷物だけを持って部屋を出る。

サツキさんに一言声をかけて、俺は31番道路へと向かった。

日が暮れてしまったせいかな、先ほどまでいたトレーナーも姿を消していて、辺りには野生ポケモンばかりが目に見える。……だが、そのほうがこちらにとっては好都合だ。

「お前達、全員出て来い!!」

四体全員をボールから出す。皆回復しただけあって元気そうだな。これからすることを考えれば、そうでなければ困るのだけど。

「……明日俺達はキキョウジムに挑む。初めての公式戦だ。だけど今の力ではまだまだ心配だ。だからこれから特訓を始める！ 行け！」  
四体は頷いて、草むらへと向かって行く。こいつらもまだまだ伸びしろがあるということに自覚しているのだろう。するとほどなくしてマタツボミやポツポと言った周辺の野生ポケモンたちが飛び出してきた。

「ピノアラシ、ひのこ!!」 ピカチュウ、でんきシヨック!!  
ポツポ、かぜおこし!! ヨーギラス、かみつく!!」

四体にそれぞれの得意技を命じる。みんな自慢の技で次々と野生ポケモンを撃退して行く。

……そうだ。もしも仮面の男と対峙したとき、一対一になるとは限らない！ ゴールドの時だって四対四の複数戦になったと聞いている。場合によっては、ポケモン達には自分の判断で動いてもらわなければならない。

「よし、各々の考えで動いてみる!!」

俺の言葉を受けて、四体は各地に散った。俺は見当たりのいい場所で動きを見る。

……あらかじめ特訓このことを伝えてはいたものの、やはり動きに精彩さが欠けるか。先ほどよりも動きのキレが悪い。どこか迷いがあるようだ。今まで俺の指示を受けて戦っていたがゆえに、自分だけ

で戦うことに慣れていないのだろう。これを改善するには回数を重ねる必要があるな。

こういったことも含めて、やはり現実は違う！　しかしだからこそ、今のうちにさまざまな状況を想定して鍛えておかなければならない。

……ポケモン達が戦っている間にここで一回、俺がこれまでのバトルで学んだことを振り返るとするか。

まず一つは技の命中率。

オーキド博士達ポケモンの研究者はポケモンを研究し、技のことも研究、世間に発表している。技一つ一つにおよその目安となる威力や命中率という数値も発表された。だが命中立100%と言う技でも、バトルの中では外れることが頻繁に起こる。やはり動いている相手に技を放つ以上、外れることは普通ということだろう。どちらかというとこの数値というものは、ポケモン達の技の制御のしやすさのように思える。

二つ目は、技と技の間に起こる相性だ。

その良い例が今日のヒノアラシとマタツボミの戦いだ。

ヒノアラシの放った“ひのこ”は、いとも簡単に“はっぱカッター”を飲み込んでマタツボミに直撃した。つまりポケモンの相性だけでなく技同士にも相性の関係があり、効果を打ち消すこともできるということだ。

三つ目。……これは二つ目にも共通することだが、技の使い方。

本来の目的とは違った追加効果が技にはある。

たとえば相手のすばやさをさげる“いとをはく”といった状態変化技で、相手の足を完全に巻きつけて動きを止めるということもできる。はたまた本来は攻撃技である“いわおとし”を敵に向けずに相手の行く先を阻める壁にする、といったように技にはいろんな使い道がある。

そして今のポケモンたちのぎくしゃくした動きなど、現実には理屈通りにはいかないことが多すぎる。

なんとかポケモンバトルには慣れてきたものの、もしも仮面の男と

遭遇したときにイレギュラーが起こったら対処しきれない可能性があるからな。今のうちに強くなっておかないと。

しばしポケモン達の様子を伺う。……が、苦戦こそしているが次々と野生のポケモン達を討ち払っている。やはりここまでのバトルを通じてそれなりの力が身についてきたのだろう。動きも最初と比べて良くなってきた。

明日はジムリーダーに挑むが、この調子ならひよつとしていい勝負になるかもしれない。

「……その君！ 一体何をしている!?!」

「え?」

突如後ろからまぶしい光を当てられた。振り返るとそれが懐中電灯の光だとわかる。

……そこにいたのは警察官だった。暗くてよくは見えないが若い顔だ。おそらく夜の見回りをしている最中なのだろう。それでこんな時間に一人でいる俺を不審に思っって声をかけた、とかそんな理由だろうな。

「ご心配をおかけしたようですすみません。旅をしているものなのですが、明日キキョウシティのジムリーダーに挑戦しようと思っって……それで明日に備えてポケモン達の訓練をしていたんですよ」

「ジムリーダーへの挑戦? ……なるほど、そういうことか」

気がついたら俺の元に近づいてきたポケモン達の様子を見て信じてくれたのだろう。みんなところどころ傷が見える。後で治療してやらないとな。

ただ、警察官が一瞬うれしそうな顔をしたように見えたが……俺の気のせいだろうか?

「それならばここよりもちよっどいい訓練場所があるよ」

「本当ですか!?!」

「ああ。キキョウシティには『マタツボミのとう』と呼ばれている大きな塔があるのだが、あそこはポケモントレーナー達の訓練場所にもなっっていてね。ポケモンを鍛えるならばうっつつけの場所なんだ」

……そういえば確かにここにくる途中に大きな塔が建っっていたこ

とを思い出す。

なるほど、たしかに夜中にこのようなところで鍛えるよりもそちらのほうが安全だろうし、何より効率がよいのかもしれない。ここは素直に好意を受け取っておこう。

「そうなんですか。情報提供ありがとうございます。これからそちらに伺うことにします」

「ああ。けど時間には気をつけなよ。明日の戦いにも響くかもしれないからな」

「はい。ありがとうございます！」

俺は警察官に一礼してその場を去った。ポケモン達も「まだやれる！」といわんばかりに思いつき走り走っている。ならばそのやる気をとことん発散させるとしよう。一礼してその場を後にした。

「……挑戦者か。リーダーに就任してからのというもの、俺を負かした相手はいなかったが。……今回の相手は期待してもよさそうだな」

去り際に警察官が何かつぶやいていた気がしたが良く聞こえなかったし、事務的なものだろう。あるいは俺のように子供がバトルに真剣になっているのを見て何かを感じたのか……まあどちらにせよ俺には関係のないことだ。センターによるうとも考えたが大丈夫と判断し、一気にマタツボミのとうへと向かった。

—— マタツボミのとう ——

早速塔の中へと入っていく。なかなか立派なものだが……なぜか内部に焼け跡のようなものが残っている。若干壊れかけている部分も見つかるし、ここで火事でもあったのだろうか？ 先ほどの警察官は何も言っていないかったし大事ではないと思うのだが。

「……よくぞいらした少年。此度は何用で参った？」

「あ、こんばんは。ここでポケモンの修行をしようと思ったんですけど……」

入って早々、一人のお坊さんに話しかけられた。

正直に修行のことを話すと、なぜか喜んで出迎えられた。……そんななここで修行する人は少ないのだろうか？

「そうでしたか。実は最近こちらに参られるトレーナーが減り続けていまして、あなたは五日ぶりの修行者となります」

「五日ぶり……」

思わず言葉に詰まってしまった。少ないように感じるが、やはりこの塔の内部と関係があるのだろうか？

まあポケモンを鍛えられるのなら俺はいつこうに構わない。場所なんて選んでいられるような立場ではないからな。

「ならば中にお進みください。この塔には私のような修行僧がポケモンと共に待ち構えております。また、最上階には我らが長老がお待ちしております。長老に勝てたならば、それ相応のものも用意しておりますよ」

なるほど。修行を達成した者へのご褒美というわけか。これはなかなかどうして親切な話だ。ポケモンも鍛えられて勝てば商品ももらえる。これほどうれしい話はない。早速挑戦するでしょう。

俺は近くの階段へと足を向けると、修行僧が後ろから声をかけてきた。

「ですが、くれぐれもお気をつけください。この塔には挑戦者を試す多くの罠が仕掛けられており、修行僧も挑戦者には容赦なく戦いを仕掛けてきます。たとえば……こんな風に!!」

「ッ!? ポツポ!!」

嫌な予感を感じ、俺は振り返りざまにポツポをボールから繰り出した。

するとこちらめがけてマダツボミの「はっばカッター」が襲い掛かってくる。ポツポは自分の両翼ですべて打ちはらった。

「いきなり何をする!?!」

「言ったでしょう、『容赦なく戦いを仕掛けてくる』と。修行はすでに始まっております。あなたが勝ちたいのならば、一時も油断はなさらぬよう!」

「……上等だ!」

確かにこれは修行には丁度いいのかもしれない。

所々に仕掛けられている罠。<sup>トラップ</sup>いつ、どこから襲い掛かってくるかわからない敵。

……いいね。怖いけど、なぜか心が躍ってきた。どうせこれからこんなことが起こるかもしれないんだ、それならせめて修行のときくらい楽しまないと。

俺はこちらに突っ込んでくるマダツボミを迎撃するべく、ポツポに指示を出した。

「……はあ……はあ、はあ……」

「……見事。わしの負けじゃ」

「……ツッしゃ!!」

マダツボミの塔最上階。襲い掛かる修行僧達を全て倒し、備え付けられていた罠をどうにか攻略し……そしてついに長老を倒した。俺もポケモン達もすでにぼろぼろだ。肩で息をしてなんとか体の調子を整えている。

だが、これで今日の修行は完了だ。鍛え上げたこいつらなら、明日もきつといける……! 今ならそう迷うことなく言える!

「先の約束通り、そなたに差し上げたいものがある。受け取ってくれ」  
「……これは」

「これは秘伝マシンの一つ、——『フラッシュ』じゃ」

渡されたのは一つのディスク。技をポケモンに覚えさせることができるディスクだ。しかも秘伝マシン。冒険には欠かせないものだ。このフラッシュを使えばどんなに暗い洞窟であろうと、明るく照らすことができる。

俺は喜んでこのディスクを受け取った。

「ありがとうございます。おかげでいい特訓になりましたよ」

「帰るならばこちらの階段を使うと良い。こちらには何の罠も仕掛けていないから安心してくれ。」

……明日、キキヨウのジムリーダーに挑むと聞いた。全力を尽くしてがんばってくれたまえ」

「はいー」

俺は長老に一礼して階段を降りていく。さすがに疲労が蓄積しているな。

ひとまず回復のためにポケモンセンターへと寄って、それからホテルへと戻った。

戻ったのだが……俺の部屋の目の前で、サツキさんが待ち構えていた。

「……」

「……えっと、サツキさん。ただいま戻りました」

無言で俺を見つめるサツキさんに報告する。……しかし、それでも無反応。

心なしかどこか怒っているように見える。はて、一体なぜだろう？

「シユン君。修行は別にかまわないのだけど……今何時？」

「え？ 今は……23時20分ですけど。それがなにか……あ！」

時間を言ってから自分の過ちに気づいた。サツキさんが怒っている理由にも納得がいった。

だがもう遅い。サツキさんは俺を部屋へ連れ込むなり、説教を始めた。

「いつまでたつても帰ってこないから心配したのよ!? 出かけるときに22時には帰ってくるって言ったんだから、遅くなるときはちゃんと私に連絡しなさい！」

「はい、すみませんでした！」

正座の状態でサツキさんの言葉を甘んじて受け止める。さすがに今回ばかりは俺に非がある。

そういうえば警察官に話しかけられたあとまっすぐマツボミの塔に行ったせいでサツキさんに連絡することを忘れていた。塔内部でも連絡するような余裕はなかったし。……むしろ約束を忘れていたし。

「事件に巻き込まれたのかとも思ったのよ!? 私達はそういう状況に

いるってこと、理解してる!？」

「わかっていきます! 本当に申し訳ありませんでした!」

出会ってからサツキさんの穏やかな一面しか見ていなかったために俺は驚愕した。どうやら意外と心配性な性格のようだ。

俺はその後も必死に謝り続けたが……サツキさんが俺を解放してくれたときには、すでに日が変わっていた。

それだけ俺を心配してくれたのだと喜ぶと同時に、もう二度とサツキさんを怒らせないようにしようと決心した。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：0個

レポートに書き込みました!!



## 第五話 VS エアームド 戦士は空高く

「~~~~とー」

朝日を浴びながら体を伸ばし、体内時計をリセットする。

いつも寝ているベッドとはまた違う感触だったために少し寝づらかったものの、体のほうはきちんと回復している。今日ははじめてのジム戦で緊張はあるものの、万全の状態で臨めるだろう。

ポケギアに目を向けると、今の時間は8時すぎ。朝ごはんは9時ごろに食べるとしてもまだ時間に余裕はあるな。

のどが渴いたし、ピカチュウをボールからだしてホテルの自販機へと向かった。おいしい水を購入し、水分を補給。そしてそのままホテルから外に出て近くの空き地へと向かう。ボールから残りの三体も出し、皆の動きを確認する。

「……うん、大丈夫だ」

ポケモン達もいつも通り——むしろいつも以上に動いている。初めての公式戦、しかも相手は実力者であるジムリーダー。……そして同時に仮面の男である危険性もあるために心配していたのだが、皆それに怯む様子は見られない。

となるとむしろどのポケモンで挑むのかが問題だな。

今回のジムリーダーはひこうタイプのエキスパートの専門家と聞いている。ゆえにピカチュウなどの相性の良いポケモンで挑むのが上策ではある。だがしかし、バトルのルールはそのジムによっても異なってくるのでルールを聞いてから決めたほうが確実か。

「皆、もういいぞ。戻って来い」

ピカチュウ以外のポケモン達をボールへと戻し、ピカチュウを肩に乗せてホテルへと戻っていく。調整はこれでいいだろう。あとはジムリーダーに挑むだけだ。

調整を終えた俺はまず隣の部屋——サツキさんがいる部屋へと向かう。

昨日はサツキさんにいらぬ心配をかけてしまい、きつと疲れているだろう。事実朝起きて俺に部屋にも来なかったし、ポケギアへの連

絡もない。

「サツキきーん。シユンですけど、起きてますか?」

ひとまず朝の挨拶と朝ごはんを一緒に食べるために、俺はサツキさんの部屋をノックする。

しばらく返事がなかったためにまだ寝ているのかとも思ったが、その思考の数秒後、部屋の扉が開いた。

……開いたのだが、

「ふあゝあ。んゝ、……おはよう、シユン君」

「……おはよう、ぎいいます」

寝起きのサツキさんが今にも再び眠りそうな状態で姿を現した。おそらく今起きたばかりなのだろう、髪の毛もセットが崩れている。少し昨日の大人びた姿とは想像もできないのだが……それ以上に今の姿は色々とまずい。

今のサツキさんの格好は、寝起きなので当然のことながらパジャマなのだが……

(パ、パジャマがはだけて……!!)

そう。着ているパジャマは胸元が大きくはだけていて、サツキさんのその絶賛にも値する谷間がこんにはしているのだ。……朝早くからこのようなご褒美とか、もはや気絶寸前ですよ!

「……って、そうじゃない! ここはホテルなんですから。……とにかく中へ!!」

「うゝん……」

とりあえず今の姿のサツキさんを公衆の面前にさらすわけにはいかないのですぐさま部屋の中に入れる。サツキさんも文句を言わずに従ってくれたので一安心だ。

ひとまず部屋の中を見渡すと、部屋の中は整っているもののベッドの周りは散らかっていた。おそらく扉を開けるときに散らかしてしまったのだろう。とりあえず乱れたシーツなどを綺麗にしていると、突如サツキさんがこちらに歩み寄ってきた。

「シユン君、まだ時間はあるよね?」

「はい。朝ごはんもまだ1時間くらいは余裕がありますけど……」

「じゃあごめん。あと1時間だけ寝る。おやすみ」

「へ？ おやすみって……うおっ!!」

突如俺の背中に重み加わる。いきなりのもので支えきれずに、俺までベッドに倒れこんでしまった。……サツキさんに後ろから抱きつかれる形で。

(……え？ 何、この状況!?)

イレギュラーの連続で俺の頭が情報を処理しきれずにパンクしてしまう。

そんな俺の状況を知ってか知らずか、俺が悩んでいる間にも背中に当たる二つの柔らかい感触と耳に直接触れてくる寝息が俺の鉄の心をゆるがせている。

(ちよつと待つて！ 部屋の鍵だつてしてないんだけど！ これで他の人に見られたら絶対誤解されるんだけど!!)

年の近い男女が一緒のベッドで寝ていて、女性の方は服がはだけていて……やばいだろこの状況！

俺はボールから出ていて唯一自由であるピカチュウに救援の視線を送るが、そのピカチュウは俺に向かって一礼して、部屋の外に出ていってしまった。

(ピカチュウウウウウ！ なんでそこで空気を読むんだよ!!)

最後の砦であったピカチュウに裏切られ、もはや打つ手がない。

サツキさんにいくら呼びかけても寝息しか返ってこないし、というか寝付くの早い！

いくら体を振り払おうとしても腕を放してくれない。以外に力があるうえに、乱暴には扱えない。こんな綺麗な白い肌を傷つけてたまるか！

俺がどうにかして理性を貫き通し、この場を脱出する方法を考えようとするものの、何もない案は浮かばず、俺はサツキさんがもう一度起きてくれるまでそのままの状況を保つこととなった。

「うん、ここのホテルの食事もおいしいね」

「……そうですね」

昨日よりも何割か増しの笑顔で俺に話しかけるサツキさん。疲れが取れたのならばよかった。

それに対して俺は激しい一戦を終えたかのように疲弊していた。パンをかじるもののあまり味が感じられない。牛乳で次々を流し込んでいく。

……大変だった。主に精神的な意味で。よく鋼の理性を保つたと褒め称えてもらいたい。常人だったならばあのままだいはくはつを起こしていただろう。

「でもわざわざ起こしにきてくれてありがとう。私、朝はどうも苦手だね。いつも寝起きはひどいのよ」

「いえいえ、それほどでもないですよ」

本当はそれほどでもあったのだが、そこは言わぬが花。むしろあの時のことを覚えていなくて助かる。俺の記憶にはしっかりと刻み込んでいただけね。

しかし本当に先ほどは驚いた。サラダを取りつつ昨日と今日のサツキさんのギャップを振り返ってみるが……昨日のサツキさんの姿は本当に頼れるお姉さんのような存在だったので、こういう自然な姿も見れて嬉しくもある。それを考えると疲れた体が自然と安らぐ。

「サツキさん、今日の予定なんですけど……」

「昨日言っていたように、午前中にジムリーダーに挑むのよね？」

「はい。そして次の街・ヒワダタウンへ向かいますよ」

サツキさんの確認に俺は首を縦に動かして肯定する。

午前中にジム戦に挑み、時間があるならば今日中に次の街・ヒワダタウンへと向かう予定だ。

キキョウシティはコガネシティ・エンジュシティ方面にも通じているのだが、ヒワダタウンにもジムがあるし、そちらのルートのほうが順序よく回っていけるのでヒワダタウンに向かうと昨日の夜にサツキさんと相談して決めたのだ。

(もつとも、ヒワダタウンに向かう理由はそれだけではないけどね

……)

サツキさんは知っているかどうかはわからないが、俺はヒワダタウンのすぐ傍にあるウバメの森が気になって仕方がない。だからこそヒワダタウンに向かうことを希望したのだ。

あの森は、ゴールドが初めて仮面の男と遭遇した場所だと聞いている。となるとあの森にまだ仮面の男について何か手がかりが残っているのかもしれない。今は情報が少しでもほしいとき。些細なことでも見逃せないのだ。

「うん。でもまずはキキョウジムのことだけを考えてね? ……ひよっとしたら、キキョウジムのリーダーが当たりなのかもしれないから」

「……はい」

「私も万が一に備えておくけど、シュン君も油断はしないで」

『当たり』か。忠告はもつともだ。いきなり仮面の男と遭遇するなど考えてもいないが、相手は正体不明の悪党だ。油断なんて見せるわけにはいかない。元よりジムリーダーほどの実力者相手にこちらは挑戦する身なのだから。

朝食を済ませ、荷物をまとめながら俺はキキョウシテイジムリーダーとの対戦に向けて意欲を燃やしていた。

「……ここがキキョウジムよ」

「……はい」

サツキさんの案内でキキョウジムの目の前まで来た。

……先ほどまでは大丈夫だったけれど、いざ目の前までくると体が勝手に震えてしまう。扉一つしか空間の隔てがないというのに、こうも感じ取ってしまうとはな。これが戦いへの恐怖や緊張から来るものなのか、それとも勝負を目の前にして感じる武者震いなのかは俺にはわからない。

だがどちらにせよ、俺には退くことなどできやしない。そのような

選択肢など最初から存在しない。俺がすることはただ前に進み続けることだけだ。

ポケモン達のコンデイションをもう一度だけ確認し、そして俺は目の前の扉をあけた。

「すみません。キキョウジムに挑戦しに来た者ですが……うツ?!」

ジムに挑戦しに来たことを告げようとした瞬間、ジム内に一陣の風が吹き荒れた。

その風の威力に耐えられずに俺は腕を前で組み目を閉じてしまう。しばらくして風がやみ、ようやく腕を下ろして目を開けると……そこには自慢の鳥ポケモンを従えた、若い青年がいた。この男のポケモンが今の風を吹き起こしたのだろう。ピジョン、ヨルノズク、エアームド。普通のトレーナーでもよく知っているような有名なひこうタイプのポケモン達だ。そしてこのポケモン達のトレーナーがおそらくは……キキョウシテイのジムリーダー、ハヤトだろう。『華麗なるひこうポケモン使い』と呼ばれるひこうタイプのエキスパート専門家。

だが威力が凄まじい。俺のポツポの「かぜおこし」とはまるで次元が違う。さすがエキスパート専門家とよばれるだけのことはある。

「やあ、よく来たね挑戦者。俺がキキョウジムリーダーのハヤトだ。君がくるのを待っていたよ」

「……え?」

やはりこの人がジムリーダーのハヤトだった。言われずとも、共にいるポケモンと彼から放たれている存在感で理解はできたことだ。

……だがしかし、『待っていた』だと? 俺が今日キキョウジムに挑むということを知っていたのか? 一体どこから情報がもれたんだ?  
?

「不思議そうな顔をしているね。ひよつとして覚えていないかな?

……昨夜、31番道路で会ったじゃないか」

「……………あ! まさか、あの時の警察官!」

「その通りさ」

言われて納得だ。あの時は暗かった上に警察帽子をかぶっていたために気づけなかったが、……たしかに顔が一致する。ということ

は、俺はジム戦の前にジムリーダーと接触していたというのか。驚きだな。

「それじゃあ、ジムリーダーと警察官の二つの職を両立しているんですか？」

「ああそうだよ。もつとも俺の場合は元々が警察官で、ジムリーダーに就任したのはつい最近のことなんだけどね」

……ジムリーダーになったのがつい最近か。経験や実績では当然のことながら他のジムリーダー達には劣るだろうが、しかしそれでも十分疑いの余地はある。ジムリーダーほどの実力者ならば、一般トレーナーとは実力の差があるだろうからな。

(サツキさん、どう思います?)

ハヤトに聞こえないように、小声でサツキさんに声をかける。

サツキさんも俺の意図を察して余計なことは省いて小声で答えた。

(警察官という工作上、動きに制限がかかるけれどその分逆に警察の動きをつかみやすくなる。

……でも、シユン君が昨日会ったってことはおそらくは一地方の人であってそれほど高い役職ではないはずよ。地位もそれほど高くはないはず。

警察官とジムリーダーとの両立は難しいし……可能性は低いと思う)

なるほど。たしかに敵組織の情報を得やすいというメリットが警察官にはあるだろう。もしも大きな事件に発展してもその職の都合上、その場に赴いて証拠の隠滅も可能となる。

だがしかし、ジムリーダーとの兼任は難しいことだし、地位が低いとあまり大きくは動けず、地位が高いと仕事に縛られることになる。となるとこの男がロケット団を率いている可能性はかなり低い、か。

(でも、油断はしないでね)

(わかってますよ)

サツキさんに相槌を打って、俺は再びハヤトに視線を向けた。

「昨日はどうもありがとうございます。おかげで今日を最高の形で迎えられましたよ」

「それでいい。俺もジムリーダーとして君の挑戦、真っ向から受けて立つよ」

視線が交錯するが、お互い一步も譲らない。

……やはり、この人が仮面の男とは思えないんだよな。裏表がないというか、悪意を感じられないというか正直というか。本当に警察官の鏡みたいな性格のように思えるんだよな。

「それではキキョウジム戦を始めるよ。準備はいいかい？」

「ええ。いつでもかまいませんよ」

俺とハヤトはバトルフィールドへと移動する。サツキさんは観客席で俺達の戦いを見ながら様子を伺っている。何かあればすぐに動いてくれるだろう。また、ハヤトの動きを観察するために、ビデオを常にまわし続けるそうだ。

「それではまずルールについて説明する。

バトル形式は2対2のシングルバトルだ。交換はあり、一体でも手持ちのポケモンが倒れたらその時点で勝負あり。いいね？」

「わかりました」

2対2のシングルバトルか。相手の手持ちは先ほどの三体でまず間違いないはず。だがハヤトにも昨日の時点でこちらの手持ちはばれている。……最も、昨日の手持ちの話だが。

「改めて自己紹介しておこう。俺はキキョウジムリーダーのハヤト。エキスパートタイプはひこう！」

「……俺はワカバタウンのシュンです！ 初めてのジム戦、勝利で飾らせてもらいますよ！」

自己紹介は終わり。ここからは本気の戦いだ。お互いが腰のボールに手をかけ、バトルフィールドへとポケモンを繰り出す。

「いでよ、ピジョン！」

「行ってこい、ピカチュウ!!」

ハヤトが繰り出した一体目はピジョン。ポツポの進化系だ。



それに対して俺が出した先鋒はピカチュウ。これは最初から決めていたことだ。タイプ相性でも、ひこうタイプのピジョンにでんきタイプのピカチュウは有利！

「……なるほど。セオリー通りでんきタイプで来たか」

「ええ。相手のことをきちんと考えるのはトレーナーの常識ですからね」

「その通り。よく理解しているな。だがしかし、それだけでジムリーダーに勝てるとは思わないことだよ。……ピジョン、かぜおこし！」

開始早々、ピジョンが空中へと飛び上がり、その翼を力いっぱい振るってフィールド内に強烈な風を吹き起こす。風はゴウツと凄まじい音を立ててフィールド内を包み込む。

……ッ！ 先ほどもそうだったが、ただの「かぜおこし」でさえもが桁違いの威力だ。体重の軽いピカチュウは吹き飛ばされないように踏ん張るのが精一杯の状況でへたに動けない！

「けちらせ、つばさでうつ！」

こちらが動けないという絶好の好機を感じ取ったのか、ピジョンが急降下、こちらへ一直線に向かってくる。だが攻撃が中断したおかげで風はやんだ。

「迎え撃て、でんきショック！」

すかさずピカチュウに迎撃の指示をだす。

ピカチュウの体から「でんきショック」が放たれた。昨夜の修行のおかげで電気技の威力は上がっている上に、あたれば効果はばつぐんだ。致命傷を与えられるだろう。

——そう俺は甘く見ていた。

「その程度の攻撃で、大空を舞う鳥ポケモンを捕捉できると思うなー」「なにっ!？」

だがピジョンはよける動作を見せず、むしろさらに勢いを増して突っ込んでくる。

そして今にも命中しようとしたそのときに体を旋回させ、攻撃をよけた。でんきショックは狙いを外れて空高くに消えていく。そして

攻撃後で隙ができたピカチュウをピジョンの翼が襲った。

「ピカチュウ！」

直撃し、後方へと吹き飛ばされてしまう。受身は取ったものの、ダメージは残っているだろう。

しかしいまだに攻撃の手はやんでいない。ピジョンは再び空に舞い上がり、そしてこちらに向かってきた。

「くっ……ピカチュウ、でんじはを……」

「遅い、でんこうせっか!!」

「なっ……!」

ピジョンの動きをまずは止めようと思ったが、俺が指示を出す前にすでにピカチュウは攻撃されていた。

……速い! 空中から勢いをつけた上でのでんこうせっか”。これでは反応することさえ難しい。

しかも、今の一撃はかなりピカチュウに効いたようだ。戦闘不能まではいかないが、足元がふらついているように見える。

「いくらタイプ相性で勝っていても、攻撃があたりなければ何の意味もなさない。そうだろうか?」

「くそっ……!!」

「シユン君、早く体勢を立て直して!」

サツキさんの声がいとも以上にあせっているように聞こえる。……やはり、今の俺はそれだけ追い込まれているのだろうか。

わかってはいた。ジムリーダーがそこらへんのトレーナーとはまったく別の領域にいるということくらい。だが俺の予想以上にはるか高みに彼らは立っている。ポケモンを知り尽くしている。

「そろそろ君のピカチュウも限界のようだな。次で決めさせてもらう。……ピジョン!」

「まずい……!」

「シユン君!」

空中で臨戦体系に入っていたピジョンが再びピカチュウ目掛けて急降下する。

どうする。でんきショック”はかわされてしまうし、でんじは

“だって通用しない。かといってあの速度をも捉えられるような全体攻撃なんてピカチュウにはまだできないし……”

……さてよ。全体への技？ いや違う、あるな一つだけ！ 実践で試したことは一度もないが、ここは一か八かだ！

「ピカチュウ、フラッシュユ」だ!!」

「なっ!? くっ……!」

ピカチュウの体が突如、眩しく光り輝く。その光はバトルフィールド全体へと広がった。

これにはさすがのハヤトも目を封じられた。ピジョンは接近していただけにその影響も大きく、あつという間にその体制を崩し、空中でふらついていた。

「いまだ、でんきショック!!」

そしてそんなチャンスを逃すわけにはいかない。

すかさずピカチュウの体から電撃が放たれ、そのまま空中で右往左往しているピジョンに命中した。

相性が良い上に、強力な電気で麻痺したのだろう、ピジョンはなんとか空中で羽ばたこうとするが、どんどん高度が下がってくる。

「ピカチュウ、でんこうせっか」だー!」

そんなピジョンに向かってピカチュウは勢いよく向かっていく。

力の限りに速度を出し、ピジョンに向かっていった。かわすことはできずに、ピジョンはバトルフィールドに落ちてくる。

「くっ……もどれ、ピジョンー!」

それでもまだピジョンは戦闘不能にはいたらなかったが、立ち上がることもやつとの状態で戦闘続行は難しい、戦闘不能寸前の状態だった。ハヤトもそれを判断し、ピジョンをボールへと戻す。

……これでピジョンはもう出てこれないだろう。実質2対1だ。数の面では俺が圧倒的に優位に立っている。

「……フラッシュユ」か。長老からいただいたのかい?」

「ええ。昨日の修行を達成した祝いにいただきましたよ」

いただいた秘伝マシンは昨日のうちに早速ピカチュウに使った。普段はあまり役に立たないかとも思っていたのだが……まさかこう

して今日の戦闘の助けになるとは思わなかった。

ハヤトは俺てきに塩を送りすぎたな。修行場所を提示してくれた上に、その修行場所で俺達は新たな技まで覚えてきたのだから。

「褒めておくよ。今まで俺に挑んできたトレーナーは数多くいたものの、俺に二体目まで出させた挑戦者は中々いない。それだけ君の実力が本物だということだ」

「……ありがとうございます」

うぬぼれなどではなく、実際そうなのだろう。

現にピカチュウのような相性で勝っているポケモンでさえハヤトのピジョンに苦戦を強いられたのだ。普通に挑んでは勝利を得ることは難しい。

「だが、俺もジムリーダーとして負けるわけにはいかない。……いだよ、エアームド!!」

ハヤトの二体目はエアームド。鋼に包まれた硬い翼を持つ、珍しいポケモンだ。

……ピカチュウでも変わらず相性は良いのだが、先ほどのピジョンとの戦いで傷が残っている。このまま戦わせるのは危険だろう。

「戻れ、ピカチュウ。……きっちり仕事を果たしてくれたな。休んでいてくれ」

そう判断するや否やピカチュウをボールへと戻す。先鋒としては十分すぎるほどの働きだった。勢いもこちらにある。

俺の二体目、鋼の体を持つエアームドの相手に任せるのは……やっぱり、こいつだよな。

「行ってこい——マグマラシ！」

ボールから出てきたのは昨日までのヒノアラシではなく、ヒノアラシから進化を遂げ、新たな姿に生まれ変わったマグマラシ。

「なに? ……マグマラシだど?」

「え、昨日までは進化なんてしていなかったのに。……いつの間にヒノアラシは進化を?」

「昨日の修行の間ですよ」

ハヤトやサツキさんが驚くのは無理もない。

昨夜のマダツボミのとうでの修行を行っている間にヒノアラシも成長し、進化に至ったんだ。

「修行の成果、か。なるほど、君も本気で強くなろうとしているようだね」

「当たり前でしょう。だからこそ、あなたにも負けはしない！」

「それはこちらと同じことだ！ エアームド、スピードスター！」

「〴〵のこ〴〵で迎え撃て!!」

エアームドの口からは星型の光線が、マグマラシの口からは炎が噴出した。

お互いの技は真つ向からぶつかり合い、そしてドンツ、と音をたてて爆散した。エネルギーの衝突によって生まれた煙がフィールドに広がる。

……力はほとんど互角。あるいはこれでもまだ相手のエアームドのほうが上だ。マグマラシに進化したことで力も大幅に上昇しているはずだが、それでもまだレベルの差があるということか。

「エアームド、まきびし！」

「なっ……」

煙がまだ晴れない中、マグマラシの足元に多量のまきびしが撒かれた。

エアームドは空中に飛んでいるために容易にできたのか。……煙が晴れるまでは攻撃しないと置いていたが予想が外れた。

だがこれであかつに移動やポケモンの交代ができなくなってしまう。

「〴〵みだれつき〴〵だ！」

「マグマラシ！」

そしてそんな身動き取れないマグマラシに空中からの怒涛の攻撃が迫る。するどいくちばしが何度も何度もマグマラシの体を傷つける。

「〴〵ひのこ〴〵でやり返せ！」

マグマラシはもう一度〴〵ひのこ〴〵を発射するが……エアームドは舞い上がり、再び宙に逃れてしまう。

なるほど、こちらの動きを制限して徐々に攻撃を仕掛けてくる。そして反撃が来る前に回避行動にうつる——ヒットアンドアウェイ方式か。

まずいな。『ひのこ』も空中に飛んでいる相手には命中しにくいし、かといってあの鋼の体に物理攻撃はほとんど効果をなさない。ピカチュウに交代したとしても一同じ手（フラッシュ）はすでに通じないだろうし、あまりうまくいかないだろう。

……となると、当初の予定通りにするしかないか。

「マグマラシ！」

俺の声に応じて振り返る。しかし俺は何も言わずにただ頷いてだけ見せた。

他の人たちには何も理解できなかっただろう。だがマグマラシだけはしっかりと俺の意図を理解して、笑って頷いた。

「何を考えているのかはわからないが、そう簡単にやらせはしない！

エアームド、『スピードスター』！」

「マグマラシ、『ひのこ』だ！」

再び二つのエネルギーがぶつかり合う。しかも先ほどよりもお互いに威力が増していた。

技が相殺され、煙が再びフィールド内に充満する。まさに、先ほどの攻防と同じように。……だがこれでいい。すでに作戦は始まっている。

「……先ほどのことで押し切れないということはわかっているはずなのに、まだ技の相殺を狙うか。

しかし、そちらは下手に動けないだろうがこちらは違う！ エアームド、一気に決めろ。——『ドリルくちばし』!!」

まだ煙が晴れない中、エアームドが空中から加速して煙の中へと突っ込んでいく。

……驚いたな、まさかいきなり俺のご希望通りに動いてくれるとは。こうなるように誘おうと思っていたのだが、これは嬉しい誤算。

エアームドの体が煙の中をどんどん突き抜けていく。煙が晴れ、マグマラシの体を見つけるまで。

……だがしかし、それは間違いだと気づくべきだったな。エアームドがマグマラシに攻撃する前に、ガキツ、と鈍い音がフィールドに響いた。

「なっ……エアームド!?!」

エアームドのくちばしが地面に思いっきり激突した。

煙が晴れたと思ったらそこは地面だったのだ。それも仕方のないこと。衝突によって生まれた煙に、マグマラシの出した煙幕を混ぜたんだ。相手が接近してきてくれて助かった。接近すればするほど煙に気づきづらくなるから。

まきびしと地面に加速した勢いでぶつかったことで、防御力が自慢の鋼タイプといえど大きくダメージを受けたことだろう。ならば今こそが決め時だ!

「マグマラシ、でんこうせっか!」

痛みにもだえているエアームドの体にマグマラシがたいあたりを仕掛ける。

ひるんでいるところに横から不意打ちを受けたことでエアームドはバランスを失い、そのまま地面に倒れた。

さらに、倒れたエアームドの背中にマグマラシが乗り移る。これで空中に逃げようと思ってもマグマラシの追撃を受けることになる。

「やれ、ひのこ!!」

零距离からマグマラシの「ひのこ」が炸裂する。

エアームドはよけることはおろか防御の構えさえとることができないまま、背中に炎を受けた。

ズウンツ、相性抜群の攻撃を直に受けたエアームドの体は音を立てて静かに沈み、そして身動きを取らなくなった。

「エアームド!!」

ハヤトがエアームドの元へと駆け寄る。俺もマグマラシを体から降ろしてボールに戻した。

鋼鉄の体は熱を通しやすい。ゆえにマグマラシの炎はエアームドには天敵ということだ。

「……エアームド、戦闘不能。僕の……負けだ」

そしてハヤトの口から試合の終了を告げられる。サツキさんからも健闘を称える拍手がされた。

それはつまり俺の勝利を意味している。……ああ、これで……ジム戦が終わったのか。俺が、勝ったのか……！

「よしっ!!」

その場で小さくガッツポーズをする。

正直危機の連続が続いたために、不安でいっぱいだったが今は勝利の喜びしかない。

俺は……ジムリーダーに勝ったんだ!!

「それではシユン君。君にこれを授ける。キキョウジムリーダーに勝利した証——『ウイングバッジ』だ」

「……はい。喜んで受け取らせていただきます」

ハヤトからキキョウのジムバッジを受け取り、バッグに取り付けた。

バッジはジムリーダーと戦って勝ったことをあらわす勲章であり、その人の実力を示すものである。俺もトレーナーの中でも実力を持っているということが証明されたということだ。

「久しぶりに熱い勝負だった。君のような挑戦者はジムリーダーに就任して以来はじめてかもしれない。感謝するよ、シユン君」

「そんなことありませんよハヤトさん。こちらこそ、ありがとうございます」

最後に握手を交わし、彼と別れると俺はサツキさんと共にポケモンセンターへと向かった。

……俺自身も、ポケモン勝負であそこまで真剣になったことは初めてだった。あそこまで勝利に執着したことは初めてだった。

仮面の男のことは関係なしにしても、これからもジムリーダー達のような実力者と戦ってみたいと、不謹慎ながらにそう感じてしまった。それほどまでに、俺は今回の勝負を楽しんだのだ。



俺にはそのような望みなど、叶うわけがないことだとわかりきっているというのに……

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：1個（ウイングバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv17

ポツポ♀ Lv14

ピカチュウ♂ Lv19

ヨーギラス♂ Lv25

レポートに書き込みました!!

## 第六話 VS サンド 読めぬ心、サツキの神秘

キキョウジム戦を終えた俺達は、ジム戦で疲弊したピカチュウとマグマラの回復のためにポケモンセンターに戻っていた。

二匹を受付のジョーイさんに預け、そして適当なテーブルを見つけて腰を下ろす。それからサツキさんと向かい合って話しはじめた。いつも以上に真剣なその表情から、ことの本気を伺える。

「……それで、どう思いましたかサツキさん。キキョウジムのリーダー、ハヤトは？」

先に俺が話しを持ちかける。

話というのはなにも今回のジム戦の反省会、というわけではない。たしかに今回のバトルを通じて学ぶ点もあったし反省する点も多数あったが、それは自分の手で少しずつ解決していくつもりだ。

今話している内容は、——キキョウジムリーダーであるハヤトが果たして仮面の男なのかどうかということだ。たしかにジムバッジを手に入れたものの、俺がジム戦を挑んだ本来の目的はジムリーダーに勝つことではなくリーダーの動向を探ることにある。元々の目的を忘れてしまつては本末転倒だからな。

……戦っている最中はバトルに夢中だったせいで、若干忘れかけていたけど。まあ実力をつけるという目的もあるし、問題はないだろう。

ジムリーダーである以上、誰もが仮面の男の正体だという可能性はある。俺自身は直に戦つてみて疑わしい点は見られなかったものの、第三者の視点から見ているサツキさんにはどのように映っていたのか、またジム内に何か手がかりがなかったか聞かなければならない。

「……彼はおそらく、白ね」

「……はずれ、つてことですか」

サツキさんはしばし考え……そして結論を述べた。『ハヤトは仮面の男ではない』、という答えを。もしも最初から当たりをひいたならばそれほど苦労することはなかったのだが、そううまくはいかないか。

……もつとも、ひよつとしたらはずれでよかったのかもしれない。最初から仮面の男と遭遇していたならば、俺の今の實力では相手にさえならないだろう。今はまだ自分の腕を確かめる程度で戦ったほうがよいとさえ感じる。それにああいいう真面目な人がやはり悪人でなくて良かったと思う。

「ジム戦の様子を見ても、就任したばかりとはいえジムリーダーらしく挑戦者シユンくんの實力を存分に試すように上手く戦っていたからね。……それに、キキヨウジム内を私のポケモンに探らせてみたんだけど、何も怪しいものはなかったわ」

「そこらへんは、さすがはジムリーダー、つてところですね」

たしかに今思い出してみれば、就任して間もないというわりには堂々としており、戦う姿もさまになつていたと思う。

ジムリーダーの役割というのは、チャレンジャーなにも挑戦者とただ戦うというわけではない。その戦いを通して挑戦者のポケモンの知識や戦略をためし、ポケモン達の、そして挑戦者自身のトレーナーとしての實力を測るといふことにある。ゆえにただ強いだけのトレーナーではジムリーダーを勤めることはできないということだ。挑戦者への配慮、それが何よりも大切となる。

ジム内にも怪しいものがないとなると、なおさら疑惑は薄れてくる。ロケット団という大掛かりな組織を従える以上、それなりの準備や道具も必要となる。ゆえにジムリーダーの活動拠点となるその町のどこかに何かしらヒントがあると踏んでいたのだが……ジム内がないとなるとまずキキヨウシティにはないだろう。この街には他に大きな施設といえばマダツボミの塔くらいのもので、その塔も俺が昨夜調べたばかりだ。

……誤解されるかもしれないが、別に俺とてただ強くなるために昨夜は修行をしていたわけではない。ちゃんとそういう調査の意味も兼ねてマダツボミの塔に赴いたわけだ。ゆえに昨日はサツキさんに怒られぞんだったわけだが。……説明する暇もなかったし、今その話をしてもまた何か言われてしまいそうなのでやめておこう。さわらぬ神サツキさんにたたりなしだ。

「……そういえば、サツキさんもポケモンは連れ歩いているんですね」  
素直に思ったことを率直に聞いてみる。

キキョウシテイまで共に旅してきたものの、トレーナーや野生ポケモンとのバトルはすべて俺が受け持っていたため、サツキさんのポケモンは見たことさえないし、サツキさん自身の実力だって知らない。オーキド博士から少しばかり話を聞いたただけだ。

「うん。まだ見せたことはなかったけれど、私もちやんとポケモン六体揃っているよ。皆私と一緒に旅をしてきた子達で、実力も保障できるわ」

サツキさんが腰のベルトにつけているボールを見せられた。たしかに六個のボールがある。

……六体。つまり連れているポケモン達はチームとしてすでに完成されているということだ。

実力のこともまず間違いないのだろう。あのオーキド博士の見る目は本物だからな。それに、ジムリーダー達に気づかれることなく調査を完遂させることからそれは伺える。

「それは心強いですね。ちよつとポケモンを見せてもらってもよろしいですか？」

これから旅をするにあたって、サツキさんがどんなポケモンを持っているのかは個人的にも知っておきたい。知っていれば後にどんなポケモンが出てきても対処できるだろうし、参考になる。

「うくん。……ごめん、今は駄目かな。機会があつたら見せてあげるから、それまで我慢して」

「え？」

だが、帰ってきた返答は期待に反するものだった。サツキさんは手を合わせ頭を少し下げて俺に謝罪する。

……何か俺に見せない理由でもあるのだろうか？ 別に俺に見せることにデメリットはないはずだ。それなのにこれから一緒に旅する俺に見せないなんて……

「何ですか？ なにも俺は……」

さすがに納得できず、俺はサツキさんにさらに問い詰めようとする

る。

しかし、サツキさんは何も言わず俺の唇に右手の人差し指を当てて、そして微笑んだ。

「お楽しみは、最後まで取っておくものよ？」

「……ッ！ は、はい……」

その顔を見て何も言えなくなってしまった。反論の言葉は口から発せられることはなく、押し戻されてしまう。サツキさんの行動一つで制せられてしまった。俺は頷いて視線をそらす。

……まあいつか。別に今知らなくても、サツキさんだつて危機ピンチになればポケモンは出さだろうし、機会はきつとあるだろう。仮面の男のときはフルメンバーだつて見られるかもしれない。

それならば下手に深入りはせず、まずは自身のポケモンのことを気にしよう。俺だつてまだ人のことをどうこう言えるレベルではないのだから。

「シユンサーン！ ポケモン達の回復が終了しましたよ！」

この話の区切りを示すように、ジョーイさんの高い声が響いてくる。

俺は一言サツキさんに告げて、ポケモン達を受け取りに行った。

「……まだ君は知らなくていいよ。私のことはね」

サツキさんが何かつぶやいたような気がして振り返ったものの、手持ちの飲み物を飲んでいるようなのできつと気のせいだろう。

俺は二匹が入ったモンスターボールを受け取り、サツキさんと合流した。

時間はちょうどお昼時。キキョウシティで昼食をとったらヒワダタウンへ向かって出発するでしょう。ハヤトが安全だとするならば、これ以上ここに長居する理由はない。

「シユンクーーン！ こつちこつちー！」

ポケモンセンターを出て、さっそく昼食を探し回る。レストランをあちこち周り、入り口付近に並んでいる品々を見て目を輝かせているサツキさんの姿がとても可愛らしかった。ばれないように写真を撮ったのは内緒の話。

……ちなみに昼食はサツキさんの提案でパスタだった。

—— 32番道路 ——

「ポツポ、 でんこうせっか！」

野生のサンドが放った「どくばり」を、体を旋回して回避するポツポ。……先のキキョウジム戦でハヤトのピジョンがやっていた動きだ。あの戦いをボールの中で見ていたポツポも見よう見まねで習得していた。まだ動きが遅い上にキレがないものの、これから練習していけば動きをマスターしてくれることだろう。

相手の攻撃をかわしたポツポは勢いそのままにサンドへ突っ込んだ。

「でんこうせっか」が直撃し、後方へと飛ばされたサンドだったが、尻尾を地面にたたきつけることであつという間に臨戦体系へと戻った。

「やるな、このサンド……」

自然と賞賛の言葉が口から漏れてしまう。野生でこれほどの動きができるのだから相当だろう。

体勢を立て直したサンドは武器である両腕の爪を前へ伸ばす。あれが当たればポツポにもかなりのダメージがいくだろう。……ならば、その攻撃をまずははずさせる！

「ポツポ、 どろかけ」だ！」

「ッ!？」

低空飛行からサンドへ向かってどろを蹴り飛ばす。……ジム戦後、ハヤトから教えてもらった新たな技・「どろかけ」だ。どろを顔にまともに受けてしまったサンドはどろを振り払うのに意識が持っていない。

「今が好機チャンス！　たいあたり」だ！」

再び低空飛行となり、今度は本当に真っ向からぶつかっていく。よく見ることができないサンドは回避はおろか防御の姿勢さえと

ることができず、〃たいあたり〃をまともにも受けてしまう。

今の攻撃でだいぶ体力を消耗したようで、サンドは起き上がるのもやっつのようなだ。

「これで仕上げだ！ サンド、ボールに収まれ!!」

そんなサンドに向かって俺は殻のモンスターボールを投げる。

モンスターボールはサンドの頭にコツンツ、と当たってそのまま体はボールの中に吸い込まれていく。

最後の抵抗を示すように、幾度か左右に揺れるモンスターボール。

……しかし、その抵抗も終わりを迎え、カチツと小さく音を立ててボールは動きを止めた。

「……よし。サンド、ゲットだ。これからよろしく頼むよ」

「ゲットおめでとう。また仲間が増えたわね」

サンドが入ったボールを手に取り、中が見える位置まで持ち上げる。サンドも状況を理解したようで、俺のことをただじっと見つめている。俺のことをトレーナーとして見定めているのかもしれない。

——昼食を済ませ、キキョウシティを出発した俺達は南下してヒワダタウンへ向かっていた。

当然のことながらここにもトレーナーもいるし、野生のポケモンだっている。そんな戦いの中、俺は新たな戦力となるポケモンを探していて、今こうしてサンドを捕まえた。

これで手持ちのポケモンは五体。もう余裕はない状況ではある。

……しかしながらキキョウジムでの戦いを通して、もうそのように先のことを考えてはられないと俺は感じていた。タイプ相性を考え、その上で最善の策を講じて、それでもジムリーダーに苦戦を強いられた。もしも仮面の男と遭遇したならば俺はまず負けてしまう。

だからこそ、少しでも戦力となるポケモンが今すぐにも欲しかった。たとえそれで不便が生じようとも。

(そして、理由は何もそれだけではない……)

俺はもう一度ボールに入ったサンドの綺麗に光り輝く緑色のボディを見る。

今まで研究された中で明らかになっていることだが、サンドの体色

は本来は黄色だ。しかし俺がゲットしたサンドは緑色の体をしている。——つまり、とても珍しい色違いのサンドというわけだ。

発見したときはまずそのボディに釘つげとなった。後先考えずにゲットを望んでしまったのだ。

サツキさんも色違いのポケモンを見るのは初めてだったようで、発見したときは興奮していたな。……はしゃいでいる様子が女の子らしかった。

「よし、まずは傷を癒すか」

「それなら、もう少し先に行つたところに川があるわ。そこまで行きましょう」

サツキさんの提案に乗って俺たちは32番道路をさらに進んでいく。

しばらく草むらを進んでいくと、青く澄んだキレイな川が見えてきた。

「ここはジョウト地方きつての釣りの名所でね、釣り人も多く訪れる場所なのよ」

「釣りの名所ですか。せっかくそんなところに来たのに、釣り竿がないというのは残念ですね」

「そうね。でも釣りつて案外退屈なものよ。釣れない時は全釣れないし、先を急ぐならばあまり効果的ではないわ」

「そうですね」

サツキさんの言うとおおり、川のすぐ傍には釣りびとの姿が多くみられる。川には木でできた橋がかかっており、そこから釣り糸をたらし、てじつと待っているようだ。

俺は背負っていたリュックをひとまず降ろし、それから先ほどゲットしたサンドをボールからだした。

「ごめん。体がまだ痛むだろ？ 今治療するからな」

キズぐすりをとりだしてサンドに振り掛ける。

体に少しばかり痣もできていたが、しばらくたてば治るだろう。あとでポケモンセンターに行けば何の心配もない。

一通りサンドの傷を見た後は今度は水辺でサンドの顔を洗い流す。



先ほどの「どろかけ」で浴びてしまったどろを洗い流すためだ。地面タイプであるがゆえに誤って川に転落でもしたら大変なので、俺がサンドの体をしっかり抱えこんで、サンド自身に洗わせた。水もちょうどよい冷たさのようで、サンドもうれしそうだ。

「それじゃあシユン君、ここで少し待っていてくれる？ 私は先行してどこか休むところがあるか探してくるわ」

「わかりました。よろしくお願いします」

サツキさんは俺に告げて先に歩き出した。その心配りには本当に助かる。

ヒワダタウンに行くにあたって俺達は『つながりのどうくつ』を通り抜けなければならぬのだが、やはり少しばかり休憩はしておきたい。それほど長い洞窟ではないそうだが、ポケモン達もこのまま休まずというのは少しばかりつらいだろう。

まだ時刻も16時くらいだし、少しばかり休んでも余裕でヒワダタウンには今日中につくはずだ。

「あら？ ……ごめんなさい、少しいかしら？」

「うん？ 俺のことか？」

サンドの顔を洗い終え、タオルで拭いていたところに後ろから声をかけられた。

まだ幼い女の子の高い声。——格好から察するにピクニックガールと言ったところだろう。

「ええー！ そのサンド、ひよつとしてあなたのポケモンかしら？」

「ああ。ついさっきバトルしてゲットしたんだ」

「やっぱり！」

俺の返事を聞いて驚愕するピクニックガール。

……サンドの存在自体はそれほど珍しくはないのだが、この反応はやはり普通とは違うからだろう。

「このサンド、色違いのポケモンよね？ ……すごい！ 実在するなんて思わなかった！」

「俺も初めて見つけたときは自分の目を疑ったよ。こうしてゲットできるとは夢にも思わなかった」

色違いのポケモンなど、まず遭遇することさえ難しい。下手すれば一度も出会うことがないことだってあるだろう。それがまさか自分のポケモンになるなんて一体誰が想像できただろうか？ 出会えただけでも感動ものだが、こうしてパートナーとして旅できるのは良い思い出になるだろう。

「あなたも逃げられることなくゲットするなんてすごいのね！ 実はけっこうな実力者なんじゃない？」

「いやいや、俺はまだ旅をはじめたばかりの未熟者だよ。ポケモン達に助けられているだけだって」

純粋な賞賛の言葉が心地よく感じる。たしかに色違いのポケモンなどの珍しいポケモン達はその分トレーナーには敏感で、注意力が高いと聞く。遭遇してもすぐ逃げられることもあり、まず出会うことさえできないという例があるのだ。

……しかし、実際のところ俺の実力はまだまだだろう。

ポケモン達はよくがんばってくれるが、何よりもトレーナーである俺自身が経験不足なのだ。そのせいで逆に戦闘において困らせてしまうことだってある。一番危ないのは過信だからな、自制しないと。「でも私は尊敬しちゃうな。……ね、よかったらポケギアの電話番号を交換しない？」

「ポケギアの？」

「うん！ 私も何かあったら電話するからさ。これからもあなたの活躍を知りたいの！」

断る理由もなく、俺は承諾する。このように無邪気に笑う姿を見て、断ることなど俺にはできない。

「ああ、俺は別にかまわないよ」

「ありがとう！ それじゃ、これが私の電話番号ね」

彼女の名前——カオリという名前と電話番号が書かれた紙を渡された。

……よく考えたらこれが初めて女性の電話番号を教えてもらった瞬間かもしれない。サツキさんの電話番号だってまだ知らないし、そう思うとなぜかドキドキする。

紙を俺に渡すと、カオリは「今度電話してね!」と言って手を振りながら走っていった。俺も彼女に手を振って別れた。

……色違いのサンドに加え、女の子の電話番号まで手に入れてしまふとは、旅というものは本当にわからないな。今日はかなりついている日なのかもしれない。

「……シユン君、話は終わりかしら?」

「うわあっ!? ……さ、サツキさん!」

そう俺が浮かれているのもつかの間、サツキさんの手がいきなり俺の肩へとおかれる。突如後ろから声をかけられたためにまったく気がつけなかった。驚愕でタオルを落としかけてしまう。

「えっと、いつからいましたか……?」

「君がああの可愛い子から電話番号を受け取って、だらしない顔をしていたあたりだよ」

サツキさんはこれ以上ないほどの満点の笑みを浮かべながらそう答える。……正直言つて怖い。

まあつまり、今の会話とやり取りのちょうど都合の悪い部分だけすべて見られてしまったということだ。しかしだらしない顔つて……うれしかったのは確かだが、俺ってそんなに顔に出ていたのか?・

「……シユン君もちやつかりしているよね。私がいなくなったと思つたら、道行く女の子を軽くナンパしちやつてるんだから」

「いやいやいやいや! ちょっとまってください、誤解ですつて!」

どうやらサツキさんの目には俺があ女の子をナンパし、そして成功したように映つたようだ。

……たしかに結果だけ見ればそう見えなくもないのかもしれないが、こちらとしては大いに問題ありだ。

「彼女には『色違いのサンドが珍しい』、つてことで声をかけられただけですよ。

それでこれから俺のことを(トレーナーとして)もっと知りたいたつて言うから、電話番号を教えてもらっただけで……」

「……ふうん。シユン君にとってはああいうことも『それだけ』なんだ」

必死に俺は説得するも、サツキさんは笑顔一つ絶やすことなく俺に言葉という鋭い攻撃を向けてくる。

珍しくすねている姿は新鮮だが、今はそれを堪能している暇はない。まだ今日は歩かなければならないので、今のうちに誤解を解かなければならないのだ。

「でもその割には嬉しそうだっただよね。年下の子が好きだったのかな？」

「いや、そんなわけないですよ。……ただ、初めて女性に電話番号を覚えてもらってうれしかったというか。……別に相手があの子だったからとかじゃなくてですね。えっと……」

「！……ふうん。そっか。そうなんだ。そういえば私もまだだっただけ……」

自分でも何を言っているのかがわからなくなってくる。本当に自分の気持ちを伝えるということは難しい。

だが俺の考えが少しは伝わってくれたのだろうか、ようやくサツキさんはいつも通りの顔に戻った。しばし考え込んでいたが、途中から小声だったので俺の耳には届かない。

「わかったわ。信じといてあげる。それじゃあ……」

そう言っただけで今度は本当に純粋な笑みで俺に手を差し出してきた。

「……えっと、何でしょうか？」

「さっきあの子からもらった、電話番号が書かれた紙を私に出して」  
元に戻ってくれたのはうれしいが、行動の意味がわからず聞き返す。

要求されたことはさきほどの紙だった。ここで逆らったら余計に痛い目に会いそうなので、俺は素直に紙を手渡す。

「……本当に貰ってたんだね」

受け取ったサツキさんは紙を凝視する。名前・電話番号と情報が書かれているのをしっかりと確認していた。

「サツキさん、一体それをどうするつもりで……」

「どうするつもりですか」と俺が問う前にサツキさんは行動に移した。

サツキさんは視線を紙から俺へと移し、笑顔のまま……  
ビリビリッ！

……紙を思いつきり破いた。音を立てて二つに裂かれていく紙。  
「え……!?!」

しかも半分に破くどころの話ではない。もはや何が書いてあったのかさえわからなくなるほど、解明不可能になるまでに小さく破り捨てた。

「これでよし」

「……………な、ぜ」

呆然としている俺を知ってか知らずか、サツキさんは何かをやり遂げたかのように、スツキリしたといわんばかりに清々しい笑顔をしている。

さすがにこのことに文句を言おうと試みるも、俺を制するように先にサツキさんが俺に向かって笑って問いかけた。

「シユン君には私がいるんだから、あんなもの必要ないよね？」

「……………え？」

「さて、それじゃ早くポケモンセンターに行こっか。ここをまっすぐ行けばすぐだよ！」

「……………え？」

サツキさんは小走りでポケモンセンターへと駆けていく。

俺は言っていたことが理解できずに、しばらくの間その場で立ち尽くしていた。

ちなみにこの後、ポケモンセンターにてようやくサツキさんのポケギアの電話番号を教えていただき、俺が始めて登録した女性はサツキさんとなった。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：1個（ウイングバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv17

ポツポ♀ Lv16

ピカチュウ♂ Lv19

ヨーギラス♂ Lv26

サンド♂ Lv14

レポートに書き込みました!!

## 第七話 V S ラプラス 闇夜での述懐、覚悟と約束と

……暗闇というものは人に恐怖を植えつける。

人々が普段光のある世界、明るい場所になりきっているからこそ、その反動が大きいのだろう。先が見えず、何があるのかも凝視しなければ確認できない、——へたすれば本当に何も見えない闇。

たとえ頭では大丈夫だとわかっていたとしても、精神的な面や本能の部分で恐れてしまうことがあるのだ。それは成長しようとも成長できない人が、変わろうとしても変われない人がいる。

「ね、ねえシュン君。やっぱり来た道に戻って、まっすぐヒワダタウンを目指さない？」

……まさに今のサツキさんがその状況だろう。

俺の服の裾を絶対に離さないように握りしめているサツキさん。声も心なしか震えているように聞こえる。

普段のサツキさんが怖がる様子なんて一ミリも見せないために、この瞬間がとても貴重だ。これがギャップというやつか。萌えてしま

う。  
「うーん。それがたしかに确实なんでしょうけど。……でも、たしかに聞こえたんですよ。何かの音が……」

「ちよ、ちよつと待って！ わかった、わかったからあまりそういうこと言うのはやめて!!」

「……はい、すみません」

あからさまに動揺している。どうやら暗闇や幽霊という類のものも苦手なようだ。……マダツボミの塔にサツキさんを連れて行かなくてよかった。あそこにはなぜか野生のゴーストが出現したからな。もし一緒にいたら悲鳴が何度も木霊したことだろう。

「こんなことなら地上の道を進むんだった……」

「いや、それが無理だったからこうして洞窟内を進んでいるんじゃないですか」

「それはそうんだけど……でも！」

必死になっている反論している姿がよりかわいらしい。

……ポケモンセンターで1時間ほどの休息をとった後、俺たちは32ばんどうろを越えて、32番道路とヒワダタウンをつなぐ洞窟、『つながりのどうくつ』に入っていた。今は地上をつなぐ安全な道もできているとのことだが、あいにく現在は工事中で通行禁止となっていた。ゆえにこうして洞窟内を進んでいたのだが……まさかサツキさんがここまで弱い面があるとは想像もしていなかった。

(しかし、あの泣き声は一体なんだったんだろう？ 霊的なものではなく、たしかに生物の声だったのだが……)

洞窟内を進んでいるとき、俺の耳に突如何かの生物の声のようなものが聞こえてきた。もつともサツキさんには聞こえなかったようで、それが一層サツキさんの恐怖を引き出してしまったらしい。

つながりの洞窟そのものは言うほど長くはないのだが、地下にも洞窟がつながっており、俺たちは今地下に降りて声の正体を探るために進んでいる。

「まあ、声は何なのか確認したらすぐに引き返しますよ」

「うん、そうだよ。そうしよう。早く探して早く戻ろう！」

「そうですね。そのためにも早く……おっ!？」

あまり怖がらせてしまうのも嫌なので、少し歩くスピードを速める。

……速めようとしたところで、俺は突如立ち止まった。前を歩いていた俺がいきなり立ち止まったその理由がわからず、サツキさんが横から顔を出したが、その理由はすぐに明らかになった。

「水が……」

思わず言葉に詰まってしまった。

つながりの洞窟の地下には水辺が広がっていた。どうやらここから先はしばらく陸地はないようで、歩いていくのは無理だろう。

「……近くの海につながっているのかもしれないわ。多分どこかの通路が海と面しているのでしょうかね」

たしかに先ほどまでいた32番道路も海に面していたし、このつながりの洞窟がどこかで通じていてもおかしくはないのだろう。となると、他に迂回するルートも特に見つからない以上、ここから先は陸



を渡っていくのはつらいな。

「これじゃあ仕方がないわね。もう戻りましょう」

「いや、行きましょう」

サツキさんは今すぐにも戻ろうと水辺に背を向けるが、俺は振り返りはせずに水深を測る。……けっこうあるな。おそらく俺の身長くらいはゆうにあるだろう。

「え、行ってくつて……でもシユン君は水タイプのポケモンを、〃なみのり〃を使えるポケモンを持っていないじゃない」

「ええ。だから……泳いでいきます」

「……ええっ!？」

俺の返答に驚愕している。

……まあ無理もないか。ふつうの川辺などならまだしも、視界も悪い洞窟の水辺で水温も低い。それなのにどこまで続いているのかさえわからないところを泳いでいくのは危険行為だろう。それは俺も考えてはいる。

「たしかに気のせいかもしれませんが、もしも本当にさつきの声か本物で、助けを求めているものだったら一大事ですよ。それを放つてはおけません」

「いや、でも……」

「サツキさんはここで待っていてください。俺が見てきますので」

さすがに暗闇に恐怖しているサツキさんを一緒に行かせるのは危険すぎる。それに何かあったときのために一人は対岸で待機してもらったほうが良いだろうしな。

ひとまず俺は、泳いでも大丈夫なように体を軽くストレッチする。いざというときのために、ポップだけは空中で様子見してもらおうか。

「……ああもう！ それならシユン君、私も一緒に行くわ」

「え？ いいんですか?」

「一人で待機しているというのも心細いし、それに水中でなんてろくに動けないだろうから……その方が良いでしょう?」

前半部分が理由の大半を占めているような気がしないこともない

が、そこはあえて触れないでおこう。

だが、言っていることは十分理解できるし納得できるのだが、それでも二人一緒に泳ぐというのは危険な気がするのだが……

「じゃあどうするんですか？　泳いでいくにしても……」

「いいえ、泳ぎはしない。この子に連れてつてもらおう」

「……この子？」

そう言っつてサツキさんは腰にかけている6つのモンスターボールのうち、一つに手をかける。

どうやらついにお出ましのようだ。……今まで一度もボールからポケモンを出してこなかったサツキさんのポケモン、一体なにが出てくるのか。

「出てきて、スターミー！」

「これが……スターミー」

そうしてボールからでてきたのは、『なぞのポケモン』と呼ばれているスターミー。水と念の二つのタイプを持っている、優秀なポケモンだ。

体の中心部にある赤いコアがまばゆく光り輝く。背中側の五芒星が力強く回転し、好調さをあらわしている。

水タイプであるスターミーだ。なるほど、これならたしかに泳ぐことなく進むことができる。サツキさんは宙に浮いたスターミーの上に乗る、そして俺に手を差し出した。

「さあ、行きましょう」

俺も手を借りてスターミーに乗る。

二人を乗せたスターミーは宙に浮いたままどんどん進んでいく。

……ほとんどゆれることなく、しかし中々のスピードで動くスターミー。サツキさんと長い時間共にすごしてきたということが伺える。レベルも高そうだ。

そうしてしばし進んだ後、水辺は広い泉のような場所へと出た。

スターミーをその場で止めさせてあたりを広く見回し、何かないかと探す。

「……多分ここが洞窟の奥深くだと思うんだけど……」

「ん？ ……サツキさん、何か聞こえませんか？」

「え!?! なに、なにが聞こえるの!?!」

「なにか、歌のような声が……」

「歌が？ ……本当だ」

じつと耳を澄ませていると、たしかに歌が聞こえてくる。

人間のものではないが、リズムにあったやさしい音色が聞こえてくる。とりあえずその歌が聞こえる方向に向かうとした。

すると、少し進んだ先で一体のポケモンが泳いでいた。綺麗に歌を歌っているその姿はとても美しい。

「あれは……ラプラス！」

「……ラプラス、ですか？」

そのポケモンの姿を見たサツキさんが名前をつぶやいた。

ラプラスといえば、今となっては絶滅の危機に瀕しているといわれるほど野生の個数が少ないとても珍しいポケモンだ。俺も今までラプラスというポケモンがいるということは知っていたものの、こうして姿を見るのは初めてのことである。

ラプラスはしばし歌い続けていたが、俺たちがいることを確認すると歌うことをやめて俺たちのことをじつと見つめてくる。

バトルになることも警戒して身構えるものの……ラプラスは何もそのようなそぶりを見せずに、俺たちに背中を向けた。

「……これは、どういうことですかね？」

『『ついて来い』』って言っているのかもしれないわね。ひとまず、様子を見ましよう」

こういった時にポケモンの意思がわからないのが不便だが、少なくとも戦闘の意思はないようだ。

するとラプラスは俺たちを一瞥した後、ゆっくりとさらに奥へと進んでいく。それについていくように俺たちも奥へと進んでいった。

たどり着いたのは、洞窟の岩がくりぬかれてできた大部屋のような場所だった。

ラプラスについていくと、その部屋の奥にラプラスの群れが集まっていた。

「こんなところにラプラスが群れで行動を……」

「信じられないですね。まさかこんな洞窟の奥深くで存在していたなんて」

全滅寸前とまで言われているポケモンがこのようなところに身を潜めているのだから驚きものだ。

だがそのようにいつまでも驚いてもいられない。先ほど俺たちの前で歌っていたラプラスは一体の小さなラプラスの下へと向かっていく。……まだ子供なのだろうか、他のラプラスと比べると一回り小さい。よく見るとそのラプラスを囲むように群れが集まっていた。

俺たちも近づいてよく見てみると、そのラプラスが怪我をしているのがわかった。背中の甲羅にも傷があり、体に大きな痣ができているのが見える。

「……ここまで怪我しているとは。一体なんで……」

「落石とかそういう類のものだと思う。地上を工事したことでこの洞窟内部にも少しばかり影響がたんじやないかしら」

なるほど。地上の開拓の工事のために地盤がゆれ、それによって生じた落石に巻き込まれたということか。たしかに洞窟の中では特にそれ以外に負傷することなどないだろうし、これだけ奥深くに住んでいるのならば他の野生ポケモンやトレーナーだって簡単には現れないだろう。

それで多少の危険を覚悟の上で助けを呼ぶためにさっきのラプラスが歌っていたのか。誰か仲間を助けてくれる人を求めて。

……そう考えるとやはり黙ってはいられない。怪我しているラプラスも十分痛みを耐えてきたのだろう。ならばそれに応えてやらなければここまで来た意味が完全になくなってしまう。

「どうするシユン君。甲羅にまで影響が出ているとなると、ポケモンセンターに連れて行くし……」

「いえ、俺が治療します」

下手にラプラスを外に連れて行くわけにはいかない。

ただでさえ珍しいポケモンとして狙われているというのに、それ以上人目にさらすことはない。もしもセンターに連れていったとした

ら、再びこちらに逃がすときに狙うような輩が出てくるだろう。そうすればこの怪我以上の被害が出てしまうかもしれない。それでは本末転倒だ。

俺はサツキさんをお願いしてスターミーを怪我しているラプラスの傍に移動させてもらう。そして右腕をラプラスの体へと触れさせた。

妙な行動をするのではないかとラプラス達が警戒しているのが感じられたが、そのようなこと関係ない。元より疑われるのには慣れている。

右腕に全神経を集中させる。……たちまち右腕から白い光が放たれる。

サツキさんやラプラス達の驚いている声が聞こえてきた。おそろしく怪我しているラプラスもだろう。

……約一分。その時間を終わると俺は集中を解いた。

力を使いすぎたせいかな、体からどつと力が抜けていく。しかし、ちやんと成果はあった。

ラプラスの甲羅は元通り万丈になり、痣もすっかりひいて元気な状態へと戻っていた。それを確認したラプラスは皆に見せびらかすように泳ぎ回る。元気になったなら何よりだ。

「……よかつたな」

嬉しそうに俺に向かって微笑む姿が可愛い。

まだ小さな子供であるがゆえに、少しの傷とて致命傷になりかねない。こうして治してやるのができて本当に良かった。

「大丈夫、シユン君？」

「ええ、大丈夫です」

ふらつく体をサツキさんに支えてもらう。

……たしかに、少しやりすぎた感はあるな。余計な心配をかけてしまったようだ。でもこれでラプラス達はこれからも群れとして安心して行動することができるだろう。

「それじゃあな、これからは怪我せずトレーナーに見つからないよう気をつけなよ」

あそこまでいけばあとは自然治癒でどうにでもなる。今まで群れとして暮らしてきたのだし、これからもきつと大丈夫だろう。

役目を終え、サツキさんはスターミーの進路を来た道の方向へと移し、戻ろうとする。

……しかし、そんな俺たちを引き止めるように先ほど歌を歌っていたラプラスが “なきごえ” をはなつた。まだ何かあるのかと振り返ってみると、先ほどとは逆に俺たちについてくるようにラプラスがあとを追うように泳いできた。そして俺の瞳をじつと見つめてくる。

その行動だけでラプラスが言おうとしていることは理解できた。

「……良いのか？ せっかく仲間が治つたと言うのに、群れと別れて」  
今まで共にすごし、心配してきたのだから一緒にいたいという気持ちはあるだろう。

だがラプラスは群れのほうを見ると一度だけ頷き、そして群れのラプラス達も頷いて返した。まるで旅立ちを許すかのように。助けてもらったことに恩を感じたのだろうか。

個人的には水タイプがほしいところだったし丁度いい話だ。ラプラスが望んで俺の手持ちに加わってくれるというのなら、これは見逃すことはないだろう。

「……わかった。お前がそれでかまわないというならば……俺と一緒に来い、ラプラス」

殻のモンスターボールを一個リュックから取り出した。

ラプラスは自分からボールに向かっていき、コンツと額をボールに当てる。

ラプラスの体はボールへと吸い込まれていき……そして完全に収まった。これはラプラスをゲットしたということの意味する。

「ありがとう、ラプラス。……それじゃあ、最後に皆に別れの挨拶を言っておけ」

捕まえたばかりのラプラスをボールからだし、仲間達に挨拶をさせる。言葉は一切なかったもの、お互い通じるものがあつたことだろう。

別れを告げた後、ラプラスは俺たちに向かって再び “なきごえ” を

してきた。そしてその長い首を自分の背中へ向けて振っている。

「これは、俺たちに乗れって言っているんですかね？」

「そうね。元々ラプラスは背中に人やポケモンを乗せて泳ぐことが好きと言われているくらいなもの。せつかくだからお言葉に甘えて、乗させてもらいましょう」

サツキさんも一度乗ってみたかったのか上機嫌で答える。

断る理由もないし、サツキさんはスターミーをボールへ戻して俺たちはラプラスの背中に乗った。

ほどよいスピードで進んでいくラプラスの乗り心地は最高だ。なるほど、たしかにこれは人々がほしがるだけのことはある。そう断言できるほどの乗り心地だった。

「……ねえ、シユン君」

「はい？ なんですか？」

「君のあの力は、一体何なの？ どうして、あんなにまで苦しい顔をすめるの？」

「……ああ、そのことですか。やっぱり気になりますよね」

力のことをまったく知らないサツキさんからしてみれば、やはりどうしても心配してしまうのだろう。

なにせ、突如ポケモン達を自力で癒したと思ったら、その癒した俺がかなり疲労しているのだから。おそらくトキワの力であつてもそう上手くはいかないだろう。

たしかにサツキさんには説明しておいても良いのかもしれない。むしろこれから先、何もわからずにいてもらうほうが困るな。

「それなら教えておきますよサツキさん。」

俺の力は……代々ワカバタウンに伝わる、特殊な力です」

「ワカバタウンの……？」

「ええ。——己の力を代償に、他者に力を分け与える禁忌とされた力」  
トキワの森の力よりもはるかに珍しく、使い手が圧倒的に少ない秘密の力。

よく知らぬものは便利だと思うのかもしれない。うらやましがるとのかもしれない。だがしかし、デメリットのない力など存在しない、

力には代償が必要である。それを象徴するかのような力だ。

同時刻、ワカバタウン。

ウツギ博士の研究所にて、ウツギ博士はオーキド博士に聞いたでし  
ていた。それはまさにシユンに宿っている力について。彼があそこ  
まで言っていた真の意味について。

「そんな……それじゃあ彼の力とは！」

「ああ、そうじゃ。彼の力、『ワカバの力』とは——己の生命力を他者  
に分け与える力。再生能力を高める気として他者の体内に作用させ、  
細胞に直接働きかけて再生能力を高めるといふもの」

「ワカバの力」。——自分の生命力を他者に作用させ、細胞の活性  
化を促すというもの。

今までの治療というのもまさにそうだった。トキワの森の力は周  
囲のエネルギーをも取り込み、外側・体面から癒すのに対し、ワカバ  
の力は傷を内側、細胞を活性化させて回復力を増幅し、自然治癒を促  
進させるというもの。ゆえに治すというのには正確には語弊がある。  
あくまで彼は傷を治す方向に導いているということなのだ。

「そんな力があつたとは。……でもそれなら、なんでそんなにワカバ  
の力は知られていないんですか？ 私とて長年この地に住んでいま  
すが、今まで話を聞いたことさえありませんでしたか」

「当然のことじゃよ。たしかに力としてはかなりのもの。それこそ  
『トキワの力』にも匹敵する。」

だがしかし、能力者の数が少なすぎるんじゃない。己が生命力を他者に  
譲渡するというのが問題となる。……その能力者が力を使うたびに  
能力者の体は弱まっていき、細胞の死滅——つまりは肉体の寿命がい  
ち早く訪れ、そう長く生きられないからじゃ」

「なっ……！」

「……滅多に能力を使わなくても80年は生きられず、多用すれば5  
0年は生きられず、乱用すれば能力の発動中に死んでしまうさえ言わ



れる禁忌の力。能力者が次々と夭折してしまうんじや。知らないのも無理のない話し」

驚愕の色を隠せないウツギ博士にオーキド博士はさらに追撃をかける。

……「短命」。それがワカバの力の担い手に宿る宿命さだめだった。それはシユンとて例外ではない。

「……ワカバタウン。トキワの森と似ている力が生まれようとも、その意は全くの逆。」

トキワは『永遠』を意味しているのじやろうが、ワカバは……『若葉』、つまり幼いことを意味しているのじやからな」

「シユン君は、それを知った上で行動しているんですよね」

ウツギ博士の言うことはもつともだ。

このようなことは14歳の少年には背負うには重過ぎる問題だ。だが知らなくては彼の人生そのものにかかわる。オーキド博士は悔やむように、彼の問いに答えた。

「昔、彼は友人のゴールドに言ったそうじや。」

『俺には1を救うために100を捨てるような勇氣なんてないし、100を救うために1を捨てるような信念なんて持ち合わせていない。……だけど、1を捨じぶんてて101を救みんなう覚悟なら、とうの昔にできている』、とな」

「そんな……!」

それはあまりにも重過ぎた覚悟。少年にはつらすぎる宿命さだめ。それでも、それでも自分達の期待にこたえてくれた少年。あまりにも現状は過酷過ぎた。

他に誰もいなかったとはいえど、数奇な運命をたどる少年をさらに追い詰めてしまったのではないかと、ウツギ博士は後悔していた。オーキド博士も自分の判断が本当に正しかったのかと考えをめぐらしている。

だがしかし、どれだけ優秀な研究者と謳われた二人でも、その答えを見つけ出すことはできなかった。

この世に本当に正しいことなんてありはしない。それでも今は最

善を尽くすしかないのだから。

「……シユン君は、それでいいの?」

一方、つながりのどうかつ。

シユンから『ワカバの力』の話聞き終えた後、内容が内容なためにしばしサツキは顔を俯いて無反応の状態であった。想像以上のことだったのだろう。よもや担い手の寿命を削り取るような力を、シユンのようなまだ若い子供が持ち合わせているなど誰が想像できるだろうか。

少し時間が立ち、ようやく現実のことと認識したのか、サツキはシユンに問いかける。果たして本当に満足できているのかを。

「ええ、俺はかまいませんよ。むしろ嬉しいくらいですから」

「……嬉しい?」

だがシユンは躊躇うことなく笑顔で答えた。

「一体どこが嬉しいというの?」という言葉は彼の笑顔の前に、発せられることはなかった。

もはや彼はすでに割り切っていた、覚悟を決めていた。そして同時に自分を諦めかけていた。

それがサツキにはよく理解できない。この年代の子供ならば、自分のために何かしたいことだってあるはずなのに、シユンはまるで自分の死に対して無頓着なようだった。

「だって、この力があれば誰かを助けられるんですから。」

俺は『守る』とか、『助ける』とか『救う』とか……そういうことをただ叫んで終わりたくはない。そんなことを叫ぶだけ叫んで何もできないような人よりは、行動に移せるだけ幾分か良いでしょう?」

……反論はできない。反論したくても、何て言えば良いのかがわからない。一体何を言えばこの子に届くのか、まったくわからない。サツキはシユンの笑顔を見て何も言い返すことができず、感情を悟られないように再び顔を下げた。

大げさなことを言っているのではない、間違いなく事実だろう。現に今までもシユンは度々ワカバの力を使ってきた。そして力を行使するたびに体が弱っていた。

きつと彼はこの先、本当に大きな戦いになったならば、まず間違いなく命を懸けて戦うことだろう。文字通りその身を犠牲にしても。

それが良いことだと、当然のことだと思ってしまうている。自己犠牲の結果、誰かが救われれば良いと結論付けてしまっているのだ。誰かが助かるように導ければ、その未来さきに自分がいなくてもかまわないと。

「それでも、あなたが良くても他の人はそうは思わないでしょう？

たとえ他の誰かが救われようとも、あなたが消えてしまったら意味がないじゃない！」

「元より『皆助かれれば良い』なんて自惚れてはないですよ。代償は必ず必要だ。それなら、その犠牲は少ないほうが良いに決まっている」

「……どうして、そこまで割り切れるの？」

シユンとてサツキの気持ちが変わらないわけではない。何も自分から死を望んでいるわけではない。

だがしかし、すでに変わることのない固い決意ができあがってしまったっている。まだ14年しか生きていない子供が、なぜそこまで他人を考えられるのか、付き合いの短いサツキにはわからない。

「……小さいころ、よく父さんは言っていました。いつも傍にいと、必ず俺が守ってやると」

「……え？」

突如シユンは昔の話を持ち出した。何が言いたいのかサツキは疑問に感じたが、シユンの話し方から何か昔の大切なことを話そうとしていることは理解できた。

「そんな父さんの背中が俺には強く映りました。力強い言葉が俺には強く印象に残りました。

……でも、そんな父さんも気がついたらどこか旅に出ていた。俺達に何も言わずに、俺達を残して。あれだけ言っていたのに、いまや音沙汰もない」

そう感じたからこそサツキは何も口を挟まずに耳を傾ける。シユンがどれだけ彼の父親を慕っていたのかはその様子から察することができる。そしてどれだけ傷ついたのかも理解できる。

「母さんは数日泣いていましたよ。俺だって話を聞いたときは衝撃を受けました。」

……それ以来、俺は父が嫌いになりました。そして綺麗言だけはいくような人も、大事な時に傍にいなくて他の人を傷つけるような人も」シユンの顔が強張る。やはり母親を傷つけた父親を、期待を裏切った父親を許せないのだろう。

そして同時に、サツキはシユンが自分のことまで嫌いに思っているのではないかと感じた。

先立って旅に出たジョウトの凶鑑所有者の一人はシユンの大切な友達だったと聞く。その友達が危機に陥ったときに傍にいて助けることができなかった自分を許せないのだろう。だからこそ、もう誰も傷つけないようにと……

「……バカ」

「……え？」

シユンは、きつとこんなこと言って嫌われたかとも思った。見放されたのではないかと。

だがしかし、サツキは一言文句を述べると、後ろからシユンをしっかりと抱きしめた。

「え、ちよっ……サツキさん!？」

羞恥心からシユンが振りほどこうと必死にもがくが、サツキはそれを許さずさらにギュツと力をこめて体を抱き寄せる。

「シユン君。たしかに君は間違ってるよ。でも、正しくもないと思う」

「……はい」

元より自分が正しいとは思っていない。そもそもこのような力を持っている時点で常人とは道を踏み外している。それでも、自分が望んだからこそこうして旅をしているのだから。

「皆を救いたいと思うのなら、君も生きななきゃ駄目だよ。君の友達

だって、シユン君がいなくなったらどうなるかわからないよ?」

「……そうですね」

「そんなときにシユン君がいなかったら、それこそシユン君の嫌う人になっちゃうよ?」

「……」

たしかにゴールドがもしもシユンがいなくなったらどうなるか。……容易に想像できる。先輩思いな彼のことだ、おそらく話を信じられずに一人激昂し、暴走することだろう。それをとめられるとしたら間違いなくシユン一人だけだ。

「シユン君だって旅立ちの時、一人では無理だと思ったんでしよう?」

一人では限度がある。それは何も恥じることじゃない。むしろ当然のこと。一人で背負わず、私をもっと頼ってくれていいんだよ?」

「……ええ、わかっています」

「わかっているなら、これ以上無茶はしないでね。皆のためにも……シユン君自身のためにも」

「……はい」

サツキはただ願う。目の前の頑固な少年に救いの未来があるようにと。

シユンにその思いが痛いほど伝わった。抱きつかれた状態のまま、悟られないようにため息をつく。

(この人は、優しすぎる……)

ため息はついたものの、嫌な気持ちではない。むしろかえって清々しい気分になった。サツキに感謝しつつ、シユンは今まで心配をかけてしまったことを心の中で謝罪し、そして彼女を真に頼れるパートナーだと認識した。

「だからお願い。これから先、何があってもその力だけは使わないで」

「ッ!? それは……」

だが、さすがにこのサツキの提案にはすぐに頷くことはできなかつた。

この力は他者を癒し、助ける力だ。これから先も使用の機会はあるだろうし、何より対仮面の男における切り札でもある。それを封じる

のはあまりにも痛すぎる。

それはできないと、シユンは改めて断ろうと口を開くが、それより先にサツキが言う。

「言ったはずよ。私をもっと頼ってくれていいって」

……その言葉にはなぜか重みがあった。まだ彼女のことをよく知らないシユンではあったが、その声を聞いた瞬間に反対の気持ちは制せられた。

——人やポケモンの治療、緊急時の戦闘。使いたい出番はあるし、使わなければならぬときもあるだろう。

だがたしかに無理に力を使う必要はない。怪我とて専門のポケモンセンターに行くなり病院に行くなり、他にも手はある。戦闘においてもサツキがこれほどまでに頼ってくれと言っている。先ほど見たスターミーから判断しても、サツキが信頼するに値するトレーナーだということはシユンも感じていた。

甘えてしまつてよいのかとシユンの信念が揺らぐ。

ここで肯定してしまつたらもう破るわけにはいかない。もし破つてしまえばそれこそシユンは彼の嫌う人に成り下がってしまう。

……悩んだ末、口を開き、そして再び口を閉じてその言葉を飲み込んだ。

瞳を閉じて再思考した結果、今度こそシユンはサツキの問いに答えた。

「……わかりました、サツキさん」

——是と。力を封じることには同意した。

約束した以上は必ず守り通す。シユンは決意を新たにする。

……皆を救い、そしてサツキと共に自分も未来を生きること。

秘密を打ち明けたことで、二人の絆がより深く、より強くなった日だった。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：1個（ウイングバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv18

ポツポ♀ Lv17

ピカチュウ♂ Lv19

ヨーギラス♂ Lv28

サンド♂ Lv15

ラプラス♀ Lv32

レポートに書き込みました!!

## 第八話 VS ピカチュウ 過去の記憶

——時は今から7年前にさかのぼる。

カントー地方の一角、ニビシティにてちよつとした騒乱が起きていた。

「そつちに逃げたぞ！ 追え！」

「絶対に逃がすな！ これ以上被害を拡大させてたまるか！」

街中を全速力で駆け巡る一体の小さなポケモン、そしてそのポケモンを目の敵として追いかける人々。

逃がっているのは黄色の体とねずみを思わせる体が特徴的なポケモン——ピカチュウだ。口元には食べ物をはさみこんでいる。

本来ならば野生のピカチュウはトキワの森を生息地と定めて暮らしているのだが、このピカチュウはしばしば食べ物を求めて街へと現れることがあるのだ。今回もここニビシティに訪れ、街の商店街から食べ物をあさっていた。

だがそんなところを多くのトレーナーに囲まれてしまい、いまや死に物狂いで逃げているところだ。

人々は精一杯走り続けるものの、ピカチュウの自慢の速さを前に、一向に差がつかまらない。

このままでは逃がしてしまうと判断したのだろう、ポケモントレーナー達が次々と自分のポケモンをボールから繰り出した。

「マダツボミ、はっぱカッター！」

「ロコン、びのこ！」

放たれた技は標的のピカチュウ目掛けて突き進んでいく。

当然のことながらピカチュウは回避を選択するものの、後ろからの攻撃には完全に対応しきれずに被弾してしまった。

「おお、やった!!」

「~~~~ッ!! ッカッ！」

だが、それでも攻撃はピカチュウの足を止めるまでにはいたらなかった。ピカチュウは反撃とばかりに得意の電撃を——でんきショックを放つ。



「あががががつ!？」

ポケモン達は回避したものの、トレーナー達は完全に油断しきっており、ともに電撃を浴びてしまった。彼らの意思に反し、体の強烈な痺れによって動くこともままならない。ポケモン達も自分の主人が攻撃を受け、指示もままならないことによって戸惑っているようだ。

追っ手を振り払ったことを確認して、ピカチュウは彼らを背に再び走り出した。彼の住みかであるトキワの森目掛けて。

「……ピイカ……」

無事にニビシテイを脱出し、トキワの森の中心部まで逃げる事ができた。ここまでくれば先ほどのニビシテイの人達も追ってはこないということを確認し、ピカチュウは安堵の息を漏らす。

しかし、体のほうはそうは言っていられない。先ほどの攻撃を受けたことで、体には切り傷ややけどのあとが見受けられた。ダメージが思った以上に残っており、逃げられたと安心した瞬間に力が抜けていく。自然に回復するにはかなりの時間を有することだろう。

体を大きな木に預け、少し休むことにした。

「……しよう」

「……ピ?」

「……は、一体どこなんだ……?」

だが、突如人の声がピカチュウの耳に伝わってきた。声は一つ、話から察するに道に迷ってしまったようだ。

このトキワの森は『天然の迷路』と呼ばれているほど複雑な地形であり、地理に詳しくない地元の人間以外の者が入ってしまうと中々抜け出すことはできない。この声の持ち主もおそらくは迷路を攻略できずにさまよっているはずだ。

それならば先ほどのニビシテイの人たちとは何の関係もないはず。ポケモントレーナーの可能性は否定できないものの、さほど警戒する必要はなくなる。元より今の状況では全力を出すことができないのだから。おそらく逃げることさえ危うい。

「こつちかな？ ……うん？」

すると予想通りというべきか、ピカチュウの目の前には先ほどの声の主が姿を現した。まだ幼い、10歳にもみたないくらいの茶髪の男の子だった。その表情は不安でいっぱいである。

少年は傷ついたピカチュウの姿を見るや否や、目線を合わせるように座ってその小さな体を抱え込んだ。

「おい、どうしたんだい？ 大丈夫か？」

傷ついて倒れているポケモンといきなり遭遇して少年は混乱している。一切抵抗の色を見せないピカチュウに少年はさらに不安になったのだろう。もしも彼がちゃんとした知識を持っているポケモントレーナーならばキズぐすりでも取り出して傷を緩和するのだろうか、案の定彼は何も持ち物を所持していなかった。

…だからこそだろう。彼が知識を持っていないからこそ、なおさらこのピカチュウを助けようと思ったのは。

「大丈夫だよ、今すぐに元気にしてやるから……」

「……ピ、カア？」

ピカチュウには少年の言っている意味がよくわからなかった。

治療薬を持っているわけでもないし、かといってこの少年が医療の道に通じているとは到底思えない。しかも道に迷っている以上、街に戻ってポケモンセンターへと連れて行くことも不可能であろう。ならば一体どうやって治そうというのだろうか。——その答えはすぐに明らかになった。

少年はピカチュウを最初の状態に、大きな木に背中を預けるように横に寝かせ、そしてその体に彼の右腕を当てた。意識を集中させるようにゆっくりと瞳を閉じ……そして、彼の右腕から光が放たれた。その光はピカチュウの体に向かって放たれ、その眩しさからおもわずピカチュウも目をつぶる。しかし、なぜかその光を浴びると心地よい感じがした。体にどんどん力がわいてくるような、そんな気持ちがあった。

光がやみ、少年は手を下へと下げる。ピカチュウがおそるおそる目を開けると、先ほどまで切り傷だった場所はほとんど塞がっており、

やけどを負っていた場所も皮膚が元通りに綺麗になっていた。

一体なにがあったのか、今起きたことが理解できなかったものの、この少年が自分を治してくれたことには変わりない。ピカチュウは彼にお礼を言おうと顔を上げるが……そのときになって、少年の異変に気づいた。

「……はあ、はあ……はあ！」

「ピッ!？」

先ほどまで焦ってはいたものの、どこか気丈としていた少年が疲れきっていたのだ。わずか数十秒で息はあれ、辛そうにピカチュウを見つめている。言葉を発することさえつらそうだ。

「これで、しばらくは大丈夫だろう」

「……」

「それで、ピカチュウ……ゴホッゴホッ!! ……すまないけれど、トキワシテイまで案内してくれないかな? お前の傷もまだ完全には癒えていないし、ポケモンセンターに連れて行きたい。僕もそこに用があるんだ」

ピカチュウは即座に頷き、肯定の意を示す。

治療をしてもらった恩があるこの小さな男の子の意見に反対する理由なんて少しもなかった。何より、この少年ことが気になって仕方なかった。トキワシテイならば道順も良く知っているし、ピカチュウが彼を案内すれば迷うことなくつくことだろう。

ピカチュウはゆっくりと少年の歩幅に合わせてるように歩き出した。

時々心配になつて後ろを振り返ると、少年は笑顔で返してくれる。もしも自分にも主人トレーナーがいたならば、このような関係でいられる相手だったのだろうか、一人ピカチュウは考えていた。

ピカチュウの案内によって、トキワシテイには無事にたどり着くことができた。

森から出るや否や、二人の大人が少年に駆け寄ってくる。おそらく

は彼の両親だろう。

「シユン、大丈夫だったのか!?!」

「どこに行ってたの!?! 怪我はない!?!」

心配そうに声をかけ、そして無事を確認すると笑って頭を撫でていた。

この男の子の名前はシユンというらしい。彼もようやく不安から介抱され、両親と合流できた喜びからうれし涙を流していた。こういうところはやはり歳相応の少年だということだろう。

シユンは二人に事情を話し、ピカチュウのことも説明していた。どうやらシユンは別の地方の出身だが、行でこの街まで来たものの、あちこちを歩き回っているうちにトキワの森に入ってしまったそう。そして迷っている間に怪我しているピカチュウを発見し保護したと。

勝手に出歩いたことを両親は叱ったものの、その後はピカチュウをしっかりと治療するために一緒にポケモンセンターへ連れて行った。ほとんど傷は癒えているものの、やはりちゃんとした医者に診せたほうがよいという考えだ。

ポケモンセンターへ向かう最中、シユンを見る彼の父親の目つきが異常なまでに鋭くなっていたものの、それに気づけたものは誰一人いなかった。

ポケモンセンターでピカチュウが診療を受けたものの、軽症と診断された。怪我を負っていたものの、ほとんど完治寸前までに治りが進んでいたためだ。ゆえにピカチュウはすぐにシユンの元に戻ってきた。

そこで家族が話していたのはピカチュウのこと。傷も治ったことだし、旅行ももうすぐ終わって帰ってしまうのだから、野生に返すように、——『トキワの森』に返すように両親が説得するものの、シユンが頑として聞く耳を持たなかったのだ。

「シユン、いい加減にしなさい。その子は野生のポケモンなのよ」

「でも、せっかくカントー地方に來たんだし、こうやってポケモンと真正面から触れ合えたのは初めてだし……」

シユンはポケモントレーナーでないゆえに、まともにポケモンと触れ合う機会も今までなかったのだろう。一緒に歩いているうちにピカチュウに関心をもったことも加わった。

どうしても一緒にワカバタウンに帰りたいと意見を変えないシユンに、今まで沈黙を決め込んでいた父親がシユンに言った。

「シユン、お前は自分が言っていることを理解しているか？」

「え？」

「お前が言っていることは、自分がトレーナーになると言っているようなものだ。これから先、そのポケモンの世話を自分がしていくということだ。一緒に連れて行くということは、お前はピカチュウの主人になる。その子を故郷から離れさせて、それでも不自由なく世話できるとお前は言い切れるか？」

「……それは……」

言い返す言葉が見つからずにシユンは口を閉ざす。まだ幼く、難しいことは考えていなかったのだろう。ゆえに安直な感情を露にしまった。トレーナーとなる以上、ポケモンを育てるのはトレーナーの仕事であり役目であり、そして義務である。しかしシユンにはそれだけの自信を持てなかった。

父親に論破され、顔を俯げるシユン。論破するほどの言葉が見つからず、諦めかけているようだ。そんな彼にピカチュウは近づき、そしてズボンの裾を引っ張った。

「ピカチュウ……？」

それに気づいたシユンが呼びかけるが、ピカチュウは彼に何も反応を見せない。むしろ顔を見ることさえしない。ただひたすら、彼の父親を見つめていた。

「……………」

「……………」

お互い何も言葉は交わさず、無言のままにらみ合いが続く。だが、それでも意思は通じた。

しばらくたつて父親のほう折れて、ため息を一つ漏らすとシユンを見て言った。

「わかった、シユン。その子連れて行きなさい」

「父さん！」

「あなた!?!」

突然の賛成の意見にシユンからは喜びの声、母親からは驚愕の声が出る。そんな二人を諭すように、彼はピカチュウを撫でながら言った。

「どうやらこの子がお前についていくことを望んでいるようだからな、お互いが決め込んでしまっているのだから仕方がない。帰ったらお前にちゃんとしたトレーナーとしての教育をはじめよう」

「それじゃあ……!」

「ああ。ほら、モンスターボールだ」

父親は空のモンスターボールを取り出してシユンに手渡す。シユンも喜んで受け取った。

ボールを手に、シユンはピカチュウの方に振り返る。ピカチュウもコクリと頷いた。それを確認して、シユンは軽くボールをピカチュウ目掛けて投げた。

コツン、とボールはピカチュウに当たり、その体がボールの内部に入っていく。……この瞬間、シユンはポケモントレーナーとなった。シユンがピカチュウの主人トレーナーとなった。

旅行を終えてワカバタウンに帰ってくるとシユンは父親からトレーナーとしての最低限の知識を教わった。しっかりとピカチュウの世話も一人できるように、バトルの技能も備わって、トレーナーとしては及第点をもらえるようになった。

普段からピカチュウはボールからだして放し飼いをしており、家族の場も一匹が加わったことで明るいものとなった。これからもこういう日が続くのだろう、これからも皆笑っていられるだろう、とシユ

ンは愚直なまでに信じていた。

……そう、あの日が来るまでは。

「……あなた。どうしてこんなに急に……ッ!!」

シユンがピカチュウの主人トレーナーになって三年ほど月日が流れた。

自宅の居間で、シユンの母親の悲しい嘆きが虚しく響く。そしてそんな母親の様子をシユンは物陰に隠れて見ている。

突如姿を晦ましたシユンの父親。書置きだけを残して居場所も告げずに家を出て行ってしまったのだ。

シユンもどんどん成長して家族生活も豊かになってきたというのにもかかわらず、急すぎる失踪。共に家族を支えていた母親の悲しみは想像できるものではない。

そんな母親の姿を見て、シユンは何も声をかけることなく自室へと戻っていった。

「……最低だ。本当に、最低だ……」

ただ一言、それだけ言ってピカチュウと一緒に階段を上っていく。果たしてこの一言が、自分や母親を悲しませた父親に対して言っていることなのか、それともそんな母親の姿を見ても何もできず、何も言うことができない自分に対して対して言っていることなのか、ピカチュウには理解できなかった。いや、ひよつとしたらシユンにもわかっていなかったのかもしれない。

部屋へ戻るとすぐにシユンはベッドに倒れこむように横になった。シユンに続く形でピカチュウもベッドにもぐりこむ。

お互い何も言わなかったものの、その気持ちは通じる。言葉など必要なかった。

突如シユンがピカチュウを抱きしめる。力が強くて少し痛かったものの、ピカチュウは抵抗はせずに受け入れる。

「……ごめん、ピカチュウ。五分だけでいい」

——五分だけ、このままでいさせてくれ。

シユンがそう呟けばピカチュウは嫌な顔を一切見せずに頷いてみせる。シユンは泣くことはしなかった。嘆くことはしなかった。しかし、その体は震えていた。尊敬さえしていた父親に期待を裏切られ

る形になったのだから仕方のないことだろう。

ピカチュウはそんな様子を見て、あれだけ大人びた姿を見せてもまだ彼が子供であるということに改めて自覚した。シユンの力のことはすでに理解している。その力の代償も。だからこそ、この小さい体の自分の主人を支えるのは自分だと、改めて決意した。

それからというもの、シユンは変わった。変わってしまった。

普段の生活は何も変わっていない。母親との会話の中でも一切変わった様子は見られなかった。だが常に傍にいるピカチュウには理解できた。彼が無理に笑顔を作っていることを。彼が、父親を嫌うようになったことを。あれだけ父親を慕っていたシユンがただただ父親を嫌悪するようになったことを。

そして考えが変わっていった。自分は父親あのおとこのようにはならない、と。そして言葉だけではなく、今度こそ誰かを救えるようになる、と。それが当然になっていた。人であろうとポケモンであろうと変わらない。それを示しているのは彼がヨーギラスを保護したときのことだろう。

「おい、お前大丈夫か!?!」

ワカバタウンの町外れに倒れていたヨーギラス。傷が無数にできている、激しい戦いがあったということ想像させる。野生のヨーギラスが住んでいるシロガネ山からワカバタウンに来るには山を越えなければならぬのだが、それなのにこの状態で来るといふのだから相当なことがあったのだろう。

シユンはすぐにヨーギラスに駆け寄り……そして迷うことなく力を使った。

「ッ!? ピッカ……!」

ピカチュウが止めようとするがもう遅い。シユンはすでに力の行使を始めている。

使えば使うほど、力の担い手の体を蝕んでいく。それなのに、シユ



ンは迷うことを知らない。父親の一件があつてからはなおさらだ。自分だけは絶対に救つてみせると、誰も見捨てないという考えが身についている。

……時間にして3分ほどが経過して、ヨーギラスの傷が癒えた。

だがしかし、治療が終わつた瞬間シユンはその場に倒れこんでしまった。

「ピカ!!」

「……ッ!?!」

二匹がすかさず彼に駆け寄る。やはり息が絶え絶えの状態で、弱りきつているのが明らかだった。

まだ未成熟の幼い体であるとはいえ、わずか数分力を行使しただけでこれほどまでに弱っているのだ。使い続ければどうなるか……想像に難くない。まともな結果にはならないだろう。

今すぐ自宅に連れて帰らなければならない、それはわかりきっているもののピカチュウにはシユンを抱えるほどの力も体格もなかった。誰かを呼んできたほうがよいか、しかしこの場を離れて大丈夫なのかと悩んでいると、ヨーギラスが突如シユンの体を持ち上げた。

「……ピカ?」

「……」

ヨーギラスは何も言わずにコクリと頷く。どうやらピカチュウに協力してくれるようだ。

二匹は協力してシユンの体を運んで自宅まで歩いていく。幸いこの近くには野生のポケモンも住んでいないし問題はなかった。家につくころにはシユンの意識も戻っており、なんとか事無きを得た。

だがしかし、こうなると問題なのは今後ヨーギラスをどうするかである。

ヨーギラスはどうやらシロガネ山に戻る気はないようだが、この周辺の草むらで暮らすとなるとこの付近の生態系に大きな影響を与えることになる。

ゆえにシユンが説得し、ヨーギラスはシユンのポケモンになることとなった。ヨーギラス自信も不満はないようで、話し合いがすぐに終

結した。

それからしばらくして、ヨーギラスもシユンの秘密を知ることになる。

以後ピカチュウとヨーギラスの二匹でシユンが力を使うことをできるだけ防ぐよう動くことになった。また、彼の負担を減らすように生活面のサポートも多くなった。

ワカバタウンのポケモントレーナー、——シユン。

彼の理解者は家族でもなく親友のゴールドでもなく、何よりも傍にいる彼のポケモン達なのかもしれない。

## 第九話　V S イシツブテ　成長の兆し

シユンがラプラスを手に入れたことにより、彼の手持ちポケモンは合計六匹——ひとりのポケモントレーナーが手持ちとして連れ歩くことができる最上限数へと至った。六匹という数はトレーナーがポケモン達を平等に愛情を注ぐことができるバランスの良い数値であり、ポケモン協会が定めていることである。六匹のポケモンがいれば戦略も広がり、公式戦における全面対決——『フルバトル』も可能。個人のパーティを組めることになり、これによってシユンも一人のポケモントレーナーとして認められるようになる。数が多ければよいということではないが、それでも六匹のポケモンを連れ歩いているということ自体にもそれなりに意味があるのだ。

そのトレーナーのベストメンバーを象徴する手持ちポケモン。大抵の実力者達は必ずと言ってよいほど六体のポケモンを連れ歩いている。ジムリーダー、四天王、チャンピオン。各々が鍛え上げた自慢のポケモンをバランス調整の意味でも、またどんな戦いにも対応できるようにという意味でだ。

シユンがどんなバトルにも対応できるようになったことで、これから先の公式戦などでも多様なルールに挑戦することもできる。

……だがしかし、これは同時にシユンにとってこれから先の手持ちポケモンの交代や野生ポケモンの捕獲が容易ではなくなったことでも意味する。

現在ジョウト地方の全域にてデータ通信が不通となっており、ポケモン転送システムの使用も不可能となっている。つまり、ポケモンを捕まえたとしてもそのポケモンをパソコンから送ることもできず、逆に誰かに送ってもらうこともできないということだ。

それゆえにこれから先、シユンはシステムが回復するまでの間は今の六匹で凌ぐしかない。新たにポケモンをゲットしたら連れ歩くしなくなってしまうた。

果たしてこれがシユンに影響を及ぼすのか、どのようにかかわっていくのか……

俺は新たに手持ちポケモンに水タイプのラプラスを加え、再びヒワダタウンを目指してつながりの洞窟を進んでいた。正確に言えば来た道を少し戻っているのだが……まあ大差はない。

つながりの洞窟はバトルを仕掛けてくるようなトレーナーも少なかったために、地下から戻ってきてからは順調に道を進んでいる。

「フラッシュ」を覚えているピカチュウもいるために暗い道も何も問題はない。

10分ほど歩いたところで洞窟の内部へと一直線に進んでくる眩しい光が見えてきた。——つまり、つながりの洞窟の出口だ。ようやく暗闇から開放されて外に出れるということで、サツキさんも喜びから急ぎ足に変わる。俺も遅れないように駆け足で一気に光へ向かって行った。

「~~~~よかったッ！ 洞窟を抜けたわ！」

「つながりの洞窟、突破ですね」

「うん、無事に抜けられて良かったね」

先ほどまでのおびえた表情が嘘であったかのように笑顔を見せるサツキさんに、俺も一言「そうですね」と笑って返す。個人的にはあのサツキさんの表情をもっと見ておきたかったが……下手に刺激しないでおこう。

だがたしかに洞窟を抜けられてよかった。明るい人工の光、街灯の下で俺は安堵の息を吐く。すでに周囲は暗くなっており、時刻も夜の8時になるうとしていた。さすがに今日はジム戦もせずに休んだほうが良いだろうな。元々今日はヒワダタウンに到着することを目標としていたのだから、予定に支障はでないだろう。

「おおっ！ なんだ、君達も洞窟を抜けてきたのか？」

「あら、こんばんは」

「こんばんは。ええ、旅の途中でヒワダタウンに行こうと思っ  
ています」

すると出口付近にて小休憩を取っていたのであろう、山男やまおとこと出会った。

この人も今つながりの洞窟を抜けたばかりなのだろうか、顔に若干の疲労の色が伺える。しかしそれでも旅に慣れているのか、その疲れを隠し切るような力強い声だ。

「旅か。それはとてもすばらしい。……となると、君もポケモントレーナーなのかな？」

「ええ、これでもそれなりの実力を持っていると自負しますよ？」

「こう見えても彼、キキョウジムリーダーに勝利してジムバッジを手に入れたくらいですから」

自分のことのように自慢げに話すサツキさんの話を聞いて山男はさらに驚愕し、そして興味深そうな目で俺を見てくる。……一般トレーナーではジムリーダーの勝負を見たことさえないという人が殆どだし、この反応は当たり前か。

「これはこれは。それほどまでの実力とはな。なるほど。……どうだい？　ここで私と一つ勝負バトルをしていかないか？」

俺の実力を知りたくなったのだろう、山男は勝負を提案してきた。別に断る理由もないし、トレーナーである以上は申し込まれた勝負から逃げるわけにはいかない。サツキさんに許可を貰い、俺はこの山男——ツトムの勝負を受けることにした。

「いいですよ、それじゃあさっそく戦やりましょうか」

「ジムリーダーを破ったというその実力、見せてもらおうか！　洞窟を抜けたばかりとはいえ、まだまだ元気十分だぞー！」

そうして始まったシユンと山男のツトムの戦い。サツキはいつも通り少し離れた場所に立ってこの戦いを見届けることにした。

シユン達もつながりの洞窟でのバトルにおけるダメージは残っているものの、それは相手も同じこと。条件はほとんど同じと考えてよいだろう。

……だからこそ、この戦いでシユンがどれほど成長したのか——強いて言えば一般トレーナーとどれほど差ができたのかを見極める機会である。ポケモン達の、そしてシユン自身のトレーナーとしての実力を。

「イシツブテ、行けッ！」

「行つて来い、ヨーギラス！」

相手のツトムがまず最初に繰り出したのはイシツブテ。頑丈な石の体の持ち主で、硬い防御力と高めの攻撃力を合わせ持ったポケモン。

対するシユンが繰り出したのは切り札とも言えるヨーギラスだ。先のキキョウジム戦でこそ出番はなかったものの、これまでの戦いでレベルは十分なほどに上がっている。現在のシユンの手持ちメンバーの中では1, 2を争うほどだろう。

「イシツブテ、いわおとしッ！」

先に動いたのはイシツブテ。

周囲に転がっている石をつかみ、ヨーギラス目掛けて投げ込んでいく。しかも一つだけでは足りず、次から次へと反撃の機会を与えないように投げ込んでいく。

「いわくだきッで破壊しろ！」

それに対しシユンは回避の指令ではなく、——むしろ迎撃の指令を出した。その命に応じ、ヨーギラスは己が両手を握り締め、力を込める。

ヨーギラス目掛けてそれることなく一直線に迫りくる無数の岩。どんだん近づいてくるにもかかわらず……ヨーギラスはあせる事無く、構えた。

そして今にも命中しようというところでヨーギラスはその拳をまっすぐ突き出す。すると……ヨーギラスの拳は、岩を一撃で粉碎した。

「おおっ!？」

「……上手い」

ツトムとシユンの口から自然と驚愕と感嘆の声が生じる。

ヨーギラスは投げられた岩すべてを無駄のない最小限の動きで砕き、技を完全に防ぎきった。

「くっ……ならばイシツブテ、〴〵ころがる〴〵！」

その丸い球体を上手く利用し、イシツブテは高速で回転しながらヨーギラスへ突進を仕掛ける。

さすがにこれは〴〵いわくだけ〴〵で受け止めるには難しいだろう。もしも〴〵いわくだけ〴〵を使うならば、一撃で仕留めない限りはその回転によって生じる摩擦の威力にヨーギラスがやられてしまう。

だが考えている猶予はない。そう言っている間にもイシツブテはどんどん速度を増してヨーギラスに迫った。

「……動きをよく見ろよ、ヨーギラス」

「……」

それでもシュンに焦りの色は見えない。ヨーギラスも主人シュンの声を聞き、コクリと頷いて返した。

速度を増して突っ込んでくるイシツブテ。もはや今から回避行動をとっても間に合わないだろう。

「……よし、〴〵かみつく〴〵！」

——だからこそ、シュンは攻撃の指令を出す。防御ではなく攻撃の指令を。

ヨーギラスは体を横へ流し、イシツブテの体を自分の体から流して、その腕に噛み付いた。

「なっ!？」

「うそ。……あの速度を捉えたの?」

完全に両腕などの体が丸く収まっていたわけではなかった。わずかに丸くなった対面から出ていた右腕にヨーギラスは噛み付いていた。しかも〴〵ころがる〴〵ことで加速していたイシツブテの動きを見極めて、その威力を相殺して、だ。

ヨーギラスは大きな山一つを食べつくしてしまうというほどの大食いであり、そのために顎の力も発達している。その力は計り知れない。

「そのまま地面にたたきつけろ！」

これで完全に攻守は転換となった。接近戦ならばヨーギラスの十八番だ。自慢の攻撃力を見せる番である。

ヨーギラスはイシツブテを口に銜えたまま飛び上がり……勢いよく首を振るってイシツブテを地面へと叩きつけた。その威力は相当なものであり、たたきつけた地面は軽く凹みができていた。

「イシツブテ！ 大丈夫か!？」

ツトムが声をかけるものの、すでにイシツブテは戦闘続行は不可能——戦闘不能の状態だった。それを確認してツトムはイシツブテをボールへと戻す。

一撃で勝負を決めたヨーギラスはそれでも驕る事無く、シユンの賞賛に笑って頷いた。

(……確かに強くなっている。シユン君も、ポケモン達も……)

サツキはシユン達のそんな様子を嬉しそうに見ていた。

中でもシユンの成長具合が凄まじい。トレーナーとして求められている冷静な判断力、そして決断力。これは実践バトルにおいては中々求めがたいことではあるのだが、シユンは落ち着いて対応できている。もとよりシユンはある程度精神的に強い面があった。それがトレーナーとしての経験や知識も加わってさらに強化されている。

ひよつとしたら彼は相当なトレーナーに成長するかもしれない、とサツキは誰にも聞こえないよう心の中で呟いた。

「すごいな、まさか一撃でイシツブテを倒すとは……」

ツトムの言いたいこともわかる。イシツブテはその硬い防御が自慢のポケモンなのだが、それを一撃で倒したのだから。レベル差があるとしても、真つ向から力で捻じ伏せたのだからこれは賞賛に値することだ。

「ならば次はこいつだ、ワンリキー!!」

続いてツトムが出したのはかいきりきポケモンのワンリキー。格闘タイプで力が強いのが特徴的だ。岩タイプでもあるヨーギラスには相性が悪い。疲労を考えると退くのも一手ではあるが、この流れに乗ってヨーギラスに突破させるとい一手もある。果たしてどうするか——



「戻って来い、ヨーギラス。よくやってくれた」

——シユンが取った決断は交代。無理はさせないで他のポケモンに任せることを選んだ。

手持ちポケモンが六匹いるということにはこういう利点もある。一匹を引つ込ませてもまだ五匹もいるという安心感が生まれるということだ。多ければ良いというわけでもないが、それでも少ないよりは断然良い。

「次はお前だ、ポツポ！」

シユンの繰り出した2匹目はポツポ。タイプ相性からしても飛行タイプであるポツポが有利だ。セオリー通りに弱点を突く、望ましい戦い方である。

「ワンリキー、〃からてチョップ〃！」

「〃でんこうせっか〃だ!!」

ワンリキーが右手に力をこめ、走り出す。

ポツポも空中へと体を飛ばたかせ、一気に加速した。

お互いが接近戦を仕掛けた。間合いに入れば後は攻撃に移るするまでの『早さ』が鍵となる。

10メートル、5メートル、2メートル……お互いが詰めるために数秒でその距離はなくなる。

——もうすぐ射程範囲にはいる、そう確信したワンリキーは地面を蹴り上げて空中へ跳び、右腕を振り上げ、空中より迫るポツポの頭へと腕を思いつきり振り降ろす。

ドガツ！

……響いたのは一つの音だけ。ポツポがワンリキーの腹へと突っ込んだ音一つだけだった。

ポツポの方が逸早くワンリキーの体に突撃した。

「ワンリキー！」

「……ッ！」

直撃を受けたものの、ワンリキーは何とか体勢を整えて地面へと着地した。

……しかしやはりダメージはかなりのものようで、すぐに膝をつ

いでしまう。

「ポツポ、　“かぜおこし”！」

だからこそ、体勢を整えられる前にシユンは一気に勝負を決めにかかると。

ポツポは思いつきり自分の両翼を動かして強い風を起こす。足元がふらついているワンリキーは自分の体を支えられず、あつという間に体を持っていかれた。そのままワンリキーは後ろの木へと激突し……そして戦闘不能となった。

「……ワンリキー！　くそっ……」

「どうしますか？　まだ勝負を……」

「いや、わしのポケモンはこの二匹のみ。……彼の、勝ちだ」

「……試合終了。シユン君の勝ちね」

「まいった。君も、君のポケモン達も元気いっぱいだな！　それでこそジムバッジを手に入れただけのことはある!!」

サツキがツトムに歩み寄って勝負の継続を尋ねるが、返ってきたのは不可能という言葉。ツトムはワンリキーをボールへ戻し、シユンに一言かけて握手した。

これによりこの勝負は終了。シユンが勝利を収めた。しかもシユン達は相手の攻撃を何一つ受けていない。完全に流れを最後まで渡す事無く勝利した。

ツトムとのバトルを終えると、ツトムは一足先にヒワダタウンへと向かった。手持ちのポケモン達は皆戦闘不能となってしまったし、少しでも早くヒワダタウンに行つて休ませたかったのだろう。

「動きが良くなったわね、シユン君」

「そうですか？　自分ではあまり実感ないですけど……」

「そんなことないよ。ジム戦のときと比べても、ずっと成長しているわ」

ふむ、サツキさんがそう言うのだからそうなのかな。自分ではわ

からなくても、第三者の視点からのほうがわかるということがある。サツキさんはいつも俺の勝負を見て、動きを確かめてくれているのだから、きつとそうなのだろう。

「ありがとうございます。こいつらもバトルを繰り返してますから、もつと……うん?」

「ん? どうかした? ……あら?」

先ほどのバトルで活躍してくれたポツポとヨーギラスへと視線を移す。もつと強くなりますよ、と言おうとしたのだが、2匹を見た瞬間言葉が出てこなくなつた。そんな俺を不審に思つたのか、サツキさんも視線を2匹に移す。そして俺と同じように固まつた。

「どうした、お前達?」

「これってひよつとしたら……」

二匹の体が極度に震えていたのだ。両腕(ポツポは両翼)で体を抱え、震えを抑えようとしている。

先ほどのバトルでの疲労とか、その後の技の後遺症とかでは断じてない。たしか、これはあの時と同じ……

「サツキさん、この状況はヨーギラスとポツポが……」

「うん、シユン君。ポケモン図鑑を出してみて!」

「は、はい!」

サツキさんに言われるがまま、俺はポケモン図鑑をすぐさま取り出して開いてみせた。

図鑑には『……おや!? ポツポの様子が……!』『……おや!?』

ヨーギラスの様子が……!』と表示されている。これはやはり、あの時と同じ現象だ……!」

「あの時、マダツボミの塔でのヒノアラシとまったく同じ!」

「……『進化』よ!」

数多くの戦いを経験することである一定の経験値を得たり、一定の条件をクリアすることでポケモン達が成長し、その姿を変える現象。

——『進化』。俺のヒノアラシがマグマラシに進化したように、今またポツポとヨーギラスもその姿を変えようとしている。

……時間にしてわずか数秒。

その数秒の間に、ポツポとヨーギラスは『進化』を終えて、その姿を変えていた。

「……進化、した」

「……ここまでレベルも上がっていたってことね」

「……『ピジョン』。そして『サナギラス』」

新たに生まれ変わったポケモン達の姿を確認した後、図鑑にもう一度視線を移す。画面には『おめでとう！ ポツポはピジョンに進化した！』『おめでとう！ ヨーギラスはサナギラスに進化した！』と表示されている。

ポツポがピジョンに、ヨーギラスがサナギラスへとそれぞれ姿を変えていた。変わったのは何も姿かたちだけではない。ヒノアラシがマグマラシへ進化したときと同じように、その能力も大幅に成長していることだろう。

しかも今回は二体同時にだ。これほど喜ばしいことはない。仲間が本当に強くなっているということの証でもあり、ここまでの旅が本当に意味があるということを実感できるのだから。

「……そっか。これがお前達の新たな姿なんだな」

「シユン君。やっぱり、少しさびしい？」

「いえ、そんなことはないですよ」

完全にはないといえば嘘になる。だけど、俺はサツキさんの問いを否定した。

今までの姿に何一つとして思い入れがなかったわけではない。初めて出会ったときの姿がポツポとヨーギラスであったわけだし、ここまですごして慣れているということもある。特にヨーギラスと過ごした時間は長かった。

……それでも、こいつらが俺のポケモンであるということには何も変わらない。姿が変わっても俺たちの関係が変わってしまおうということは何一つないのだから。だから喜ぶことであっても後悔するようないことではない。

「これからまた、改めてよろしく頼むな。——ピジョン、サナギラス」  
二匹を胸元へと呼んで、そして抱きかかえる。以前よりも大きく成

長したな。前までは軽く収まっていたというのに、今ではもういつぱいの状態だ。なんだかもうすでに懐かしく感じてしまう。

——本当に頼もしくなったな。大きくなった体を見て、そう思える。こいつらとならこれから先もどうにかなるのではないかと思えてくる。

……いや、違うな。どうにかなるのではなく、俺たちの手でどうにかするのだから。自分達の力で道を切り開くのだから。

「……それじゃあ、落ち着いたところでヒワダタウンへと行きましようか」

「ええ。行きましよう」

ピジョンとサナギラスをボールへ戻し、俺たちは再びヒワダタウンに向かって歩き出した。

……大丈夫。またジムはあるけれど、俺たちならなんとかできる。そう信じる。そう信じよう。

一人じゃない。頼れるパートナーサツキもいる。頼れる相棒達ポケモンだっている。俺には、仲間がいるんだ——

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：1個（ウイングバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv18

ピジョン♀ Lv18

ピカチュウ♂ Lv20

サナギラス♂ Lv30

サンド♂ Lv15

ラプラス♀ Lv32

レポートに書き込みました!!

## 第十話 V S スターミー 欲への誘惑

俺たちがつながりの洞窟を抜けてヒワダタウンに着いたころにはすでに夜の9時を過ぎていた。

時間が時間であるために、街の散策・ならびにジムリーダーの捜査は明日行くとサツキさんと話して決めた。今日泊まるホテルを見つけた後はゆつくり食事を取って部屋へと戻る。

俺とサツキさん、二人とも同じ部屋に。——そう、同じ部屋に。

「～～～♪」

「……」

「～～～♪」

「……………くッ！」

風呂場からはサツキさんの陽気な鼻歌がリズム良く聞こえてくる。少しでも思考を別のことへとまわしたいというのに、俺の努力をひたすら妨害するような行為だ。果たして彼女は壁一つはさんだ場所に思春期の男がいるということを知っているのだろうか？ まさか俺のことを男として認識していないとか、そういうことではないだろうな？

そもそもなぜこんなことになってしまったのか。

昨日泊まったキキョウシティのホテルでは二人とも部屋は別であった。しかしながら、マダツボミの塔で俺が約束の時間を破ってまで修行をしてきたことで、サツキさんの中の俺への信頼が薄れてしまったようだ。『もう勝手に抜け出さないように』、ということで二人とも同じ部屋に泊まることになったのだ。

……だがしかし、そういう理由がわかっているとしてもそれでも男として本能的に反応してしまうことがあるわけで。扉の先に裸でシャワーを浴びている理想的な女性がいるという事実を考えると……うん、精神的に毒だ。悪い意味ではなく、むしろ良い意味で。

「はあ……」

自然とため息がこぼれてくる。幸せがどれほど逃げることだろう。そういう風に考えてしまう自分が嫌になってくる。ヒワダタウン

のジムリーダーのことも考えたいというのに、このままではろくに先のことも考えられないので一度部屋から出て外の空気を吸いに行きたいのだが……それさえ許されないのだから困ったものだ。

俺は顔を上げて視線を部屋の出口へと向ける。出口に立ちふさがっている一匹のポケモンに向けて。

「……………」

「うん、詰んだなこれ」

一つしかない部屋の出口ではサツキさんのスターミーが待機していた。無言で俺に圧力をかけている。

サツキさんはスターミーに、『俺が部屋から出ようとした際には、怪我をしない程度ならば攻撃をしても構わない』と指示している。ゆえに部屋から出ようにも出られないのだ。少しでも不審な動きを見せたならば、俺は瞬く間に制圧されてしまうだろう。正直な話、さつきからスターミーがひたすら俺をにらみつけていて怖い。抜け出そうとしたら一体どんなことが起こるのか、想像することさえ恐ろしい。

……というかこいつ、本当に俺のことを監視しているんだよね？  
今さらだが疑問に感じてしまう。

なにせスターミーは自分の感情を顔にださないの、こいつが一体どういう風に思っているのかさえわからない。一步もその場から動かないがために、立ったまま寝ているのではないかと疑ってしまうほどだ。しかしだからこそ、何を考えているかわからないからこそなおさら恐怖を沸き立たせている。

「なあ、ピカチュウ」

俺はボールから出している唯一の手持ちポケモンであり、俺の長年のパートナーであるピカチュウへと声をかける。

「俺をこの部屋から出してくれるよう、スターミーを説得してくれないか？」

多分まともに戦ったの強行突破は無理だと思うので、説得を試みる。

ピカチュウはスターミーを一瞥した後、俺に視線を向けてしつかりと首を横に振った。『無理』だと否定の反応をした。……おい、説得す

る前からあきらめるなよ。お前は仮にも俺のチームの切り込み隊長だろうが！

「シユンくん、上がったわよ」

「あ、はい……」

などとピカチュウを少しばかり説教しようと考えているとサツキさんの声が聞こえてきた。説教は後にしよう。

その声に反応して顔を上げて……そのまま硬直した。風呂上りだということをしぼし忘れていたために直視してしまった。

……『風呂上り』というシチュエーションの凄さを実感した瞬間だった。

白いパジャマの胸元のボタンが開放されており、魅了するように姿を現している谷間や、風呂上りのためにほのかに赤くほてった頬。水分を吸ってしっとり濡れた蒼い髪が色っぽく映る。

「お風呂も入れなおしておいたから、シユン君も入ってきて。明日も忙しいだろうからゆっくり暖まって、体を休めてね」

「ありがとうございます！」

「？……うん。それじゃあ私は待つてるから」

俺は感謝の意をしっかりとこめてお辞儀をする。今の姿にはそれだけの価値があった。逆にサツキさんは俺がお礼を言ったことに不思議がっているが、気を使ってくれたと思っっているのだろう。下手に探られることなくすんでよかった。

あまりサツキさんを遅くまで起こしているというのも悪いので、俺はすぐさま風呂へと向かう。

「……はあ。生き返る」

体がお湯につかると旅の疲労がどんどん抜けていく。今日もキョウシテイからヒワダタウンと中々の距離を歩いた上、道中のバトルもあったのだ。これでは疲労もたまつて当然だ。

しかし……

「……ここって、つい先ほどまでサツキさんが入っていたんだよね？」  
……よくよく考えたら、これも結構凄い状況なのでは？

サツキさんと同じ部屋に泊まって、そのお風呂で、あのサツキさん



がつい先ほどまで体を洗っていたという……

「うおおおおおおお!! バカか! バカか、馬鹿なのか!! 何を考えているんだ俺は?!」

サツキさんの裸の想像図を完成させた己の思考力を今すぐ削除してしまいたい。

……一体何を考えているんだ、俺は。疲れで思考までおかしくなっているのだろうか。

駄目だ。こういう時はまともなことさえ考えられない。本当にさつさと上がって今日はもう寝るとしよう……

男の風呂シーンを描写したするなど、きつと誰も望んでいないと思うのでシュンの以降のシーンはすべてカット。見たかった人はご想像にお任せするが、決して望んでいるシーンなど皆無だったと思う。

場所を移してサツキ。

風呂場でシュンが馬鹿らしく騒いでいる中、彼女は自身のパソコンを通じてとある人物と連絡を取っていた。

画面に映りだされているのは白衣に身を包んだ研究者であり、今回は彼女に協力を要請した張本人。——オーキド博士である。実は彼女は旅が始まってから幾度もオーキド博士とは連絡をとっており、今日もこうして現状を報告しているのだ。

『……そうか。無事にヒワダタウンまで着いたか』

「はい博士。ここまでは仮面の男、ならびにロケット団残党との遭遇もなく無事に旅を続けています」

『ならば一安心じゃな。……だが、くれぐれも油断しないでくれ。特にヒワダタウンとその周辺は警戒を怠らずにな』

「わかっています。シュン君にも後で伝えておきましょう」

警戒しているのは仮面の男だけではない。彼が従えているという巨大な犯罪組織・ロケット団も警戒対象に入っている。

ヒワダタウンはつい最近、復活したロケット団残党達が現れたばつ

かりだ。この地で暮らしているヤドン達を捕らえ、彼らの尻尾を切り落とし、その尻尾を販売しようと計画していたのだ。ヤドンの尻尾は珍味で売れば高価で引き取ってもらえる。ロケット団は復活したばかりだったので、この財源を復活の足がかりにしようと試みたのだ。

最もその結果としてヤドンの密漁には成功したものの、その後に見られたシルバーとその手持ちポケモン・リングマのために計画は破綻し、残党達は全員警察に引き渡されたのだが。

さらにヒワダタウンの西にそびえるウバメの森。この森があることも警戒の念を強めさせる。

ウバメの森はゴールドが初めて仮面の男と遭遇した場所であり、その実態と強さを知らしめた場所である。ウバメの森では仮面の男が放ったゴースにより、迷い込んだトレーナーとそのポケモンのカモネギが操られてしまうという事件まで起こった。

この街にもジムリーダーがいるがために警戒して損はない。シユンもわかつてはいるだろうが、改めて注意を促しておかなければならないとサツキは内心思った。

『よろしく頼むぞ。……とここでサツキ君。話は変わるが君に一つ、話しておきたいことがある』

「何でしょうか？」

オーキド博士の顔が真剣なものへと変わる。

一度瞳を閉じて再考した後、決心して顔を上げた。それでもまだその表情からは迷いが見える。

『本当ならばわしから話してよいことではないだろうが、これから先のことを考えるとそうも言ってもらえんとおもってな。

君には話していなかったが……彼の、シユン君の力のことじゃ』

「……ワカバタウンに伝わる力のことですか」

「なっ？ 知っておったのか!？」

オーキド博士は驚きを隠さずにサツキに問いかける。旅立ちに当たって博士はサツキにはシユンが特別な力を持っていることなども話してはいなかった。それは自分から話して良いことごとではないと感じていたからだ。だからこそ彼は旅を経験していない、普通の

トレーナーとしか説明をしていなかった。

だがしかし、シユン自身がそんな大事を打ち明けるとはオーキド博士は思ってもいなかった。力を見せるような機会があったとしても、上手く誤魔化してあしらうものとはばかり思っていた。

「シユン君が私に話してくれましたよ。今日、彼の決意と一緒に」

『……そうか。彼が打ち明けたというのか』

「ええ。少しだけですが、彼の考えていることもわかった気がします」それは信頼の証でもある。シユンが自分のことを詳しく話さないのは他人に知られてしまうことを恐れているということ、そして何より簡単に話して良いことではないためだ。

その秘密を共有するということは、シユンが並々ならぬ信をおいてくれたからに他ならない。

『ならばサツキ君。できるだけ、彼には力を使わせぬように、な。万が一の時を除いての話じゃが』

「はい。〴〵心配なさらずに。……その『万が一の時』のために、私がいるんですから」

サツキは胸を張ってそう答える。その言葉を聞いてオーキド博士も満足そうに頷いた。

その後は今後のシユン達の旅の方針の打ち合わせ、ならびにサツキたちが調べた情報と、ポケモン協会ですら独自に調べている仮面の男についての調査の情報交換を行った。

結論を述べると、今日は事件解決に導くだけの情報はなかった。仮面の男の候補が一人減ったということが一番の情報源だ。

オーキド博士の「引き続きよろしく頼む」の言葉で本日はお開きとなった。

その後シユンが風呂から上がってきたときに「誰かと連絡をとっていたんですか？」と問われたが、サツキはただ「少し調べ物をしていただけよ」とだけ答えた。

もうすぐ日付も変わってしまうため、二人は明日のことは明日話すということで早々に寢床に入った。

……念のため言っておくが、二人とも別のベッドにそれぞれ入って

おり、スターミーのシユンの監視は寝ている間もずっと続いていた。シユンは後にこう語ることになる。「あの日ほど寝付けない夜はなかった」と。

——翌日の朝。

現在の時刻は午前十時。サツキさんと一緒にポケモン達も連れて朝の食事を取っている。……今日はサツキさんの寝起きの悪さも昨日ほどではなかったので助かった。あくまで昨日ほどではなかった、のレベルだが。

まあ、『目が覚めたらなぜか同じベッドで寝ていて、目の前で絶世の美女が裸で寝ていた』とかそういうレベルのハプニングが起こったら俺は終わるな。いろんな意味で。

「それじゃあシユン君。昨日は話せなかったから、今日の予定を今から言おうと思うけど……」

「はい。ヒワダジムジムリーダー、ツクシの調査ですよね？」

ヒワダタウンのジムは虫タイプのエキスパートの専門家、ツクシがリーダーだ。

……こいつも相当怪しいんだよな。なにせ『ウバメの森』という仮面の男が活動していた場所がすぐ近くのわけだし。

おまけにヒワダタウンはそれほど活発した街ではないために潜伏する場所としても中々便利のように思える。事実、ロケット団は警察に見つかる事無くこの地で活動をしていたわけだし。(結果的には全員捕まったらしいが)

「ええ。でも、ジムリーダーを調べるのは午後になってからにしましょう」

「え？ 午後になってから？ 別に俺は構いませんが……なぜですか？」

しかしサツキさんは調査は後で構わないと言う。

近辺の調査からはじめるということだろうか？ たしかにヤドンの井戸など調べるような場所はあるだろうが、そういう場所はすでに

事件現場として警察が調べ終わっているはずだし、これと言った新しい発見は見当たらないと思うのだが……

「もちろん、ジム戦に向けて、そしてこれからのためにシユン君の特訓をするためよ。……私が教えてね」

「……え？」

サツキさんが教える？ 俺に特訓を？

言っている意味がよくわからず、しばし硬直している間にサツキさんは席を立って先に部屋へと戻っていった。

「準備をちゃんとしておいてね」と言われたものの……今までサツキさんの実力なんて見たことなかったからな。想像もつかない。果たして俺をどんな風に鍛えてくれるのだろうか。

朝食を取り、荷物をまとめてサツキさんと共にホテルを後にする。

俺達はヒワダタウンからつながりの洞窟方面へと少し戻って、33番道路の平地へと来ていた。ここならば人も少なく、障害物のようなものもほとんどないために思いつきり体を動かすことができる。

「それじゃあまず今日の内容を説明するんだけど。……まずシユン君、そしてポケモン達により幅広い戦闘バトルに慣れさせること」

「……と言いますと？」

「今までの戦いについて振り返っておくと、大抵は相手のレベルが低いことが原因だったけれど接近戦がメインだったわ。キキョウジムのハヤト君との戦いでもそうだけど、シユン君はあまり遠距離からの攻撃への対処ができていない」

「……はい」

たしかに言われてみると納得する。

特に序盤のほうでは相手のトレーナー達もコラッタやイシツブテ、ホーホーなどと言った近接戦闘が主流メインのポケモン達が殆どだった。それゆえにリーチの長いアークボックに襲われたときには対応に戸惑って攻めあぐねたし、ハヤトとの戦いにおいても相手が近づくまで

踏ん張るしかなかった。『かぜおこし』の際には実質指示を何一つとして出せていなかった。対応できたのはマダツボミなど、レベルが低く、相性が良い相手だけだった。

まだそういった戦闘場面に慣れていない、対応の仕方がわかっていないというのは最もな意見か。……なるほど、やっぱり自分だけでは全然気づけないようなことがあるんだな。今までは考えてもいなかった。

「だから、今日はそんな攻撃にどう対応していくかを試してみたいの。

——スターミー、サイコネシス」

サツキさんの指示を受け、スターミーの中央の核が赤く光り輝く。

とたんにスターミーの周囲の空間に念の影響が広がっていった。

地面から無数の小さな土の塊が続々と宙に浮き始めたのである。

「……地面に、強力な念力を送っているのか？」

本来『サイコネシス』は相手のポケモンに直接念力を放ち、攻撃する技なのだがこんな使い方もあるのか。

その操っている塊の数は20、いや30。……いやもつと上なのかもしれない。これだけの数を同時に操るなんて……相当なレベルだぞ!?

「シユン君、ポケモンを出して。そしてこれを防ぎきって……ゴー！」

「ッ!? 出て来い、サナギラス! “いわくだけ” だ!’’

とつさの判断でボールからサナギラスを繰り出す。

戦法は昨日の戦闘のときと同じ、相手の攻撃の完全な相殺だ。

……だがしかし、念の力エスパーに操られた土の塊たちは異様な動きを見せる。直線的な動きだけではなく、縦横無尽にその軌道を変化させる。ここまで動きを正確にコントロールできるものなのか!?

その結果、すべてを防ぎきることなどできるはずもなく、サナギラスの体にくっつかの塊がヒットした。あくまで特訓ということ直撃させずに再び元の位置に戻しているあたり、その実力を伺える。だが本番だったら今の攻撃だけでサナギラスは戦闘不能だろうな……。

「そうじゃない! 相手が遠距離からの攻撃を仕掛けている上に、動きが読みづらく逆に相手の動きを制限させるエスパーよ。それなら

ばまずは確実に当てることを優先するの。威力が弱くても技のコン  
トロールがしやすく、ある程度遠距離への攻撃が可能なポケモンを  
！」

「は、はいー」

サナギラスをボールへと戻し、サツキさんに言われたとおり遠距離  
の戦闘にも対応しているポケモン達を出す。マグマラシ、サンド、ラ  
プラスの三体だ。サナギラスにも「いわなだれ」などがあるものの、  
あれはこういう場面では使いづらい。

ボールからポケモンが出たことを確認すると、再び土の弾丸がこち  
ら目掛けて放たれる。

「マグマラシ、ひのこ」！ サンド、スピードスター」！ ラプラ  
ス、みずでつぼう」！

マグマラシの口から無数の炎の球体が、サンドの体からは星型の形  
をした光のエネルギーの結晶体が、ラプラスの口からは水流が勢いよ  
く発射される。

それぞれの技は弾丸へと進んで行き、命中した。攻撃を受けて形を  
失った土はぼろぼろに崩れていく。

「おおっ！ よっしやー」

「そう。相手に動きを読まれる前にこちらも遠距離く中距離から攻撃  
を放って相手の技を打ち消す。そうすればもし失敗したとしても対  
応にそれほど遅れることはないからね」

「わかりました！ ありがとうございます！」

これはまたいい勉強になったな。攻撃の対処法というのはその場  
で思いつくというのにはさすがに発想力の限界がある。大抵は今ま  
での戦いや経験の中で培ってきたものが問われるようなものだ。だ  
からこそ、こういう風に実技で教えてもらうのは本当のためになる。

「それじゃあ、次に行きましょう！」

「はいっ、お願いします！」

再びポケモン達を構えさせて臨戦体系へと移る。

……なんでだろう。勝負が楽しくなってきた。こうやって何も敵  
のこととかを考えずにすごせればよかったのにな。

「……それじゃあ、少し休憩を入れましょうか。10分くらい休んだらまたはじめましょう」

「はい。わかりました……ふう」

昼食をはさんで二人の特訓は続けられた。

ある意味ジム戦並に、下手すればそれ以上に集中力を費やすためにシユンもポケモン達も疲弊していた。

そんな彼らを見守るサツキはそうでもない。あまり自身は動いていないということもそうだが、何よりも慣れているということが大きいのだろう。

そんな中、一件のメールがサツキのポケギアへと届いた。

送り主とその内容を確認するとサツキはシユンに歩み寄った。

「ごめんねシユン君。少しだけ私ヒワダタウンに戻るね」

「え？ 何かありましたか？」

「私用で行かなければならないところがでてきたの。スターミーは置いていくから、私が戻ってこないときは特訓を続けておいて」

「……わかりました」

個人的なこととなれば深くは聞かないほうがよいと判断したシユンは素直に頷いた。

サツキは「ごめんね」と言うとヒワダタウンへと戻っていく。

……サツキが向かった先。

それはヒワダタウンに住む一人の職人の家だった。様々な種類の木に生える『ぼんぐり』から特殊ボールを作っている、ガンテツという男が住んでいる。

「失礼します。……お久しぶりですねガンテツさん」

「うん？ おお君か。よく来たな、サツキよ」

家に入るや否や、ガンテツはサツキを出迎えた。

ガンテツはよほどの実力者でない限りは自分の作るボールは扱えないがためにボールを作ることはないと言われているが、この反応を



見る限りはサツキを実力者として認めているようだ。

「頼まれていたボールならできておるぞ。……ほれ、これじゃ」

「いつもありがとうございます」

籠の中に入った数個のボールを手に取る。

ボールのどれもが一級品の輝きを放っている。歳を取ろうともその技術は衰えを知らないようだ。

「ところでオーキドから聞いたのじゃが、今はジョウト地方を連れと共に旅しているそうだな。……その男は今どこにいる?」

「今彼は特訓の最中ですよ。呼んできますか?」

「はっはっは。よいよい、君が共に旅をしているということはそれなりの見所があるということじゃろう。それくらいは見ずともわかる」「ええ。……まあそれに、彼はあまり自分からポケモンを捕まえようとはしないので、どちらにせよガンテツさんと会っても話が合わないかもしれません」

「なんじやつまらん。この前あった坊主もそうだったものの……最近の若者にわしのボールを使えるものはおらんのか?」

「ガンテツさんの求める基準が高いんですよ。もう少し甘く見積もってくれても良いのに」

もつともなことを言われて再び笑い始めるガンテツ。それを見てサツキも微笑を浮かべた。

職人として多くのトレーナーを見てきた彼にも、やはりどこか譲れない信念のようなものをもっているはずだ。

「……ところで今日はもう一つだけ、聞きたいことがあってまいりました」

「どうした? そんなに改まって」

「あなたが常に持ち歩いているという『特殊玉作成秘伝の書』。その内容について、お尋ねしたいのです」

ガンテツにそう問い詰める。

彼女の顔が穏やかなものから急に深刻なものへと変わっていった。

彼女が求めているものと彼女の表情から、ガンテツも突如その表情を重苦しいものへと変えていた。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：1個（ウイングバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv19

ピジョン♀ Lv18

ピカチュウ♂ Lv21

サナギラス♂ Lv30

サンド♂ Lv17

ラプラス♀ Lv33

レポートに書き込みました!!

## キャラクター・ポケモン紹介

シユン

【プロフィール】

性別：男

誕生日：5月20日

星座：牡牛座

年齢：14歳

血液型：O型

瞳の色：茶色

家族：父・母

出身地：ジョウト地方・ワカバタウン

好きな色：青色

好きなことわざ：情は人のためならず

持ち物：ポケモン図鑑（2代目）、ポケギア、トレーナーカード

代名詞：???

好きなこと：後輩、ポケモンの世話

嫌いなこと：理不尽な暴力、裏切り、卑劣な手段

【人物】

茶髪のショートヘアで中性的な顔。年齢の割には高く伸びている身長が印象的な少年。

人懐っこい性格で、彼の地元・ワカバタウンでは人々から好かれている。

ゴールドとは古くからの友人であり、彼からは『シユン先輩』と呼ばれ慕われていた。シユンもゴールドのことを『世話の焼ける後輩だ』と言いつつも、自分を慕ってくれる彼のような存在がうれしかったらしい。一人っ子であるが、できれば弟か妹がほしかったとのこと。

ワカバタウンに伝わるとある力を持っているものの、その事実を知るものは数少ない。現時点で彼が力を所持していることを知っているのは父・母・ゴールド・オーキド博士・ウツギ博士・サツキの6人

だけである。(ウツギ博士とサツキは力の詳細を知らなかったものの、第七話にてサツキはシユンから、ウツギ博士はオーキド博士からそれぞれ説明を受けた)

今回は後輩であり大切な友達であるゴールドの危機を悟り、旅に出ることを決意した。

ポケモントレーナーとしてはレッドやグリーン達と比べると実力・経験不足は否めないが、バトルを通すことで次々と知識や技術を身につけている。またシユン自身も身体能力や反射神経などが優れており、能力を最大限利用して危機を乗り越えている。

#### 【所有ポケモン】

ポケモンの多くは彼が救出・保護したポケモン達であり、彼が進んで手に入れたポケモンは数少ない。ニツクネームはつけずにそのまま呼んでいる。

#### 【手持ち】

マグマラシ♂

ヒノアラシ↓マグマラシ

技：『たいあたり』・『ひのこ』・『えんまく』・『でんこうせっか』

初登場：『第二話 vs ヒノアラシ 迫る決断、パートナー出現』

元々は別のトレーナーのポケモンであったが、捨てられてワカバタウンを彷徨っていたところをウツギ博士に発見された。その後シユンが旅立つにあたって彼の手元へと渡った。

マダツボミのとうでの修行の際、チームの中でいち早く進化を経験してマグマラシと成長した。得意の炎技で敵を燃やし尽くす。

ピカチュウ♂

技：『でんきショック』・『でんじは』・『フラッシュ』・『でんこうせっか』

初登場：『第一話 vs エレキッド もう一つの始まり』

シユンが初めてゲットしたポケモン。シユンが幼いころにカントー地方に旅行に行っていたときに、傷ついて倒れているところを偶然発見されて治療された。チームの切り込み隊長のような存在。共

にいた時間が一番長いだけあってシユンからの信頼も厚い。得意の電気技は攻撃手段以外にも多彩な使い方で放たれている。

ピジョン♀

ポツポ↓ピジョン

技：『たいあたり』・『かぜおこし』・『すなかけ』・『どろかけ』・『でんこうせっか』

初登場：『第三話』vsアーボック 急襲、明かされる力』

29番道路で突如出現したアーボックによって負傷してしまったところをシユンに助けられた。助けてくれた彼に恩義を感じ、共に戦うことを望んで自ら彼の手持ちに加わった。

旅が始まってからシユンが捕まえた初めてのポケモンである。空中戦で活躍する貴重な飛行ポケモン。

その後、数度の戦いを経てピジョンへと進化した。

サナギラス♂

ヨーギラス↓サナギラス

技：『いわおとし』・『いわなだれ』・『かみつく』・『いわくだけ』

初登場：『第一話』vsエレキッド もう一つの始まり』

メンバーの中では一際レベルが高く、戦闘バトルでは切り札のような存在。肉弾戦が得意で物理攻撃がメインである。

元々はシロガネ山に住んでいたのだが、ワカバタウンに迷いこんでしまったところをシユンに介抱されてからは、彼の手持ちポケモンに加わっている。ピカチュウに次いでシユンとの付き合いが長い。

旅を始めて幾度の戦いを経験した結果、サナギラスへと進化した。

サンド♂

技：『どくばり』・『スピードスター』

初登場：『第六話』vsサンド 読めぬ心、サツキの神秘』

世にも珍しい色違いのサンド。本来の体色は黄色だが、彼は緑色に輝く体色をしている。地面を掘ることに關してはサンドにお任せあれ。

手持ちポケモンの中では珍しく、シユンが自分からゲットしたポケモンである。

また、サンドをゲットしたことにより、手持ちのうち三体のポケモンがねずみポケモンとなった。（ねずみポケモン・サンド、ねずみポケモン・ピカチュウ、ひねずみポケモン・ヒノアラシの三体）  
ラプラス♀

技：『うたう』・『なみのり』・『みずでっぽう』・『れいとうビーム』

初登場：『第七話』 v s ラプラス 闇夜での述懐、覚悟と約束と』  
水上を優雅に進む大型の水タイプ。人を背中に乗せるのが大好き。つながりのどうくつを住みかとして群れですんでいたが、シユンのパーティに加わった。戦いでも多彩な技を駆使して大いに貢献している。

### 【控え】

エレキッド♂

技：『でんきショック』

初登場：『第一話』 v s エレキッド もう一つの始まり』  
ワカバタウンで暴れていた野生ポケモン。シユンがバトルを通してゲットしたのは実はエレキッドが初めて。

旅立ちにあたってピカチュウとタイプが重なってしまったために、母の助言もあって家に残ることになった。一度恐怖を覚えてしまったためか、母にはまったくと言っていいほど頭が上がらない。

……なお、噂によるとシユンの母の手によって現在急激な成長を遂げているとのこと。

### 【戦い方】

手持ちのパワー不足を補うように、手数や巧みな作戦で相手を翻弄する。

基本的には無理に強敵相手に真っ向から立ち向かうような無謀なまねはせず、状況によつては撤退を選ぶなど広い視野を持つ。

サツキ

### 【プロフィール】

性別：女

誕生日：7月16日

星座：蟹座

年齢：16歳

血液型：A型

瞳の色：赤色

家族：???

出身地：カントー地方・マサラタウン

好きな色：静かな色

好きなことわざ：初心忘るるべからず

持ち物：ポケギア、トレーナーカード

好きなこと：料理、子供

嫌いなこと：組織、悪事

### 【人物】

オーキド博士の招集に応じ、シユンと行動を共にする謎多き女性。美しい蒼い髪・紅い瞳。容姿も整っており、シユンを一目で虜とした。(シユンは決して女性に弱いわけではない)

一年前の四天王によるカントー襲撃の際にも事件の收拾のために動いていたとのこと。

マサラタウン出身であるが、レッド達カントー凶鑑所有者が活躍していた際にはカントーを離れていたために彼らとの面識はない。ゆえに凶鑑所有者の中ではシユンが初めての出会いである。

落ち着いた物腰と世話好きな性格から、シユンからは純粹に好かれている。彼女もシユンには興味を持ってしている様子。

しかし心配性な性格でもあり、それゆえにあまり心配をかけすぎると激怒することもある。

一見なんでもできる万能な人のようだが、朝が苦手な寝起きが悪いなどの弱点も存在する。

### 【所有ポケモン】

物語開始時点ですでに手持ち六体が揃っており、本人曰くそれなり  
の実力があるとのこと。

めったに手持ちポケモンを出すことはなく、基本的には全員がボ  
ルの中で待機している。

【手持ち】

スターミー

技：『なみのり』・『サイコキネシス』・『リフレクター』・『10まんボ  
ルト』

初登場：『第七話』 v sラプラス 闇夜での述懐、覚悟と約束と』

サツキが初めて明かした手持ちのポケモン。宙に浮かび、人を体  
に  
乗せて高速で動く。

強力な念エスパーの力を完全にコントロールしており、シユンのチームの特  
訓相手を任されることもある。



## 第十一話 VS バタフリー 動き出す悪意

「……『特殊玉作成秘伝の書』じゃと？ はて、一体君が何を言っているのかよくわからんのだが……」

「とぼけないでください、ガンテツさん。これでも私は真面目に話しています。それ以上とぼけるといふのなら、私も少し聞き方を変えなければなりません」

ガンテツはさも知らないとばかりに呆けた声をだすが、それをサツキは許さない。声にはまるで戦闘時に放つかのような覇気が一時見受けられた。そのサツキの本気の様子を察し、ガンテツは静かにため息を吐く。

すでに確信を持った上での問い。こうなるとサツキはとことん深入りするだろう、ガンテツが自身の書に書かれている内容の全てを話すまでは……

——『特殊玉作成秘伝の書』。これはガンテツが、長年の月日をかけて磨いてきた己の技術を一冊の書に書き記したものである。その内容は市場に出されているような一般のモンスターボールとはまったく違った職人専用のものだ。作れる者もまた、今のところガンテツだけである。

ガンテツが自分が認めたトレーナーのみに託す特性のボール。『スピードボール』・『レベルボール』・『ルアーボール』・『ヘビーボール』・『ラブラブボール』・『フレンドボール』・『ムーンボール』。これら全ての特珠ボールの製法が記されている。ボールにはそれぞれ特殊な効果があり、ポケモンの捕獲ゲットの際にトレーナーの役にたってくれるだろう。

この書をガンテツは常に肌身離さずに持ち歩いていた。自分自身がこれまで築き上げてきた技術の流出を防ぐため、そしてなによりもその書に他のボールと共に書き込まれているとあるボールの存在を死守するために。

「……なぜ君がそれを求める？ 書の内容を知ることでは君は何かを得るのか？」

「はい。かつてここヒワダタウンのすぐ西に広がる森、ウバメの森で事件があったのはガンテツさんの耳にも聞き及んでいるでしょう。そのことで私も調査をしていたのですが……その地には伝説のポケモンの一匹が祀られているとわかりました。そして、そのポケモンを手にするためには『特殊なモンスターボール』が必要である」ということも

「……それで？」

「それならば、ガンテツさんほどの優れたボール職人ならば必ず情報の一つを握っていると考えました。特にあなたはご自身の職人としての技術を誰よりも誇りとし、そして弟子の一人もとらず秘密裏に隠している。

そしてあなたが常に持ち歩いている、誰にも見せることのない秘密の書。……ここまですれば誰であろうと、自然と答えは出てくるでしょう」

——ガンテツは必ずや、サツキが求めている情報の答えを知っているだろう。

正論であるがゆえにガンテツは反論の言葉の一つも見つからない。出ようとした言葉は完全に身を潜め、再びため息を一つ吐いた。

ウバメの森で起こった事件のことはガンテツも良く知っている。地元の近くで人が襲われたのだ、知らないほうがむしろおかしい。しかも襲われたトレーナーの一人がつい先日会ったばかりの少年だというのだからなおさらだ。

そして、ウバメの森に伝わる伝説のことも同じだ。地元で古くから伝えられている伝説のポケモン、『ほこらの守り神』とさえ謳われているほどのポケモンだ。その情報については誰よりも知っているという自負がある。

そしてだからこそこうして困っている。……それを果たして今彼女に言って本当にいいのかどうか、ガンテツの脳裏を一途の不安がよぎる。

なにもサツキが他人に情報を漏らさないかと不審に思っているわけではない。むしろそんなことはあるはずないと信頼している。

それでもそれとこれは別の話だ。なにせ今回の話は、彼らのような普通の人間が——否、本来ならばどのような事情があろうとも、人間が関わっていいような内容ではないのだから。なぜならば彼女が求めているのはこのジョウト地方に伝わる『伝説』のポケモン。守り神と呼ばれ信仰の域に達しているポケモンだ。

頑固者で有名なガンテツではあったが、目の前の一人の女性を前にどう対応すればよいかわからず、またため息を吐くだけだった。

「ラプラス、　“れいとうビーム”!!」

ラプラスの口から強力な冷気をこもったビームが放たれる。ビームはスターミーの念エスパーの力で浮かんでいた土の塊をあつというまに崩し、そのまま勢い衰えることなくスターミーへと進んでいく。

“れいとうビーム”は氷タイプの技。それに対しスターミーは水タイプだ。タイプ相性が勝っていることもあり、そのままでも受けきれるといふ自身があつたのだろう、スターミーはよける事無く受け止めた。

そして実質ほとんどダメージを受ける事無く攻撃を耐え切った。……だが、それでいい。何も今の攻撃の狙いはスターミーにダメージを与えることではない。

スターミーは反撃に移るためその場から移動しようとするが、その瞬間足元の違和感に気づく。ビームはスターミーの足元に直撃し、強力な冷気によってスターミーの足（なのか？）をその立っている地面ごと凍らせていた。これで容易に動くことはできない！

「よし、動きが止まった！　ピジョン、突っ込め　“でんこうせっか”！」

そしてスターミーの速さを奪ったのならばこちらの反撃の絶好の機会チャンスである。すかさず空中で機会をうかがっていたピジョンに攻撃の指示を出す。

ピジョンは空中から一気に降下し、スピードを上げながらスター

ミーに接近していく。

そしてスターミーに直撃する……と思われた瞬間、スターミーの赤い核コアが怪しく光りだした。

「ゲッ……まずい、やめろピジョン！ 戻ってこい!!」  
「ッ!?!」

とつさにスターミーの核の反応を察し、ピジョンに後退の支持を出すものの、加速していた状態ではさすがに無理があった。ドゴッ、と鈍い音を立てて、ピジョンはスターミーとの距離残り30cm付近で止まった。止められてしまった。よく見ると空中に透明な光の壁が見える。

「これは……リフレクターか！ あの一瞬でよくもこれほど堅固なもの……」

相手の物理攻撃の威力を弱める防御の壁、リフレクター”。しかしこうまで完全に動きを相殺されるとはな。

こうなつてはピジョンを戻すしかない。そう思つて指示を出そうとするが、それよりも早くスターミーは動き出した。スターミーの核の周りに黄色い光が収束していく。……これは一体何だ？ まさか電気か!? まずい!

「ピジョン、もう一度空中へ飛べ！」

ピジョンはすぐさま進路を変えて空中へと逃れる。

……しかし、それを追うようにスターミーから強力な電撃が放たれた。電撃は瞬く間にピジョンの姿を捉え……そして直撃した。

「ピジョン!!」

強力な電撃に当てられたピジョンは力なく空中から落下する。

地面に落ちる前に俺が受け止めるものの……戦闘不能だということとは一目でわかった。

「——10まんボルト”。私のスターミーの得意技の一つよ。今の攻撃を食らってしまったのは、今のピジョンでは耐えられないでしょうね」

「……サツキさん。戻ってたんですか」

「今さつきね。急に抜け出したりしてごめんね。でも用事はもう済ま

せてきたわ」

後ろから聞きなれた声が聞こえる。振り返らずともそれがサツキさんのものだとわかった。変わらぬ穏やかな笑顔で俺を見つめている。用事のほうはどうやら本当に済ませたようだ。

「ピジョンの治療もしなければいけないし、ヒワダタウンのポケモンセンターへ戻りましょう。シユン君もヒワダジム戦に向けて、十分な休息が必要だからね」

「ええ、そうですね。行きましようか……」

ピジョンとラプラスをボールに戻し、俺達は33番道路を後にする。

正直な話、スターミー一体に圧倒されてしまったのは不甲斐ないものの、良い実戦訓練ができた。今まで一人でやっていた特訓とでは全然手ごたえが違う。サツキさんもそれを感じたからこそ何も言わなかったのだろうし。

気づけば自然と拳を力強く握り締めていた。これは強くなっているという自信からなのか、それとも無意識で戦いを楽しんでいるという高揚感なのか、はたまた別のものなのか。……少なくとも今の俺にはわからなかった。

ポケモンセンターへと戻る最中、サツキは素直にシユンに感心していた。

たしかに自分のスターミー一体を相手にするだけで精一杯だったようだが、それでも自分で戦略を見出し、反撃の動作にまで至り、スターミーに防御を取らせたことは大きい。

サツキは今回の特訓は、せいぜいスターミーの“サイコキネシス”だけでも事足りると思っていた。トレーナーの指示がなくともスターミーならば十分動いてくれると信じていたからだ。

……それなのに、シユンはスターミーに技を引き出させた。敗れたにしても成果は十分すぎる。

彼がどんどん自分を磨いてくれていることに自然と笑みがこぼれた。シユンにそれを悟られぬようにサツキはシユンから視線をはずし、ヒワダタウンのほうへと向ける。……そうすると自然と、サツキの脳裏には先ほどのガンテツとのやり取りが思い浮かんできた。

『……ダメじゃ。たとえ君であろうとも、ほこらの伝説について語ることはできない』

ガンテツの返答は否定だった。あくまで語ることは許されないと拒絶されてしまったのだ。その態度はさすが近隣の住民に『ヒワダきつての頑固者』と呼ばれるだけのことはある。

その答えは予想していたものの、サツキはやはり落胆した。情報をつかめれば少しでも事件の手がかりにつながり、犯人の目的も分かるだろうと踏んだからだ。場合によっては仮面の男の招待へのヒントもつかめると感じていた。

『どうしてもですか？ あなたの情報しだいで、今回の事件解決の糸口をつかめる可能性もあるのですよ』

『君の言うとおり確かにわしは常に特殊ボールの作成法が記された書を持ち歩いておる。……しかしこれは他人に見せるものではないし、君が望んでおるようなことは一切記されていない。』

……さあ、もういいだろう。今日はもう帰ってくれ。もう話すことは何もないじやろう』

ガンテツが話はまだ終わりだと、その場から立ち上がって家の奥へと戻っていった。そうなってしまっただけはサツキはもう彼に問い詰めることはできない。

……結局のところ、今回は無駄足となってしまった。ガンテツが『特殊玉作成秘伝の書』を持ち歩いているということは明確になったものの、元々サツキはその中身を一目みたいと考えていただけであり、ガンテツが見せる気がないというのなら諦めるしかない。彼から奪うという気持ちは一切ないのだから。

今さらそんなことを考えても仕方がない。

サツキはそう心の中で呟き、話を片付けると今日これから挑もうと考えているヒワダジムへと意識を向けるのだった。

「……なに？ ジムリーダーがいない？」

ポケモンセンターでポケモン達の回復を行い、俺達も休憩を済ませた後はもう一度サツキさん直々に特訓をしていただき、万全の状態ヒワダジムに挑戦しに来たのだが……いざ来てみると、肝心のヒワダタウンジム、ジムリーダーであるツクシが不在だとヒワダジムのジムトレーナーは言う。

……どうでもいいが、なぜジムトレーナーだというのに虫取り少年ばかりなんだろうか？

「どういふことかしら？ 一体リーダーのツクシさんは今どこに出かけているの？」

サツキさんの言葉がいつも以上に鋭く感じる。

仮面の男という疑惑がかかっている一人がジムリーダーという責務を放棄してどこかへ行っているのだから怪しむのは当然だろう。俺とて不在という話を聞いた瞬間に仮面の男なのかという疑問が生まれた。

「申し訳ありません。ツクシさんは今、ジョウト遺跡調査隊の皆さんと一緒にキキョウシティにある『アルフの遺跡』に出かけています」「ジョウト遺跡調査隊？ なんだそれは？」

「その名の通り、ジョウト地方各地にある遺跡の発掘・調査・管理を行っている組織のことです。ツクシさんはその調査隊のリーダー格なんですよ。彼は優秀な方で、学者界の中で知らない人間はいません」

「へえ。……ジムリーダーだというのにそんな仕事までしているのか」

キキョウジムのリーダー、ハヤトが警察官も職業としてやっていたが、どうやらこのジムリーダーもそれに当てはまるようだ。ジムリーダーという定職についているのだから無理に他の職種に手を出す必要なんてないのではないのかと思うが、やはりそれについてはそ

それぞれの意思や動機があるのだろう。

だがそうなるとツクシも仮面の男だという線は薄くなるな。調査隊として動いている上にそこまで名の知れた状態では動きにくいだろうし。……それに、アルフの遺跡といえばつい先日ロケット団が事件を起こしたところと聞いている。なんでも遺跡を調査していた調査隊を攻撃したとかどうか。詳しいことは覚えていない。

遺跡に興味はないし、サツキさんも特に用事がなかったためにアルフの遺跡には寄らずにまっすぐヒワダタウンへと来たのだが、念のため一度会っておくべきだったかな？

「どうする、シユン君？」

「え？ どうするって……どういうことですか？」

「ジムリーダーはいないけど、ジム戦に挑むかどうかってことよ」

「せっかく来ていただいたのですから、ジム戦の挑戦は構いませんよ。ツクシさんが育て上げた手持ちポケモンが相手します」

「……どうしようかな。別にここで無理して挑戦するという必要はない。」

ジムリーダーに挑めない上に、仮面の男だという可能性が薄い以上は俺が挑まなければいけないという理由は一切ない。元々俺の目的は仮面の男の調査のためであってジムの制覇ではないのだから。

ここで仮面の男との戦いに向けて鍛えておくという理由はあるがそれはサツキさんに相手をしてもらうということも可能だし。

「……それじゃあ、お願いします」

—— だけど、必要ないとわかっていてもそれでも俺は挑んじゃうんだよな。

「それではこれより、ヒワダジム戦を開始します！」

今回のジム戦の審判を勤めるジムトレーナーの声がバトルフィールド全体に響く。

バトルフィールドへと俺は移動する。サツキさんはすでに観客席



についていた。ジム戦の前に会話したが、どうやらヒワダジム内にもサツキさんのポケモンを放って調査をしているようだ。

反対側のフィールドにはツクシが一から育て上げたというポケモン達が三体並んでいる。バタフリー、スピアー、そしてストライク。虫タイプ三体だ。このジムは虫タイプに特化したところ、俺でもよく知るような有名なポケモンが並んでいるな。

「バトル形式は3対3のシングルバトル。ポケモンの交代は挑戦者チャレンジャーのみ許されます」

……3対3か。ついこの間までは3体そろえるだけでも困難だったのだが、今となってはどのポケモンで挑むか悩んでしまうほどだ。ずいぶん状況が変わったものだな。

本来ならばポケモンは交代のときになったら出せばよいのだが……俺は一気に今回の戦いに参加する3体をフィールドへと出す。相手がわざわざ姿を晒しているのだから、少しは条件くらい対等にならないとな。

「行つて来い。……ラプラス、ピジョン、サナギラス！」

ボールから出てきたのはキキョウジム戦とはまったく違ったメンバーだ。みんなジム戦は初めてなのだが、気負った様子は見られない。……この程度の戦いで気負ってもらっては困るか。

たしかに勝たなければいけない理由なんて微塵もないのだけれど……負けて良い理由なんて、それ以上にならないのだからな！

「それでは、試合……開始!!」

審判の言葉と共に、戦いの幕は切つて落とされた。

トレーナー 主人がいけない相手側からは、自分達の意味でポケモンが動く。まず出てきた1番手はバタフリーだ。

「頼むぞ、ラプラス！」

それに対し、俺はラプラスを残して2匹をボールへと戻す。

始まるや否や、バタフリーは空中に舞い上がり、強力な念エスパーの光線——「サイケこうせん」を繰り出してきた。

「迎え撃て！ ラプラス、＼れいとうビーム＼だ！」

開始早々、激突する二つの強力なエネルギー。

お互いの威力を相殺しあうように爆発を起こし、そしてフィールドを飲み込んだ――。

――ジヨウト地方某所。

まるで何かの製造工場のように、部屋一面には何かの機械が立ち並んでいた。いまだに活動中だということを示すように、部屋からはゴウンという機械の起動音が響き渡っている。

「……………ご報告します」

『なんだ？』

「先ほど、ウバメの森で待機を命じていたハリーから報告が上がりました」

「ウバメの森の中心部、ほこらにて何かの光を確認したと」

『そうか……………また現れるというのか』

その部屋の中では違和感しか感じられない、部屋の雰囲気とまったくマッチしていない3人の存在。

スーツに身を包み、彼らの上司に報告をしている男女の組。二人ともスーツの胸元には『R』という文字が書かれている。つまりロケツト団の団員であるということの意味している。

そして彼らの上司である男は……………もはや異分子と呼べるような存在だった。

顔を奇怪な仮面で覆い隠し、体全体を黒いマントで覆っているなどの男。声も人間のものとは思えない――おそらく変声機でも使っているのだろう、無機質な声で、『不気味』という言葉がとてもよく似合っている。

『3人には引き続き警戒を怠らぬように伝えておけ。今ウバメの森に近づく人間は排除するように、ともな』

「はっ!!」

『それと、すぐに私もむかうとな……………』

「えっ……………」

「本気ですか？ 首領が動かれるとは」

報告についてはすぐに応じた2人であったが、続く言葉には驚愕を隠せなかった。

あの一件以来——『いかりの湖』での事件からは一切自分から動かなかった巨悪が動こうというからだ。

『当たり前だ。どうやら最近、私を調べているというおろかな輩が再び現れたようだな。少し、遊んでみるとしよう』

「……承知しました」

『ここはお前たちに任せるぞ。カーツ、シヤム』

「はっ!!」

命令を受け、部下の二人——カーツとシヤムはその場を後にした。

一人になった空間で、仮面の男はしばし黙りこんだ。……しかしその後、不気味に笑い出した。そしてその声の持ち主の心に呼応するように、仮面の形が異様に変わっていった。まるで何かを嘲笑うかのよう……

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます………

主人公：シユン

持っているバッジ：1個（ウイングバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv20

ピジョン♀ Lv19

ピカチュウ♂ Lv22

サナギラス♂ Lv32

サンド♂ Lv18

ラプラス♀ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第十二話 V S ストライク 束の間の平穩

ヒワダタウンジムリーダーであるツクシは虫タイプの専門家<sup>エキスパート</sup>。彼が率いている手持ちポケモンも虫タイプばかりだ。

虫タイプといえば非常に個性の強いポケモン勢が揃っているものの、そこはさすがはジムリーダー。彼に育てられたポケモン達は、それぞれの強さを思う存分に発揮できるように鍛え上げられている。たとえば苦手なタイプのポケモンが相手であろうとも対抗できるほどに。たとえ、指示を出すトレーナーがいなくても、己が意思で相手を迎え撃てるほどに。

だからこそ、ジムリーダー不在だからと言って侮って挑むのは何も知らない初心者であろう。指示を出すジムリーダーがいなくても、ここにいるのはその街を代表する強さを持ったポケモン達なのだから。並大抵の者が挑もうとも、有無を言わず制圧されてしまうだろう。しかし、この度ヒワダジムに挑むはオーキド博士にも認められた凶鑑所有者・シユン。並大抵な実力であるはずがない……

「ラプラス、〴〵みずでつぼう〴〵！」

バタフリーの〴〵かぜおこし〴〵により、バトルフィールド全体が強力な風が吹き荒れている。相手への攻撃と同時に、自らを守る風の防壁となっている。

しかしその風の中でもラプラスは体勢を立て直し、シユンの指示に従って口から勢いよく水の砲撃を放つ。水はそのまま風の膜を突き破り、バタフリーに直撃する。攻撃を受け、空中で仰け反ってしまい体勢を立て直すのも容易ではない。

「相手に反撃の隙を与えるな、〴〵れいとうビーム〴〵だ！」

バタフリーの攻撃がやんだ事により、バトルフィールドに吹き荒れていた風もやんでいる。これでラプラスを妨げるものはない。

そのまま休む暇を与えず、ラプラスは〴〵れいとうビーム〴〵を放つた。氷のビームは標的に向かって一直線に進み、バタフリーの羽を貫

き、直撃した周囲の部分を凍らせる。

弱点をつかれたばかりか、羽の自由が利かなくなりバタフリーはバランスを乱して地面へと落ちる。

しばらく身悶えしていたが、立ち上がることはできずにそのまま倒れてしまった。

「バタフリー、戦闘不能！ ラプラスの勝ち！」

「よしっ、よくやったラプラス！」

審判がバタフリーの状態を確認し、所持していた赤色の旗をシユン達の方向に上げる。

まずは一勝目。しかも、ラプラス一体で初戦を制することができた。シユン達には交代も許されている上に残りポケモンは2対3。この勝利は大きい。シユンがラプラスに声をかけると、ラプラスもその声に応えるように甲高い勝利の雄たけびをあげた。

勝利にシユン達が歓喜している中、ジムトレーナーが倒れたバタフリーをボールへと戻す。そのままフィールド外に出ると、今度はスピーアが自分の意志でバトルフィールドへと身を躍らせた。

（2体目はスピーアか。虫タイプと毒タイプをあわせもった攻撃型。

あの強力な両腕の槍には気をつけなきゃならない。が、ラプラスではあまりフットワークがよくない。となると……）

「よし、戻れラプラス。よく戦ってくれた。……行ってこい、ピジョン！」

すばやく相手のポケモンの特徴を解析すると、シユンは先ほどの戦いで活躍したラプラスをボールへ戻す。一言感謝の言葉を送るとボールを腰に装着し、代わりにピジョンをフィールドに繰り出した。

「第2戦、開始！」

審判の試合再開の合図と同時に、両ポケモン達は空高くに舞い上がり、戦場を空中へと移す。第一戦とは打って変わり、第2戦ピジョン対スピーアは空中戦でその幕をあげようとしていた。

観客席から見ている分、全体の様子がよりはっきりと見える。バトルフィールドで繰り広げられているポケモン達のバトルもそうだけど……なによりも、トレーナーであるシユン君の姿がよく見える。

「……成長したなあ、シユン君は」

若干の鼻屑は入っていると思うけど、それでも大したものだと思う。私が教えていることもあるとは言っても、彼の成長スピードには目を見張るものがある。自然と目が彼の方に向かってしまう。練習のときよりも真剣な顔で、自分のポケモンの戦いの行方を見守っている。

「ピジョン、相手の動きを良く見ろ！ お前ならできるはずだ！」

シユン君の声がこちらにまで聞こえてきた。……駄目、今はバトルの最中なんだから。

空中で二体の影が交錯する。スピアーの“ダブルニードル”に対し、ピジョンは“つばさでうっ”で迎え撃っている。スピアーのあの槍には猛毒がしこんである。それを体に浴びないためだろう、槍の先端を受けないよう、つばさでその攻撃を逸らすように相手の攻撃を防いでいる。

ピジョンのスピード、そして鳥ポケモンが持っている動体視力があってこそこの戦法。上手く相手の攻撃を見切り、リズムを取っている。

指示を出すシユン君も、何度も立ち位置を変えてピジョンの姿がはっきりと見えるようにしている。バトル中においてはポケモンが見えていない状況もある。そういう場合は指示者が動いて死角を把握しないとイケない。誰からも教わったわけでもないだろうに、こういった気配りまでできるようになっていたなんて……

「行け、一気に決めろ！ “でんこうせっか”！」

ピジョンの翼がスピアーの両槍を上へとはじき、隙ができた。その瞬間にすかさずピジョンはスピアーを翼で打ち払った。強力な一撃の前に、スピアーは吹き飛ばされる。

それを見てシユン君は一気に勝負をかけるため、攻勢に出るよう指示を出した。

凄まじい速さでピジョンはスピアーに突っ込む。そしてスピアーの体を嘴で捉えたまま、ピジョンは地上まで落下して来た。

ドガツ、とフィールドで激しい衝撃音が響き辺りを煙が覆う。

だんだん煙が晴れていき、2体の姿も浮かんでくる。……ピジョンが気丈にその上空で羽ばたいており、その下ではスピアーが力なく横たわっていた。あまりの衝撃からか、そこには小さなクレーターができている。

「スピアー、戦闘不能！ ピジョンの勝ち！」

再び勝利を表す旗がシユン君の方へと上がる。勝利を確認してピジョンはシユン君の方へ戻り、彼の肩の上に止まった。

「よしよし、よくやったぞピジョン。いい働きだった」

その健闘を祝ってピジョンの頭を優しく撫でる。ピジョンも気持ちよさそうに体を預けているように見える。

……ポケモン達も彼には懐いているみたい。ピカチュウやヨーギラスのように、昔から彼に付き従っているポケモンはもちろんのこと、この旅を通じて出会ったピジョン達も。

これは良い傾向だ。ポケモン達がシユン君に懐いているならば、これから先の旅もきつと彼に付き添ってくれるだろう。懐き度が低いポケモンほど、指示者の言う事を聞きにくいんだけど、どうやらその心配はなさそう。良かった。

しばらくして、ジムトレーナーと入れ替わるように、最後の一体であるストライクが出てきた。最後の一体だけあって、先ほどの2体よりも手ごわそう。

「よしピジョンは一度戻ってくれ。ありがとうな。……さあ、暴れてこい。サナギラス！」

それに対し、シユン君も切り札であるサナギラスを繰り出す。ピジョンやラプラスは先ほどの戦いのダメージ、疲労もあるし妥当な考えだろう。

「お前が決める。2体が最高の形でつなげてくれたんだ。一気に畳み掛けるぞ！」

シユン君がサナギラスを鼓舞する。サナギラスも首を振る事で答

えた。

たしかにここまで押しているのは間違いなくシユン君。ジムリーダーのポケモン達を相手にここまで善戦しているのだから、否応でも士気は上がるだろう。

……だけど、だからこそ私は怖い。なぜなら彼はまだ、自分より実力のある相手と全力の勝負をしたことがないのだから。

ハヤトやツクシのポケモン達が本気でなかったわけではない。彼らは挑戦者の実力を試し、トレーナーとポケモンの絆を試すためにギリギリの勝負を演じる。だけど、彼らは本気ではあつても全力を出す事は無い。なぜなら彼らは実力をはかることが仕事であり、その本質は決して倒すことではない。本来の実力ならば、今のシユン君よりも彼らの方が圧倒的に上だろう。

しかしながらこれから先彼が相手にしようとしているのはあの巨大犯罪組織・ロケット団を率いている者。全力で戦うどころか、下手すれば彼を殺しかかるだろう。そんな時、果たして彼が巨悪と向かい合ったときに本当に戦うことができるだろうか……

今はまだいい。それでも、仮面の男と向き合う前に何としても彼には強くなるだけではなく、覚悟も決めてもらはないといけない。

「……うん？」

そう考えていると、突如私の服の袖が引つ張られるのを感じる。そちらの方を見ると……私が偵察を頼んでいたポケモンがいた。仕事を終えて戻ってきた様子。

「お疲れ様。……それで、どうだった？」

成果を聞くけれど、この子は首を横に振る。……ここもはずれか。

念のため見つかっていないかとも聞いたけれど、それは問題ないみたい。まあ、この子のスピードならば見つかるはずもないけれどね。

キキヨウとヒワダ。二つのジムリーダーは違うとなると、残るジユウトのジムリーダーは六人。

カントーのジムリーダーという可能性も捨てきれないけれど、最近ロケット団が引き起こしている事件は全てジユウト地方で起こっている。カントーではロケット団の姿さえ最近は見当たらないようだ。



し、間違いなく本拠地をこちらに移していると考えていい。となると、本業であるジムリーダーの事も考えてジョウトのジムリーダーが怪しい。

……このことはオーキド博士にも伝えて、ポケモン協会の方にも手を打ってもらった方がよさそうね。

「とどめだ、サナギラス “いわなだれ” !!」  
「ッ……!!」

考えに夢中だったせいで、バトルの方が完全に意識から外れていた。シユン君の叫びが私を覚醒させる。

見ると、いつのまにかバトルは決着を迎えていた。サナギラスの放った “いわなだれ” により、膨大な岩によって山が形成されており、ストライクがその下敷きになっていた。その威力はストライクでも耐え切れなかったのだろう。

「ストライク、戦闘不能！ よって勝者……ワカバタウンのシユン！」  
そして試合終了を告げる審判の声が響き渡る。シユン君はトレーナーズサークルから飛び出し、サナギラスをその身に抱き寄せる。他のポケモン達も一緒に囲んで嬉しそう。

……今はまだそれでいい。それでも、いつか彼には……

ヒワダジムに挑戦し、勝利した証としてインセクトバッジを手に入れた。これでウイングバッジとあわせて獲得したジムバッジは2つ目。

ポケモンセンターでポケモン達の回復を済ませると、ツクシが黒幕である可能性がほとんどない以上ヒワダに長居は無用なので、早いうちに次の街・コガネシティに到着するためにヒワダタウンを後にした。ここからコガネシティに向かうためには、天然の迷路・ウバメの森を越えなければならない。夜辺りが暗くなってから向かうのは危険と考え、ジム戦が終了後すぐさま出発したのだ。

「……でも、思っていた以上にこの森は天然の迷路ですよね」

「そうだね。私も噂でしか聞いたことはなかったけれど、ここまで複雑な地形とは思わなかった。まるでトキワの森みたい」

回り一面に森林が生い茂っているウバメの森。少しでも油断すればすぐにでも道に迷ってしまいそうだ。先ほどから中々の距離を歩いているが風景がほとんど変わっていないように思える。なるほど、確かにこれは迷いの森と言われてもおかしくない。

「ああ、カントー地方の広い森ですか。あそこは地元の人でさえ迷ってしまうとか言われているんですね。俺も一度行ったことありますけど、何もできませんでした。……なるほど、たしかにそれならこういうところで仮面の男が現れてもおかしくない」

「……ええ。隠れ家や秘密の拠点としてももってこいだし、何が起こつても不思議ではないわ」

サツキさんの考えももつともだ。現在明らかになっている情報の中でとはいえども、仮面の男が一番最初に姿を現したのはこの森でゴルドが戦ったとき。これだけの広さならば、何か仕掛けるだけの面積も持っているだろうし要注意だ。たとえこの場にいなかったとしても、何かしらの罠や仕掛けがあるというのは考えすぎではないだろう。

何が起こつても大丈夫なように二人で周囲の様子を警戒しながらも歩みを進めるが、野生ポケモンが出現するばかりで、特にこれといった異変は生じなかった。

すでにこの森に入ってから十分ほど。辺りを散策しながら歩いているために進行速度は遅いが、それでも森を半分は横断したはずだ。

「……何も起こりませんね。かえって不気味に感じますけど」

「まあ無事なことにはしたことはないからね。……少しこのあたりで休憩をとりましようか。シユン君も少し歩き疲れたでしょう?」

「そうですね、まだ森をぬけるにも時間がかかりますし」

サツキさんの提案を受け、少し休むことにした。

何も無い平地に移動し、バッグからレジャーシートを取り出した。シートの上に身をおろし、バッグを置く。さらに野生ポケモンに急に襲われても大丈夫なようにピジョンを空の警戒に飛ばせ、ピカチュウ

とサンドをボールから出しておく。これでいざというときにもすぐに対応できるはずだ。

「シユン君、お腹は減っていない？ さっきお弁当を作ってきたんだけど、よかつたら少しどうかしら？」

「え!?! お弁当ですか！ はい、丁度お腹もすいてきたところですよ！」「よかった。ポケモンセンターの台所を借りて、少し作ってみたのよ」嬉しさを抑えきれずに飛びついてしまった。

俺の反応に機嫌を良くしたのか、サツキさんは荷物の中から風呂敷に包まれた箱を取り出した。……そういえばヒワダジム戦後、サツキさんが『少しやりたいことがある』と言ってしばらく席をはずしていたが……まさかこういうことだったとは。

シユルシユルと風呂敷がほどかれ、弁当の中身が明かされる。

三角形でのりがまかれたおにぎりが一列に並んでいて、さらにその横にはおかずが並んでいる。からあげにミートボール、ポテトサラダ、ミニスパゲツティ。なんとも懐かしい顔ぶれである。

「……あの、サツキさん。これサツキさんが作ったんですね？」

「そうだけど。……ひよつとして、何か変だったかしら？」

「いえ、ただ感動しているだけです」

あまりの嬉しさに思わず涙があふれそうだ。お箸を丁寧に受け取り、挨拶をしてから頂く。

……上手い。ミートボールの爽やかな酸味と程よい甘味が口中に広がっていく。おにぎりも塩が効いていて、具の鮭の旨味を引き出している。自然と箸がさらにポテトサラダやスパゲツティにも伸びていく。……幸せって身近なところにあるんだなと、そう感じた。

やっぱりこういう食事もいいな。外食ばかりだと感じられない温かみのようなものがある。

「えっと、お味はどうかしら？ 結構な自信作のつもりなんだけど……」

「とっても美味しいですよ！ 旅を始めてサツキさんの手料理を食べれるとは思っていませんでしたし、本当に嬉しいです。……なんだから、家にいたときのことを思い出しますね。おふくろの味というか」

「……おふくろ?」

突如お茶をいれていたサツキさんの動きが止まる。気のせいか、頬がヒクヒクとしている。まるで何かに怒っているかのように。

……あれ? ひよつとして俺が今何かおかしいことを言ってしまったのか? 最近はホテルやレストランでの食事が多かつたために、こういった家庭料理のものが懐かしく尚更上手く感じると思ったのだが。……どこだ?

「……シユン君、仮にも私はあなたとそれほど年は離れていないんだから、『おふくろの味』というのは失礼じゃないかしら?」

「あ、いやいやそういう意味じゃなくてですね! 今のはちよつとした例えとして出た言葉で……えつと、すみません!」

……それだ。その一点だ。たしかに『おふくろ』という表現を使つたのは失礼だった。サツキさんはまだ若い。たしか二十歳にもなっていないと言っていたというのに、そんな女性に対して使っている言葉ではない!

自分の失言に気づき訂正しようとするが、中々上手い言葉が出てこない。……なんとも見苦しい。おろかだ。

「もうシユン君ったら。例えるのなら……そうね。せめて、愛妻弁当とか言つてね」

「……ぶふつ!!」

そんな俺の姿を見かねたのか、サツキさんは拗ねた様な表情を見せて言った。

……あ、愛妻だど? 彼女の言っている言葉が衝撃的すぎて、思わず噴出しそうになってしまった。さすがにこれ以上の失態は防ぐためにこらえたが。

な、何だつたんだ今のは……! 今のはまさか俗に言うプロポーズというものか!?

いやいや、落ち着け俺! そんなわけないだろ。サツキさんはただ単に上手い例えを言ったただけだ、勘違いするなよ。……危なかった。危うく胃袋はおろか、ハートまでつかまれるところだった……!!

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv20

ピジョン♀ Lv21

ピカチュウ♂ Lv22

サナギラス♂ Lv33

サンド♂ Lv18

ラプラス♀ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第十三話 V S オクタン 襲い来る災厄

「さて、それじゃあそろそろ行きましようか」

「そうですね。サンド、ピジョン。もう戻っていいぞ、ありがとうな」  
十分な休憩を済まして体を休めると、再び旅を進めるために立ち上がる。荷物を全て片付け、さらに警戒用にと出していた二匹をボールへと戻した。念のためにピカチュウはこのままボールから出しておいていいだろう。一匹くらいは出しておかないと心配だからな。

再び歩き始めるが、やはり周りの景色は殆ど変わらない。……どれだけ深いんだこの森は？

まだ夜と呼ぶには早すぎるくらいだというのにあたりは光が差し込まないためほとんど真っ暗だ。そのために余計に視野が狭まってしまう。

……この条件はたしかに隠れ家としても良いのだろうが、本当にそれだけなのか？ 逆に自身の行動範囲も狭まって動きづらいようにも思えるし、どうも気になる？

「サツキさん、サツキさんは何かこの森について知っていることってありますか？」

「え？ ……突然どうしたの？」

「いえ、仮面の男が一体何のためにここに現れて、そしてゴールドを退けようとしたのが気になったので。どうも俺は活動拠点だからという理由だけには思えないんですよ」

俺は自身の意見をそのまま伝えた。いきなりの疑問に一瞬戸惑ったような色が見受けられたが、何か知っているということだろうか？

少し気難しい顔を浮かべた後、サツキさんは表情を元に戻して俺の問いに答えてくれた。

「……たしかに、知っていることは知っているよ。でも私も詳しく知っているわけじゃないの。」

私が聞いた話によると、この森・ウバメの森はヒワダ住民達に『守り神』と謳われているとある伝説のポケモンが存在していて、そのポケモンを祀っているほこらがあるという話よ」

「守り神、ですか？　なんというか、それはまた意味深な話ですね……」

サツキさんがわざわざ打ち明けるというのだから本当なのだろうが、どうもその伝説は信じがたい。

俺とて伝説と呼ばれるポケモンが存在することは知っているが、『守り神』ともなるとそれはもはや信仰の域に達しているんじゃないか？　そしてその信仰を実現するべくその話を作ったようにも思える。

……だが、本当にその伝説のポケモンが存在するというのならば、確かに仮面の男がこの森を狙っても不思議ではない。

「まあその噂が本当ならばたしかにこの森は十分探索しなければなりませんね。特に話に出てきたその『ほこら』に重心を置いてぶっ!？」

「えっ!?!　……しゅ、シユン君!?!」

「は、鼻が……!　な、なんだ!?!」

話しながら歩いていたら、突如何も無いはずの空間に激突してしまった。思わず変な声をだしてしまった。

気遣う声はありがたいが、思いっきり顔からぶつかったせいで顔面が痛い。異変に気づいたサツキさんがぶつからなかったことだけが幸いか。

……しかし、一体今何が起こったんだ!?!　俺はただ歩いていただけだというのに!!

「……これは『ひかりのかべ』それに『リフレクター』まで加わっている強固な壁ね。よく目をこらさないと見えないけれど、ここから先を遮断するように展開されているわ」

「え?!　こんな所にですか!?!」

サツキさんが何も無いはずの場所に手を当てて冷静に分析している。

なるほど、それでいきなり俺はぶつかったわけか。たしかにうつつらとだが何か透明な壁のようなものが見える。

「これほどのものが備えられているなんて、やはりこの森には何かあるというところかしら?」

「だったら尚更ここで立ち止まれませんよ。サツキさん、その壁から離れてください。壊して進みます！」

「え……そうね、それじゃあお願い」

「よしっ、ピカチュウ『でんきショック』！ マグマラシ『かえんぐるま』だ！」

すでに場にいたピカチュウに加えて新たにマグマラシも出し、得意技を繰り出した。

ピカチュウの赤い頬から鋭い電撃が壁に向かって一直線に放たれ、マグマラシは噴出した炎を自身の体にまとい、壁に突進していく。

よしっ、レベルアップしたことで技の威力も格段に上がっている。

二つに技は壁に激突し……電撃はバチツと音を立てて消散し、炎を纏ったマグマラシは壁に跳ね返されてしまった。

「……あらら。全然ダメかよ」

いけるとは思っていたのだが、そう上手くはいかないか。練習の時にサツキさんのスターミーが放っていた技ではあるが、それに『ひかりのかべ』まで加わっているせいで尚更破ることが困難になっている。壁を破るところか、簡単に跳ね返されてしまうとはな。

「どうしましょう。……こうなったら、サンドに穴を掘らせて、地中からそちら側に移動しますか？」

この防御壁を破ることは難しいと考え、一つサツキさんに提案した。

地中ならばさすがにこの壁も張られてはいないだろうし、その方が手っ取り早いと思ったのだ。

善は急げ、早速サンドをボールから出そうと腰に手を伸ばし——  
「いいえ、その必要はないわ。もっと手っ取り早い方法があるから」

——伸ばした手はサツキさんによって止められた。

俺を制したサツキさんは『少し下がって』というと、前に出て自身のポケモンが入っているボールを手に取った。

右手でボールを持ち、その腕を壁に向かってまっすぐに挙げる。そして指で開閉スイッチを押してポケモンが解き放たれた。

「——ニドクイン、『かわらわり』！」



ボールから颯爽と現れたのは、全身を蒼い鎧のような固いうろこで包んでいる大柄のドリルポケモン・ニドクイン。これが、サツキさんの手持ちポケモンの二体目か。

登場するや否やニドクインはサツキさんの指示に従い、その腕を振り上げて——壁に向かって一気に振り下ろす。すると……壁はパリんと甲高い音を立てて粉々に砕け散った。透明なガラスのようなものが宙に四散していく。

「え……………え？」

「ご苦労様、ニドクイン。ゆつくり休んでいてね」

驚愕で硬直している俺をよそに、サツキさんは期待に答えてくれたニドクインの頭を撫でるとボールに戻した。

……え？ 一撃で、あの二重の堅固な壁を、簡単に、破壊？

いやいや、こちらが二匹がかりで歯も立たなかったというのに……何なんだいったい！

「さて、それじゃあ先に進みましょうか。……ってあれ？ どうかしたの？」

「……………どうかしたの』じゃないですよ。何ですか今のは!? 一回であの壁を壊せるなんて……………どんな威力を誇っているんですか!？」

何事もなかったかのようにすまし顔を浮かべているサツキさんに抗議せずにはいられない。

どれだけレベル差があるというのだ、俺とサツキさんのポケモンには!? まだ何度か攻撃を繰り返した結果として壁が壊れたのならば納得もいく。しかしここまであっさりとやられると……ねえ？ ピカチュウやマグマラシだって衝撃だろうし。

「ああ、そっかシユン君は今の技を知らない？ 今のはポケモンの力の強さじゃなくて、技の効果よ」

「……………ポケモンの強さではなく、技の効果？」

「ええ。今ニドクインが放ったのは“かわらわり”という技でね。精神を研ぎ澄ませ、鍛え上げられた筋力と精神力が何枚もの瓦を粉碎するというもの。相手にダメージを与えるだけでなく、“リフレクター”や“ひかりのかべ”といった張り巡らされた壁まで打ち砕く

技よ」

「……いや、聞いている限りではやはり凄まじい技に聞こえるのです  
が」

とてもではないが、サツキさんの説明を理解はできても納得はいか  
ない。

まず相手にダメージを与えるだけでなく相手の防御まで崩すとい  
う時点で次元が違う気がする。

しかもニドクインのあのスピードもそうだ。ボールから現れて破  
壊するまで五秒とかかかっていなかったぞ。

「うーん。コツさえ掴めば後は何とか上手くいくと思うんだけどな。  
今度時間があつたときに、シユン君のポケモンにも教えてあげるよ。

ピカチュウやサンドだって、学べばできるようになると思うよ」

「よろしくお願いします」

「うん任せて。それじゃ改めて先に進みましょうか」

今の言葉を聞いてピカチュウが期待をこめた瞳をしている。余程  
今の技に魅力を感じたようだ。俺もあの技の威力に、あの姿に格好  
良いとは感じたけど。

とにかく俺はまたマグマラシをボールに戻し、先へと進んだ。

……そして歩き始めてすぐに、俺達は森の中心部であることを示す  
のであろう、『ほこら』を見つけた。

「サツキさん、これはひよつとしてさつき話していた……」

「ええ。おそらく間違いないでしょうね。先ほど張られていた壁から  
そう遠くないし、やはりこのほこらに何かあると考えると間違いない」

視線をサツキさんに戻すと、いつも以上に鋭い目をしていた。

……噂が本当だったのかは知らないが、やはり誰かがこの祠を狙っ  
ているというのは本当だろう。

だが、一通り祠を見渡してみても何も見当たらないし変化もない。  
辺りにも何かあるわけでもない。何なんだ？

「どうしますかサツキさん？ このままこの祠を調べても何も起こら  
ない可能性もありますか……」

「……そうね。確かに私達もここについて熟知しているわけでもない

し、ここに長居するのは危険かもしれない。

一度このウバメの森から脱出してコガネシティへ行きましょう。それからオーキド博士に報告して今後の動きを——」

「サツキさんっ!!」

「——ッ!?!」

今後の方針を語ろうとしたサツキさんの話は続かなかった。

何か空を切る音が聞こえ、とつさに彼女の名を叫んだ。そして間をおかずして俺達二人を攻撃するように、冷たい光線のようなものが地面に直撃する。

とつさの判断でその場から離脱。……見ると、先ほどまで俺達がい  
た場所が凍りついていた。

「これは、れいとうビーム」か!? 誰かが俺達を狙って——!?! ピカ  
チュウ、でんじは——!」

間違いなくポケモンの攻撃であった。そして今のことについて考  
えている暇もない。

後ろに今までになかった気配を感じ、すぐさまピカチュウに攻撃の  
指令を出す。

ピカチュウの尻尾に電気がこもった球体がたまり、そして打ち出さ  
れた。球体は対象に向かっていくが、木々に潜んでいた敵は軽やかに  
かわし、汚いヘドロを投げつけてきた。——毒タイプの、ヘドロばく  
だん」だ!

「ピカチュウ、つかまれ!」

「ピッ!」

攻撃後で隙だらけであったピカチュウの体を抱え込み、そのまま横  
に転がるようによける。何とか回避できたものの、俺達のいた地面が  
溶けている。……完全に敵と見て問題ないな。

「ほお。子供ガキにしてはやるじゃねえか。今の攻撃をよけるとはな」

「……お前ら、ロケット団か?」

木々の間から声と共に二つの影と二匹の影が降り立った。

現れた二人の男は全身黒づくめの服装に『R』の字が縫い付けられ  
た服装、ロケット団の団服を着ている。さらに二匹のポケモンはイト

マルにオクタン。……『れいとうビーム』と『ヘドロばくだん』を放ったのはこいつらか。

「ご名答。俺達はロケット団の中隊長、その中の一人ハリー！」  
「俺はケンー！」

「……いや、別に名前までは言わなくて良いんですけど。まあいいや」  
決めポーズを決めながら親切に名前まで名乗った二人に突っ込んだ俺は間違っていないと思う。

敵である俺の疑問に対してバカ正直に名前まで名乗るとはコイツら馬鹿か、馬鹿なのか？ それとも余程自分の強さに自信があるのか？ ……前者だと思う多分。その方が格好いいと思っっているのだろう。つてか、仮にも犯罪者なんだから名前は伏せろよ。

……しかし現状は良くないな。二体一の状況になつたうえに、最初の『れいとうビーム』をよけるときに俺はサツキさんとは逆方向に飛んでしまった。さらに敵の追撃をよけるために俺はその場から離れた。

つまり俺達は完全に分断されてしまったというわけだ。俺にも敵の幹部が来ているところから考えても、おそらくサツキさんの方にも何かしらロケット団の追撃が及んでいるはずだ。

だとしたら——  
「……それよりもお前ら、まさかサツキさんにまで手出ししたわけじゃないだろうな」

——なおの事、ここでゆっくりはしてられない。

早くこいつら二人を撃退し、サツキさんと合流を果たす。それしかない。

「サツキ？ ……ああ、一緒にいた女のことか？」

「馬鹿か。わざわざお前達を切り離したというのに、もう一人の方だけ何も無いなんてないだろう？」

「それじゃあやっぱり……」

「ああ。もう一人の中隊長が向かっているさ」

……俺の予想通りの展開か。実力は知らないが、仮にも中隊長を名乗るくらいなのだから相当なものなのだろう。しかも俺達は不意を

衝かれてしまったんだ。いくらサツキさんが実力者であったとしても、無事であるという保証はない。

「お前達を倒した後のことは好きなようにして良いって命令だからな。……くうつ、リョウが羨ましいぜ。できれば俺も女の方が良かった」

「俺もだ。あんな上等な女めつたに会えねえからな」

「……屑共が」

相方であろう男に関する話は聞くに堪えないことだった。声が自ずと低くなる。

ゴールド達を傷つけ、今度はサツキさんを自分達の欲望を満たすために利用しようってか？ ふざけてやがる！

「今すぐ消えろ。お前らの相手をする気はない！」

相手がロケット団の幹部ならば捕まえなければならないのだろうが、今の俺にはそんな余裕はない。

仮面の男がいないならばこいつらの話は聞くだけ無駄だ。ならば優先事項はサツキさんと無事に合流すること。こいつらの相手なんて二の次だ。

「……お前にはなくてもこっちにはあるんだよ」

「ああ。このウバメの森への侵入者、そいつらの口を封じることが俺達の目的だからな」

「なるほどな。だったら……力づくでも通させてもらおうよ！ 行くぞ！」

言葉と共にすぐさまボールへと手を伸ばし、サンドをボールから繰り出した。

二体一。実戦でははじめての試みだ。今まで訓練はしていたけれど、実戦訓練は0に等しい。

だがそれでもやるしかない。

俺はサンドとピカチュウに攻撃の指令を出し、二匹は俺の指示通り相手に向かって行った。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv20

ピジョン♀ Lv21

ピカチュウ♂ Lv22

サナギラス♂ Lv33

サンド♂ Lv18

ラプラス♀ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第十四話 VS キリンリキ 忍び寄る闇

「一度このウバメの森から脱出してコガネシティへ行きましょう。それからオーキド博士に報告して今後の動きを——」

「サツキさん！」

「——ッ!？」

咄嗟の判断であった。

隣にいるシユンから発せられたただならぬ声から事態を察し、サツキは反射的にその場から大きく後ずさった。かつて29番道路での出来事も踏まえ、危機に対して敏感になったのかすぐさま体は反応した。

案の定目の前を何者かの攻撃が——強力な冷気をまとった一筋のビームのようなものが飛来する。威力から考えて、れいとうビームだ。

「敵の攻撃!? まさか本当にロケット団が……ッ!?! シユン君!?!  
シユン君!」

今自分達を狙うとしたらその相手はロケット団しかいない。そう考えた彼女はその場で周囲を見渡し、現状の把握に移ろうとして……そして自分達が分散させられたことに気づいた。先ほどの、れいとうビームは近くにあった大木までをも凍らしており、大きな氷の壁となってサツキの行く手をふさいでいる。

シユンの無事を確認するためにも今すぐ合流したいところではあるが、これではそれさえ叶わない。

「このっ……」

「おいおい、女が変な真似はやめとけよ。そんなことよりも俺と遊んでいこーぜ」

「……!？」

まずはこの氷を排除すべく、サツキは自身のポケモンが入っているボールへと手を伸ばし、手に取った。

しかしそんな彼女を無駄であると論すかのように、背後から男性の声が響く。内容から好意的な者でないと判断するとすぐにその声主

の方向へと振り返り、臨戦態勢に移った。

そこには尻尾にも小さな頭のようなものをやし、体の後ろ半分が黒色でキリンのようなポケモン——キリンリキに乗った男がいた。胸に大きく『R』の文字を縫い込んである黒色の団服を、ロケット団員であることを示している服装を着ている。

それはつまり、サツキが考えていたことが本当であるということの意味しているのと同義であった。

「よう。俺はロケット団の中隊長の一人、リョウだ。仲良くしよーぜ」  
「あらあら、ご丁寧にどうも。でも折角の申し出には応えられそうにないわ。」

……私には連れがいるの。だから、あなたと遊ぶつもりは一切ない。だから今すぐどいてくれるかしら？」

自らの名を名乗り、誘ってくるハリーをサツキは笑顔を作ってかわした。最も内心ではまったく別の、侮蔑の感情を抱いているであろうことは想像に難くない。

「そいつは無理な相談だな。なぜなら——その連れのガキにも、俺の仲間達が今頃遊んでいるはずだからな」

「……へえ。なるほど、ここにいるのはあなた一人だけではないのね？」

「言っただろう？俺は中隊長の一人だと。つまりはそう言うことだ」

連れのガキ——間違いなくシユンのことである。やはり先ほどの攻撃はこちらの戦力を分散させるための陽動であったことは間違いないとわかった。

しかも言っている言葉から推測するとハリーという男がロケット団の中でも中々高い地位にいるということがわかる。それがまだ経験の浅いシユンの元にも向かっているというのだから余裕はない。

「そう。それじゃあシユン君は私の側にはいないのね。……よかった。これで、足手まといを気にする事無く、思う存分戦える」  
「なっ!?!」

近くにシユンがないことを知り、何事かを考えるかのように頭を



下げた。ハリーは仲間の危機を知り、彼女が不安にかられているものと察した。……しかしすぐさまそれが間違いであると知る。言葉と共に再び自分に向けられた、彼女の表情を見て。

ハリーは思わずその場でひるみ、後ずさった。彼女から放たれた気迫に圧倒された。彼女の視線に当てられただけで体が震えていた。

そんな彼を一瞥し攻撃をしてこないことを悟ると、サツキは新たに腰のモンスターボールに手をかけ、一匹のポケモンをその場に繰り出した。

「な、なんだコイツは？ 一体何なんだこのポケモンは!?!」

ハリーが愕然とする。ボールから現れた今まで見たことのないポケモンの姿に、その巨体に驚愕するばかりで何かを行動に移すことさえ出来ない。その場でただ言葉を出すしかなかった。

「あなたの出番よ。——すぐにシユン君の救援に向かうわ。一撃でこの場を制しなさい、”じしん”!」

「うお、うおおおおおおおお!?!」

サツキがポケモンの上へ乗つくと、その巨体の豪腕が地面に勢いよく叩きつけられると同時に地面が大きく揺れる。天変地異を引き起こすその技は、勝負を決するには十分すぎるほどの一撃で。その衝撃は近くにいるハリーとキリンリキを一撃で戦闘不能の状態へと追いやった。

「誘う相手を間違えたわね。……さあ、それじゃ彼の元に向かいましょうか。——ギャロップ!」

ポケモンと一緒に気絶しているハリーの姿を確認し、サツキは感情をこめずに言い放った。

勝負を決める”じしん”を放ったポケモンをボールへと戻し、先ほどボールから出そうとしていた火をまとった馬——ギャロップを繰り出した。

「——”かえんぐるま”!」

主人の指示を受け、ギャロップはその見に巨大な炎を渦をまわって氷の壁へと突進する。シユンの手持ちポケモンであるマグマラシと同じ技であるというのに、まったく別の技のようにさえ思ってしまう

ほどの威力を持つ攻撃により、氷の壁は一撃で砕け散った。

行く道を阻むことはもう何もない。サツキはギャロップを呼び寄せて、その大きな背中に乗り移った。

「できるだけ急いでね。……シユン君、今行くから！」

——だからどうか無事でいて。

サツキは心の中で幼い少年の身の安全を願った。そんな彼女の不安を一蹴するように、ギャロップはその場を駆け抜ける。

「どうしたどうした、逃げるばっかじゃどうにもならないぞ？」

「言っておくが、ここの地理に関して言えば俺達のほうが詳しいんだよー！」

「……くそつ。ピジョン、サンドを連れて空中へ飛べ！」

逃げる俺達を追ってくる二人に一瞬だけ目を向け、俺はピジョンに指示を出した。

俺を挑発するためにやつらは言っているのだろうが、事実その通りだ。

このウバメの森は天然の森と言ったが、その言葉が意味するのはすなわち木々が生い茂っているということ。それだけ戦いにおいてはその生えわたる木を利用した戦法がより有効となる。

敵のポケモンの一体、イトマルが特にその戦い方を利用してきて厄介だ。武器でもある糸を木々に巻きつけて軽やかに移動し、どこからともなく攻撃を仕掛けてくる。完全に地の利は向こうにある。

事実、あのすばやさや優れているピカチュウもすでに戦闘不能寸前にまで追い込まれ、今となってはボールの中だ。

このままでは徐々にこちらが追い込まれていくことは間違いない。ピジョンに指示を出し、ピジョンはサンドを掴んで空中へと飛んだ。これで少なくとも敵の攻撃をかわすことは楽になるはず。さらに空中から攻撃を窺うということもできる。

「空中へ逃げたか。だがそう簡単には逃がさん！ オクタン、れいと

うビームッ！」

「イトマル、〴〵いとはくッ！」

「ピジョンそっちに行つたぞ！ サンド、〴〵スピードスターッ」だ！」  
追撃となる攻撃が敵二匹から放たれた。

すぐさま警告を呼びかけ、サンドにも迎撃の指示を出す。たちまちサンドの体に光が収束し、星型の光のエネルギーの結晶体が発射された。れいとうビームは当たる事無くはるか彼方へと消え、攻撃の糸はスピードスターによって相殺される。

……やはり、まだ空中のほうが戦える。ピジョンならば敵の攻撃にも十分対応できるし、これならいけるぞ！

「よしっ、いい調子だ！ ピジョン、そのままサンドと……ッ!? なっ!?」

「なっ、なんだなんだ!?!」

「じ、地震だと!? し、しかし、こんな急に……強すぎるだろ……!」

さらに指示を出そうとするが、その言葉は続かなかつた。

突如発生した大地震。それにより思考が一時的に中断される。余震さえ感じ取れなかつたというのに、突然起こつたことにより、相手二人も混乱しているようだ。

……見ると、オクタンも地震のダメージを受けており、おまけに木々にぶら下がっていたイトマルもすぐ近くまで落ちてきている。ならば、今がまたとないチャンスだ！

「ピジョン、サンドを降ろせ！ サンドはそのまま〴〵ころがるッ」だ！」

地震が弱まってきた今を逃せば勝機は薄い。

ピジョンがサンドを掴んでいた足をはなし、重力にしたがつてサンドは体を丸めながら地面に落下してくる。そして地面に落ちると、ダントツと音を立ててバウンドし、落下の威力も加わって凄まじい勢いで敵に転がっていった。

ポケモン図鑑にも載っていたことではあるが、サンドはどれだけ高いところから落下したとしても、体さえ丸めればその衝撃を吸収することができる。しかも今回はそのまま攻撃につなげたことで〴〵ころがる〴〵の威力が倍増した。

「なにっ!？」

「しまった! イトマル、反撃を……!」

混乱していたこともあり、敵は身動きがとれない。

サンドは動けない二人と二匹へと突っ込み、まるでボーリングのピンのように吹っ飛ばした。その威力は計り知れず、一撃で彼らを戦闘不能とした。

「よくやったぞ。ピジョン、サンドー!」

空中で待機していたピジョンも呼び戻し、二匹の奮闘を讃えた。

……正直危ないところではあった。あの地震がなければ敵の動きも止まっただけなかつただろうし、どうなっていたのかわからない。まさに天の助け、といったところか。

しかし、先ほどの地震はなんだったんだ? いくらなんでもおかしい。地震が自然に発生したならば、大きな地震が来る前に何かしら小さなゆれを感じるはず。それなのに、何も感じなかった……? どういうことだ?

「……まあいい。とりあえずこの二人は警察に引き渡すとして、俺達はサツキさんに合流しよう。逃げることで精一杯だったから森の奥まできてしまったけどな。……ピジョン、悪いけど空中からサツキさんを探してくれないか?」

先ほどは戦いに勝つことで周りが見えていなかった。おかげでサツキさんと別れた場所から遠く離れた場所に来ている。さすがにここからただ闇雲にあるいて合流できるとは思えないし、ピジョンに一つ頼むとしよう。

俺の意図を理解し、ピジョンは頷くと翼を羽ばたかせて空中へと飛び立ち――

「――ッ!? ピジョッ!!」

「……え?」

――飛び立とうとして、ピジョンは突如全速力で俺の前へと躍り出て、そこで身をとどめた。

明らかに俺の指示に逆らう動きだ。その行動の意味がわからずその姿を視線で追う。

「——!!」

「……ッ!? くふっ!?」

そして、ピジョンの体が勢いをつけて俺の体へと吹っ飛んできた。俺の体に当たってもその勢いは止まらず、俺が後ろの木に激突することとでようやく止まった。

「がはっ……!」

いっつ……! ピジョンがぶつかつたこと、そして木に叩きつけられたことで体に激痛が走る。肺から空気が全て搾り出された。

唯一無事であったサンドがこちらに駆け寄ってくるのが見える。一体今、何が起こつたんだ? ピジョンが俺の前に出てきて、そしてそのピジョンの体がそのまま俺のほうに飛んできて……!?

「ピジョン!? どうした! おい!!」

何かピジョンに起こつたという考えに至つたが、それは間違つていなかった。

ピジョンの体が震えていた。ただダメージを受けているというだけではない。右の羽全体が、一点を中心に完全に凍り付いている……! これは、まさか知らぬうちに攻撃を受けていたのか!? それで先ほど俺の方へと吹っ飛んできて……!!

それじゃあ、つまり。ピジョンは俺を庇おうとしてあえて……

「……自らの身を犠牲にしてトレーナーを守つたか。その忠誠心、敵にしておくには惜しいな」

「ッ! 誰だ!？」

突如俺の耳に機械質な声が響いた。

その声に反応して顔を上げる。ボールに出ているサンドも事態を把握して、自ら戦闘体勢へと移つた。

「……おいおい」

普通ならば、すぐにでもサンドに指示を出さなければならぬのだろう。あるいはすぐさまピジョンをボールに戻すか、治療を開始しなければならぬ。

——しかし、俺はそのどの選択も実行することができずに、呆然としてしまつた。それが戦場においては一番してはいけないことだと

わかっているというのに。

わかっているても、それでも動けないのだ。なぜなら――

「まさか、仮面の男が直々に出てくるとはな……」

――目の前にいた存在が、俺が追いつめていた相手だったからだ。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます………

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv20

ピジョン♀ Lv22

ピカチュウ♂ Lv22

サナギラス♂ Lv33

サンド♂ Lv20

ラプラス♀ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第十五話 V S デリバード 慈悲なき心

「貴様、今『仮面の男』とたしかに言ったな？ 私のことを知っているということか。」

なるほど。ここ最近私のことを探っている身の程知らずの輩がいるという噂が流れていたが、貴様のことであったか」

「……だつたら何だよ？」

俺をかばって敵の攻撃を受けたことにより戦闘続行が難しくなつたピジョンをボールへと戻し、仮面の男をにらみつける。いつ襲い掛かってこようとも対応できるよう、行動一つ見逃さないように注意深く。

……変声機でも使っているのだろうか、とても人間とは思えない無感情で機械のような声だ。

顔全体を覆っている不気味な仮面も手伝って、より相手の異質さを強く醸し出している。あれでは相手が男なのか女なのか、その区別さえつかない。

やつの側にいる、おそらく手持ちポケモンであろうデリバードに關してもそうだ。本来ならばおとなしい個体であるはずだが、まとっている雰囲気それを否定している。

……おそらく、ピジョンを攻撃したのはこいつだ。こおりタイプの一撃、ひこうタイプであるピジョンにはよけいにダメージがいつてしまったのだろう。……俺さえしつかり警戒していれば、こんなことでなかったはずなのに。くそっ……！

だが、今ここで冷静さを失うことは許されない。とにかく未だに得体の知れないこいつから少しでも情報を抜き出すことが優先だ。

……それにしても、『俺達が調べているという噂が流れていた』だど？ どういうことだ？ この言葉から察するに、俺達の動向を監視しているものが……あるいは、俺達の関係者に内通者がいるということか？

「なぜ私を探る？ 貴様程度のものがいくらあがこうとも敵わぬというのに。……それすらわからぬ命知らずか？」

「別に命知らずというわけではないさ。ただ、命に代えてでもやらなければならぬことがあるだけだ」

「……ほう。それはそれは、大層な覚悟だ。一体それは何だ？」

「答えろ。お前ゴールドを……俺の後輩をどうした!？」

相手の言葉にひるむ事無く、むしろ強気で攻める。ここで何も言わないのは下策だ。

……まずは第一に、ゴールドの安否。やつが本当のことをすべて話すとは限らないが、それでも何かしら手がかりがつかめるはずだ。

「ゴールド。なるほど、確かに以前私に挑んできたトレーナーがそう呼ばれていたな」

「やはりか。……それで、あいつは今どうしている？ お前が捕らえているのか？」

「やつなら死んださ」

「なっ……!?!」

死んだ、だと？ 言っている言葉が理解できず心の中で同じ言葉を反芻した。

……馬鹿な。たしかに未だに連絡が取れていない日々が続いている。しかしあいつが死ぬなんて、ありえない！

「嘘をつくな！ あいつがそう簡単に死ぬはずがない！ 信じられるか！」

「信じようと信じまいとお前の自由だ。……いいだろう。ならば教えてやろう。」

数日前、やつはいかりの湖で私に勝負を挑んできた。すでに敗北を経験したというのにも関わらず、哀れなものだったよ。結局私に一矢も報いることができず……やつは湖の底深くへ沈んでいった」

「……いかりの、湖」

……ようやくだ。これで、全ての話がつながった。おそらくやつが言っていることは全て真実だ。

数日前、ゴールドとの連絡が途絶えた日のことだ。その日一件のニュースが大問題として取り上げられていた。

それまではコイキングがよく釣れるということでも有名であった平



和な“いかりの湖”に突如ギャラドスが大量発生し、一時は被害が甚大なものになるとまで言われた。ギャラドスはコイキングの進化系。一度暴れだせば街一つを簡単に壊しつくしてしまうとさえ言われているのだ。

……しかし、すぐさまそのニユースは別のものへ変わる。

その湖が、周囲の草木も含めて氷付けにされてしまったというニユースだ。ギャラドスもその影響を受けたらしく姿を見せなくなったようで、近隣の住民も被害はないとのことだったが……これらは全てロケット団が、強いて言えばこいつが仕組んだことだったんだ！そしてそれを止めようとしたゴールドは勝負に負け、湖に沈められた。……そう考えれば全ての辻褄があう！

「安心しろ。貴様もすぐにやつの後を追わせてやろう」

「つ……悪いが、これ以上お前に好き勝手やらせるつもりはない！ゴールドがいけないというのならば、なおさらだ！」

これ以上はこちらに情報を与えるつもりはないのか、相手が戦闘態勢へと移る。

まだまだ聞きたいことは山ほどあるのだが……仕方がない。せめてここで勝てなくても、こいつを退けることさえできれば今はそれでいい。サンドでは相性が悪いが、今ここで戻しては隙が生まれてしまう。このままサンドで行くしかない。

「無駄なことを。……“ふぶき”！」

「なっ……早っ……！」

デリバードが予備動作もなしにこおりタイプの大技、“ふぶき”を放った。口から吹雪く強力な冷気は周囲の空気をも凍らせ、瞬く間に凍らせていく。周囲の木々までもが凍り付いていく。当然ながら、直撃コースのこちらの威力は凄まじい！

威力もそうだが、技を放つまでの時間が短すぎる！本来なら大技になればなるほどその威力をためるための時間が必要であるはずなのに、こちらが対抗する暇もないほどの短さで打ち出しやがった。

「くそっ……」

しかも、強力すぎて視界までもが塞がっていく。まともに目を開け

られず両腕を頭の前で組み、防ぐことに徹した。

これではまともにも指示もだせない。今はとにかくサンドに耐えてもらうしかないのか……!

そうして攻撃に耐えていると、やがてエネルギーが尽きたのか突如風がやんでいく。

……両腕を解くが寒さのせいか体が震えている。これは早く勝負を決めないとこちらが凍え死ぬ!

「サンド、穴をほって地中にもぐれ!」

だからこそすぐさま指示をサンドに出した。

たしかに冷気は強力だが、地中にもぐっている相手にはどうしようもあるまい。相手が飛べるだけにこちらからもつかつに手は出せないものの、プレッシャーを与えることはできるはず。

そう考えたものの……いつまでたつても本来のサンドが穴を掘る音は聞こえてこなかった。

「あれ? ……おい、サンド?」

不思議に思つてようやくサンドへ視線を下げる。

そこには頼りになる相棒の姿があると信じて。……しかし、俺はそこで目を疑った。

「……サンド? サンド! 嘘だろ!」

サンドは確かにそこにいた。しかし体全体が氷付けにされており、氷の中で動きが止まっていた。

まさかさっきの「ぶぶき」でこおり状態になっていたのか!? 何ですぐに気づかなかつたんだ俺は!?

「くそつ、こうなつたらマグマラシたちに……」

「無駄だよ。もう遅い」

「何を言つて……!?! 開閉スイッチが、押せない!?!」

すぐさま控えのポケモン達に交代すべく腰へと手を伸ばす。

俺の行動が無駄だと言い放つ仮面の男の意味がわからなかったが……すぐに理解することになった。

なぜなら、俺のポケモン達が入っているボールの開閉スイッチまでもが凍り付いていて、交代することができなくなっていたのだから。

開閉スイッチを押すことが出来なければポケモンはボールから出てこれない。つまり、俺は文字通り手も足も出なくなってしまうってことかよ……！

「嘘だろ。こんなことがあるわけが……」

「あるからこそ、今こうして貴様は危機に陥っているわけだが？」

「ッ……!!」

あるわけがない、という言葉は続かない。

確かにやつのいうとおりだ。これが本当のやつのやり方か。

……相手の攻撃をもともせず、何もできないように動きを完全に封じる。事実、もう俺は手の出しようがない！

「これ以上は時間の無駄だな。ならばもう終わりにしようか。……うん？」

「……あれは？」

そうして勝負を決めにこようと仮面の男が踏み出すが、突如近くから森を揺らす音が聞こえてくる。

……サツキさんか？ いや、それにしても方向が違う。それとも他のトレーナーか？ やつの反応は想定外のものだから援軍ではないはず。……しかしそれならまずい！

そうして考えている間に、突如凍っていた木々の一部が砕け、そこからポケモンが飛び出してきた。

——カブトムシのような外見、大きな角を持ち蒼い装甲で身を包んでいる虫タイプのポケモン、ヘラクロスだ。

ヘラクロスは怒っているのか、まっすぐに仮面の男に向かっていく。

……野生ポケモンか？ そういえばヘラクロスは木々を駆け巡って好物の蜜や樹液を吸うという。そしてそれを邪魔する相手には容赦なく襲い掛かるといふ習性があるのだ。

それでおそらくヘラクロスは突如森に異変を起こした仮面の男を敵とみなし、襲いかかっているのか……！

「ふんっ。くだらん。……デリバード！」

ヘラクロスを一瞥して排除するべきと判断したのか、すぐさまデリ

バードへと指示を出す仮面の男。

デリバードもすぐさま反応し、迎え撃つ。

ヘラクロスがその武器である大きな角で突っ込む。……しかしデリバードはまず一度腕を上空へと振り上げることその勢いを殺し、さらに今度は逆の手を振り上げてヘラクロスを上空へとはじき返した。

「……ここまで差がつくものなのか……!」

「ついでだ。貰っておけ。……プレゼントだ」

しかしそれだけでは終わらない。

デリバードが持っていた大きな袋から一つの箱を取り出し、無防備であったヘラクロスへと投げつける。

箱は狙い通りヘラクロスに向かっていき、当たったと同時に……爆発した。

「……なっ!? なんだあの技は!」

箱が爆発し、黒煙が漂う。

そんな中、攻撃を受けたヘラクロスがゆっくりとこちらの地面に落ちてくる。攻撃を受けたせいであちこちにやけどのあとが見受けられ、意識も失っているようだ。

「まずい! ……ヘラクロス、ボールに収まれ!」

それを見ていられず、すぐさまバックから殻のボールを1個取り出しヘラクロスへ投げた。

ダメージが大きいヘラクロスはボールに収まり、そのまま収まった。やはり野生ポケモンだったのか。

ゆっくりと地面に落ちたボールを拾い上げる。これでヘラクロスは俺にゲットされたことになった。……あのまま地面に落下していれば余計に怪我を負っていた。これほどの怪我では自然回復は難しい。俺がセンターまで連れて行くしかない。

「……ふむ。なりふり構わず捕獲か。だがそれを戦力と見るのは不可能な話だぞ?」

「うるさい! そんなことわかっているさ、お前と一緒にするな!」

仮面の男に言われずとも、そんなことのために捕まえたわけではな

い。

元々捕まえたばかりのポケモンはトレーナーに懐いているわけではないのだ。仮に今俺が回復させたところで俺の言うことを聞いてくれるとは限らない。……でもそんなこと関係ないんだ。助けられるものは、誰であろうと助ける！

「そうか。あくまでも他者の救出を優先したか。……教えといてやろう。それは貴様の優しさなどではなく、ただの甘さだ」

「……」

……甘さ、か。確かにそうかもしれない。

もしも今仮面の男がヘラクロスに意識がむいている間に逃げ出していたならば……そうすれば助かる術もあったのかもしれない。

だけど……そんなことをしたら、俺はあの男と同じになってしまう！ だから、それだけはダメだ！

「これで終わりだ。……デリバード、*“ふぶき”*！」

「……ぐっ……うっ!?」

先ほどよりも、また一段と威力が増した*“ふぶき”*か。一粒一粒が鋭く体を削っていく。こいつ本気で殺しかかかってきてやがる！

反撃しようにも手持ちポケモンは皆開閉スイッチが押せないし、サンドは氷付け、ヘラクロスは満身創痍な上に捕まえたばかり。……何もできやしない！

パキパキと、足元から妙な音が聞こえてきた。

足元には何もないはずだ。疑問に思いながら視線をそちらへと下げていくと……俺の足元から、地面ごと凍っていく様子が見えた。

「……っ!? こおり……バカな！」

信じれない、信じたくないことだった。

だが凍る速度はどんどん増していき、足を完全に凍りつけて身動きできないようにし、さらに胴体へと侵食していき……首までが完全に凍りついたところでふぶきがやみ、速度も止まった。

「……なっ……あ……」

「……」

……何も、できない。声もろくに出不い。

体が震える。歯ぎしりが止まらない。……でも、それは寒いからという単純な理由ではない。

仮面の男がゆっくりと俺の方へと歩いてくる。デリバードもそれに続いて歩いているが、その右手には氷の槍のようなものができている。……下手な真似はするな、と脅しているつもりか。

そして相手は俺の目の前で止まった。デリバードは俺の顔へと槍を向けている。

「……さて、私の質問に答えてもらおうか？」

お前は何者だ？ 一体誰の指示で、我々を探っていた？」

「……？」

「ロケット団が復活している今、私を探ることはどれだけ危険なことかくらいわかってはいるはずだ。それなのにここまで執拗に調べるということは、誰かに命令を受けたがゆえ。……吐け。貴様の背後にいるのは誰だ？」

こいつ、あくまで自分を調べている人間がいるということを知っていただけで、俺達のことをしらなかつたのか？ それにオーキド博士たちのことも知らないだと？

どういうことだ。内通者がいるというのならば、このようなことは知っていて当然なはずだ。俺の考えすぎだったというのか？

……いや、今はそのようなことを考えていても仕方がない。俺の答えなんて最初から決まっている。

「……ただの、子供だよ」

「ふん。つまり冗談を言うものだな。ただの子供にこのようなことを頼むわけが……」

「お前こそ、面白くない冗談はその仮面だけにしておけ。……俺は、俺の意志で行動しているだけだ。後輩の行方がわからなくなって、黙っているような先輩がいるのかよ？」

「……そうか。あくまで屈する気はないか」

そうは言っても、実際納得はしていないのだろう。相変わらずまとっている雰囲気から殺伐とした空気はぬけない。……話さないならば用済み、ということだろうか。

「ならばせめて、私の手でその後輩とやらに会わせてやろう」

「……………」

「さらばだ、名も知らぬトレーナーよ」

これ以上は話すことはないのだと、行動で示すように仮面の男は身を翻して歩いていく。

指示がなくてもトレーナーの意を悟ったのか、デリバードが槍と化しているその腕を振り上げた。

……終わり、だな。何もかもが違いすぎた。このような男とゴールドは戦っていたというのか。

悪いな、ゴールド。お前が生きていると今でも信じているけど……迎えにいけそうにないや。

俺はそつと瞳を閉じる。もう何も出来やしないのだから。

ごめん母さん、ゴールド、オーキド博士、ウツギ博士、サツキさん。

そしてポケモン達。……せめて、最後にあいつらと顔を会わせておきたかったな……

「——かえんほうしゃッ!!」

……聞きなれた声でした。

だけど、いつもの静かで穏やかな声ではなく……どこか激しさと怒りをこめている声だった。

最期の時を待っていても、予想されていた痛みはいつまでも来ない。

目を開けると、そこには馬が体全身に炎をまとったようなほのおタイプのポケモン、ギャロップの姿があった。そのポケモンの出現により、デリバードは距離をとって牽制している。

「……ギャロップ、シユン君とサンドの氷を溶かしなさい」

そしてトレーナーの指示を受けて、氷付けにされている俺とサンドへ向かってギャロップは口から炎を出す。炎は俺達の体をゆつくりと包み込み、そして氷を完全に溶かした。

今まで支えともなっていた氷が溶けたことにより、俺達は地面へと倒れこんでしまう。……足の力が、上手くでないのか。

「ごめんね、シユン君。助けに来るのが遅すぎたね」

そんな俺を気遣うように、頭上から声がかかる。

視線を合わせるように座り込み、俺の顔をのぞいてきた。その顔は今までのどのときよりも暗かった。

「いえ、絶好のタイミングでしたよ。——サツキさん」

——だから少しでも彼女の不安を脱ぎ去れるように、俺は彼女の名前を呼んだ。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv20

ピジョン♀ Lv22

ピカチュウ♂ Lv22

サナギラス♂ Lv33

サンド♂ Lv20

ラプラス♀ Lv35

ヘラクロス？

レポートに書き込みました!!



## 第十六話 VS イーブイ 戦う理由

「……ある程度最悪の状況は想像していたのだけれど、これはその想像を上回るわね」

俺を一瞥し、さらに周囲の環境を見渡したサツキさんが苦々しく呟いた。その表情は未だに曇っており、今までの彼女の天真爛漫な笑顔は影を潜めている。

……それも当然の話か。

俺は先ほどの凍結によってすでに立ち上がるのも辛い状態だし、手持ちポケモンも同様だ。ピカチュウとピジョンはすでに戦闘不能、サンドも先ほど氷が解けたばかりで息も絶え絶え、捕まえたばかりのヘラクロスも全身に火傷によるダメージを受けている。

周囲の木々も一面凍りついており、ことの惨劇さを物語っていた。このようなこと、想像できるわけがない。まさか仮面の男がこれほどの力を持つていたなんて。……いや、こんな力の使い方をすることができるなんて、少なくとも俺は想像できなかった。

「好き勝手やってくれたようだけど……ここから先は、そうはさせない」

サツキさんはさらにスターミーとニドクインを繰り出し、敵を牽制している。皆臨戦態勢に入っていて、いつでも戦えるように身構えている。

「……なるほど。貴様が例の女か。話は聞いている。」

できればこの場で排除しておきたいところではあるが……この場は引かせてもらおう」

しかし仮面の男はそれに応えない。

サツキさんとそのポケモンを見るや、戦闘をやめて身を翻した。

……あれほどの力を持っている人間が手出しさえせず？ それほどの力をサツキさんは持つているってことか？

「あら？ 大組織・ロケット団を率いているような方が、女の子一人を目の前にして一戦も交えることなく逃げ出すのかしら？」

「らしくない挑発だな。死に損ないの雑魚を庇いながら私と戦えると

でも思っているのか？」

「……くっ！」

挑発に乗らず、淡々と相手は言葉を吐いた。

ここまで言われて何もできないのはさすがに腹が立つ！ ……だが、言い返す言葉もない。今の俺では、足でまとい以外の何者でもないのだから。ただ、歯を食いしばるしかなかった。

「安心しろ。そちらが手出ししなければ、こちらもこれ以上危害は加えない。」

貴様とて一刻も早くその小僧を医療機関に連れて行きたいはずだ。

「……違うか？」

「……いいでしょう。ならば、早く私達の視界から消えて」

「ふん。言われるまでもない。……さらばだ、私に刃を向けた愚かな者達よ。」

次に会った時は、今回のように上手く生き残れるとは思うな。私は躊躇しない」

交渉は成立した。

サツキさんが同意すると、仮面の男はグリバードに捕まって空を飛んでいく。おそらくは本拠地に戻るのだろう。

……戦いは終わったのか。やつの言うとおり、次こそは本当に生き残れるか心配だな。

「うぐっ！」

安心したせいか、痛みが戻ってきた。

……体が痛い。その上に、動かしにくい。

さきほどの氷漬けにされた影響か。体の感覚も、どこか変だ。長い時間受けていたわけではないとは言っても、弱っている体にあれは危険すぎたな。

「シユン君!! 大丈夫、しっかり！」

頭のほうからサツキさんの声が響く。……しかし、視界がぼやけて姿が見えない。

「ギャロップ、すぐにコガネシティまで向かうわ。急いで！」

俺をなんとかギャロップの体に乗らせて彼女もその体に乗ると、す

ぐに走らせる。

……速い。乗り物並の速さではないだろうか？

吹きぬいていく風が妙に心地よく感じて……意識が、段々と遠のいていく。

サツキさんに背中を預けて、そのまま俺の意識は途絶えた。

—— 次の日 ——

『……そうか。ウバメの森でそのようなことがあったのか』

パソコンの画面越しに暗い声が響く。

映っているのは現在ヨシノシティにいるオーキド博士。サツキの報告に表情を隠すことが出来ずに、そう呟いた。

「はい。ようやく仮面の男と対峙できたというのに、申し訳ありません」

「いや、君達が無事だっただけでも十分じゃ。なにせ今回は急すぎたからのう。

それよりも……シユン君と彼の手持ちポケモン達の容態は？」

サツキが自分を責めるように謝罪するが、そんな彼女を責める事無くオーキドは諭した。今回の戦いはあまりにも急な出来事だった、仕方のないことであると。

だからこそ、博士はこの戦いで負傷した少年の身を案じた。

「彼自身、軽度の凍傷を負っていました。その場で応急処置を行えたのですぐに復帰できるはずです。医師の診断でも、退院して問題ないといわれました。

ポケモン達もセンターでの治療は終わっています。ただ……ピジョンだけは傷の治りが遅く、まだ時間を要するかと」

「……そうか」

シユンとポケモン達はすぐにも出発できる状態にまで回復している。

しかしそんな中、シユンを庇って倒れたピジョンだけは未だに傷が治りきっていない。敵の一撃をまともにくらってしまったせいか体

の痺れが残っており、片翼をまともに羽ばたかせることができないでいる。

「一度そちらにピジョンを送って診てもらいたいところではあるのですが……今はそれができませんので、もうしばらくコガネシティに滞在するかもしれません」

「わかった。たしか、新たにヘラクロスもゲットしたと言っておったしろう。通信が回復するまでは仕方があるまい。シюн君にも無理をしないよう、言っておいてくれ」

「はい、そのことは十分言い聞かせておきます」

ピジョンの容態、そしてシюнの手持ちポケモンが七匹にまで増えたことから一度ポケモンをオーキドの元に送りたいところではあるのだが、現在全国に広がっている通信障害がそれを許さない。

しばらくの間、通信が回復するかピジョンの回復までは進度が遅くなることは仕方のないこと。それを理解したオーキド博士は彼女の提案を承諾し、またシюнに忠告するように伝えた。

「それではもう一つ、敵についてわかったことを少しでもいいから教えてくれんかの？」

「仮面の男に加え、敵の幹部三人も逃走したために特に有力な情報はありませんが……シюн君が敵から聞きだしたことによると、どうやら私達の存在がすでに敵にも知られていたようです。最も、オーキド博士達から依頼を受けたということは知らないようですが」

仮面の男と共に、ロケット団の中隊長三人の姿も消えていた。

シюнからも話を聞いてやはり三人の幹部がその場にいたことが発覚したのだが、どうやら彼らがコガネシティへ向かっている間に姿を消したようだ。警察が駆けつけたころには誰もいなかったという。

ゆえに今回つかめた情報は直接対峙したシюнから聞いたことだが……これが一番重要なことだった。

「……こちらの動きが読まれていたのか」

「わかりません。ですが私のことも知っているようですし、何らかの情報源を持っている可能性があります」

「ふむ。……それについてはこちらでも調査を進めよう。君達は気に

せずに旅を続けてくれ」

「はい。お願いします、オーキド博士」

敵がどうやって二人の存在を知ったのかは知らないが、これ以上余計な負担をかけるわけにはいかない。

調査の件を引き受け、オーキド博士は安心させるように声をかけた。

その後も何度か話を交え、これからのことについて語るとサツキは通信を切る。

その後彼女が向かったのはコガネ総合病院だ。ジョウト地方の中でも大都市であるコガネシティは病院も発達していて、様々な診療科がある。かつてゴールドが世話になった病院でもあった。シユンが負傷した時もここに運び込まれ、今も様子見ということで入院しているのだ。

三階の彼が今いる病室の前に立ち、二回ノックをした後扉をガラリと開けた。

「シユンくん、おとなしく寝てた？」

サツキはできるだけだけ明るく、彼の心配を拭う様に声を出した。

「……あら？」

しかし返事はなく、そしてベッドに横たわっているはずの彼の姿もない。

……彼の相棒であるポケモン達が全員いないところを見ると、どうやらサツキが目を離している間に、どこかに行ってしまったようだ。

「はあ。今は無理をしてもダメだっていったのに……もう！」

愚痴を吐いていても仕方がない。

すぐさまサツキは反転し、いなくなったシユンを探すべく病室を去った。

——果たしてどういうお仕置きをしようか、とサツキは思考をめぐらせる。そのせいで彼のポケギアに連絡するという手段は思いつかなかったようだ。

同時刻。

コガネシテイの一角、西に広がる海一面を見渡せる広場にシユンの姿はあった。

その側には彼の相棒であるピカチュウと昨日助けるために捕まえたヘラクロスもいる。

一人と二匹は何も語らず、ただひたすら海を眺めていた。海から吹いてくる潮風がシユンの髪をなびく。

そんなことも気にせずじつと前だけを見据える彼の瞳はどこか痛々しく、弱々しいものであった。

「俺達も、まだまだだな」

今こうやってあの時のことを思い出しても、やはりあの時と同じ考えが浮かんでくる。

鮮明に昨日の戦い——ウバメの森での戦いが脳内に呼び起こされる。

ロケット団三幹部と名乗っていた男達相手に勝利を収めることはできたものの、仮面の男を目の前にして、俺は手も足もでなかった。手持ちポケモン達を危険にさらし、俺自身もサツキさんがいなかったならば間違いなく殺されていた。

……こんなことで、どうやってゴールドを救えるっていうんだよ。「サツキさんにはゴールドのことを言わなかったけれど、これだよ。良かったよな？」

相棒たるピカチュウに聞いてみると、頷いて俺の意見を肯定してくれる。

手持ちポケモンが七体になったことによって、腰のベルトにボールを装着するにも一個あまることになり、ピカチュウは昨日からずっとボールから出ている状態なのだ。

今日の朝、目が覚めてからサツキさんと昨日起こったこと、新たに

入手した敵の情報のことは話したもののゴールドのことは一切話さなかった。

いや、話せなかったというのが正しいか。俺自身まだあいつが死んだとは思っていない。無駄に運がよく、生命力を持ったゴールドだ。きつとどこかでまだ生きているだろう。俺はそう信じている。

「あいつのためにも、俺は強くならないといけない」

弱いままでは、強くなければ何もできやしない。

……父が昔言っていた言葉が思い返される。想像するだけでも腹が立つ男だが、それでもあの言葉だけは今でも俺の心に刻み込まれている。

『いいかシユン。強くなければ何もできやしない。お前にも必ず、戦わなければならない理由ができるはずだ。そのときのために、後悔しないためにお前は強くなっておけ』

『——戦わなければならない理由?』

『そうだ。大きくわければ、理由は二つある。』

一つは——どうしても倒さなければならない存在てきが現れたとき。

そしてもう一つは——どうしても守らなければ、救わなければならない存在ひとができたときだ』

……今ならばあの男が言っていた言葉の意味がわかる。

仮面の男という倒さなければならない敵、そしてゴールドという救わなければならない仲間。

もう俺が戦う理由は明確になっているんだ。ならばあとは強くなるだけ。それだけなんだ。

「だったら、こんなところでいつまでも足踏みしているわけにはいかないよな!」

気丈に振舞うと二匹も賛同するように笑みを見せてくれる。

……それだけじゃない。こいつらのためにも、もつと強くならなければならない。

「……というか、話は変わるがヘラクロス。お前は本当に着いてくるのか? 治療はもう済んだんだし、野生に帰ってもいいんだぞ? 別に俺はお前が離れてもとやかく言うつもりはないんだから」

改めてヘラクロスに問うが、コイツは俺の元を離れる気はないらしい。

どうやら昨日仮面の男に一方的に負かされたことがショックだったようだ。それで仮面の男にリベンジを果たすため、より強くなるために俺と行動を共にすることを選んだ様子。

まあ俺にとっては少しでもほしい貴重な戦力だし、俺は構わないけどな。

「じゃ、これからよろしく頼むぞヘラクロス。俺のチームは格闘戦士がいないからな。頼りにしてるぜ」

「任せろ」と言わんばかりに腕で自分の腹を叩いてみせるヘラクロス。

この陽気な性格ならチームの皆ともすぐに仲良くなってくれそうだな。肉弾戦は今までサナギラスくらいしか戦力がいなかったから、本当に頼れる存在だぜ。

「——てやー!」

「ん? 今何か聞こえなかったか?」

突如誰か——男の人の叫び声のようなものが聞こえた。

遠い位置からなのか、詳しくは聞き取れなかったが。しかしピカチュウも何か聞こえたようで、コクリと頷いている。

「……マテや、止まれやこの!」

「あ、誰かこっちに走ってきている。……というか、何か追いかけているな」

振り返ると、誰かがこちらに向かって走っている小型の何かを追いかけている姿が見えた。

おそらく追っている相手はポケモンだろう。四足歩行で走り、茶色の体毛で覆われている。耳はピカチュウのような——どちらかというところのような長い耳だ。さらに特徴的なのは、首まわりにふっくらとたくわえた白い毛皮と、同じくふっくらとした先端だけが白っぽい尻尾。

……なんだっけ? どっかで聞いたことがあるような特徴だな。見たことはないけど。



「ああくそっ！ こないなところで……お！ ちよいとそのあんさん！ そのポケモン捕まえたつてやー！」

「ああ、やっぱりそういうことか」

進路方向にいる俺の存在に気づいたのか、男は俺にこのポケモンの確保に協力するよう言ってきた。

大方自分のポケモンに逃げられたとかそういう理由だろう。仕方がない、手伝ってやるか。

……だが乱暴な真似はできないな。みたところそんな危険なポケモンには見えない小柄なポケモンだし、できれば無傷で押さえ込みたい。となるとサナギラスはダメだな。

「んー……まずは確実に包囲網を作るとしよう。ヘラクロス、空中から相手の上に回りこんでくれ」

俺の指示通り、ヘラクロスが羽を羽ばたかせて相手ポケモンの上空へと向かう。そして同じ速度を保ってこちらへ向かってくる。

ここは丁度壁にはさまれた一本道、背後は海だしこちらに追い込めば逃げ場はない。

「よし、ピカチュウ。相手の足元に“でんじは”だ」

そこにダメージを与えずに麻痺させる効果をもつ“でんじは”を打ち込む。あくまで牽制だが、これなら万一当たってしまったても相手を傷つけることはないだろう。

ピカチュウの尻尾に電気エネルギーを溜め込んだ球体が形成され、打ち出される。狙い通り相手の手前の地面に当たり、動きが止まった。牽制の意味は伝わったのだろう。

挟み込まれた事実を知り、ポケモンはその場で右往左往している。これではとは保護すればいいだけだ。

「おとなしくしてくれれば、何もしないよ。だから素直に……っつて、聞いてねえし！」

「あんさん！ そのポケモン頼んだで！」

「……了解した！ ヘラクロス、その子を掴み挙げろ」

こちらから歩みだそうとした瞬間、再びこちらに向かってきた。

どうやらおとなしくつかまる気はないようだ。トレーナーの依頼

もあつたので、確保に移るとしよう。

空中のヘラクロスがゆっくりと高度を下ろしていく。さすがに空中に体を持っていかれては何も抵抗できないだろう。

そしてポケモンも大きくなりつつある影によつてヘラクロスの接近に気づいたのか、視線を上空へと上げた。だがもう遅い。ヘラクロスが両腕を広げて確保に移り……そして吹っ飛ばされた。

「……え!? ヘラクロス!」

いきなり相手のポケモンが飛び上がった。つまり、*「ずつき」*だ! 至近距離だったせいでヘラクロスも防ぐことはできず、まともに食らってしまった。……上手いなあのポケモン。まあヘラクロスもすぐに体勢を整えているし、あまりダメージを受けている様子は見えな  
いが。

「ピイツ!」

「ちよつ! ま、待てピカチュウ! 乱暴な真似はするな!」

相手に攻撃の意図があると読んだのか、いきなりピカチュウが両頬の電気袋から電気を放出した。

ポケモンのトレーナーもいるというのにそれはまずい! すぐさまピカチュウに辞めさせるよう促した。

……そう言っている間にもポケモンはこちらに走りこんでいる。

いや、ここにはもう逃げ場はない。トレーナーも一緒に来てくれれば完全に逃げ道を封じられる。

「……大丈夫だ。怖くないから、こっちにおいで」

だから、せめてポケモンが傷つかないうちに手を差し伸べた。

ポケモンの気持ちはわからないけれど、一瞬表情が変わった気がした。

そのまま止まってくれ、と祈りながら待っている。このポケモンも無理はしないはずだ。

「……ピイツ!!」

「ぐっ!」

「ピカア!」

……そしてそのポケモンは勢いそのままに、俺の胸元へと*「たいあ*

たり”してきた。

押し出されたことで体が宙に浮かぶ。小柄といってもそれなりの威力はあったようだ。

攻撃を受けた後ではまともに体を動かせない中、視線を少し下げると……体が海と陸を隔てる柵を越えているということに気づいた。

「……っつてうそおっ!？」

信じられないが、そう言っている間にも体は重力に従って水面へと落ちていく。とにかく、このポケモンだけは守らないと!

腹に収まっているポケモンを抱えると、すぐにバシヤンと大きな音が響いた。……っつ。まあ、胸と背中が痛いけれどなんとか怪我はなさそうだな。

「くそっ、ヘラクロス、来てくれ!」

バタ足で体を浮かせ、ポケモンへと呼びかけた。

まもなくして声を聞きつけたヘラクロスが顔をのぞかせる。

今はピジョンがいなかったためこいつに頼むしかない。

……するといきなり右腕で抱えている先ほどのポケモンがじたばたと暴れだした。いきなりの水中で混乱しているのか?

「おい、おとなしくしている! 今助けてやるから!」

「ブーイ!」

「……大丈夫だっつて。怖くなんかない。いい子だから、おとなしくしよう。な?」

両腕で抱え込み、頭を撫でながら優しく語りかける。

ようやく気持ちが通じたのかポケモンがきよとんとこちらを見つめてくる。

こちらもしつと見つめ返せば、ポケモンはようやく動きを止めて俺に体を預けてくれた。

「よし、いいぞ。……ヘラクロス、頼む」

ヘラクロスに持ち上げられてもらっている間にもこのポケモンを見つめ続ける。

……とても可愛らしい。こうして見るとやはり攻撃的なポケモンとは思えなかった。

「大丈夫でつか!？」

「ああ、このイーブイのトレーナーですか？ 俺は大丈夫ですよ」  
柵まで追いかけていたトレーナーらしき人が駆け寄ってくる。

何とか気丈に返し、こちらの無事を示した。

地上に降りてこのポケモンを解放する。今度はいきなり逃げ出すことはなく、体全体をぶるぶると震わせて水分を飛ばしている。

「……こっちにおいで。体を拭いてやるから」

自分でもタオルで髪の毛などを拭きながら手を差し出せば、今度は躊躇する動作を見せながらもこっちにゆっくりと歩み寄り、体を預けてくれた。

少しは信じてもらえたってことかな？ タオルで体全体を拭いてやれば、気持ちよさそうにうつとりした表情を浮かべている。……いちいち可愛いな、オイ。

「何から何まですみませんな。ホンマ助かったで、ありがとな」

「いえ。それよりも何があったんですか？ それとこのポケモンは？」

「ああ、さすがにポケモンのことは知らなかったんかいな？ このポケモンはイーブイというてな、わいが今育てているポケモンの一休や」

「……イーブイ。そうか、こいつがイーブイか」

「せや。聞いたことくらいならあるんちゃうか？」

たしかに話で聞いたことはあった。

——イーブイ。ポケモンの中では珍しく複数の進化形態を持つという不思議なポケモンだ。こうして見るのは初めてだが、見た限りでは特に変わっている様子は見られず、そうは思えないのだが。

「まあわいも育て始めたのは最近なんやけど……どうもこのイーブイはわいに心を開こうとしてくれへんねん。今も少し交流を凶ろうとしたらかみついてきおつてな」

「……心を開かないというか、多分このイーブイは少し臆病なだけだと思えますよ。」

怯えているんじゃないですか？ 自分よりもはるかに大きな人を

目の前にして」

「なんや、そんなんわかるんかいな？」

「なんとなくですけどね。さつきもこいつは俺に怯えていたように見えましてし」

あくまで感覚的なもので上手くは言えないがな。

だがこういう風に攻撃してくるといいうのは攻撃的というわけではなく、とても臆病な場合が多い。

今でこそこうして俺の側にいるが、今は安心していいからだろう。

「……あんさん不思議な人やなあ。そないなことまでわかるとは」

「いえいえ、あくまで俺の主観ですので。気にしないで下さい」

「いやいや、参考にさせてもらうで。……おっと、自己紹介がまだやったな。

わいの名はマサキ。ポケモン転送・預かりシステムの開発者や」

「どうも。俺はワカバタウンのシユンっていいいます」

差し出された手を握り返し、俺も名前を告げた。

この人がポケモン転送・預かりシステムの開発者。そういえば以前新聞の記事でこの顔を見たことがあったな。

「……ワカバタウン？ シユン？ ……あんさんひよつとして、オー

キド博士の知り合いか？」

「え？ ええまあ、知り合いと言えば知り合いですけど」

「やっぱりか！ よかった、丁度探してたんや！」

「……探してた？」

オーキド博士の知り合いだと知ったとたん、嬉しそうに声を上げるマサキさん。

……特にオーキド博士からは何も言われてないんだが。一体なんだろう？

「実は博士からポケモン図鑑を託された少年のことは聞いておつてな。

それで君達の旅をサポートするために作つといたものがあんのや！

わいの家はすぐ近くやさかい、ちよつと家まで来てくれんか？」

「ええ。俺は構いません」

「そうとなれば善は急げや。……風呂にも入った方がええし、さつさと行くで」

「……どうも」

たしかに、このままでは風邪までひいてしまう。

お言葉に甘えて、俺達はマサキさんの家を訪ねることにした。

「……お、風呂から上がったんか？」

「ええ。すみません、お借りしました」

風呂を借りて体を温めると早速先ほどの話の続きだ。

一応室内ということではラク羅斯はボールに戻したが、ピカチュウと……それとなぜか先ほどのイーブイが俺のすぐ傍にいる。

「そないなこと言わんでや。あれとて元々はうちのせいやったんやから。」

……それで、あんさんに渡したいっていうのは、これのことや」

「……なんですかこれ？ コードつきの電子機器ですか？」

「せや。それをあんさんのポケギアとつないでみ」

「こうつすか？」

手渡されたのは黒いコードがつけられている小型の電子機器のようなもの。

言われたとおりにその先端をポケギアの端子につないでみると。パチツと音を立てて接合した。

「その名も『携帯転送システム』！」

今ポケモン転送マシンが原因不明の故障中やろ？ それでその間の措置として製作していたもんや！」

「……つまり、これがあれば今までと同様にポケモン転送マシンの役割を果たせると!？」

「せや。……と言っても、それはあくまで送信用で送り返してもらふことはできへんけどな。そこであんさんにこれも渡しておく」

「……これは？」

そうしてもう一つ渡されたのは、箱型の機械。真ん中にモンスターボールのマークが入っている。

「これはその転送システムの受信先となるものや。すでに同じものをオーキド博士の元に送ってある。」

もしもポケモンを送り返してほしいとき、オーキド博士に頼めばこれを使って送ってもらうことができるで！」

「……なるほど。これでポケモンの転送も自由にできる。ありがとうございますー！」

「いやいや」と手を振ってお礼に答えてくれる。

本当に大助かりだ。丁度ピジョンの検査のためにオーキド博士の元に戻ろうかとも考えていたくらいだったから、まさにベストタイミングである。

「冒険頑張ってや。応援してるさかい。……それと、あんさんが構へんなら……そのイーブイのこと、頼まれてくれんか？」

「……え？ イーブイを？」

「せや。わいにはどうあつても懐かんのに、もうあんさんにすっかり懐いているようやし。その方がイーブイにとつてもええやろ」

俺の横では腕に頬ずりしているイーブイの姿がある。

……異様に懐かれたな。逆ではピカチュウがうめき声を出しているし。

「でも、あなたはいいんですか？ イーブイといえば、貴重なポケモンでしょう」

「気になさらんでも。それに実はもう二体イーブイを育ててるんや。以前イーブイの事件に巻き込まれてから異常にイーブイを好きになつてもうてな……」

「あ、そうですか」

それでもいいのかと聞いてみたが、どうやらいらぬ心配だったようだ。

イーブイが入っていたモンスターボールを貰い、俺はもう一度イーブイと向かい合う。

「……お前は俺と一緒にいきたいか？」

「ブイッ！」

「よし、なら一緒に来い！」

満面の笑みを浮かべて賛同してくれたイーブイ。

自分からボールへと入っていった。……これでポケモンは八体目だ。ピジョンとあと一体、オーキド博士の下に送らないとな。

「それじゃあマサキさん。色々とありがとうございました」

「こつちも通信システム復旧を終わらせるさかい、シユンも頑張りいやー！」

「はい！ それでは、またいつか!!」

そう言っつて俺達は別れた。

携帯通信システム、イーブイ。新たなポケモンと道具を手に入れた。

……ここまですてもらったんだ。もう突き進むしかない！

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます………

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv20

ピジョン♀ Lv22

ピカチュウ♂ Lv22

サナギラス♂ Lv35

サンド♂ Lv21

ラプラス♀ Lv35

ヘラクロス♂ Lv37

イーブイ♀ Lv28

レポートに書き込みました!!



## 第十七話 VSミルタンクI シユンの不覚

「それではオーキド博士。ピジョンとサナギラスのことをお願いします。特にピジョンのことは、万全になり次第すぐに教えてください」『おおわかつておる。ウツギ君と連携し、一刻も早く全快の状態にまでもっていくとしよう』

「ありがとうございます。それでは、通信を切らせていただきます」

ポケギアの通話を切り、画面は真つ暗となった。

早速貰ったばかりの携帯通信システムを使い、俺はオーキド博士の下に負傷したピジョン、そしてサナギラスを送った。

ピジョンは治療のために。そしてサナギラスは……俺達がさらに強くなるために。

現時点でサナギラスは俺の手持ちポケモンの中でも切り札的存在であった。純粋な力量<sup>レベル</sup>で測るならば最近捕まえたラプラスやヘラクロスの方が上なのだが、俺がいつも頼りにしているのはサナギラスだった。いざというときも『こいつがいれば大丈夫』という安心感を持っていた。

……だからこそ、これから先強くなるためにはサナギラスだけに頼っているだけではダメなんだ。甘えるわけにはいかない。

そんな甘い考えでは駄目なんだ。

全員が強くならなければならぬ。そう考えたからこそ俺は逃げ道を塞ぐためにサナギラスを一度手持ちから外した。

今の手持ちポケモンはマグマラシ、ピカチュウ、サンド、ラプラス、ヘラクロス、イーブイ。あの二匹が外れたことにより、まだ進化も経験していないメンバーもいる、より小粒なメンバーとなった。

それでもこのポケモン達を成長させ、誰とでも戦えるようにすることが俺の最低条件であり今の目標だ。

ポケモン達が入った六つのボールを一瞥し、それから腰のベルトへと装着する。

ピジョンやサナギラスが戻ってきた時には見違えるほどに成長した仲間達を見せてやろう。

そう考えると気持ちも幾分か上向きになる。

先ほどよりもずっと軽い足取りで俺は病院へ戻っていった。

……今さらだけどサツキさんに何も言わずに随分出歩いてしまった。怒ってないかな？

「……そうですねー。地下通路と言っても、私達のような営業者が街の許可を得て、日を選んで自由に色々な仕事をしているくらいなので。実際は小さな商店街のようなものですよ」  
「そうですか。どうもありがとうございます」

コガネシティの地下深くに広がる地下通路。

そこで美容室を経営しているというお兄さんにイーブイの毛づくろいを依頼し、話を聞く。この地下通路のあり方を。

……しかしどうやらここもはずれか。ここに来るまでにも漢方屋があつたり一般のトレーナーが勝負を仕掛けてくるくらいで、不審な点は特になかった。

こういう場所にはいかにも何かありそうだと踏んだのだが、さすがにそう上手く話は進まないか。

病院でサツキさんと合流した後（その際に起こった騒乱は割愛する）、俺たちは二手に別れて街中を探索することになった。

このコガネシティはジョウト地方の中でも最も発展している盛んな都市であり、ショッピングモールやゲームセンター、ラジオ塔をはじめとして様々な施設がある。

逆を言えばそれだけの施設があれば裏もあると踏み、こうして手がかりがありそうな場所を探しては次々と探索しているのだが……口ケット団の口の字も見あたらないのが現状だ。

「ブイイイ」

「どうだ、イーブイ？ 心地良いか？」

「ブイッ！」

そう問えば明るく鳴き声を発するイーブイ。

……喜んでいる顔はまた一段と可愛らしく見える。本当に貴重な癒し系ポケモンだ。

これが終わったらデパートで新しいブラシでも買うとするか。自分でも毛づくろいした方が毛なみも整うだろうし、喜んでくれるだろう。

その後地下通路を一回り見た後はゲームセンターやラジオ塔、ショッピングモールと順を追って様々な場所を見て回ったものの、新たな発見はなく。

これ以上は予定時間を過ぎてしまうと考えた俺はサツキさんとの合流場所でもある、本日の宿であるホテルに戻ることにした。

すでに予約を済ませておいた一室にはサツキさんの姿があった。どうやら俺の方が長く時間を潰してしまったようだ。

しかし……

「……サツキさん、どうしたんですか？ そんな服持っていましたっけ？」

「お帰りなさいシユン君。これね、デパートで見たら気に入っちゃってね。……買ったかった」

「いや、買ったかったって……」

そういう彼女は見慣れない純白のワンピースに身を包んでいた。

露出は控えめだが、清潔感を醸し出す白は着ている本人の姿と相成って大人びた姿を演出している。……あかん、直視できない。

そんなこちらの心境も知らずに、テへと握りこぶしを作って頭を軽く小突く。

資金をオーキド博士から支援を受けているとはいえ、抜け目ないな……。いや、本来は調査のための援助なんだけど。オーキド博士もそう思って俺達に渡しているはずなんだけど。

「どう？ 似合ってる？」

「ええ、似合いですぎているくらいに」

「そう、ありがとう」

おかげでどこに視線を向ければいいのかわかりません。

その場で一回転するとフリルと共にサツキさんの綺麗な蒼い髪もなびいて、より魅力あふれる姿を見せ付ける。

お願いですからこれ以上俺を困らせないで下さい。このままでは旅の目的まで忘れてしまいそうです。

「それで、サツキさん。本題に入りたいんですけど……」

「わかっている。コガネシテイのことでしょう？」

残念だけど、こちらは何も手がかりはなし。新たに事件につながるものは見つからなかったわ」

「そうですね。俺も同様です。主要施設はほとんど全て見てきましたが、特に何も変わったことはなく」

改めて報告会となるが、両者とも何か手がかりになるものはなく、捜査は無駄足であった。

コガネシテイほどの巨大都市ならば何かしら見つかるはず、という考えはどうやらはずれだったようだ。

「わかりました。それでは予定通り、明日は午前中にコガネジムリーダー・アカネに挑むとしましょう。」

これ以上は散策しても成果は期待できないでしょうし、それよりは次の街に進んだ方がいい……」

「いえ、そのことなんてけどシユン君。アカネについては事件に関与していないということが発覚したの。だから、コガネジムに挑む必要はないわ」

「……え？　そうなんですか？」

「うん。オーキド博士から聞いたことなんてけど、アカネは最初に仮面の男が現れた時にラジオの生放送に生出演していてアリバイも確認済み。」

それ以外でもオーキド博士が彼女と共演したことがあったってことなんてけど、何も疑わしい点は見受けられなかったって」

「……成程。オーキド博士のお墨付きですか。それなら確かに、俺がわざわざジム戦を挑む理由はありませんね」

オーキド博士が直々に調べたというのならば間違いはないのだろう。

元々俺がジムリーダーに挑戦しているのは博士達からの調査の依頼のためであって、個人的なものではない。相手の無実が証明されているのならば俺が挑む必要はないのだ。

「では明日は準備が出来次第、次のエンジュシティにまで進むとしますか。ここである程度旅の道具を調達すれば、ここに滞在する理由もないですし……」

「……シユン君はそれでいいの？ 別にシユン君が望むのならば、ジム戦を行ってもいいんだよ？」

「俺がですか？ 別に構いませんよ。何もジム制覇を目指しているわけでもありませんし」

「でも挑みたいとも思っているんじゃない？ 少しでも戦いを経験したいって。少なくとも、ヒワダタウンでは君のそういう姿勢が私には見えたよ」

「……」

「それにウバメの森の一件も多分影響していると思うんだよね。折角旅に出たんだから、少しくらい自分の意見を言っていいたいんだよ？」

この人も俺のことは結構見ているようだな。

たしかにヒワダジム戦は挑む必要がほとんどないものではあった。それでも挑んだのは俺が強くなることを望んだからである。

そしてその望みは今さら強くなっている。仮面の男との戦いを経て、強くなれるならばどんな些細なことでも挑戦したいと思っている。

そんな中でのこのジム戦だ。ジムリーダーほどの人を相手にできるといふのならば、俺は是非ともチャレンジしたい。

「……明日だけ、時間を貰ってもいいですか？」

「うん。そういう風に我が俣を言ってもいいんだからね。私の方がお姉さんなんだから」

「ありがとうございます」

「どういたしまして。……それじゃあまだ時間はあるし、今日も少し

特訓する？ アカネはノーマルタイプのエキスパートだし、昨日シユン君が言つてた技の練習でもしようか？」

「いいんですか!? それなら、どうかお願いします」

「ええ。それじゃ早速行きましょうか」

そう言うときサツキさんはコートを羽織り、ベルトを装着して準備を進める。

……今はこの人に甘えさせてもらうしかないな。頼りすぎているというのは情けない話だが、今はそうすることが最善だ。

だからこそせめてその期待には応えよう。明日の戦いを意識しながら、俺は部屋を後にした。

——そして翌日の朝。

俺達は早々にコガネジムを訪れていた。

「わざわざありがとうございます、サツキさん。ジム戦を終えたら、ちゃんと仕事に戻りますから」

「気にしなくていいよ。私ももっと君のバトルを見てみたいという思いもあつたし」

「……ありがとうございます。それじゃあそろそろ行きましょう……」  
「うわああああああ!!」 ……か?」

ジムの扉を開けようと手をかけると同時に、中から何者かの悲鳴のような声が聞こえてくる。

声から察するに男性のものか？ ジムリーダーは女性と聞いているし、俺より先に挑んでいる挑戦者のものかもしれない。

「えっと……今のは？」  
「……なんだろうね？」

サツキさんも理解が追いつかず首をひねらせる。俺も予想できずに思わず扉から離れてしまった。

すると程なくして、中から中年のトレーナーが走り出してきた。

「畜生！ ふざけんじやねえぞあのポケモン！ 残り一体だけだった

のに……あんなのってねえだろ!!」

おそらく勝負に負けたのだろう、なにやら言い訳のような言葉を叫びながら走り去っていく。ポケモンセンターの方角だな。

「おおきに〜。また来てや〜」

「うん?」

そして遅れる形で一人の女の子がジムの中から出てきた。左右両側で茜色の髪の毛を縛っている。

今の口ぶりから察するにおそらくはこの人が……

「……コガネジムリーダーのアカネさんですか?」

「ん? そやけど、ひよつとして君チャレンジャー?」

「はい。ワカバタウン出身のシュンです。コガネジムに挑戦しに来ました!」

やはり予想通りジムリーダーだ。ノーマルタイプの専門家、アカネ。

特訓も受けたし、自信がある。堂々とリーダーに挑戦を突きつけた。

「ふーん。……まあええよ。中に入り。相手したる」

ジロジロと俺を観察するように眺めた後、ついてくるように促してジム内に入っていく。

やはり先ほどまで激しいバトルが行われていたのか、バトルフィールドのあちこちに戦いの後のようなものがうかがえる。

「さて、それなら早速バトルをはじめようと思うんやけど……バトルのルールはお互い一対一のシングルバトルでもええか?」

「一騎討ちということですか? 別に構いませんけど、なぜ?」

トレーナーサークルに入り、ルールを説明するアカネ。

ジム戦のルールなどはそのジムによって異なる。しかし一対一という試合形式とは珍しい。大抵は二体二であったり三対三と複数のポケモンでのバトルが主流なのだが……

「せないといっつもうるさいねん。負けた後、チャレンジャーは絶対『あと一体が〜あのポケモンが〜』とか泣いて騒いでく。」

うちの切り札に全然手出しできないまま終わるくらいなら、いつそ

最初からその一体だけで十分。

君とてどうせ、負けた後泣いてそのお姉ちゃんに慰めてもらうにしても……傷が浅い方がええやろ？」

「……………」

俺の中で何かが切れた気がした。頬がなにやら異常なほどに震える。

久しぶりだなこの感覚は。たしか昔、ゴールドと喧嘩をして口論になった時に感じたものだ。

「誰が負けて慰めてもらうって!? ……上等だ！ その勝負受けて立つ！ 後で泣いて謝っても許さねえぞ！」

「ええでええで。君も彼女への言い訳を考えといたら？」

「…………ぶっ倒す！」

にやりと口角を上げている顔が余計に腹が立つ。

泣かす、アカネを絶対に泣かす！ そうじゃないともう気が収まらない!!

この勝負に勝って、泣いた状態で謝らせてバッジをもらう！ 仮面の男とか、もうどうでもいい！

「シユン君。挑発に乗らないで。それでは相手の思う壺に…………」

「大丈夫ですサツキさん！ もう容赦なしに戦うので、早く観客席に！」

「…………そう。わかった」

信じてくれたのか、全体を見渡せる観客席へとサツキさんは移動していく。

その姿を見送って視線を相手へと戻した。すでにその手にはボールが握られている。

「準備はええな？ それならいくで！ ミルたん！」

ボールから飛び出してきたのはミルタンク。

乳牛のような、ノーマルタイプの中でも重量級のポケモンだ。

体力に優れ、並大抵のポケモンでは苦戦を強いられるだろう。しかし…………

「ノーマルタイプの対策ならしてある！ 行け、ヘラクロス!!」



こちらもすでに準備はしてきた。

ヘラクロスをバトルフィールドへと出現させると、ヘラクロスは雄たけびを上げて敵をにらみつける。

ゲットしたばかりだが、レベルも中々高くノーマルタイプとの相性もいい。それに、昨日の特訓のおかげで新たな技も教えてもらった。「セオリー通りの格闘タイプ、ヘラクロスか。子供の割には勉強してるんやな」

「……あんだだってまだ子供だろ！ ヘラクロス、先手必勝！ っつのでつくッ！」

もう相手のくだらない言葉遊びに付き合っではいられない。

ヘラクロスは羽を飛ばたかせ、一直線にミルタンクにぶつかっていく。

飛翔の勢いがついたことで威力も速さも増しているヘラクロスの動きを捉え切れなかったのか、ヘラクロスの角がミルタンクの体へとクリーンヒットする。

ミルタンクの体がふらつき、後ずさる。……しかし、右足を引いてその場で持ちこたえた。

「……チツ。やはり固いか！」

「その程度かいな？ ミルたん、ヘラクロスを逃がすんやないで！ 角を掴み取るんや！」

防御が固く、やはりこの程度の攻撃では切り崩せない。

するとミルタンクはそのまま攻撃直後のヘラクロスの角を掴み、動きを封じた。

「ッメガトンパンチッ！」

そして逆の腕を勢いよく振るい、ヘラクロスの胴体を殴りつける。

嫌な音と共にヘラクロスが吹き飛んできた。……強い。防御もそうだが攻撃もかなりのものだ。

「大丈夫か、ヘラクロス!？」

「……ッ！」

声をかけると、大丈夫だというように起き上がって首を回し再び臨戦体型に戻る。

だが今の一撃で相当なダメージをもらったはずだ。体力を考えても長期戦はこちらに不利か。

「休んでいる暇はないで！ ミルたん、〴〵ころがる〴〵！」

「っ!? ……来るぞー！」

追い打ちをかけるべく相手のミルタンクがその身を丸め、加速しながら転がってくる。

ここからでは相手の攻撃を防ぐのは間に合わないか? ……それならば!

「ヘラクロス、〴〵かわらわり〴〵で迎え撃て!!」

どンドン迫ってくる中、ヘラクロスはその場から逃げない。

俺の声に応じ右腕を構えて待ち構える。まだ射程距離ではないのだ。

十分に敵を引きつけ、そしてまさに攻撃が来るというタイミングで腕を思いっきり振り下ろした。

ヘラクロスの渾身の力がかかった右腕が、ミルタンクと衝突。その威力は大きく、転がり続ける相手を右へと振り払った。

「よしっ、いいぞヘラクロス！」

昨日サツキさんに教えてもらった新技だ。かくとうタイプのヘラクロスには元々相性が良かったらしく、すぐに適応した。

おかげで相手の攻撃を防ぎきっただけではなく、相手にダメージまで与えることができた。この一撃は大きい!

「いいや、まだやで」

「なにっ!?」

そんな時にアカネがポツリと呟いた。

すると、今も転がり続けているミルタンクがその言葉通り突如方向を変え、再びヘラクロスへと迫っていく。

「まだ〴〵ころがる〴〵の攻撃は続いている！」

「まさか……ヘラクロス、もう一度〴〵かわらわり〴〵だ！」

なんとか反応してもう一度ヘラクロスは迎撃体勢に入る。

……しかし、ヘラクロスの攻撃が決まってもミルタンクの軸はぶれず〴〵ころがる〴〵が命中。力負けしたヘラクロスは空中へと投げ飛ば

された。

「なっ……そんなー！」

「――威力つてのはな、単純な速度と重さの掛け算なんや。重ければ重いほど、速ければ速いほどその威力は増していく。」

そして“ころがる”は徐々に勢いを増していく技。そんなやわな力で受け止められるほど、うちのミルたんは甘くないで！」

空中へと吹き飛ばされたヘラク羅斯はそのまま地面へと叩きつけられた。

何かをアカネが言っているが、耳に入っていない。

俺はただヘラク羅斯を見続ける。……しかしその体はピクリとも動かない。

「ヘラク羅斯、戦闘不能！ よって勝者、ジムリーダーアカネ！」

「まさか……」

審判が旗をアカネの方角へと上げる。

それはすなわち勝負が決したということだ。……つまり、

「俺の負け……？」

「顔を洗って出直してきーや。最近のチャレンジャーの中では、君は中々面白かったで」

「……ッ！」

ミルタンクをボールに戻してアカネは俺に背を向ける。何か言い返そうにも、言葉が見つからず。

考えている間にアカネは去っていった。……サツキさんに促されてようやくヘラク羅斯をボールに戻し、俺はコガネジムを後にした。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv24

ピカチュウ♂ Lv25

サンド♂ Lv21

ラプラス♀ Lv35

ヘラクロス♂ Lv38

イーブイ♀ Lv29

ボックスメンバー

ピジョン♀ Lv22

サナギラス♂ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第十八話 V S ミルタンクII 力を打ち破れ

乾いた音が響く。

俺には最初それが何が起こったのか、何の音なのかわからなかった。

いきなり右へとブレた視界や徐々に熱を持ち始める左の頬、そして今までの経験から『目の前の相手に頬を叩かれた』という予測を立てたがそれはありえない。

何故なら、今日の前にいる女性はそんな事とは完全に無縁だからだ。驚きを隠せないまま、視線だけをサツキさんへと戻す。

その彼女は無表情で、何も感情のこもっていない目で俺を見ていた。

自動的に脳が先程までの状況を振り返りはじめる。

(……コガネジムを後にして、一度ホテルに戻ろうという話になって、そして部屋についた途端彼女に呼ばれて、振り返ったらサツキさんが目の前まで歩み寄ってきて……)

そしてあの衝撃があった。サツキさんは手を振りぬいたまま、動こうとしない。俺には何があったのか未だにわからず、その場から動けない。

「――目は覚めたかしら？ シュン君」

声が聞こえる。

俺にはもはや聞きなれた筈の声だというのに、一瞬それが誰の声なのかわからなかった。

「ここまで難しくジム戦を勝ち抜いてきたから、アカネが仮面の男でないとわかったから、相手が女の子だったから、アカネが楽に勝てる相手だと思った？」

「……いや、そんなことは……」

「思っていたよね？ 少なくとも、今までの戦いの中で一番あなたは油断していた」

「……」

——『油断』。自分とは一番程遠いものだと思っていたそれが、まさ

に先ほどの自分の自分だったと断言された。

チャレンジャー

「まだ俺はバトルの経験も浅く、ジム戦にしても挑戦者である以上、油断なんて欠片も見せられないという状況だということにも関わらずだ。」「まともな対策も考えず、あらかじめ用意していた作戦ばかりで戦って、咄嗟の対応ができていなかった。ウバメの森の戦いでそれがどれだけ危険なことかもわかっていたというのに」

「……」

「しかもその作戦にしてもタイプ相性の問題であったり、そのポケモンの長所を活かすくらいのもの。新技に頼り切ってそしてその結果敗れた」

「……」

何も声に出せない。

言葉の羅列一つ一つが重くのしかかり、口を塞いでしまう。

サツキさんの言っていることが感じなかったわけではない。そうわかっているからこそ、それが真実だと理解しているからこそ何も言い返せない。

「これではポケモン達も可哀相ね。自分のことだけを考えて、ただ相手を倒すことしか目にならない主人トレーナーの指示に従うしかないなんて」

「なっ!? そんなことは……」

「だって事実、そうだったじゃない」

そんなことはない、という言葉が続けることさえできなかった。

ただ強くなるために挑んだというその考えさえ否定されてしまった。

「シユン君、手段と目的が入れ替わっていたよ。」

勝負の前はジムリーダーに勝つことが手段であり、その結果強くなるのが目的だったはずなのに、ジム戦の時はただ相手を打ち負かすことしか考えていなかった。

目の前の相手カネのことしか頭に入っていなかったんじゃない?

きつと勝負中は今までの旅の目的さえ頭になかったはずよ」

「うっ!?」

咄嗟に先ほどの勝負が脳裏に映し出される。

相手の挑発に乗って、ただアカネを倒すことだけを考えていた。

そしてその時俺は強さなど追い求めていなかった。そのためにジム戦に挑んでいたというのに、その目的さえ見失っていた。

「俺は……」

「先ほどのような試合を私はもう見たくはない。あんな姿を見せるくらいなら、もうワカバタウンに帰ったほうがいいわよ」

「ま、待ってくださいー!」

期待はずれだったと言う様に、俺に背を向けて去ろうとするサツキさん。

ここで何かを言わなければ全てが終わってしまう。そう感じて、気が付いたら彼女を引きとめていた。

「もう、負けません。もう自分自身のために戦ったりはしません。ですから……」

「……あまり無理はしなくてもいいんだよ。シユン君ができることをしてあげばいいんだから」

そう言っただけで彼女は視線を戻し、ようやく笑顔に戻ってくれた。

俺の手を握り落ち着かせてくれる。……それだけで心に随分と余裕が生まれた気がした。

「それでよし。シユン君がまたいつもの調子に戻ってくれたなら、私からは言うことはないよ。」

……だけどこれからどうする? コガネジムでは負けてしまったけれど、もう一度挑戦したい?」

「サツキさんがそれを許してくれるならば」

負けっぱなしというのはさすがに気がひける。それもあのような勝負だったというのならばなおの事だ。

「言ったでしょ、少しくらいは我が俣を言っても大丈夫だって」

「ありがとうございます」

「まあ、シユン君の状態が万全ではなかったとしても彼女のミルタンクは中々の強敵であったことは間違いないね。挑むにしても何かしら対策を立てなければならぬと思う。」

私も手伝うから、今日一日はポケモン達と一緒に今日の戦いを振り

返って作戦を考えていきましよう」

「……いいえサツキさん。今日は、この戦いだけは俺一人でやらせてください」

サツキさんの言うとおりに、あのミルタンクが強敵であったことは間違いない。

しかし俺は彼女の協力を一蹴した。こればかりは譲れない。これだけは甘えてはいけないんだ。

「え？ でも……」

「そうすることが一番良いと思うんです。」

大丈夫です、俺だって何もあの勝負から学ばなかったわけじゃないんで」

そうだ、冷静になった今ならばわかる。……たしかに強い相手ではあった。しかし歯が立たないほどの相手ではないと。

ならばこそ一人でできることは一人でやり遂げてみたい。そうしてポケモン達とも真正面から向かい合いたい。

「……わかった。でもそこまで言うのなら、次の挑戦で勝ってみせてね。私の提案まで断ったんだから」

「ええ。これ以上サツキさんの目の前で醜態を晒すわけにもいきませんから」

——絶対に次で終わらせる。

同じ我が侬を二回も言うのは自分でも許せない。元々挑む必要がなかった試合だ、これ以上長引かせるわけにはいかない。

俺は早々にポケモン達が入ったボールを腰につけ、部屋を後にした。

「……まったくもう。男の子って本当どうしようもないなあ」

ソファに腰掛け、誰もいない中で呟くサツキ。

しかしそう言いつつもその顔に不満の表情はなく、穏やかな笑みを浮かべた。



「でも、健気な子供が頑張ろうとしているんだから……見守ってあげるのが年上の私の役目ですよね」

「皆、出てきてくれ」

コガネシティの南、34番道路。

特訓に移る前に手持ちポケモン6匹を全員ボールから出した。

その姿に疲労は見られないものの、どこか心配そうな表情で俺を見つめている。先ほどの敗戦が響いてるのだろう。

「特訓の前に一つ言っておく。……すまなかった。」

サツキさんに言われて気づいたが、俺は先ほどの試合自分勝手に戦ってお前達のことを考えていなかった。

……本当に、すまなかった」

戦ったヘラクロスだけではない。ボールから見守っていた他のポケモン達にも俺は謝らなければならなかった。

これだけは最初にはつきりとしておかなければならないこと。俺のけじめである。

頭を下げると皆が俺に鳴き声で辞める様に言ってくるも、俺はその声が進むまで頭を下げ続けた。

「今回の敗北は相手の実力のこともあるが、全てが俺の責任だ。お前達が気にすることは何もないし、これから同様に経験を積んでいくべきだ。俺ならもう大丈夫だから」

そう語りかければ信じてくれたのか、ポケモン達も不安な表情が少しずつ晴れていく。

「……もう一度だけ俺はコガネジムに挑む。その戦いで今度こそジムリーダーに勝って、何も悔いを残さないようにする。だからお前達も協力してくれ」

そう言えば即座に首を縦に振って応じてくれた。

まだ俺のことをトレーナーとして認めてついてきてくれるこいつらには感謝してもしきれない。

ならば俺もできるだけのことはやってその期待と信頼に応えたい。「ありがとう。ただ、先ほども言った事だが相手の方も中々の強敵だ。それは戦ったヘラクロスが一番わかっているだろう」

戦っていたヘラクロスはそれを悔しそうにも認めるように頬をかき、他のポケモン達も表情を暗くする。

攻防に優れたあの巨体は「ころがる」によってさらに強化され、俺達の攻撃も防御も全て壊していった。

俺の問題もそうだが、ポケモン達ももう少し強化して挑みたい。これが最後の機会チャンス、勝利は確実のものでなければならぬんだ。

「だからこれから『そだてや』に行こうと思う。ピカチュウ以外は知らないだろうが、俺の友達が修行した場所と聞いている。丁度この34番道路にあるから都合がいい。今から向かうぞ」

サツキさんに頼めなかったのもこれが理由の一つでもある。

ゴールドの話では無茶苦茶な、こちらの都合も状況も関係無しに特訓をさせられたと聞いた。しかしその効果はたしかにあったと。

あのゴールドがそういうのだから効果は間違いない。そして今の俺にはその方がいい。サツキさんは効率も考えて俺のレベルに合わせよう。

……だが今の俺にはその優しさはいらない。甘ったれた根性を叩きなおすためにも、その方がいいんだ。

手持ちポケモン達を一度ボールに戻し、俺はコガネシティから南へと離れていく。特訓の場所を目指して。

「……なんや、性懲りもなくまた来たんかいな」

翌日の昼。俺達は再びコガネジムを訪れていた。

俺の姿を見てアカネは不敵な笑みを浮かべているが、そのようなこと関係ない。

「来るにしてもずっと先やと思うてたのに。十分慰めてはもらえたか？」

「随分と手荒いものだったけどな。おかげでもうすつきりしているよ」

今さらだけどあの頬の一撃は中々痛かった。意識すると同じ部分が痛くなるのは心理的なものなのだろうか？

だがサツキさんのあの一発で目が覚めたのもまた事実。今は感謝しておこう。本人は思い出して気恥ずかしくなったのか、先ほどから視線が泳いでいるけど。

「ええやろ。……ルールは変わらず一対一のシングルバトル。君が泣いて頼み込むようならば君の条件に応じてもあげるけど？」

「その必要はない。その程度のルール選択くらいは応じないとな。もとより、どんな条件であろうとも俺は二度と負けやしない」

そのために昨日一日鍛え上げてきたのだから。

俺もポケモン達も、昨日とは全然違う。今日は十全の状態で戦える。

その会話を最後に俺とアカネはそれぞれのトレーナーズサークル内へと移動し、サツキさんも観客席へと移動する。

「せならその違いを見せてもらおうやないか！ 頼むでミルたん！」

アカネが繰り出したのは予想通り昨日と同じミルタンク。きつと彼女の切り札なのだろう。

攻守に優れた重量級ポケモンだ。確かに強敵ではあるが、倒せない相手というわけではない！

「見せつけてやるさー。行って来い——サンドパン！」

ボールから出てきたのは一回り体が大きくなったサンド。昨日のそだてやの特訓の際に、サンドパンに進化したのだ。

背中に幾多の赤い針を背負い、腕にはより鋭くなった爪を身につけている。たくましく成長した姿を見せ付けるように、サンドパンは咆哮した。

サンドパンにとっては初のジム戦とは言っても強くなったことに自信があるのだろう、気負う様子は見られない。良い調子だ。

「今日はごっちからいかせてもらうで！ ミルたん、ごっちからごっちから！」  
いきなり得意技の“ごっちから”で来たか！

とても重量級とは思えないほどのスピードでミルタンクは転がり始めた。徐々にスピードが上がり、威力も上がっていることだろう。「まあわざわざ相手の土俵に立って戦うつもりはないが。サンドパン、あなをほるぞ！」

だがそんな相手の事情など知ったことではない。

サンドパンは鋭い爪で瞬く間に地面を削り取り、地中へと身を隠した。これによりミルタンクは誰もいない空間を通り過ぎ、しかも突出した穴によってバウンドして壁に激突して跳ね返った。

……危なっ！ サンドパンはかわしたけれど、逆に俺に命中しそうだったけど!?

「ちいっ。ミルたん、攻撃中止！ ……地中に逃げるとは、たしか前回とは違って逃げ腰やな」

「逃げているわけではない。勝ちに行っている。……それよりも、注意がおろそかになっているぜ」

「っ!? ミルたん後ろ!!」

「……ッ!？」

「そのまま“かわらわり”だ！」

突如ミルタンクの背後の地面が盛り上がり、サンドパンが躍り出た。

そのまま相手が振り返った瞬間に一撃、さらに相手が仰け反ったところに追撃の“かわらわり”が放たれる。

だがこれでもまだミルタンクは膝を突かない。なんとか持ちこたえて反撃とばかりに腕を振るうもの……その前に再びサンドパンは地面に身を隠した。

「この戦い方は……」

「そ。ヒット&アウェイ。一撃加えたらすぐに回避行動をとりダメーヂを蓄積させる。」

しかも、普通の戦い方と同じだと思っただら大間違いだぜ」

サンドパンは攻撃の他にフェイントを、強いて言えば次の攻撃への布石を打っている。

地中から出てきたと思えば攻撃せずにまた別の場所から地面へと

もぐり、サンドパン専用の地面の通路を作る。

この動きを繰り返すことにより、地中には無数の道が広がりサンドパンの行動範囲を広げる。それと同時に地面には幾多もの穴が出来たことによりミルタンクの「ころがる」が容易に繰り出せないようにする。

「これが俺の攻防一体のミルタンク対策だ。お前にはここから先、何もさせやしない！」

「……………いつまでも上手くいくと、思うな！」

「なにっ!？」

しかしついにサンドパンの動きに慣れ始めたのか、ミルタンクは横から攻撃しようとしていたサンドパンの腕を掴みとった。

「まずい！ サンドパン逃げろ！」

「逃がすか！ ミルたんもう地中になんて逃げられないよう打ち上げたれ、メガトンパンチ！」

「…………ギユウツ!!」

ミルタンクの重い拳がサンドパンのお腹へと炸裂し、短い悲鳴を上げた。

その威力は計り知れず、まともに食らってしまったサンドパンは空中へと打ち上げられてしまった。これでは回避行動は取れやしない。

「……………これで終わりや。ミルたん、とどめを！」

最高点に到達し、徐々に落下しつつあるサンドパンを見つめながらミルタンクは右腕を引き、攻撃の態勢へと移る。

空を飛ばないサンドパンではここから攻撃を避けることはできない。あと一撃を食らえば戦闘不能になってしまおうだろう。

「いやまだだ！ サンドパン、ころがる！」

……………最も、攻撃を受けてしまったらの話だが。

指示を受けてサンドパンは空中で丸くなり、落下の勢いも加えて高速回転する。

徐々に両者の間が短くなるなか、ミルタンクは腕を振り上げて迎え撃つものの…………その腕はサンドパンを襲うことはなく、逆にサンドパンの回転する無数の針がミルタンクを襲った。

「ミルたんー！」

無数の傷をその身に受け、さすがのミルタンクもふらついている。それもそのはずだ。

「サンドパンは体を丸めればトゲトゲのボール状になるんだよ。頭上から襲えば防ぎようのない攻撃ができる！」

サンドが進化する前から考えていた作戦が、サンドパンに進化したことでより強力になったのだ。

「あなをほる」で相手をかく乱し体力を削り取り、空中に投げ出されようとも「ころがる」で相手にダメージ倍増のカウンターとする。

「さあこれで終わりだ！　」ぎりさく」!!」

サンドパンは今もふらついているミルタンクに迫っていく。そして両方の腕を一気に振るい、鋭い爪で切り裂いた。

この一撃はまさにサンドパンの必殺技であった。その威力は傷ついたミルタンクでは耐え切れるはずもなく、その重い体が地面にと沈んだ。

「う……うそーん!!」

「ミルタンク、戦闘不能！　よって勝者……ワカバタウンのシユン！」

「ツしー！　やったぞサンドパン!!」

信じられない、とアカネが叫ぶ中審判の旗がこちらへ上げられ、<sup>ジャッジ</sup>判定が下された。

サンドパンが嬉しそうにこちらへ駆け寄ってくる。さすがに進化したことで抱きかかえることは難しくなったが、頭を撫でてやれば嬉しそうに頬を緩ませる。

……公式戦初勝負、お疲れ様だ。よくぞ期待に応えてくれた。この戦いでサンドパンも十分な経験を得られたはずだ。

「さあアカネ。お前が馬鹿にした相手はどうだった？　まあ、これが結果だ。おとなしくバツジを……」

「う……ううっ……」

「……うん？」

「ううう……うわあーん！　うあーん！」

「……え？　いやちよつと……え？」

「ううっ。……ひどい、ひどいすぎるわ！ そんなにムキならんでもええやん！ もお子供なんやから……」

「……………え？」

突如アカネがその場で泣き崩れてしまった。勝った後だというものにもものすごい罪悪感に襲われてしまう。

……てかちよつと待て。俺の時は散々言ってくれたというのに、自分が負けたらコレですか？ 女って卑怯じゃね？

「うっ…………ぐすっ。ひどいよお…………」

「…………いや、えつと悪かった。その…………」

「あーあ。シユン君が女の子を泣かしちゃったね」

「俺ですか、俺が悪いんですか!? そうですか!」

いつの間にか駆けつけてきたサツキさんまで敵に回ってしまい、まさに四面楚歌。

なにこれ、活躍してくれたサンドパンまで気まずそうに頬をかいているじゃないですか！ 力の加減を間違うなよ、怪我するから。

「しよがないか。この場は私が引き受けるから、シユン君は先に出ている。サンドパンもポケモンセンターに連れて行かなきゃいけないし」

「いや、でも…………」

「どうせシユン君は女の子相手にどうすればいいかわからないでしょう？」

「すみません、どうかお願いしますサツキさん。…………行くぞ、サンドパン！」

この場をサツキさんに任せ、俺はサンドパンと共にコガネジムを後にする。

決して逃げたわけではない。これは戦略的撤退というものだ。…………なんでジム戦で勝ったのにこんな形で去らなければいけないのかわからないけど。

まあ女性関連のことは、サツキさんに任せの方がいいからな。俺女友達少なかったからどう接すればいいかわからないし。

サツキさんもそれを感じて言ってくれたわけだし。…………ただ、あの

時逆に知っているって答えたら、サツキさんが敵に回ってしまうような気がしたが。

「いや、女性ってわからないものだな。悪いなサンドパン。折角のお前の活躍に水を差す形になっちゃって」

ジムの外に出ても気は晴れない。

しかし『気にするな』とサンドパンは腕をふるう。……良いやつだな、コイツ。男前だよ本当に。♪だし。

「ありがとうな。それじゃあ早速ポケモンセンターに行こうか。お前もあの一撃は効いただろう。ゆつくりボールの中で休んでいてくれ」  
サンドパンをボールに戻し、腰に装着する。

戦闘不能まではいかなかったもののあのミルタンクの「メガトンパンチ」をまともに食らったんだ。そのダメージは大きい。早く連れて行くでしょう。

「あの、すみません。その君、少しよろしいでしょうか？」

「え？ ……えっと、俺ですか？」

「ええそうです。あなたのことですよ」

ポケモンセンターへ向かおうとすると、いきなり近くから声がかかった。

問い返すがやはり俺のことを指定しているようだ。

そこにいたのは黒いスーツに身を包んだ若い男性だった。眼鏡をかけた知的な男で、整っている容姿はまもっている服に負けずに高貴さを醸し出している。

とてもではないが、旅の途中でバッグを持っているような俺とは到底つりあわないような相手だ。相手の意図が読めずに不審な目で見ってしまうのは仕方のないことだろう。

……表情が読めないのだ。目はまるで閉じているのではないかと疑うほどに細く、表情も常に笑みを浮かべていて変化がない。……本当に本物の笑みなのか、疑うほどだ。

「突然申し訳ありません。決して怪しいものではありませんのでご安心を。」

あなたに二、三質問したいことがあるのですが、よろしいでしょう



か？」

「……俺に答えられることならば」

「ありがとうございます。それならば早速。……あなた、サツキという女性のことをご存知ですよね？」

「ッ!？」

「やはりご存知でしたか」

……出そうになった声は抑えられたものの、表情までは隠し切れなかったようだ。

男は俺の変化を読み取り、満足したように笑みを深くする。

『サツキ』という女性。間違いなく彼女のことであっているだろう。

……サツキさんに、こんな男が何の用で？

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます………

主人公：シユン

持っているバッジ：2個（ウイングバッジ、インセクトバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv30

ピカチュウ♂ Lv28

サンドパン♂ Lv27

ラプラス♀ Lv38

ヘラクロス♂ Lv40

イーブイ♀ Lv30

ボックスメンバー

ピジョン♀ Lv22

サナギラス♂ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第十九話 VS ベロリンガ 招かれざる使者

「……突然失礼しました。いきなり声をおかけして驚きになられたことでしょうか」

「いえ。それより、あなたは？」

「私ですか？ 決して名乗るほどの人間ではありませんが、名前はパーバスと申します。このたびはサツキ様をお迎えに参上した所存です」

「……何？ サツキさんを迎えにだど？」

ポケモンセンターの休憩室の一角。ヘラクロスの治療を頼み、こちらに移動していた。

向かい合う形で座った俺達はさっそく先ほどの内容をこの男——パーバスという者と話している。

しかし、何の目的でここに来たかと思えばサツキさんを迎えに来たと言う。……意味がわからない。彼女がそれだけの地位の人で、何かやることがあるということか？

「はい。その前にあなたにお聞きしたいのですが、あなたはどこまで彼女のをご存知でしょうか？」

「どこまでと言われてもな。サツキさんがカントーのマサラタウン出身で、ポケモン達もかなりの実力を持っているくらいかと」

「なるほどなるほど。本当に詳しいことは知らないようですね。やはり『このような子供に大人の世界を知るには早すぎる』、そう考えたのでしょうか」

「……どういう意味だ？」

「そう睨み付けないで下さい、私が喜んでしまいますから。」

……言葉通りの意味ですよ。あなたはまだ若い。これから学んでいく時期でしょう。そんなあなたに余計な情報を与えたくなかった、ということですよ」

……ッ。いらつくな、こんなのはただの言葉遊び。俺を少しでも油断させて自分のペースに持っていきただけだ。

今は本当の情報を抜き出すことだけに専念すればいい。

事実、パーバスが言っていることが的外れというわけではないだ。

サツキさんは旅の初めのころから何かを隠しているそぶりがあった。俺の質問にだつて全て答えるわけではなく、それこそ自己紹介程度にしか答えてくれなかった。

手持ちポケモンについてもそうだ。一人の時や何か危機的状況に陥ったときくらいにしかポケモンを出さず、最近になって少しずつポケモンがわかつてきたくらい。

最初は俺のことをまだ信じていないのかと思っていた。だけど、パーバスの言うとおりで何か隠さなければならぬ理由があつたとするのならば……辻褄はあう。

「ならばあなたが教えてくれるのか？ サツキさんが俺に教えなかつた理由を」

「ええ。あなたにも納得し、サツキ様が私と同行することに賛成してほしいですからね。そのために私は今来たのですから」

「……なるほどね」

つまり一緒にいる俺を懐柔しようと思つたものの、サツキさんが一緒だと話すことが難しいから俺が一人の時を狙つたつてことか。

この口ぶりだと以前から俺達のことを見ていたということになる。それだけのことだということか。

「ご理解いただけただけなによりです。では、どこからご説明すればよろしいですかね……」

「最初から教えてくれ。彼女のことを、一から全て」

「……承知いたしました。では彼女の出自についてからご説明しましょう。」

まず、あなたも知つての通り彼女はマサラタウン出身です。しかし詳しく言えばこれは彼女の母親の生まれの地。父親はまた別の生まれなのです」

「母親の？ それじゃあ、サツキさんのお父さんがマサラの家に……」

「嫁いだということになります。問題はそこなのです」

「……父親の方に何か問題があるということか？」

ここまで説明されれば大体の想像は出来る。

マサラタウンは元からあまり大きな会社や建築物はなく、オーキド博士が研究所を建てているくらいのものだと聞いている。

そんな街の生まれだからと言って、何か大きな問題があるとは思えない。とすれば、問題は別の地から来た父親の方ということになる。「その通りです。お察しの通り、サツキ様の父親はとある大会社の所長を受け持つ、大富豪の家の生まれでございました。私はその家に仕える使用人でございます。」

父親はその家の四男として生まれたのですが……彼はその家の掟に従い、マサラタウンの一人の女性と結婚をしました」「掟に従ってだと？ どういう意味だ？」

「その家の決まりとして、『外の有力な人材の血を組み込む』という仕来りがあるのです。」

人望、指導力、経済力などなど。条件は様々ですが、マサラタウンに関しては『トレーナーとしての実力』です」

「……たしかにそれならばマサラタウンはうってつけだな」  
カントーで開かれるポケモンリーグの優勝者はここまで全てマサラタウンのトレーナーだ。それだけ優秀な人間が生まれているという事だ。

それで目をつけられたってことだな。そういえばロケット団もかつてマサラタウンの住民を狙って活動していたという話を聞いたことがある。

「しかし父親は恋に盲目になってしまいました。彼とて家を継ぐ継承権はあったにも関わらず、全てを捨ててマサラの女性の下へと行ってしまったのです」

「……政略結婚のはずが、本当に望まれた結婚になったってことか」「ええ。さすがにそこまでは誰も予想できていないことでした」  
恋のために組織を捨てて、自由を選んだってことか。そのまま継承権争いに巻き込まれたらただでは済まされなйдらうからな。

家族で暮らすのならば名を捨ててもマサラを選んだ方がいいという考えだろう。あの場所はそういう争いなんて皆無だろうし。

「しかしそれならばなぜサツキさんを？　彼女だってそんなこととはもう関係ないはずだ」

「いいえ。たしかに父親は継承権を放棄しましたが、彼女は別です。彼女もまた血を引き継いで生まれた人間であり、その資格がある。そこでこの度、彼女の祖父の命令でお迎えに上がった所存でございます」

離れても血筋が邪魔をする、ってことか。まあマサラタウンのトレーナーというのは事実だし、見過ごすわけにはいかないんだろうな。

「……あなたの言っていることはよくわかった。

しかしだからと言ってサツキさんが自分の意志とは関係なしに連れて行くことには賛成できない」

「そういうわけにもいかないのですよ。彼女はすでに実力もあり、そしてそれ以上に実績を上げているのですから」

「……実績だと？」

「おやおや、まさかそれさえも知らなかったのですか？　ならばお教えしましょう。彼女はかつて——」

「パーバス!!」

「——!？」

パーバスの声を遮って、声が遠くから響く。

様々な感情がこもっているようなその声には、相手を威圧するような感覚があった。

事実、パーバスは一言で押し黙っている。近づいてくる人影を目の前に、笑みも消えた。

「これはこれは。お久しぶりでございます、サツキ様」

「パーバス。あなたがどうしてここに？」

「お迎えに上がりました」

来たのはサツキさんだった。

パーバスを睨み付けるように問う姿は怒っている様にも見える。少なくとも俺は今まで見たことがないような表情だった。

サツキさんと合流してレギュラーバッジを手渡され、ヘラクロスの治療も終えた後、俺達は場所を移してカフェに来ていた。

「私は戻らない」

サツキさんはパーバスの意見をきっぱりと否定し、拒絶の体勢を崩さない。

先ほどから何度も一方的な交渉が行われていた。パーバスが事情を説明するも、サツキさんは聞く耳を持つとしない。

「私にはもう関係のないこと。私の家族は父と母だけ、それ以外は知らないわ」

「サツキ様、これはご命令ですよ。これを断れば……あなただけでは。その家族にも被害が及びます」

「……父を脅す気？」

「あなたも立派な継承者なのです。あなたほどの優秀な方には、是非とも本家に戻っていただきたいというご希望なのです」

「私達の意見なんてお構い無しにでしょう。……だから組織は嫌いな。自由も関係も全て踏み躪っていく」

最後は呟くように、そう話す。

……ずつとこの調子だ。サツキさんは譲る気はないようだし、パーバスも命令に背くわけにはいかないのか一歩も引く気はないようだ。

俺としてはサツキさんにはこのまま旅を共にしてほしいところだが、あいにく部外者であるために口出しはできない。行く末を見守るしかできない。

「そうおっしゃらないで下さい。今までも何度もサツキ様は招集に応じませんでした。それは代表の許しがあつたからこそ。」

しかしこの度は会議の結果、継承者全員の招集が決定されたのです。全員が一堂に会しての社交会、そしてその後の代表との面会。例外はありません」

「……しつこい男は嫌いなんだけど」

「嫌われようとも構いません。むしろ嫌われ、嫌がる美女を無理に

引っ張っていくなど……そそりますね」

「……………」

背筋が凍る感覚。恐怖というか、なんだかわからないが。

サツキさんも白目になって固まっている。

しかし先ほどの会話でも感じたことだが……

「サツキさん、ひよつとしてこいつ変態ですか？」

「安心して。ただの変態よ」

「どこにも安心できる要素がないんですけど」

というか、変態が使用人でいいのだろうか？ 仮にも金持ちが雇っているならもう少しまともな人材があっただろうに。

しかし当の本人は変態と呼ばれても特に気にしているそぶりは見られないし、それどころかむしろ……

「変態？　ありがとう、私にとっては最高の褒め言葉ですよ。変態で何が悪いのですか？」

自分に忠実に、欲に従い生きていく。私はただ自分を偽らないだけのこと」

「いや、もう少し偽れよ」

むしろ認めて喜んでるように見える。

だめだコイツ、本物の変態だ。こういうのは口論になったら相手にしたくないタイプだ。

「……パーバス。何度言われようとも私の意志は変わらない。それ以上私に付きまとうと言うのなら……」

サツキさんが手を腰へと伸ばし、ボールを手を取った。

それが意味するのは当然のことながら実力行使ということだ。口でも駄目ならば行動で、今までそんな攻撃的ではなかったサツキさんがここまでするとは、とても信じられない。

「……忘れたわけではありませんよね。我々は私闘を禁じられている、それは使用人でも同じこと。

今あなたが私に手を出すというのならば、あなたは組織全てを敵に回すということになりますよ」

「なっ!？」

「——ッ！」

サツキさんは表情をゆがめて、手を下げた。

本当だということだろう。ここでサツキさんが手を出せばその時点でおしまいだ。

……そこまでして、戻りたくないというのにかかわらずだ。

「……パーバス。私は……！」

「なら俺なら良いのか？」

「うん？ あなたが？」

「なっ、シユン君!？」

「俺と勝負しろ。俺が勝ったならば、もう二度とサツキさんの前に姿を見せるな」

二人の鋭い視線が向けられるが関係ない。

俺だってこんなところで離れたくはないし、サツキさんに少しでも恩を返したい。

ならば今俺がやらなければならない。彼女のためにも、俺自身のためにも。

「……私は構いませんよ。しかしもしも私が勝ったのならば、あなたがこの話から手を引いていただきたい」

「そちらの条件はそれでいいのか？」

「ええ。さすがに部外者との勝負の結果で、サツキ様の意志を踏み躪るわけにはいきませんから」

「……いいだろう」

「ちよつと、勝手に話を進めないで！ シユン君も待ちなさい！ これは私の問題であって……」

「たしかに俺は部外者です。でも、これ以上サツキさんの困っている姿は見ていられないんですよ」

「……そんな理由で」

「大丈夫です。結局は勝てばいいんですから」

話してもお互いが譲り合えないのならば、トレーナーはバトルで決着を着けるしかない。

これ以上誰かが困っている姿をただ見ているのは嫌なんだ。



サツキさんには怒られるだろうが、失ってしまうよりは幾分かマシ。

だから、バーパスのその余裕ぶった表情を崩してやるとしよう。

「……やれやれ。まさかこの私を勝負に引っぱり出すとは。

いざという時のために、『あれ』を用意しておいて正解でしたよ」

「……なんでだろう。なんかもう勝てる気がしてきた」

再びコガネシティを南下して、34番道路に来た。

さすがに街中でバトルを繰り広げるのは危険な上に迷惑になるからだ。

しかしこうして向き合っているもの……なぜかすでに勝利が近づいている気がした。なんかこう、相手が自分で敗北するような展開を作り出したみたいだな。

「さて、ルールはどうしましょうか？」

「……その前に、一体そちらのポケモンは何体いるんだ？」

「二体のみです。重要な案件の時でもなければそれほど連れて行く必要はないので」

「バーパスの手持ちは一体だけか。わざわざこんな嘘をつく必要はないだろうし、間違いはないだろう。」

となれば普通に考えてルールはタイマン勝負だろうな。

「ならば無難に二対一のシングルバトルだ。先に相手を倒した方の勝ち。文句はないだろう」

「文句はありませんが……二対三の勝負でどうでしょうか？」

「二対三？ 俺が三体使つて良いとでも？」

「ハンデです。大人が子供を相手にそれくらいのハンデを与えなければ、ただの苛めになってしまいますから」

「……わかった。後悔はするなよ」

相変わらず腹正しいが、怒りで折角の好機を潰すことはない。ここは確実に勝たせてもらうとしよう。

三体もいれば一体目が負けてしまったとしても、その後で対策を打てる。今の俺の手持ちならば、大抵のポケモンには対応できるはずだ。

「もちろんですとも。それでは早速行きましょうか。——ベロリンガ！」

ボールから飛び出てきたパーバスのポケモンはベロリンガ。

舌が異常に長いのが特徴のノーマルタイプ。技も豊富で能力もそこそこあると聞いた事がある。

たしかにノーマルタイプならば弱点も少なく、大抵のポケモンに対抗できるために一匹でも十分立ち回れるだろう。しかし、こちらにはその弱点となるポケモンがいる！

「行って来い、ヘラクロス！」

俺が出したのは虫・格闘タイプのヘラクロスだ。

こいつも昨日の特訓でさらに鍛え上げることができた。相性もいい、得意な肉弾戦に持ち込めれば、一気に勝負を決められる。

「でははじめましょう。……五分です。五分以内にあなたを倒すと宣言しましょう」

「やれるもんならやってみろ。ただし、後悔するのはお前のほうだ！」

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：3個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv30

ピカチュウ♂ Lv28

サンドパン♂ Lv27

ラブラス♀ Lv38

ヘラクロス♂ Lv40

イーブイ♀ Lv30

ボックスメンバー

ピジョン♀ Lv22

サナギラス♂ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第二十話 VS ベロリングⅡ 食い違い

「……ちくしょう!!」

「どうしました? 先ほどまでの強がりはまだ消えてしまいましたか?」

相手の口遊びに付き合う暇さえない。

——何なんだこれは!? 何だこの状況は!?

相手のベロリングは先ほどから、勝負が始まってから一步も動いていない。放った技も今のところ、〝したでなめる〟だけだ。

それなのに、こちらは一体目のヘラクロスがすでに戦闘不能。二体目のマグマラシもすでに追い詰められているだど!?

「やはり『ピー』というのも考えものですね。ベロリング、〝したでなめる〟!」

「だから、それ舐める勢いじゃないだろ!!」

敵の不快な言葉と共に、弾丸のような舌が射出される。

マグマラシはフットワークを生かして左右に跳ぶことでかわすが、衝突した地面は綺麗に抉り取られている。

……この威力、そしてこの攻撃範囲。あきらかに普通を超えている!

「ベロリングの舌は身長よりも長く、二メートル以上の長さと言われているのですが……私のベロリングの舌の長さは、実に三メートルを超えます。」

つまり……ベロリングの周囲三メートルは、全て攻撃範囲だ。たとえどんなポケモンが相手であろうとも、近づくことさえ許しませんよ!」

「三メートルの攻撃範囲だど!」

予想を超える数字はもはや物理攻撃とは思えないほどだ。

先ほどのヘラクロスもそうだった。あいつが得意の肉弾戦に移る前に、打ち落とされ、一方的に叩きのめされた。

マグマラシもそうだ。〝ひのこ〟は容易に貫かれ、こちらが接近する前に牽制して近づかせない。

「……なら、これならどうだ！ マグマラシ、〴〵かえんぐるま〴〵！」  
マグマラシがその身に炎を纏い、ベロリングが目掛けて回転して  
く。

回転の勢いに加えてマグマラシの炎が全身を包んでいるんだ。こ  
れなら今度こそ！

「体を炎で包む、ですか。少しは考えたようですが、しかし意味はあり  
ませんよ。それはまるで男の『ピー』のようだ。

——ベロリング、〴〵したでなめる〴〵！」

再び長い舌が射出される。ベロリングとの距離約1メートルと  
いったあたりで衝突した二つのエネルギーだったが……その威力の  
前に、マグマラシは呆気なく吹っ飛ばされてしまった。

「……マグマラシ」

声をかけてもマグマラシは起き上がることさえできない、戦闘不能  
の状態。

ヘラクロス同様、たった一撃で沈められてしまった。

「……あなた勝負の前に私のことを舐めていましたよね？」

しかしどうです？ 実際舐めているのは、私のほうだ！」

「誰が上手いことを言えといった！ というか、お前は一度『舐める』  
という単語を辞書で調べろ！」

明らかにあれは、普通の威力ではない。槍のように鋭く突き、弓の  
ように一瞬で放たれる。

……まず遠距離からの砲撃では敵わない。ただ純粹な力で押し切  
られてしまう。となると、スピード速さで行くしかない！

「頼む、ピカチュウ！ 行ってくれ！」

だからこそ、俺が最後に繰り出したのは長年の相棒、ピカチュウ。

チーム随一の素早さを誇るこいつならば、あの攻撃をかわしながら  
接近できるはずだ。

「これはこれは。随分可愛いらしいポケモンですね。舐めまわしたくな  
るほどだ」

「……ピカチュウ、〴〵でんきショック〴〵！」

相手に惑わされる前に、こちらから仕掛ける。

ピカチュウの電気袋に周囲の電気が収束し、強い電撃が放たれた。「その程度ですか。随分少ない『ピー』ですね。ベロリンガ、〃したでなめる〃!」

「〃かげぶんしん〃!!」  
「なにっ!?!」

予想通り〃でんきショック〃は掻き消されてしまったものの、その前にピカチュウの〃かげぶんしん〃によっていくつもの分身が現れた。

これで相手も容易には手を出せまい!

「そのまま〃でんこうせっか〃!」

「……複数プレイというわけですか。しかし忘れたのですか? 私のベロリンガの攻撃範囲を。回転しながら〃したでなめる〃!」

分身も含め、複数のピカチュウがベロリンガへ突進していく。

その相手を迎撃すべく、ベロリンガはその場で回転し、舌でピカチュウをなぎ払う。

次々と分身が消えていく中、本物だけが跳んで攻撃をかわした。まだ相手は動けない!

「〃でんじは〃だ!」

「しまった!」

ピカチュウの尾に電気エネルギーが収束し、一つの塊となった。

そのエネルギー体が打ち出され、ベロリンガを直撃する。ダメージこそないものの、ベロリンガの体は麻痺し、その動きは鈍る。

「行け、〃でんこうせっか〃!!」

ならばこそ、今この好機を逃すわけには行かない。

再びピカチュウが物凄い勢いで突っ込んでいく。ベロリンガがなんとか舌を打ち出そうとするが、体が言うことを聞かず、ピカチュウを睨み付けることしかできない。

そうしている間にもピカチュウはどんどん迫る。そしてそのままベロリンガの腹へと突進し……勢いそのままに跳ね返された。

「はあ!? 何だそれ!?!」

「軽すぎますよ。その程度の攻撃で、ベロリンガを貫けるはずがない。

……”したでなめる”!!”

空中へと投げ飛ばされたピカチュウはもう何もできない。

そんなピカチュウをお構い無しに、再びベロリンガの舌が発射された。

ピカチュウの体に直撃し、力なく地面に落下した。……マグマラシ達同様、立ち上がる体力さえ残っていない。

「舐めるといふ行為の尋常さをあなたは知らないでしょうね。舌というものは時には指以上の働きをする。」

舌で女性の『ピー』を舐めるだけではなく、そのまま『ピー』に突き入れ、相手の気持ちを高め、そして最終的に……相手は限界に達して果てる。どうです？ 私のベロリンガの舌の味は？」

「……ッ!!」

目の前の出来事だというのに、理解が追いつかなかった。

このような男に負けるわけがない。それは油断でもなく慢心でもなく、確信だったはずだ。

……それなのに、実際はベロリンガ一体のために三体が一撃の下にやられてしまった。

「では、約束どおりあなたにはこの件から外れてもらいます。文句はないでしょうね？」

「……シユン君」

「……すみません、サツキさん」

こうなってしまうとは、もう俺は何も言い返すことはできない。

サツキさんが何か言いたそうに俺を見つめているが、とても直視できず。俺は一言謝罪の言葉を述べてその場から去った。

「……ちくしょう」

口から出てくるのはこればかり。パーバスとの勝負を悔やむ言葉ばかりだ。

ポケモンセンターの休憩室。もう外は夕焼けに染まり、昼のにぎや

かさも徐々に静まりつつあった。

もう三体の回復は済んでいるものの、ずっとここから動けずいた。

「何であんなやつに負けたんだ。サツキさんに申し訳ない……」

あれだけ大言を吐いていながらこの有様だ。

サツキさんとしてあの男とは関わりたくはなかったはずなのに。

……どうして俺はたった一体を倒せなかったのだろう。

もう何もやる気が出ず、ずっとこの場に居座っていた。

まあサツキさんが去ってしまっても、これからも一緒にいてくれるにしても、何かしら連絡があるだろうから、ここに滞在しなければいけないという理由もあるわけだが。

「……一応、俺も今のうちにやれることはしといた方がいいよな。まずはオーキド博士に伝えよう」

こうなった経緯をまだオーキド博士は知らないはずだ。

サツキさんの事情も知っているはずだし、今後どうすればいいかも教えてくれるだろう。

ポケギアを手にし、オーキド博士へと電話をかける。しばらくしてつながった。

『おおシユン君か。なんじや？ 何か困ったことでもあったかの？』

「……はい。その、困ったでは済まされないうほどに」

『なんじやと？ ……何かあったのか？』

「ええ。実はサツキさんに関することなんですけど……」

俺はオーキド博士にここまで経緯を全て話した。

サツキさんの父方の実家からパーバスと名乗る使用人が来たこと。その男から全て事情を聞いたこと。彼がサツキさんを連れ戻しに来たことを。

そして、俺がパーバスと取引をして……その勝負に負けてしまったことを。

『……それは、本当なのか？』

「はい。このようなことで嘘は言えませんよ」

『どうもおかしいのう。話が違うではないか』



「え？ 話が違うつて……どういふことですか？」

声しか聞こえないものの、博士の声が疑問に満ちていることが伺える。

別に俺には何も不思議な点はないのだが、博士には気になることでもあつたのか？

『いやな。実はわしはサツキ君に仮面の男の調査を依頼するにあつて、彼女の祖父とも話したんじやよ』

「……それで？」

『彼はサツキ君のことを溺愛しているようじやつたが、彼女を縛り付ける気はないようだな。』

彼女の自由にさせたいということで、依頼することを認めてくれたんじや。詳しい話はできなかったが、その間急なことでもない限りは、向こうからは何も手出しはしないと』

「は？ いや、待つてくださいよ！ おかしいじゃないですか。だつて現に今向こうから……」

『うむ。だから話が違ふと思つておる。わしの方にも連絡は一切ないし、何かの間違ひではないのか？』

「いえ、サツキさんもパーバスのことを知っていましたし、命令を受けたつて言つてましたけど」

博士の話に俺も納得できず、混乱してしまふ。

実家からは手出しはしないという話なのに今回はこうしていきなり博士を通じずに出向くなんて、そんな話があるか？

少なくとも依頼を引き受けた以上、何かしら依頼主である博士に伝えるはず。だとしたら、パーバスは祖父とは別の人間に依頼されたとしてもいふのか？

いや、でもそんなことして何の意味があるんだ？ サツキさんと二人になつたとしてもサツキさんを連れ出すこと以外に………あれ？ いや、ある！

「博士！ 今すぐその祖父と連絡は取れますか!？」

『お!?! どうした急に？ たしかに連絡先は知つておるから、向こうがいるなら可能じやが……』

「ならば今すぐ確認を取ってください！ 俺はサツキさんにかけますから！ ひよつとしたらパーバスが、彼女に危害を加えるかもしれない！」

『なんじゃと!?!』

「博士の言うとおり、彼女の祖父からの命令ならば博士にも何かしら事情が伝わっているはず。」

しかしそれもないというのならば、おそらくやつは正式な命令なんて一つも受けていない。やつ自身の意志か、あるいは他の人間の命令で動いているはず！」

『なんと！ ……わかった、すぐに確認を取る！ わかり次第、すぐに君にも伝えよう！』

「お願いします！」

その言葉を最後に、通信をきる。そしてすぐさまサツキさんの番号へとかけた。

……迂闊だった。どうしてももっと慎重に行動を取れなかったんだ!?! どうしてやつをもっと警戒しなかったんだ!?!

自分には遠い話だと思つてサツキさんの家庭の事情には口出さない方が良くと、特に彼女に深く聞かなかつた。

もしもサツキさんがパーバスに拉致されたり、何かしら暴行を受けているとしたら……嫌な想像しかできない。しかもやつの性格を考えたら、普通に実行できると思ってしまう。

「……ッ！ 駄目だ、つながらない!!」

何度かけなおしても結果は変わらなかつた。

いくらなんでも、サツキさんならもう出ているはずだ。それなのに出不来ということは、電波が通じない場所にいるか、電源を切っているか、ポケギアが手元にないか……意識がないのかだ。

どれも最悪の場合しか思いつかない。もしもサツキさんが自分の意思であの男について行くならば何かしら俺や博士に連絡を取っているはず。

……となると、やはりパーバスに何かをされたと考えて行動した方がいい！

「くそっ！ 何としても探し出す!!」

すぐさま駆け足でポケモンセンターから出て、暗くなつた街の中を駆けていく。

ヘラクロスに空、ラプラスに海、サンドパンに地中の搜索を任せ何か不審な乗り物を見つけたのならば知らせるように伝え、ピカチュウ・イーブイ・マグマラシを三手に放ち、サツキさんを見つけ次第、知らせるように命じた。

俺も近くを通りかかる人達に声をかけて、情報を集める。しかし人も少なくなつてきたために、中々有力な情報が見つからない。

……早くみつけないといけない！ 焦りだけがこみ上げ、時間だけが刻々と過ぎていった。

「……………うっ……………は……………」

まだ意識がはつきりとは定まらない中、サツキは少しずつ目を開けていく。

視界が徐々に晴れていき、周りに広がる機械からここが何かの操作室だということを、景色から飛行艇のものだと理解した。

体を動かさそうするも、腕は上から鎖でつるされており、身動き一つ取れない状況であった。

「どうして、私が……………」

理解が追いつかない中、少しでも状況を把握するために一つ一つの記憶をたどっていく。

彼女がシユンと別れた後、ここまで自分に何があったのかを。

しかし、思い出そうとしても靄がかかってなかなか思い出せない。

「……………おや？ どうやらお目覚めのようですね、眠り姫」

「——パーバス！」

「長く眠っておられましたが、寝不足なのですか？ 駄目ですよ、睡眠不足は美容の敵です」

「……………そっか。あなたが私を連れ去つたのね」

パーバスの顔を見て、先ほどの記憶が蘇ってきた。

シユンと別れたあと、二人つきりで話をつけようと思ったものの、サツキは突如パーバスに背後から布を顔に当てられ、意識を失ってしまったのだ。

そして今、ようやくその眠りから醒めたということだ。

「ええ。虫タイプのポケモンが放つ“ねむりごな”を多量に含んだものを使用しました。人間ならば一瞬ですよ」

「このようなことをして、ただで済むと思っているの？　いくら命令だとしても祖父は黙っていないと思うけど」

かつて自分を溺愛していた祖父の姿を思い出し、サツキは警戒心むき出して警戒した。

このままでは嚴重な処罰は免れない、と。

しかしパーバスは余裕の笑みを一切崩さず、さらに笑みを深める。それを見てサツキも不審さを深めるばかりだ。

「たしかにこのまま戻ってしまえば、私がただでは済まされませんね。ただし、それは戻ればの話ですから？」

「え？　……どういうこと？　答えなさいパーバス、この船はどこに向かっているの!？」

「詳しい場所はお答えできません。しかし、あえて言うのなら……我が主君、仮面の男が待つところまで」

「なっ……!？」

思いもよらぬ単語が飛び出し、サツキの表情が崩れる。

しかもパーバスは今、仮面の男を『我が主君』と言った。それが示すことはただ一つ。

「あなた、まさか祖父を裏切ってロケット団についたというの!？」

「裏切ったとは酷いですね。先ほども私は言ったではありませんか。……私は自分に忠実に、欲に従い生きていくと」

目の前の男がロケット団員であるということだ。

パーバスの目が大きく開かれ、鋭い視線がサツキを射抜いた。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：3個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ）

手持ちポケモン

マグマラシ♂ Lv30

ピカチュウ♂ Lv28

サンドパン♂ Lv27

ラプラス♀ Lv38

ヘラクロス♂ Lv40

イーブイ♀ Lv30

ボックスメンバー

ピジョン♀ Lv22

サナギラス♂ Lv35

レポートに書き込みました!!

## 第二十一話 V S ゴルバット 空の大乱戦

「……サツキさん」

名前を呼んだところで何も意味がないことはわかっている。

しかしそれでも、俺は街灯が照らすコガネシティの街中を走りながら彼女の名前を読んだ。どうか無事であることを、まだ遠くに行っていないことを祈りながら。

俺の予想通りだった。オーキド博士から来た通信、それはやはり事態が最悪の方向へと向かっていることを教えてくれた。

『——パーバスが昨日からすでに解雇されていた!』

『ああ。解雇というよりも、自ら失踪したという形のようにやがな。向こうでも行方を搜索していたという。』

しかもその日、その男が姿を消したときに、倉庫の一角から小型の飛行艇までもが無くなっていたそうじゃ。おそらくは逃亡用に奪っていたのじやろう』

『……ありがとうございます。それさえわかれば、やることは一つだ。すぐに飛行艇を探します!』

昨日。それは俺達が仮面の男と接触した次の日でもある。

こちらの情報が向こうに漏れていた事、しかし依頼主であるオーキド博士の情報まではわかっていなかったこと。

……もしもパーバスが仮面の男と内通していたのならば、全て辻褄があう。そして今日、邪魔者を拉致したということも。

「ぎげんなよ。……そんな好き勝手にさせてたまるか!!」

ゴールドまで奪いながら、今またサツキさんまで浚われてしまうなんて許せるはずがない。

必ず今日中に彼女を取り戻す。すれ違う人を押しのけ、夜の街を疾走した。

一方、飛行艇内部。

身動きのとれないサツキをパーバスは見下ろすように眺めていた。「サツキ様がジョウト地方へ調査に向かわれた時、私は必ずあのお方に関することだと確信しました。」

かつてカントー地方で起こった事件の際にもあなたは動いておりました。ならば、今回も必ず事件に関するものだろうと思いませんか」

「……そう。私達の情報を流していたのはあなただったのね」

「おや？　そこまでわかっていたのですか？　それでも秘密裏にしていたのですが、私もまだまだのようですね」

表情が変わらないゆえに、悔しさは微塵も感じられないがばれていたらということは本当に知らなかったのだろう。

パーバスも本家で怪しまれないように行動していたのだからそれなりの自信はあったはず。

「私はロケット団やその目的には微塵も興味はありませんが、仮面の男だけに惹かれました。」

サツキ様も一度あのお方と対面したことがあるそうですがどう感じられましたか？　……私は心が振るえました。

あの奇怪な仮面、馬鹿げたコート、機械のような体。まさにあのお方こそ、カオスの権化！　カオスの象徴！　変態の頂点に君臨するお方だ！」

「……あの、シリアスになりきれないからもう少しまともに話してくれない？」

もはや自分のリーダーを馬鹿にしているのか褒めているのかそれさえわからない。

思わず自分の置かれている立場さえ忘れて、サツキは白い目で目の前の変態を見ていた。

「何をおっしゃいますか。十分真面目シリアスですし、まともに話していますよ。」

仮面の男の最も恐ろしいことは、それらの奇妙な点までも含め全てを力で押し通すところにある。無理も理不尽も、全て捻じ伏せ屈服させる。自己が正しいのだと知らしめる。

だからこそ今こうしてロケット団を率いているのですから。……  
かつてのロケット団に力を見せ付けたことで」

「あなたも、その力に魅入られた一人だと？」

「その通りです。先ほどの戦いでも思いませんでしたか？ あのシユンとか名乗る子供との戦い。」

……彼も中々どうして立派ですね。最善の手を考え、最高の一手を想像し、実行した。

しかしどんな戦術も戦略も、圧倒的な力の前には何も意味をなさない。そうでしょう？

それが現実だ。あの子供も現実を思い知ったことでしょう。何もできず、何も意味をなさない自分の弱さを」

「……あまりあの子を馬鹿にしない方がいいわよ」

シユンの名前が出た途端、サツキの表情が変わる。

呆けた表情が消え、目には強い意志が戻り、鋭い視線をパーバスへと送る。

その変化を感じ取ったパーバスにも笑みが消え、彼女と向き合うように足を入れ替えた。

「彼はあなたが考えているほど弱くもないし、幼くもない。まして現実を知らないわけがない。」

きつとあなたは後悔するでしょうね。あなたが甘く見ていた相手は、必ずあなたを追い詰める最大の脅威となる」

「……仰っている言葉の意味を凶りかねますね。どうやら随分あの子供のことを買いかぶっているようだ。」

最大の脅威？ ご冗談を。私はたしかに胸囲には目がくらみますが、脅威に感じるなど何もありませんよ」

そういうや否や、パーバスは右手にナイフを持ちサツキに迫っていく。

彼女の服を掴みナイフで切りつける。皮膚には刃が至らないものの、その部分の服は破れ肌が露出した。

それでも足りなかったのかパーバスは何度も何度も切りつけた。服の合間から肌や下着が露出し、もはや下着の一部まで切れかけてい



るものの、服が途切れて完全に露出しないのは狙ったことなのか。「……いい眺めですね。あのお方から傷はつけないようには命じられています。それ以外のことならば好きなようにしていいと言われていますので。」

お言葉に甘えて好きなようにさせてもらいますよ。ああ、安心してください。大事なのはチラリズム、本当に手出しはしませんので」

「……外道」

「まだそのような目をするのですか。本当に強いお方ですね。……では私は到着するまで、このままあなたの体を背景にゆつくりしましうか。サツキ様もどうか寛ぎください」

「……っ」

ポケモンさえいれば、とを考えても意味がないことはわかっている。彼女が起きた時にはボールやポケギアを含め、身につけていたものは全てなくなっていたのだ。おそらくはこの飛行艇のどこかにあるのだろう。

今はただじつと待っていることしか出来ない。諦めずに意志を持ち続けることしか。

(……シユン君)

理由はわからない。しかしサツキは心の中で突如、ここしばらく行動を共にしていた少年を思い描いた。

来るわけがない。来れるわけがない。こんな夜中に場所もわからない飛行艇を、状況も理解していない彼が来るなど無理だ。

そして仮にここに来たとしても、パーバスに勝てるとは思えない。先ほどのような惨敗を喫したばかり、六体で挑んだとしてもまず勝ち目はないだろう。

もはや何が起こったとしても、もう助かる道はないのだ。

一度弱気になってしまおうと、もう止まらない。涙がこみ上げてきて彼女の視界をゆがめた。

目を閉じるとその衝撃で涙が溢れ出す。どうせならもうこのまま眠ってしまえばいいのに、と思いつながら目を瞑っていると……突如、飛行艇が大きく揺れた。

「むっ!? 何事だ!？」

「……………」

上からの大きな衝撃を受け、縦にゆれた飛行艇。

これはパーバスにとってもアクシデントだったのか、ガラス越しに周囲を見渡すものの、何も見当たらない。

二人が突然の出来事で呆然としていると、入り口の扉が開かれ一人のロケット団員が駆け込んできた。

「申し上げます！ 艇内に侵入者が現れました！ 飛行艇の上壁を打ち破り、Dブロックに進入！ 次々と団員を蹴散らしています！」

「……………ほう。侵入者とは。それで、相手は何人ですか？」

「そ、それが……………子供が一人、です」

「なに？」

「まさか……………」

二人の目が見開かれ、同時に一人の少年の顔が浮かぶ。

信じられないものの可能性があったら、彼しかない。先ほどまで彼らが一緒にいた幼い少年——シユンだ。

「サンドパン、……………ころがる!」 ラプラス……………みずでっぼう!」 ピカチュウ……………10万ボルト!」

サンドパンが勢いよく転がり、迫り来る団員とポケモン達を一掃し、ラプラスから放たれる水流とピカチュウが放つ電流が敵を押しつけた。

次々とロケット団員やポケモン達が襲ってくるのを見ても、やはりこの飛行艇がロケット団のものであることは間違いない。……………そして、おそらくはサツキさんやパーバスがいるということも。

——この飛行艇を見つけたのは、ある意味運が良かった。

相手の逃走経路が空だとわかった瞬間、俺はまず南東の搜索を打ち切り、西と北の搜索に一本化した。

ワカバ、ヨシノ、キキヨウ、ヒワダ、など街は多数あるものの、今

まで調べて何もなかったこともあるし、飛行艇が着陸するような広い場所や平野が少なく、木々や建築物が多いと考えたからだ。

そうして捜索位置を限定していると、北へと飛んでいたヘラクロスが一機の怪しい飛行艇を発見。

すぐさまヘラクロスに抱えてもらってその飛行艇まで飛び、その上に着陸。マグマラシの炎で一部を溶かし、ヘラクロスの渾身の「かわらわり」。

衝撃を与えると、大きな穴を作ること成功した。そのまま中に入ると非常事態を嗅ぎつけた敵が襲い掛かり……そして今に至る。

「この飛行艇が敵のものだとわかったならば、もう手加減はしない！

イーブイ「ずつき」だ！」

背後から迫るゴルバット三体をイーブイが迎え撃ち、弾き飛ばした。

もう情け容赦は無用。徹底的に叩きのめすのみ。

次々と団員を打ち破っていくと、ようやく向こうも限界に達したのか攻撃の手が止み、動ける団員達が逃げ出していく。

子供相手に逃げ出すというのは情けないと思うが、俺にも追いかける理由はない。どうせ下っ端では知らないことも多いだろうからな。

それならばそれよりもやらなければならぬことがある。……意識はあるものの、上手く体を動かさずにはいつくばっている団員を見つけ、そいつの胸倉を掴み上げた。

「質問に答えろ。この飛行艇に連れ去られた女性がいるはずだ。彼女はどこにいる？　そして、パーバスという男はどこにいる？」

「は、はあ？　何を言っているやがる。そんなの知らねえよ」

「……ピカチュウ」

「ピッ」

「うががががつ!!」

合図を送ると、ピカチュウが男の体に触れて軽い電撃を放つ。

突如体を襲う衝撃で顔をしかめるが、すぐに電撃をやめる。牽制の意味は伝わっただろう。

「本当のことを話せ。下っ端でも何かしら知っていることがあるだろ

う」

「わ、わかった！ 女ならパーバス様が連れて行った！ おそらく二人とも操舵室にいる！」

「……操舵室か。ありがとう」

「うぐっ!?!」

鳩尾に一発入れると、男は力なく横たわる。

二人とも同じ場所にいる、つまりパーバスをどうにかしない限りはサツキさんを救出できないということだ。

「……よし、ならば作戦変更だ。ピカチュウとイーブイ、お前達はこれから別行動で飛行艇を探ってくれ。

おそらくはサツキさんの持ち物やポケモン達は別のところに保管されているはず。それを探すんだ。サンドパンとラプラス、サナギラスは俺と共に来い。俺達は操舵室へと向かう」

ピカチュウとイーブイを先に行かせ、俺もラプラスとサナギラスをボールに戻すとサンドパンと共に通路を駆け抜ける。

サナギラスもオーキド博士に頼んで送ってもらってよかった。

今回ばかりはいつもとは違う。ポケモン達を総動員させての戦い、戦力を分散させての戦いだ。

「……すぐに行きます、サツキさん」

それでも負ける気は微塵もない。

今の俺達ならば必ず勝てる。もうあのような失敗はしないと決めたのだから。

## 第二十二話 VS マグマラシ サツキ救出戦

シユンがロケット団の飛行艇に乗り込んでから約十分の時間が経過した。

先ほどまでの騒然としていた艇内は静けさを取り戻しつつあり、戦いが徐々に沈下しつつあることを示している。

それはサツキとパーバスがいる操舵室も同じこと。

報告にきた団員を見送ってもパーバスは迎撃に出ることはなく、ずっとこの場で未だ素性の知れない侵入者を待ち構えていた。

自分がでるまでもないと考えたのか、あるいはこの場で待ち構えるのが最善と考えたのか、他に理由があるのかはわからない。

しかし、彼にしては珍しく表情からは笑みが消えており、何事かを考えているようにも見える。

そんなパーバスをサツキは観察するように見ていた。

自力での脱出は難しくても、何か情報を手に入れることができればと考えたからだ。

希望は捨てずに状況が好転することを祈っていると……その願いがかなったのか、操舵室の入り口が開かれ、ロケット団員ではない少年がサンドパンと共に入ってきた。

「……サツキさんっ！」

自分の名前を叫ぶ姿に、思わずサツキは涙しそうになった。

それは彼女にとって見慣れた存在である、シユンだった。

服はどこどころ乱れており、破けているところも見受けられる。息も絶え絶えで、ここまでかなりの戦いを繰り広げてきたということはずぐにわかった。サンドパンも体中傷ついており、左手の自慢の爪も折れてしまっていた。

「シユン君。……どうしてここまで！」

サツキはどんな言葉をかけてあげればいいのかかわからず、言葉に詰まる。

どれだけ無謀なことだったか、危険なことだったかは容易に想像できた。

「……なるほど。にわかには信じがたいことですが、本当にここまで追ってくるとは。」

サツキ様の仰っていたことは間違いではなかった。たしかに私が甘く見ていたようだ。

ですが、すでにボロボロのようですね。あなたのサンドパンも片方とはいえ爪が折れ、慢心相違の状態。それは他のポケモンも同じことでしょう。その状態で、私に勝てるんでも?」

見下すように放つ言葉は相手の戦意を削ぐ。

事実パーバスの言うとおり、今日惨敗したばかりの相手に万全の状態でもないのに勝つという方が無理な話だ。

「この程度はボロボロとは言わないさ。」

サンドパン達だってまだ戦える。爪も明日になれば生えてくるというしな。

……しかし、そんなに余裕でいいのか? お前がポケモンを出すよりも、サンドパンがお前を攻撃する方が早いと思うぞ?」

しかし、ここまで仮面の男との戦いも経験しているシユンはこの程度では折れない。

ポケモン達もダメージを負っているものの戦闘不能というわけではないのだから。

ゆえにシユンは逆にパーバスに警告する。

少しでも妙な動きをすればサンドパンがお前を襲う、と。

「……たしかにそうかもしれないですね。私もそんな危険な賭けはしたくない。」

ですがサツキ様のことをお忘れですか? そちらの攻撃よりも、ナイフがサツキ様を切り裂くほうが早いと思いますよ?」

「……っ!?!」

「パーバス!!」

だがパーバスも怯まない。ナイフを持ち替え、サツキの首元へと当てる。

手出しを禁止されているとはいえ、緊急時であるこの状況ではどう出るかはわからない。ましてやシユンはそんな彼の事情を知らない

ため、下手に手出しすることはできずにいた。

「サンドパンをボールに戻しなさい。少し話でもいかがですか？」

「……その言葉を信じられるとでも？　大体、時間稼ぎはお前らにか特にならない。従うと思うのか？」

この飛行艇は今も運転し、本来の目的地——つまりパーバス達が向かうとしている場所に近づいているのだ。

シユンにとってはそれは避けたいこと。なんとしても目的地に着くまでにサツキを救出し、ここから脱出するためにここまで無茶をしたのだから。

「これはあなたのためでもあるのですよ？　……ではお聞きしますが、仮にあなたはここを脱出して、

それでどうするつもりですか？」

「……決まっているだろう。サツキさんと共に帰るだけだ」

「ほう。彼女のこの状況を見ても、そう言えますか？」

「は？　この状況って……ッ!？」

「へ……キャッ！」

視線を下に、サツキの方へと下げて……そしてすぐにシユンは視線を逸らした。

冷静な状態では今の彼女の姿は目に毒であった（もちろん良い意味で）。

服はどこどころ肌蹴っており、しかもパーバスによって無理やり体勢をずらされたせいで足が開かれ、純白のパンツが素足とともに晒されていた。

状況を察したサツキもすぐに足を閉ざし、露出を下げようとするが、すでにシユンの脳内には刻まれたようで、頬が赤く染まっている。サツキも羞恥心で赤くなった。

「もうおわかりでしょう。このままあなたがサツキ様を救出できたとしても、あなたは町に戻った途端に社会の敵として排除される。それとも、あなたは上手く誤魔化せるとでも思うのですか？」

「……え？　た、確かに。いやでも、サツキさん本人が話してくれれば……しかしそれも脅されると感じられる可能性も……だとしたら俺

はどつちにしても……だったらこのまま……でも」

「惑わされなくてシユン君！ そのことは私がどうにかしてあげるから！ これはパーバスの時間稼ぎだってあなたが言っていたでしょう!？」

だから言葉遊びに付き合わないで、と言うサツキの言葉も完全に届いてはいないのか、一度意識してしまったら抹消しきれないのか、シユンはなおも一人で呟きながら思考をめぐらしている。

そんな姿をパーバスは面白おかしそうに眺めていた。

(……所詮は女も知らない子供か。この程度の言葉で焦りを隠せなくなるようならば、このまま引きずりこんでしまえばいい)

シユンの考えていたとおり、パーバスの狙いは時間稼ぎ。

どう戦況が転ぼうともこのまま目的地に着けば勝利は動かないのだ。

ゆえにパーバスはなおも混乱しているシユンに追い打ちをかけるように声をかけた。

「シユンさん、でしたか？ どうでしょうか、このまま私と共に行動するというのは？」

なにせよあなたでは私には勝てない。下手に行動を起こして滅びの道をたどるくらいならば……こちらに着きませんか？」

「断る！ お前達のような組織に手を貸すなど、ありえない！」

「まだそんな強がりをするのですか。……ですが、もう一度見てください」

「——ッ!?!？」

「サツキさん!？」

パーバスがナイフを持っていない左手をサツキの伸びている腕へと伸ばした。そのまま伝うように腕から腋へ。突然体を襲った感覚でサツキの体が震えた。

「お前、一体何をしている!？ それ以上手出しするのなら——」

「容赦はしない、ですか？ しかしそういうあなたも興味がありそうなのですよ」

「なっ……」



「恥ずかしがることはない。男性ならば当然のことですよ。自分のやりたいことをやればいい」

かつてサツキに言った、彼の信条。欲にしたがって生きていくという彼の生き様は何も縛るものがないようだ。

未だにサツキを直視できずにいるシユンを見たパーバスの表情は、楽しむようにまたしても歪む。

「考えてもみてください。こんな状況がもう一度訪れると思いますか？

サツキ様のような美貌をお持ちの方をこのように拘束し、あられない姿になっている。……どうですか？ あなたはこれを見ても何も感じずに、理性に従うことができますか？」

「……（ゴクリ）」

「揺れないで！ お願いだから自分を貫いて！ いつものシユン君に戻って!!」

息をのんで黙り込んでしまったシユンを諭すようにサツキが悲痛な叫びを上げる。

このままでは違う意味で危機に陥ると感じたのだろう、必死さが醸し出されている。

シユンのポケモン達もさすがに危険だと感じたのかボールの一個が激しく揺れていた。

そこまでしてようやく正気に戻ったのかはわからないが、突如シユンの表情が急変。何かを決意したかのように、再び目に火が灯った。

「……悪いが、パーバス。やはりお前の提案には答えられない。もうお前と話すことは何もないからな」

まっすぐパーバスの瞳を見据え、シユンは言い放った。ポケモンを落ち着かせるように指で2, 3度つついている。どうやら本当に我に返ったようだ。

「何もないですか。ではどうするつもりですか？ まさかここから私を――」

私を倒すのか、という言葉は続かなかった。

突如彼らの足元から轟音が数度響き、それと同時に大きく揺れる。

何事かとパーバスが辺りを見渡ししていると――突如視線が大きく下に下がった。操舵室の床一面が破壊され、彼らは空中へと投げ出されたのだ。

「なっ、何事だあああああああ!？」

「ピジョン、ヘラクロス!」

何が起こったのかさえ理解できずに、パーバスは地表へと落下していく。

それに対してシユンはサンドパンをボールに戻すと、艇外で待機していたヘラクロスとピジョンを呼び寄せ、なんとか彼らに掴まって事なきを得た。

「よくやってくれた、皆」

ヘラクロス、ピジョン、そしてヘラクロスに掴まっていたマグマラシに礼を言った。

マグマラシもボールに戻すとシユンは再び先ほどまでいた操舵室へと飛んでいく。

……この3匹はシユンの指示を受け、シユン達が艇内に侵入したときから外で準備をしていたのだ。

元々シユンとてパーバスを相手に真っ向から戦って勝てるとは思ってもしなかった。ゆえに今回は進入した方法と同じ手口で、パーバスを退けることを考えた。

この3匹に正確な場所などを指示していたのはラプラスだ。

潜入している間にこの飛行艇の地図を発見し、ラプラスはそれを3匹へと伝えた。人語を理解する知能の高いラプラスは、テレパシーを使って敵のいる場所を教え、作戦を実行させた。

シユンが言葉遊びに付き合っていたのも相手の策に乗ったからではない。彼自身の作戦を実行するためだ。

さすがに飛行艇の床を削り取るともなるとかなりの時間を有する。そのためマグマラシが炎で床までの金属を溶かしきるまでの時間を相手とのやり取りで時間を稼いでいた。

そして床全体を熱でもろくしたら、ラプラスに合図を送り、あとはヘラクロスとピジョンの出番だ。空中で大いに活躍する二匹の連続

攻撃で、床を破壊した。さすがに敵の位置をピンポイントで教えることは出来なかったために部屋全体を破壊するという大掛かりな作戦になってしまったが。

「ピジョン、お前にも無理をかけてすまない。治ったばかりだということに、ごめんな」

語りかけると鳴き声一つで返し、『気にするな』と言っているようだ。

ピジョンもまだ万全という状態ではない。オーキド博士が診療してなんとか体を動かせるようにはなったものの、できれば連れて行きたくはなかった。

……しかし、今回は空での戦い。ピジョンという空中戦力はどうしてもほしかったのだ。

ピジョンの許しを得ると、さらに加速。宙にぶら下がっているサツキの姿が見えた。

「ぐっ……うっ……」

苦しそうに呻き声を上げている。

ロープで吊るされているために、体を支えるものがなくて辛そうだということは一目両全だった。

「ピジョン、ロープを切れ！」

指示を出せば自慢のポケモンは期待に伝えてくれる。

ピジョンはさらに加速し、鋭いくちばしでサツキを縛っているロープを一閃した。

「きゃああああ!!」

たちまちサツキの体が落下する。

その恐怖で悲鳴が木霊するも、すぐにヘラクロスに掴まっているシュンが彼女の体をがっちりと確保した。決して落とさないようにと、抱きしめるように彼女の体を引き寄せる。

「手荒ですみません。……随分遅くなってしまったけれど。助けにきました、サツキさん」

「……うん。ありがとうね」

そつと声をかけるシュンに顔を見られないように、サツキは顔を彼

の胸元へと沈める。

その顔は涙でぬれているものの、ようやく安心が顔に笑みとなって  
浮かんでいた。

## 第二十三話 VS デリバードⅡ ひとつの終わり

「……よし、ここでもいいぞヘラクロス。ありがとうな」

開けた平地に出て地上へ降り立つ。

力が自慢だとしても人二人を抱えて飛ぶことには疲れただろう、ヘラクロスに一言言ってボールに戻した。どうせしばらくはここで時間を潰さなければならぬし、しばらく休んでいてもらおう。

「えつと……ひとまずサツキさん、これを」

ひとまずもっていたコートをサツキさんに差し出した。

こんな夜中では体も冷えてしまうし、少しでも寒さを緩和するには丁度いいだろう。

「ありがとう。でもシユン君は大丈夫なの？」

「俺は大丈夫ですよ。あなたのほうがボロボロですし……それに、その格好では目のやり場に困りますから」

「あ……ごめん。それじゃあお言葉に甘えて借りるね」

俺も先ほどの戦闘で服がボロボロになっていて、心を心配してくれたのだろうが、それよりもサツキさんの方が重症だ。飛行艇の時も思ったが……本当に、目に毒である。

「……ねえシユン君。飛行艇でのバスとのやり取りも……あくまで相手の話に合わせてのことだったんだよね？」

「……ええ、ええ。そ、それは当然のことではないですか！」

「……一応、信じておくよ」

思いつきり疑惑の目を向けられてしまった。

いやしかしあれは男としては仕方のないことだと思う。なにせサツキさんのような方があんな無防備に素肌を晒して……やべ、今もすぐに思い出してしまう顔がニヤけてしまう。咄嗟に彼女から視線をはずし、顔を見られないようにした。

「でもどうしよう。私、手持ちのポケモン達やポケギアとかの荷物、全部パーバスに奪われたままで……多分飛行艇内にあると思うんだけど……」

「ああ、それなら心配ごとくは無用ですよ」

「へ？」

「ほら、あれ見てください」

不安に陥って顔をしかめるサツキサンに、上空を見るように指差した。

何もない夜空に見えるが、彼女が視線を向ければ何か接近していることに気づく。思ったよりも早かったな。これならすぐにコガネシティに戻れそうだ。

「あれは……シユン君のピジョン！ それに……」

「ええ。ピカチュウとイーブイも一緒です」

迫ってきていたのは飛行艇で待機させていたピジョン。その背中にピカチュウとイーブイの小型二体を乗せて戻ってきた。ピカチュウはその口にサツキさんが所持していたポーチを、イーブイはポケモン達が入ったボールが装着されているベルトを銜えている。

突入後から別行動を取っていたが、ラプラスを経由して無事であることと目的を達成できたことはわかっていた。ゆえに迎えのピジョンをよこしてここで合流する予定になっていた。

二匹とも怪我は特に見受けられない。俺たちが敵をおびき寄せたこともあるのだろうか、とにかくよかった。

「……ありがとう。わざわざ探してくれたんだね」

二匹から持ち物を受け取り、無事であったことを確認すると感謝の気持ちをこめて頭を撫でているサツキさん。ピカチュウ達も嬉しそうだ。

……だが本当によかった。さすがに今回は成功するか自分でも自信のないことだったので本当に無事にことが進んでよかったと思える。その分、代償も大きかったけどな。

「それじゃあサツキさん、一度コガネシティに戻りましょう。いつまでもここにいると、パーバスやロケット団の残党と遭遇してしまうかもしれません」

「……そうね。ポケモン達も回復させないといけないし、シユン君も休養を取らないと」

「それはサツキさんも同じことですよ」

同意を得て、ポケギアのマップを見ながら俺たちは歩き出した。

俺たちを心配してくれるのはありがたいが休まなければいけないのはサツキさんも同じことだ。なにせ長い間拘束されていて身体的にもそうだが、精神的にも辛いことがあっただろう。早く休ませないと。

パーバスとてあそこから落ちたとはいえ、あのような男がそう簡単に死ぬとは思えない。警戒のため、そして夜道を照らす明かりとしてマグマラシを先導に、コガネシテイへと歩みを進める。

同時刻。シユン達が着地した平地から少し離れた林の中。

そこで一人の男が木に背中を預け、体を休めていた。どこか怪我を負っているのか彼の表情は厳しい。

「……くうっ。この私が、まさかこのような失態を犯すとは……」

その男の名はパーバス。近くでは彼のポケモンであるベロリンガが介抱している。

彼が助かったのもこのベロリンガのおかげであった。落下しながらも彼は腰のモンスターボールへと手を伸ばし、ベロリンガを繰り出した。そしてベロリンガは長い舌を巧みに操り、木々にぶら下がることで衝撃を弱めた。

それでも完全に衝撃を殺しきることは出来なかったようで、今は少しでも回復できるようにと体を休めている。

「だが何も得られなかったわけではない。あのお方にご報告できるだけの『情報』を得ることはできた」

パーバスの口元が不敵に歪む。

サツキの連行、敵対者の排除にはならなかったものの、パーバスは貴重な情報入手することができた。

「サツキ様を手引きしていた相手。まさかあのオーキド博士が関与していたとは……」

それはサツキに任務を依頼していたオーキド博士のこと。

彼女のポケギアの通話履歴やメモなどの持ち物を自分の目で確認した彼は、そこまで探り当てていた。

「そして共に行動していたあの少年。——シユンといったか。今回の一件で彼の手持ちポケモンもわれた。彼のことは細かいことはわからないが……サツキ様と合流したのはワカバタウンとのことだし、おそらくそこが彼の出身地なのだろう。ならばそこを重心に仕上げればいい」

加えてシユンのことも把握していた。

昼の戦闘、そして飛行艇内での争いでシユンは手持ちを総動員して戦いに挑んだ。それはすなわち敵に全ての戦力を明かしてしまったことを意味する。

そうするしかなかったとはいえ、今後のことを考えればやりすぎであつたことは否めない。

「これだけの成果があれば、あのお方も満足してくれるはずだ。

そして今度こそ私は……ふふふふ、ふははははっ！ まだだ、まだ私は終わらない!!」

とどめをささなかつたのは失態だったなどシユンをさげすむようにパーバスは高笑いする。

命があるのならは何度でも立ち上げられる。次の機会へむけ、パーバスは意欲を高めた。

「……随分上機嫌のようだな、パーバスよ」

「はっ!? ……わ、我が主!？」

そんな彼に水をさすように、感情のない機械の声が後ろより響いた。

驚いて振り向けば、そこにいたのは彼が仕えていた主君・巨悪の根源である仮面の男がいた。

なぜここにいるのかなど疑問は絶えないがそれを聞くほど彼の神経は太くないし礼儀を知らない人間でもない。痛む体に鞭打ち、姿勢を正した。

「どうした、貴様の任務はサツキという女の連行であつたはず。それがこのようなところで這い蹲つているとは。……まさか、失敗したわ



けではあるまいな?」

「……申し訳ありません。思わぬ邪魔が入り、任務を遂行することが適いませんでした」

「邪魔だと? 貴様を退けるほどの相手か。一体誰だ?」

「シユンと名乗る子供でした。サツキ様と行動を共にしている少年であります」

「子供か。……最近は何分と血気にはやる若者が多いようだな」

かつて自分が相対した少年達の姿を思い出しているのだろうか。

パーバスが嘘をつくような人間ではないと信じているのか、余計な口出しはせずに彼に相槌を打つだけで仮面の男は彼の報告を待つ。

「しかし、何も得なかったわけではありません! この度は新たな情報を手に入れて参りました。おそらくは、我が主でさえも知らない情報です!」

「ほう。貴様がそこまで言うのだから、それなりの有用なものであるうな?」

「はつ。その少年の名前、出身地、手持ちポケモン。さらにサツキ様に任務を依頼した相手も発覚しました」

「……手持ちポケモンは別に報告しなくてよい。それ以外を述べよ」

どうせ自分の脅威にはなりえないと感じ、仮面の男はポケモン以外のことを教えるように促す。

折角調べられたことなのでパーバスとしては不本意なことではあるが、命令どおり他の情報を提示することにした。

「その少年の名前はシユン。ワカバタウン出身のものだと思われる。依頼主はカントーのポケモン研究の権威、オーキド博士です」

「……オーキド。オーキド・ユキナリか。そうか、あいつが私の敵か。……ふふふ」

「む? どうかありませんでしたか?」

「いやなに。ただ運命というのとはわからないものだと感じただけだ」

何事かを問うパーバスに曖昧に答え、本心を隠す仮面の男。しかし仮面で隠れているとはいえ、パーバスはその仮面の内側で自分の主が何か悲しんでいるようにも思えた。

「そしてあの男はシユンというのか。……なるほど、覚えておくしよう」

「我が主は、彼と面識があるのですか？」

「ああ。かつて一度だけ、な。私には手も足もでなかったが」

それは初耳だったようで、パーバスの表情が驚愕の色に染まる。

それも当然のことだろう。目の前の男は敵には容赦しない人間だ。それなのに圧倒的力を持つこの男に対峙して、よく生き残れたものだと感心する。

「よくわかった、十分だ。貴重な情報だったぞパーバスよ」

「はっ、ありがとうございます」

「ああ。ご苦労だった。ゆっくり休むといい。——やれ、デリバード」

「……えっ?」

突如感じる寒気、殺気。

パーバスは身動き一つできなかった。称賛の言葉を受け、頭を下げた彼がもう一度視線を上げれば……そこにいたのは仮面の男の手持ち・デリバード。

彼が放つ全力の“ふぶき”は瞬く間にパーバスと彼のベロリンガの体を凍らせた。ベロリンガは全身が凍り、攻撃など適わない状態。パーバスも首から下まで凍りついており、口を動かすことしかできない。

「な、なぜですか我が主よ!」

「貴様はもう用済みだ。元々情報入手のために味方に取り込んだだけ。サツキの拉致に失敗した今、これ以上貴様には期待できん。他にも駒はいる。」

……報道がなされていない今ならば、まだ貴様は犯罪者としてではなく謎の失踪を遂げた使用人として終われる。安心して眠るといい」

「——貴様っ、この……」

そう言うと、もう言うことはないとデリバードの“ふぶき”はついにパーバスの全身を覆った。

彼が何か恨み言を言おうとしてももう遅い。二体の氷像が出来上がった。

最後に彼らを眺めると、何事もなかったかのように仮面の男は彼らに背を向ける。

「……とどめだ、デリバード」

そして非情の一言が発せられた。

彼の後ろで何かが砕け散った音が響く。その音は地面に沈み込むと、やがて消えていった。

仮面の男はそれに気にする事無く、道を一人歩いていく。

「あくまで私を止める気か——ユキナリよ」

そう呟いた彼の声はいつもよりも小さく、すぐにでも消えてしまいうような、脆いものだった。

## 第二十四話 VS ハツサム 新たなるステージへ

その後、俺達はロケット団の追撃を受ける事無く無事にコガネシティまで戻ることが出来た。

ホテルのチェックインを済ませ、二人が別々の部屋に入って乱れた服を着替えたり、身なりを整える。

さすがに今日ばかりは泊まる部屋は別々だ。サツキさんとて今日のことは堪えただろう。色々と考えることだっただってあるだろうし、一人でいる方がいいはず。

……そして何よりも、俺の方が今は一人でいたいという感情があった。

部屋に入るや否やベッドに倒れこむように横になり、目を閉じる。

「……早速、約束を破ってしまったな」

出てくるのは後悔ばかりだ。正しいことだと決断した上での行動だったというのに。

——約束。『もう二度と力を使わない』というサツキさんとの約束を、俺は今日破ってしまった。

オーキド博士に無理を言っただけでピジョンとサナギラスも戻してもらったものの、やはりピジョンはまだ完全には回復していなかった。体の傷は癒えていたものの、羽の痺れだけは未だに残っていた。羽を動かすことはできても、飛び立つほどに羽ばたかせることはできていなかったのだ。

だが空中戦ともなればピジョンは絶対に欠かすことのできない存在だと、そう考えた俺は……サツキさんとの約束を破り、力を行使した。

「ピイツ……」

「ああ、大丈夫だよピカチュウ。……今日は、体の痛みもないから」

心配そうに顔を覗き込むピカチュウを少しでも安心させるよう呟けば、ピカチュウは何も言わずに俺の胸元に入ってくる。頭を撫でていると徐々に気持ちよさそうな鳴き声が聞こえてきた。

……大丈夫なはず。今回は今までと違って、力を使ったのは本当に

短時間だけだった。時間にしておよそ数秒という時間。疲労もそれほど感じられなかった。

「まさか、俺が壊れたわけではないしな」

一番怖いのはその状態に慣れてしまうほど壊れるということ。

だが今のところは普段の生活も滞りなく過ごせている。だから大丈夫なはずだ。

「……俺なら大丈夫だよピカチュウ。ゴールドだってまだ見つけれないのに、そう簡単に倒れるわけないだろ」

「……チュー」

「俺が嘘を言ったことがあったか？ ……大丈夫だから、今日はもう風呂に入って休もうぜ」

「ピッ！」

相棒の力強い返事を聞き、バスルームへと向かう。

ポケモン達も今日は疲れたことだろう。今日は早めに休ませてやらないとな。

「……申し訳ありません、オーキド博士。この度はご迷惑をおかけしました」

『そのように頭を下げてください。君が無事であっただけでわしは十分じゃよ』

「ありがとうございます。本当に……今日はシユン君に感謝してもしきれませんね」

『そうじゃのう。わしも今まで凶鑑所有者など多くのトレーナーを見てきたが、たった一人で敵の戦艦に乗り込むなど初めてじゃ』

サツキが泊まっている一室では、パソコンでオーキド博士と連絡を取り合っていた。

あの後もオーキド博士は各地の伝手と連絡を取り合い、捜査に尽力していた。今ようやく彼女の無事を確認できて胸を撫で下ろしている。

二人とも今日のシユンの活躍にはただ絶賛するだけだった。かつてのレッド達と同等の活躍と言ってもおかしくない。今回の彼の行動がなかったならば、今頃どうなっていたことか……想像に難くない。

『君もシユン君も、今日はゆっくり休養をとってくれ。さすがに疲労がたまったことじやろう』

「そうですね。私も今日一日で疲れがどっと押し寄せてきたような感覚です。シユン君も同じことでしょう」

『無理もあるまい。……明日からまたよろしく頼むぞ』

「はい。それではまた」

通信を切り、サツキは溜め込んでしまった疲労を流しだすべく、バスルームへと向かう。

シャワーノズルから発射される暖かい水滴の一つ一つが彼女の体を伝い、次々に流れていく。

鏡を見ればそこには見慣れた自分の顔がある。肌も綺麗な一言に尽きるもので傷一つない。

「……もう少しで、私が危ない目にあっていたのよね」

肉体的な意味だけではない。女性としても傷つけられた可能性がある。まだ素肌を晒す程度で済んだのが幸いだ。

共にいる男の子を助けるとそう決めたのに、今回もまた助けられてしまった。

これ以上余計な心配はかけなくなかったというのに。危険な目には合わせたくはなかったというのに。……シユンは迷う事無く助けに来た。

「……もう君も一人前になったって、認めてもいいのかな？」

お湯が張っているバスタブに浸かり、サツキは目を瞑ってシユンのことを考える。

その顔には柔らかい笑みが浮かんでいて、頬がほんのり赤く染まっていた。

「――送信、完了」

ボールが問題なく発進されたことを確認して携帯転送システムを片付ける。

今回はサンドパンとヘラクロスをオーキド博士の下へと送った。今日の戦いで特に消耗が激しかった二体。最近は戦いの連続であったし、休養の意味も兼ねて少し休んでいてもらおう。

「皆も今日はありがとう。しっかり休んでくれ」

センターでの治療が完了し、ボールの中で待機しているポケモン達に一言声をかけて、俺も寝巻きに着替えた。

さすがに疲労が限界を超えたのかまぶたが重い。すぐにでも寝付けそう。

目覚ましをセットしてベッドに横になる。今日一日を振り返り、反省点を整理して瞳を閉じた。

……それから数十秒後。そろそろ眠れるころあいだと思ったところでポケギアがなり始める。手にとって見るとサツキさんからメールが来ていた。

『今大丈夫?』と、それだけが書かれている単純な内容。

果たして今日話さなければならぬことでもあったのだろうかと考えをめぐらせるが、特に見当たらない。とりあえず大丈夫だと返信をすると、しばらくして部屋の入り口の扉がノックされた。

「……どうしたんですか、サツキさん?」

「……」

扉を開ければ、やはりそこにいたのはサツキさんだった。

しかし彼女は何も言わずに部屋の中へと入っていく。手元にはなぜか枕があった。

周囲の物には目もくれず、ベッドまで歩いていき、そこで立ち止まった。

不審に思いつつも彼女反応を窺っていると……すでにおいてあった枕の隣に自分の枕を置き、布団の中に入った。

「……え? サツキさん、それは……どういうことでしょう、か?」

「……来て」

「いや来てって……」

「今日だけは、一緒にいよ」

「……」

ギリギリ聞こえるくらい静かで今にも消えてしまいそうな声だった。

それ以上は語らず、彼女はずっと壁の方を見て俺と視線を合わそうとしない。このままではもう何も話さないのだろう。

……抵抗は当然ある。以前は一緒の部屋だったとしてもベッドは別だったのだから当然だ。

しかし今のサツキさんを放っておくことなでできるわけもなく……俺はサツキさんとは逆向きを向く形でベッドの中に入った。シングルベッドなので、下手に振り返ったら危ないだろうな。

「……」

……重い。沈黙が辛い。

先ほどの反応から何か話すことがあたのだろうか、サツキさんは一言も話さない。

一人でいたくなかったという理由だけなのだろうか？ たしかに今回の事件は彼女の身内が敵になったのだから衝撃は大きいだろう。拉致された時の精神的ダメージもあって、孤独を味わいたくなかったのかもしれない。

それなら、やはり何か俺の方から声をかけてあげれば良いのだろうが……果たしてサツキさんとの約束を破ったような俺が、一体何を彼女に言えば良いのだろうか。

「シユン君。まだ起きてる？」

「え……あ、はい」

突如サツキさんの呼び声が耳に届いた。考えに浸っていたせいで驚いたが、反応があったので一安心だ。

「今日は本当にありがとうね。おかげで私もこうして無事に帰ってこれた」



「……いいえ。別にそんなたいしたことでは……」

「ううん。本当に感謝している。……これからはシユン君のことを一人のトレーナーとして、一人の男の子として、見ていくよ」

「……え？ それってどういう……」

「……ですか、と繋げようとしたところで寝息が聞こえてくる。」

「……寝付くの早っ！ とうか、そこで寝るのですか!？」

「……どうして俺に変な疑問をもたせて自分は安心して眠れるのだろうか。仮にも異性がすぐ隣にいるというのにこんな無防備だなんて……信じているということか。そう考えると当然のことながら変な気が起こるわけもなく、俺も彼女のことはできるだけ気にしないように、静かにまぶたを閉じた。」

そして次の日。

コガネシテイで一通り旅の準備を済ませた二人は、ここ数日滞在していた街を後にした。

長く時間を費やしてしまったことを、そして自身の非力さをより理解したシユンは——ここから快進撃を見せる。

同日の昼、より戦力を増やすために自然公園で開催されていた虫取り大会に参加。シユンはピカチュウと共にエントリーした。

「ピカチュウ、でんじは——！」

ハッサムの「でんこうせっか」をかわし、ピカチュウは攻撃を繰り返した。

体から発せられる高密度の電気エネルギーは相手の動きを止めるには十分すぎる。直撃してしまったハッサムはその場で硬直し、ピカチュウの追撃を許した。

「これで終わりだ。ハッサム——ボールに収まれ！」

ダメージが通った好機を逃さずシユンは大会専用のボール——パークボールを投げる。

ハッサムの頭にコツンと当たり、ボールに体が吸い込まれたあとも

しばらく抵抗を見せるも、やがてその動きはなくなった。

こうしてシユンはハツサムをゲット。虫取り大会でも優勝を果たし、勢いそのままにエンジュシティへと向かう。

次の街・エンジュシティに着いたのは夕方だった。

ホテルの予約を済ませるとすぐに、シユンはジムへと急行した。

ジムリーダーはマツバというゴーストタイプの使用手。普段は彼自慢の念視能力を生かし、副業の物探し屋をしているが、その日は運よくジムに滞在していた。

マツバはシユンの挑戦を快く引き受け、そのままバトルは始まる。エンジュジムでのバトルは二体二のダブルバトル。マツバが繰り出したのはゴースとムウマだった。

「シャドーボール」や「サイケこうせん」、さらには「うらみ」などゴーストタイプならではの異色の戦い方を見せるマツバ。

「エーファイ、びかりのかべ」！ ハツサム、「つるぎのまい」！ それに対してシユンはイーブイが進化したばかりのエーファイ、そして昼に捕まえたハツサムで挑む。

どちらもまだ完全にシユンが戦法を把握したわけではなかったが、そうとは思えないほどの戦いだった。

エーファイは味方の特殊攻撃に対抗できる防壁を張ることで守りを固め、その間にハツサムは戦いの舞いによって攻撃力を上げる。

「サイコキネシス」に「メタルクロウ」！！  
そして防戦一方だった展開から一気に反撃に転じる。

強力な念力と、鋼鉄の爪が相手の二体を襲った。弱点をついた攻撃・威力が高まった攻撃の威力は相当なもので、ゴースとムウマは同時にノックアウト。

エンジュジムでもシユンは勝利し、見事フロントムバッジをゲットした。

その後は調査を進め、マツバのアリバイを確認し一通り調べ終わると次に日にエンジュシティを旅立つ。

彼らが向かったのは西のアサギシティだ。

近頃アサギシティのすぐ側・41ばんすいどうで渦潮が頻繁に発生

しているという知らせを聞き、『何かが起こる前触れかもしれない』というサツキの意見が決め手となり、すぐにでも駆けつけられるようにと。

アサギシテイにもジムはあり、リーダーはミカンという女性であった。

専門家タイプは新タイプ『鋼』。ハガネールやレアコイルなど、防御が硬いポケモン達は彼女の『鉄壁ガードの女の子』という二つ名の象徴である。

シユンは今回もジム戦に挑戦。ルールは六体六のフルバトルであった。

防御が硬く、また彼女の切り札であるハガネールは攻撃力も並大抵なものではなく、徐々にシユンを追い詰めていった。

「焼き尽くせ、バクフーン」かえんぐるま」!!」

しかしシユンも負けてはいられない。

バトルの行方を決定付けたのは、ミカンとの戦いの最中で進化したマグマラシの進化系——バクフーン。より火力をましたバクフーンの攻撃はハガネールの防御をも上回り、その巨体は地面に沈んだ。

その結果、シユンのチームは六体のうちピカチュウ・サンドパン・サナギラス・ラプラスが戦闘不能となったが、ヘラクロスとバクフーンは最後まで地面に膝をつけることなく相手を下した。

こうしてシユンは見事にアサギジムでもジムリーダーとの戦いに勝利し、見事スチールバッジを手に入れたのだ。

ジム戦後にシユンとサツキはしばし話し合い、しばらくの間この町に滞在することを決定。

ミカンの調査を終えるとシユンはポケモン達を鍛えながら、情報収集に努めることとなった。

シユンも彼の手持ちポケモン達も徐々に力を蓄え、ついにピジョンもピジョットへと進化を果たした。どんどん力強い存在へとなっていく。

サツキもシユンとポケモン達の成長を見守っていた。

できうるならばこれからずっと一緒にいたいと些細な願いを祈

りながら。

——しかし、平穏な時間は決して永遠ではなく。次の戦いはすぐ近くまで迫っていた。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：5個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ、ファントムバッジ、スチールバッジ）

手持ちポケモン

バクフーン♂ Lv42

ピカチュウ♂ Lv45

エーフィ♀ Lv44

ラプラス♀ Lv49

ピジヨット♀ Lv38

ヘラクロス♂ Lv50

ボックスメンバー

サナギラス♂ Lv48

サンドパン♂ Lv40

ハッサム♂ Lv46

レポートに書き込みました!!

## 第二章 激闘、開幕

### 第二章の登場人物

#### 【登場人物】

・ シュン

本作の主人公。

オーキド博士の依頼を受け、次々とジムリーダーに挑戦していく。道中に仮面の男との対戦をはじめ圧倒的な敗北も経験するも、ポケモン達やサツキの助けもあって精神的にも成長した。

現在は来るべき仮面の男との再戦に向けて、ポケモン達と日々訓練を行っている。

勝負においては地形を利用したり相手の攻撃を逆手に取ったりと、様々な戦法を見せる。

・ サツキ

現在シュンと行動を共にしている女性。

トレーナーとしてかなりの実力を誇っており、シュンを鍛えている。

旅の途中では幾度かシュンに助けられたこともあり、徐々に彼を意識するようになっていく。

・ オーキド博士

知らない人はいないポケモン研究の権威。

シュンとサツキに仮面の男の捜査を依頼した。

・ ウツギ博士

ワカバタウンに住むポケモンの研究者。

トレーナーに捨てられたヒノアラシを拾い、旅立つシュンに新たなパートナーとしてプレゼントした。

・シユンの母親

本作の主人公であるシユンの母親。

かつてはトレーナーとして旅をしたこともあり、その途中で夫と出会う。

穏やかな性格だが怒らせると怖い……らしい。

地元を旅立ったシユンを心配しており、無事に帰ってくることを祈っている。

・シユンの父親

シユンの父親。

彼にトレーナーとして、一人の人間として大切なことを教えた。彼の言葉は今もシユンに刻み込まれており、彼の性格に影響している。しかし数年前に家族を残して失踪。今も連絡はとれていない。

・ゴールド

ワカバタウンが生んだトラブルメーカー。

シユンにとつては大切な後輩であり、悪友のような存在。

ライバルであるシルバーの行方を追って、ジョウト地方各地を駆け巡っていた。

不真面目な性格だが正義感は強い。シユンを先輩と呼んで慕っていた。

本編開始以前に仮面の男と戦い、消息不明となっている。

・シルバー

滅多に感情を外に出さない冷静なトレーナー。

トレーナーとしての実力はかなりのもので、ゴールドに勝利している。

ある男の指示を受け、仮面の男を追っている。

ゴールドと共に仮面の男に挑むも、圧倒的力の前に敗れ、消息を絶っている。

・クリスタル

オーキド博士にポケモン図鑑の完成を依頼された捕獲ゲットの専門家スペシャリスト。捕獲がまったくすすまない三人（ゴールド、シルバー、シユン）に代わって図鑑を次々と埋めている。

責任感が強く、真面目な性格で礼儀を重んじる。

・仮面の男

現在のロケット団を率いている男。正体は不明。

ゴールドの活躍でジムリーダーの誰かということはわかっているのだが……

自分を調べていたゴールドやシルバー、さらにはシユンまでをも軽く打ち倒すほどの実力を持っている。

【所有ポケモン】

・シユンのポケモン

現在は状況によつて手持ちの六体を入れ替えている。

冒険当初と比べると多くのポケモンが進化を経験し、見違える姿となった。

なお、エレキッドは現在母親の元におり入れ替えはしていない。

バクフーン♂

ヒノアラシ↓マグラシ↓バクフーン

技：『たいあたり』・『ひのこ』・『えんまく』・『でんこうせっか』・『かえんぐるま』

シユンがワカバタウンを旅立つ際にウツギ博士より譲り受けた。

幾度の激戦を経験して最終進化を果たし、火力も大幅に上昇。主戦力の一角として数えられている。

ピカチュウ♂

技：『でんきショック』・『でんじは』・『フラッシュ』・『でんこうせっか』・『かげぶんしん』・『10万ボルト』

シユンが最初に捕まえたポケモン。

チーム一のすばやさと多彩な電気技を持ち合わせており、チームの特攻隊長としてシユンを支える。

ピジヨット♀

ポツポ↓ピジョン↓ピジヨット

技：『たいあたり』・『かぜおこし』・『すなかけ』・『どろかけ』・『でんこうせつか』・『つばさでうつ』

空を自由に舞い、空中から敵を討ち果たす飛行要員。

仮面の男との戦いで負傷し一度は戦線を離脱したものの、再び戦場に舞い戻った。

サナギラス♂

ヨーギラス↓サナギラス

技：『いわおとし』・『いわなだれ』・『かみつく』・『いわくだけ』

パーティの切り札的存在であり、シユンの信頼も厚い。

パワーに優れた重量級のポケモン。現在はただ修練を積みながら、進化の時をじっと待っている。

サンドパン♂

サンド↓サンドパン

技：『どくばり』・『スピードスター』・『ころがる』・『あなをほる』・『かわらわり』・『きりさく』

旅の途中でシユンがはじめて自分から捕まえたポケモン。色違いに輝くその姿は見るものを魅了する。

地表でも地中でも、はたまた空中に投げ出されても戦えるオールラウンダー。連携も上手い。

ラプラス♀

技：『うたう』・『なみのり』・『みずでっぼう』・『れいとうビーム』  
シユン達を背に乗せて水上を優雅に進む。

技も強力だが、知能が高いためテレパシーを使って戦いのサポート



に徹することもしばしば。

ヘラクロス♂

技：『つのでつく』・『かわらわり』

ウバメの森に住んでいたが、仮面の男との戦いを通じてシユンのチームに加わる。

陽気な格闘戦士。その得意のパワーでチーム内では肉弾戦を担当している。

エーファイ♀

イーブイ↓エーファイ

技：『ずつき』・『たいあたり』・『ひかりのかべ』・『サイコキネシス』  
元々はマサキのポケモンだったが、彼から譲り受け後にエーファイへの進化を果たした。

エーファイに進化してからは多彩な補助技と強力なエスパーの技を駆使して活躍している。

ハツサム♂

技：『でんこうせっか』・『つるぎのまい』・『メタルクロー』

シユンが参加した自然公園の虫取り大会で捕獲された。

自身の能力を高め、小技で相手を翻弄する。別名「鋼のテクニシャン」。

・サツキのポケモン

冒険当初から揃っていたメンバー。

全員が相当な実力を持つているとのこと。

未だ姿を見せぬポケモン達もいるが、果たして一体……

スターミー

技：『なみのり』・『サイコキネシス』・『リフレクター』・『10まんボルト』

攻守ともに優れたサツキのエース。

シユンのポケモン達の修行も受け持っている。多彩な技の数々は未だ底が知れない。

ニドクイン

技：『かわらわり』

ウバメの森に仕組まれていた二重の壁を一撃で破壊した。その技をシユンのポケモン達にも教えることにも一役買っていた。破壊力と器用さを持ち合わせている。

ギャロップ

技：『かえんぐるま』・『かえんほうしゃ』

仮面の男が築いた氷でさえも瞬く間に溶かすほどの炎技を放つ。足も速いために緊急時の移動用のポケモンでもある。

???

サツキがジム内を搜索する際に繰り出していたポケモン。偵察ということを考えると機動力に優れたポケモンか……？

???

旅が始まってからまだ一度もボールから出ていない一体。

可愛らしいポケモンが潜んでいるという話もあるが果たして真実か……

???

技：『じしん』

サツキがロケット団の中隊長を撃退する際に繰り出した。

大型であり、その体から放たれた“じしん”は離れた場所にいるシユン達をも巻き込むほどの威力である。

## 第二十五話 VS ベロリンガⅢ 集結の時

——耳を澄ませば穏やかなさぎ波の音が響いてくる。

特に目立った天候の変化もなく海では自由に泳ぐ人々の姿がうかがえた。

ここは40ばんすいどう、アサギシティを西に進んですぐの水路である。ジョウト地方の中でも大きな海であると聞いたことはあったけど、こうして自分の目で見ると海の偉大さが鮮明に伝わってくるな。

「海なんてめったに来ないし、ポケモン達の休養のためにも良い場所だな。ワカバタウンにいたころとはまた違う感じだ」

視線の中ではボールから出たラプラスがピカチュウやイーフィを乗せて優雅に泳いでいる。ラプラスもこれだけ広い海で泳ぐのは初めてなのだろうか気持ちよさそうだ。ここ最近は戦いの連続であったし、少しでもこいつらには楽しんでもらいたい。

「……しかもトレーナーも綺麗な人ばかりだし。本当に海っていいなあ」

俺自身も十分に休むことができている。

海にも当然バトルを挑んでくるトレーナーはいるが、決して負担にはならず俺の目の保養となる。

ビキニのおねえさんが多いのだ。カット部分が大きくすらりと伸びた手足やたわわに実った果実にはとても癒される。

……その上！ 何よりも凄いのは勝負の後。

バトルともなれば当然敗者は勝者に賞金を与えることになっているのだが……それがすごかった。水着であるためにトレーナーカードなんてしまう場所なんてないと思ったら、突如自分の胸元へと手を伸ばし……そこからトレーナーカードを出した。変な想像をしてみたら俺は間違っていないと思う。

当然ながらここまで俺は全てのバトルで全勝している。つまりそれだけの数、その光景を目にしていたということ……やっぱり海って良い。

ただし海パンやろう、テメーは駄目だ。勝負の後いきなり海パンの中に手を突っ込むなんて。攻撃かと思つて思わずピカチュウにたまわr……訂正、〃かわらわり〃を命じてしまった。サツキさんと側にいたというのに。いっそのこと男として、ではなく人として終わらせてやろうとも思った。本当にふざけた話だ。

「ポケモン達の訓練も並行して行えるし、まだしばらくはこの時間が続くかな」

そのおかげで最近ではピカチュウの成長速度が以上に早い。

水着であるからなのかはわからないが、トレーナーは殆ど皆水タイプのポケモンを繰り出す。タイプ相性の問題もあつてピカチュウの出番が異常に増えていた。それはもう対照的に出番が減ったバクフーンが嫉妬するくらいに。そうは言つても皆が鍛えられるようにとできるだけ戦いの場は広げているけどね。

「オーキド博士から連絡がない限り俺たちはこのアサギシティからは動けないわけだし、いっそ俺もちよつと泳いでおこつかな?」

「シユン君! 今少し大丈夫かしら?」

「え? 一体どうしましたサツキさん?」

少しばかり遊泳を楽しもうかと考えていると、浜辺よりサツキさんが駆け寄つてきた。

露出が多い黒のビキニの上に薄い水色のパーカーを羽織っている。

細い線が際立っていて、彼女のスタイルのよさを強調していた。

一緒に泳がないかという提案ならば喜んで受けるのだが……この調子だと、おそらく違ふのだろうな。

「今、私のポケギアにオーキド博士から連絡があつたの。」

……新しくジョウトの凶鑑所有者に選ばれた女の子が、このアサギシティに着いたって」

「あー、なるほど。それじゃあ、俺たちも準備してすぐに合流しろつてことですか」

「ええ。一度着替えてから合流しましょう。それじゃあ十分後にこの浜辺で」

「了解です」

ラプラス達にも事情を話してボールに戻し、ポケモンセンターへと戻っていく。

「……ようやくこのアサギシティから先に進むわけか。ここ数日間しばらく滞在していたせいも少し寂しくはなるが、仕方のないことだ。」

「……もつともオーキド博士のあの連絡さえなければ、今頃はタンバシティとかにいたはずなんだよなあ……」

ふと数日前にあったオーキド博士の電話が脳裏をよぎる。

俺とサツキさんが今日までこのアサギに滞在することになった、原因の電話が……

アサギシティに着いて二日目。

ジム戦にも挑み、しばらくはポケモン達の特訓に勤しんでいたシユンとサツキであったが、そんなときにオーキド博士から連絡が入った。

調査の具合を確認すると同時に、二人に新たな依頼を申し込むものだった。

「……それじゃあ、このアサギシティにあと二人の凶鑑所有者が来るということですか？」

そう聞き返したのはサツキだった。

オーキド博士からの依頼、それはしばらくの間アサギシティに滞在し、他の二人の凶鑑所有者と合流して行動を共にしてほしいということだった。

『そうじゃ。一人はかつてカントーで起こった『四天王事件』の解決に尽力したイエローという麦藁帽子をかぶったトレーナーじゃ。君たちも名前くらい聞いたことがあるじゃろ？ 後で資料も送っておくから、見といてくれ』

「イエロー。……トキワの森の力を使う、癒しのトレーナーですね」

「ええ。レッド君が消息不明となった時から四天王と戦い続けたとい

う、カントーの凶鑑所有者」

その名は二人にとっても良く知るものであった。かつて四天王によるカントー地方崩壊の危機を救い、英雄とも言えるほどの活躍を見せたイエロー。

特に似たような力を持つシユンには強く印象に残っている。いまだ姿を見たことはないが、どこか対抗心にも似た感覚をシユンは覚えた。

「それで、もう一人というのは誰ですか？」

『もう一人はわしが新たにカントー凶鑑を託したクリスタルという女の子じゃ』

「……クリスタル？ サツキさん、知っていますか？」

「いいえ。私もその名前を聞くのは初めてよ」

それに対してもう一人は聞いたことのないトレーナーであった。シユンが自身より知識のあるサツキに問いかけるが、彼女も知らないという。

『君達が知らないのも無理はない。彼女はわしが個人的にポケモン凶鑑の完成のために依頼した、ポケモン捕獲の専門家ゲットスペシャリストじゃからな』

「捕獲の専門家？ そんな人がいたんですか？」

自分でも知らないそのような存在があったのかと、サツキは半信半疑で問いかける。

シユンにとってもわかには信じがたいことで今一どんなトレーナーなのか想像することができなかった。

『どうやら独学で捕獲のことを研究していたという話だな。』

今エンジュシテイ付近にいるとの話じゃが、すでに捕獲数は優に100を超えるという結果を残してくれておる』

「……それほどですか」

「……100、以上？ ポケモンの捕獲数が？」

想像以上の数字に、サツキは純粋に驚き、シユンにいたっては硬直している。

同じ凶鑑所有者である身からして自分とは比べ物にならないという関係しているのだろう。

「オーキド博士。折角凶鑑を頂いたのにすみません。……全然、期待に込められてないようで」

『いやいや、シユン君がそんなに悔やむことではないぞ!? もとより君には別の依頼を引き受けてもらっておるのだから、こちらとてそんな文句は言わんわい』

「そう言っていたら、助かります」

歴然とした差に思わずシユンは俯いてしまうが、元々彼は他の凶鑑所有者と違って特殊な事情で凶鑑を博士より託された身であり、彼がそこまで責任を感じる必要はない。ただでさえ今ジョウト地方は通信障害によってポケモン管理システムが正常に作動していないのだからなおさらだ。

オーキド博士の激励の言葉を聞き、サツキに頭を撫でられてようやくシユンは顔を上げた。

『どちらも腕は立つのじゃが……クリスタル君達がタンバシテイ方面に向かうにあたって、君達は二人をサポートしてほしい。彼女達は危なっかしい一面もあるし、近頃ニュースで流れている41ばんすいどうの渦潮のことも気になる。仮面の男の行方もいまだ掴めんからな。何事もないのが一番ではあるが、いざと言うときのために四人で行動してくれ』

「わかりました」

そういう事情ならばと快く依頼を引き受けた。

もとよりシユン達もタンバシテイに行くことは考えていたし、少しでも戦力は多いに越したことはない。

「それで、オーキド博士。私達はその二人と合流するようにとのお言葉ですが、その二人は今どこにいますのでしょうか?」

『それがのう。クリスタル君については先ほど言ったとおりエンジンシティにいるようじゃが、なにやら彼女に不都合があったようで、現在スリバチ山へと向かっているそうじゃ。イエローもまだアサギに着くには時間がかかると連絡があり……しばらくはアサギシティで過ごしてはくれんかの?』

「……わかりました。それでは、資料の送付とその二人がアサギシ

テイに着き次第、連絡をお願いします」

『うむ了解した。それでは、頼むぞ二人とも』

それを最後に通信を切る。

こうしてシュンとサツキはイエローとクリスタル、二人の凶鑑所有者が来るまでの間、アサギシティに滞在することとなったのである。

着替えを済ませて、先ほどの海岸へと戻る。

サツキさんがまだ到着していなかったので、少し考え事を……オード博士の新しい依頼のことを思い出していた。

「今考えると、オード博士も仮面の男を警戒しているってことなのかな？」

ピカチュウとエーフィに問いかければ同じことを思ったのだろうか、首を立てに振って同意を示す。

たしかに最近はまだで天変地異のように渦潮がタンバとアサギの間で起こっている。サツキさんの言うとおり、何かが起ころうとしているのかもしれないな。

「まあ、俺達はできるだけのことをするだけだ」

「……おーい、シュン君！ ごめん、遅くなっちゃったね」

「あ、サツキさん。いいえ、俺も今来たところですよ」

サツキさんが走ってこちらに駆け寄ってくる。

本当は五分前にはすでにここにいたのだが、それを言う必要はない。とりあえず、サツキさんと合流できたのだから、送られてきた資料に載っていた二人の凶鑑所有者——イエローとクリスタルを探しましょう。

「ありがとう。それじゃ早速二人を探しましょうか」

「そうですね。……しかし思ったんですけど、どうやって二人を探しましょうか？」

行動に移そうとしたところで、特にあてがないということに気づいた。



顔写真が載っていたために顔はわかるのだが、俺たちは彼らとの連絡手段が何もないのだ。果たしてどうしたことやら……

「……そういえば彼らの連絡先を知らないのよね」

「ええ。ひとまず街に戻りますか？ ポケモンセンターにはそれらしき人はいませんでしたが、誰かしら目撃している人はいるでしょうし……」

「そうね。うん、そうするべきなのかもしれない」

「じゃあまずは歩きましょうか。……ん？ どうしたエーファイ？」

ひとまずは手がかりを探そうと提案し、歩き始めようとするとエーファイの耳が突如まつすぐに伸び、何かを察したように顔を上げる。

そしてどこかの場所を見つめて……エーファイはアサギシティの方  
向へと走り出した。

「え……おい、エーファイ!! どうした!」

俺が指示も出していないのに勝手に走り出したエーファイだが、呼びかけに応じて立ち止まり、首を振ってついてくるようにと促している。

「どうしたんだエーファイ？」

「……エスパークタイプの子は私達にはわからない何かを感じ取ったんだと思う。特にエーファイは体全体の体毛で空気の流れさえをも読みとるといふ繊細なポケモンだから」

「それじゃあ、エーファイはアサギシティで何かあったと……？」

「とにかく、エーファイに先導してもらって私達もその場所へ行きましょう!」

「はい!」

サツキさんの説明を受けて事情を理解。

とにかく今はその何事かを解決することが優先だ。エーファイを追いかけるように俺たちも走り出した。

(……どうすればいいんだろう?)

アサギシテイのはずれ。一人の女の子が立ち尽くしていた。重力法則に逆らった独特の青い髪、動きやすい軽装に身を包んだ少女。

この彼女こそポケモン捕獲の専門家と謳われ、オーキド博士にポケモン凶鑑の完成を依頼させたジョウト凶鑑所有者——クリスタルである。

彼女は口には出さずに、心の中で現在の自身の心境を簡潔に表した。常に落ち着いて物事に取り組む彼女だが、今はこの場をどう取り繕うかを思案することではいっぱいであった。

「えっと、もう一度聞きますけど……あなたは私を探していた、ということなんですよね?」

「ええ。丁度アサギシテイにつくころだと聞いていたので。無事に会えてよかったです!」

今一度問うが、やはり相手が自分を探していたという事実は変わらないように。

クリスタルはどうして自分を捜し求めていたのだろうかと、目の前の麦藁帽子をかぶったトレーナーに疑惑の目を向ける。

「……ねえ、それじゃあどうして私を——」

「それじゃあ早速行きましょうか」

「——探していたの、つてちよつと! ちよつと待つて! まず話を聞かせて!」

自分の話を聞かず、マイペースに先を進もうとする相手を引きとめて必死に訴えた。

どうもこの人といるとペースが崩されるなど感じつつもクリスタルが情報を聞き取ろうとしていると……突如物陰から何か長い棒状のようなものが飛び出し、麦藁帽子のトレーナーとクリスタルの手持ち・ベイリーフを空中に持ち上げてしまった。

「うわあっ!」

「なっ……なに!」

驚きながらもその発生元へと向ければ、そこにはベロリンガの集団がいた。

彼らは丸く群がり、舌を一人と一匹に幾重にも巻きつけて逃がさないようにと拘束している。

「どうしてベロリンガがこうも突然……！　そうか、これはベイリーフのもつ効果だわ！」

自分の自慢のポケモンを見たことであつてポケモン図鑑でみたベイリーフの特徴を思い出し、納得したように呟く。

「ベイリーフは活性化作用を持つ匂いを首から漂わせている。それにつられてベロリンガはベイリーフを……」

しかもクリスタルのベイリーフは先の戦いで進化を経験したばかり。それゆえにまだ自分の体を制御しきれずに、自覚もなしに匂いを発散させてしまつていたのだろう。

「理由は判明。とにかく、ベイリーフとあの人を助けないと！」

「……いや、その必要はない」

「え……？」

「——『サイコネシス』！」

すぐさま救助にすべくモンスターボールへと手を伸ばすクリスタルだったが、その手は何者かによつて制せられた。

驚いて振り返れば、エーフィとピカチュウを連れた男のトレーナーがそこにいた。彼の指示を受け、エーフィの瞳がきらりと光る。

するとエーフィの放つた『サイコネシス』によつてベロリンガ達の動きは完全に止まり、さらにはからまつていた舌が徐々に解けていき……そして完全に解けた。イエローとベイリーフは急な落下を防ぐように宙に浮かされ、ゆっくりと地面に降りてきた。

「……すごい。これだけ正確に念を送り込むなんて……」

「ベロリンガか。……なぜか無性に嫌な気分になるな。エーフィ、決めろ」

クリスタルが感嘆しているなか、なぜか男のトレーナーは気分を害したように顔をしかめ……エーフィに攻撃を命じる。するとベロリンガの体は地面に沈み、その威力で気絶した。

「ふう。エーフィが微妙な空気の乱れを感じ取ったから、急いで来てみたら……まさかこんな場面に出くわすとはな。大丈夫ですか、クリ

スタルに……イエローさん？」

「あ、はい僕は大丈夫です」

「ありがとうございます。おかげさまで怪我もなく……って、どうして私の名前を？ それに、イエロー？」

二人は助けてもらったお礼を男に告げる。しかしクリスタルだけは名前を知っていたことに疑問を感じ、さらに聞きなれない名前を耳にして……視線を麦藁帽子のトレーナーに向ける。

「あれ？ 言ってませんでしたっけ？ 僕はイエロー。イエロー・デ・トキワグローブです」

その意図を察して麦藁帽子のトレーナー、イエローは笑顔で告げた。

悪気がないようなその無邪気な顔は、本当に名乗りわすれていただけだということを表している。

「言ってませんよ！ ……それで、あなたは？」

「うん？ オーキド博士から何も聞いていないのか？」

「え？ 博士から？」

「……どうやらオーキド博士は私達だけに指示を出したようね」

「そのようですね。その必要がないと思ったのでしようが、一言伝えてくれれば良いのに。まったく」

自身の依頼主のことを思い出すと、彼女の背後からさらに一人の女性が見えた。

この二人の会話から彼らがオーキド博士がクリスタルと会うように指示を受けていたということが伺えるが、あいにくクリスタルには彼らと面識はない。

「……えっと、事情がよくわからないんですけど、とにかくあなたたちは誰なんですか？」

ひとまずはこの相手が何者なのか、それを知らなければならぬ。意を決してクリスタルは踏み込んで二人に問いかけた。

「俺はワカバタウンのシユン。君と同じ、ジョウト凶鑑所有者の一人だ」

「私はマサラタウン出身のサツキよ。シユン君と一緒に、このジョウ

ト地方を旅しているの。よろしくね」

「……え!? 凶鑑所有者なんですか!?!」

「ああ、その証拠に……ほら」

シユンと名乗るトレーナーは背負っていたバッグの中へと手を伸ばし、そこから一つの箱のような赤い機械を、クリスタル自身も持っているジョウトのポケモン凶鑑を取り出してクリスタルへと見せた。「そういえば僕、新しいポケモン凶鑑は4つ作ったって話を聞いたことがありません。」

「本当に所有者だったんだ……」

「もちろん。今日はオーキド博士に君達、凶鑑所有者二人のサポートを頼まれてね」

「私たちも一緒にタンバシテイ方面まで行かせて貰うわ。どうぞよろしく」

「本当ですか!・こちらこそよろしくお願いします!」

先ほどのベロリンガの対処法を見てもシユンの実力が高いことはわかったし、サツキという女性も相当の実力であることは想像できた。

これほど頼もしい仲間はいない。クリスタルとイエローは喜んで差し出された手を取った。

「……って、え? 凶鑑所有者二人……?」

全てを理解しかけたクリスタルであったが、シユンの言葉を思い出し、その言葉を理解しかねてその言葉を復唱する。

「それも聞いていないのか? イエローさんは、カントー凶鑑の所有者だけど……」

当然のように呟くのはシユン。話し方から考えても嘘を言っているとは思えない。

クリスタルはぎこちない動きで首をイエローへと向け、「本当なんですか」と聞くと「え? さつき言いましたよね?」という返事が返ってきた。

「……えー……!?!」

瞬間、「だから言っていないです」というツツコミさえ忘れて、事実

を受け入れられなかったクリスタルの悲鳴が木霊した。

「……サツキさん。オーキド博士が俺たちに依頼した意味、ようやくわかった気がします」

「ええ、私も。この二人だけだと……色々危なかったかもね」

先のこと少し心配になったシユンとサツキは、揃ってため息を吐く。

そしてやはりオーキド博士はトレーナーを見る目があるんだなあと同じことを考えていた。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ・5個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ、フアントムバッジ、スチールバッジ）

手持ちポケモン

バクフーン♂ Lv42

ピカチュウ♂ Lv48

エーフィ♀ Lv45

ラプラス♀ Lv50

ピジヨット♀ Lv42

ヘラクロス♂ Lv51

ボックスメンバー

サナギラス♂ Lv49

サンドパン♂ Lv40

ハッサム♂ Lv47

レポートに書き込みました!!

## 第二十六話 VS テツポウオ 海神降臨

アサギシテイで軽いいざこざがあったものの、イエローとクリスタルは俺達二人のことは信頼できる味方だと判断してくれたようで同伴については快く受け入れてもらえた。

クリスタルがタンバシテイ方面のポケモン捕獲を望むにあたり、海をわたるための「なみのり」を使えるポケモンがいなかったため、途中までは俺のラプラスに乗せ、そしてイエローのおじが運転しているという船と合流し、全員がそちらに乗り移った。

「……未だに信じられません。本当にあの人がカントーポケモン図鑑の所有者なんですか？」

そのイエローのおじさんが運転している船の上で、クリスタルは疑惑に満ちた目でイエローを見ている。当の本人と言えればそんな彼女の気持ちなど全然気づいていないのか、船を運転しているおじさんと何事かを話しているな。

「まあ俺達もにわかには信じがたいことだとは思っているんだけどね」

「私も実際に会ったことはなかったから、正直驚いているわ。でもオーキド博士の資料を見る限り、本人で間違いないようだし」

イエローが裏表のない性格のように見えるが、それがクリスタルにはかえって怪しく映ってしまおうのだろう。俺とてオーキド博士から前もって情報をもらっていないければ信じきれたかあやしいところだ。

「あ、そういうえばクリスタルはイエローさんのデータを持っていないかったっけ？ せっかくだし今から送るよ。ポケギアを出してくれる？」

「はい、わかりました。お願いします」

ポケギアの赤外線機能を使い、オーキド博士より受け取っていたイエローさんのトレーナー資料をクリスタルへと送る。

「……えっ!？」

するとその資料を目にしてクリスタルが突如目を丸くした。

それほど詳しい資料は載っていないと思っただが……何かあったかな？

「と、年上!? い、イエローさんって年上だったんですか!？」

「はい? えっと僕の話でしょうか?」

「……あ、ツツコムとここそこか」

クリスタルがイエローさんを見て驚愕している。その声に反応してイエローさんもこっちに来た。

「そういえばクリスタルが11歳で、イエローが12歳だったわね。」

あれ? ……そういえばイエローよりもシユン君の方が年上よね? どうして敬語を使っているの?」

「いやー、そうなんですけどね。やっぱりイエローさんの方が図鑑所有者として経験が長いわけだし、それにカントー地方を救ったほどの活躍をしたともなると、格上の存在に感じますよ」

たしかにサツキさんの言うとおり俺の方が年齢は上なわけだが、相手が有名人であるということを考えて、どうしても意識してしまう。そしてもう一つ。さすがにこれはサツキさんにも言えないが、個人的に彼の能力のことが頭に入り、気軽に呼べないということも一因ではあった。

「なるほどね。そこまで気にしなくてもいいと私は思うけど」

「そういう性分なので」

「まあ、それがあある意味ではシユン君らしいかもね」

納得してくれたようでサツキさんはそれ以上は深く聞かずに、微笑を浮かべた。

こういった所で普段の行いが大切なんだな、としみじみ感じる。サツキさんの気遣いも身に染みだ。

「……ま、それじゃあ二人とも。折角だしタンバに着く前に一つ確認してもいいか? 二人の旅の目的を」

「目的、ですか?」

「ああ。俺とサツキさんはオーキド博士とウツギ博士から個人的に仕事を請け負っているから、二人とは目的が違うんだよ。今回は『二人の護衛を頼む』と言われたただだから、今後のためにも聞いておきたいと思っただけ」

説明すれば納得して二人とも頷く。



何せ彼らをはじめとした凶鑑所有者と違い、俺は仮面の男との戦いのために旅に出ているので、少々事情が異なるのだ。特にイエローさんはカントーの凶鑑所有者だからなぜジョウト地方に来ているのか気になる。

「いいですよ。それじゃあ僕から話します。」

僕がこのジョウト地方に来たのは、この地方に飛んでいったはずのポケモンを捜索するためです」

「……どういうことですか？」

「そのポケモンがそんなにも価値のあるポケモンってこと？」

「はい。以前、カントー四天王事件の時、首謀者であるワタルが操ろうとしていたポケモンです」

「その事件が解決したとき、首謀者であった四天王が姿を消したようにそのポケモンもどこかに飛んでいつてしまった。方角的にジョウト地方の方角だったってことでおじさん達はこっちに来たってわけよ」

イエローの説明に捕捉するように、船を運転していたおじさんも口にする。

なるほど。たしかにそのような存在を野放しにしておくことは危険か。当事者であり凶鑑所有者でもある彼が口にするのだから、それだけの事態なのだろう。

「それでジョウト地方まで来ていたのですが、僕もオーキド博士からクリスタルさんの『新ポケモン凶鑑のデータ完全収集』の手伝いをするように依頼されまして、クリスタルさんを探しにここに来たんです」

「……そういえばアサギシティでは私を探していたと言っていましたけど」

「あなたがいることで凶鑑完成が早まるって？」

「そのことについては僕よりもクリスタルさんから説明した方が早いと思いますよ」

そう言っつてイエローはクリスタルへと視線を向ける。

果たしてどういう意味だろうか。イエローはカントー凶鑑所有者。

すでにカントーに住まうポケモン達のデータはオーキド博士の下にも行っていることだろう。それなのにジョウトのポケモンが主体である図鑑の完成を、クリスタルの手伝いをできるとは思えない。当のクリスタルも意味がわからず疑問に満ちた目で見ている。

「……まあ、それなら先にクリスタルの話を聞こうか。確認するけど、君の旅の目的は『新ポケモン図鑑のデータ完全収集』だよな?」

「はい。オーキド博士にその依頼を託され、今回はタンバシテイ周辺のポケモン捕獲のためにここまで着ました。ただ……」

「ただ?」

そこでクリスタルは言葉を濁した。何か言い難いことでもあるのだろうか、顔を俯ける。

「その旅の中で捕獲に失敗した手ごわいポケモン達もいるんです。エンジュで目覚めたという伝説のポケモンの一体、スイクン。今そのポケモンの行方も追っているところです」

「ひよつとしてニュースで報道していたことかしら? たしか先日〃やけたとう〃から伝説のポケモンと思われる三体のポケモン達が突如現れたって」

……そういえばそんなことあったな。

サツキさんの言葉で思い出したが、数日前にラジオでそのようなニュースが流れていた。たしか自然公園の虫取り大会に出場した日くらいだった。

つまりあの報道が本当だったということか。ウバメの森の〃ほこら〃のように信憑性の低いもので信じていたわけではなかったが、現に遭遇したというクリスタルがいるのだから間違いないだろう。

「エンジュシテイで私は捕獲に挑んだのですが、それ以来スイクンの行方が掴めず他のポケモンの捕獲に戻ろうとしていました」

「それです!」

「え!」

「……どうしましたイエローさん」

突如話の流れを断ち切り、クリスタルを指差したのはイエロー。突然すぎて意味がわからない。クリスタルもびっくりして硬直してい

る。話が進まないなので助け舟を出した。

「僕がクリスタルさんを手伝う理由ですよ。そのスイクンを含めた三体を目覚めさせたのは、僕なんです」

「……は？」

「え？」

「えー!？」

何を言っているのだろうかこの人は。衝撃の一言で俺たちは三者三様の反応を示した。

伝説のポケモン達を目覚めさせただと？ 本気で言っているのだとしたら大問題だ。遭遇することさえ本来ならありえないというのに、目覚めさせたなどと到底信じられるものではない。

「はっはっはっ。おいイエロー、そんな風に言ったら信じてもらえるものも信じてもらえなくなるぞ」

そんな場の雰囲気を一周するようにイエローのおじさんの活気な声が響く。この人も何かしら事情を知っているようだ。

「悪いな三人とも。たしかにイエローはその三匹の目覚めには関与している。

ただ、正確に言うとしたら少し違う。『偶然そのポケモン達の目覚めの瞬間に立ち会った』という感じだ」

「あなたもその時その場所で三体を見たのかしら？」

「いや、俺は三体が塔から飛び出していく姿を見ただけだ。しかも超高速で飛び立っていったせいでその姿さえ完璧に捉えられたわけではない。だから本当にその場で見たのはイエローだけだった」

サツキさんの問いに答えるおじさん。嘘は言っていないようだ。

『目覚めさせた』のではなく『居合わせた』とのことだが、どっちだ？ この両者では意味がかなり違う。場合によっては本当にイエローは伝説のポケモン達の目覚めの最重要関係者となるぞ。

考えはいくつかあるが、この時点で結論を出すのは早計だろうな。タンバシテイでの搜索が終わった後、エンジュによってイエローからは詳しく話を聞くか。

「……ん？ どうしたんだ、エーフィ」

考えていると、エーファイが突如服の袖を引つ張ってきた。

まだお腹は空いていないはず。毛づくろいの時間でもない。はて何の用件だろうか。

……その答えはすぐにわかることになった。

「あれ？ ……なんででしょうかあれ？」

イエローが遠くの海面を指差す。進路方向上ではないために、おじさんも気づかなかった。

視線をそちらに向けると、水しぶきが大量に上がっていた。しかもどンドン近づいてくる。そしてやがて何かポケモンのような集団が一斉に飛び出してきた。

「あれは——テツポウオか！ エーファイ、リフレクター！」

すかさずエーファイに指示を出し、船の看板に透明の防御壁を張らせる。

テツポウオの集団は次々と壁に激突。堅固な壁を破ることは出来ずに衝撃でそのまま海面へと落ちるが、その壁を乗り越えたり、違う方向から再び突出してくるなどしてその勢いは衰えない。

「おじさん、このままでは罫があかない！ すぐに進路の変更をお願いします！」

「先ほどからやっているが駄目だ！ テツポウオを退けない限り船を進ませられん！」

「ちっ。しかしこれだけの数を一掃するとなると船にも被害が……」

ピカチュウやバクフーンのような一斉射撃ができるポケモンは、今回のように味方がすぐ近くにいる場所では味方にまで被害が及んでしまう。かと言って一体一体を相手にしているわけにもいかない。エーファイは壁を張っているしどうすれば……

「スターミー、サイコキネシス！」

思考の最中、凜とした声が戦場に響く。

俺が後ろを向くと同時にサツキさんのスターミーの核が赤く光りだした。

スターミーが放つエスパーの力は空間の支配にまで及び、テツポウオの集団は全て空中でその動きを止められてしまう。それを確認し、

エーフィはリフレクターを解除させた。

「……おお。全部纏めてかよ」

「サツキさんも、戦えたんですか……?」

「これでも一応、シユン君を鍛えている身よ」

「ええっ!」

そう言っつてサツキさんは微笑む。感嘆の言葉しか出てこないな、さすがだ。凛々しきささえ覚える。

クリスタルもその威力に戸惑い、イエローに至ってはこれほどの実力を持つているとは思わなかったのか、驚愕して顔を青ざめている。

「さて、このテッポウオ達はどうしましょうか。可哀相だけこのまま……」

「待つてくださいサツキさん。そのまま『サイコキネシス』を維持して動けないようにしててください」

「クリスタル? 一体どうするつもりだ?」

今まで傍観を決め込んでいたクリスタルがサツキさんの言葉を遮って前に出た。

カバンを下ろしさらに腰のモンスターボールから一体のポケモン——パラセクトを繰り出した。

「全部捕獲します。皆さん息を少しの間止めていてください!」

「……は?」

おいおい、一体何を言っているんだクリスタルは。どれほどの数のテッポウオがこの場にいると思っっているんだ。見た限り二十体は数えるほどだぞ。とてもではないが信じられない……

「パラびよん、『キノコのほうし』!」

「え、ちよっ! マジで……」

「シユン君!」

「むぐっ!」

間をおかずしてパラセクトの背部から大量の胞子が放出された。

半信半疑でクリスタル達の方を向いていたがために誤って吸ってしまったそうだったが、寸前のところでサツキさんが口と鼻を手で覆ってくれたために助けられた。……柔らかい。

その一方、動けないテツポウオ達はまともにその胞子を吸ってしまい、催眠作用には耐えられずに「ねむり」に陥ってしまった。

「ふうっ。——はああっ!!」

今が捕獲の絶好の機会。クリスタルはそれを逃さない。

自分を囲むようにいくつものモンスターボールを円状に並べ、自身はその中央に座り込む。

一つ間をおいて精神を落ち着かせると、叫び声と共に伸ばした左足を軸を中心に回転させる。左足でモンスターボールを蹴り上げると、そのボールはテツポウオ達へと向かっていった。

テツポウオ達はボールに納まり、そのボールは次々と船へと落下し始める。

「うおっ！ エーファイ、ねんりき！」

再びエーファイに指示を出す。エーファイの目が光り、ボールは念力によってゆっくりと降りてくる。

全てのボールが降りてきたころにはテツポウオの姿はその場から完全に消えていた。

『捕獲』完了しました。どうでしたか？」

「全てのテツポウオの一発で、か」

「すごいですよクリスタルさん！」

『ゲットのスペシヤリスト捕獲の専門家』の名は伊達じゃないようね」

「いや、目の前で見るのは噂で聞く以上だぞ。まさかこれほどとは……」

荒っぽいところはあるが、しかし実力は確かだ。しかも手ではなく足でボールをコントロールしているところを見ると、余程訓練したのだろう。オーキド博士が期待するのも頷ける。

「あれ？ シュンさん、あなたのエーファイ、体に傷ができていますよ」「なんだと？ エーファイ、ちよつと体を見せてくれ」

イエローに促されるまま、しゃがみこんでエーファイを呼び寄せて見る。

たしかに、体にはいくつかの傷が見受けられた。薄い紫色の体毛も傷ついている。

「……いつの間に。先ほどのテツポウオにやられたのか」

「あれだけの数だったからね。『リフレクター』も全方位からの攻撃を防げるほど万能ではないから」

うーむ。たしかにサツキさんの言うとおり『リフレクター』は前方からの攻撃を防ぐことはできるが多方向からの攻撃を防ぐことは不可能だ。咄嗟のことだったとは言え、あのような乱戦では使うべきではなかったか。俺の判断ミスだ、エーフィには申し訳ないことをしてしまった。

「とにかく『キズぐすり』を……」

「大丈夫ですよ、僕が治しますから」

「ん？」

バツグからキズぐすりを出そうとしたが、イエローに止められた。いつの間にかイエローがエーフィに寄り添ってその体に手を当てている。するとたちまち傷が消え、塞がった。

「えっ!？」

「——これは!」

「はじめて見るか? これがイエローの持つ特別な才能、『いやしの力』だ」

「トキワの森の力、ですよね?」

「おう、なんだ君は知っていたのか」

「ええ、よく知っていますよ」

クリスタルやサツキさんはおじさんの説明で納得しているが、俺はそれを言われずともわかっていた。

トキワの選ばれた者にだけ発動するという特別な力。ポケモンの気持ちを読み、傷を癒すというもの。やはり、持っていたのか。

「……わざわざありがとうございませうイエローさん。このようなことで力をお借りすることになるとは」

「いえいえ。そんなに気にしないでください」

「そうですね。それではここから先もその力、頼りにさせていただきます」

……本当に裏表のないような顔をしている。こういう相手はやり

辛い。こちらの調子まで狂ってくるんだよな。力のことを根に持つこと自体が馬鹿みたいに感じる。本当に、やり辛い。

「それにしても、一体今のテツポウオの群れは何だったのかしら？」  
「サツキさんが今の現象を思い出して眩いた。たしかに言われてみれば、集団の移動にしては俺たちに攻撃するなど、異常なほどに攻撃的だった。」

「……そう言えば、僕以前にも同じ様な出来事と遭遇しました。ふたご島でのポケモンの大移動なんですけど。オーキド博士が『野生の生物は勘に優れ、危機に敏感。きつと大きな危機の前触れを感じ取ったのじゃろう』と言っていました。ひよつとしたら……」

「まさか、このテツポウオ達も何か異変を感じ取ったと?」

「ひよつとしたら、可能性の話ですが」

イエローの言う事も一理あるか。俺やサツキさんも、一度ポツポの群れがアーボックから逃げている姿を見ている。今回もその一例だろうか?

「むっ。——なっ、まずい! 全員何かに掴まれ!」

するとおじさんが何事かに気づき、皆に指示を出す。

言われるがまま船体にしがみつくと突如船が嫌な音を立てて揺れだした。

「どうしたんですか!?!」

「前を見てみる! 船が——巨大な渦に飲み込まれる! 舵が取れん!!」

「なにっ!?!」

たしかに巨大な渦が発生していた。今は渦の外側とはいえ、おじさんが舵を握ろうとも船は言うことを聞かない。

くそっ、ニュースで渦潮のことは頭に入っていたというのに、なぜもつと警戒していなかったんだ!

「あつ! 見てください! 渦の中心、その下に——何かいます!!」

「あれは……!?!」

クリスタルが渦の中心を指差す。

その先には渦よりも大きな、まるで鳥のような形をした影が映りだ



されていた。

「なっ、なんですかあれ!？」

「まさかポケモンなのか？　だが海底から現れる鳥など、存在するのか!？」

「落ち着いて！　とにかく皆、ここからでは手出しもできない。皆このまま船体に掴まって安全の確保を——!？」

混乱が広がる中、一人冷静であったサツキさんの指示が飛ぶ。しかしその言葉は最後まで積むがれなかった。そのサツキさんが、いやこの場にいる全員の体が宙に浮いていたからだ。

「なっ——これは、エスパーの力だというの!？」

「ではこの下にいるのはエスパータイプのポケモン?」

「み、見てください！　私達だけじゃありません。この船そのものが、宙に浮いています!!」

「なんだと!？」

とても信じられないが、目の前の現状がクリスタルの発言を肯定していた。

視界には上空から見ているかのように、広い海や島が映る。すぐ下に乗っていた船があるというのに、だ。しかし船をこうもかんたんに空中に浮かばせるなんて。……いや、よく見るとさらに上空に巨大な豪華客船までもが宙に浮いていた。

これだけの力を周囲に働かせるとは。それだけの力だということのか!？

「あっ、渦から何か出てきますよー!」

すると突如海面から何か飛び上がった。

……かなり大きな鳥ポケモンだった。少なくとも俺は今までこれほどまで巨大なポケモンをまるで見たことがない。まるで竜のようなボディラインが特徴で、白い姿をしている鳥。

「まさかこいつが俺達を浮かべているというのか!？　そんなことがあるわけが」

「常識に囚われないでシユン君！　事実私達は今こうして相手にやられている。

……それよりも今は善後策を考えなさい。下手にこちらから手を出せばどうなるかわからない」

「はっ、はいー!」

サツキさんの一括で我に返る。思考もクリアーになった。

たしかにここで下手に動いて状況が好転する可能性は低いか。このポケモンがどういうものなのかもわからない上に、ここからできる状況は限られている。

まず身の安全の確保が最優先。エーフィを肩に乗せて船体にしがみつく。

すると程なくして痺れを切らしたのだろうか、巨大なポケモンが近くの島目掛けて口からエネルギー弾を発射した。

高密度のエネルギーが収束されているのだろう。たった一撃で島の一部を削り取っている。

「なんて威力なんですか……!」

「のんきなことを言っている場合じゃないですよイエローさん! それよりも……ッ!」

「全員船に掴まって離すな!! そしてエーフィ!」

「スターミー!」

「〃サイコネシス〃!!」

俺の叫びと同時に船に衝撃が走る。

突如鳥ポケモンが大きく翼を振ったのだ。その動きで念の力を一気に放出したのだろうか、宙に浮かんでいた船は海面目掛けて投擲される。

海面に叩きつけられて衝撃が走るものの、寸前でエーフィとスターミーが〃サイコネシス〃を放ち船に念を働きかけたことで最小限にすんだ。

「お前ら、全員大丈夫か!」

「はい、無事です」

「それよりもおじさんは船の舵を取ってください! また渦潮の中に入ってしまったら意味がない!」

「了解した!」

皆の無事を確認するとおじさんは舵を取りに戻る。

これでいい。ひとまずこれで渦潮の心配をしなくて済む。問題はあのポケモンだ。先ほどの念の力、そしてあの高密度のエネルギー弾。明らかに普通のポケモンではない。

……だが、どこか動きが変だ。あまりにも攻撃が雑だ、ただ怒りに身を任せて暴れているように見える。今も周囲にエネルギー弾をあちこちに放出しているが……っ、一発がこの船に!!

「まずい、エーファイ、ひかりのかべ」だ!

すかさずエーファイに特殊攻撃を封じる特別な壁、ひかりのかべを空中に張らせる。

エネルギー弾は船に当たらずに壁に衝突、空中で制止する。

……しかしその威力が止まらない! 勢いは壁の耐久力を超えて、壁が壊しさらにこちらに迫ってくる。

「駄目だ、止められない!」

「っ、スターミー、お願い!」

まさに目の前に迫る弾丸であったが、その直前スターミーが庇うように飛び出した。

攻撃はスターミーを直撃し、受けたスターミーは力なく船に倒れこんだ。

「ひかりのかべ」で威力は半減しているはずだというのに、それでもスターミーを一撃で……!

「サツキさん、このままでは!」

「大丈夫よ——」じこさいせい!!」

周囲の心配を一掃するように、サツキさんは高らかに命じた。

まだスターミーは瀕死ではなかった。自らの力で細胞を回復させて、瞬く間に傷は塞がる。傷ついた核も元通りになった。再びスターミーは立ち上がり背中ของボディーをフル回転させる。

「さて、反撃といきましょうか。スターミー、10まんボルト!」

回復したスターミーが反撃に転じる。核から強力な電気を発生させ、その電気は一筋の光線となって敵目掛けて放出。見事に直撃した。

電撃が効いているのだろうか、苦しそうに空中でもがいている。

「やはり、その見た目どおり『びこう』タイプだったようね。おそらくあのポケモンは、この海底で眠っているという伝説のポケモン、海の神——『ルギア』よ！」

「ルギア!?!」

その名前はアサギシティで聞いたことがあった。嵐の夜に現れ、荒れ狂う海を沈めたという幻のポケモンだ。

……だが、それがなぜ今現れる!?! なぜこうも怒り狂っている!?!

「気になることはあるでしょうけど、考えるのは後にしましょう。相手がわかったなら打つ手もある。

シユン君はここで敵を牽制しつつエーフィの壁で船を守って——

!?!

「さ、サツキさん!?!」

話している途中、いきなりサツキさんとスターミーの体が宙に浮かぶ。

間違いない。これはエスパーの力。ということはルギアの仕業か!

ルギアはこちらをにらみつけている。先ほどの攻撃がスターミーの仕業だと気づいたのか。先ほどのように翼を大きく振り上げ——そして振り下ろした。

「きゃっ!?!」

「サツキさん!?!」

それと同時にサツキさんとスターミーが海へと投げ出された。その勢い、船を投げ飛ばしたのと同等かそれ以上だ! あっという間にその姿が小さくなり、そして見えなくなってしまった。まさか、海の中に沈んでしまったのか!?!

「おじさん、船の進路をすぐに変更! サツキさんを追ってください!」

「あっ! シユンさん、大変です! ルギアというポケモン、サツキさんの飛ばされた方角にもエネルギー弾を!」

「なにつ!?!」

指示を出しているとクリスタルの叫びが響いた。

急いで視線を戻すと、ルギアが口から先ほどのエネルギー弾を海に打ち込んでいた。たしかに、あの方角はサツキさんが飛ばされた方角……！ あの野郎！

「クリスタル、イエロー！ 二人はこの船をエーフィと共に守ってくれ！ バクフーン、ラプラス。お前達も護衛に回ってくれ。

……ピジョットはピカチュウと共に援護を！ 行くぞヘラクロス！」

「あ、シюнさん待ってください！」

制止の声がクリスタルよりかかるが、説明している時間も惜しい。

手持ちのポケモンを全てボールから繰り出し、エーフィに加えバクフーンを船上、ラプラスは海上で船の護衛を命じる。

ピジョットはピカチュウを背に乗せて、俺はヘラクロスに掴まり、共に空中に踊りでる。目指すは空で好き勝手やっているルギア、そいつに接近する！

「まずはピカチュウ、お前だ。 でんじは！」

第一に相手の注意をこちらにと寄せる陽動だ。

ピカチュウは尻尾に電位の高密度エネルギーを生み出し、打ち出す。ルギアの顔面目掛けて直進するが、寸前で気づいたルギアは首を大きく動かして回避する。

「でんじは」は外れたが、これでルギアの意識はサツキさんから外れた。

「次！ ピジョット、両の羽で つばさでうつ！」

さらにピジョットが先行し、ルギアへと襲い掛かる。

ルギアもピジョット達を打ち落とそうと翼を羽ばたかせて対抗しているが、無駄だ。あの巨体は細かい動きには向いていない。敏捷性ならば間違いなくピジョットの方が上。そしてピジョットの素早さに翻弄され、ルギアの意識は二匹に向かい動きは止まった！

「お前、何をサツキさんにしてくれたんだ！ ヘラクロス、メガホーン！！」

怒りの咆哮と共に加速。

ヘラク罗斯は頭部に突出した角を先端として、勢いよくルギアに突進する。

ピジヨットがこちらの意図に気づき、一時的に離れたことでルギアも反応するが遅い。遅すぎる。

硬く、大きな角がルギアの顔を下から大きく突き上げる。ルギアの体が仰け反り、完全に怯んだ。

「まだまだ休ませるな！ ヘラク罗斯 ずつき」、ピジヨット ぐでんこうせつか！」

そこで手を緩めてやるほど俺は優しくはない。

ヘラク罗斯は頭を突き出し、真つ直ぐ突つ込む。ピジヨットも目にも止まらぬ速さでルギアの腹部へと突つ込む。

急所を突くことが出来たのか、ルギアは肺の中の酸素が強制的搾り出され、苦しそうに顔を歪める。体勢を立て直すためにルギアは飛び上がり、距離をとる。

「これ以上の勝手な真似は俺が許さん。サツキさんにはもう指一本触れさせない！」

見下す形でにらみつけてくるが、その程度では怯まない。

俺は逆に相手を威圧するようにできるだけ強く、はつきりとそう告げた。

## 第二十七話 VS ルギアI 再起の時

少し時を遡った話、今から数十分ほど前のことである。

「……い。……おい。おい、シルバー！」

「むっ……う……っ？」

縦横無尽に、何度も無造作にゆすられる体。

耳に届く自分の名前を叫んだ必死な呼び声。

その二つの感触で、肩まで伸びるほど長い赤髪の少年——シルバーはゆっくりと目を開けた。

「……お前は、ゴールド？」

「おう、ようやく起きたかシルバー。こうやって俺がお前を叩き起こすつてのは、何だか新鮮だな」

「ふん。……まさかお前に借りを作ることになるとはな」

「へへっ。俺は昔から先輩に扱かれたからな。テメーとは鍛え方が違えんだよ」

「……言っておけ」

目の前に立つ同い年の少年——ゴールドとの軽い受け答えをすませ、横になっていた体を起こす。

上体を起こす際に先の戦いで受けた傷が影響なのか、体に鈍い痛みが走るが我慢できないほどではない。

顔には出さずに立ち上がると、視線をめぐらせて状況の把握に専念する。

「それよりも一体ここはどこだ？ 俺達はどこかの洞窟の内部にいるのか。……いや、それともこれは島の火口部か？」

あたり一面は天然の壁で囲まれているものの、天井は塞がっており空が窺えた。

さらに彼らの周りには大きな円を描くように炎が渦巻いている。

これらの状況から自分達がどこかの島の火口にいることを推測するが、詳しいことはわからない。

「——『うずまき島』だつてよ」

「うずまき島っ？」

「ああ。ポケギアにそう表示されてる。もつともそれ以上詳しい位置まではわかんねーけどよ」

シルバーの疑問に答えるようにゴールドがそう呟く。

彼が所持するポケギアの地図機能だ。画面には彼らの現在位置——『うずまき島』が表示されていた。

アサギシティとタンバシティの間に広がる海に位置する島である。

「うずまき島か。……いかりの湖から随分遠くに来たものだな」

「まったくだぜ。俺だって今さつき目を覚ましたばかりで何も情報がねーとききた。

……し・か・も！ 帽子やゴーグルを初めとした荷物をなくしちまったからな。俺ら靴だつて片方だけだぜ？」

元々彼らはチョウジタウンの北に位置するいかりの湖にいたのだ。それが気がついたらここまで遠くの場所にいる。不満をこぼさずにはいられない。

ゴールドも同じ状況なのだろう。ため息を一つ吐き、自分の体を見回した。

たしかにゴールドの言う通り、彼らは二人とも持ち物を殆ど全て失っていたのだ。しかもゴールドは右足の靴を、シルバーは左足の靴を失っているため動きにくい。

(……赤いギャラドスも、ここにはいないか……)

その上、シルバーは手持ちポケモンの一体がこの場にいない状況であった。

シルバーがいかりの湖でゲットしたばかりの赤色のギャラドスである。戦力として期待していただけにこの痛手は大きい。

だがいつまでも悔やんでいても仕方がない。シルバーは意識を切り替え、事態を好転させることに専念した。

「色々不満はあるだろうが、今はそれを嘆いていてももて仕方がない。それよりも問題なのは……俺達がなぜここにいるのか。どうやってここまで運びこまれたのか、その二点だ」

「……ああ。俺らいかりの湖で仮面の男と戦つてたはずだよな？」

「それは間違いないはずだ。ゴールド、お前はあの戦いの後のことを



何か覚えていないか？」

最低限の確認を済ませるとシルバーはゴールドへと問いかける。状況把握が出来ていない中、今はすこしでもお互い情報を共有しておきたかったのだ。

……だが、ゴールドは申し訳なさそうな表情で首を横に振る。

「いいや。さっきも言ったが目が覚めたらここにおいて状況もわかってない。テメーはどうなんだ？」

「一つだけ、覚えていることがある」

「本当か!？」

「……俺達がいかりの湖の底へと沈んでいく時のことだ。」

高速で動く巨大な影が俺達を一瞬で救い上げ、去っていった」

「巨大な影だあ？」

「ああ。おそらくポケモンだろうが、巨体を誇るポケモンだ。」

「ここまで運び込んだのもそのポケモンだろう。そして……おそろく、この炎を放ったのも」

シルバーは視線をゴールドから周囲の炎へと移す。

未だに炎はゆらゆらと燃え盛っており、消えるそぶりを見せない。

(……ただの炎ではない、特殊な炎だ。

体を温めるだけではなく、まるで俺達に『生命エネルギー』を与えるかのような、『命の炎』とでも呼ぶべき炎)

「……そういえば俺も、意識を失っている間、ずっと何かに見守られているような感覚があった気がするぜ」

その炎はただものではないとシルバーは感じ取った。

ゴールドも何か思うところがあったのだろう。遠くを見つめながらそう語った。

二人が同じことを考えたのだからまず間違いないだろう。とシルバーが考えをまとめていると——突如、彼らを囲んでいた炎が予兆もなく消えてしまった。

「——炎が消えた!」

「何だ? 俺達が目を覚ましたことを確認し、役目を終えたかと言わんばかりに……」

「どうなってんだ？ 何もかもわっかんねーことばかりだぜ……くつそー！」

「おい、待てゴールド！ どこへ行くつもりだ!?」

苛立ちを募らせ、ゴールドは足先を洞窟の外へと向ける。

シルバーはゴールドが怒りで冷静さを失い単独行動を犯すことの危険性を察知し、ゴールドを呼び止めるが……

「いつまでもここにつつまっただけでも仕方がねーだろ？」

そんなら外に出て近くに人影がねーか調べるさ」

「む……」

「テメーも来いよ。それとも何か？ まーだ仮面の男に受けた傷が痛むってか？」

「つたく、テメーも意外とやわな体してやがるじゃねえか。ウツギ博士の研究所で見せた動きはハツタリかよ？」

「……ふん。言われずとも」

「そうこなくつちやな」

ゴールドは軽い口調でシルバーの意気を高めた。

安い挑発とわかりつつも、シルバーもゴールドに続くように洞窟の外へと歩いていく。

皮肉にも、いつも暴走しがちなゴールドに諭される形になったのである。

「……で？ まつたくどうしてこんなことになっちゃうんだよ。……つたくよー!!」

苦笑いを浮かべ、ゴールドは目の前の惨劇に言葉を荒げた。

「どうしてこんな事態が起こったのか。冷静に思い返してもまつたく納得がいかない。」

——洞窟の外へ出てしばらく探検してみたゴールドとシルバーであつたが、近くに舟もなく、人の姿も窺えず、途方に暮れていた。

ポケギアも長時間水に浸かってしまったせいか通信機能が上手く

機能せず、連絡を取ることができない。

するとどうにか打開策を考えているところにその状況を一転させる人物が現れた。

まるで軍人であるかのように軍服を身に纏い、短い黄色の髪を逆立てている外人。目つきも鋭く屈強な顔つきで、軍人と言われても納得できる見た目であった。

その男がレアコイル数体に囲まれ、レアコイルの発する電磁力から生まれるシールドに守られるかのように宙に浮かび二人に近づいてきた。

常人ならば見慣れぬその光景に、思わずゴールドは『何だこのおっさん!? 宙に浮いてるぞ!』と叫んでしまうほどである。

そんな男がゴールドとシルバーが失ったはずの荷物を持って現れたのだ。ゴールドのリュックやシルバーの赤いギャラドス、どれもが彼らが欲しかったもの。

男——マチスは二人に荷物を返す代わりに、『仮面の男』の情報を要求。不審に思う二人であったが、マチスから感じるただならぬ怒りを察知し、これを了承。

マチスに『ロケット団の現首領』『氷タイプの使い手』『ジムリーダーの一人』と答えた。

最初の情報については知っていたのか何も反応を示さなかったマチスだが、残り二つの情報については過敏に反応した。

どうやらマチスも独自に調査を進めていたようだが、そこまでの情報には至らなかつたらしい。

どこか納得した表情を浮かべ、『Thank you, boys. おかげで良い情報が助かった礼を言うぜ』とマチスは手を差し出した。

『なんだこの似非外国人は』と心の中で呟いたゴールドであったが、心底悪い人間ではないとわかり、その手に答える。

その後、さらに細かいやり取りをして、二人はマチスが乗ってきた舟に乗り、ジョウト本土で戻ることにした。

マチスいわく、『少しでも戦力は欲しいところだ。すでに対戦済みってなら尚更な』とのことだ。

これには二人も感謝感激で喜んでマチスと共に舟へと乗り込もうとしたものの——彼らはその舟が、なぜか宙に浮かんでいる光景を目にしたのだ。

——そして今に至る。

「Oh, my godness! 俺の高速船アクア号が!!」

マチスが地団駄踏んで悔しがる。目の前で自身が搭乗する舟が浮かんでいるのだから当然の反応だろう。

「あ・り・え・ね・え! 小船は勿論、あんな馬鹿でかい舟までもがまるで風船みたいに浮いてやがる!」

「見ろ! 舟の下、大型の鳥ポケモンがいる! あいつのエスパーの力だ! あれは——ルギアだ!!」

目の前で起こっているただ事ではない現象に、マチス動揺に混乱するゴールド。

そんな二人とは裏腹に、冷静にかつ客観的にシルバーは敵を分析しその正体を暴くが……彼がその正体に気づくと同時に、ルギアの口からエネルギー弾が発射された。

「避ける!」

散会する三人。

ゴールドもシルバーも持ち物が戻り、動きやすくなった分何とかわすことに成功した。

直撃した場所を見ると、島の一部が削り取られていることが確認できた。その威力には思わずゾツとする。

まともに受けるわけにはいかない、と三人はその一撃の威力を理解し警戒態勢を取ると、ルギアは痺れを切らしたかのように、宙に浮かんでいる高速アクア号と付近の小船を海面へと叩きつけた。

巨大な船体が勢い良く海面と衝突した結果、巨大な津波が発生し、島を襲う。

「頼む、ヤミカラス!」

「マチスさん、相乗りさせてくれ!」

「……Shit! 掴まれ、ガキ!」

空中戦力を持つシルバーはヤミカラスを繰り出し、ひこうタイプを

持っていないゴールドはマチスに頼み込み、彼のレアコイルに掴まり空中へと逃れる。

三人とも無事離脱に成功したが、彼らが立っていた場所はあつという間に波に飲み込まれていた。

「油断はできねえぞガキども！」

一時の無事を喜んでいる暇もなかった。

ルギアは溜まり込んだ怒りを爆発させるかのように、我武者羅にエネルギー弾を乱発する。

休むまもなく発せられる攻撃に近づくことさえできず、三人はただひたすら回避に専念した。

「ああもうなんですか、なんなんですかこの凶体のかいポケモンは！ 何で俺らが攻撃されなきゃいけないーんだよ！」

「んなこと俺が知るか！」

（まずいな。伝説のポケモン、ルギア。俺達だけでは戦力が圧倒的に足りない。）

このままでは徐々に追いつまれていくだけだ。何か流れを変える一手があればいいのだが……)

「……ん？ 何だあれは？」

レアコイルの電磁シールドの中で討論するゴールドとマチス。

シルバーは一人ヤマカラスに指示を飛ばしながら打開策を考えるが、一向に考えがまとまらない。

このままではまずい、と焦りだけが募る中……シルバーは一筋の光線がルギアへと襲い掛かるのを目にした。

電撃だろうか、黄色く光る光線はルギアに直撃する。その威力に苦しもうに空中でもがき始めた。

「ルギアへの攻撃だと……？」

「おお、誰だかしらねえけどナイスだぜ！ 俺ら以外にもトレーナーがいたんだな！」

「今のは電気、威力から察するに“10まんボルト”だな。攻撃元は……あの小船だ！」

でんきタイプの専門家であるマチスはその攻撃を瞬時に判別し、攻

撃元を割り出した。

不審に思ったシルバーも、歓喜の声を上げるゴールドもその小船へと視線を向ける。

たしかに小船には小さいながら人影が見えた。それも一つではない、複数の人影である。

「なぜこんなところにこれほどの力を持ったトレーナーがいる？」

「細げえことはどうでもいいぜ！俺ら以外にもトレーナーがいるなら、そいつらと協力して……」

楽観視するゴールドであったが、その先の言葉は続かなかった。

今の攻撃をルギアも理解したのだろうか、ルギアの攻撃の矛先が一点に絞られたのである。

ルギアは先ほどと同じエスパーの力を使用。小船のある人物達へと働き……その者達をはるか遠くへと吹き飛ばした。

「……なっ!？」

空中にいるからこそ、三人はその姿がよく見えてしまった。

巨大客船さえ吹き飛ばした威力である。それを人に使用すればどうなるか……想像に難くない。

「サイコキネシス」を受けたトレーナーとそのポケモンは離れたところに位置する別の島まで吹き飛ばされてしまった。

「なんつっー威力だよ……こいつ!」

「野生のポケモンだ、そりや容赦はねーだろーが、くそっ!」

「構えろ！ 次の攻撃はすぐに来る！ ……むっ!？」

頼みのトレーナーが倒されてしまったことで、再びこちらに攻撃が来ることを予想した三人は再び臨戦態勢に入る。

いつでも反応できるように神経を研ぎ澄まし様子を窺うが、その必要はなかった。

——小船から二匹のポケモンの影が空へと舞い上がった。

いや、正確に言えば二匹だけではない。一匹はその背中に小柄なポケモンを乗せて、もう一匹は自分の腕でトレーナーであろう一人の男を捕まえている。

「まだ他にもトレーナーがいたのか!」

「——まずはピカチュウ、お前だ。『でんじは』！」  
「……ん？ ピカチュウ？ まさか……」  
度重なるトレーナーの出現に驚くシルバー。  
しかし、ゴールドはそのトレーナーの声を耳にして、そしてその手持ちポケモンを見て、脳内で記憶の中にあるある人物を思い描いた。  
自分が何度も世話になり、そして鍛えてもらった先輩のような存在である男の姿を……

「ピカチュウ、ルギアの背中に飛び移れ！」

三匹の空を飛べるポケモンが行き交い、激しい攻防が繰り広げられる中、俺もその速度に怯むことなく指示を飛ばす。

ピジョットとルギアが交錯する瞬間、それまでピジョットの背中に乗っていたピカチュウが跳躍。見事ルギアの翼にしがみつき、こちらの期待に応えてくれた。

「いいぞ、そのまま電撃を食らわせてやれ！」

「ピッ……カッ!!」

「ギャアア——!!」

ルギアもピカチュウの存在に気がついただろうが、小回りの効かない体ではどうしようもない。

対処される前に、ピカチュウは体内に溜め込んでいた電撃を力強く放出する。

弱点である電気攻撃はやはり苦しいのだろう、その場でもがき悲痛の叫びを上げるルギア。痛いだろうな——だが、だからと言ってその程度でサツキさんを傷つけた罪が晴れるわけがない！

懐からポケギアを取り出し、先ほど舟の中で聞き出したクリスタルへと電話をかける。緊急時だけあってすぐに彼女は答えてくれた。

「クリスタル、聞こえてるか!？」

『はい、大丈夫です!』

「よっし、それじゃあそのままポケギアの通話は繋げたままで頼む。

……バクフーン、 “かえんほうしゃ”！ ラプラス、 “れいとうビーム”！ エーフィ、 “シャドーボール”！

クリスタルの肯定の返事を受けて、こちらも遠慮なく船上と海上にいるポケモン達へと指示を出す。

バクフーンは口から巨大な炎の火柱を、ラプラスも同じように氷の光線を、エーフィは空気中に収束させた暗黒の塊を——三匹が一斉にルギア目掛けて打ち出した。

それぞれのエネルギー弾は一直線に進む。電撃で怯んでいるルギアにはこの攻撃を防ぐ術はなく……全弾命中という、最上の結果をもたらした。

『シユンさんー！』

「よっし、よくやったー！」

ポケギアよりクリスタル達の声が聞こえる。

俺も思わず拳を握り締め、ポケモン達の功績を讃えた。

それだけこの連続攻撃の成功は大きかった。まず間違いなく押しているのはこちらだ。このまま流れを継続できれば勝てる、そう思えた。

「……ッ！ ギイアアア——ス!!」

『——ッ!?!』

——そしてその思いを引き裂くかのように、ルギアの咆哮が響き渡る。

「ぐっ……あつ。な、なんて馬鹿でかい咆哮だ……！」

文字通り空間を切り裂くかのような咆哮に、耳を塞がずにはいられない。

頭が割れてしまいそうで、方向感覚さえ狂わせるほどの威力であった。事実、ヘラクロスもピジョットも空中でふらついており、ピカチュウもルギアの背中中で座り込んで耳を押さえていた。

どうやら遠くにいるはずの船でさえ被害を受けているようで、バクフーンやクリスタル達も船上で頭を抱えて、膝から崩れこんでいた。

味方全員が身動きを封じられ、指揮も乱れた。——この状況を、ルギアが見逃してくれるはずもなかった。



「――避ける、ピジヨット!!」

先の展開を察してピジヨットに支持を出すのが、その時にはもう手遅れだった。

ルギアは少し羽を羽ばたかせて上空へ上がると、ピジヨット目掛けて急降下。

激突する手前で大きく旋回、巨大な尻尾をピジヨットに叩きつけた。

降下の勢いも重なってその威力は計り知れなかった。ピジヨットはまともに攻撃を受けてしまい、海面に叩きつけられる。

さらにピカチュウも今の旋回で振りほどかれてしまい、空中へ身を投げ出してしまった。

「チッ！ ラプラス、〴〵みずでっぼう〴〵でピカチュウを受け止めろ！」  
せめてピカチュウだけでも、とポケギアで指示を飛ばす。

ラプラスがすぐに水面上を移動し、空中から落ちてくるピカチュウに目掛けて真下から〴〵みずでっぼう〴〵を噴射。

威力が低い分、落下の衝撃を和らげるためのクッションの役割を果たし、ピカチュウは何とか無事に回収された。ピジヨットもおじさん達が船を寄せて回収へと移ってくれている。

「この野郎、ルギア！ 行くぞ、ヘラクロス！」

これによりこちらの空中戦力はヘラクロスだけになってしまったが、ここで退けば船が危なくなる。

突撃の支持を出し、ルギアの懐へともぐりこむ。これならば対処できないと考えてのことだ。

このままもう一度強力な一撃、〴〵メガホーン〴〵を叩き込んでやろう、そう思つて口を開こうとして……口を上手く動かすことができなかった。

「なっ……につ……が、起こつ、て……る?」

疑問を呟くことさえ満足にいかない。

……いや、俺だけではなかったのだ。ヘラクロスも同じ状態になっているのだろうか、俺達は空中で静止していた。

〴〵サイコキネシス〴〵とは少し違う。宙に浮かんでいるのではなく、

身動きそのものができない——まるで静止するように操られているかのような感覚だ。

まったく理解ができない状況。しかし一つだけ思い至る点があり、無理やりにも首を、視線を上——ルギアに向ける。するとルギアの目が怪しく光っていることを確認できた。

おそらくルギアが何かをしたのだろう。だが、その何かを理解できない。

そんな俺の状況を心配し、ポケギアからイエローやおじさんの声が響いた。

『どうしたんですかシユンさん!?!』

『何を止まってる!? やられるぞ!』

『まさかあれは……シユンさん、それはおそらくルギアの“じんつうりき”です!』

その中でただ一人、クリスタルだけが思い至る点があったのだろうか、その正体を教えてくれた。

——“じんつうりき”? 聞いたことはある。人間の思慮だけでは計り知れない、異例の力。

エスパーの力の中でもさらに特殊だ。となると、ヘラクロスだけでは解除することなど到底無理だ。すぐにクリスタルと連絡を取り、エーフィに指示を——

『ッ! 危ない!!』

——指示を出す暇などなかった。

クリスタルの悲痛な叫びが聞こえた。そして同時に体に衝撃が走る。

薙ぎ払うようにルギアが翼を振るう。翼はしっかりと俺とヘラクロスの体を捉え、大きく投げ飛ばした。

「——ガハッ!!」

その衝撃で強制的に肺から酸素が搾り出される。

体にも激痛が走り意識が飛びそうになるが、歯を食いしばって持ちこたえた。

「ッ、負けるな……ヘラクロス!」

「……ッ!!」

そして同じように吹き飛ばされたヘラクロスへと。

掛け声で意識を取り戻し、ヘラクロスは空中で体勢を立て直した。よくこらえてくれたともう一声かけてやりたかったけれども。

……どうやらその時間さえないらしい。

『逃げてシュンさん!!』

「——無理だ」

クリスタルの今にも泣きそうな、必死な叫び声。俺の身を案じてのことだとわかるが……俺は彼女が望む返事を口にできなかった。

……ヘラクロスがようやく体勢を立て直したとき、前方でルギアが大きく息を吸い込んでいた。

今までの攻撃のタメ時間の短さや性質から、ルギアの砲弾が『空気』だということにはわかっている。

その空気を今吸い込んでいるのだ。後はもう吐き出すだけ。傷ついたヘラクロスではこの至近距離であれをかわすことは不可能だ。そうわかってしまった。だから……

「……ちくしょう!」

せめて恨みを精一杯こめて、ルギアに一言だけ告げることにした。吸息をやめてルギアが息を吐き出すために首を前へと押し出す。

「——ラァッ! “かみなり”!!」

もう終わりだと、覚悟を決めたその瞬間。——強烈な稲妻がルギアの体に落ちた。

「……?」

「ギァアアア!!!」

先ほどのピカチュウの攻撃の時と同様、あるいはそれ以上の悲鳴を上げるルギア。

突然の事態に理解が追いつかない。突然の雷の発生だが、今までそのような予兆はなかったはずだ。それなのになぜこうもいきなり……?」

「な、なんだ?」

「Hey! 中々の戦いぶりじゃねえかガキ! だが、諦めるのは

ちよつと早いんじやねーか？

このマチス様にかかれれば、こんな凶体がでかいだけのポケモンなんて、一ひねりだぜ？」

そんな俺の疑問に答えるように、上空より一人の男が現れた。

軍人のような格好をしたマチスと名乗るその男は三匹のレアコイルが形成する電磁シールドによって宙に浮かんでいる。

先ほどの「かみなり」はこの男が放ったのだろう。すばらしい威力であった。

とにかく助けてもらったからには礼を言わなければならぬ。そう思つて声をかけようとした時、俺はその隣に立つ一人の少年に目が行った。

「……………え？」

彼の顔を見て絶句してしまふ。その顔には見覚えがあつた。

知り合いどころの話ではない。もつと幼いころからよく遊んでいた、悪ふざけもした、訓練もした。

大切な友達であり後輩のような存在で。俺が今回旅をすることになった目的、探し人。何よりも欠かせない人物がそこにいた。

「なーにポップポが豆鉄砲食らつたみてーな顔してんすか？ らしくねえつすよ、シユン先輩」

「お前……………本物、なのか？ やつぱり、生きて、いたのか……………！」

ニヤリと口角を上げて、生意気そうに軽口を叩く。

……………それによつて気分を損ねるようなことは一切ない。むしろ嬉しきで感情がはち切れそうだ。

こんなこと本物でなければありえないとわかつていながらも、俺はこの男の名前を呼ぶしかなかった。

「——ッ！ ゴールド!!」

「はい！ ……久しぶりっす、シユン先輩」

懐かしむように、改めて笑みを浮かべるゴールドを見て……………俺の視界がボヤけてしまった。

今はそれどころではないとわかつていながらも、友の無事をこの目で確認できて、涙を塞ぎ止めることができなかつた。

## 第二十八話 VS ルギアⅡ 共闘 そして

「今の『かみなり』、まさかあの人たちが……!?!」

船上から戦いを見ていたクリスタルは驚きを隠せなかった。

反撃に転じたルギアの猛攻により危機に瀕したシユンであったが、そんな彼を助けるかのようにルギアの体に何者かが放った『かみなり』が直撃。

そしてルギアが怯んだ隙に、シユンを庇うように三人のトレーナーが姿を現した。

一人はヤミカラスに掴まることで空を飛ぶ、黒を基調とした服を着た赤髪の少年。

そして残りの二人はレアコイルの電磁力によつて宙に浮いている。一人は軍服を着込んだ中年の男。

最後の一人は赤髪の少年と同年くらいの体つきで、前髪が爆発しているような髪型が特徴の、帽子を被ったトレーナーであった。

「あれは、ひよつとしてマチスさん!?!」

「イエローさん、お知り合いですか?」

「はい。あの体が大きい人、カントーのジムリーダーです」

「カントーのジムリーダー……? そんな人が何でこんなところに?」

「なんにせよそんな実力者が着てくれたならこれほど頼もしいものはないな!」

イエローが軍服の男——マチスを指して言う。

なぜカントーのジムリーダーがこんなところジョウト地方に、という疑問が残るが

『そのようなことは今は考えても仕方がない。』というイエローのおじ

——ヒデノリの意見でクリスタルは思考を中断し、視線をシユン達がいる戦場へと戻した。

ピジョットやピカチュウが撃ち落されてしまったものの、これで戦力は整ったと言える。

「たしかに、その通りですね。……うん?」

ここから反撃に転じることができれば、勝機は見出せるはず。……

そう考え納得したところで、クリスタルは『ピピピピ』とまるで目覚まし時計が鳴っているかのような音を耳にした。

「こ、この音は……?」

「クリスタルさんのカバンから聞こえてますよ」

「私のカバンから? ……ポケモン図鑑?」

イエローにも聞こえたようで、クリスタルはイエローの言葉に従い、バックを探りその発進元を探り当てる。

そしてクリスタルが手にしたのはかつて彼女が依頼主・オーキド博士より託されたポケモン図鑑であった。ポケモン図鑑が持ち主の意志・行動に関係なく、勝手に鳴り続けていた。

「たしかに、鳴っているのは私のポケモン図鑑です! でもどうして!?

いきなり鳴り始めるなんて。私は何もしていないのに、何かの故障かしら!」

「……いえ。おそらくそれはポケモン図鑑の『共鳴音』では!」

『共鳴音』!」

「前の、旧ポケモン図鑑にも同じ現象があったんです。

正しい図鑑所有者の下、図鑑が全て集まったときに発せられる共鳴音。

図鑑所有者達に仲間が近くに集結しているということを教える機能が!」

未知の現象に困惑するクリスタル。そんな彼女を諭すように、イエローがポケモン図鑑の『共鳴音』について語り始めた。

かつてイエローがカントー四天王、スオウ島での戦いでも発生したという図鑑の機能について。

「それじゃあ、今この場にはジョウトの図鑑所有者が集結している……?」

そこから推測できることはただ一つ。

冷静になったクリスタルはその事実にとどり着いた。

「新しいポケモン図鑑は合計で四つ作成された。そのうち二つは私とシュンさんが持っている。

そしてまだ明らかになっっていなかった、残りの二つを持っている凶鑑所有者というのが……あの二人のトレーナー!?」

今シユンに並び立つように戦場に立っているのが、残りの二人の凶鑑所有者だという事実には――

その顔をシユンが見るのは数週間ぶりのことである。少年が旅立ってから連絡を取ってはいたものの、顔を合わせる機会は一切なかった。

目の前に立つ彼が本物であるのか偽者であるのか、そんなことを確かめる必要はない。オーキド博士より聞いていたポケモン図鑑の『共鳴音』が何よりの証拠であるし、そして何よりも――シユン自身が何年も付き合っている友を間違えるはずがなかった。

「――ゴールド！ お前……お前、今までどこで何をしていたやつた!!」

名前を呼び、シユンはゴールドにここまで連絡の一つもよこさなかったことへの文句を口にする。

……常にゴールドの無事を心配し生存を信じてきたが故に、再会できてこれ以上ないほど嬉しいはずなのに。

それでも真っ先に怒鳴りつけてしまうのは性格のせいか、あるいはそういう関係だからか。

「……はい。本当すみマセンでした。まあこうして無事に戻ってきたんだから……許してくださいよ」

「こんの、馬鹿やろう！ 俺達がどれだけ心配したと……」

「あれ？ ひよっとして俺のためにわざわざ来てくれたんっすか？

うっわ、嬉しー！」

「……言ってる！ このアホ！」

散々に言われてもゴールドは気分を害することなく、常時笑みを浮かべてシユンに答える。

どれだけ言ってもこの男には無駄だとわかったのかシユンもそれ

以上はゴールドを攻め立てるのを止めて……

「だけど、よかった……！ よかった……！」

ただひたすら喜び、表情を崩した。目頭を押さえ溜まり切っていたものを放出する。

「……ありがとうございます、シユン先輩」

その姿を見てはさすがのゴールドも悪態をつくことはできず、そつと頭を下げた。

思いがけない形であったが、会いたかった人物と再会できて嬉しくないはずがない。

——話したいことは山ほどある。しかし今はこの再会をただ喜ぼう。

『何をやっているお前達！ そんなことをしている場合か!?』

『へ?』

……そんな二人の考えは、近くにいたシルバーとマチスの叫び声でかき消された。

先ほどの“かみなり”による攻撃でも戦闘不能には至らなかったルギアが三発ものエネルギー弾を、彼らが密集している地帯へと一気に放出したのだ。

「ちっ!」

「うおおっ!?! ちよつ、あつぶな!!」

紙一重ではあるが、それぞれがどうにか体勢を入れ替えてかわす。

攻撃をかわした後に念を置いて距離を置く四人。攻撃までの間隔は短い、ある程度離れていれば反応することはできると考えてのことだ。

「こんのルギアッ! 友との感動の再会を喜んでいる真只中に攻撃してくるとは、何と言う卑怯者!」

「そうだそうだ! もつと空気読みやがれ、このデカブツ! KY!」

「……いや、野生ポケモンを相手に卑怯者と言っても仕方がねーだろ」

「というよりも、この戦いの最中で暢気に平和ボケしていたお前達が悪い」

『んだとテメーら! 一体どつちの味方だ、オイ!?!』



感動の再会を祝っていたところへの不意打ちに、黙っていられずルギアに叫ぶシユンとゴールド。

だが第三者であるマチスとシルバーにとっては『自業自得』であると感じられたようで、二人を冷たく突き放した。

思わぬところからのツツコミに怒りの矛先が変わり、綺麗に揃った怒鳴り声が響くものの、シルバーはそんなこと関係ないと言わんばかりに「そんなことよりも」と語り始めた。

「先ほどよりもルギアの動きが鈍い。おそらくダメージはまだ残っているのだろう。」

今のうちに今後の策を考える必要がある。……そこのお前、船にいるやつと連絡を取れるならばすぐに繋げろ」

上から目線で語るその態度は気に食わないものの、言っていることは正論であった。

ゴールドは「なんでお前が仕切ってたんだ」と愚痴をこぼすが、シユンに諭されて引き下がる。

シルバーの言葉通り、しゅしゅとシユンはポケギアを手にする。まだ先ほどの通信は繋がったままであり、クリスタルはすぐに答えてくれた。

「聞こえているか、クリスタル」

『はい、聞こえます。こちらからも戦況は見えていますので、指示があればすぐに動けます』

「わかった。……さて、それでどうする?」

ポケギアを口元から離し、言葉の先はシルバーへと向けられた。

「……二手に戦力をわけろ。」

一つは空を飛べ、ルギアの飛行能力を奪う近—中距離戦闘班。

もう一つはあの船を拠点に援護射撃を行い、注意をひきつける遠距離戦闘班だ」

右手で二本の指を立てながらシルバーが言った。

「先ほどまでの戦闘を見る限り、ルギアは単体への攻撃は圧倒的だが全体への攻撃方法を持っていない。」

あの咆哮も最初から使っていなかったことから考えるに体力をか

なり使うのだろう。

ならばルギアの攻撃方法をさらに狭め、追い詰める。そして「エアロブラスト」を封じ込めた後、追い詰めていけばいい」

「「エアロブラスト」？ おい、シルバー。なんだそりゃ？」

「ルギアが放つあの空気弾のことだ。ゴールドはともかく、戦っていたお前なら気づいていただろう？ あの攻撃の正体を」

「ああ。あれは普通のエネルギー弾ではない。ただの空気にすぎないもの、しかしそれをルギアが放つことで威力がとてつもないことになってる」

シルバーの説明の中、聞きなれない単語を耳にして復唱するゴールド。

唯一戦っていたシユンだけはその正体に気づいていて、あの攻撃——「エアロブラスト」について説明した。

同意見だったシルバーは「俺もそう考えた」と賛同し、さらに説明を続ける。

「ならば「エアロブラスト」を封じるために、空気のない水中へと引きずり込むだけだ。

それさえ出来ればやつは一気に不利になる。そうでなくとも体力は削れる」

「……I <sup>わ</sup>under<sup>かっ</sup>stand<sup>たぜ</sup>。ならば俺は空中戦の方に参加させてもらうぜ。

ルギアの弱点もつけるし、近接戦闘の方が性に合ってるからな」

「俺もヤミカラスと共に空からルギアを攻撃する。……後できればもう一人は戦力が欲しいところだが」

その作戦を行うことにすると、マチスとシルバーは早々に意見を示す。

今はルギアがダメージと「かみなり」による痺れが残っているから攻撃がほとんどないが、それもいつまで続くかわからない。それをわかっているからこそだ。

シユンも目を瞑り、右手の指先を額に当てて現状と戦力を計算し、答えを出した。

「ならば俺とゴールド、そしてクリスタルで船からの援護射撃を行おう。そちらにはイエローさんに行ってもらおう。」

船から牽制を行うとしてもルギアの攻撃をまともに食らってしまつては意味がない。俺が手持ちのポケモン達を総動員し、船の護衛を行う」

「……俺もその船に残るんっすか？」

「マチスさんと一緒にいるところを見るに、お前は空を飛べるポケモンを持っていないだろうか？」

俺のポケモンを貸すという手もあるが、ポケモンについて情報を持っていない状態では的確な指示を出せない」

「うっ！ シュン先輩にそう言われては反論できない。……わかりました、わかりましたよ！」

実際のところ、残念なことにゴールドは“ひこうタイプ”のポケモンを持っていなかった。

シュンが護衛に回る分、彼の手持ちポケモンをゴールドが引き連れるという手もないわけではないのだが、効率を考えるとそれよりはポケモン達の独自の判断で戦ってもらったほうがよいと考えたのだ。

普段なら自分の意見はとにかく曲げないタイプのゴールドであるが、頼りにしているシュンにこれほどまでに正論を並べられては返す言葉がないのか、しばし黙り込んだ後了承の返事をする。

「……そのクリスタルとイエローというやつは何者だ？」

「クリスタルは俺達と同じジョウトの凶鑑所有者、イエローさんはカントーの凶鑑所有者だ。」

博士達から何も聞いていなかったのか？ そう言うお前もジョウトの凶鑑所有者なんだろう？」

「あ、ああ……」

「……何だ？ 歯切れの悪い返事だが、どうした？」

シュンはシルバーの問いに淡々と答える。

それに対しシルバーはどこか居心地が悪そうに、曖昧な返事をした。

その素振りがどこか気にかかり、シュンはシルバーを探るように見

るが、意外なことにシルバーを庇ったのはゴールドであった。

「すみません、シユン先輩。俺もシルバーも博士達の話は抜け出して旅に出ちまったんで、詳しい話は聞いてないんすよ」

二人の間に割り込むように体を入れるゴールド。

「……ゴールド」

「なっ、そうだよな？」

「あ、ああ。俺もその日は急ぎの用があったのでウツギ博士ともあまり話をせず……」

「話を合わせろ」と視線で語るゴールド。

シルバーも彼の意図を理解してシユンに言った。

「……まあ、ゴールドがそう言うのならそういうことにしておこう。

シルバーと言ったな？ 俺はシユンだ。以降は名前で呼んでくれ。

“お前”では誰だかわからないから」

「了解した」

とてもそれだけで納得できるはずもなかったが、ゴールドの言葉を信じてシユンは話を切り替えた。

名前をお互い教えあい、二人は一時ではあるが共闘の握手をかわす。

そして近—中距離戦闘班の指揮をシルバー、遠距離戦闘班の指揮をシユンが執ることに決めた。

シユンが遠距離戦闘班に入ることに決めた理由にはこれもあった。

エーフィなどの防御に優れたポケモンがいることもそうだが、何よりも実戦の経験が比較的多く、かつ勝負事で怯まないだけの度胸があること。

ゴールドもそうだが、クリスタルも長い時間空を飛べないという事情もあり、イエローとシユンならばイエローを戦闘に専念させ、指揮は自分の方がよいとの判断である。

「では、そちらの方は任せるぞ」

「ああ。……だが、その前に一つ条件、というか頼みがある」

「何だ？」

「俺達は陽動とのことだが、船をあゝ島の方向に進路を向けている。

お前達もできるだけルギアをその方向に来るように挑発してくれ」

シユンはうずまき列島のうち一つの島を指差して言った。

その方向をシルバーも見ろが、その島を中心とした部分にだけ雨雲が広がっていて、雨も幾分か振っている。

悪天候の方向に船を寄せるのはあまり褒められた行為ではない。それはシユンとて知っていることだろう。シルバーも疑問に感じてシユンに理由を問いかけた。

「理由を教えてくださいおうか？ 向こうはどうやら天候が悪いようだ。あまり激しくなるようでは船が転覆する可能性も出るぞ」

「……俺の仲間の一人がああ島の方向に飛ばされた。お前達も見ていなかったか？ ルギアの『サイコネシス』でやられたんだが……」

「ッ！ ……そうか。そういうことか」

確かにそういわれればシルバーにも覚えがある。ルギアが出現し、暴れ始めた直後に攻撃を仕掛けたトレーナーの存在について。

遠目ではあるが実力は確かだと感じ取っていた。ならば今はある程度の危険性を伴ってもそのトレーナーの救出を優先すべきか。シルバーは考えに悩むが、共闘相手の頼みをそう無碍にするわけにもいかず、首を縦に振るった。

「わかった。そういう事情があるならば俺達もルギアの注意をその島の方向に向けるように仕掛けよう」

「ああ、ありがとう」

「もう何も無いな？ ……では、行動開始だ！」

「ッシ！ ならば先手は行かせてもらおうぜガキ共！」

「来い、ゴールド！」

「頼みますよシユン先輩！」

条件を受け入れてもらいシユンも嬉しそうに笑う。

シルバーは余裕がないのか、それ以上言うことはないかと全員に聞き、作戦の開始を宣言する。

マチスがゴールドをシユンに手渡し、両腕でしっかりと抱え込む。二人分の体重がかかるが、力が自慢のヘラク羅斯は問題ないとたくま

しく鳴き声を放つ。

先陣を斬ったのはマチスだ。自分の周囲を囲むレアコイルに突撃の支持を出し、ルギアに接近する。

ルギアも敵が接近することに気づき、痛む体に鞭打って「エアロブラスト」を繰り出した。敵が完全に気がつく前の先制攻撃。

「軌道が丸見えだぜ!? このマチス様を舐めんなよ!」

だがその動きはマチスの目には単調に映り、丸見えであった。

シユンとルギアの戦いを観戦していたがゆえにスピードにも目が慣れていく。

レアコイル達は洗練された連携を持って電磁フィールドを維持しつつ攻撃をかわす。

「翼を切り裂いてやりな、ッソニックブーム!」

さらにすれ違いざまにレアコイルは空気を鋭く切り裂く衝撃波を放つ。

衝撃波はかわす間も与えずにルギアの右翼を一閃した。

「ギイアーツ!!」

「ヤミカラス、おいうち!」

「——ッ!」

威力はそれほどでもなかったのか、ルギアは怯む事無くマチスの姿を追う。

だが、敵は一人ではない。意識が逸れた一瞬の間を見逃さなかったシルバーはヤミカラスに指令を送る。

ルギアの頭部に追撃の一撃がヒットした。突然の衝撃に驚きつつも反撃とばかりに翼を振るうが、ヤミカラスは攻撃と同時に離脱。すぐさま空高くに舞い上がった。

「俺達は船へと移動する。……クリスタル、作戦のことは聞こえていたか?」

『はい。聞こえてました。先ほどイエローさんもそちらに向かいましたよ』

マチスとシルバーの攻撃を見届け、安全を確保したところでシユンも動き出す。

距離を取りつつポケギアでクリスタルに聞くと、丁度イエローとすれ違った。背中からバタフリーに掴んでもらって空を飛ぶ姿は、まるで本物の蝶の様である。

「頼みますよ、イエローさん！」

「任せてください！ 僕も少し思いついたんです、あのポケモンの封じ方！」

シユンの声援に後押しされたようにイエローはルギアへと向かっていった。

『封じ方』という点は気になったものの、自分も作戦に集中すべきだと船へとゆっくり降りていく。

「それじゃあ行くぞゴールド。お前も攻撃を警戒しててくれ」

「……いや、それよりも俺気になった事があるんですけどいいですか!?!」

「どうした？ ああ、今話した相手は先ほど言った俺達と同じジョウトの凶鑑所有者だ。」

詳しくは船に戻ってから説明する。だから今はとにかくこの場から離脱することを……」

「何すか今の通信相手の声！ 絶対ギャルの声だったつすよね!?!」

先輩いつの間にか女の子たらしこんでたんすか？ さすが抜け目ないつすねえ、是非俺にも紹介してくださいよ」

「だから後にしろおおっ！ そしてクリスタルとはそんな関係じゃねええ!!」

あまりにも場違いであるその発言に、シユンは思わず叫んでしまった。

その叫びに反応したルギアが“エアロブラスト”を放つたりもしたのだが……ゴールドと口論しながらもかわす姿は、あまりにも慣れている動きだった。

---

イエローはルギアに接近しつつ、自分にある情報を元に考えをめぐ

らせていた。

(シユンさん達の話ではルギアの攻撃は『空気』で、『呼吸』に過ぎないと言っていた。それならば手の打ち様はある!!)

まだ完全にとまではないかないものの試す価値は十分にある。そう考えてイエローは戦場へ赴く。

「行くよピーすけ、 “サイケこうせん” ！」

バタフリー—— “ピーすけ” に攻撃指令を出す。

不思議な念の力がこめられた光線は標的であるルギアを襲う。

しかし効果がいまひとつなのか効いた様子はない。むしろシルバー達を排除しようとしていたところに邪魔が入ったことで怒ったのか、ルギアはイエローに怒りの矛先を移した。

「ギイアア——!!」

叫び、イエローを威圧する。

巨大すぎる体格がイエローと対面するかのように向き合って、イエローも恐怖を抱いた。

ルギアは邪魔者を振り払うべく、再び息を大きく吸い込み “エアロブラスト” を撃ちだした。

その攻撃を防げる者は存在せず、イエローも例外ではなかったのかいとも簡単にバタフリーもろともその体を撃ち抜いた。

「—— “かげぶんしん” ！」

……だが、撃ち抜いたのは分身であった。バタフリーが素早い動きで作り出した偽者。

あくまでルギアはその一体を貫いたに過ぎず、しかも分身は他にも十体近く存在した。

同じ姿ばかりが目に入り、ルギアは混乱しつつも “エアロブラスト” を放つ。しかしどれもが偽者で、結局ルギアはイエロー達の接近を許してしまった。

「いまだよ、 “しびれ” な” ！」

「ギアツ!？」

そしてルギアが “エアロブラスト” を撃つ動作に移った瞬間、イエローは指示を飛ばす。



バタフリーは麻痺効果を持つ粉をルギアの口に振り撒く。咄嗟に異物が口に混入したことでルギアは呼吸を中断、咳き込むことで粉を吐き出した。

「やったー！」

作戦の成功を確認し、イエローもすぐに距離を置く。

誤って自分も吸い込まないようにと用意したハンカチを仕舞い、イエローは冷静にルギアを見つめた。

そんなイエローをシルバーは不思議そうに観察する。幼さを残す顔と大人しそうな仕草に、「大丈夫なのだろうか」と心配もあつたのだが、その心配はまったくの無駄だった。

「まったくあの野郎。相変わらずどこか抜けてやがるな……」

「……マチス。お前はイエローを前から知っていたのか？」

「あ？ ああ。以前に色々関わったことがあつてな。碌な事にならなかったがな……」

マチスが愚痴を零すのが聞こえ、シルバーがイエローについて聞か、マチスは不満を隠すことなく言う。

言い方は悪いがトレーナーとしての実力はある程度認めているということがわかった。

何にせよ実力があるトレーナーが味方となった。しかもこれで三対一の形である。そして――

「ギイアアア――ッ!？」

――味方はこれだけではない。

ルギアが怒りをぶつけるように叫ぶが、その叫びは最後まで続かない。下からの攻撃を腹に受けてしまったのだ。

「俺達を忘れてもらっては困るぞルギア？ 散々暴れてくれたんだから、それなりの仕返しは覚悟しておけ！」

真下に広がる広大な海。そこにちよこんと浮いている小船には援護をするシユンとゴールド、クリスタルの三人が控えている。

シユンは声が届かないとわかっているが、それでもルギアに対して自分の揺ぎ無い意思の強さを言い放った。

——ぐすつ。

船に到着早々、ゴールドは目頭を押さえ、鼻をすすった。

まるで悲しみを押さえ込み、涙の流出を防ぐような素振りに「ただ事ではない」と考えたシュン達は声をかけずにはいられなかった。

「ちよつ、オイ！ いきなりどうしたゴールド!？」

「ひどいっスよシュン先輩。なんですかコレ……?」

「は!? コレって……まさかクリスタルのことを言っているのか?」

「へ? 私、ですか?」

戸惑いつつも問いかけるシュンに、ゴールドは答えるために原因である相手、クリスタルを指差す。

思いがけぬ指名にシュンは当然のこと、本人であるクリスタルはその場で硬直した。

「女の子。……相手の声、絶対ギャルだと思ってたのに……」

独り言だろうか、ゴールドは俯きながら恨み言のように呟く。

「なのになんっすか!? いぎ見てみればギャルはおろか、俺の超大っ

嫌いな『超マジメ系学級委員タイプ』しかないじゃないっすか!？」

「なっ……! マ、マジメ系って何よ!? マジメは普通はいいことでしょ!？」

「俺けっこう期待してたのに! 裏切ったな! 俺の期待を裏切ったんだ!!」

「期待も何も、勝手に期待していたのはそっちじゃないの!」

「俺の青春を返せえ——っ!!」

「随分と短い青春だな……」

「ちよつと、ちゃんと人の話を聞きなさいって! えっと、ゴールド!

……ああ、もう! シュンさんも暢気に言っていないで、どうにかしてください!」

ゴールドの一方的な不満から始まった、夫婦喧嘩のような漫才。

話がかみ合わず、平行線を辿ってしまいそうな勢いに耐え切れず、

クリスタルはシユンに助けを求める。

暢気にツツコミを入れるシユンであったが、たしかにこれ以上漫才には付き合ってはいられないと判断したシユンは話題を変えようと冷静に、指示を出すことにした。

「よっし、それじゃあ二人が仲良く交流を深めたところで方針を立てるぞ」

『仲良くなつてません!!』

「……仲良くなつてんじゃん。息がピッタリだぞ、羨ましいね」

『違います！ そんなことありません！』

「……それじゃあ、話を続けるぞ」

『無視しないでくださいー!』

完全に声が揃つていて、出会ったばかりのコンビネーションとは到底思えない。意外と性格が合うのではないだろうか？

色々思うところはあったがシユンはそれ以上ツツコミを入れることはせず、シユンは真面目な表情で語り始めた。

「まず俺達はここから援護射撃を行う。何も強すぎる必要はない。とにかく命中精度が高めの技でルギアの注意を引き、イエローさん達を援護するんだ」

「……はい」

「船の防御はエーフィの“びかりのかべ”で威力を弱め、技をぶつけて相殺する方針にしよう。」

お前達、あまり体格が大きくないポケモンで、それでいて遠距離攻撃をできるポケモンは何がいる？」

作戦の確認をし、さらに詳しい方針について語る。

さらにシユンは攻防についてより正確にするために、船の上という戦闘場所を踏まえて二人に問いかけた。

「俺はバクタろうと、あとニョたろうつすかね」

「私はメガぴよんとネイぴよんがいます」

ゴールドはマグマラシとニョロトノが入ったボールを、クリスタルはベイリーフとネイティが入ったボールをそれぞれ手にする。

クリスタルに関してはウインディとパラセクトもいるのだが、ウイ

ンデイは重量的に厳しく、パラセクトも攻撃内容を考えると空中の三人を巻き込んでしまいかねないという理由で却下となった。

「……わかった。ならば船の上では俺のイーフィ、ゴールドのバクたろう、クリスタルのメガびよん、そして……シルバーのアリゲイツを置く」

「えっ!? シュンさん、そのアリゲイツいつの間……!?」

「さつきシルバーと別れる時にな。どうやら凶鑑の共鳴音からウツギ研究所で一緒にいた二匹がこの場に集結することを知り、ボールの中でうずうずしていたらしい」

ライバルの手持ちポケモンをシュンが持っていることにゴールドは戸惑った。

先ほど空中で別れる際に、シュンがシルバーより手渡されていたのである。よほど二匹と会いたかったようだ。

ウツギ研究所で一緒に暮らしていた三匹をボールから出すと、嬉しそうに寄り添う。こちらも久しぶりの再会、邪魔することはない。

シュンは場所の都合上、ピカチュウとバクフーンをボールに戻すと、先ほどルギアの攻撃を受けてしまったピジヨットを呼び寄せた。

「大丈夫か、ピジヨット?」

ラプラスの背中にとまっていたピジヨットだが、呼ばれるとすぐにシュンのすぐ隣に飛んでくる。

……受けた傷は回復していた。しかも傷跡も残っておらず、まるで元通りの姿に戻ったかのように。

「怪我はもう治っているのか、よかった」

「先ほどイエローさんが回復してくれました。ピカチュウも一緒に治してみました」

「……そうか。わかった、あとでお礼を言うでしょう」

クリスタルの説明でシュンも納得し、穏やかな笑みを浮かべる。

ここまで親切にしてもらうと今までイエローを悪く思っていたことが馬鹿みたいだ、と心の中で自嘲した。そして同時にこの戦いが終わったら必ず一言礼を言おうと誓った。

「それじゃあニョたろうはラプラスと一緒に先行し、船の進路を確保

してくれ。

ネイピよんはピジョット、ヘラクロスと一緒にルギアの牽制を、ピジョットをリーダーにして頼む」

「はいー」

それぞれ手持ちポケモンをボールより出して指示を出す。

海を二体、空は三体のポケモンが警戒し、船を守る態勢となった。

「それと俺達はルギアの牽制と同時にサツキさんの救助にも向かう。ヒデノリさん、船の進路はお任せしますよ」

「ああわかつてる。進路がルギアの攻撃で大幅に逸れてしまったが、修正しきれないほどではない。できるだけすぐに島につくようにするよ」

「ありがとうございます」

ヒデノリが親指を立ててジェスチャーを送ると、シユンも表情を緩ませる。

戦っている最中もシユンはサツキのことを気にかけていた。

少しでも早く助けたい、だからこそシルバーにも無理を言ったのだから。

これで作戦は全て伝え終えた。少しだけ気が緩み、息を一つついた。

「……あの、シユンさん」

そんな中、ただ一人事情を知らないゴールドはシユンに問いかけた。

『「サツキ」って誰っすか？ 名前から考えるに女性っすよね？』

「……………ッ!?!?」

言葉に詰まる。シユンは一度ゴールドの顔を見て、サツキのことを話すべきか話さないべきか大いに悩んだ。

もしもゴールドに話したらどうなるだろうか？ 少し考えてみよう。……『うつひょー！ こんなところに麗しき超人発見！ これからお茶でもしません!?』と人の気も知らずに浮かれてサツキに声をかける姿が脳裏に浮かぶ。

——ふぎけんな。調子に乗るなよ。

何故か無性に嫌な気分になり、体内に衝撃が走る。その瞬間、シユンの中で何かがキレた。

「ひよつとしてキレイな人っすか!? ねえねえ、教えてくださいよ!」

「……いいかゴールド、よく聞け」

何も知らずに暢気に話しかける後輩ゴールドの両肩を強く握り締め、シユンは忠告するような口ぶりで言った。

「サツキさんだけはやめておけ。お前が絶対付き合いたくないような性格の人だ」

「……え!? そうなんすか!?!」

「ああ、それはもうクリスタルの比ではない。クリスタルが学級委員だとするならば、サツキさんはそれこそ死刑を平気で下す裁判官のような人だ」

「裁判官?! 死刑?!」

「シユンさんまでそのネタ止めてください!」

ゴールドは予想していなかった答えに表情を崩して驚いた。

その例えとして自分を使われたクリスタルは講義するが、聞こえていないのだろうかシユンはクリスタルには目もくれずに話を続ける。「とにかく厳しく、とにかく冷たい。まるで『自分は規律を守るために存在する』と言うかのような生活態度で、自分にも厳しい。

しかも他人への接し方もそうだ。必要以上に周囲に近寄ることさえ禁ずる。下手に行動するようなら、『キヤー変態! 近寄らないで!』と叫びだす」

「そ、そうなんすか!?!」

「……あの、シユンさん。全然サツキさんのイメージが違う気がしますけど。しかもその例、性格が間違っている気がします」

「残念ながらそういう人なんだ。お前みたいに気軽に話しかける男など、それこそ養豚場のブタを見るような目で射殺す。

『可哀相に。明日の朝にはお肉屋さんの店先に並ぶ運命なのに、愚かね』と言わんばかりの冷たく、残酷な目でな」

「そ、そんなに非情な人なんすか!?! うわ、今のうちに聞いといて良かった!」

「……シユンさーん。もはや別人になってますよー。戻ってきてくださいー」

ひたすらゴールドを言葉で追い詰める。シユンのその姿は常軌を逸しているようだった。

ゴールドもゴールドで、シユンのあまりにも真剣な表情から、サツキという人物について印象を固めたようで、身震いしている。もしも本当にサツキに会ったらどうするつもりだろうか、甚だ疑問だ。

……しかしいくらサツキを守るためとはいえ、ここまで言葉を並べられるものだろうか？ というか、どれだけ必死なのだろうか？ そこまでしてゴールドとサツキを会わせたくないのだろうか？

もはやツツコミが追いつかない。クリスタルは現実を放棄し、シユンが元に戻ることに期待することにした。

とても見ていられず、視線を外して船の進路先を見る。どうやら進路は上手く調整できたようで、島へと一直線に進んでいた。

「……あれ？」

しかしクリスタルは一つ気になった点があった。

「なんだかあの島の上空。空が……雨雲が発達している……？」

シルバーも一時思ったこと。

他の島の上空は特に挙げるほど荒れてはいないのだが、その島ではまるでずっと雨が降り続けているかのように雨雲が発達していた。

「大丈夫かな、サツキさん……」

傷ついた体で、さらに雨に打たれては身心共に厳しい面があるだろう。

クリスタルは未だに無事の確認ができていない、頼れる女性トレーナー——サツキの身を案じた。

## 第二十九話 VS デリバードII 三度目の悲劇

その後、シユン達は伝説のポケモン・ルギアを相手に優位に戦いを繰り広げていた。

ルギアは一撃の威力が大きい。"エアロブラスト"を初めとした大技を持って相手を制圧しようとする。

しかしシルバー達は回避を第一に考え、一撃攻撃を加えたら離脱するという戦い方を仕掛けるためにその姿を捉えきれない。しかも三人ものトレーナーが交互に攻撃してくるのだからなおさらだ。

さらにルギアを追い詰めているのはシユン達船からの攻撃にもあつた。

空中の敵をなぎ払うべく翼を振るっていると、体そのものは止まっているために格好の的であるのだ。

その隙をシユン達が見逃すわけもない。援護射撃によりルギアは怯む。仕返しとばかりに"エアロブラスト"を放つが、エーフィの"ひかりのかべ"で弱まった空気弾は、バクタろう・メガびよん・アリゲイツの同時攻撃によって相殺される。

ならばと"サイコキネシス"で動きを封じようにも、全体を攻撃することはできないために、攻撃を終える前に邪魔されてしまい失敗に終わるのだ。

徐々に、しかし確実にルギアは体力を消耗していく。しかも船ももうすぐ島に着くことができる。

シユン達にとつてはこれ以上ないほど上手く作戦が進んでいた。島の付近にも渦潮が発生したために遠回りすることになり時間がかかったが、ようやく近くまで来ることができたのだ。

そしてそのころ、島の浜辺では……

「うっ……うっ……」

浜辺に打ち上げられたサツキが横になっていた。

スターミーがボディを腕のように曲げて、サツキの頬をツンツンとつつく。

その刺激に反応したのか、サツキは小さな呻き声をあげて……そし



て目を覚ました。

「こゝこゝは……痛ッ……!!」

体を起こそうとしたサツキであったが、動かそうとした左腕に激痛が走る。

どうやらここに来るまでの間にどこかにぶつかり、負傷してしまつたようだ。骨折こそしていないようだが満足に動かすことはできない状況であった。

「……そっか。私はルギアの『サイコキネシス』のせいで船の上から飛ばされて、……それでこの島まで。あなたが守っていてくれたの？  
ありがとう」

なんとか残っている記憶をかき集め、現状の把握に努める。

ルギアと対面し、戦おうとしたところで『サイコキネシス』の一撃にやられてしまった。

そしてさらに『エアロブラスト』による追撃もあったのだが、それはスターミーが防御したおかげで助かった。

守ってくれたパートナーに感謝し、ボディを撫で回す。

この時サツキは知らなかったが、シユンがすぐにルギアに突撃し、攻撃を阻止しなければさらなる怪我を逃れることはできなかつたことだろう。

「問題は、ルギアね。一体私はどれくらいの間気絶していた……？  
私がやられたら後は……ッ！ シユン君！」

記憶を思い返したサツキは先ほどの脅威をも同時に思い出し、彼女にとって大切な仲間達までもが危機に陥っているのではないかと危惧した。

真つ先に一人の少年の名前が思い浮かんだのは共に旅をしてきたためであろうか。それはわからないが、とにかくこのまま呆然としているわけにはいかない。

その場から勢い良く立ち上がり、駆け出そうとするサツキであったが、そんな彼女をスターミーが止めた。右腕をボディが掴み、それ以上は進ませまいとする。

「どうしたの!?! 早くしないとシユン君達だつて危ないかもしれない

のに！」

時間はないのだと必死にスターミーに語りかける。

しかしスターミーはボディーを横に回転させ否定の態度を取る。

おやのサツキもこの態度は理解できなかった。しかしスターミーはさらにボディーをサツキが向いていた方向から東へ90度の方角へと向ける。

「……？」

意味はわからなかったが、サツキもその方角へと視線を向ける。

……するとその先の上空に超大型のポケモン——ルギアの姿が窺えた。

さらにその周囲を飛び交う複数の影。さらにその真下には一隻の船——サツキも乗っていた、ヒデノリの船があった。

「あれは……それじゃあ！」

不安だった表情が一転、笑みが戻った。

スターミーが頷いたことでサツキはようやくよく理解した。

——皆やられてなどいかなかった。今も無事であると。

それを知って安心したのか、サツキは膝から崩れ落ち、その場に座り込んだ。

「しかも、あの船の進路方向。多分、この島に向かっていているよね？」

確かめるように問えば、スターミーは予想通り頷いてくれた。

間違いなくこちらに向かってくる。それはもはや予想ではなく確信だ。

まだあそこにはシュンがいる。彼ならばまず間違いなく自分を助けに来るだろうと、そう思えたのだ。

「そうだとしたら、ここから動かない方が良い、よね」

だからこそ、サツキはあえて自分から合流しようとは考えなかった。

今シュンは『ルギアを倒す』という目的だけでなく、『サツキを救出する』という目的をも持っている。

もしもここでサツキが自分から動いてしまえば、目的の一つが達成されたことでシュンは必ず油断する。

そして喜びこそ感じるだろうが、同時に『自分の力で達成できなかった』という思いを抱いてしまうのではないかという疑念が生まれたのだ。

シユンは父親の一件、そしてゴールドの事件から『他人を救うこと』に異常なまでの、執念のようなものを持つていた。それはサツキとの約束をした後も変わっていない。

だからこそ、そんな彼の願いを少しでも叶えるために、彼が心にかかる負担を少しでも減らすために、あえて助けてもらうことを待つことにしたので。

……なお、この時のサツキは知る由もないのだが、ゴールドという女性に目がないトレーナーもシユンの側にいた為、尚更彼女の考えは正しかったと言える。

「……くしっ！ うっ、少し体が冷えちゃったかな？ 雨が振る中横たわっていたから、風邪引いちゃったかも」

可愛らしいクシャミをし、鼻をすする。

体の冷え込みを感じ、サツキは腕を暖めるためにこすり始めた。

サツキが言うとおりの島では雨が降っていた。おそらく彼女が起きる前から降っていたのだろう、彼女の服は全身が濡れていた。

そのせいで衣服は透けて肌が窺え、恵まれた体のラインに沿ってピッタリと張り付いている。髪もしつとりと濡れていてつやが出ていた。

美しさをさらに前面に押し出しており、シユンが見たなら間違いなく赤面ものだ。ゴールドが会ったらどうなることやら。

「それにしても……なんだか複雑だな。シユン君も、私抜きでもしっかり戦えているんだもん」

心が落ち着いてくると、サツキはどこか暗い笑みを浮かべた。

戦況は詳しくはわからないもののシユンが上手く立ち回っているということが想像できた。

というよりも、サツキが知る限りではシユンという人物は間違いなくそういう人物である。

正義感が強く、意志を曲げない。そして大切な人が傷つくことを嫌

う。間違いなく自分が倒された後、真つ先に飛び出しただろうと予想がついた。

さらにここまで多くのジムリーダーに挑戦し、経験も積んだ。今ならばただ闇雲に突っ込んでいくのではなく、戦況に応じた対応ができるはず。

それは一向に構わない。成長しているということは喜ばしいことなのだから。しかし自分が見ていないところで、傍にいないところで彼が活躍するところを想像すると……なぜか少しだけ嫌な気分になった。

「ひよつとして、私はシユン君に嫉妬してるの？ いや、そんなまさかね……」

自分でも何だかわからない感情だった。

『嫉妬』という二文字が思い浮かぶが、そんなわけないとすぐに頭の中から消し去る。

きつとこれは自分がいなくても大丈夫なのだろうという、『寂しさ』だと、よく考えればそうだと思えたからだ。

「でも、本当にシユン君が一人でも戦えるようになったなら。……もう、私はいらなかな？」

サツキはシユンの活躍を信じる一方、もはや自分はいらないという考えを抱いた。

元々サツキはシユンのサポートをオーキド博士に依頼され、共に旅をしている。

もしもシユンが一人でも問題ないというのなら、別行動でここからは動いた方がよいのかもしれない。

新たにクリスタルやイエローとも合流したのだから、戦力としても悪くないはず。

元より自分は一人で行動するタイプなのだから、その方が自分にとってもシユンにとってもよいだろう、とまるで連鎖のように想像が膨らんでいく。

それは決して心の底から思っていることではないとしても。それがサツキの心に影をさすことになったとしても。

「ああ、そうだな。こちらとしてもその方が助かるのだがな」

「ッ!? なっ!?」

そしてその心にさしこまれた影に付け込むように、その者は突如現れた。

自分以外はこの島には誰もいないとサツキは油断していた。そのせいで相手の接近を許してしまった。

耳元で囁かれた機械のような声に、サツキは反射でその場から飛びのく。スターミーもサツキの動きに続き、彼女を守るように前に立った。

「反応はまずまず。よくもあの一撃を食らって、起きたばかりの体でそれだけ動けるものだ」

「あなたのお褒めの言葉なんて要らないわよ。——仮面の男!!」

目の前で対峙するのは、シュン達が追い求めていた怨敵、仮面の男であった。

賞賛の言葉は要らないとサツキは仮面の男を突き放す。だが仮面の男は気分を害することなく、まったく感情の変化を見せない。

「そう毛嫌いしなくてもいいだろうに。これでも本当に褒めているのだ。」

ルギアの一撃でここまで飛ばされ、それでもなお平然としていられるお前にはな」

「……あなた、一体いつからここにいたの?」

まるでサツキがルギアの攻撃を受けたところを見ていたように話す仮面の男。

だがあの付近の海には誰もいなかったはず。ならば一体どうして、と疑問に感じたのだ。

サツキはまともに答えをもらえとは思っていないが、しかし仮面の男は素直にその質問に答えた。

「最初からだよ。最初から……お前達が来る前から」

「私達が来る前から? それじゃあ、ルギアが暴れる前からってこと?」

「当たり前だ。何セルギアが暴れているのは、私のせいだからな」

「えっ!？」

予想できなかった答えに、サツキは驚愕を隠せなかった。その瞬間を狙ったことだろう。仮面の男のポケモン、ジユゴンが“ごおりのつぶて”を放つ。

サツキの反応は遅れてしまったが、スターミーが独自の判断で“スピードスター”を発射。技を相殺し、トレーナーを守り抜いた。

「……………ふん」

「不意打ちは無駄よ。そんなつまらない手段で、私達を倒せるとでも思ったのかしら？」

「なに、今のはお前の実力を試すために、ただのテストだ。…………話を戻そう」

サツキの強気な発言に、これ以上は無駄だと理解したのか、仮面の男は再び話し始めた。仮面の男がルギアを付け狙う理由を。

「ルギアがこのうずまき列島を拠点に生息していることは知っていた。

伝説と呼ばれるほどのルギアを手に入れば、これほど戦力になるものはない。そう考えた私は、ルギアを引きずりだすためにルギアの住みかを、そしてルギア自身を攻撃した」

「それじゃあ、ルギアが我を忘れたかのように私達を襲ってきたのは……………」

「その攻撃への怒りだ。お前達ならばルギアを追い詰めてくれると信じていたぞ」

「そんな信頼いらないわよ。それで？ 私達にルギアを弱らせて、隙を見てルギアを横取り、あわよくば私達を倒すという段取りかしら？」

「……………」

返答はない。それが返答ということだろう。

サツキもようやく理解できた。ルギアが出現時から怒りを抱いていたこと、それが引つかかっていた。こちらから何も攻撃を加えていないというのに、いきなり怒りをぶつけるなどまずない。

だが、もしも仮面の男の策略だったならば。そう考えれば全て辻褃

が合い、その後のことも容易に想像できた。

「だとしたらあなたはここで私が止める！ 私以外では、まだ荷が重  
いでしょうしね……」

「やはり、そう来るか……」

ならばここで仮面の男を止めるのが自分の役目だとサツキは決意  
する。

自分以外のトレーナーではまだ仮面の男には敵わない、それはシユ  
ンも含まれていた。

それに対し仮面の男はまるで想像通りだと笑った。不気味な仮面  
が余計に不気味に感じてしまう。

「だが、その選択肢で良いのか？ 体調は万全ではないのだろうか？」

「この程度、ハンデとしては十分よ」

「それはそれは大層な自信だ。それならばもう少し、環境を面白くし  
ようか。——『こここえるかぜ』!!」

仮面の男の問いに揺れることなく、サツキは挑発する。

それを面白いものを見る目で仮面の男は見つめ、ドライバーに指示  
を出した。

凄まじい冷気がこもった風が周囲の空間を行きかう。

その攻撃そのものの威力は大きくない。スターミーとてタイプ相  
性もあつてダメージはほとんどない。

だが……その攻撃は絶大的な効果をもたらした。島の空気があつ  
という間に凍り付いてしまったのだ。

「急激な温度の低下により、大気中の水分を凍結させた」

「……ぐっ……」

「どうだ？ このような低温の元では人間はもちろんのこと、生物の  
運動能力は大きく低下する。」

果たしてお前達の適応能力はこの変化に耐えられるほど屈強かな  
？」

気温が著しく低下し、吐く息も真っ白に染まる。

これほどの低温では人間もポケモンも動きが鈍る。思考も鈍る。  
元からそういう環境が得意である『こおり』タイプを除いては。

それはサツキも例外ではない。苦しそうに身を震わせる姿を見て、仮面の男は挑発するが……

「な、舐めないでもらえるかしら……？　この程度の気温で私達の動きが鈍るとでも……？」

……逆にサツキも挑発し返した。この程度のことでは怯むことはない。

しかしだからこそ彼女は気づけなかった。仮面の男の言葉を挑発だと受け取ってしまったからこそその真意に。

突如ピキピキ、と何かが凍りつくような音が足場から聞こえた。不審に思っただけでサツキは視線を下げる。そして驚くべきことを目にした。

足が、地面と一体化するように凍り付いていることに。さらに彼女の体のあちこちが、凍り付いていることに。

「なっ！　足場が……地面に凍りついて……!?!」

「その通り。お前の足は地面と凍りついた、これでもう動けまい。

戦いが始まった時点で天候に注意が行かなかったお前の負けだ」

「ツ?!　まさか……」

仮面の男の言葉で、あることに思っていた。

それを確かめるために空を仰ぎ、そしてサツキは気づいた。

上空に広がる雨雲は彼女達がいる島の上空にしか存在しないという事実。

「まさか、あなたはこのためにわざと雨をふらせておいたと言うの!?!」

あらかじめ足場に多量の水分を含ませ、身動きを封じるために……

!!

「ようやく答えに行き着いたか。……しかしタイムリミットだ」

それに気づいた時にはもう全てが遅すぎる。スターミーも体が濡れていたために凍結の進行が早く、あつという間に氷漬けになった。サツキも足だけでなく腕も凍りつき、自由に動けない。

……雨は自然に降り始めたのではない。仮面の男が「あまごい」によってこの戦闘領域にのみ降らせていたのだ。「こおり」を効率よく発現させるために。



なんとという戦略性、なんとも緻密な計算。

戦いが始まる前から仮面の男はすでに手を打っていた。傷ついたサツキを完全に討ち果たすために、抜かりなく一切の逃げ場をなくすために。全ての希望を消し去るために。

「さらばだ高貴なる戦士よ。安心しろ。……お前達は最後まで最大限利用させてもらう。叛逆の目を潰すためにな」

「どういう、こと……？」

サツキの体も、少しずつ体のあちこちから氷結していく。

そんな中、仮面の男の言葉を理解できずに聞き返した。

……聞かなければよかったと、後悔することになるのに。

「なぜ私が、お前が気絶する間に攻撃しなかったと思う？」

「……？」

「もうすぐお前の仲間達も来るだろうな。以前よりお前を慕い、付き従っていたという少年も」

「ッ！ まさか……!!」

そこから先の言葉は必要なかった。それで全てが理解できた。

サツキは唯一自由に動かせる首を、こちらに向かっていた船の方角へと向けた。

……目を見開き驚愕を露にする。シユン達が乗っている船は、もうすぐそこまで近づいていた。

「ようし！ 何とか渦潮のないエリアにまで迂回できたな。

お前ら、接岸できる浜辺に到着するまで、もう数分だ。準備しておけ！」

「はいー」

ヒデノリは舵をとりながら三人の少年少女に呼びかける。

本来ならばもっと早くに到着できたはずなのだが、頻繁に渦潮が発生している海辺であるために、最短ルートを通ることができず、迂回することとなり時間が余計にかかってしまった。

「天候の方は大丈夫かよ、おっさん？」

「これくらいなら、まだまだ全然大丈夫だ……よっ！」

島に近づくにつれて雨が強くなり、ゴールドは心配してヒデノリに声をかけるが、ヒデノリは慣れた手つきで船を操っていた。

「にしてもまさかお前さんとこんなところで再会するとはなあ。一体何の因果だ？」

「んなの俺だって知りてえよ。シュンさんだけでも驚きだつてえのに、おっさんまでこんなところにいるなんて」

「まあ俺があくまで付き添いだからな。しかしお前さんがいると本当碌なことにならないな。何か悪魔にでも憑かれているんじゃないか？」

「そいつは心外っすね。むしろ俺の行く先で事件が起きてるんすよ？俺は被害者だつての」

こちらも久しぶりの再会で話が盛り上がっていた。実を言うとゴールドは旅立って間もないところにヒデノリと出会っていた。かつて彼が大切な相棒のうちの一匹、ニョたろうを探していた時である。

その時はヒデノリが『何か良い事があつたら電話で教える』と電話番号を交換したわけだが。まさか直接会うことになろうとは、両者とも想定していなかった。

「こんな場面でなければお前さんにも話を詳しく聞きたいところだが、生憎な。

……しかしお前は向<sup>ルギア</sup>こうの方は大丈夫なのか？ 少しでも戦力は欲しいだろうに」

「いや、シュンさんに船の様子を見て来い、つて言われたんすよ」首を振ってシュンを指し示す。

当のシュンはエーファイ達を引き連れ、空中のルギアを睨み付けていた。

「大分動きは鈍くなってきたか」

最初のころの動きと比べ、ルギアの動きは鈍くなっている。

“サイコネシス”、“じんつうりき”、“エアロブラスト”、“ハイドロポンプ”と多彩な高威力を誇る技の数々は脅威であるが、そ

れらを全てシユンは防ぎきり、船を守っていた。

エーフィの補助防御技に加え、ポケモン達の合体技で相殺し、さらにルギアが空で戦う三人に意識が向いたところを見計らって援護射撃。

空と海からの挟み撃ちを食らい、さすがのルギアも対処しきれなくなり、その体力を消耗していったのだ。

あと一手、ここに勝負を決める一手が加わればその時点で勝負は決まる。もうその段階まで来ていた。

そしてその一手が存在することをシユンは知っている。

シユンは一度ポケモン達に防御を一任し、望遠鏡で島の様子を窺っているクリスタルに声をかけた。

「クリスタル、どうだ島の様子は？」

「今のところ特に生物などは見られませんね。サツキさんの姿も未だ見えず」

「……森林部にはいない、か。となると浜辺に打ち上げられたか……？」

幾分かの期待をこめて問いかけるが、望んだ答えは返ってこない。

クリスタルはシユンに島の観察を頼んでいた。

島の半分以上は深い木々が生い茂っており、サツキが高地の移動しているという考えがあり、クリスタルには何か動いているような様子があれば報告するように頼んでいた。

しかしそれらしきものは見当たらない。となると船を接岸しようとしている浜辺にサツキはいるのか、とシユンは考えた。

「雨も強いし、早くサツキさんを救出しないといけないのに……くそっ！」

「落ち着いてください！ 助けたいのは何もシユンさんだけではないんですから」

上手く事が運ばないことに苛立ちが募り、シユンは珍しくいきりたつ。

その姿を見るに見かねてクリスタルはシユンの腕を掴んで言った。  
今日出会ったばかりとはいえ、人当たりもよく優しく接してもら

い、さらに野生ポケモンに襲われた時には助けてもらった。

クリスタルにとつてももうサツキは大切な仲間であり、今すぐにも助けたいと思っていた。

その思いが伝わったのか、シユンは息を一つ零し、

「……すまん」

と言った。後輩に諭されるのは気恥ずかしいのか、そっぽを向いて。

クリスタルも「気にしないで下さい」と掴んでいた手を放した。

大丈夫だろうと、と判断して自分の持ち場に戻る。

改めて望遠鏡に目を通して……そして違和感を覚えて口にしてしまった。

「……あれ？」

先ほど見た光景と何か違う、と浜辺の方を見てそう思った。

「どうした、何かあったのか？」

クリスタルの呟きを耳にしたシユンがそう尋ねる。

「それが、島の一部に霧が発生してます」

「……霧だと？ ちよつと見せてくれ」

クリスタルは見えたことをそのまま報告する。

霧、すなわち大気中の温度が急激に低下したということだろうか。

疑問に思い、クリスタルより望遠鏡を借りた。

そしてシユンが目にしたのは、島を隠すように広がっている、たしかに白く透明な薄い煙のような、結晶のようなものだった。

「いや、あれは、霧というよりも……」

だがシユンは霧ではなく、別の考えを抱いていた。

「……ダイヤモンドダスト？」

空気中の水分が表決することで生じる、ダイヤモンドダストという現象を。

（ただ、どちらにしてもそんな急に生じるなんておかしい。

両現象とも急激な温度の低下によって起こる現象だが、そんなことが短時間で自然におこるわけがない……）

最も、その現象について考えることも意味がないとも考えた。

どちらにせよ自然に起こるには条件があわない。あまりにも不可解なことであると。

(しかし現に起こっている。それは事実だ。自然に起こることがないということとはつまり人為的なもの?)

霧もダイヤモンドダストも急激な温度変化によるもの。温度の低下、冷却、氷。……まさか!!)

自然ではないならば誰かがわざとやっていることなのか。

シユンの脳内にある人物の姿が思い浮かび、背筋が凍りついた。

嫌な予感がした。もしも自分の想像通りならば、間違いなくサツキが危険であるという結論に至ったから。

「……ゴールド、クリスタル!!」

「へ?」

「はっ、はい!」

突如振り返り、二人を呼ぶ。

シユンはクリスタルに望遠鏡を返すと、さらにピジョットを呼び寄せて言った。

「この指揮は任せる。俺はいち早く島へと向かう!」

「は? いや、任せるって一体どうしたんすか!」

「説明は後だ!」

最低限のことだけを伝え、シユンは背を向けた。ピジョットが両足でシユンの肩を掴み、空を飛ぶ。

ゴールドは納得できずに問い詰めるが、まともに答える余裕さえないのか、シユンはゴールドの問いに答えることなく飛び出して行った。

今、シユンの手元にはピカチュウ、バクフーン、そしてピジョットの三体のみ。

もしも予想通り敵と鉢合わせてしまったら不利だということくらいわかってはいる。わかっているはずなのに、一人飛び出した。飛び出してしまった。

(早く、早く……早く!!)

もう誰も失いたくないのだと心の中で叫んだ。

焦りと不安がより高まり、心臓の鼓動もどんどん早くなっていく。杞憂ならばそれにこしたことはない。きつと大丈夫だと信じている。だがそれでも安心できなかったのだ。

「ちっ!!」

シユンの頭の中に、数え切れない自責の念が浮かぶ。

何故、サツキが襲われた時、真っ先に助けに向かわなかったのか。

何故、ある程度の犠牲を覚悟してでも、ルギアを仲間に任せてでもサツキの元へと駆けつけなかったのか。

何故、何故、何故、何故——。何故俺は今ここにいる？

不安定な心境の中、シユンはついにサツキの姿を視界に捉えた。

「サツキさん!!」

無事を確認して、声を張り上げてサツキを呼ぶ。

その声でサツキもシユンの接近を知った。サツキは首だけを動かしてシユンを見ると……

「——駄目ッ!! 来ちゃ駄目エツ!!」

裂けるほどの勢いで大きな声を発した。

「えっ……っ?」

当然のことながらシユンにはその叫びの意味がわからない。

不思議に感じよく目を凝らしてみる。すると大気中の水分が凍結しているのとは別に、サツキの体が凍結していることがわかった。

その横での彼女のポケモンであるスターミーもいるが、すでに“こおり”状態で動くことさえできない。

このようなことややはり自然現象なわけがない。やはり何者かの作業なのだろう、そう理解した。

そしてそう理解したと同時に、サツキのすぐ近くに迫るポケモンを目にした。かつてシユンも対峙した、赤いボディと数多くの荷物が入っている袋を持っているのが特徴のポケモン——デリバードを。

「——“ふぶき”」

何者かの声が——機械のような声がその場に響く。

デリバードはその声に従い、猛烈な“ふぶき”を放った。

その威力は計り知れず、その付近の空間さえをも支配する。

シユンとピジョットもその例外ではなく、目を開けていることさえできずその場で静止し、ただ踏ん張っていることしかできなかった。

「……ッ！」

ようやく「ふぶき」が止み、シユンは目を凝らす。

まずはサツキの安全を確認しようと顔を上げて……絶望した。

たしかにサツキはそこにいた。その場に立っていた。その代わりに体全体が氷漬けにされたという、最悪の状態で。

「さ、サツキさん……？ サツキさん？」

目の前の現実が理解できず、サツキに呼びかける。

当然のことながら返事はない。それでももう一度呼ぶ。やはり返事はない。

「ああ、ようやく来たのか。私に齒向かい続ける愚かな少年——シユンよ」

呆然とするシユンに向かって、彼が望まない声が届いた。

忘れもしない。ゴールドを倒し、シユンもまた敗れた憎き相手。

仮面をつけ素顔を隠し、マントで全身を覆う不気味な存在。——仮面の男。

「だが、少しばかり遅かったな。……まずは、一人」

仮面の男は言った。お前の行動は無駄であったのだと。

凍りついたサツキの頭に手を置き、二、三回と叩く。意識がないということ強調しているのだろう。

それを見て、シユンは何も考えられなくなった。思考を放棄した。

目から伝わってくる情報を全て拒絶するかのように視界が揺れる。

「ハッ……ハハッ」

不意に笑みがこぼれた。

「ハハ……ハハハハッ」

乾いた笑みが止まらない。まるで故障した機械のように、止め処なくあふれ出す。

——受け入れられないことを目の前になると、人間はおかしくなるんだな、とシユンはまるで他人事のように考えた。

「……おいおい、今お前には用はねえんだよこの変態仮面」

笑いを止め、言葉を喉から搾り出す。

今にも爆発してしまいそうな負の感情を、どうにか抑えこんで。

「なのに——なんですか、何なんですかお前は？」

だがそれも、無理なことだということとは丸わかりであった。

「さっさとサツキさんを……返しやがれえええつつつつつ!!!」

一瞬で感情は爆発した。

シユンは絶叫のような咆哮と共に、主の意志を理解したピジョットと共に、仮面の男目掛けて突撃した。



### 第三十話 VS ウリムー 消失

あと少しだったんだよ。あと少しで手が届いたんだ。

ようやくサツキさんを救い出すことが出来たと思っただけなのに。

それなのに、それなのになんであいつは。……なんで仮面の男は何もかも奪っていく!?

「うあああああつ!!」

咆哮と共に突撃する。ピジョットの加速は凄まじく、体が持つていかれそうになるのをなんとかこらえる。

対して相手が迎え撃つために飛び出してきたのはデリバードだ。

以前の戦いを思い出す。そう、かつてウバメの森で初めて対峙したときは、この一体にやられたんだ。

(だけど、俺はあの時とは違う!)

ピジョットも——当時は進化していなかったためピジョンだったが——あの時のことは覚えている。

俺を庇い、苦手な攻撃とはいえ一撃の下に沈んでしまった。しかし、もう同じことは繰り返さない!

「あの時と同じだと思ふなよ! ……ピジョット、ツバさでうつ!!」

「デリバード、叩き落とせ!」

俺も幾度のジム戦を経験し、ピジョットもあのころよりも成長しているんだ。

空中で激しいぶつかり合いが繰り返される。

デリバードの腕とピジョットの翼が衝突。威力は互角なのか、どちらでも譲らない。

何度も何度も接触が続き、やがて鏝迫り合いとなって両者がならみ合う。……それでも、戦況は動かない。

「ずつき!!」

「オウムがえし!!」

腕が封じられている以上、打つ手は限られてくる。

痺れを切らしたのか、仮面の男が指示を飛ばした。

デリバードは腕の力を入れたまま、しかし上体を後ろへと逸らす。こちらにも負けじとピジヨットに指令を出して……両者はほとんど同じタイミングで『ずつき』をした。

同じ技による攻防。しかし……

「……ッ！ ピギヤアッ!!」

「くそっ！ 体勢を立て直せ！」

威力は相手の方が上だったのか、ついにピジヨットが押し負けた。痛みにもがきながら交代するピジヨット。翼を羽ばたかせながら首を振り、ダメージから立ち直ろうとする。

追撃を食らうわけにはいかない。ピジヨットに命じて、一時後退した。

「ふんっ、その程度か。まあ所詮はデリバードの技を真似ただけの偽者。到底本物には敵うまい」

「……うるさい！」

自分の優位を感じ取ったのか、仮面の男が不気味に笑う。

……本当に何者なんだ、この男は？

やはり実力は凄まじい。それこそこれまで戦ってきたジムリター猛者さえもが凡百と同等に感じられるほどに。

まともに言葉を返すことさえ、心を折られそうになる。それだけの実力を、この男は持っている。

「だが、良いのか？ そのように後退している暇など貴様にはないだろう？」

「どういう意味だよ？」

「忘れたわけではない。この女のことを」

「ッ——!?!」

仮面の男は視線をすぐ横——サツキさんへと向ける。

そうだ、今こうしている間にも氷の中でサツキさんが命を蝕まれて  
いる。

体が凍り付くことの恐ろしさは俺が身を持って知っている。その痛みも。

「可哀相になあ。早くしなければ、この女は手遅れになってしまうか

もしれんぞ?」

「お前に言われなくても、それくらいわかっている!」

だからこそ……

「ピジヨット、 “でんこうせっか”!」

……早く、決着をつけなければいけないんだ!

ピジヨットが先ほどとは比べ物にならないスピードでデリバードに突進する。

加速による威力が加わったこの攻撃、まず止められるはずがない。

その勢いは衰えることなく、瞬く間に距離を詰めた。

「やはり若い。単純だな」

ふと、仮面の男の呟きが聞こえた気がする。

だがもうこの攻撃は止められない。

ピジヨットは嘴から一直線にデリバードに突撃する。

そしてピジヨットの体は……完全に止められてしまった。

「なっ……!?!」

「その程度の攻撃で、打ち破れるとも思ったのか?」

「 “でんこうせっか” を、受け止めただと……?」

信じられなかった。相手のデリバードはスピードを見切り、ピ

ジヨットの頭を両腕で掴みとっていた。

今のはピジヨットの最高速トップスピードであつたというのに……ありえない。

ありえない!

「……デリバード」

「ッ……!」

仮面の男の声を聞き、デリバードが大きく息を吸う。

……間違いなく攻撃の指示だ。ならばその前に……!」

「 “つばめがえし” だ!!」

その前に反撃して、脱出しなければならぬ。

おそらくデリバードは “ごごえるかぜ” か “れいとうビーム” を繰り出そうとしていたはず。

しかしその技が放たれる前に——ピジヨットが目にも止まらぬ速さで翼を振り切り、デリバードの体を一閃した。

「ギイヤツ?!?」

「なにっ……?!?」

「もう一発もらつとけ!」

デリバードの悲鳴が上がる。

反撃を予想していなかったのか、仮面の男も驚愕している。

その間にもう一度ピジョットは“つばさでうっ”を繰り返し、デリバードを吹き飛ばした。

ポケモンが吹き飛ばされたことで、仮面の男もデリバードの元に駆け寄る。

「この……若造が! こしやくな真似を!!」

仮面の男が何事かを言っているが、知ったことではない。

今はそれよりも……

「サツキさん!」

……こちらの方が気がかりだ。

サツキさんに呼びかけるがやはり返事はない。体全体が凍りついているのだから、当然のことか。……くそっ!

悔しがっていても仕方がない。とにかく彼女を助けることを考えるんだ。

「手持ちポケモン達も一緒に凍り付いているから、俺がなんとかするしかない……!」

彼女のポケモン達はスターミーだけでなく、他の五体もボールごと凍り付いている。

……人間は長い間凍結していたら死んでしまう。そうでなくても障害が残る。

だからこそ少しでも早く救い出さなければいけない。とにかく、今は俺のバクフーンで氷を溶かさないと。

「シュン! 貴様……敵を放っておいて何をしている!」

「ッ!? ピジョット!」

しかし考えは途中で遮られてしまった。

怒りの叫びと共に、“ごおりのつぶて”がデリバードより放たれた。

ピジョットがその場で高速旋回することで攻撃を打ち落とし、無効化する。

今は防げたからよかった。だけど、仮面の男が先ほどの「ふぶき」のような強力な技を持つと知っている今。やっぱりこいつを退けなければいつまでも事態は進展しないのか……！

「敵を差し置いて意識を逸らすとはな。

……そのように余裕でいられるのはこちらにも不愉快だ。ここから先は、容赦なくいかせてもらおう」

仮面の男は再び視線をデリバードへ。

するとデリバードは今まで手にしていたプレゼントの袋を地面に落とした。袋からは大きなプレゼントの箱や「きのみ」に「大きなキノコ」など、様々なものがこぼれだす。

……そういえば、デリバードの袋は攻撃用の「プレゼント」だけではなく、エサを運んでいるという情報を思い出す。

デリバードというポケモンの象徴でもある袋を手放すとは。体が軽くなることで動きが良くなるということだろうか？ それだけ仮面の男も怒っているということか？

だが、もしそうだとしても、

「プレゼントの袋を下ろして、ようやく本気を出すってことか!? 舐めたこととしてんじやねえよ！」

ここまで本気でなかったというのは、こちらも良い気分ではない。そして同時にデリバードがどれだけ動きが良くなるのかという不安もある。

ならば、本気確かめるためにもまずはこちらから仕掛ける。

（「でんこうせっか」の勢いから、そのまま「つばめがえし」につながるげれば……！）

いくら動きが良くなったとしても、防ぎきれぬわけではない。事実、先ほどピジョットの「つばめがえし」には反応することさえできなかったのだから。

再びピジョットは突撃した。

「……残念だったな。その一手は失策だったぞ！」

突然の出来事だった。突撃と同時に仮面の男の前の、凍っている地面が不自然に盛り上がる。

何事かと不思議に思うが……その原因を考えはじめるとより先に、その原因が姿を現した。

「う、ウリムー……!?」

それはポケモンだった。小さなイノシシのようで、愛くるしい姿。しかし今の俺にとってはその姿は恐怖以外の何者でもない。

なぜならこのタイピングで、この場所で、このポケモンが現れるなど。……仮面の男のポケモンであるという以外にありえないからだ。(まさか——「あなをほる」で今までずっと地中に潜っていたのか!!)

大地も凍りつき、いくらポケモンでも動きが鈍る環境であるというのに。

「こおり」と「じめん」。二つのタイプを併せ持つウリムーはそんなこと関係なかった。ウリムーだからこそできる芸当であった。

しかしタイピングが良すぎる！ 仮面の男は指示をしていないはずなのに……!?

(プレゼントの袋か！ あそこから出てきた「きのみ」や「キノコ」の匂いに反応して出てきたんだ……!!)

先ほどのデリバードが地面に落とした袋にはエサが含まれていた。そしてウリムーは地中のエサの匂いを嗅ぎわることができるほどの嗅覚を持つという個体である。

そのウリムーの性質を……いや、ウリムーとデリバード、二体の性質を全て把握して仮面の男は実行した！

だとしたらまずい！ ウリムーは既に攻撃態勢に入っている。対してピジョットは「でんこうせっか」のせいで勢いを止められない。

このままではウリムーの攻撃が先に命中する！

「逃げろ、ピジョットオオオオッ！」

「れいとうビーム——！」

回避するために必死に指示を出す……遅かった。

ピジョットは空中で止まり、上空へ逃げようとするも、ウリムーが

放つ。『れいとうビーム』が容赦なく俺達を襲う。

「ピギャアアアアア!!」

「がああああっ!!」

その痛みに耐えられず、俺達は地面に転げ落ちた。

ピジョットの左翼と、俺の左腕。それが一瞬で凍り付いていた。

「ああっ、あああああっ!」

痛い。冷たい。痛い、痛い、痛い痛い!

一度経験した痛みでも、やはり体が慣れることはない。

体に走る激痛を前に、まともに動くことさえできなかった。

「無様だな。どうだ? 地に這い蹲り、敵を見上げる気分は?」

「ひっ……!?!」

後方から、何者かが近づいてくる足音が聞こえる。

……わかつている。あいつしか、仮面の男しかない。

戦わないと。……どうやって? 勝てるのか? ……本当に?

痛みと恐怖が焦りを呼んで、悪循環が生まれていた。混乱して、体

も動かない。

「……ッ! バクフーン!」

だけど何もしていなければやられることは明白だ。

ならばこそ、と腰のボールへと手を伸ばし、バクフーンをボールか

ら出した。

言葉にしなくても俺の意図を察してくれたのだろう。バクフーン

は登場と同時に『えんまく』を放つ。

「くそっ、こざかしい!」

『えんまく』はあつという間に視界を奪っていく。これで少しで

も時間を稼げるだろう。

「……すまん、バクフーン。お前の炎で、氷を、溶かしてくれ!」

バクフーンはコクリと頷いて、まずは俺の左腕の氷を、次いでピ

ジョットの左翼の氷を溶かした。

まだ痛みは残るけれども、なんとか動かすことはできる。

「俺達もまともに見えないけど、でも行くぞ!」

ピジョットをボールに戻して俺はバクフーンを連れて真っ直ぐ歩

く。

煙でよく見えないけれど、先ほど俺は「でんこうせつか」で真つ直ぐ進んでいた。

倒れてしまったとは言っても、方向はそんなに変わっていない。真つ直ぐ歩けば元いた場所に——サツキさんのいた場所に行ける。

そう思つて歩を進める。体が重く感じるが、早くしなければと自分にエールを送つて歩いた。

すると煙が晴れて、サツキさんの姿が見えた。

「サツキ、さん……」

もう一度名前を呼ぶ。返事がないとわかっていても。

とにかくバクフーンにサツキさんの氷も溶かしてもらおうと思つて……

「……ッ！ しつこいで、そこをどけ……!!」

俺はまた、デリバードと対峙した。

きつと空を飛べるこいつは逸早く空から先回りしたのだろう。

助ける気などなくせに、まるでサツキさんを守るかのように俺に立ちほだかる。

「邪魔だ、邪魔なんだよお前！」

それが余計に腹が立つ。

ただ助けたいだけだというのに、なのになぜコイツらは……！

（——力づくでも！）

「バクフーン、〃かえんぐるま〃！」

バクフーンが炎を纏つて突撃する。

「かえんほうしや」より威力は劣るが、デリバードにかわされたらと思うとそうはいかない。上手く氷を溶かしてくれればいいが、下手すればサツキさんに被害が及んでしまうためだ。

だがバクフーンに進化した今、〃かえんぐるま〃の威力も上がっている。

「……〃れいとうパンチ〃」

デリバードは跳躍し、氷が纏った右腕を思いつき振り下ろす。

……進化してそれでもまだ届かない。バクフーンは一撃の下に、地



に沈んでしまった。

「……なっ！」

相性が良いバクフーンでさえも、倒された。

これがどれだけ衝撃的なことなのか。……計り知れない。

デリバードは倒れたバクフーンを掴み挙げて、俺の方へと投げ飛ばした。

「ッ！ 戻れ、バクフーン！」

地面に叩き落される間にバクフーンをボールに戻す。

……ありえない。信じられない。信じたくもない。

成長したと思っていたのに。それでもまだ、届かないのか……！

「主力が倒され、戦意も尽きたか？」

「……」

後ろから、仮面の男が声をかける。

何か言わないと。そうでなければ、それこそ相手の調子を良くしてしまう。

それがわかっていたのに。……俺は何も口にすることができず、また一步も動くことができなかった。

「ああつくそっ！ さっさと着けよ、うずまき島！」

舟の上でゴールドは怒りを、焦りを隠す事無く声高に叫ぶ。

だが無理もない話だとクリスタルは思った。

突如シュンが独断で先行してしまい、とても仲が良いというゴールドが落ち着いていられるはずもないのだから。

「ねえゴールド。あなたとシュンさんってどういう関係なの？」

視線をルギアに向けつつ、クリスタルはゴールドに問いかけた。

二人の関係をほとんど知らない彼女にとって、ゴールドの反応はとても不思議に映ったのだろう。

「ああ？ どういう関係って言われてもな。……俗に言う先輩と後輩みたいな関係だぜ？」

家が近かったから、よくポケモンを交えて遊んだりしてたしな」

「幼馴染ってこと?」

「まあ、そんなもんか? でも、そんな一言で済まして欲しくはねーな。

何せ色々シユンさんには世話になったし、心配もかけちまったから。

「……ま、何はともあれ、俺にとっては本当に頼りになる良い人だぜ?」

話しが続くにつれ、ゴールドの笑みが深くなる。

それだけシユンを慕っているということだろう。

聞いたクリスタルも雰囲気から二人の仲を察し、つられるように笑った。

「だから俺もシユンさんの力になりたいとは思うぜ。俺も旅してちーつとは実力がついたからな」

「……どうかしら? シユンさんはかなりの凄腕みたいだし、あんたみたいなトレーナーが力になるの?」

「ああん!? なんだテメエ! 喧嘩売ってんのか!」

「あ、イエローさん凄いや! 華麗に跳んで、まるで踊ってるみたい!」  
「話を振っついて無視してんじゃねーよ! こんの真面目ギャル!」

なぜか口論に発展してしまう二人。

最終的にはゴールドの扱いを徐々に理解してきたクリスタルが、適当にあしらって終わるのだが。

（……平和だな。ゴールドの野郎もなかなかどうして楽しそうじゃねえか）

そんな二人を見て、ヒデノリは思わず今自分がいる場所が戦場だということのを忘れそうになる。

しかしそんな彼の意識を覚醒させるかのように……地響きに似た音が届いた。

「ツ!? なんだ!」

「……爆発音?」

その音は二人の耳にも届いた。

ドオンツ、と鈍く響く音。何かが強く叩きつけられたのか、あるいは何か爆発したのかはわからない。

しかし確実なのは……シユンが飛び立った方角から聞こえたということだ。

「まさか、シユンさんの身に何か……!?!」

ゴールドは焦りを感じた。

何か嫌な予感がする。こんな時は、なぜか予感が当たってしまうのだと理解しているから。

(大丈夫っすよね、シユンさん……!)

信じてはいるが、焦りは止まらない。

「霧が凄いが……よし、お前ら準備しろ!」

ヒデノリの声が聞こえる。

もう1分もしない間に浜辺に到着するだろう。

徐々に霧も晴れてくる。……するとゴールドが浜辺の方角を見ると、ある人影が目に入った。

あれは、あの姿は……

「シユンさん!」

見慣れた、ゴールドの先輩・シユンの姿。

無事だったんだと、安心してゴールドの顔に笑みが戻る。

「……来たか」

しかし、やがてシユンの背後に二つの影が現れた。

一つはシユンの上に立つ……というよりも浮かんでいる、飛んでいる小さな影。

もう一つはその斜め後ろに立っている、人影であった。

すぐに彼らの姿もはつきりと見えるようになった。だが……

「なんで……」

ゴールドが言葉に詰まる。

目の前の出来事を受け入れることができずに。

「どうなってんだ、コイツは……」

「どうしたの? ゴールド?」

ヒデノリも、運転を忘れて呆然とした。

不思議に思ったクリスタルが、一時的に持ち場を離れてゴールドの横に立つ。

「ッ！ 嘘！」

そして彼女もまた、ゴールドと同じように黙り込んでしまった。

口を押さえて『信じられない』と語っている。

小さな影はデリバード。意識がないのか、ぐったりとしているシュンの体を持ち上げて飛んでいた。

そして人影は、ゴールドが二度戦った因縁の相手、仮面の男だった。

「仮面の男！」

「ほう、まだ生きていたのか小僧……」

ゴールドの叫びに対し、仮面の男は意にも介していないかのような口ぶり。

それがゴールドの怒りを余計に駆り立てた。

「テメエ、シュンさんまでやりやがったのか！」

「なんだ知り合いだったのか？ それならばくれてやろう。……ホラ」

「なっ!? シュンさん！」

デリバードは掴んでいたシュンを海に放り投げた。

意識がないのか、シュンは叫びもあげず……その体は海の中に沈んでいく。

「シュンさん！ 今行きます！」

「ちよっ、ゴールド！」

「おい、待て！」

二人の制止を振り切つてゴールドが海に飛び込んだ。

ゴールドの手持ちであるニョたろうも続く。

「余程大切な者だったようだな。麗しい友情、感動さえ覚える。その友情を讃えて……私から『プレゼント』を贈ろうではないか」

すると仮面の男はデリバードに命じて……ありったけの『プレゼント』を、海に投げ込ませた。

プレゼントはまるで爆弾のように次々と爆発を起こし、海上に、海中に被害を生む。

「うおおお!!」

「きゃああ!!」

舟も例外ではない。爆発によって生じた波に自由を奪われてしま  
う。

その衝撃は大きく、先ほどクリスタルが捕まえたテツポウオのボー  
ルが海中に投げ出されてしまうほどだった。

「おや、どうやら派手すぎたか？ これは波を鎮めなければなるまい。

……「オーロラビーム」

デリバードより放たれた冷気で波が凍り付く。

あれだけ荒れた波も凍り、舟は波の上で停止した。

現実離れした威力に、ヒデノリ達は驚愕を隠せない。

「なんだと!?! 波ごと凍らせるとは、なんとというエネルギーだ!」

「それよりも、これでは二人が……! シュンさん! ゴールド!」

それと同時に、クリスタルの脳内に嫌な想像が浮かび、二人の名前  
を呼んだ。

海が凍つては二人がもう上がってこれないのではないか、という不  
安が生まれたのだ。

だが、当然返事はなく、目の前の脅威にただ怯えるしかなかった。

「さて、これでひとまず邪魔は……うん?」

一通りの障害を排除した、と仮面の男は頷く。

しかしそんな彼に襲い掛かる者達がいた。

「ヘラクロス! ラプラス! エーフィまで!」

シュンの手持ちポケモン達である。

彼らの主を攻撃されて、何も感じないわけがなかった。

主を失った三匹は怒りに任せて仮面の男に襲い掛かる。

ヘラクロスは「かわらわり」で、ラプラスは「のしかかり」で、

エーフィは「アイアンテール」で三体同時に仮面の男に仕掛けた。

「ふんっ、こぎかしい!」

……だが、デリバードが放つ「ふぶき」で吹き飛ばされてしまう。

三匹は着地もままならず、氷の地面に叩きつけられた。

「そんな!」

鍛え上げられたポケモン達が簡単に一蹴された。その事実には、クリスタルはただ驚くしかない。

「一歩でも動けばその瞬間貴様らを討つ。生きなければ大人しく見ていろ。私の目的は、貴様らではないのだから」

そう警告すると仮面の男はデリバードに掴まり、空へと飛んでいく。その先にいるのは——ルギアだった。

「……なんだ？」

最初に異変に気づいたのはシルバーだった。

突如、舟からの援護射撃が完全に途絶え、ポケギアも繋がらなくなった。

違和感を覚えたシルバーは一度ルギアから距離を取り、舟を見る。

……そして、舟が目指していた島の一部が凍り付いているところを発見した。

「なんだコレは?! 何が起きている!?!」

それはシルバーにとっても予想外の異変だった。

呆然とするが、さらに衝撃が起こる。

突如真下の海で水柱が立ったかと思えば、波が凍りついたのだ。

真下でも別の戦いが起こっているということは明らかだった。

「まさか……」

「氷」というキーワードで、シルバーの脳内にあるイメージが湧いた。それも最悪のイメージが。

「おい、どうしたガキ!?!」

「シルバーさん!?!」

「お前達、ルギアだけに構うな! おそらく、こちらにもヤツが来る!」

声をかけてくる二人に、シルバーは声を荒げた。

シルバーは誰よりもヤツの危険性を知っているからこそ、平然としていられなかった。

そして直後、島より何者かが飛び立ち、彼らと同じ場所まで飛んできた。

「貴様——!!」

「なっ、テメエ!」

「……誰? 何でこんなところに?」

三者三様の反応だが、嫌悪、敵対心、違和感とどれも良いものではない。

それも当然のことか。何せ向き合っているのは仮面の男。

「よくぞ戦ってくれた、ここからは私に任せれらおう。——ルギアは私がいただく」

彼らの敵であり、打ち倒さなければならぬ相手なのだから。

「よくもそんなことを抜け抜けと言えたもんだな! そんなこと、させるわけねえだろうが!」

その言葉に怒りを覚え、マチスが飛び出した。

「なっ、待て!」

「どうしたんですか、マチスさん!」

二人の声を無視して、マチスは仮面の男へ向かっていく。

レアコイル達を作る電磁フィールドにいる間は大丈夫だと、安易に思っているところもあった。

電磁フィールドとデリバードが衝突する。空中での鏖迫り合いが始まった。

「ほう。これはこれは、懐かしい顔ぶれだなマチス」

「ほざけ。てめえ、ルギアをいただくだと? 一体何を考えていやがる?」

「貴様に教える必要はない」

「それよりも」と仮面の男は付け加えて言った。

「私に構っていると、痛い目にあうぞ?」

「ああん? それは一体どういう——」

「マチスさん!」

どういう意味だと、尋ねようとした言葉はイエローの呼び声にかき消された。

「なっ!?」

真後ろから、ルギアの「エアロブラスト」。

とてもではないが対応できるはずがない。「エアロブラスト」が一体のレアコイルに直撃。直撃したレアコイルは力なく空中でふらついた。

「くっそっ。……しまった!」

先ほどルギアに一体のレアコイルをやられてしまっており、これにて二体目を失った。

その結果、電磁フィールドを形成することは困難に陥り、マチスはゆっくりと落ちていく。

「イエロー、マチスを!」

「わかりました!」

シルバーの支持を受け、イエローはマチスを追う。

どうにか海に叩きつけられる前に回収することができた。

しかしレアコイルがない以上、マチスを空中戦力として数えることはできない。

イエローもマチスを舟へと降ろすために戦線離脱し、シルバーは一人で仮面の男と向き合った。

「……お前がルギアを怒らせたのか?」

「どうしてそう思う?」

「俺達が来る前からルギアは我を忘れていた。しかも今、ルギアはお前を見た瞬間「エアロブラスト」を放った。

結果的にマチスが被弾したが、それはあくまで直線状の位置に突撃したからだ。明らかに、狙いはお前だった」

シルバーの推測を聞いて、仮面の男はしばし無言を貫くが……やがて口元を歪ませた。

「……その通りだ」

そしてシルバーの考えが当たっていたと断言する。

自然とシルバーは歯を食いしばった。ここまで相手の掌の上で踊らされていたのかと、怒りを覚えた。

「俺は貴様を許すわけにはいかない!」



「それで私を攻撃するか? ……愚かな」

二人の道が交わることはなく、衝突を生む。ヤミカラスとデリバードの一騎打ち。お互いがお互いの飛行能力を奪おうと、接近戦を挑む。

このまま押し切ることは難しくても、一瞬でも隙を作ることができれば、とシルバーは考えた。

「ギィアアーツ!!」

「ツ!?!」

しかし二人の戦いに割り込む形でルギアの絶叫が木霊した。

「ルギアか。忘れていたわけではないが、いきなり……ツ!?!」

シルバーは顔をしかめてルギアをにらみつける。

一対一で仮面の男と戦いたいと思っていたため、邪魔をされて良い気分はずがない。

しかし、突如ルギアはシルバーを見ると、仮面の男を差し置いてシルバーへ向けて「エアロブラスト」を放った。

「ちいつー!」

間一髪のところではヤミカラスが距離をとり、攻撃を回避する。

(こいつ、一体どういうことだ)

攻撃されて内心穏やかなものではない。

最初にルギアを攻撃したのは仮面の男ならば、ルギアの怒りの矛先は仮面の男へと向くはず。

それなのに仮面の男を差し置いてシルバーだけを攻撃してくるとは予想していなかった。

「ふん。どうやらルギアは、自分の敵を他の者が攻撃していることを許さなかったようだな」

「……くそっ!」

おそらく仮面の男の言うとおりだろう、シルバーは舌打ちして顔を背けた。

『敵の敵は味方』ということではルギアには仮面の男を攻撃して欲しかったのだが、上手くいかなかった。それどころか敵を勝手に攻撃するシルバーに襲い掛かるとは予想外としか言いようがない。

すかさずルギアの追撃が来た。

再び“エアロブラスト”が連射される。二つの空気砲がシルバー達目掛けて発射した。

ヤミカラスはより高くに飛び上がり、旋回しながらかわしていく。

「だが、私もいることを忘れるな！」

「仮面の男……！」

だがその先に行動を予測した仮面の男が先回りしていた。

デリバードが拳を振り下ろす。ヤミカラスが翼でガードしようと思うが、間に合わない。

威力が高いようで、すでに体力を消耗していたヤミカラスはバランスを失い、落下してしまった。

「……また、か!!」

「シルバーさん！」

シルバーは落下しながらも仮面の男の姿を捉えつつける。

駆けつけたイエローによって救われたものの、ヤミカラスも戦闘続行は厳しい状態になってしまった。

シルバーはまたしても仮面の男を止める事は敵わず、その戦いを見届けるしかなかった。

「……久しいな、ルギアよ」

「ギィアアース!!」

「語り合う余裕もないか。悲しいかな」

仮面の男がルギアと対面するや否や、ルギアは“エアロブラスト”をタメなしで放射する。

それをデリバードが巧みに飛び回ることで回避していった。

四発の弾丸を全てかわしたところで、仮面の男は反撃に転じる。

「デリバード、”ごご”えるかぜ」

大気が凍てつくほどの冷気がルギアを襲う。

ルギアは連続して“エアロブラスト”を放出しようと空気を吸い込んでいたため、口腔内にもダメージが及んでしまった。

「——ッ！　　ッ——ッ!!」

「言葉を発することも躊躇われるか？　安心しろ、すぐに楽にしてや

る」

上手く鳴くことさえできないルギアだが、仮面の男は手を緩めるところを知らない。

口呼吸ができずに「エアロブラスト」を、「ハイドロポンプ」を封じた今、ルギアの攻撃力は格段に落ちた。

すでに体力もほとんどない。——仮面の男は勝負を決めに来た。

「デリバード」

トレーナー 主の意図を理解し、デリバードをより高い場所へと飛ぶ。

そこでさらに体を後ろに倒すことでタメをつくり、ルギアに目標を定めると……

「——」  
「ゴツドバード——」

一瞬でルギアの腹部へと突撃した。

あのルギアでさえ、反応することができなかったスピードは、防ぎようもない。

一撃でルギアは残った力を失い、倒れてしまう。

「さあ、お前も私に従え！」

それを見て仮面の男はモンスターボールを放った。

ボールはルギアの額にあたり、体が吸い込まれていく。

……仮面の男は空中でボールを確保した。ルギアの捕獲が完了したことを確認すると、うつすらと笑みを浮かべる。

「ルギア、捕獲……！」

「まさか……！」

最悪の事態になろうとは、シルバーが悔やむがもはやどうしようもない。

仮面の男を直視することができずに視線を逸らす。……すると、その視線の先。凍った波の部分に亀裂が走った。

「……なんだ？」

ピシツと音を立てて広がっていく。するとその亀裂はさらに大きくなっっていく。

「おりやあああああ！ ゴールド、復活!!!」

そこから先ほど海に投げ飛ばされたはずの少年——ゴールドが

シユンを抱きかかえて飛び出してきた。

「ぐ、ゴールド!?」

「シユンさんも一緒だ!」

「それにあれは……マントイン!?」

思わぬ登場に誰もが目を丸くする。

ゴールドは海中で出会ったマントインに、さらにクリスタルが捕獲した20匹のテツポウオをヒレにつけ、〃みずでっぼう〃を一斉放射させることで空を飛んでいた。その姿はまるでハンググライダーのようである。

「よくもやってくれたじゃねえか、仮面野郎! 今度はこっちの番だぜ!!」

「ぬうつ!?!」

捕獲直後で油断したのか、仮面の男の反応も鈍い。ゴールドの接近を許してしまった。

「全体、回れ右! ……20連〃みずでっぼう〃、食らいやがれ!!」

ゴールドの合図でテツポウオ達は方向転換。

今度は仮面の男達へ向かって一斉に〃みずでっぼう〃を放出する。

「ぐおおおっ!!」

まともに攻撃を受けてしまい、デリバードは怯んで仮面の男を放してしまった。

「くっ、来い! デリバード!」

もう一度命じること、デリバードは立ち直る。

主を空中で救い出し、さらにゴールドから逃げるように低空飛行を始めた。

「目的は全て達した。これ以上ここに長居は無用だ、引き上げるぞ!」  
そう言うと、先ほど彼らが潜んでいた島へと向かっていく。

着陸するとデリバードは仮面の男を離し、代わりに氷漬けとなったサツキを抱えて再び飛ぶ。仮面の男はジュゴンを連れて海での逃走を図った。

「逃がすな、ゴールド!」

「お前に言われなくてもわかってら!」

数少なくなつた飛行戦力を持つゴールドに、シルバーは声をかける。

ゴールドもすぐに彼らの後を追う。再び方向転換して追いかけた。これだけ好き勝手しておいて、逃がすわけにはいかない。視線を去つていく仮面の男へと向けるが……

「……やれ」

それゆえに、視野が狭まっていた。

島に隠れていた仮面の男のイノムーの「とっしん」を許してしまふ。

「がはっ!？」

投げ飛ばされるゴールド。マントインも島に落下し、ダメージを負つてしまった。

イノムーは攻撃が決まると同時に駆け出し、主が去つていった方角の海へと走つていき……ボールに収まった。

「ちく、しょう! 後、少しだったのに……!」

ゴールドは歯を食いしばつて悔しがる。

奇襲により仮面の男の不意をつき、一矢を報いることはできたが、それだけだった。

結局ルギアは捕獲され、仮面の男も逃がしてしまう。

「大丈夫、ゴールド!？」

「おうクリスか? 俺はなんとか。それよりも……シユンさんは!？」

心配そうに声をかけてくれるクリスタルには感謝するが、同時にシユンのことが気がかりになった。

自分と同じように投げ出されてしまい、どこか怪我を負っていないのかと不安になったのだが。

「……心配するな。大きな怪我はない。少し休めば意識を取り戻すだろう」

シルバーがシユンに駆け寄り、彼の無事を知らせてくれた。

「そうか。……よかった」

シユンの無事を知り、ゴールドも一息ついた。

ひとまずは危機は去つた。シユンも無事ならばまずは大丈夫だろう

うと、ゴールドはそう思った。

「……でも、その代わりサツキさんが……」

「それじゃあクリスタルさん、やはり先ほどデリバードが運んでいったのは……」

「はい。おそろくは……」

「そんな……!」

しかしクリスタルとイエローの表情が暗い。

『サツキ』という聞きなれない単語、いやゴールドも少しだけシユンから聞いていたことを思い出した。

シユンがここまで旅を共にしてきたという女性のことを。

「どういうことだ、説明しろ」

「そのサツキって人が何かあったのかよ?」

事情を知らないシルバーとゴールドが二人に詰め寄る。

接点の少ないマチスも少し気になっている素振りを見せている。

「さつき、あの仮面の男のデリバードが運んでいた氷の塊。あれに……あの中に、サツキさんの姿が、見えました」

「なっ!?」

「……え?」

真実を知り、全員が驚きのあまり固まってしまった。

クリスタルが言うことが本当だとするならば。……彼らは危機を退ける代わりに、あまりにも大きなものを、失ってしまったのだから。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：5個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ、フアントムバッジ、スチールバッジ）

手持ちポケモン

バクフーン♂ Lv44  
ピカチュウ♂ Lv49  
エーフィ♀ Lv48  
ラプラス♀ Lv51  
ピジヨット♀ Lv46  
ヘラクロス♂ Lv52

ボックスメンバー

サナギラス♂ Lv49

サンドパン♂ Lv40

ハッサム♂ Lv47

レポートに書き込みました!!

### 第三十一話 VSラツタ 巨悪の野望

タンバシテイ、ポケモンセンター。

『……そうかうずまき島で仮面の男と戦闘した、か。』

戦いに敗れ、ルギアはやつの手におち、そしてサツキ君も……』

パソコンの画面には急の報告を耳にし、頭を抱えるオーキド博士が映し出されている。

ルギアと、そして仮面の男との戦いの後、ゴールド達一行は気を失ったシュンを抱えて一番近くの街、タンバシテイへと来ていた。

道中、自分の船に戻ったマクス。『調べたいことがある』と言って別れたシルバーはこの場にはいない。

傷ついたポケモン達の回復を終え、シュンも目を覚ますと彼らは依頼主であるオーキド博士へ事の顛末を全て打ち明けた。

その内容はとても重々しいものだった。皆暗い表情を浮かべ、淡々と起こった事を口にしていく。

「すみません、オーキド博士。結局何もできずに、俺は……」

『君が気に病むことではない。行方不明だったゴールドも見つかって何よりじゃ。よくぞ無事に戻ってきてくれた』

「……本当に、すみません」

今まで沈黙していたシュンはただ謝罪の言葉を繰り返す。

彼はこの戦いでも強敵を相手に最前線で奮闘していた。オーキド博士も彼に非はないと理解し、彼を諫める。

だがシュンには慰めにもならないものだった。目から大粒の涙が零れ落ち、呪いのように謝罪を続ける。

「……先輩、ちよつと座りましょう」

それだけこの敗戦は彼にとっては辛いものだった。

見ていられなくなったゴールドに促され、シュンは少し離れた椅子に腰掛ける。

痛々しい姿を、誰も直視する事ができなかった。

『今回のやつ動きは、間違いなく戦力の拡大を狙ったことじやろう。ルギアという伝説のポケモンを手にした今、ロケット団はさらに



大きな動きを見せるやもしれん』

「ええ。私達も同意見です。でも、気になることが一つあります」

『なんじゃ?』

「仮面の男の行動についてです。どうして仮面の男はサツキさんを連れ去ったのでしょうか?」

クリスタルは戦いが終えてからずっと抱いていた疑問をオーキド博士に尋ねた。

最後に彼女達が目にした時、サツキは全身が凍りついた状態だった。すぐに氷を溶かし、救命処置をなさなければならぬ危険な状態である。

だが仮面の男が連れ去ってしまったということはおそらくは彼らのアジトへ運ぶのだろう。

人目につかないような場所へ運ぶとなると時間がかかる。そしてそうなると——彼女の命は、語るまでも無い。

『……これも先ほどと同じ理由じゃ。やつらの狙いはおそらく、彼女のポケモン達』

「ポケモン?」

『そうじゃ。かつてロケット団はポケモンの生体実験を行っていた。』

そしてその実験結果として、トレーナーの手持ちポケモンを操る術を手にいれておった』

「他者のポケモンをですか!?!」

驚愕に目を見開くクリスタル。

一度手にしたポケモンはそのトレーナーのものとしてボールに登録され、トレーナー以外の言うことは滅多に聞かない。

だがロケット団の先端技術が常識を覆した。かつてカントー地方一帯を席卷した時も彼らは他人のポケモンを奪い、支配下においていた。

その技術はおそらく仮面の男の支配下に入った今でも引き継がれている。だからこそ、サツキは狙われたのだろうか。

『実は、やつらは以前もサツキ君を捕縛しようとしていた。すんでのところではシュン君が駆けつけてくれたおかげで事なきを得たが。』

今思えば、あの時もやつらは情報が目的、ということではなくただ戦力を欲していたのかもしれない。その為にサツキ君を狙って、今回も』

オーキド博士はチラリと視線をシュンに向けた。サツキという名前が出た瞬間、彼の肩がピクリと震えた。

気落ちしても彼の意志は変わっていない。そんな事実が余計に胸を締め付けた。

「あの、それで博士。サツキさんは……」

『……操る術を持っている以上、やつらがサツキ君を助ける理由はない。』

いや、それ以前に助けようとしてもすでに時間が経ってしまったていたのじやろう。

もはや体のあちこちで細胞が死んでしまっているはず。ほぼ間違はなく、もう……』

恐る恐る、わずかな希望を抱いていたイエローの呟きは、オーキドの言葉によつて否定される。

わかっていたことではある。戦力確保が目的なら、目的を達した今、ロケット団に彼女を救う意味はない。

『この世にはいない』という言葉を搾り出すこともできず、オーキド博士は視線を床に落とした。

つられてクリスタルもイエローも手で口を覆い、ゴールドは拳を強く握り締め、シュンは歯を食いしばった。

「……オーキド博士。教えてください。俺達は、次にどう動けばいいのですか？」

一番早くに立ち直ったのは意外にもシュンであった。

誰よりもこの事態にシヨックをうけているはずなのに。いや、だからこそ、すぐに次のことへ目を向けることができた。

これ以上彼女の話題に触れていたくなかった。

光を失った瞳で博士を射抜く。

ただ事ではない様子にオーキド博士も我に返り、改めて口を開いた。

「うむ。君達には一度コガネシティの南にある育て屋に向かつてもらいたい」

「育て屋？」

「げっ。またあそこに行くのかよ!？」

『育て屋』。この単語に反応を示したのはシユンとゴールドだった。前者はただ首を傾げ、後者は心底嫌そうに顔を歪めている。

『そうじゃ。そこで今後のことについて話したい。ついたら連絡をくれ。大事な話じゃ』

その言葉を最後に通信は終わり、画面はぷつりと切れた。

「……よし。聞いている通りだ。早速育て屋に行こう」

「うっすー!」

誰もがオーキド博士の言葉の意味を理解しかねているが、何時までもここにいても意味は無い。

シユンが真っ先に出口に向かって歩き始め、ゴールド達も後に続く。

「ゴールドとイエローさんはマンタイン、バタフリーがいるから移動手段は大丈夫だな。クリスタルは？」

「私もネイビョンがいますけど、さすがに長時間は……おじさんの船に乗っていきましようか？」

「いや、空を飛んだ方が速い。それなら俺のピジョットを貸そう。俺はヘラクロスに乗って移動する。」

イエローのおじさんとは後で連絡を取って合流しよう。今はオーキド博士の用件が優先だ」

確認を済ませるとシユンはクリスタルにピジョットが入っているボールを預け、ヘラクロスへと声をかける。

口早に指示を出し、体調が万全であることを理解するとすぐに飛び立つ準備を始めた。

「ちよっと待ってくださいー!」

「どうした？」

今にも飛び立とうとした瞬間、ゴールドが手を広げて制止する。

『早くしろ』と態度で急かすシユンの様子が感じ取られ、彼が知る姿

は微塵も存在しなかった。

「もうちよつとここをゆっくりしていてもいいんじゃないっすか？ シュンさんも目が覚めたばかりなんだし。ちよつと休んだ方が……」

「俺の心配なら不要だ。それより、今ここを立たないと日が沈むまでにたどり着けない。夜になると海は危険だしな」

「……そうっすか。わかりました」

「もういいな？ ……場所を知っている俺が先導する。皆、ついてきてくれ」

これ以上呼びかけても無理だと理解し、ゴールドは後ずさった。

シュンも一度あたりを見渡し、誰も意見がないということを確認すると真つ先に飛び立つ。

少し遅れてイエローが飛び、ゴールドとクリスタルも二人に続いた。

「……らしくねえな」

「シュンさんのこと？」

「たりめえだろ？ お前だって疑問感じてんじやねえのかよ？」

「まあ、ちよつと心配ではあるけれど……」

最後方でシュンに聞こえないように並行して飛びながら会話するゴールドとクリスタル。

付き合いの短いクリスタルから見ても違和感を感じているのだ。ゴールドが不満を漏らすのも無理はなかった。

(別に急ぐ事に文句はねえ。けどよ、そんな余裕の無い顔で急かされちや、俺らは堪ったもんじやねえ)

生気を感じさせない瞳。失意に沈む彼は今何を見据えているのか。生き急いでいるようにも感じるシュンの後姿を、ゴールドは苦々しく見つめた。

---

空を飛び続けること数十分。

俺達はコガネシテイの南、34番道路の育て屋に降り立った。

「おお、よく来たな。お前達」

「お久しぶりです」

「久しいの。初めて見る顔もおるようじゃが、まあよかろう。入りなさい」

「うつす」

かつて俺を鍛えてくれたおじいさんとおばあさん。

すでに話についてはいたようで挨拶を済ませるとすぐに家へと招いてくれた。

初めてここを訪れてからそれほど日は経っていないものの、どこか懐かしさを覚えながら廊下を歩いていると、和式の居間へと案内される。

そこには既に一人の先客が来ていた。

「おう。お前さんらがオーキドに凶鑑を託されたつちゆうガキか」

「ゲツ!? ガンテツのじじい!」

「誰がじじいじゃ! ガンテツさんと呼ばんかい小僧!」

額に青筋を浮かべ、ゴールドを怒鳴りつける頑固そうな老職人。

『ガンテツ』という名を一度聞いた事がある。たしかヒワダで多くのボールを作り出すボール職人と。

俺は使ったことはないがこの人が作ったボールは使い勝手にこそ難はあれど、使いこなせば通常のボールとは比べ物にならないほどの効果を発揮するという噂もある。

「ガンテツ師匠がなぜここに?」

「おおクリス君。なに、オーキドに話を聞いて、少し思うところがあつたんじゃ」

クリスタルには愛想のよきそうな笑みを見せているガンテツさん。二人の会話の様子から『捕獲の専門家』として付き合いがあったというところが窺える。

認めたものには寛容、そうでないものには厳しくあたる、という性格なのだろうか。

「積もる話はあるだろうが、まずはオーキドと繋ぐぞ」

そう言つてガンテツさんはパソコンを開き、オーキド博士と通信を

繋げた。

程なくしてオーキド博士が通信に応じて画面に映し出される。

『……うむ。全員揃ったようじゃな』

顔ぶれを見渡して、オーキド博士は大きく頷いた。

俺達も頷き返して誰かが意見するのを待つ。

真つ先に口火を切ったのはガンテツさんだった。

「まずわしから話しておくことがある。だがその前に——お主がシュンというトレーナーだな？」

「は？ ええ。そうですが」

「そうか。ならばまずは君に謝っておかなければなるまい。すまなかった」

突如俺に向かつてガンテツさんが頭を下げた。

当然ながらこの意味がわからない。

俺とガンテツさんは初対面。そのはずだ。その相手にいきなり謝罪をされても理解が追いつかない。

周囲の反応も俺と似たようなもので、ガンテツさんが話を続けるまで呆然とするしかなかった。

「実は以前、サツキ君から君の話を聞いておった」

「……え？」

「思えばあの時、わしが彼女の話に応じていれば、結果は変わっていたのかもしれない」

「どういう、ことですか？」

「まずは皆、これを見てくれ」

そう言つてガンテツは懐から一つの巻物を取り出し、皆に見えるよう広げて見せた。

「……なんじやこりや？」

「何かボールみたいな絵が描いてありますね……」

「これはわしが作るボールの製作法が記されている『特殊玉作成秘伝の書』じゃ」

「ガンテツ師匠の？」

「一番最後のボールを見てくれ」

促され、俺達は視線を最後のボールへと移す。

それは今まで見たことがないボールだった。

ボールの蓋には文字のような模様が描かれており、普通のボールとは何かが違うのだと見て取れる。

「これはおそらく、仮面の男が欲しているものじゃ」

「……なんじゃと!？」

「仮面の男がこのボールを!？」

打ち明けられた事実には驚愕を隠す事は出来なかった。

今までは敵の明確な目的さえ明らかになつていなかった。だがそれがガンテツさんの口から明らかになったのだ。

「時間ときを捕らえるモンスターボールと呼んでおる」

「時間とき?」

「そうじゃ。ウバメの森、中心部に祀られておる祠には伝説のポケモンが棲むと言われておる。

このポケモンを捕まえるには特殊なボールが必要でな。それがこれじゃ」

ウバメの森。それは俺が初めて仮面の男と対峙した場所でもある。

じゃああの時も仮面の男は伝説のポケモンを狙っていたということか?」

戦いは偶然ではなく、張り込んでいたロケット団に遭遇したから、ということか。

そう考えればガンテツさんの話も疑う事無く信じる事ができる。

「しかし、何故仮面の男の狙いがわかったんですか?」

事の顛末を冷静に考えていたクリスがガンテツさんに問う。

たしかにそれは俺も気になっていたことだ。

伝説のポケモンと仮面の男、二つを繋ぐ線が見えない。

確かにウバメの森に執着していたから可能性はあるだろうが、何故こうも断言できるのかと。

「オーキドから仮面の男がルギアを捕らえたという話を聞いたからじゃ。

こいつとは旧知の仲でな。何か知らないかとすぐに知らせてくれ

たわい」

「ルギアも何か関係がある?」

「……このボールを作るために必要となる捕獲網、キャプチャーネットを編む材料。」

いくつか手がかりはあるが、その一つがルギアが落とす『ぎんいろのはね』なんじゃ」

「そんなー!」

信じられない。その叫びを聞いてガンテツさんは首を横に振る。

つまり、仮面の男によるルギア捕獲はただ単に戦力の増強ではなかったということ。

自力で伝説のポケモン捕獲は無理だと判断し、正攻法を挑もうとしている。

「ならば今すぐにでもウバメの森に行きましょう! 手遅れになってしまいかもしれない!」

俺はボールを手にするとすぐに立ち上がった。

もしもウバメの森の伝説のポケモンまで仮面の男に奪われれば、やつの目的は達成されてしまう。

それだけは何としても阻止しなければならぬ。

「待てい! まだ話は終わっておらん!」

だが駆け出そうとした足はガンテツさんの叫びで止められた。

「話って、それどころではないでしょう! 材料がやつの手にある以上、いつ動くかわからない!」

「材料はそれだけではない!」

「……何?」

「え!?! まだあんのかよ!?!」

「ああ。とにかく座りなさい」

「……はい。取り乱してしまい、すみません」

指差された席に戻り、再び腰掛ける。

どうも気が急ってしまったているな。情報は疎かにしてはいけないとわかっているはずなのに、やつの話となるとどうしても逸ってしまう。



「話を戻す。『ぎんいろのはね』、そしてもう一つ。『にじいろのはね』を紡ぎ合わせると捕獲網を編むことができるという」

『にじいろのはね』というのは?」

「エンジュに伝わる伝説のポケモン——『ホウオウ』。このポケモンの翼より抜け落ちる羽じゃ」

『『ホウオウ』、どつかで聞いた気が……何だっけかな?』

説明を聞いて何か思い当たる節があるのか、ゴールドは頭を抱え始めた。

逆に俺は始めて聞く内容ばかりで話を整理することで精一杯だった。

わかったことはただ一つ。

「つまり、仮面の男の狙いは!」

「そうじゃ。おそらくはもう一体の伝説のポケモン、『ホウオウ』」

『君達をここに呼んだのはこれが理由じゃ。仮面の男の目的、まず間違いないと考えてくれ』

「はい!」

オーキド博士にそう言われ、俺達凶鑑所有者は背筋を伸ばして答えた。

敵の狙いがわかったならばこちらも動きやすい。この情報、実に価値があるものだ。

「ならばオーキド博士。俺達はエンジュに向かえということですね」

『いや、それも少し違う』

「……は?」

しかし俺の提案はオーキド博士によって切り捨てられた。

「何でだよオーキドのじいさん! あの時面やろうがエンジュに来るんだろ!? だったら俺達が行かなくてどうすんだよ!」

『話は最後まで聞かんかい! ——実は、今度セキエイ高原でポケモンリーグが開かれる。』

そしてその場ではリーグ戦の前にカントー・ジョウト両地方のジムリーダーが集結し、対抗戦を開く事となった』

「……ジムリーダーが集結!」

「えっと、それがどうしたんですか？」

理解できたのは俺とゴールドだけだった。

他の者は全員オーキド博士の言葉を理解できず、何故今それが関係しているのかと首をかしげている。

「以前、ゴールドが戦った時に発覚したんです。仮面の男の正体はジムリーダーの誰かだと」

「ジムリーダーが!? だって、ジムリーダーといえば街の代表でしょう!? そんなことがありえるんですか!？」

「……間違いない」

間違いないからこそ、俺やサツキさんがここまで調べていたんだ。だが結局仮面の男の正体を暴くことは出来なかった。

オーキド博士たちも善後策を考えていてくれたのか。期待に応えられなくて申し訳ない。

『そこで君達にはエンジュとセキエイ高原、二手にわかれて向かってほしい。』

もしも伝説のポケモンが現れれば仮面の男はそちらへ向かうはず。そうなれば仮面の男の正体は割れる』

エンジュに現れ、会場に姿を見せなかったものがいれば、そいつが仮面の男。

成程。対抗戦というのは建前で、本当の狙いは仮面の男の正体を暴くことが狙い、というわけか。

「ですが仮面の男が伝説のポケモンの捕獲を今回ではなく、次の機会に定める可能性もありますか？」

「いや、それはないと思います」

「クリスタル？」

「なぜそう言い切れる？」

俺の疑問をキツパリ否定したのはクリスタルだった。

彼女も何か知っているというのだろうか。先を促すと、クリスタルはここまでの旅で見たことを話し始めた。

「実は以前、ホウオウが降り立つというスズの塔を見たことがあります。」

その時ハウオウの像が光り輝いていました。専門家が言うには、主  
が戻る時が近いことを示している」と

『……そういうことじゃ。伝説のポケモンがいつ現れるかなどわから  
ん。

だが機会が限られている中、やつが諦めるとは到底思えんのだ』  
「そういうことでしたか」

『ポケモンリーグはセレモニーなども含め、ジムリーダーの行動を数  
日間縛り続けることができる。』

その数日がやつにとつては致命的じゃ。必ずやハウオウを狙って  
動き出す!』

「そこを狙い目ってわけだな! 任せな!」

数日間で勝負は決まる。

ようやく全ての話がつながり、ゴールドは笑みを深くしてオーキド  
に告げる。

どこまでも明るいその姿が今は羨ましく見えた。

正直、俺はどうしても笑おうとは思えなかつたし、できるとは思わ  
ない。

「ですが、二手に分かれるといつてもどうするんですか?」

「そうですね。四人いるから二人ずつ二チームに別れるのがベストで  
すけど……」

「なら俺とシユンさん。そこでクリスタルと麦わら君だな」

「……麦わら君って僕のことですか?」

俺を除いた凶鑑所有者が今後の方針を話しはじめた。

——エンジュ、そしてセキエイ高原。

まちがいなく仮面の男が現れるのはエンジュシティ。戦いに関し  
ても同じだ。

セキエイ高原にもやつが来るかもしれないが、目的達成を強行する  
ならばそもそも現れない可能性とてある。

……ならば選択肢は一つか。

「いや、エンジュシティは一人がいい」

「え?」

「俺がエンジュに向かう。三人はセキエイ高原へ向かってくれ」  
議論に割って入った俺の提案。

突然の意見に三人は硬直するが、我に帰るとすぐに反対してきた。  
「何を言っているんですか！ 一人だなんて危険です！」

「ポケモンリーグを開くとなれば、相応の人が動く。その中で監視、いざという時やつを取り押さえるのはあまりにも厳しい。」

となるとそちらに人数を割くべきだ。むしろ二人じゃ足りなすぎる」

「し、しかし……」

理解はできても簡単に頷く事ができないのだろう。

クリスタルは歯を食いしばりながら、何も言えずに顔を俯ける。

本当、よくもこんな嘘をいえたものだと自分を褒め称えたい。

最初からそんな大層な考えなんてない。ただ単に俺が一人で仮面の男と戦いたいというだけなのに。

「それと、実はわしも当日は会場に向かおうと思つとる。わが町の代表、ツクシ君も出る事になつとるのでな」

「……決まりだな。ガンテツさんも秘伝の書を持っている以上、狙われる可能性がある。」

となると、エンジュ1、セキエイ3のうち一人がガンテツさんの護衛、これで問題ないだろう」

ガンテツさんの言葉を追い打ちとして、結論を出した。

ここまで判断材料があれば反対する理由は無いだろう。

「じゃあ、俺がエンジュに行くつすよ！ 別にシユンさんが行く必要ないじゃないつすか！」

「この中では俺が一番戦闘に向いていると自負してる。」

イエローさんは戦闘向きの性格ではないようだし、クリスタルはどちらかというと捕獲の方が得意。

さて。ここまで幾つかのジムリーダーと渡り合ってきた俺とお前、どっちが適任だ？」

正論を武器に、ゴールドの善意を押し切った。

もはや言い負かせないと判断したのだろう。ゴールドは俺から顔

を背け、小さく舌打ちした。

……久しぶりの再会を果たしたというのに、残念だ。

「では、俺がエンジユに向かうということでもいいですね、オーキド博士？」

『……うむ。たしかに適任じゃろう。しかし』

「ならば急いで向かいましょうか？ それこそ仮面の男がすぐにホウオウ捕獲に動くかもしれません」

オーキド博士の言葉を遮り、問いかける。

言葉の通り、仮面の男が祭典を放り投げる可能性もゼロではない。ならばすぐに動くべきという考えは間違っていないはずだ。

『いや、明日の朝にしとくれ。現段階で全ジムリーダーは招集を受け、セキエイへと向かっているという報告があつた。』

今は高速の運行手段であるリニアが停止している為にすぐに到着はできない。やつも今簡単には動けんはずじゃ」

「そういうことならば。わかりました」

これ以上食い下がるのはいささか強引過ぎると判断し、渋々と引き下がった。

「では明日の明朝、俺はエンジユに向かいます。イエローのおじさんと連絡を取って、旅の準備をしてくるので、後のことはお願いします」

「なつ！ ちょっと、シユンさん！」

ゴールドの制止の声を振り切って俺はその場を後にした。

やることが決まった以上、じつとしてなどいられなかった。

足取りがどんどん早まっていく事がわかる。

「サツキさんは、もういない。だが、仇は必ず現れる……」

俺はどんな表情で今の言葉を口にしたのだろうか。

わからない。

もう、俺は、自分のことさえ、わからない。

『——以上じゃ。イエローはガンテツの護衛を、ゴールドとクリス君、』

二人はセキエイ高原でジムリーダー達の動きを見張ってくれ』

「わかりました！」

「ああ！俺に任せな！」

「全力を尽くします」

三者三様の反応を見せ、オーキドの期待に添おうと笑みを作る。

話し合いの結果、無茶をしかねないゴールドを抑えるべく、彼に制御役としてクリスタルをつけ、イエローがガントツと行動を共にすることとなった。

厳しいクリスタルでも制御ができるか些か不安は残るがベストな選択といってよいだろう。

『では、くれぐれも無茶はせんようにな。シユン君にも伝えておいてくれ』

そういつて通信は打ち切りとなった。

ようやく全ての話し合いが終わって各々手を伸ばしたりポケモン達の様子を見たりと緊張をほぐしている。

「わしは一度ヒワダに戻る。ではイエロー、セキエイで合流しよう。よろしく頼む」

「あ、わかりました」

用件があるのか、ガントツは一足先に帰路についた。

イエローも見送るべく部屋を出る。

居間にはゴールドとクリスタル、そして育て屋夫婦二人が残された。

「さて、どうすつかな。おいクリスタル。ちよつと俺も出てくつから後頼むぜ」

「え？ いいけど、どこに？」

「……シユンさんの様子、見てくんだよ」

寂しげな表情を浮べるゴールド。

よく知る仲である為、余計に不安に思ったのだろう。

こうしてはいられないと椅子から立ち上がった。

「待たんかいゴールド！」

「あー！ ってーな、なにすんだよ!?!」

だが立ち上がろうとしたところ、育て屋おばあさんに杖で叩かれた。

「お主、何の為にオーキドがここを指定したと思っておる？」

「……は？」

文句を言おうとして、おばあさんに諭された。

確かにガンテツは重要な情報を話したものの、育てや夫婦は特に事件に関する情報を知っているわけではない。

ならば何故オーキド博士はこの場所を指定したのか。

考えても答えは浮かんでこなかった。

「実は、お主に渡すようオーキドに頼まれておったものがあるんじゃない」

「もつとも受け取ったのはもつと前のことだがね。これじゃよ。後で読んでおけとのことじゃ」

そう言って二人は一通の手紙をゴールドに差し出した。

その頃、太陽も沈みかけて暗くなり始めた頃。

34番道路の草むらの一角では夜にも関わらず激しい戦闘が繰り広げられていた。

「うおおおおおお!!!」

獣の叫びかと疑うほどの激しい咆哮。声の主である俺が思うのだから、誰もが思うことだろう。

三匹のポケモン達と共に並行して駆けながら、次々と指示を飛ばした。

「サナギラス、ずつきッ！ピカチュウ、10まんボルトッ！バクフーン——かえんぐるまッ！」

“とっしん”してくるラッタの勢いをサナギラスが自慢の硬さで返り討ち。

空を自在に飛びまわり接近するゴルバットをピカチュウが電撃で蹴散らす。

ユンゲラーが遠距離から念を飛ばすと、バクフーンが自らの体に炎を纏って突撃し、撃退した。

「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ！——くそっ！くそっ！」

一通りの野生ポケモンを撃退し、苛立ちを隠す事無く言葉を荒げた。

手持ちポケモンのレベル上げというのはもはや建前だ。鬱憤をはらすべく戦い続けるも心に渦巻く闇が掻き消えることはない。

ただ目的もなく戦い続け、疲れて膝に手を置くのだった。

「……本当に、駄目だな。何をやってんだよ」

今感じているのはサツキさんという守りたかった人を守れなかった自責の念。そして敵を倒そうと思っても本当に倒せるのかという不安、か。

負の連鎖を断ち切ることができず、結局気分が晴れないままだ。俺はポケモン達を連れてホテルへと戻った。

「シユンさんー！」

「……ゴールドか？」

そしてその道中で、ゴールドに呼び止められた。

疲れを理由に無視する事もできただろうけど、ようやく再会できたこいつを前に無視はできなかつた。

俺は声に応じて振り返り、ゴールドへと視線を移した。

その瞬間、ゴールドの表情が強張ったのを見逃さなかつた。

果たして俺はどんな顔をしているんだろうな。

俺にはもう、何もわからない……

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ・5個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ、ファントムバッジ、スチールバッジ）



手持ちポケモン

バクフーン♂ Lv48

ピカチュウ♂ Lv50

エーフィ♀ Lv49

ラプラス♀ Lv52

サンドパン♂ Lv46

サナギラス♂ Lv52

ボツクスメンバー

ヘラクロス♂ Lv53

ピジヨット♀ Lv49

ハッサム♂ Lv48

レポートに書き込みました!!

### 第三十二話 VS デリバードⅢ 味方なき戦い

ゴールドに呼び止められて足は止めたものの、こちらから深く聞き入ることはしなかった。用がないのなら先に行く態度で示し、次の言葉を待つ。

「本気、なんすよね？」

「……何がだ？」

「仮面の男との戦いつすよ。下手すれば一人であのやろうと戦うことになる。」

エンジュとセキエイ高原はかなり距離があるし、俺達だっていざという時すぐには合流できない。本気で一人でエンジュに向かうつもりつすか？」

何かと思えば、先ほど話した今後の方針について、か。

たしかにゴールドの言うとおりもしエンジュに敵が現れたならば俺一人に負担が集中する。エンジュのジムリーダーも不在である以上、他の戦力も当てにすることができない。

それにロケット団員の存在も気になる。

果たして部下まで引き連れてこられたらどのように対応するかまでは俺も計算できていない。

「——本気だよ。さっきも話したがセキエイの方が要求される戦力が多いんだ。だったら俺が行くしかないだろう」

しかし状況からそうも言っていない。自分の意見を貫き通すために言った事だが、現状を正しく把握した上でのものだった。

こちらの戦力は限られている。シルバーは俺が気を失っている間にどこかに消えてしまったし、他の動ける凶鑑所有者とも連絡はつかない。

信用できる戦力はわずか四人だけなんだ。ならばやはりこれがベストの選択。

「もう話は終わりか？　なら俺はもう戻るぞ。お前も明日は早いからゆっくり休め」

上手い言葉が見つからないのか黙り込んでしまったゴールドの顔

を見て、俺は再びホテルへと歩を進めた。

「……そんなだけ大切な人だったんすか？ そのサツキって人は？」

足が止まる。

表情が固まる。

呼吸を忘れる。

一瞬、俺の中で時が止まるような感覚を覚えた。

「俺はどんな人なのかもしれないし、シユンさんとどんな付き合いだったのかも知らないっすよ？ でも、あんたがそんなに大切に思う人なんだ。だったら、シユンさんはその人の為にも——」

「それ以上は、言わないでくれ」

もうそこから先は聴きたくなかった。静かな口調でゴールドの言葉を遮る。

「そういう問題じゃないんだ。俺はもう戦うと決めた。

大体——サツキさんのことを知らないお前が、彼女の事を口にするな」

わかってる。ゴールドには悪意なんてないことくらい。

でも、俺には心を害する批判にしか聞こえない。

まだ呼び止めようとするゴールドを振り切って、俺はホテルへと向かった。

その夜、クリスとイエローはそれぞれの宿泊先で横になり、ゴールドはコガネシティ郊外で野宿をしていた。だが三人とも決戦への緊張を感じてか中々寝付く事ができず、明け方まで眠りにつくことはかなわなかった。

「……これでよし」

一方、シユンは机と向き合って一通の手紙をしたためていた。

書き終えた「にがおえメール」に封をするとリュックの中へとしまふ。

「ピカチュウ。もしも俺の言うとおりだったならば、これをあの人に

渡してくれ。そして——もしも俺になにかあったならば、皆と母さんのとと、頼む」

ただ一匹だけボールから出ていたピカチュウにそう告げてシユンは部屋の明かりを消し、眠りについた。

ピカチュウも了解を示したのか小さな鳴き声を出し、ベッドの中にもぐりこんだ。

そして夜は明けて次の日。

「それじゃ俺は先にエンジュに向かう。三人共、セキエイ高原の方は任せる」

朝食を済ませたシユンはすぐに身支度を終え、出発しようとしていた。

これから重大な任務に向かうというのに気負った姿は見受けられず、いつもと変わらぬ様子であった。

逆にその姿がゴールドには不安に映ったものの、昨夜の会話を思い出してしまい、口を挟む事ができない。

「そちらも、どうか気をつけて！」

「僕たちも頑張りますから！」

「シユンさん。——またワカバタウンで会いましょう」

「……ああ。仮面の男を倒した後でな」

結局彼を送り出す言葉しか見つからず、シユンは一足先にエンジュシティへと向かった。

しばらく三人は見送り続けたがシユンが振り返ることは一度もなく、姿が見えなくなったころ、三人もホテルへと戻った。

「それじゃあ、私達も準備にとりかかりましょう」

「早くしろよ。女はこういうところで時間をかけやがんだから」

「なっ……！！ 人の気持ちも知らないで。女の子には色々とやることがあるのよ！」

「あ、あはははは。僕は育て屋にピカとチュチュを預けてあるので、まずはそちらに行つてきます」

仲がいいのか悪いのか。ゴールドとクリスタルが口げんかを始めるとイエローは巻き込まれないようにと育て屋へと駆け出した。

危うくゴールドの会話に口を挟んでしまいそうだったと焦りを覚えたが、何とか抑えることができた。

こちらも早く出発の支度を整えようと歩を速める。

「ごめんくださいーい！ イエローですけど、ピカとチュチュはいますか？」

「おお！ 君か！ ちょうど呼ぼうと思っておったんじゃ！」

「ど、どうしましたか？」

「よいか？ 心して聞くんじゃぞ」

「は、はい……？」

家の中に入るや否や、育て屋夫婦に詰め寄られ困惑するイエロー。

一夜の間に一体何があったのだろうと不安になるが、二人の表情は決して悪いものではなかった。

「実は預かっていたピカチュウ達なんじゃが……なんと！ 卵を持っておったんじゃ！」

「……た、卵？」

「どこから持ってきたのかはわからないけどね。ほら」

指差す方向にいるのはピカとチュチュ。チュチュは恥ずかしそうに頬を染め、ピカは嬉しそうに大きな卵を抱きかかえている。

「え、えー……?!」

突然の出来事に理解が追いつかず、イエローは悲鳴を上げた。

ピカとチュチュが持っていたポケモンの卵。

この中に宿る新たな命、生まれる時は近い――。

コガネシティでゴールド達とわかれて数日が経過した。

手持ちポケモンを交代しながら鍛錬を続け、エンジュシティで常に神経を研ぎ澄ましていた。

今日はポケモンリーグの開会式が行われる。ゴールド達も無事に会場入りすることができたと連絡が入った。

初日から何か動きがあるとは思えないが、油断はできない。

いざという時、すぐに動けるようにとポケモン達をボールから出し、警戒を続けた。

「——ッ！」

「どうした？ エーファイ」

突如横になっていたエーファイが立ち上がり、耳と尻尾を真っ直ぐ上空へと伸ばした。

何かを感じ取ったのだろう。全身の毛も奮い立ち、臨戦態勢に入っている。

「……まさか」

俺の指示もないというのにエーファイが戦う素振りを見せるということは、何かを感じ取ったということ。

想像されたのは最悪の事態。

それを肯定するようにエーファイは首を縦にふり、駆け出した。俺達もすぐにエーファイの後を追う。

——どうやら平穏な時間はこれで終わりのようだ。

同時刻、エンジュシテイ近くの上空を高速で駆け抜ける人影があった。

デリバードに掴まり空を飛ぶ巨体の顔には歪な仮面を身につけており、体には大きなマントを羽織っているため正体はつかめない。

仮面の男は機会質な声で心底愉快そうに笑っていた。

「……ああ。やつと、やつとこの時が来た。我が願いが叶う時が！」  
声を変えていながらも高揚した様子は感じ取れる。

長年待ちわびた喜びを堪えきれないのだろう。

早く、速くと。一心不乱にエンジュシテイへ向かっていく。

「今日という日を逃すわけにはいかん。今こそ、ホウオウを我が手中に収める！」

主の叫びに応えてデリバードはさらに加速した。

その早さは並のポケモンでは捉えることさえできず、空飛ぶ野生ポ

ケモン達を置き去りにしていく。

あつという間に仮面の男はエンジュシテイへとたどり着き、彼の視界にすずの塔が映り出された。

「クッククックー さあ行くぞデリバード！ ……むっ!?」

すずの塔をなぞるように上空へと昇っていくデリバード。

だがその瞬間、真横から大きな影が自分へと迫ってくることに気がついた。

「――ッメガホーンッ！」

「グウアッ!?」

それがポケモンだと気づいた時には、すでにヘラクロスの角が彼らを襲っていた。

突然真横から大きな衝撃を受け、デリバードは受けきることが出来ずに北の森の中へと落ちていった。

「チッ。また邪魔が入ったというのか。 ……デリバード！ 早く立て直せ！」

苛立ちを木にぶつけながら、仮面の男はデリバードへ指示を出す。首を大きく振るい、トレーナーに無事を示すと再び主を連れて飛びあがろうとした。

だが何かに気づき、デリバードは袋の中から一つの箱を取り出すと前方へと放り投げる。その「プレゼント」は高速で迫る何かに衝突、爆発した。

煙が完全に晴れぬなか、黒煙の中から先ほどと同じ影が彼らに迫った。

「貴様は！」

「ヘラクロス！ ……みだれづきッ！」

「…ずつき」で迎え撃て！」

その正体はシュン、そして彼の手持ちポケモンであるヘラクロスだった。

ヘラクロスは自慢の角を突き出し、デリバードは額で迎え撃つ。

二度、三度と二匹がぶつかり合うが、もう一度彼らが交錯しようとした時、ヘラクロスがデリバードの懐にもぐりこみ、急所に角を突き

出した。

「ギイツ!!」

「ちっ、距離を取れ!」

肺から空気が零れ苦しそうに顔を歪めるデリバード。

不利を感じ取った仮面の男は一次後退させ、体勢を立て直した。

その間にシュンは地上に降り立つとポケギアを使ってセキエイ高原にいるゴールドへと通信を繋げた。

「……ゴールドか。手短に話す、こちらに仮面の男が現れた! 今会場にいないものが仮面の男だ! すぐにポケモン協会とオーキド博士に連絡を!」

相手が電話に出るや否や、すぐに現状を伝え指示を飛ばす。それだけ今は時間が惜しかった。

『……ちよっ、ちよっと待ってください! 今会場にいないって言われても』

「どうした!?!」

『今、ジムリーダー全員がバトルフィールドに出てきたばかりつすよ! 16人、誰もセキエイ高原から出てないっす!』

「……なんだと!?!」

だが、ゴールドの報告はシュンから冷静さを奪った。

今セキエイ高原ではジムリーダーの紹介ということで16人全員がメイン会場に集結していた。

もしもエンジュシテイに仮面の男が現れるならば、必ずやセキエイ高原から誰かが姿を消すはず。その考えは早くも崩れ去った。

「デリバード! オーロラビーム!」

「うあっ!」

意識が戦いからそれた瞬間を仮面の男が見逃さず、デリバードの冷気を纏った攻撃がヘラク羅斯を直撃した。

威力が大きく、その一撃で吹き飛ばされるシュン達。

地を蹴ってさらに後退すると、仮面の男を見据えながら話を続けた。

「……どうやら、こちらにるのは姿だけの偽者のようだ。ゴールド、



とにかくお前達は監視を続けろ！ また連絡する！」

『なつ、シユンさん！』

まだ何か言いたげな様子ではあったがそれどころではない。耳を傾けるほどの余裕などない。

たどえ偽者だとしてもポケモンの強さは本物と変わらない。

今まで一度も勝てたことが無い相手に、注意をそらしながら戦い続けることは自殺行為に等しいのだから。

「……自らが出向く事無く、偽者に伝説のポケモンの捕獲を命じるとは、随分と自信があるようだな」

「フツ。本物と戦う事ができなくて不満か？」

「まさか。その仮面を被った時点で、お前は倒すべき敵だ！」

嘲笑うような口調に怒りを覚え、シユンは視線を鋭くして仮面の男をにらみつける。

本物か、偽者か。そのような違いは些細なもの。

大事な事は今日の前にいるものが彼から大切なものを奪った敵と姿が同じかどうか。それに加担しているかどうかだけ。

「その仮面を剥ぎ取って、本物について洗い浚い喋ってもらう。——行くぞ！」

今再び、シユンは仮面の男と対峙する。

これがウバメの森、そしてうずまき島に続いて三回目の戦い。

かつて二度も敗れた強敵。しかも今回は頼れる援軍は、味方の姿は無い。

負ければ命は保障できない。

だがそれでも——シユンは迷いを全て捨て去り、ポケモン達へと指しを飛ばした。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ・5個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レ  
ギユラーバッジ、フアントムバッジ、スチールバッジ）

手持ちポケモン

バクフーン♂ Lv49

ピカチュウ♂ Lv52

エーフィ♀ Lv53

ラプラス♀ Lv55

ヘラクロス♂ Lv54

ハッサム♂ Lv49

ボックスメンバー

サナギラス♂ Lv54

ピジヨット♀ Lv50

サンドパン♂ Lv47

レポートに書き込みました!!

### 第三十三話 VS バクフーン エンジユの攻防

「どうなっただよちくしょうー！」

通話が切れたポケギアを握り締め、拳を手すりに殴りつける。

現場で戦っているシユンだけではない。ゴールドも突如の知らせに困惑していた。

セキエイでは全ジムリーダーが何も知らない素振りで見集まっておりこれといった異変は見当たらない。

そんな時に来たシユンからの連絡。

何か確認作業かと思えばエンジユに仮面の男が現れたという凶報だった。

『仮面の男の正体はジムリーダーの誰か』という凶鑑所有者達に共通してあった意識の不意をつかれ、理解がまったく追いついていなかった。

「……クソッ！」

「ちよつと、どこへ行くのよゴールド！」

「決まっただらう！ こうなったらここでグズグズしてられねえ。俺もエンジユに向かう！」

観客席から立ち上がり、苛立ちを含んだ怒声を上げるゴールド。

こうしている今も仲間が危機に陥っているのかもしれない。

ただでさえ移動には時間がかかるのだから向かうならば急がなければならぬ。

不測の事態に対する焦りがゴールドから冷静に思考する余裕を奪っていた。

「ちよつと、待ちなさいー！」

「グゲツ!？」

足早に会場を去ろうとするゴールドを、クリスタルは彼のフードを掴み、引き寄せた。

その為いきなり首を絞められる形となりゴールドは当然不満げに声を荒げる。

「つてーな。いきなり何すんだよクリス！」

「いい？ あなたの気持ちはわかるけど落ち着いて聞いて」

「あーん？」

制御役を任されたクリスタルは流石というべきか、危急の事態にも関わらず冷静さを失っていないかった。

挑発的な態度を取るゴールドを諭すように現状と今後の考えを彼に示していく。

「今エンジュシティにいるのは偽者。そして本物はやはりこのセキエイ高原にいる16人の誰か。本物がエンジュにいなかったのは、おそらくは何かしらの理由でまだジムリーダーと言う立場を失うわけにはいかなかったから。他の15人のジムリーダーを敵に回すわけにはいかないからよ」

「……だから何だっつてんだ？」

「だとしたらなおさら私達がここで本物が誰なのか監視して見極めなければならぬわ。むしろ本物がエンジュの偽者と合流する方が厄介なもの。そんなことになれば敵の目的は完全に果たされてしまう。少なくとも本物の手にホウオウが渡らなければ、敵も思うようには動けない」

彼らにとって最も大切な事は仮面の男の正体を暴く事。そしてホウオウを仮面の男に渡さないことにある。

現状、16人いるジムリーダーのうち、誰がロケット団の首領であるかは明らかにになっていない。しかしこの大舞台に立っている今は行動が制限される。

偽者がエンジュに来たとはいえシユンがいる以上はそう簡単には伝説のポケモンを捕まえることはできないはず。

ならば今自分達がすべきことは本来の手はずどおり、シユンの指示通り役目を果たす事。

そうクリスタルは断言し、ゴールドの勢いを無理やり沈ませる。「チッ！ わかったよ、大人しくここで見てればいいんだろ？」

ここまで説得を受けて反論する術を持っていない。

ゴールドは不満そうに口を尖らせながらも席に戻り、対抗戦の準備を進めるジムリーダー達へと視線を落とした。

「シユンさんだつて偽者なんかになんかそう簡単にやられるはずがねえ。俺が、本物をとつつかまえて、この事件を終わらせてやる!」

「……ええ、そうね」

彼もまた敗戦の怒りが募っているのだろう。すぐにでもやり返してやるという気迫が強く感じられた。

負けず嫌いな性格だなとクリスタルはクスツと笑みを浮かべる。

そしてゴールドに気づかれる前に彼女もジムリーダー達へと意識を向けた。

ジョウトとカントー、各町を代表する16人のジムリーダー。

この中にいる諸悪の根源を見つけるために。

少しでも離れた地で戦っている仲間の負担を減らすために。

——いける。

相手は偽者。本物ほどのキレはない。

ヘラクロスとデリバード。思えば仮面の男と初めて戦った時に入れた因縁ある組み合わせ。

二匹の戦いは殆ど互角。ヘラクロスは一步も譲らぬ姿勢でデリバードと渡り合つてくれている。

おそらくこのデリバードは今まで俺達が戦っていたポケモンと同じ個体のはずだ。

その相手に善戦しているという事実はヘラクロスを大きく勇気付けていることだろう。

「チイツー! ここでも私の邪魔をするか! デリバード! やつあたり!」

「受け止めろ!」

怒りの表情を浮かべて攻撃してくるデリバードの攻撃を受けきり、さらにヘラクロスは攻撃が止んだ瞬間、デリバードの右腕を掴み取った。

「なにっ!」

「逃がすな！　〃かわらわり〃！」

本来のトレーナーではないからだろう。凄まじい威力であったがヘラクロスは受けきり、がら空きとなったデリバードの頭に勢いよく右腕を振り下ろした。

頭に衝撃を受けた事により、デリバードの体はよろけて隙だらけとなった。

「まだまだ！　〃メガホーン〃で吹き飛ばせ！」

待ちわびた攻勢に出る時。未だにふらついているデリバードの胸元にヘラクロスは突撃する。

混乱しているデリバードには防ぐ術がなく、後方の木へと叩きつけられた。

「デリバード！」

「行け、ヘラクロス！」

これでヤツへの障害はなくなった。

攻撃の勢いそのままに、仮面の男に向かって一直線に飛んでいくヘラクロス。

ヤツとて生身の体で攻撃を受ければただではすまないはずだ。

一発入れて気絶させてから仮面を破壊させてもらう！

「……ふんっ！　小癩な！　調子に乗るな！」

だがヘラクロスの角が仮面の男を襲う寸前、右腕を大きく薙ぎ払い、ヘラクロスを弾き返した。

「なにっ!？」

「グロオッ!!」

「ヘラクロス！　——戻れ！」

ガキツと鈍い音を立てたあと、空中へ投げ出されたヘラクロス。

ダメージが大きいのか体勢を立て直す事ができていなかった。すかさずボールに戻し、仮面の男をにらみつけた。

（何だ、今のは？　なにか固いものが接触するような音が聞こえたが。

……まさか、機械の体ということか？）

とても普通の人体とは思えない音。ヘラクロスを振り返りにしたことからも異常であることは感じ取れる。

もしも本当に機械だとすれば、仮面の男の身代わりということではなく、仮面の男が何かしらの方法で動かしているということか？

だが、だとしたら――

「ピカチュウ、〃10万ボルト〃！」

機械の体であるならば強力な電撃を浴びせれば動きに支障が出るだろう。

ピカチュウを繰り出し、すかさず電撃が仮面の男へ放たれる。

「そんな攻撃が、効くものか！」

仮面の男は右腕を伸ばし、ピカチュウの電撃を掴み取るように打ち消した。

「……ピカチュウの電撃が！」

完全に無効化されていた。

電撃をもっともしないということは機械ではないのか？

だが機械でないとしても、普通の人間とは思えない。機械とは別の何か？ とてもではないが思いつかない。

……一度、やつのマントの下を明白にしなければならぬ、か。

「――〃でんじは〃を打ち込め！」

ピカチュウの尻尾から強力な電気エネルギーが収束された球が打ち出される。

威力は期待できないが、当たれば確実に相手の動きを麻痺させることができる強力な技だ。

「無駄だ！ このような小細工は通じん！」

「なっ――常識が通用しないやつ」

しかし仮面の男は球を空手チョップの要領で攻撃を一刀両断する。

〃でんじは〃を真っ向から受け止めても麻痺は見受けられない。少なくとも麻痺による痺れを期待する事は難しいだろう。

やつを黙らせるにはダメージを蓄積させるしかない、ということだ。

「どうした？ その程度の攻撃では私はビクともせんぞ？」

「……ピカチュウ、アイアンテール！」

「むうっ!？」

鋼鉄を彷彿させる固さの尻尾を回転させながらぶつけていく。

避けるのは不可能と判断したのか仮面の男は顔の前で両腕を掲げ、攻撃を受け止めた。

これでもまだ仮面の男の防御を超えることはできない。

だが衝突の瞬間、敵の両腕から何か小さなものが零れ落ちていくのが見えた。

(なんだあれ？ 小さな粒のような、破片か?)

おそらくアイアンテールを受けた衝撃で崩れたのだろう。

目を凝らさなければ見落としてしまいそうなほどの小さなもの。確かにやつ腕から零れ落ちたはずだ。

となるとやはり何か特殊な材料でやつ体は出来ている。そして決して破壊できないものではない。

「ならば、畳み掛けるぞピカチュウ！ 〃10万——〃」

さらなる指示を出そうとした瞬間、横からの光線がピカチュウを襲撃した。

体重が軽いピカチュウはあっさりと吹き飛ばされ、その先の木に衝突する。

「なっ！ ……戻れ！」

「残念だったな。あの程度のダメージ、デリバードなら少し時間が経てばすぐに回復する」

「ヘラクロスの攻撃をまともに受けたというのに、よく育てられたものだな。——バクフーン！」

攻撃の主は先ほど倒したと思っていたデリバードだった。オーロラビームでピカチュウを退けると主を守るように前に立つ。

俺はピカチュウをボールに戻し、バクフーンを新たに繰り出した。

近接戦闘ではやつに分があるということとは先の戦いでわかってい

る。ならばここはタイプ相性の有利を活かし、遠距離からデリバードを攻める！

「〃かえんほうしゃ〃！」

「〃ふうふうき〃！」



バクフーンが放つ激しい炎とデリバードが繰り出す強烈な冷氣。空气中でぶつかり合い、お互いの威力を相殺する。

タイプ相性ではこちらが有利のはずなのだが押し切ることはできない。やはり並大抵の威力ではなかった。

広大ないかりの湖さえ凍らせたほどの威力。遠近両方でこちらの攻撃を圧倒する、か。

「今度はこちらの番だ！ プレゼント！」

「まるくなる！」

今度は袋の中から大量のプレゼント箱を取り出し、こちらへと投げつけてきた。

爆発する作用を持つことはわかっているが多すぎる為にかわしきれない。

防御の指令をするとバクフーンは体を丸めて防御の体制をとり、爆発を受けきっている。

「ふん。そのような防御、すぐにこじ開けてやる！」

「違うな。ただ守っているだけじゃない」

「む？ なんだと？」

「バクフーン、ころがる！」

急所を隠した防御の体制から一転、バクフーンは丸まったからだを動かし、高速で転がり始めた。

縦横無尽に転がり続け、敵を翻弄。その速さ、威力は転がれば転がるほど増していく。

「くっ。くそっ！」

「今だ！ 行け！」

バクフーンの動きを目で捉えきれなくなり、動揺が現れた瞬間を察して？ 声を上げた。

高速で回転する塊となったバクフーンがデリバードに襲い掛かる。

威力が増し、弱点をもついた一撃は強烈なものだった。デリバードは受け止めることができず、勢いは止まる事無くデリバードを木まで押し付けた。

「ギャアア！」

「デリバード！　　“ふぶき”だ！」

押し潰されそうな圧力に苦しみ、悲鳴を上げるデリバード。

それでもなお、トレーナーの指示に従ってデリバードが無理やり口から強力な“ふぶき”を放った。

やはり強力な一撃を誇る冷気。あつという間にバクフーンの体は凍りつき、身動きが取れなくなってしまった。

「フツ」

「“かえんぐるま”！」

「なっ——!?!」

だがバクフーンはとまらない。凍っていてもこいつの炎は消えたりはしない。

自らの体に炎を纏い、瞬く間に身を封じていた氷を溶かすと再びデリバードを攻撃した。

「まさか、デリバード！」

炎を纏った突撃。

今度こそデリバードは倒れ、力なく地面に横たわった。

だが同時に技を放ったバクフーンも余力がなくなり、肩膝をついてしまう。

「戻れ、バクフーン。よくやった！」

ここまで働いてくれれば十分すぎるものだった。

疲労のたまったバクフーンをボールに戻し、一言声をかけて腰のベルトへ戻す。

「き、貴様！」

「今度こそデリバードは倒した。後はお前だ！」

続いてエーフィを繰り出し、相手が動く前に先手を打つ。

「“サイコキネシス”！」

強力な念の力で仮面の男を縛りつけ、そして地面に叩きつける。

身動きが取れなくなったのを見計らってエーフィとハツサムを交代し、追い打ちをかけた。

「右腕に“メタルクロウ”を叩き込め！」

既にやつの腕が異常なものであるということは確認済みだ。

容赦ない鋼鉄の腕が仮面の男目掛けて振り下ろされる。

敵は苦れる術もなくハッサムの攻撃を受け——やつの右腕であった、何かの塊が宙を舞った。

「これは……!?!」

目に映ったのは右腕の形をした青白い透明な物質。

ゴトツと音を立てて地面に落ちたそれはわずかに水のような液体が垂れているのが見受けられた。

「氷の、体か?」

確認できたのは氷だった。本物のような形で、動いていたもの。

だからポケモンの攻撃を受けても平然とし、反撃に転じていたというのか。

「フフツ。そこまで見抜いたか。だが、それだけではないぞ」

「ツッ! ハッサム、退け!」

起き上がった仮面の男の右腕があつた部分に何かが収束していくのが見え、咄嗟にハッサムを後退させた。

みるみると右腕の部分に空気中から物質が吸い込まれていき——そして先ほどと同様、右腕の形となって現れた。

見た目はまったく変わらない氷そのものだった。

「壊したはずの右腕が復活した!?!」

「そうだ。大気中の水分を取り込み、凍らせ、我が体は何度でも復活する! いくら壊したところで無意味だ!」

「ハッサム!」

右腕から強力な冷気が放たれ、ハッサムを襲った。

「ちいっ!」

空中で体を反転させて体勢を立てなおすハッサム。

だがなおも仮面の男は強力な冷気を飛ばして追撃をかけた。

咄嗟の判断でハッサムの腕に掴まると森林の中へとともに飛んでいく。

一度考えを纏めるため、戦況を立て直すために身を隠すと痛みに顔をしかめたハッサムをボールへと戻した。

（四肢を破壊されてもすぐに復活する氷人形。それがやつの正体か。

本当だとすればこちらがいくらダメージを与えても無駄ということになる。空気中に存在する氷がすべてやつの味方になってしまう。だがああいいうタイプの相手は復活の中心となるコアさえ壊してしまえば復活できなくなるはずだ。致命傷を与えるだけの攻撃をぶつけることさえできれば……)

難しい話ではあるが、理屈で言えば相手を制圧することはできるはず。

だが今のこちらの状況を考えるとこの方法は余計に難易度が高いものであった。

(問題はその一撃を与えるだけのこちらの戦力か。俺の元に残っている、まだ戦えるメンバーはラプラス、エーフィ、ギリギリでピカチュウか。氷に有効なバクフーンはダメージが蓄積しすぎて戦うのは困難だし、ハッサムとヘラクロスも弱ってる。くそっ！)

先ほどまでの戦いでこちらの手持ちポケモンはすでに疲弊し切っている。

残りの戦力を考慮すると相手を一撃で倒せるほどのポケモンはいない。

この状況を覆す方法が一つだけあるが……

「いや、駄目だ」

まだ早すぎる。俺の力をここで使ってしまったてはいけない。

今俺が対峙しているのは偽者だ。ならば本物と戦う時の為に力は温存しなければならぬ。

そうでなければ、下手すればやつと戦う前に俺の方が倒れてしまう。

それでは意味が無い。本物を倒すまでは俺が力尽きるわけにはいかない。こんな偽者を相手に命を使い切るわけにはいかない。

「……覚悟を決めるしか、ないか」

だから今ある戦力だけで氷人形をしとめる。

正直な話、思いついた考えの中でも勝てる可能性は低い。それを実行に移せるかという話になれば尚更だ。

だが——やろう。

徐々に近づいてくる敵の足音が、俺の決断を後押しした。

### 第三十四話 VS スターミーⅡ 闇に堕ちた聖女

シユンは森林の中へと身を隠すと中々姿を現さなかった。

逃げた、というわけではないのだろう。元々彼の目的はこのエンジユで仮面の男のホウオウ捕獲を阻止するためだ。それなのにその役割を放棄して逃亡するとは思えない。

おそらくは今も何か反撃の機会を狙って機会を窺っているはず。ひよつとしたら考えがあつて身を隠している可能性もあつた。

「どうした？ かくれんぼのつもりか？」

仮面の男が気配の感じられない空間へと呼びかけた。

当然のことだから返答はない。挑発に値しないような言葉遊びに過ぎないのだが、何の反応もないというのは仮面の男の気分を害した。

ホウオウの捕獲の為にこのような所で時間を費やす余裕はない。この場で目的を果たしたらセキエイ高原に転進する予定なのだ。他の者に動きを気づかれれば計画が破綻するかもしれない。

「そちらから出てこないなら、炙り出すまでだぞ？」

全身から冷気が猛吹雪のように吹き荒れた。

氷で構成された体は自由自在に氷の力を操作する。

忽ち森林は樹氷と化した。

圧倒的な氷の暴力はシユン達にも襲い掛かる。

「ッ。さぶ。エーファイ」

「フィッ！」

冷気に耐えられずシユンはエーファイを繰り出した。

敵に聞こえないようにと小声で名前を呼ぶと、エーファイは主の意を読み取って『しんぴのまもり』を展開した。シユン達の周りを一掃の防御壁が覆う。外気を遮断する壁により、シユン達は冷気からの猛威を防ぎきった。

（ポケモンなしでポケモン並の技を繰り出すとかどんな化け物だよ！）

「……長くはもたないか。やはり、こちらからだな」

しんぴのまもりも展開時間は限られている。長時間姿を隠し続けるのは不可能だ。

だが相手の先手を許すこととなれば、地力で劣るこちらが不利。受け手になってはならない。攻めていこうとシユンはハツサムをボールから繰り出した。

(これだけ空間攻撃を仕掛け、あたり一面を凍らせても出てこない。思ったよりも冷静なようだな。敵討ちだと意気込んでいるのかとも思ったが)

一向に反撃を仕掛けてこないシユンの様子に仮面の男は彼に関する評価を改めた。

かつて仮面の男とシユンが戦ったのは二度。

一度目のウバメの森では仮面の男が圧倒的な戦力差でシユンを下した。

二度目のうずまき島の戦いでは冷静さを失ったか相手の不意を突き、そのまま封じ込めた。

そして三度目。手持ちのデリバードを倒し、冷静に対処しようとする動きはかつての戦いと比べて一回り上のしぶとさを感じられる。負けるとは到底思っていないが、そう簡単に倒す事はできないと考えるくらいには。

(さて、どうするか。この場は放置してホウオウの元へと向かうか。エンジュシテイの方へと移動して襲撃するか。あるいは、あの手を使うか)

膠着状態は望ましくない展開だ。仮面の男は戦局を動かそうと、シユンが打って出ざるを得ない手段を考える。

敵の性格を考えればどの手を打とうとも姿を現すはずだ。

さて、どの方針に移ろうかと思案を始めた仮面の男に。

空中から何かが急速で落下してきた。

「むッ！　そこか！」

空を揺らす音に気づき、氷の腕をなぎ払う。

紅い鋼鉄のボディを身にまとうハッサムだ。かなりの速度で仮面の男目掛けて突き進む。

ハッサムと仮面の男の右腕が衝突し、腕が体をすり抜けた。紅い体はゆっくりと消滅していく。

（消えた!? 影分身か!）

本物の姿ではない。本体の姿をそっくりそのまま写し取った“かげぶんしん”だ。

仮面の男が驚き、四方を探っていると今度は彼の背後から巨体が接近する。

シユンのラプラスだ。“れいとうビーム”で氷の道を作り、その道をすべる様にして茂みから現れた。

「今度はそちらか。ちよこまかと!」

仮面の男はラプラス目掛けて冷気を放つ。

するとラプラスの背に乗ったエーフィが“ひかりのかべ”を張った。

攻撃からラプラスを守りきり、その間にラプラスは仮面の男の周りを描くように氷の道を生成。

仮面の男の動きを制限し、“みずのはどう”で攻撃を加えていく。

（仕留める様な強い攻撃ではない。一定の距離を保ち、あくまでもこちらの動きを封じようとしている。ハッサムと同様、こいつも陽動だ。となると、次の一手は!）

「上か!」

ラプラスの攻撃方法から仮面の男は敵の作戦を読み取った。

上を見上げると、先ほどのハッサムと同様、空中から大きな影が勢いをつけて仮面の男に突き進んでくる。

「さすが気づくのが早い。だが、もう遅い!」

影の正体はヘラクロス。シユンを掴んだヘラクロスが落下の勢いをつけて急速接近していた。

「舐めるな!」

「“ハッ”らえる“!”」



迎撃の氷のつづてはヘラクロスの「こらえる」ですべて封じきつた。

仮面の男の対処はヘラクロスを打ち落とすには至らない。

シユンが勝負をつけるべく、必殺の一撃を命じる。

「メガホーン――！」

今までの攻撃とは比べ物にならない威力がこもった角が仮面の男に襲い掛かる。

手持ちポケモンは戦えない。迎撃は不可能。

対応策が制限されている仮面の男が選んだのは。

「ツ!? なに!?」

シユンの表情が驚愕に染まる。

ヘラクロスの角は仮面の男に届く寸前、敵の目の前に現れた氷の盾によつて完全に受け止められていた。

「氷の盾!」

(何にもないところに。何でも有りかよこのやろう!)

不可能を可能にしてしまう異能の力。シユンが歯を食いしばる。

直後、氷の盾にひびが入り砕け散る。

それによつて生じた空間から、氷の腕が鋭く伸びてきた。

「ぐうっ!」

「かくれんぼは終わりだ」

瀕死の一步前で踏みとどまっていたヘラクロスが吹き飛ばされ、シユンは地面に突き伏せられて首元を仮面の男に押さえつけられる。仮面の男は動きを封じ込めてポケモンをボールから出させないつもりだろう。

ラプラスとエーフィが主の危機を救おうと「みずのはどう」と「サイケこうせん」が放たれたが、相手が悪い。仮面の男は吹雪で一蹴した。ラプラスとエーフィまでもが地面に叩きつけられ、起き上がることが出来ない。

「残念だったな。あと一步のところ、力は届かない。己の無力を呪うがいい」

「偽者の癖に、よく語るじゃねえか」

「その偽者に屈する気分はどうだ？」

「……まだ俺達は屈してねえよ」

「何？」

シユンが不敵に笑う。ピンチに我を忘れたという様子ではない。

だが敵のポケモンは今ので一掃したはずだ。すでにバクフーンは倒し、敵が新たに繰り出したヘラクロス・エーフィ・ラプラスは今迎撃したばかり。

動きを封じて開閉スイッチを押せない状態ではこれ以上ポケモンを繰り出すこともできないはず。

「最初に『かげぶんしん』をしたハッサムはどこにいますか？」

もつとも、それはシユンのベルトのボールにポケモンが入っているならば、だ。

シユンが口にした直後、彼らの上空では二匹のポケモンがいた。

ハッサムとピカチュウ。二匹ともシユンのポケモンだ。

ハッサムは空中で掴んでいた両腕を放す。重力に従い、ピカチュウが仮面の男の肩へと着地した。

「び、ピカチュウ！」

（まだ空中に戦力を残していたのか!）

「このっ」

「遅いって言っただろ。準備は、整った」

仮面の男が振り下ろそうと手を伸ばす前に、シユンが言葉を繋げた。

直後、上空の雲は真っ黒に染まり、ゴロゴロと大きな音を立て始めた。

（これは、まさか!）

それは雷の前兆。操っているのはシユンのピカチュウ。

（散々氷を操ってくれやがって。十倍にして返すぞ）

仮面の男やラプラスが放った氷の粒子によって形成された雲。どンドン静電気が蓄積されていき、巨大なエネルギーが溜まった今。ピカチュウがその莫大なエネルギーを操り、放出する。

「ま、待てー！」

「待たねえよ。人の命を奪うようなやつ、偽者が、命乞いなんてするんじやねえ！」

必死の叫びにしかしシユンは聞く耳を持たず、ピカチュウに命令を下す。

雷が落ちる。目にも止まらぬスピードに氷の盾の形成も間に合わない。雷が仮面の男に直撃した。絶縁体である氷の電気抵抗によって発熱が生じる。水になってもなお発熱がやむ事はない。

爆発が起こった。氷が急激に熱せられた事によって生じた水蒸気爆発だ。周囲を包み込むような爆発に、仮面の男達は飲み込まれていった。

---

エンジュシテイでシユンと仮面の男の戦いが激化。

一つの結末を迎えようとしていた頃。

もう一つの部隊であるセキエイ高原でも大きな動きが起ころうとしていた。

「それでは、少しツクシと話してくる。すぐ終わるから待っていてくれ」「はい。わかりました」

ガンテツがイエローと言葉をかわして各ジムリーダーに与えられた待機室へと入っていく。

部屋の中にいるのはツクシ。ガンテツが住まうヒワダタウンのジムリーダーだ。かつてゴールドが交流した相手でもあり、シユンも彼のポケモンを相手にジム戦を挑んだ実力者である。

今回はガンテツがツクシに専用のキャプチャーネットの調整を依頼されており、その品を届けに来たところだった。

届けるついで声援を送ろうと考えたガンテツ。イエローも余計な口は挟まないようにと部屋の外で待つことにした。

「ふうっ」

一人になったイエローは大きく息を吐いた。

イエローの耳にも先ほどゴールド達からエンジュの知らせが届い

ている。仮面の男が出現、シユンが迎撃に出たという情報だ。

(オーキド博士たちの言うとおり、また伝説のポケモンを巡る戦いが始まったんだ。黒幕の候補者がいる以上、このセキエイ高原でも大きな戦いが起こるかもしれない。僕もしっかりしないと！)

今こうしている間にも仲間が強敵に立ち向かっているのだ。

自分が気を緩めているわけにはいかない。いつでも動けるように心の準備をしておこうと意気込んだ。

凛々しい姿はかつてカントーの危機を救った英雄の顔そのものだ。

「ここにいたのか、イエローさん」

「えっ？」

ふと、名前を呼ばれて視線を上げた。

聞き覚えのないような、あるような曖昧な声の調子に違和感を懐いて相手の顔を確かめる。

「……えっ？ あなたは？ どうして、ここに？」

ここにいるはずのない相手と非常に似ている顔だった。

理解ができず、イエローは困惑する。

相手はイエローの様子には目もくれず、足早に接近。拳を鳩尾目掛けて打ち込んだ。

「アッ!?」

腹部に思い衝撃が走り、肺から息が零れた。

イエローは耐え切れずに膝を突き、首にさらに一撃を食らって意識を手放した。

「悪いな。その羽、もらっていくぞ」

気絶した事を確かめて、相手はイエローの被る麦藁帽子へ手を伸ばした。

狙いは帽子についている二枚の羽だ。布のようなもので隠されているが、その中身がたいせつなものであることはよく知っていた。

深々と突き刺さっていたが、相手は手早く抜き去り、その場を離れていく。

この後、付近を通りがかったナツメ達によってイエロー達が発見、介抱される。

しかしイエローの帽子から失われたものに気づいたものはいなかった。そして、イエローを襲った襲撃者も明らかにされることなく、セキエイ高原内でも新たな局面を迎えようとしていた。

「……っ。何とか、生きているか」

煙が晴れていく中、シュンが左腕に手を当てながら姿を現した。

彼自身も爆発の渦に飲み込まれていた。

だがピカチュウが咄嗟に“まもる”を発動。爆発の衝撃からシュン達を守っていた。

それでも爆風が収まるには時間がかかり、多少のダメージを負う事になったが、手も足も出ずに直撃した仮面の男よりは幾分もマシなものだった。

「ハッ。さすがに、これだけの爆発だ。お前とて無事では済まされなかつたな」

シュンはゆっくりと爆発の中心部へと向かう。

そこには水溜りが形成されていた。

今も気泡のようなものを作って顔の形を作ろうと動いているが、非常に小さなものだった。おそらくは先ほどの爆発で大気中の水の多くが蒸散してしまったのだろう。

(それでも、完全に破壊してもまだ再生しようとするしぶときは不気味だな。強いを通り過ぎて怖いとさえ思えてくる)

「だが、もう無駄だ。お前はもうここでお仕舞いだ」

小さな塊をシュンは蹴飛ばした。

抵抗する術がない氷塊は勢いに逆らえず地面を転々。

復活の勢いも大きく下がり、地面に力なく横たわった。

「これで、仮面の男のホウオウ捕獲は、失敗だ」

(もつともこの氷の塊を操作しているということは、操作者も失敗にはもう気づいている。手下を動員して再びホウオウ捕獲に向かう可能性もある)

「でも、ホウオウ捕獲ともなれば仮面の男みたいな理不尽な力がなければ上手くいかないだろう。手下がそう簡単に捉まえられとは思えない。まずは、一安心だ」

脅威を討ち払い、シユンが安堵の息を零した。

敵にとつてホウオウの捕獲は最大の目的だったことだろう。それを阻んだ事で敵の策は大きく遅れをとったはずだ。

苦しみながらも三度目にしてようやく得た勝利。

(後は、本物を倒すだけだ。……サツキさん)

だが素直には喜べない。

今シユンが倒したのは偽者であるということ。

そして何よりも、二度目の戦いで失われたものが大きすぎた為だ。

喜びよりも悔しさが勝ってしまった、息を整えたシユンは瞳を閉じて、想い人の姿を脳裏に描いた。

「……さて、行くか」

これ以上の長居は無用。

セキエイ高原に向かい、ゴールド達と合流するか。

あるいはこのままエンジュに残って敵の襲来に備えるか。

どちらをとつても敵の出方次第で方針も変わる。

ならばまずはゴールド達と連絡を取ってからにしようとシユンはポケギアへと手を伸ばした。

「ピッ!? ピカッ!」

「えっ?」

突如、ボールから出ていたピカチュウが何かに気づいた。

鳴き声を挙げてシユンの前に飛び上がる。

すると飛んだピカチュウに強烈な水流が襲い掛かった。

水の勢いはすさまじく、ピカチュウの体を押し切って後ろに立つシユンにまで襲い掛かる。

「ぐあっ!」

シユンの体が巨大な木に叩きつけられた。

強烈な一撃で肺から空気が零れていく。

両膝を地面に突き、何とか立て直そうと体に力を籠める。

(まさか、もう敵襲が来たと言うのか？　いくら何でも早すぎる。前もって敵は第二陣を用意していたとでもいうのかよ!?)

まだ仮面の男を撃破してから十分も経っていない。それなのにもうロケット団が増援を派遣したとは考えにくい。

ならばあらかじめ敵が戦力を配置していたということになる。

痛みに顔をしかめながら、シユンはゆつくりと「ハイドロポンプ」を放った敵の姿を捉えようと顔を上げた。

「お前は、スターミー!?!」

そこにいたのはスターミーだった。

水タイプであるし攻撃を仕掛けたのはこの個体で間違いないだろう。

しかし重要なのはそこではない。

ポケモンの種類以上に衝撃を受けた事があつたのだ。

「まさか、サツキさんのスターミーか!　——仮面の男!　やはり、貴様は!」

怒りで我を忘れそうだった。それほど仮面の男への怒りは今まで以上の熱を帯びる。

『やつらの狙いはおそらく、彼女のポケモン達』

「ポケモン?」

『そうじゃ。かつてロケット団はポケモンの生体実験を行っていた。』

そしてその実験結果として、トレーナーの手持ちポケモンを操る術を手にいれておった』

「他者のポケモンをですか!?!」

『実は、やつらは以前もサツキ君を捕縛しようとしていた。すんでのところでシユン君が駆けつけてくれたおかげで事なきを得たが。今思えば、あの時もやつらは情報が目的、ということではなかったただ戦力を欲していたのかもしれない。その為にサツキ君を狙って、今回も』

先日のオーキド博士との会議を思い出す。オーキド博士の考え通り、仮面の男はサツキのポケモンを利用している。利用するために、サツキを手にかけた。

自分を襲った相手がサツキのポケモン。彼女に大切に育てられ、愛

されていたポケモン達が悪意ある者に利用されているとわかって、怒らないわけがない。

『気づいたようだな』

「——ッ!?!」

空から忌々しい機械の音が響いた。

さらに視線を上に向けると、そこには顔全体に仮面をつけた男がヨルノズクの背に乗り、ポケギアを手にしていた。

声の発生源はそのポケギアだった。おそらくこの男も仮面の男の部下なのだろう。

『そうだ。このスターミーはサツキのポケモンだ。よく知っているお前ならすぐ気づくかもしれないと思ったが、まさかこんなにも早く真実にたどり着くとはな』

「……テメエ!」

『おお怖い怖い。今にも食って掛かりそうな声色だな。面を向かって会いたいとは到底思えない。だから、このポケモン達にお前の相手をしてもらおうか』

「ふ、ぎ、けるな! 出て来い、この卑怯者!」

言葉だけで人を殺せるのならば、おそらくシユンは仮面の男を何度も殺していることであろう。

冷静さを失うどころか、全身から殺意が湧き出していた。

「サツキさんのポケモンを操って、奪い取って! お前は! 何とも思わないと言うのか!」

ただの新手だけならばここまで自分を見失うことはなかったはずだ。

それでも、サツキを連想させるものが現れたともなれば話は別。彼女の誇りを汚すような手段を講じてきたのだ。無理もない。

シユンが空へ向けて声を荒げるが、仮面の男は全く心を動かす気配はない。

『操る? 奪い取る? 人間きが悪いな。私は彼女のポケモン達に何も害意を与えていないつもりだが?』

「どこまでも惚けやがって。お前達ロケット団が他人のポケモンを操



る手段を持つているってことは知っているんだよ！」

なおも知らないフリを続ける相手に、シユンは怒りを増幅させた。今にも飛び出しかねない状態の彼を押しとどめているのは、おそらく彼女のポケモン達のカへの評価だろう。

だから下手に動くことも出来ず、この場にはいない仮面の男への追求を続けた。

『だから害意を与えていないと言っているだろうか？ そのポケモン達の主は、サツキのままだ』

「……なにを言っている？ どういう意味だ」

到底信じられない説明だ。だが戯言と吐き捨てるにはあまりにも単純すぎる。

本当のような気がして、それでは一体どうやってサツキのポケモンを操っているのかとシユンが考えを膨らましていると。

その場に、新たな人影が現れた。物音で存在に気づいたシユンは音の方へと振り返る。

『簡単な事だ。その主が、私に従っているということだ』

仮面の男の声は耳に届かなかった。聞こえていたはずなのに、脳が受容しなかった。

シユンは茂みから姿を見せた一人の女性の顔を見て凍りついていった。

敵に一瞬でも隙を見せれば命取りになる。それくらい分かっているはずなのに。

もう会えない可能性の方が高い。そう思っていた女性を目にして、シユンは身動きがとれなかった。

「……馬鹿な。何故あなたがここにいる？ あの時うずまき島での戦いで仮面の男によって、奪われたと、思っていたのに」

「殺された」という言葉さえ使えない所にシユンの不安定な心が滲み出していた。

女性は蒼く、腰まで届きそうな程の長さの髪いわゆるロングストレートをしていた。

美貌を感じさせる顔の半分が仮面の男と同じ絵柄の割れた仮面で

覆い隠され、笑みは消えて無表情を貫いている。

体のラインが見えるような蒼いボディースーツが彼女のキメ細かく白い肌を隠しているが、姿かたちを見間違える事はない。

このジョウト地方を共に旅してきた女性を、別人と間違えるはずがない。

「生きていたんですか。——サツキさん」

サツキがゆっくりとした足取りでスターミーと並ぶように寄り添っていく。

こうしてシユンは最も会いたかった女性との、最悪な再会を果たしたのだった。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：シユン

持っているバッジ：5個（ウイングバッジ、インセクトバッジ、レギュラーバッジ、ファントムバッジ、スチールバッジ）

手持ちポケモン

バクフーン♂ Lv49

ピカチュウ♂ Lv54

エーフィ♀ Lv54

ラプラス♀ Lv56

ヘラクロス♂ Lv54

ハッサム♂ Lv51

ボックスメンバー

サナギラス♂ Lv54

ピジヨット♀ Lv50

サンドパン♂ Lv47

レポートに書き込みました!!

第三十五話 VS スターミーⅢ 白の系譜

「サツキ、さん。サツキさん！」

一度目は自分の中での確認の意味も兼ねて独り言のような小さな声で。

二度目はようやく本物だと理解して叫ぶように名前を呼んだ。ゆっくりとした足取りでサツキさんへと脚を踏み出す。

すると、一歩近づいた事に反応したのか、スターミーが彼女を庇うように前を出た。

まるで俺を敵であると認識しているかのように俺を主に近づかせようとはしない。

思わず再び呆然としてしまった。

スターミーの行動も。それを止めようとしないうサツキさんの反応も。彼女は言葉さえ発せず、冷たい目でこちらを射抜いている。

「何で——」

『感動の再会だな。どのような気分だ?』

「ッ……!」

ようやく無事に会えたというのに。それなのに。

仮面の男の嘲笑がさらにこの理不尽に対する憤りを強くさせる。

「お前が! お前がっ!」

『ああ。私が彼女を救いあげただけだ。その対価として、少しこちらに協力させてもらっているが』

「好き勝手に操っておきながら協力だど?」

怒りで頭がおかしくなりそうだ。

一体どこまでこの男は人の心を踏み躪れば気が済むと言うのか。

ゴールドを追い込み、サツキさんを生死不明にまで至らせただけでは飽き足らず。今また彼女を利用して計画を成就させようとする。これだけ人を傷つけて一体何を成し遂げようとしているのか。

『そうだとも。さあ、お前が大切な者がこうして目の前に現れたわけだが——さて、どうする?』

そう言い終えると、動き出したのはサツキさんだった。

スターミーの体の上に乗るとスターミーは宙に浮き、どこかへと立ち去ってしまう。

「どうして？」

仮面の男が彼女をよこしたのはハウオウ捕獲のためではなかったのか。

ハウオウが現れるというエンジュシティを離れるという彼女の行動。

これが仮面の男の命令によるものならば、考えられる事は——陽動作戦か。

『ようやく見つけた人が離れてゆく。お前は任務を選び私を阻むか？それとも任務など捨ててあの女を追うか？』

「——ッ！」

(やはり、俺をエンジュから遠ざける為にこのような真似を！)

仮面の男の挑発が俺の考えを肯定することとなった。

サツキさんの実力を持ってすればこの場で俺を封じ込める事も出来ただろう。だが隙について、あるいは何らかのイレギュラーが起こってハウオウ捕獲の際に余計な邪魔立てが入る可能性も有る。

伝説のポケモン捕獲に当たって横槍が入るのは避けたいところ。

だから万全を期してサツキさんを使い、邪魔者である俺を遠ざけようとしている。

(どうする？..)

相手の思惑がわかって、それでも判断をすぐに決めることができない。

本当ならばこの場で仮面の男を止めなければならない。だが、サツキさんの後を追いたいというのも俺の本音だ。

難しい決断を前に、ふと父親の言葉が脳裏に蘇る。

『戦わなければならない理由ができるはずだ。大きくわければ、理由は二つある。』

一つは——どうしても倒さなければならない存在てきが現れたとき』

握り締めた拳に自然と力が籠る。

どうしても倒さなければならない存在てき、まさに目の前の仮面の男

だ。

多くの犠牲者を出して、人の心を弄ぶ存在を許せるはずがない。でも、父の教えはそれだけではない。むしろもう一つの方が俺の中ではより大きな意味を持っている。

『そしてもう一つは——どうしても守らなければ、救わなければならない存在ひとができたときだ』

守らなければならない、救わなければならない存在ひと。

真っ先にかつて何度も目にしたサツキさんの笑顔の数々が蘇る。

——駄目だ。私情を挟んではいけないと頭が理解していても。やはりどうしても、俺は守れる者を守りたい。その想いが募ってしまった。

拳を開き、モンスターボールに手を伸ばしてハッサムを繰り出した。

「ハッサム。スターミーを追うぞ。サツキさんを、連れ戻す！」

俺は仮面の男達のことは完全に無視し、その場から飛び立っていった。

『……行ったか。こちらを阻むようならば予定通りサツキをこちらに戻すつもりだったのだが。むしろ都合』

シユンがその場を去ったことを知り、仮面の男がポケギア越しにそう呟く。

仮面の男からすればたとえシユンがどのような行動を取ろうともサツキと彼を戦わせる予定だったのだ。相手が他のロケット団員ならまだしもサツキとなればまず邪魔立ては出来ないと考えていた。

結果的に敵が大きく遠ざかったのでホウオウに専念できるのは仮面の男にとって良い事だろう。

氷の体を失ってしまったのは痛い、それでもこの男がいるならば問題はない。

『私は怒りのあまりこちらに向かってくると思ったのだが。——お前

の教えがしつかりと刻み込まれているようだな?』

「……………」

『ふん。まあ良い。では、ホウオウの捕獲と行こうか』

黙秘を決めこむ男にはこれ以上追求せず、仮面の男は命令を下す。今度こそ、ホウオウを手中に納めるのだと。

ハッサムにスターミーを追ってもらいながら俺は腰につけていたモンスターボールを手中に納め、集中力を高めていた。

「……ツッ・アアッ!」

胸が締め付けられるような、体が握り潰されそうな感覚を堪え、さらに力を解放し続ける。いつもとは異なり、一匹だけではなく五匹のポケモンにまとめてエネルギーを注ぐという荒業だ。気を一瞬でも抜けば意識を持っていかれそうだった。

時間でみればおそらく十秒も経過していないほどの短時間だろう。それだけの時間だというのに、終わった瞬間に押し寄せる疲労感は尋常ではなかった。呼吸は荒れ、頭は重く、汗も首筋から垂れていく。(……大丈夫、だよな?)

ポケモン達の治療が完全に終わった事を確認し、安堵と同時に浮かんできたのは不安だった。

果たして今力を使ったことで一体どれだけ命を費やしたのかわからない。

まさかこの戦いで命を落とすようなことにならないだろうか。思わず死という最悪の予感を浮かべてしまう。

だが、今はそれどころではない。

ポケモン達を腰のベルトへと戻し、そしてピジョットとヘラクロス  
の空を飛べる二匹を繰り出し、戦闘に備える。

そして同時にポケギアからある人物へと電話をかけた。

「早く、早く、早く!」

中々応答が得られず焦りや苛立ちが募ってしまう。

この間にもサツキさんに乗せたスターミーは飛んでいくが、いつ彼女が別の行動に移るかもわからない。

だから早く出てくれと、ひたすら祈って——祈りは、届いた。

『もしもし、シュン君かね!』

「オーキド博士! よかった、ようやく通じた!」

相手、オーキド博士と通信が繋がった。連絡が取れないままになっってしまうかとも考えたが、どうやら最悪の展開は免れたらしい。

『今どこにおるのじゃ? 連絡がないから心配しておったのだが』

「……オーキド博士。時間がありませんので手短に要件を伝えます。

お願いします」

『うむ、わかった。それで一体?』

「今俺がそちらに預けているポケモン達を、全員送ってください」

こちらの状態を察して口を挟まないのはありがたい。余計な説明をしなくてすんだおかげで、俺はすぐに要件を告げることができた。

サツキさんと——もしも戦うようなことになってしまえば、俺は正直勝てる予感がしなかった。

だからせめて少しでも勝算を上げておきたい。そう思ってオーキド博士に依頼する。

『ポケモン達を? よし、すぐに送るよう手配する』

「ありがとうございます。お願いします」

『じゃが君がそういうということは、まさか仮面の男が現れたのか!』

「ッ……」

おそらくゴールド達から連絡がいつていないのだろう。

上手く話を伝えたいところだが、だがどう説明するべきなのか。正直に伝えて良いべきなのか判断に迷う。

正直な話、本当のことを伝えるのは心苦しいが、オーキド博士には状況を正確に把握してもらいたい。その為にはやはりありのままを伝えるべきだろうと結論付ける。

「……仮面の男は予想通りエンジュに現れました。やつの正体は氷で作られた塊、氷人形。こちらに来たのは偽者でした。そちらの方は迎撃したのですが、新手が現れました」

『なにっ!? では君一人で複数を相手にしておるのか!?!』

「いえ、今は新手が現場を離れた為そちらを追っているところです。ただ、問題はその新手の人物が……」

『む? シュン君、どうしたんじや?』

抵抗を感じて言いよどむ俺を不審に思ったのだろう。

博士に問い返されて、何とか先の言葉を紡いでいく。

「サツキさん、なんです」

『……何? 今、何と?』

「さ、サツキさんが、仮面の男に操られ、現れました」

息を飲む音が聞こえた。呆然としているだろうことは映像が見えなくてもわかる。

「顔にやつと同じ仮面をつけています。おそらくこの仮面が他者を操り縛り付ける作用があるのだと思います」

『ば、馬鹿な。生きて、いや、それよりも!』

「必ず連れ戻します! だからこそ——その為にもポケモン達をすぐに送ってください」

『ま、待ちなさい!』

「頼みましたよ」

制止の声を遮り、俺はポケギアの通話を切った。心配はありがたいけれどこちらに割ける戦力はない。ゴールド達でさえ今はセキエイ高原の監視で忙しいのだから。

俺しかサツキさんを取り戻す戦力はいない。なら、これ以上の会話は無駄だ。

「……多分、無茶をかける。耐えてくれよ」

少し時間を置いて、カバンの中に入っている転送システムを通じてボールが送られてきた。

サナギラスにピジョット、サンドパン。先の戦いには参加していなかったポケモン達。皆体調は万全だ。

これでこちらの態勢は整った。

何としてもサツキさんを取り戻す。そう身構えて——開けた場所にスターミーとサツキさんは降り立った。



(周囲にロケット団員の姿は見られない。一人で、この場所で俺を止めるよう指示を受けているのか?)

「皆、俺達も降りよう」

周りに敵の姿は見えないことを確認して俺達も着陸した。

ハツサム達はそのままボールから出して置き、サツキさんと対峙する。

「……一体、どうしてこうなってしまったんですか?」

「――」

「何で、サツキさん」

話しかけてみるが予想通り反応はない。俺の姿は見えているはずだが、まるで意識に入っていないような感じがする。そもそも今の彼女に自我というものが存在するのかわかろうかもわからない。

「無事だったって、安堵すればいいんですかね?」

瞬きだけはするけれど、それ以外は彼女の顔つきに動きが何も見られない。

「あんな気味の悪いクソ野郎の下についたってことを怒ればいいんですかね?」

操っているであろう者を侮辱しても、サツキさんは何も反応を示さない。

少なくとも『仮面の男に忠誠を尽くす』ように洗脳を受けているわけではないのだろう。

「拳句の果てに、何ですかその格好は? そんなボディラインがくつきる出るような服に身を包んで。恥も何もかも捨ててきたんですか? これじゃあまるでち――」

突如、俺の右横を強烈な水流が掠めていく。

発生源は既にボールから出ていたスターミーだ。おそらくは「ハイドロポンプ」だろう。

その水流は俺の頬に一筋の傷跡を作り、そして後方の大木をへし折っていった。

「……………えっ?」

大木が音を立って崩れ落ちる。

おかしい。

確かに今放たれたのは「ハイドロポンプ」だ。間違いない。

だが、威力が、おかしい。少なくとも今までの特訓の時、先ほどの襲撃の時とは比べ物にならない。

「殺す」

驚き、硬直しているとようやくサツキさんが口を開いた。

しかし発せられた言葉は到底彼女のものとは思えない内容で。

洗脳されている、ということは確実になったのだがタイミングが悪すぎる。

「……あの、一つお聞きしますがサツキさん」

「殺す」

「まさか、とは思いますが。まさか自意識があつたりするのでしょうか?」

「殺す」

「あ、はい。もう結構です」

彼女の中では全ての道が俺を殺す事につながっているようだ。

おかげで余計に判断がつかない。

考えられる事としては二つ。

一つは自我がなくてただ命令に従っているということ。

もう一つは自我があるが抑えつけられていて、そして一定の感情ばかりが発現しやすくなっているということだ。

どちらにしても厄介ではあるのだが、前者ならまだ洗脳さえ解けば何とかなるだろうけれど。後者の場合は洗脳が解けた後でも色々厄介ことが出来る気がした。

「何れにせよ会話は通じないみたいですね。ならば——せめて力づくであなたを取り戻します」

今は何時までも結論が出ない答えを考えていても仕方がない。

手持ちのポケモン達を全てボールから繰り出す。

一刻も早く彼女の正気を取り戻そうと、ポケモン達へと指示を飛ばした。

「——駄目か！ イエローも、ゴールドもクリス君も。皆つながらん！」

研究所ではオーキドが一人怒鳴り声をあげていた。

シユンの連絡を受けた後、オーキドはすぐに彼の手持ちポケモンを送信した後、他の凶鑑所有者へと連絡を試みた。しかし現状自由に動ける三人とも連絡がつかない。グリーンは現在ジムリーダーとして動いているし、他の所有者達は何処にいるのかさえもわからない。

誰でも良いから誰か応答してくれと願うが、誰も応じることはなかった。

「いかん。シユン君一人をサツキ君と戦わせるわけにはいかん！」

オーキドとしてシユンがそれなりの実力を身につけたということは知っている。

何人ものジムリーダーから力を認められ、仮面の男との戦いも経験した。今の彼の實力は並のトレーナーと一線を画していると言つても過言ではないだろう。かつてのレッド達と同等の力を持っているのかもしれない。

（頼む。どうか早まらんでくれシユン君。サツキ君は、彼女は——）

だがそれでもシユンがサツキに敵うことはありえない。

オーキドはサツキの實力を知っているからこそ、二人が戦えばどうなるか、その結末を容易に察してしまい彼の身を案じた。

（彼女は初代ポケモン凶鑑製作の協力者。そして、前々回のポケモンリーグセキエイ大会で優勝を果たした実力者なんじゃぞー！）

レッドと同じ實力を彼よりもずっと前から持っていたというサツキの経歴。彼女と一対一で戦うようなことになれば、シユンも歯が立つわけがない——。

エンジュシティでの攻防が一つの分岐路を迎えた頃、セキエイ高原

でも大きな変化が生まれていた。

ジムリーダー対抗戦は滞り行われていく中裏では大きな陰謀が動いていたのである。

ガンテツを補佐していたイエローは何者かの襲撃を受けて意識を失い、今はツクシの控え室を借りて体を休めている。

一方、その知らせを受けて警戒を強めていたゴールドとクリスタルはロケット団の存在に気がつき、幹部と戦闘。無事に勝利を収めることは出来たものの、彼らのリニアカーをコントロールするという目的を阻止するには至らなかった。

しかも二人は幹部が示した映像でホウオウがロケット団の勢力に組んでいるものと戦っている光景を目にしている。これによりシユンが何らかの危機に陥ったのではないかと不安がよぎる。

二人はこの事態をすぐに他の者達にも知らせると同時に、オーキド博士へと連絡を試みた。

ゴールドは事態を会場のものへと伝達すべく繋がる回線を探し、クリスタルはオーキド博士へと連絡を行う。

クリスタルの方はオーキドが既に準備をしていたのか、すぐに連絡が繋がった。

「もしもし！ オーキド博士ですか！」

『おお、クリス君！ ようやく出てくれたか！ 待つとつたぞ！』

「大変なんです！ エンジュシティで仮面の男の手下と思われる人がホウオウと戦っているし、それなのにシユンさんの姿が見えなくて、連絡もとれなくて！ こちらでもイエローさんが襲われるしリニアがのつとられたりと事件が起こってて！」

『く、クリス君落ち着いてくれ。こちらでも色々あったのじやろうが、まずはこちらの話を聞いてくれ！』

何とかクリスタルを落ち着かせて、オーキド博士はシユンより伝えられた事情を説明しはじめた。

仮面の男が操っていたという氷人形の話。その人形を撃破後に現れたという敵の援軍。

そして最も衝撃的であった、サツキが敵として現れシユンと交戦し

ているという現状と彼女の経歴。知っている限りの事を話しくした。

「そんな……!」

一通りの話を聞いてクリスタルは困惑を隠せなかった。信じられない出来事が連続してすぐに受け入れる事など出来ない。

無理もない反応だが、何時までも現実を拒絶してもらうわけにはいかない。オーキド博士は呆然とする彼女に話を続ける。

『辛いじゃろうが事実じゃ。そこで君達は一刻も早く——』

「状況は把握した。んじゃ、俺達はまずこのセキエイの騒動を収めさせて貰うぜ!」

「ちよつ、ゴールド!?」

『待ていゴールド! セキエイでもロケット団が動いておるようじやが、今はそれよりも』

救出を優先すべきだと訴えるオーキド博士。しかしゴールドはその意見に耳を貸すそぶりさえみせず、メイン会場へ戻るべく走り始めた。

「待ちなさい!」

「……気にしすぎなんだっての」

「え?」

クリスタルも仕方がないとゴールドの後を追う。ゴールドの考えも間違っただけではない。まず目前に迫る脅威を退けるといふ事が重要というのも一つの意見だ。

だが、それとは別にセキエイの問題を優先しても大丈夫だとゴールドは笑った。

「シユン先輩が『任せろ』って言ってたんだ。なら俺達は任せてこつちの事を解決すべきだ。下手に手伝いにいったって足引つ張るかもしれない。そんなら俺達は今すぐ出来ることをやるべきだろ」

「……うん!」

熱くなつて周りが見えなくなっているというわけではなかった。むしろその逆。

ゴールドの中でシユンという存在は非常に大きく、彼の感情を制御

するブレーキとなっている。彼への確かな信頼がゴールドにより形で作用している。

クリスタルも実力は把握している。ならば今は彼の言うとおり自分達の役割を果たすべきだ。そのために此処に来て、任されたのだから。

そう信じて戦おう。

二人は考えを同じくしてメイン会場へと戻る。

しかし彼らの前にも巨悪の陰謀が待ち構えていた。

ロケット団はリニアを支配下に置くとすぐさま発進。ロケット団員を載せたままメイン会場内へと乱入する。幸いにもその場にいたジムリーダー達の奮闘により彼らを会場内へと侵入することは防ぎ、リニア内へと押し戻したものの、そこで異変が起こった。

ロケット団員、ジムリーダーがリニア内に載ったタイミングを見計らってリニアの扉が急に閉まり、そのまま走り出してしまったのだ。ジムリーダーはリニアに閉じ込められてセキエイ高原から離れていく。

突然のロケット団の登場によりセキエイ高原は大混乱に陥り、それを鎮める力を持つジムリーダーも去った。

「——ようやく、この時が来たか」

その時に巨悪が姿を見せた。

ゴールドとクリスタルが騒動の鎮静化に務めようと動いている最中、メイン会場の上空に仮面の男が現れた。

「長かった。だがようやく邪魔者どもを一掃し、願いを果たすことができる！」

その傍らに伝説のポケモンであるハウオウとルギアを従えて。

「てめえ！」

「おや、これはまた懐かしい顔ぶれだな。うずまき島以来か」

「此処に来るってことは、やっぱりシンさんは……！」

「ああ。あの男か。中々勇敢な男だったよ。——最も、もう虫の息だな」

「はっ。そんな挑発に乗るかっての。あの人がそう簡単にやられるわ

「けあるか！」

食いつく敵を嘲笑うかのように振舞う仮面の男。

ゴールドの眉に一瞬力が籠るが、冷静さを失っては駄目だとかつての反省から踏みとどまった。あの人が易々と負けるはずがないと言いつ返し、得意げに笑う。

「——たいした信頼だな。だが、これを見てもそう言えるのかな？」

そんなゴールドの表情を見て何を思ったのか。仮面の男はデリバードに命令を下し、宙に浮かぶ氷のスクリーンを作らせた。

「これは……？」

クリスタルもスクリーンをじっと見つめる。しかし映し出されているのは開けた場所に森林が生い茂っているだけのものだ。決して何か異変がある様には思えない。

どうしてこんなものをこちらに見せるのかと疑問を覚えた直後。

——その木々の一部がなぎ倒され、切り裂かれている光景へと場面が変わる。

そしてその周囲にはサンドパンやバクフーン、エーフィといった彼女達が見知ったポケモン達だ。シュンがつれていた自慢の手持ちポケモン達が力なく横たわっていた。

「なっ。そんな！」

「……シュン先輩？」

『カ、ハアッ……！』

再び場面が変わる。

ポケモン達の主であるシュンが、同じように地面に仰向けの形で倒れている。

抵抗の出来ない彼をサツキが見下ろす形で踏みつけていた。

第三十六話 VS メタグロス せめて微笑みとともに

「これを見てもそう言えるのかな？」

仮面の男に命令を下されたデリバードにより、作り出されたスクリーンに映像が映し出される。カメラを通してここより遠くの戦場を——シユンとサツキがいる場所を示す。

「なっ。そんな！」

「……シユン先輩？」

その光景を見て、ゴールドもクリスタルもただ驚愕するしかなかった。それほどまでに信じられないことだった。

二人の姿を見て仮面の男が顔に身につけている仮面が、さらに歪む。

『がっ、はあっ……!!』

『……………』

——地面に横たわるシユンの呻き声が聞こえる。おそらくは仮面の男の洗脳下にあるのだろう、サツキの感情のこもっていない無気力な目が映る。

傷ついているのは彼だけではない。

バクフーンをはじめサンドパンにラプラス、ヘラクロス、エーフィ、ハッサム。シユンの手持ちポケモン達の多くが周囲に倒れていた。

そしてもはや起き上がる力もないシユンを、身動きとれない彼をサツキは無慈悲に踏みつけていた。

「少しは粘っていたようだが、もう終わりだよ。あの男はここで終わる」

悲惨な映像にゴールド達が気を取られていると仮面の男がゆつくりと口を開いた。

既に大勢は決し逆転の余地は無い。後はただ痛めつけられるだけ。ゴールド達にとってはシユンの戦いの勝敗が、彼が援護の為にセキエイ高原に来られるかどうかは大きなポイントであった。無事に



勝ってこちらに来てくれれば、たとえどんな戦況でも覆せる可能性が高かった。

だがそれは叶わない。

彼はこのまま、彼が慕っていた相手によって潰されるのだと、残酷な未来を告げる。

「よく抵抗したと褒めてやると良い。一度は私を退けただけでも手柄だとも。もつとも、このまま死んでしまえば結局——」

「やめろ」

「む？」

許せなかった。

仮面の男の嘲笑が、言葉が、存在が、ありとあらゆるものがシユンという少年の思いを踏み躪っている。彼がどれだけ大切な人の為に心を傷つけたのかも知らずに、さらなる痛みを与え続けている。

この男は間違いなく『巨悪』の権化だ。絶対に、許してはならない。「やめろって、言ってるんだ！」

ゴールドは腰のベルトについていたボールの一つへ手を伸ばし、バクフーンを繰り出した。

バクフーンは主の意思を正しく読み取り即座に臨戦態勢に移る。

「これ以上、あの人の誇りを汚すんじゃねえ！ バクたろう、かえんほうしゃ！」

体内に蓄えられている炎を一直線に吐き出した。

“かえんほうしゃ”が氷のスクリーンを貫き、粉々に砕く。

「無駄なあがきを。ホウオウ、ルギア！」

「ちいっ」

「ゴールド！」

伝説のポケモン達の反撃。ホウオウの炎とルギアの風、圧到底なエネルギーが襲い掛かる。

寸前でクリスタルの指示にしたがって攻撃を回避した。

——直撃した会場の屋根は一瞬で瓦礫と化していた。

(なんちゆう馬鹿げた威力してんだよ！)

まともに攻撃を受ければそのまま倒れてしまうだろう桁外れの破

壊力にゴールドでさえ肝を冷やした。

野生の時に一度対戦したとはいえ、これほどの攻撃は慣れることはない。しかも今回は二匹もいる。二匹を従える仮面の男も健在だ。あまりにも敵が強すぎる。

だが、ただ悲観にくれるばかりではない。

「おい、クリス」

「何よ？」

「ここであいつらぶっ飛ばすぞ」

「ちよつと。そう簡単に言わないで！ わかっているの？ うずまき島で戦ったルギアだけではなくもう一匹伝説のポケモンまでいる。しかも今回は仮面の男まで——」

「いや、仮面の男には他に戦力はねえ」

共に瓦礫の影に身を隠しているクリスタルへ話を始めるゴールド。

あまりにも簡単に言うので注意するが、ゴールドの表情は冷静で、しかもきちんと考えられたものだった。

「ないって、なんでそう言い切れるの？」

「さつきオーキドのじじいが言ってただろ。シュンさんが仮面の男を倒したあとに例の女の人がやってきた。てことは少なくとも仮面の男の手持ちポケモンは全員戦闘不能状態だ」

「でも回復してる可能性だって」

「にしてはここにつくのが早すぎる。大方ハウオウ捕まえてからすぐここつちに来たんだろうよ」

他のロケット団員は全員リニアの中。幹部の二人も先ほど倒したばかりだ。

仮面の男が一般のポケモンセンターにかかれるはずも無い。エンジュシテイからこのセキエイ高原までの移動時間を考えると戦闘不能に陥ったポケモン達を治療する手立てはもうないはずだ。

ならば敵の戦力は今、ルギアとハウオウの伝説のポケモン二匹に限られている。

「今ここで叩けなきや敵が戦力整えた中で戦わなきやならねえ。一番の好機なんだよ。だから、行くぞ！」

意を決してゴールドは物陰から飛び出した。

「おら仮面ヤロー！ こっちだ！」

敵の注意を惹き付ける為に大声を張り上げる。接近に気づいた仮面の男はすぐさま迎撃の指示を飛ばした。

「ちよつと！ ……ああ、もう！」

文句は数多くあるが、そういつていられる状況でもない。

あの身勝手なゴールドがきちんと戦局を見極めているのならたしかに勝てるかもしれない。

クリスタルもネイティをボールから繰り出し、仮面の男へと立ち向かっていった。

「ぐう、つ、あつ」

「……………」

「あああつ！」

胸部に置かれた足を振り払おうと手を伸ばしたが、かえって力を強められてしまう。

こんなことを平気で出来る人ではないはずだというのに、サツキさんは表情一つ変えずにただこちらを見下ろしている。

痛みと苦しさで反撃の意志まで消えてしまいそうだった。

「こん、のー！」

けどこれ以上彼女にこんなことをさせるわけにもいかない。

何とか動かせる下半身を揺さ振って、砕けた岩へとボールを当てる。すると先端がボールの開閉スイッチに衝突し、中からサナギラスが出現した。

「ッ。ニドクイン」

「遅い！ ……かみくだく！」

サツキさんは後退して新たにニドクインを繰り出した。

近接戦闘要員に対しての判断だろうが、すでにサナギラスは攻撃態勢に入っている。がら空きとなっていたニドクインの腹部へサナギ

ラスの牙が突き刺さった。

「決まつ——!?」

完全に攻撃が決まった。だけど、ニドクインが怯むどころか微動だにしない。攻撃が効いているとは思えなかった。

「〴〵かわらわり」

ニドクインは目のサナギラスへと右腕を勢いよく振り下ろした。その一撃はサナギラスの急所に決まったのだろうか、一撃で地面に沈み、サナギラスの自慢の硬い体に亀裂が走る。

「嘘、だろ……う？」

(サナギラスは俺のポケモン達の中でも随一の攻撃、防御を誇っていた。そのサナギラスが全然ダメージを与えられずに、一撃で倒された?)

信じられない光景だった。

俺が呆然としている中、サツキさんの横にすでにボールから出ている三匹のポケモンが並ぶ。スターミー、ギャロップ、ニドクイン。これまでの旅でも何度か目にしていた、彼女自慢のポケモン達。

真っ向から戦えば忽ち打ち倒される。大きすぎる力の差を改めて実感させられた。サナギラスだけではない。バクフーンもサンドパンも、ラプラス、ヘラクロス、エーフィ、ハッサム。皆、サツキさんのポケモン達を前に一撃で戦闘不能に陥った。

「ッ。ピカチュウ、〴〵かげぶんしん」!

まだまだ。勝ち目は全く見えないけれどまだ、終わっていない。

切り札のピカチュウが出るやいなや、すばやい動きで分身を作り出す。これなら一撃で葬ろうともそう簡単にはできないだろう。

サツキさん達を取り囲むようにピカチュウの分身が攻撃を仕掛ける。ニドクイン達は対処しようとするが本物を捕らえきれない。

厄介と判断したのだろう。サツキさんは腰のボールへ手を伸ばし、四体目を繰り出した。

「……〴〵でんこうせっか」

——そのポケモンは何だったのだろうか。

確認することが出来ないまま、高速で動く何かの攻撃によってピカ

チュウが作り出した分身が次々と消されていく。

(速い。速過ぎる！ 目で追えない——!?)

あまりの速さに視認が追いつかなかった。ピカチュウも同じことで、新たに出現したポケモンへの対処が出来なかった。

新たな何かは、全ての分身をかき消した後、サツキさんを守るように彼女の目の前で急停止して、ようやく俺の目に映る。

黄色い体色。首周りと腰部の鋭い棘。これは確か、イーブイの進化形態の一つ。

「サンダースか！」

でんきタイプの中でもすばやさに特化した個体。サンダースが今まで目にしたことがなかったサツキさんの四体目だった。

このすばやさを前にしてはピカチュウでも進化を發揮できないだろう。

俺は最後の一体が入ったボールを掴み、状況を切り替えようとして

「でんこうせっか！」

サンダースの高速の一撃がピカチュウへ襲い掛かる。

回避は間に合わず、まともに食らってしまったピカチュウは後方へと吹き飛び、俺にぶつかっても勢いは止まらない。衝撃で右手からボールはこぼれ、再び巨木に叩きつけられた。

「ガアッ！」

強烈な痛みが走った。歯を食いしばり、意識が飛んでしまいそうなのを堪えるが、体は言う事を効かずにその場に項垂れてしまう。

立ちなおすことも出来ない中、ゆっくりとサツキさんと彼女のポケモン達がこちらに近づいてくる足音だけが響く。

「——殺す」

「……その格好でそんなこと言われても説得力はないですよ」

まるで機械のように同じ言葉を繰り返す。

今すぐに彼女を解放したい。その気持ちでいっぱいだが、力が足り無すぎる。

「すみませんが、今のあなたの願いをかなえさせるわけにはいきませ

ん」

ようやく顔を上げたその視線の先で、先ほど零したボールが地面を転がり、木にぶつかつた。衝撃で開閉スイッチが押され、最後の一体、ピジヨットが現れ、俺の方へと向かつてくる。

「皆、戻れ！」

俺はすぐさま倒れている仲間全員をボールへと戻し、ピジヨットへと手を差し出す。

「来いピジヨット！」

ピジヨットの翼に捉まって上空へと逃れた。

俺の判断が甘かつた。一人で到底勝てる相手ではない。

一度退いて立て直すしかない。

「……行って」

遠くから、サツキさんの眩きが聞こえたような気がした。

きつと気のせいだろうし今は考えている余裕もないので視線を戻したりはしなかつた。感情的になつて、無策で戻つてしまいそうな気もしたから。

「すまん、ピジヨット。一端ここから離脱するぞ」

首をわずかにこちらへ向けて頷くピジヨット。すぐに高度を上げて森林を見渡せる位置にまで上昇したのはありがたい。

これならば何かあるうともすぐに対応できるだろう。一応追撃がないか確認して——ッ!?

「ピジヨット、右へ避ける！」

俺の声に呼応してピジヨットは急激に進路を変更し、右へ逸れる。すると先ほどピジヨットが跳んでいた位置にレーザーのようなものが通過していった。

「なんだ、今のは？ 一体何が——っ、眩しい!？」

攻撃の正体について考えようとすると、突如強くなった日差しに気がついた。

自然による天候変化にしてはタイミングがおかしい。まさかこれもサツキさんのポケモン達の影響か？

もう一度後を見て、サツキさん達がいた場所を振り返ると……その森林から無数の光線が放たれ、こちらへと向かってきた。

「ハッ!? ピジヨット旋回しろ!」

真つ直ぐ飛んでは狙いを定められて終わりだ。

そう考えてピジヨットへ指示を飛ばす。

これにより何とか謎の攻撃はかわせた——はずだった。

通り過ぎた光線が方向を変えてこちらに向かってこない限りは。

可笑しい。こんな連続で高エネルギーの光線を打ち出すことも、軌道をまげて正確にピジヨット目掛けて正確に発射することも。

「どうなっている。……ッ、あれは!」

旋回の途中で、サツキさんの付近に新たなポケモンが地に立っていたのが目に映る。

黄緑色の可愛らしい見た目の、花を彷彿させる外見。草タイプのキレイハナだった。

「じゃあこれは、キレイハナのソーラービームか? ひざしが強くなったのもキレイハナの影響で、打ち出した光をスターミーの念で——攻撃の軌道を操っているというのか!」

キレイハナが踊る事で日差しを呼び、強くするという話を聞いたことが有る。そして日差しが強い状態ならば太陽エネルギーを打ち出すソーラービームはすぐに発射することが可能だ。

仕掛けに気がついたとしても対処方法はない。日差しが強いためこうしている間にもソーラービームは次々と打ち出されていく。

徐々にソーラービームはピジヨットの進路を阻んでいき、ついに周囲をソーラービームの砲撃によって囲まれる。

「ぐっ、上だ! 高度をあげろ!」

だがさらなる高い場所、空ならば。

取り囲まれた光線の渦を突き抜けるように、ピジヨットは急上昇。ソーラービームを打ち破って空高く飛んだ。

「……ッ!?!」

その先で、俺達は一体の大型ポケモンを目にした。

「お前は」

その姿を、一度テレビで目にしたことがあった。確か昔見た、ハウエン地方のチャンピオンを決定する大会・ポケモンリーグで後にチャンピオンとなった男性がよく頼りにしていたポケモン。

スーパーコンピュータをも凌駕する頭脳と青く煌く鋼の四肢を持った、空中に浮かぶ要塞。

ポケモンの名前は――

「め、メタグロス……?」

「ズーム、ハンマー」

事実を受け入れることさえ出来ないまま。鋼鉄の腕が、容赦なく振り下ろされた。

サツキがメタグロス――正確に言えばその進化前のポケモンであるダンバルを手に入れたのは、そう昔の事ではない。実は彼女の手持ちポケモンの中では最も日が浅い。

三年前、カントー地方ではまだサカキが率いていたロケット団が暗躍していた頃のことだ。当時彼女はハウエン地方に赴き、ある者と共に伝説のポケモンに関する調査を行っていた。

「とても助かったよ。君の協力のおかげでレジロック、レジスチル、レジアイス。三匹の眠る場所を特定することが出来た」

「いいえ。まだ場所を特定できただけに過ぎません。まだ手がかりを調べなければいけないでしょうし、やらなければならぬことも多いでしょう。むしろそちらを手伝えない事の方が気がかりですよ。――ダイゴくん」

ハウエン地方のチャンピオン、ダイゴ。

この時既にダイゴは後にハウエン地方を大きく揺るがす事件を引き起こす事になる巨悪の存在に気づいていた。彼らの目的を調べ、そして止める手段を考えなければならぬ。

特に止める手段についてはいくつも考えなければならぬ。

そこでダイゴはいくつもの伝説のポケモンについて調査を行って



いた。その調査を手伝っていたのがサツキだった。

まだ彼女がカントー地方にいた時はロケット団の存在も公には名が知られておらず、ジムリーダーなどの有力者でさえ存在を知らない者が多かった。

その為サツキは以来を快く引き受けホウエン地方を訪れていたのだが、その間にロケット団の動きが活発になる。彼女と同じ地方に住む少女少女の活躍によってロケット団は壊滅したと聞いたが、今度は新たなトレーナー集団が大きな企みを企てているという情報が耳に入った。

この為サツキはホウエン地方での調査を断念し、カントー地方へと戻ることになったのである。

「構わないさ。むしろこちらの方が君の手伝いを出来ないことが心苦しい。あれだけ世話になったというのに——未だに二つの組織の詳細さえ明らかになっていない中でこの地方を抜けることはできない」「分かっています」

「すまない。そのせめてものお詫びとして、というのもおかしいが。これを君に受け取って欲しい」

小さく頭を下げると、ダイゴはサツキへモンスターボールを手渡した。

中には一匹の小さなポケモンが入っていた。

「これは……」

「中にいるのはダンバル。僕のお気に入りポケモンだ」

「そんな大事な子を？」

「君に受け取って欲しい。きっと君の助けになると思う。よろしく頼むよ。——またいつか会おう」

心からの善意で、無報酬で助けに来てくれた彼女ならばこのポケモンを託すことができる。

成長すれば頼もしい戦力になるであろうと期待して、きっと彼女なら十分に価値を発揮できると信頼して。ダイゴからサツキの手にダンバルは渡った。



るのだろうか。

わからない。

どうしてそんな顔をする。

どうしてそんな悲しそうな表情で、俺を見る。

どうして涙を流しながら、戸惑っている。

俺はあなたを守れなかった身だ。だから俺を殺すことに戸惑う必要などないはずなのに。

「うっ、あう、ううううっ！」

呻き声の直後、再び首を絞める力が強まった。

抵抗しようとも仮面の男の洗脳はそう簡単には抜け出せないということなのだろう。

(……すみません。サツキさん)

彼女の両手に手を伸ばすことさえ出来なかった。

サツキさんは敵の力にも抗ったというのに、俺はもう抵抗の意志さえ消えてしまった。

(俺には——出来ない)

駄目だ。

もう、これ以上、この人と戦いたくはない。

「ギラアアアアアア！」

突然響いた鳴き声。

それは、俺のサナギラスのものだった。

命じてもないのにボールの中でサナギラスは暴れだし、自分のボールを地面にたたきつけて強引に外に出てきた。

サツキさんへ体当たりし、彼女を俺の上から吹き飛ばす。

「ッ」

「サナギラス!?!」

ニドクインが彼女の体を受け止め、すぐさまメタグロスが彼女の前に立つ。

警戒を強める敵に対し、サナギラスも闘争心を露にする。

「馬鹿。やめろ、サナギラス！ もうお前は戦える状態じゃない。やめろ！」

静止を呼びかけているのに、サナギラスは聞く耳を持たない。

メタグロスに向かって突撃して——鋼鉄の腕にはじき返された。体の亀裂がさらに歪に広がっていく。それなのに、着地すると再びメタグロスへと向かって行つた。

でも敵は防御が硬い鋼タイプだ。ボロボロの状態で向かつていつたせいで、攻撃したはずのサナギラスの方が傷つく。サナギラスの体全身に亀裂が走つた。

「サナギラスー！」

これ以上はもう見ていられない。強引にでもボールに戻さなければ。

左腕が満足に動かせないせいで掴みにくい左腰のボールを手にし、サナギラスへ視線を戻す。

ボールへ戻そうとして、サナギラスの体の亀裂から眩い光が発せられた。

「えっ。これはまさか」

今まで何度か目にしてきた、進化の兆候。

サナギラスが身に纏う殻を打ち破つて——ニメートルはあるであろう怪獣のような巨体、バンギラスへと進化を遂げた。

「進化……バンギラス」

今まで待ちわびていた最終進化が、このタイミングで生じた。

バンギラスはメタグロスの鋼鉄の腕を受けきり、はじき返した。バンギラスが片腕を振るっただけだというのに、メタグロスは後ずさり、地響きが生じる。

「バンギラス。お前……」

先ほどまでボロボロだったはずなのに、バンギラスはこちらを振り返ると『任せろ』と言わんばかりに息を吐く。

いや、バンギラスだけではない。

ピカチュウもバクフーン達も、皆勝手にボールから出てきて俺の前に立った。

「皆、なんで……」

なんでそこまでして戦う。

俺の命令さえ無視して、どうして俺を守ろうとする。何も、わからない。

『どうしても守らなければ、救わなければならない存在ひとができたときだ』

またしても父の言葉が脳裏をよぎった。

「……お前達も同じということか。俺を守ってくれるというのか」  
理解すると申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

先ほどまでは俺も同じ思いで戦っていたはずなのに、それさえ忘れて諦めて、ポケモン達に思い出させてもらえるなんて。

「みんな、すまない」

こんな俺についてきてくれたポケモン達がボロボロの状態でまだ戦ってくれるというのに俺だけ諦めるわけにはいかない。

覚悟が決まった。やはり、何としてもサツキさんは救わなければならない。

(だけど——)

しかし同時に、冷静になつて戦力差が大きすぎるとい壁に再び衝突する。バンギラスはメタグロス達にも太刀打ちできるかも知れないが、他のポケモンはそうではない。最終進化を果たした状態でさえ皆呆気なく敗れたのだ。しかも回復が出来ていない。

勝てる方法はまずないだろう。——たった一つを除いては。

「サツキさん。今一度あなたとの約束を破る事を許してください」

本当は考えてはいけない選択杖だが、それでサツキさんを救えるならば。

「——世界に告げる」

迷いはない。

動かせる右腕を前にかざして、詠唱を始めた。

「我は運命を呪う者」

俺の持つワカバの力は本来なら直接腕に触れている生物に対してしか効果を發揮できない。

「その生に未来はなく、友が歩む道の果てを夢見た」

だが——俺の右腕から光が発せられる。

「戦場に立つは望んだ安息のために」

光は徐々に強くなり、右腕から全身へと広がっていく。

「すでに行く道に退路はなく、この身に希望はなし」

これは従来の接触による生命エネルギーの譲渡ではない。

「ならばこそ今こそ我は寄り添う者にこそぐ勝利の人柱となろう」

俺が発する声を音響器代わりにしてエネルギーの振動を調節。

「共に進む者には一時の繁栄を、引き継ぐ者には一生の痛みを与えよ」

空間に存在する分子の振動と同調させて空間を伝って任意のポケモン達へと生命エネルギーを伝達させる。

「我が命を吸い高まれ同胞達！」

体から発した光は空気を通ってポケモン達へと届き、同様に体が光り輝く。

「——我は、ワカバの導き手なり」

ポケモン達の傷が癒えていく。先ほどの戦いで受けた傷は見る見る位置に消えて、万全の状態以上になった。

「あつ、あああああああつ！」

倒れてしまいそうになるのを寸前で堪え、視線を上げる。

こちらの戦力が元に戻った事を警戒したのかサツキさんのポケモン達六匹も勢ぞろいでこちらを迎え撃つべく並んだ。

その後方にサツキさんは無言で立ち尽くしている。

先ほどから流していた涙はまだ止まらず瞳から溢れている。また、

彼女の口は閉ざされて物理的なものとは別の何かと戦っているように見えた。

——まだ、サツキさんを取り戻せる可能性は残っている。ならば取り戻すだけだ。

「しつこい男は嫌いなんでしたっけ、サツキさん」

かつて彼女は使用人であるパーバスにそう愚痴を零していた。

今の俺はまさにその嫌う対象となるのだろう。一度は倒して、意志も砕けたというのに、執拗に戦おうとする様は敵にとってしつこい以外の何者でもない。

「すみません。俺のことは嫌いになってもかまいません。それでも構わないから、今までのように、また綺麗に笑ってくださいよ……」  
だが関係ない。

あなたの涙を止めることができるならば、あなたを闇の底より救い出だすことができるというのならば。もうどうでもいい。——俺は喜んで死を受け入れよう。

### 第三十七話 VS ニドクイン 最期の咆哮

父の職業はレンジャーだ。世間ではポケモンと共に自然の保護活動や犯罪者の取り締まり、自然災害の救助活動や支援などを行うことからポケモンレンジャーとも呼ばれている。

昔から父の仕事テレビなどでも目にしていた。その背中はとても大きく見えた。自然災害など大きな仕事の時には長期間いなくなる時はあつたけれど、仕事を行っているとときの姿は見たことがあつたからむしろ誇らしささえ覚えていた。

『心配するな。何かあつた時にはいつも傍にいる。必ず俺が守つてやる』

そんな父は俺にとって——例えるならば漫画や小説における主人公のようなものだった。どんな時でも大切奈人を助け、守る本当に立派なものだと。

だからこそ俺はその姿に、あり方にあこがれた。いつか自分もそのようになれたらよいなと思つて。

だが、そう願いつつも俺は心のどこかで気づいていたのかも、知つてしまったのかもしれない。

所詮そのような理想は、理想の中でしかないのだと。

現に父親は全てを捨てて俺達の前から消えた。残つたものは悲しみや恨みくらいだ。それは一方的な私情から来るものかもしれない。けれど、そう理解してもその感情が消えることはない。

憧れていた分嫌いになつて。俺は違つと、俺は絶対に理想を貫くと考えた。

しかし俺自身も理想のような生き方をすることはできないのだろう。すでに根本が間違つているのだとサツキさんに指摘されてしまった。今同じ過ちを再び繰り返そうとしている。

「皆、もう少しの間だけ頼む。俺の我がままに付き合ってもらうぞ」  
それでも、それでもいい。

今まで一度も信じたことのない神様に、初めて祈るとしよう。

俺は間違つていてもいい。綺麗な生き方なんてしなくていいから。



——お願いだからせめて、サツキさんだけは救ってくれ。救わせてくれ!

未来を生きようなどと叶いもしない希望を抱くことなどもう諦めた。だから俺に未来なんてものはいらなから、今この瞬間を、全力で生きさせてくれ。

同じ頃、ポケモンリーグセキエイ高原でも戦局に大きな変化が生じていた。

仮面の男がハウオウとルギア、伝説のポケモンを繰り出して力を振るう中、ゴールドとクリスタルが応戦。二匹の複合技を対処すべく敵を分断し、迎え撃った。ゴールドはウソツキーと共にハウオウを受け持ちクリスタルはネイティに指示を出してルギアを担当する。

さすがは伝説のポケモン。徐々に二人は押される展開にあった。

「ウーたろう “じたばた” だ!」

「ネイぴよん、 “みらいよち” !」

二匹のポケモンが伝説ポケモン達に肉薄する。ウソツキーはじたばた暴れてハウオウを吹き飛ばし、ネイティの念力を送ってルギアを攻撃する。

「お、おのれ!」

「いつまでもテメエの好き勝手させると思うなよ。これ以上の悪事は絶対に許さねえ。キマたろう!」

予想外の抵抗に仮面の男が怯んだ瞬間、ゴールドは攻勢に出た。

ウソツキーからヒマナツツへ交代して日差しを強くする。

「クリス、わかってんな!」

「うん。ウインぴよん、 “ほのおのうず” !」

天候が変わった直後、ゴールドはクリスタルへと声をかけた。彼の期待に応えるように、ウインディが仮面の男を中心に激しく渦巻く炎を吐いた。威力を増した炎に閉じ込められ仮面の男の体が急激な勢いで溶けていく。

「ま、まずい！ 貴様らあああああ!!」

「へっ。テメエの体が氷で出来ているってことは知っていんだよ」

「しかもルギアの風では炎をかえって強くしてしまう危険がある。ホウオウの炎では余計に体の氷を溶かしてしまう。他の手持ちポケモンがいけない以上、もう貴方は逃げられない！」

シユンから伝えられた情報が、彼が仮面の男に与えた戦果が大いに役立った。

敵が氷人形であるならば氷を溶かしきるほどの炎技で追い込めばいい。幸い、敵のルギア・ホウオウの自慢の業では共に炎をかえって強めてしまう。仮面の男の戦力は既にシユンが倒した以上、さらに強まっていく炎の渦からは逃げられない。

「さあ、終わりだ。大人しくホウオウとルギアを解放しろ！ そして洗脳している人達を元に戻せ！」

いくらポケモン達が強力でもトレーナーの身動きが封じられればお仕舞いだ。

大人しく降伏するようにゴールドが勧告する。

その問いかけに対して、仮面の男は――

「――あまごい！」

戦いを続行する。

突如セキエイ高原の上空に雨雲が発生し、雨が降り出す。先ほどまで日差しが強かったにも関わらず、強い雨は炎の渦の威力を弱めさらに仮面の男の氷人形を形作る源である水分となる。

「なにっ!？」

「ふふふき」だ」

続いて先ほどあまごいを行ったデリバードが強烈な冷気を発する。一瞬でセキエイ高原の会場は凍りつき、仮面の男の氷の体が見る見るうちに再生していく。

「で、デリバード!？」

(あいつは俺が今まで何度も戦ってきたポケモンじゃねーか!?)

「嘘！ 何で？ だって、仮面の男のポケモンはすでにシユンさんが倒したはずじゃ！」

もう戦場には現れないはずのポケモンが出現し、新たな脅威となった。

おかしい。敵には短時間で回復する手段などないはずだ。それなのに、何故？

「さあ、終わりにしようか」

考えている余裕などなかった。

ホウオウが炎の輪を打ち出し、ゴールドとクリスタルを炎の中に拘束する。

「うわあつつつつ！」

「キヤアアア!!」

高温の熱を発する拘束だ。今度は二人が身動きが取れなくなった。それを見て仮面の男は敵から視線を外す。

逃げまとう観客の中へと目を向けて——狙いの人物を見つけて飛んだ。

「見つけたぞー！」

「お、お前は……！」

「ガントツ。お前を探していた。我が十年にわたった計画の達成に力を貸してもらおう」

仮面の男はガントツと彼の連れである孫を捕まえた。片腕で、一人ずつ空中で拘束しガントツへ命令する。

「さあ、作ってもらおうぞガントツ」

「な、なんやと？ 作る？」

「そうだ。お前の腕で、時間をとらえるモンスターボールを！」

これほどの悪事を働いた目的を叶える為に、最後の道具を手にしようとしていた。

---

一方、エンジュシテイ郊外で続いているシユンとサツキの戦い。

決死の覚悟でシユンが力を振るうことで戦況は互角に戻った後、最初に動き出したのはサンダースだった。

ピカチュウをも凌駕するスピード。捉えきることは容易ではないポケモンに対して、シユンは。

「ハツサム、ゴころそくいどう！」

ハツサムで迎え撃つ。全身の力を脱いで体を軽くし、サンダースと遜色ない動きでぶつかり合う。

一撃、二撃、三撃。サンダースの頭が、腕が。ハツサムの鋼鉄の両腕が衝突する。

両者とも一步も譲らないせめぎ合い。

だがサンダースが徐々に消耗する中、ハツサムは即座に傷が治り、攻撃の威力が増していく。

不利を察したのでろう。サンダースをサポートするべくニドクインとギャロップが前進した。

「ッ。ヘラクロス、バクフーン、ピカチュウ！ 行ってくれ！」

増援を見たシユンも三匹に指示を飛ばす。

ヘラクロスはニドクインと取っ組み合い、猛スピードで突進するギャロップ目掛けてスピードスターと10万ボルトが襲い掛かる。

格闘戦はかつて師弟の関係となった「かわらわり」同士のぶつかり合いが続く。

遠距離攻撃をかわしたギャロップがバクフーンへ「とっしん」するが、これをバクフーンが受け止めてピカチュウが横撃。ギャロップの横腹へ頭突きを決めた。急所に決まったのだろうか、ギャロップは溜まらずうめき声を上げて——だが怯む事無く、即座に「かえんほうしゃ」をシユン目掛けて打ち出した。

「来るか。エーファイ、びかりのかべ」

控えていたエーファイが最前列にでて防御壁を張る。常よりも硬さが増した壁は炎を完全に攻撃を防ぎきった。

「ピジョット、サンドパン。今だ、行け！」

今度はシユンが攻勢に出た。

壁の横からピジョットが、壁の上部を蹴ってサンドパンが宙に跳ぶ。

「「つばめがえし」に、ゴころがる！」

加速と落下の勢いが重なった二匹の得意技が放たれた。

威力速度共に申し分ない自慢の一撃は——メタグロスの鋼鉄の体に阻まれる。メタグロスは二匹を受け止めると片腕を薙ぎ払って蹴散らしてみせた。

「ちいつ。——ッ、あぁっ！」

攻撃の失敗を確認したシユンはすぐに立て直そうとした。

だが、体が締め付けられるような痛みに襲われ、よろけてしまう。

この間にメタグロスが進撃。宙に浮いて他の争うポケモン達へ“コメットパンチ”を繰り出した。

「ッ、ば、バンギラス！」

シユンが指示を出した。出す前に、バンギラスは動いていた。

主の意図を理解していたバンギラスはメタグロスの力を受け止め、はじき返す。

メタグロスが大きく後退した。

近距離戦闘は危険と判断したのだろうか。控えていたスターミーとクレイハナが“ハイドロポンプ”と“ソーラービーム”を打ち出した。

「ラプラス、”れいとうビーム”、エーフィ”サイケこうせん”！」

これを迎え撃つたのはラプラスとエーフィだ。

冷気と念力が水流と光の束を打ち消し、爆発する。

(……………これで、ようやく互角か)

爆発の煙が晴れて行く中、シユンはサツキと互角以上に戦えているという事を再確認する。

現在、シユンのポケモン達は常時ワカバの力によって細胞の再生能力が高まっている。これにより瞬時に戦闘の傷は癒え、さらには通常よりも大きな力を発揮することが出来るようになった。

しかもサツキが洗脳に抵抗しているためか一切ポケモンに指示を出していないという点も大きい。ポケモン達は各自の判断で動いているが、その分先ほどよりも始動は遅く、動きのキレも悪い。

この状態が続けば押し切れるだろう。長期戦に持ち込むことが出来ればきつと勝てる。

「うっ、あっあ——ああああ!!」

——最もその為には、今のシユンが長期戦が可能な体であるという事が前提の話だが。

全身の体が急激に引き裂かれるような感覚だった。

常に生命エネルギーを九匹のポケモン達に送り続ける。この代償がシユンに襲い掛かった。心臓の拍動は弱まり、血液の流れは極度に遅く、体の各所はこれまでの傷の痛みが加速する。次第に感覚や意識も薄れはじめ、立っているのも辛くなっていく。

(これ以上戦えば、俺の命が先に尽きる——!)

文字通り命を消耗しながらの戦いだ。速めに決着を着けられなければサツキを助ける前に力尽きてしまう。

最早猶予は無いと判断したシユンは、勝負を決めにかかった。

「ラプラス、ハイドロポンプ!」

口から強烈な水流を吐き出すラプラス。スターミーも同じように「ハイドロポンプ」で迎え撃つが、水流を撃っている途中でエーフィの「サイコキネシス」に襲われて大きく前方へ飛ばされた。

「ピジョット、サンドパン!」

さらにピジョットとサンドパンがキレイハナへ襲い掛かる。

ピジョットが素早い動きでキレイハナの動きを止める。『はなびらのまい』を受けてはじき返されるが、その間に隙を突いたサンドパンの『ブレイククロー』が直撃。キレイハナも大きく吹き飛ばされ、空中からサンドパンが『ころがる』で追撃。上からのしかかる事でその場にキレイハナを封じ込めた。

(これでサツキさんのポケモン達が集まった!)

「バンギラス! すなあらしだ!」

サツキのポケモン六匹を近くに寄った状況を見逃さず、メタグロスと相対するバンギラスへ命令する。バンギラスは一步下がると自分を中心に砂嵐を巻き起こす。地表から舞い上がった砂は周囲の味方ポケモン達をも巻き込んで、フィールドに立つ全てのポケモンを閉じ込めた。

(すまない! 皆、あと一発耐えてくれ!)

「ピカチュウー！」

そして、その中心に立つバンギラスにピカチュウが乗る。砂嵐の中心に立ち、上空の雷雲を呼んで――

「かみなり”だー！”

凄まじい落雷は、”ひらいしん”であるピカチュウ目掛けて打ち出された。

寸前、スターミーのコアが怪しく光り輝き――強烈なエネルギーの衝撃は砂嵐さえ吹き飛ばす爆風を起こし、フィールドに立つポケモン達を覆い隠した。

「……や、った」

”すなあらし”で逃げ場を封じ、強烈な威力を誇る”かみなり”を命中させた。この爆発を受ければサツキのポケモンとてまともにたつてはいられないだろう。

ゆっくりとシユンは歩き出した。ポケモン達を犠牲覚悟の戦略を立ててしまったことに申し訳ないと思いつつ、彼らがいる爆風地をさけてサツキの元へと向かう。

一歩足を踏み込むたびに体がきしむ。数メートルという距離が数キロにも感じるような錯覚を覚える。

だがこれで全て終わりだ。希望を頼りに少しずつサツキとの距離をつめていく。

もう少し。彼女の綺麗な顔を覆い隠している仮面へと手を伸ばす。

もう少し。指先が仮面に触れる距離に達する。

しっかりと力をこめて仮面をはがすように手をひっかけて――

「――ッ!？」

シユンの体を後から何かが貫いた。

「あつ、なあつ――あつ?？」

右腕を衝撃のあつた腹部へ当てて。

触れた手は血で紅く染まり傷の酷さを物語っている。そしてシユンは背中側から腹側へ白い爪が伸びていた事を理解した。ゆっくりとその原因である後方へ向けると、サツキのニドクインが立っていた。

「『どく、ばり』? なんぞ?」

どうしてニドクインがまだ立っている。

ニドクインはでんきタイプと相性の良いじめんタイプであるからかみなりの直撃は聞かないだろう。だがその前にすなわらして大きなダメージを受けたはずだし、かみなりによって生じた爆発の衝撃は強烈なものだ。ヘラクロスとの戦いで受けたダメージでは耐えられないはずなのに——そこまで考えて、シユンの視界に一匹だけ明らかに落雷の衝撃が激しく体が焦げているスターミーの姿が映った。

(スターミーの、"スキルスワップ"か)

雷撃を一身に受けた敵を見て全てを理解した。

本来なら戦闘地の中心に立った、"ひらいしん"の特性をもつピカチュウに落雷する事で爆発が全てのポケモンを襲うはずだった。

しかし寸前でスターミーがピカチュウと特性を入れ替え、スターミーが"ひらいしん"となることで落雷の場所がずれた。当然その後には生じる爆発もずれ、ニドクインは何とか持ちこたえたのだろう。(まだ、こんな手も残していたというのかよ)

ここまで追い詰めて、特攻覚悟の最後の手段さえ潰されてしまった。

(しまった)

シユンの体から光が消える。当然、彼を伝ってエネルギーを伝えられていたポケモン達からも光は消えて、力は元に戻る。

突然の事に戸惑うシユンのポケモン達をサツキのポケモン達は容赦なく襲い掛かり、あつという間に制圧した。

「——こ、ろす」

涙が止まらないというのに、そんな事お構い無しでサツキはシユンへと近づき、彼の首を絞めて——

「ちがう、だろ」

力が籠る前に、シユンが残った力を振り絞って彼女へ訴えた。

「違うだろ! あなたが本当に思っていることは、違うだろ!」

最早満足に体を動かすことさえできない状態であるというのに。

シユンは口から血を吐き出しながら言葉に思いを籠めた。もはや



限界を超えた体に鞭打ち、必死に叫んだ。彼の叫びが伝わったのかサツキの顔が揺れ、仮面に輝が入る。

「生きて」と、頼って」と俺に言ってくれたあなたの望みは、こんなことじゃないだろ！」

かつて暗闇で自分の心を癒してくれた彼女を思い返して、シユンは残った生命エネルギーを局所へ集中させる。生命力を他者に分け与えるのではなく、己の必要な部分だけに注ぎ込む。

「お願いだからっ——本当の自分に戻ってくれ！」

体に突き刺さったニドクインの爪を強引に振りほどき、最後の一步を踏み出して右腕を仮面に伸ばす。

指先がかかり、後は引き剥がすだけ。残りの力を全て注いだ直後。

——あ、れ？

シユンの世界から、光が、消えた。

(何、これ……?)

突如何も見えない暗闇の世界へと落ちた。

あまりにも受けた傷が、消耗した命が大きすぎたのだ。循環障害と多大な臓器の損傷による視覚の消失。

シユンは己の行動の結果を見届ける事さえ出来ず、全身から力が抜けて体が地面に崩れ落ち始める。

「届かなかったの、かよ。ち、くしょう」

もはや痛みさえ感じなくなった体は、自身が地面に倒れこんだのかどうかもわからない。

彼は今どんな体勢なのか理解できず、ただひたすら己の無力を呪った。

最後の願いさえ、叶えることは出来なかったというのか。

ポケモン達が全力を尽くして戦ってくれたというのに、彼らに応えることは出来ないというのか。

目の前で涙を流しながらも、必死に洗脳に抵抗する想い人を救う事も出来ないといのか。

悔やんでも悔やみきれない。

刹那の間に無数の後悔に襲われる。

「届いていたよ、シユン君」

そんな彼に数少なく残されていた機能の一つである聴覚が、彼にとって最高の報告を届けてくれた。

二人が立つ地面のすぐ近くにひび割れた仮面が落ちていて。倒れかけたシユンの体をサツキがしっかりと抱きしめていた。 倒れ

### 第三十八話 VS ヤミカラス のこされたもの

結果論で言えば、シユンの体がボロボロになったことは不幸中の幸いとも言えた。

ニドクインの“どくばり”を生身で受けてしまえば本来ならまず助からない。すでに毒が全身に回ってしまい、中毒死してしまっていただろう。だが循環器系統が機能低下したことで全身への毒の周りが遅くなった。

これによりシユンは毒による死を遅らせ、サツキは無事に彼の解毒を済ませることができた。

(血が、止まらない。……血が！)

だが、それは所詮彼の死を遅らせることはあっても、死を免れるようなことにはならない。結局彼の体は既に致命傷の域に達していたのだから。

背中の木に体重を預けているシユン。彼の呼吸は時間の経過につれて浅くなつていく。

サツキが必死に彼の未来をつなぎとめようと処置を進めても、彼の命は徐々に弱まっていた。自然治癒力はもう役割を果たさず、ボロボロの体からは少しずつ彼の血が外へと流れていく。

(お願い！ 止まって！)

『もう無理だ』とどんな名医が見ても答えるだろう。視覚の消失からも読み取れる。シユンの死期は近いと。

サツキもそれくらいは理解している。だが受け入れられるわけがない。

自分のせいでこのような目にあった少年をどうして見捨てられるのだろうか。

——サツキは洗脳下にある間も意識は完全に消えていたわけではなく、記憶も一部ではあるが覚えていた。必死に自分の名前を呼ぶ声も、実力差を実感しながらも向かってくる少年の姿も。

だからこそ、余計に辛かった。

「サツキ、さん……」

「駄目。喋っちゃ——いえ、ごめん。喋り続けて。寝ちゃ駄目だよ」  
「その時は、起こしてくださいよ。俺があなたを起こしたみたい」  
目が見えなくなってしまったが、聴覚はまだ残っていたので会話は出来る。掠れ声でありながらもまだ意識は残っていた。

こんな時でも心配はさせないようにと、冗談交じりで返すシユン。いつものような口調で、いつもよりも弱々しい声は今にも消えてしまいそうな儂いものだった。

「——また、泣いて、るんですか？ うっ！」

『だとしたら、申し訳ない』とそう続けるはずだった言葉は吐血によつて阻まれる。

「泣いて、ないよ。見えないから、シユン君がそう思っているだけで」  
「嘘、ですね。サツキさんは……本当に、優しいから。嘘を……っ、けば……わかります、よ」

せめてこれ以上彼の心が傷つかないようにと虚勢を張ったが、すぐに見破られた。

本当はずつと涙がこぼれていた。

枯れ果てるほど流したはずだったのに、まだ止まらない。彼女が流す大粒の涙は今も溢れ続け血の水溜りの中へと落ちていく。

「……ポケモン達、は？」

「皆無事よ。私のポケモン達がそれぞれ手当ををしている」

「無事、か。よかった。——普通の状態、なんですよ？」

「え？ 普通？ うん。傷は多少あるけれど皆動けるくらいには戻っているわ」

場の雰囲気を変えようと思ったのか、シユンは少し離れた位置で治療しているポケモン達の事を尋ねた。

今はポケモン達がお互いの傷を癒していた。もつとも重症であったスターミーも「しぜんかいふく」によつて痺れを治し、薬によつて傷を癒している。

「は、ハハッ。そう、か。やっぱり、な」

「どういうこと？」

だが、シユンが知りたかったのはサツキが答えたことではなかった

ようだ。

突如笑い始めたシユンに違和感を覚え、サツキは質問の意図を問い直す。

「俺、力の解除……して、ない……んです、よ」

「……え？」

力、というのは彼が持つ特別な力のことと間違いないだろう。

ただ解除していないというのはどういうことなのか。今までの治療や先の戦いで見た光はシユンの体からもポケモン達の体からも消えているのだ。解除もしていないのに消えるはずがない。

ならばどうして？

「嘘でしょう？ だって今シユン君は」

「そう。力を使って、いるのに、できて、ない。つまりは……もう俺に、余力は……ない、という、こと……」

答えは簡単だ。

——シユンの体には、他の何かに分け与える生命エネルギーが残っていないということ。

力の持ち主の意志に反するエネルギー譲渡の中断。これが意味することはただ一つ、力の使い手の死期が近いという事だ。

「そんな！」

あまりにも残酷な事実だった。彼はもうすぐ自分が死ぬという事を察して笑ったのだ。

「意志が強い人間は、それでも力を使い果たすまで続けることもあるそうですけど。どうやら俺には、そんな意志の強さも、なかったよう、えあがつ！」

「シユン君！」

自虐気味に続けることさえ出来ず、また彼の体から血があふれ出した。

「……ああ、少し疲れたな」

「頑張って」

「ちよつと、休んじや駄目ですか？」

近づく死に気力も尽き果ててしまったのか、シユンは小さく笑って

弱音を零した。

サツキは不安に襲われ強い口調で言う。

「駄目。休むなんて絶対に許さない。頑張って」

「……ははっ。厳しい、な」

「そうだよ。私はただ甘やかすわけにはいなかんだから」

「……」

「言ったでしょ？ あなたも一緒に生きなきゃ駄目だって。ほら、旅に出たとき、事件が解決したらハウエン地方に行こうって約束だったじゃない？」

「……」

「だから——シユン君？」

少しでもシユンの心を勇気付ける為に、サツキは声をかけた。

旅の出来事を思い返しているとまた涙が出てシユンの頬に落ちた。そんな事にも気づかないまま話を続けて、ふと彼からの反応が無くなったことに気づいた。

「シユン君、しつかり！ 寝ちゃ駄目！」

嫌な予感がして頬を叩きながら名前を呼ぶ。

「……サツキさん」

「あつ、よかった！ なに？」

直後にシユンから返答があった。

ひとまず最悪の展開が起きたわけではないということに安堵し、サツキは肩をなでおろす。

「サツキ、さん？」

「どうしたの？」

「そこに、いるんですか？」

「……シユン、君？」

だが何か様子がおかしい。

先ほどまで出来ていた会話が出来ていない。シユンの呼びかけにきちんと返しているはずなのに、まるで彼には届いていないようだった。サツキはすぐに彼の異変を感じ取り、名前を口にした。だが、シユンの返答は——

「もう、声が、聞こえない……」

「っ……!?!」

——絶望した。

彼にはサツキの声が聞こえなくなっていた。もう何を言ったとしても彼には届かない。

シユンは何も見えていない瞳で、何もない空を捉えて、涙を流して、サツキへ尋ねた。

「俺は、まだ……この世界にいますか?」

何も感じず、何も見えず、何も聞こえない。彼は自分が生きているのか死んでいるのかも分かっていない。

あらゆるものを失った少年は、うわ言のようにそう呟き、サツキがいると思っっている、何もない空へと手を伸ばす。

「ここににいるから! あなたは、今も生きているから!」

彼の手を掴んで、サツキは叫んだ。

「だから、生きて! 戻ってきて!」

先ほどシユンが彼女を救ったときと同じように彼の心に訴える。ひたすら呼びかけ続けた。

シユンは答えなかった。代わりに彼の右手は力が緩む、地に落ちる。

「……シユン君?」

もう一度。

呼び掛ける、返事はない。

頬を叩く、反応はない。

鼻と口を覆うように手を当てる、呼吸をしていない。

脈をはかる、何も感じない。

胸に耳を押し当てる、心臓の鼓動がない。

「……あぁっ!!!」

生命反応が消えていた。若い命の炎が消えてしまっていた。

果たして彼は、最期の瞬間を理解したのだろうか。

自分の生を感じることができたのだろうか。

自分の死を受け入れることができたのだろうか。

誰にもわからない。もはやそれを確かめる術は永遠に失われてしまったのだから。

「ごめん、ね」

幼い導き手は、最期の最後まで孤独の運命に翻弄され続けた。

「……おやすみ。ここまですつと戦いの連続で、休む暇もなかったから、疲れたでしょう？ ゆっくり、おやすみ」

せめてこれからはゆっくりと休めるようにと。サツキは手のひらでシユンの瞼をなぞった。

「……ハッ！ ハッ、クハハハハ！」

セキエイ高原。

瓦礫の山と化した戦場で仮面の男は一人高らかに笑っていた。

ガンテツを脅し、『時を捕えるモンスターボール』の作成秘伝の書を手にした。邪魔者であるゴールドとクリスタルも蹴散らした。

これでこの場に留まる理由は存在しない。

早く目的の場所に旅立とうとして、彼にとっては吉報の知らせに仮面が大きく歪む。

「死んだ、か。サツキが洗脳から解かれるというのは予定外の出来事だったが。よく持ちこたえたものだ。貴様らの仲間を褒めてやるといいぞ」

「……ん、だど？」

地に横たわっているゴールドを嘲笑うように告げる。

『お前達の仲間が死んだ』と仮面の男は言った。この場にはいない仲間、つまりシユンのことを指しているのだろう。だが敵の言う事など信じられるわけがない。

ゴールドは顔だけを起こして仮面の男をにらみつける。

「ふざけた事ぬかしてんじゃねえぞ。死んだだど？ てめえ、シユン先輩が死んだどど言うのか？ 適当なこと言ってるじゃ」

「死んだよ。そもそも、以前から貴様は知っていたのではないか？」



あの男が力を使い果たすようなことがあれば、その場で力尽きるということを」

「なっ——!?!」

「どうやらよほど追い込まれたようだな。限界まで命を使い果たしたようだぞ。文字通り命がけ、というわけだ。サツキと互角以上に渡り合うとは驚いた。先に仕留めておいて正解だった」

追い詰められた人間が見せる捨て身の行動は読みきれない。

だからこそ仮面の男はシュンに対してサツキを仕向け、消耗するよ  
うに仕向けたのだと語る。

全てが己の思惑通り。

多少のズレこそあるが、計画に支障はない。事が上手く進み、仮面の男は上機嫌の様子だった。

「ま、待てよー」

敵の様子から、おそらくシュンが死んだということは事実なのだろう。

ゴールドも覚悟はしていた。最悪の予想はしていた。あの人ならば、大切な人のためならば命をかけてしまいかねない。

だから本当にシュンが死んでしまったのかと半信半疑になり、それ以上に理解できないことに気づいて仮面の男へ問いを投げた。

「なんで、なんでダメエがシュンさんの力のことを知っているんだ?」

本来ワカバタウンに伝わる力は所有者の希少性もあって全くといっていいほど知られていない。ましてシュンがその力を持っていると知っているのはかなり限られた人物だけだ。

これまでのシュンが仮面の男と戦った時も、ワカバの力は見せていないと聞いている。

しかし今の仮面の男は知り尽くしているような口調であった。一体何故この男はそこまで知っている?

「なんでだど? 決まっているだろう。やつが力を持っていると知っている人間に聞いたからだ」

「知っている人間?」

そう言われても答えは出てこない。該当する人間は大体わかって

いるが、皆仮面の男と通じているとは思えない人物ばかりだ。

ゴールドをはじめ、オーキド博士とウツギ博士、そしてシユンの母。四人とも彼の身を案じていて敵と通じているとは思えない。

あるいはサツキを洗脳する前に尋問でもしたのだろうか？　だが彼女は洗脳以前に生命の危機に瀕していたのだ。そんなことが出来るとは思えない。洗脳されたロケット団員の様子を見ると何もかも自由に操れるようには見えなかったため洗脳後に聞いたということもないだろう。

だがそうなるともはや思い当たる人物はいない。あと知っている人間がいるとすれば、今は所在が明らかになっていない――

「……ま、まさかー！」

ひたすら考えて、ゴールドは正解にたどり着いた。

「その通りだ。よく知っている人間がいるだろう。私が聞いたのはシユンの父親――エイジだ」

一人だけいた。行方不明となっているシユンの父親、エイジ。彼から仮面の男へと情報が渡っていた。

ゴールドも行方がわかっていない事は知っていた。まさかこのような所で、敵の口からその存在が打ち明けられるとは思ってもおらず驚愕する。

「警察と連携して活動を行うポケモンレンジャーだった為か、やつは逸早くウバメの森で起こっていた異変を察知した」

仮面の男が時間を捕える為に動き出したのは最近のことではない。数年もの時間をかけて挑み続け、しかし叶うことはなかったものだ。度々ウバメの森を訪れては挑戦し、願いを叶えようとしていた。

その為には森に入って来る者がいれば邪魔になりかねない。かつてゴールドに仕向けたように自然現象に見せかけて侵入者を排除する必要があった。

しかしその変化をポケモンレンジャーであるエイジによって発見された。

「事件が起こっているという確信はなかったのだろう。他の仲間には知らせずにウバメの森を調査し、私の存在に気づいて勝負を仕掛けて

きたよ」

「……何をしたんだ？」

「私の邪魔をする可能性がある職に所つく者を、そのまま帰すわけがないだろう？」

「じゃあテメエが！　テメエのせいで——どんだけ腐っついていやがんだテメエは！」

これほどの敵を相手に個人単位で挑むとすれば。その結果は語るまでも無い。

エイジは捕えられ、情報をはかされたということだろう。そして仮面の男のせいで彼ら家族の関係は壊された。父親が消えてからの様子は聞き及んでいる。その為にシユンが心に負の感情を懐いていたということも。

それらも全てこの男のせいだとわかって、ゴールドは激昂を抑え切れなかった。

「——怒り狂うのは勝手だが、少しは感謝してほしいものだが。こちららはせめてもの気持ちで、シユンにはプレゼントを贈ったのだから」  
「何を言ってる。プレゼントだと？　人のことを馬鹿にするのも大概にしろ！」

「ふっ。事実なのだがな」

だから今のゴールドには仮面の男の真意は伝わらない。仮面の下で口角を下げた仮面の男は、数ヶ月前の出来事を思い出していた。

ロケット団の首領としてではなく、表の顔としての副業をしていた時のことだ。

エイジから預かっていた荷物の中にあつたポケモンの卵。後にその親は彼がつれていた一体、バクフーンとわかった。

その卵が少しずつ動き出したかと思えば、突如卵の殻に輝が入り始めたのだ。

「これは……！」

卵の動きは大きくなり——ヒノアラシが孵った。

仮面の男はかつてポケモンを孵したことがあつた。おそらくそういう素質があるのだろう。今回もまた一匹の新たな命を生み出し

たのだ。

「……フン」

幼く弱いポケモンを従えても今からでは間に合わない。あるいは残された善意が働いたのかもしれない。

仮面の男は部下に命じてワカバタウンにまで行かせて——そのヒノアラシを逃がした。

後にこのヒノアラシはウツギ博士によって保護され、彼を通じてシユンの元に渡ることとなる。

「皆、もう大丈夫ね？」

エンジュシテイの郊外で、サツキは準備を整えていた。

ポケモン達はしっかりと回復を済ませていた。シユンの持ち物にあつた回復薬も拝借したおかげで万全の状態。いつでも旅立てる状態だ。主の呼びかけに力強く頷く。

「あなた達はどうする？」

続いてサツキはシユンのポケモン達の方を振り返った。

ピカチュウ、バクフーン、バンギラス、ピジョット、サンドパン、ラプラス、ヘラクロス、エーフィ、ハッサム。九匹も回復を済ませている。戦力として出来ることならばついてきて欲しい。

だが、皆がシユンを囲むようにじっと立ち尽くしている姿を見て、考えるまでもなかったことだと息を吐いた。

「そうね。あなた達は、シユン君を守っていて」

意思を汲み取り、サツキからもお願いする。

九匹は揃って静かに頷き、今一度シユンの顔を見つめた。

「……戻ってくるから、待っていてね」

少し冷たくなった頬を優しく撫でる。

シユンの体勢は先ほどと変わっていない。ゆっくりと誰にも邪魔されないように眠らせてあげたかったが、今も進行している仮面の男を止める為にはすぐに動き出さなければならなかった。

だから必ずここに戻ってくることを約束して、サツキはシユンと別れた。

「行きましょう。スターミー、移動はお願いね。絶対に——ッ？ え？」

改めて決意を露にすると、足元を小さな力でつつかれた。

彼女のすぐ後ろでシユンのピカチュウが呼び止めていたのだ。

「ピカチュウ？ どうしたの？ ……それは、メール？ まさか私に？」

ピカチュウが口にくわえていたのは、「におえメール」。

決戦の前にシユンが書き残していたものだった。

リュックの中からメールを取り出すと、トレーナーの命令どおりにサツキへとメールを渡す。

一体何が書いてあるのかわからなかったが、理由もなしにこのようなものを託していたとは考えられない。

「ありがとう。戦う前に読んでおくね」

だから彼が残したメッセージはしっかりと受け取るということ約束して、サツキはその場を後にした。

「……ピツカ」

スターミーに乗って去ったサツキの姿を見送り、九匹は動かなくなったトレーナーともう一度向かい合う。小さく、震える鳴き声が木霊して、その後は静寂が空間を支配した。

「やっぱり、あなたからよね」

スターミーの体に乗ったまま、サツキはメールの中身を読んでいた。

メールはやはりシユンからであった。

一言一句読み落とさないように、しっかりと目に焼き付ける。

『——サツキさんへ。』

この手紙はもし俺に何かがあった時、ピカチュウに渡すように指示しておきました。だからもしもサツキさんがこの手紙を読むことがあるとすれば、その時はおそらく俺はもうこの世界にはいないと思います。

うずまき島の戦いでサツキさんが仮面の男に連れ去られ、オーキド博士もあなたの生存は望めないと語っていましたが、それでもあなたは生きていると、そう心のどこかで信じたくてこの手紙を残しました。

俺はやはり仮面の男を許せない。平気で人の命を弄び、利用する悪の存在を野放しにしておけない。

ゴールドに止められ、そしてきつとおそらくあなたも止めるでしょうが……俺はやろうと思います。絶対にあいつは生かしておけない。そしておそらく今の俺の、俺のポケモン達の力だけでは勝てないと思います。だからあなたとの約束を破り、力を行使することを決意しました。

本当に申し訳ありません。あれほど固く誓った約束を破る事を、どうか怒ってください。これは俺が決めたことです。だから、どうか俺が消えたとしても悲しまないでください。

最後に、ピカチュウには伝えましたが俺のポケモン達のことをお願いいたします。

そしてもしもワカバタウンに寄ることがあれば母さんに俺は旅に出たと伝えてください。

今まで本当にありがとうございます。どうかサツキさんは幸せになつてください。

———『シユン』

読んでいる途中から、サツキのメールを握る手が震えていた。

彼は最初からこの戦いで命が終わることを覚悟していたのだ。巨悪を相手に自分ひとりでは敵わないかもしれない。だからその時は死を覚悟の上で敵を倒す。

これは自分で決めた自分の意志だから、どうか傷つかないように。サツキだけは、生きているならば幸せになつて欲しいと。

「……馬鹿！」

手紙の中でさえ、他人への配慮ばかりであつた。

許しを乞う言葉さえなく、ただ後の心配ばかりして、自分のことを考えていない。そして自分が消えた後の周りの人間のことを考えていない。

なぜ、わかつてくれなかつたのか。——いや、違う。

本当はわかつているはずだ。わかつていたはずなのだ。

ただそれが目に入らなくなつてしまうほどに敵を許せなくなつただけ。

「謝るのは私の方、なのに。本当に、ごめんね……」

全てはサツキがいなくなつたことが原因。それにより再び彼の心が負の塊と化してしまつた。

謝る相手がいなくなつてしまつた今、償う事さえ出来ないけれど。せめて彼が救つてくれた自分が、彼の代わりに役割を果たさなければと自らを奮い立たせる。

脇目も振らず決戦の舞台へ一直線に向かう。さらにスターミーは加速——彼女達の進路先に、突如ゴルバットとヤミカラスの集団が立ち塞がつた。

「＼エアカッター＼！」

「＼だましうち＼！」

ロケット団残党達のポケモンであつた。

仮面の男の命令により、邪魔者達を排除する役割を受け持っているのだろう。

一歩も先を進ませないようにと一斉に襲い掛かる。

「邪魔しないで！ スターミー、＼10まんボルト＼！」

しかし彼らは彼女の足止めを果たす事は出来なかつた。

スターミーのコアより放たれた強烈な電撃はとりポケモン達を一挙に攻撃。その威力は強烈で、一撃で戦闘不能となり、ゆっくりと地上に落ちていった。

「行くわよ、スターミー。急いで——ウバメの森へ！」

涙を払ってサツキは自慢のポケモンへと指示を飛ばす。

『よいな。私がハウオウを手にするまで、そしてほこらに光が舞い戻る今日の夕刻まであの少年を引き付けろ。抵抗するようならば——殺せ』

行き先は、仮面の男も向かうと予測される場所。洗脳された時の命令から予測される、『ほこら』が存在するウバメの森だ。

ジョウト全土を揺るがす物語が、結末を迎えようとしていた。

ここまでの活躍をポケモンレポートに書き込んでいます……………

主人公：サツキ

持っているバッジ：16個

手持ちポケモン

スターミー Lv88

ニドクイン♀ Lv91

ギャロツプ♀ Lv83

サンダー♀ Lv85

キレイハナ♀ Lv86

メタグロス Lv74

レポートに書き込みました!!



### 第三十九話 VS フーデイン 瞬す者

(夕刻まであの子を引きつけろと仮面の男は言っていた。命令が本当ならばおそらく時間はあと一時間もない。急がなきゃ！)

洗脳時の仮面の男の指示から敵の動きを逆算し、サツキはウバメの森へと向かう。

情報収集の為にポケギアのラジオを流す。どうやら既に敵はポケモンリーグを崩壊させたようだ。ならばそちらの仕事が終わった敵も急いでウバメの森へと向かうだろう。尚更の事時間は残されていない。

伝説のポケモンの捕獲が目的ならば敵に先手を打たれるわけには行かない。一瞬でも早くほこらへとたどり着き、敵を待ち受ける必要があった。

「待てー！」

「ッ!? ——スターミー、ストップ！」

突如何者かの制止の声がかかった。

はるか遠く、上空にヨルノズクに乗ったトレーナーの姿が見えた。横にはフーデインも浮かんでいる。

背丈、格好から男であるということがわかった。たとえ顔に仮面の男に従っているという証拠である仮面を纏っていたとしても。

(この人、自意識がある? まさかロケット団の幹部?)

違いがあるとすれば、この男は自分の意志があるということだ。普通の洗脳であるならばまともに会話などできるわけもなく、言葉を発したとしても命令内容に従った状況と関係のない言葉を連呼するだけだろう。先ほどまでサツキがそうであったように。

だがこの男はそうではない。

ならば洗脳とは別の目的で仮面を被っているということになる。よほどの強敵なのかとサツキは警戒を強くした。

「私に戦うつもりは無い。君の邪魔をしに来たのではなく、ただこれを渡しに来ただけだ」

そんなサツキの予測からは外れて、男は静かな口調で告げた。

男がフーデインへ首を向けるとフーデインは手に持つスプーンを伝って念力を発動。男が右手に持っていた小さな袋をサツキの元へゆっくり運んだ。

「……スターミー。警戒を続けて」

罨の可能性も考慮してサツキはスターミーへ指示を出した。

ゆっくり慎重に袋を開封する。中には虹色と銀色、対照的な輝きを放つ二枚の羽が入っていた。

「ポケモンの羽？」

羽で間違いないはずだが、このような物をわざわざ渡す理由が理解できない。

「にじいろのはねとぎんいろのはね。共にホウオウとルギアの翼からとったものだ」

「伝説のポケモン達の羽？　これが一体何の役に立つと？」

「その二枚があればほころの中、つまり伝説のポケモンが眠るという時間のはざまへと入ることができる」

「——ッ!？」

『ほころ』と、『伝説のポケモン』と確かにこの男は言った。

時間のはざまという聞き覚えの無い単語も出てきたが仮面の男が狙っている事と関係しているだろう。

余計に意味がわからない。事実ならば男の行動は明らかに仮面の男に対する反逆行為だ。

「あなたは、何者？」

的確な答えが返ってくるとは思えないが半信半疑で男に問う。

「……私はある者の頼みを受けて仮面の男に協力していた。しかし既にその頼みは果たされた為に仮面の男に協力する理由がなくなった。君は信じられないだろうかね」

「頼み？」

「ああ。ではこれで失礼させてもらう。君も急いだ方がいい。あの男、そう簡単に止められる相手ではなさそうだ」

そう言った直後、フーデインが持つスプーンが輝きを放った。

光は男達を覆い隠して——光が消えた頃、そこには誰もいなかった

た。おそらくはフリーデインの「テレポート」だろう。

「消えた。一体誰が、何の為に……」

頼みと言っていた。つまり彼は自分の為に動いていたのではなく、誰かの為に仮面の男と協力していたということになる。仮面の男とは違う何者かの為に。

しかもその頼みが果たされたということは、これまでの間に何かが起こったということだ。

その目的がセキエイ高原を占拠する事なのか。あるいはジムリーダー達を拘束することなのか。伝説のポケモン達を捕える事なのか。様々なことが起こりすぎた為に絞りきれない。そして目的が果たされた今、あの男がどこに行つて何をするのも予測できなかった。

「いえ、考えても仕方が無いわ。スターミー、発進して」

いずれにせよ自分があの男に対してできる事はもうない。

ならば一刻も早く自分の務めを果たすべき。再びスターミーへと指示を飛ばして決戦の地へ飛んで行った。

「……ん。……はっ」

その頃、セキエイ高原では意識を失っていたイエローが目を覚ましていた。

イエローは一時的にジムリーダーの控え室に横にさせてもらっていたのだが、その部屋の壁が大きく撃ちぬかれている光景を目にして驚愕する。

自分が寝ている間に大きな事件が起こってしまった事を知り。そして意識を失う直前に目にした事を思い出し、イエローは即座に立ち上がった。

「いけない！ 皆に伝えなきゃー！」

天井が崩れた廊下を一目散に駆け出した。

きつとワールドもクリスタルも近くにいるはずだ。

ならば自分が目にした男の姿を伝えなければならない。イエロー

を襲撃した男性は、二人にとっても非常に重要な存在なのだから。

「ああ、ようやくだ。これでようやく迎えに行くことが出来る」

一方、セキエイ高原で繰り広げられていた激戦は終わりを迎えようとしていた。

ゴールドとクリスタルを退け、時を捕えるモンスターボールの作成秘伝の書も手にした。

遅れて会場に戻ってきたジムリーダーと伝説のポケモンも、敵の罠を逆に利用する事で封じ込め、彼らの追撃を阻止する事に成功する。

もはや心配は何もない。これでようやく悲願を遂げる事が出来る  
と仮面の男は確信していた。

「待て。お前はウバメの森に行くことは出来ない」  
「む?」

吹き抜けとなった会場の屋根の上で、安心しきっていた仮面の男のすぐ近くに一つの影が突如現れた。

それはサツキと会話していた男であった。テレポートでこのセキエイ高原まで一気に空間を跳躍したのである。念能力の高いフリーデインだからこそできる荒業であった。

「なんだ貴様か。一体何用だ? シュンの結末を見届けると言ったから単独行動を許したというのに、わざわざ戻ってくるとは」

「なに、別に特別な要件ではない」

するとその男は仮面の男の問いかけに対して言葉ではなく、行動でその答えを示した。

「フリーデイン、締め付けろ」

「うっ!」

突如仮面の男の体を念力が襲う。予想外の出来事に対応できなかった仮面の男は、一瞬で身動きを封じられてしまった。

「かえんほうしゃだ、バクフーン!」

そして新たにモンスターボールから繰り出したのはバクフーン。

口から吐き出された強烈な炎が一直線に向かう。

常人ならば、そして仮面の男であろうとも氷の体であるならば、これをまともに受けければ致命傷になりかねない。

「このっ、なめるなあっ！」

しかしそうはならなかった。

仮面の男の体が歪に変形し、刺々しい姿と化すと、フリーデインの拘束を力で振りほどき、バクフーンの攻撃も吹雪ではじき返した。

「ホウオウ、ルギア！」

さらに控えていたホウオウとルギアを呼び戻して攻撃を命じる。炎と風、二つの強力な技がバクフーン達目掛けて繰り出された。

大技が当たると思われたその瞬間、男やポケモン達の姿が一瞬で消える。

「テレポートか！」

「ヨルノズク、ゴッドバード！」

エスパーの力が再び威力を發揮した。敵の背後を取ると、今度はヨルノズクがすさまじい加速をつけて二匹に突撃する。

凶鑑所有者やジムリーダーとの連戦で疲労がたまっていた二匹は回避が間に合わない。

ヨルノズクの攻撃が敵の急所をとらえ、二匹は大きく怯んでしまった。

「ぐっ」

(もう少しというところで、こんな時に！)

「なぜだ。なぜ今になって貴様が私に逆らう！」

「……もとお前にお前に従った覚えはない。ただ、必要だったからお前に近づいただけだ」

夢がもう少して叶うという時に邪魔をしてきた相手。仮面の男の憤りは凄まじかった。

その怒りを男は受け流すようにかわしてさらに追撃を命じる。

連戦の直後、しかも念能力を使うポケモンがいるという事もあって仮面の男は蹴散らすことが出来なかった。

「あれは、誰？ 仮面をつけているように見えるけど、仲間割れなの

「？」

「わかんねえよ。けど」

「ゴールド？」

(ヨルノズクに、フーデイン。そしてバクフーン。あのポケモン達、なんか見覚えがある気が……)

戦いは真下の会場にいるゴールドやクリスからも見えていた。

新手の登場かと思われた直後の戦い。クリスタルは状況の変化についていけず困惑するばかりだ。対してゴールドは、この場に現れたトレーナーの手持ちポケモンに既視感を覚えて記憶をたどっていた。

何処か、身近な人が連れていたポケモン達に酷似しているような気がしたのだ。

「いた。ここだったんですか。ゴールドさん、クリスさん！」

「あつ？」

「イエローさん!? もう起きて大丈夫なんですか!？」

「はいー！」

そう記憶を呼び起こしていたのだが、背後からの呼びかけで中断を余儀なくされる。

やってきたのは意識を失っていたイエローだ。

何者かの襲撃を受けていたと聞いていたが、もう回復しているのか二匹のピカチュウと共にこの場に戻ってきた。しかもオスのピカチュウ——レッドのピカは卵を抱きかかえたままだ。よほど大事なのだろうか、がれきだらけの会場も相俟って少し危なっかしく見える。

「それよりも二人とも聞いてください！ 大変なんです！」

「大変って何すか？ こっちは仮面の男が現れるわ、伝説のポケモンが敵になるわで一大事つすよ？」

「こつちも一大事かもしれないんです。さつき僕は会場で襲われたんですけど、その時にみた人の顔が——あつ!？」

「イエローさん!？」

言葉を繋げようとした瞬間、地面より伸びた水色の大きな腕がイエローと、近くにいたピカチュウをつかみ取る。

仮面の男が作り出した氷の腕だった。天井から伸びた腕がイエロー達を捉えると、主である仮面の男の下へと戻っていく。

「なっ!？」

「ポケモン達をボールにしまえ。……見殺しには出来まい。どうやらこのピカチュウは卵を抱えているようだぞ?」

「ッ!」

狙いは敵の動きを止める事だった。

眼前に取られた人質の姿は、彼にとっては致命的だった。

トレーナーとポケモン、そして卵を見た男の眼光が大きく見開く。怒りに拳を握りしめ、仮面の男をにらみつけて。

結局なすすべもなく三匹のポケモンをモンスターボールに戻した。

「それでいい。さあ、ボールを地面に置け」

さらに仮面の男は指示を続ける。逆らえばイエロー達の命がない事は明白だ。ゆっくりと、言われた通りにボールを真下の地面に置く。

「ふん」

一つ息を吐き、仮面の男は腕を払った。

この動きだけで冷気が巻き起こり、モンスターボールの開閉スイッチとその周囲が氷で包まれる。ポケモンはボールの開閉スイッチを押さなければ外に出てこれない。技も発揮できず、戦力と数える事は不可能だ。

「これで貴様はしばらく身動きは出来ぬだろう」

「……ああその通りだ。さあ、もう十分だろう。彼らを放せ」

「ふん。言われなくてもそうしてやる、さ!」

「ぐっ!」

すると用済みとなった敵を氷の腕が薙ぎ払った。同時に捉えていたイエロー達も手放した。

支えを失った男とイエロー、二匹のピカチュウが天井の裂け目から地面へと落ちていく。

「おい、嘘だろ! ウーたろう! クリス、お前も!」

「うん! エビぴよん!」

即座に彼らを救出すべくゴールドとクリスタルは行動に移った。

ポケモン達もボールから出して指示を飛ばすと、ゴールドがピカを、ウソツキーが男を、エビワラーがイエローを、クリスタルがメスのピカチュウ——ちゅちゅを地面にぶつかる前に抱きとめた。

「余計な時間を食ったな。さあ、今度こそ」

結末を見届けた仮面の男は追撃をせず、デリバードに捕まってホウオウ、ルギアと共に会場を後にした。もはや自分の障害ではないと判断したのでろう。

「あの野郎！」

「あ、ありがとう」

「ぐっ……」

「大丈夫ですか!?!」

飛び去った方角をにらみつけるゴールド。だがもう敵は遠ざかり、何もすることが出来ない。それが歯痒くて噛み締める動きを止められなかった。

一方、助けられたイエローやピカチュウ達は怪我はなかったものの、攻撃を受けた男は痛みで顔をしかめていた。先ほど薙ぎ払われた事でダメージを負ったのだろう。ただクリスの呼びかけに気丈に振る舞い、無事であると表現していた。

「問題ない。それよりも奴を追わなければ。すまないが、上にあるボールを運んでもらえないか？ このまま見過ごすわけにもいいかない」

「構いません。でもボールを封じられては、できる事なんて……」

「問題ない。凍らされたなら砕いてしまえばいいさ」

エビワラーの腕から降りると、男は鞆からあるものを取り出した。

「ピツケル？」

「ああ。氷を砕く用のね。本来なら自然の氷を除去する為の物だが、こういう使い方だってできるはず」

出てきたのはアイスピツケルだった。

クリスタルのネイティが運んできたボールを受け取ると、開閉スITCHに施された氷目掛けてピツケルを穿つ。



さすが仮面の男の生成した氷。砕けはしなかったが、表面の一層が削れている。効き目があるという証拠だった。

「私はボールが直ったらすぐに向かう。君たちはどうする?」

作業を続けながら男は二人に問うた。彼らの姿を見て、二人も仮面の男に敵対する者と判断したのだろう。

視線を向けられると、まず先に口を開いたのはゴールドだ。

「もちろん奴を追うぜ! でっかい借りがあるからな。——何より、敵討ちでもあるんだ!」

そう言い放つゴールドの表情には悔しさとは別な怒りが募っていた。

一足早く仮面の男に挑み、そしてサツキを救うために命を燃やし尽くしたシユンへの弔いという事なのだろう。

彼の後輩であるゴールドが黙っていられるわけがなかった。

(シユン先輩でも絶対迷わずに戦おうとしたはずだ。絶対に負けらんねえ!)

彼の遺志を引き継ぐ為にも仮面の男を好きにはさせられない。今度こそあの男の野望を打ち砕き、大切な存在を守ろうと決意を固めていた。

自然と腕に抱きしめていたピカチュウを抱く力も強まった。

自覚のない動きであったが、そんな見知った彼の行動を見て男は小さく頬を緩めて。

その瞬間、ゴールドが抱擁していたピカチュウの腕の中にある卵が肥大しはじめた。

「えっ?」

「なっ?」

「ピカ、これは?」

「まさか!」

大きくなった卵の表面にはうっすらと黒い筋のような模様が浮き上がる。

同時に卵が前後左右に揺れ始め、中に宿る生命の誕生を告げていた。

「……本当に、そういうことなのかよ。オーキドのじいさん！」  
ピカ、そして卵をゆつくりと地面に置くゴールド。

口角が上がる。

この戦いが始まる前に育て屋から受け取ったオーキド博士の文章の内容が思い浮かんだからだ。

書にはレツドをはじめとした初代図鑑所有者、さらにシユンやゴールドなどジョウトの図鑑所有者が秘めた能力について記されていたのだ。

その中でゴールド本人について書かれていた力。それは。

「ポケモン孵化！」

孵す者、ポケモン孵化。

間接的に抱いていたゴールドの影響を受けたのだろう。ピカチュウが持っていた卵から、ピチューが力強く殻を破って生命を宿したのだ。

「産まれた……」

「初めて見るポケモン。この子が、ピカの持っていた卵から孵ったんだ」

「なるほど。君もそうだったか」

目にしたことのないポケモンの誕生に、三者三様の反応を示す。

突然の新生に皆驚きを隠せなかった。

そんな中、いち早く立ち直った男は作業を続けながらゴールドに進言する。

「少年。君はそのポケモンを連れて先に仮面の男を追うといい。この場での誕生にはきつと意味があるはずだ」

「ああ。言われなくてもそのつもりだったぜ。……イエロー先輩、すみませんけどこのポケモン、俺が連れて行ってもいいっすか!？」

「は、はい！ その子もどうやらゴールドさんを気に入っているようですし」

少し寂し気な口調でイエローはゴールドへ許可した。

視線の先では生まれたピチューがゴールドを親と考えているのだろうか、彼の足元にぴったりとくつつき、彼のズボンを握っている。

「なら俺は先に行かせてもらうぜ。バクたろう、頼む！」

「ゴールド！」

ピチューを胸元へ抱き寄せると、ゴールドはバクフーンの背中に乗って仮面の男が飛んで行った方向へ向かっていった。

クリスタルの呼び声にも反応を示さない。

今度こそ止めてやるといふ彼の決意はそれだけ強かった。

「また勝手に！ イエローさん、私たちも行きましょう！」

「はい！」

独断専行するゴールドを見たクリスタルは大きく息を吐いた。そしてすぐに意識を切り替えるとイエローと共に彼の後を追おうと考えた。

「待ってくれ！」

「えっ？」

「君たち二人は一度この会場の屋上に向かってほしい。伝説のポケモンと、ジムリーダーたちの姿があった。彼らの中にまだ戦えるものもいるかもしれない。確認して可能ならば一緒に行った方が良いでしょう」

「そういうええばさつきスイクンが！ わかりました！」

「ありがとうございます！ あなたも気をつけて！」

男の説明で、先ほどスイクンの技で封じ込められてしまったスイクン達とジムリーダー達の姿が脳裏をよぎった。

確かに彼らの力は大きい。助力を乞えるなら行動を共にした方がよい。戦力は大きければ大きいに越したことがないのだから。

クリスタルとイエローは方針を変え、進言に従って彼らの下へと向かう。

「……良い仲間を持った。さすが、お前の友達だな。シユン」

迷いなくすぐに行動する二人。

先のゴールドの姿も思い出して、男は顔の半分を覆っていた仮面を引きはがし、笑みを浮かべながらそう言った。

## 第四十話 V S ラプラスⅡ 時間のはざま

ウバメの森。

ヒワダタウンの西に広がる自然豊かな森だ。

中央には伝説のポケモンを祭り上げる祠が存在し、地元の人々の信仰も厚い土地。

その平和であった土地に今、仮面の男が舞い降りた。

「間に合ったか」

ホウオウとルギアは部下に預け、未だに妨害に来るであろう侵入者への迎撃にあてた。

セキエイ高原で戦っていた敵もここまでたどり着くにはまだ時間がかかるはず。

ボールも手にした今、準備は万全だ。あとはボールの完成を待つて伝説のポケモンを手にするのみ。

「間に合った？ 間に合ったのはあなただけじゃないわよ！」  
「むっ？」

地面に降り立った仮面の男。

その男目掛けて、彼が来た方向からは逆の上空から声が届く。

見上げるとすさまじいスピードで接近する影が一つ浮かんでいた。

スターミーに乗ったサツキである。エンジュシテイからの道中、数えきれないほどのロケット団員からの襲撃があったものの、それら全てを蹴散らしてここまでたどり着いたのだ。

「ちっ。やはり団員では時間稼ぎにしかならなかったか」

「スターミー、ハイドロポンプ！」

攻撃範囲に至るやすぐに攻撃が開始される。

警告はもう必要ない。容赦ない水流が仮面の男へ向け発射される。

「無駄だ」

水流が直撃する寸前、仮面の男の眼前に氷の盾が広がった。水流は盾を打ち破る事は敵わずに離散する。

「氷の盾！」

「それだけではないぞ」

驚いている時間を与えない。仮面の男が呟くと、氷の盾は形態を変えて人型の氷人形と化した。

「行け。レプリカ！」

自立人形と化した氷の塊はサツキ目掛けて突撃する。

「なら、メタグロス。『アームハンマー』！」

対抗するのはサツキのメタグロス。

遠距離攻撃が防がれるなら物理攻撃で破壊する。ボールから出ると、振り上げていた鋼の剛腕が氷人形を頭から打ち砕いた。

氷人形の硬度もメタグロスの鋼の体から発揮される腕力には叶わなかったようだ。一瞬で人形は氷の粒となった。

——そして、すぐに元の形へと収束していく。

「高速再生！」

「そうだ。いくら破壊しても意味はないぞ。この空気中に存在する水分を吸収して何度でも再生する！」

仮面の男の象徴である仮面の口が大きく広がった。

確かに人形を壊しても水分が存在する限りは何度でもよみがえる。並大抵の攻撃では状況は好転しないだろう。

「ええ。そうでしょうね」

「むっ？」

「でも、そんなあなたにも弱点はあるでしょう？」

どういう意味だと、そう仮面の男が尋ねる前に答えは明らかになった。

突如上空から降り注ぐ日差しが強くなる。朝や昼の日差しの強さよりもさらに強い。明らかに人為的に操作されたものだった。

「日差しが強まった。まさか！」

「シユン君が戦った時も、あなたは水分が蒸発した事で完全に復活できなかった。……あの子の働きを、無駄にするわけがないでしょう？」

みると、いつの間にかボールから出ていたサツキのキレイハナが舞いを踊っていた。

キレイハナは踊る事で日差しを強くすることが出来る特性を持つ。

これにより大気中の水分を取り込む速度が遅まってしまった氷人形は再生が間に合わず、メタグロスの追撃によって地に沈む。

「ギャロップ、だいもんじ！」

さらに日差しによって強まったギャロップの炎技が放たれた。もう一度仮面の男が氷の盾を展開するが、氷はみるみると溶けていく。炎を防ぎきる事は出来たものの守りは完全に消えていた。

「ぐっ。もう一度！」

ならばと再び仮面の男は氷の盾を生成する。

「遅いわ」

だが完全に盾の形を成す前にニドクインの「かわらわり」が粉碎した。相手の攻撃を防ぐだけの強度に達していなかったのだ。

「ぐっ！」

敵わないと判断したのか、仮面の男が後ろに下がる。

「逃がさない！」

ただそれを許す相手ではなかった。サツキの手持ちで最速を誇るポケモン、サンダースが瞬時に相手との間合いを詰める。接近しながら放たれた電撃はデリバードを襲い、相性の良さを突いた一撃で戦闘不能とする。

「このっ。小癩な！」

「さあ、正体を現しなさい！」

仮面の男が氷の腕を振るうが、サンダースは攻撃をかわして仮面を蹴り上げた。

今まで正体を隠していた仮面が宙を舞う。

ロケット団の残党を率い、この一連の事件を引き起こしてきた男の顔が明らかになった。

「あなたは！」

敵の姿を見て、サツキは言葉を失った。

今まで仮面の男がポケモンも使わずに超人的な技を振るっていたのもその理由となった。

氷の人形の中心部に大きく空いた空間に車椅子を設置し、収まっていた老体。ジヨウトのジムリーダー達の中では最年長であり、彼らの

長にも選ばれていた実力者。

「チヨウジタウンのヤナギだった。」

「チヨウジタウンジムリーダー、ヤナギ！」

「……そうだ。私が仮面の男の正体だ」

「あなたが！」

巨悪の根源を目にして、サツキがさらに歯を強く食いしばった。

ある意味ではよかったとも思えた。これまでシユンが戦い、そして認められたジムリーダーの中に犯人がいなかった事に。もしも彼らの中に敵の親玉がいると知ったならば、きっと彼は悲しむと思ったから。

だが、それとは別にやはり怒りがこみあがった。

この男のせいで幼い命は弔われた。実際にそうせざるをえなかったのは自分が原因であろう。だがそう仕向けた相手を目にして怒りが沸き上がらないはずがない。

「あなたほどの実力者が、どうしてこんな事を!？」

「ほう。意外だな。聞く耳を持っていたか。何も聞かずに攻撃するかと思っていたよ」

「貴方の処分は私が決める事ではない。警察に引き渡して決める事。でもその前に聞いておきたい。どうして……」

どうしてこんな事をしたのか。どうして彼が命を落とさなければならなかったのか。

聞きたい事はいくらでもある。ありすぎて、それ以上の言葉を紡ぐことが出来なかった。

「ふむ。まあ話すことは別にやぶさかではない。しかし、そうだな。一体どこから話し始めたものか……」

ゆったりとした口調でヤナギは口を開いた。

しかし相手の調子を崩すように言葉を濁し、中々本題に入ろうとしない。

隙を見て逃げようとしているのか。あるいは時間稼ぎが狙いなのか。

ひとまずサツキはサンダースへ視線を向けて逃がさないようにと

指示を出す。

——直後、後ろに控えていたメタグロスが大きく拳を振り下ろした。その真下ではまだ再生しようとしていた氷人形が水分に逆戻りしていた。

「……見事に育てられているな」

「氷を生成する時間を稼ごうとしているなら無駄よ。ポケモン達は皆警戒を続けている。おかしな動きをすればすぐに制圧するわ。それに……」

サツキは視線を遠い遠い世界に森の外周部へと向ける。

そちらの方角聞こえてきた戦闘音。空中戦が行われているのだろうか、見ると冷気や電撃、炎などの激しい攻撃が繰り広げられている。「わかるでしょう？ 私だけではない。他にもあなたを阻もうとするトレーナーが集まっている。もうあなたに逃げ場はない。ここで終わりよ、ヤナギ」

サツキは知らない事だが、戦闘を行っていたのは初代ポケモン図鑑所有者たちだった。

ルギア、ハウオウを相手にして互角に戦っている。さすがの実力だ。

そして他にもきつとセキエイ高原で敵を目にしたトレーナーが駆け付けるといふ予感がある。

ならば時間稼ぎはむしろこちらに有利。

だからもう勝機はないのだと、サツキはヤナギに厳しい視線を送った。

「一つ、勘違いを正そうか」

ただ彼女の指摘を受けてもヤナギは全く動じていなかった。

「確かに私は時間稼ぎが目的だった。だが、その目的は何も氷を再製することではないよ」

「何？」

余裕の笑みを浮かべてそう発言するヤナギ。

どうということ、とサツキが聞こうとした瞬間。

二人の上空で突如何かがはじけるような音が響いた。



「ッ！ 離れて、サンダース！」

長年の勘がすぐさま行動を起こさせた。

サンダースに回避を明じ、自分もニドクインに捕まって後ろに下がる。

直後、上空の空間がゆがんだ。

「正しい判断だ。——成功だ。ボールは完成した！」

歓喜の声を上げるヤナギ。

彼の体を覆っていた氷が少しずつ破綻していく。そして崩壊に比例してヤナギの体は何か吸い寄せられるように浮かんでいき、謎の空間へと消えていった。

「消えた!? 何、あれは!?!」

突然の出来事に理解が追いつかない。

ボールが完成したとヤナギは言っていた。つまり、ボールの完成を契機に何かが起こり、ヤナギの目的を果たす場所へと転移したと考えるのが妥当だ。

だが今のが一体何が起こったことなのか、どうすればいいのかサツキにはわからない。

『その二枚があればほころの中、つまり伝説のポケモンが眠るという時間のはざまへと入ることができる』

「……時間のはざま。まさか今のが?」

ふと先ほどであった男が語っていた言葉が脳裏によみがえった。

仮面の男の狙いはウバメの森の祠であるとは前から考えていた。ならば、そのほころからつながるといふ時間のはざまにヤナギは何らかの干渉——おそらくは本人が最後に語ったボールによって突入したのだろうかという結論づける。

「それなら、この羽をもって祠へ行けば！ ギャロップ、お願い！」

ならばサツキも同じ場所へ至れるはず。

バックから二枚の羽を取り出す。

敵の罠という可能性も捨てきれないが、今は他に選択肢はない。

サツキはギャロップの背中に乗って駆け出した。走り出して10秒、すぐに目的地である祠へとたどり着く。

すると祠は初めて訪れた時とは異なり、中からまばゆい程の光を放っていた。

「祠の異変。やっぱりただ事ではないはず」

サツキはゆっくりと祠の扉を開ける。するとその中は先ほどヤナギが消えていった空間と同じ光景が広がっていた。

「……行かなきゃー!」

未知の現象に対する迷いはある。不安もある。

ただ、このまま待っていてもヤナギが目的を達成してしまうだけ。意を決して空間の中へと消えていくサツキ。

時間のはざまに突入してすぐに、彼女の身に異変が生じる。

『突然すまない。今日は君に頼みがあつて連絡したんじゃ』

『とても助かったよ。君の協力のおかげでレジロック、レジスチル、レジアイス。三匹の眠る場所を特定することが出来た』

『お久しぶりでございます、サツキ様。お迎えに上がりました』

「……これは?」

周囲の空間にいくつもの情報、過去の映像が浮かび上がっては次々と消えていく。

どれも見た覚えがある。間違いない。これはサツキが今まで経験してきた記憶だ。

『こちらこそよろしくお願いします、サツキさん!』

「ッ!」

——間違いない。

この屈託ない笑みは、すでに失われたもの。

過去の記憶であるはずなのに今の自分に向けられているようなこの光景は、本当にサツキが経験したものだ。

この空間では中にいるものの記憶が次々と呼び起こされていく。

「だからこそ、時間のはざま? それなら……」

それならばどこかにヤナギの過去も存在するのではないか。そう考えたサツキは悩みを振り払うためにも、辺り一面を見まわす。

すると、いくつもの映像の中に見覚えのない映像が映りだされていた。

「若いころのヤナギ?」

まだ髪も黒く、体つきも若い。しかし顔つきはまさにヤナギそのものである男性が二匹のラプラスと共に氷の大地を歩いていった。

一見平和に手持ちのポケモンと楽しんでいるような映像。

ただ直後、場面は一転し氷の大地に大きな亀裂が入る。亀裂は一気に広がっていき、大きな裂け目を呈した。裂け目はラプラスでさえも飲み込む程の巨大さであり、ヤナギのラプラスは二匹ともよける事が出来ず、その空間に飲み込まれていった。

「……これがヤナギの目的?」

「見たな」

「ッ!」

悲劇を目にして落ち込んでみると、ふと声がかかった。

この時代のヤナギだ。無事にボールの力で時間のはざまへの突入に成功したのだろう。

「今の映像が、あなたがこれほどの悪事を働いた理由?」

「そうだ。私は伝説のポケモンの力によって時代をさかのぼる。二匹のラプラスの元へと戻り、このヒョウガを孤独から救うのだ!」

そう言うヤナギが持つモンスターボールにはラプラスが入っていた。

先ほどの映像の直後、ヤナギは二匹のラプラスの子供であるヒョウガを孵したのだ。

両親を自分の不注意で失ってしまった事への贖罪。それを達成するために今までやってきたのだと彼は言った。

「もう願いの成就是目前だ。誰にも邪魔はさせん!」

ヤナギが指先をサツキへと向ける。

すると四枚の氷の壁が浮かび上がり、サツキを包囲した。

「また氷の壁?!」

「かつて伝説のポケモンも封じた封印だ! どうやって、時間のはざまへ入ってきたのかは知らんが無駄な足掻きだ! ここでは日差しを強める事もできない! ここで私の氷に挟まれ、空間を彷徨い続けるがいい!」

この特殊な空間では天候を操る事も不可能。  
四枚の盾を同時に破る事もまた不可能だ。ヤナギの最後の攻撃が  
サツキを襲う。

この間にヤナギは目的を達成しようと背を翻した。

四方から迫る氷。サツキは瞬時に両手をボールに伸ばし、ニドクインとメタグロスを繰り出した。

「ニドクイン、かわらわり！」メタグロス「コメットパンチ！」  
ニドクインは左から迫る氷に、メタグロスは右から迫る氷にそれぞれ技を放つ。

さすが仮面の男の切り札。そう簡単には破れずに力が拮抗する。だが二匹も負けていない。徐々に押されはしたものの、最後まで腕を振り切り、壁を粉碎した。

ただしまだ二枚の壁が残っている。

前後からの壁が彼女たちを襲う。

両腕両足を伸ばして圧迫されないようにと力を籠めた。だが氷の圧力は強く、体が悲鳴を上げている。

「くっ。こんな、所で！」

メタグロスやニドクインでも状態を維持するのがやっとだった。

二匹の力だけでは足りない。サツキは判断すると右手だけを壁の支えに残し、左手を腰のボールへと伸ばす。

「ギャロップ、かえんぐるま！」

出てきたのはギャロップ。空中に浮かぶと、体に炎を纏って氷に突撃する。

二匹の力とギャロップの炎。これでようやく力が拮抗し、どうにか壁が打ち砕くことに成功した。

「ハアッ！——よしっ、まだ動ける！行くわよ！」

今のでサツキは大きな負担を負ったものの、ヤナギを放つてはおけずすぐに駆け出した。

距離感が把握できない空間だったが意外とヤナギは近くにいた為、簡単に発見できた。

「ほう。まだ追って来たか」

「ヤナギ！」

「まあいい。見るといい。あれが私の宿願だ」

そう言ってヤナギは宙を指さす。

そこは先ほどのように歪にゆがんだ空間だった。

まるで何かは今から現れようとしているような不思議な感覚を覚える。

そしてその通り、突如ポケモンが姿を現した。

「これが、伝説のポケモン!？」

「そう、ときわたりポケモンセレビイだ！」

言うやヤナギがボールを投じる。

ただのモンスターボールではない。セレビイを捕獲する為だけに作った専用のボール、時間を捕らえるボールだ。 “にじいろのはね” と “ぎんいろのはね”、伝説のポケモンの羽から編んだこのボールはセレビイであろうとも確実に手に入れる事が出来る。

「まずいー！」

ヤナギの目的に気づいたサツキがスターミーに指示を出そうとした。

ただ少し遅かった。今からスターミーがボールから出現し、エスパーの力を籠め、モンスターボールの動きを止めるまでに捕獲は完了してしまう。

もうヤナギがセレビイを手にする事は確実なものとなっていた。

「……………えっ?」

「なっ!？」

そう、本来ならば。

だがセレビイは一度はボールに収まったものの、すぐにボールから飛び出してしまい、そしてまたどこかへと転移してしまった。

「ばっ、馬鹿な!?! 何故だ!?! 何故? 時間を捕らえるボールがあればセレビイを手にする事が出来るはずなのに、何故!？」

理解できるはずもなく、ヤナギが頭を抱え込んで一心不乱に叫ぶ。

この時の為に今まであらゆるものを犠牲にしてきたのだ。

幼い子供たちを浚い、ロケット団員を吸収し、野生のポケモン達を

操り、同業者達を欺き、伝説のポケモンを捕らえ、多くの人々を混乱と絶望に陥れた。

これだけの悪行を重ねても叶えたい願いだったのだ。そんな願いが目前で裏切られ、ヤナギは結果を理解できずに怒りを放ち続ける。

「まさか。あのセレビイは」

一方、サツキは一つだけ心当たりにとどり着いた。

確実に手にするボールで捕獲が出来なかったのならば。その理由はおそらく。

「――貴様！ 貴様、何かを知っているのか!? ……うつ、ぐうつ!」

サツキに問い詰めようと手を伸ばすヤナギ。

だが突如彼は胸元を抑えつけ、苦しみにもがき始めた。

この時間のはざまは特殊な空間だ。何の準備もなしに飛び込めば、時間の圧力によって人もポケモンも押しつぶされるだろう。

伝説のポケモンの加護が宿る “にじいろのはね” と “ぎんいろのはね” がなければ。

ヤナギもその二枚の羽から合成したボールを手にしていたからこそ影響を受けなかったのだ。その加護を失った事で、ヤナギの体には大きな負担がのしかかる。

「くつ。まだだ。こうなれば、もう一度ホウオウとルギアから羽を。今度こそ、我がポケモン達を……」

諦めきれず、再び願いを叶えようともがくヤナギ。

「……くだらない」

そんな敵を、サツキは冷たい声色で断じた。

「なん、だと……?」

「くだらないと言ったのよ！ 多くの人を操って、傷つけて。その心を弄んで！ 未来ある子供の命を踏みにじってまで！ それでも取り返そうとした過去なんて、くだらないと言ったのよ！」

「ぎ、貴様――」

お互いがお互いへの殺意をむき出しにする。

どちらも相手を許す事が出来ない。そうでなくてもこの極限の場

面だ。もはや相手の命を気遣って戦う事など出来そうにない。

「どけ！ 私は未来を取り戻す！」

「させない！ こんなやり方で人を傷つけた貴方を、これ以上好きにはさせない！」

ヤナギは本気になった。

全身に纏った氷を再び作り出す。さらにデリバードやウリムー、ラプラスにジユゴンなど今まで控えていたポケモン全てを繰り出した。

負けじとサツキも手持ちポケモン全員をボールから出現させた。

最後の全面衝突。激しい戦いの幕が切って落とされた。

第四十一話 VS メタグロスII ならば悪友とともに

セキエイ高原を発ったゴールドはバクフーンに全速力で走るように指示を出し、ひたすら仮面の男が目的とする場所・ウバメの森を指していた。

「絶対に逃がしてたまるかよー！」

体に負った傷は大きいが気迫はそがれていない。ポケモン達の回復もこの移動中に済ませた。

準備は万端だ。追いついたならすぐに挑み、そして今度こそ倒してみせようともう一度覚悟を決める。

そうして追いかけること数十分。

「――ハッ？」

ようやくウバメの森へとたどり着いたゴールド。到着した彼は、突如上空に生じた異変に驚かされることとなった。

「なっ。なんだありゃ!？」

空がゆがむような、歪な光景。

すでにサツキと仮面の男の一度目の戦闘は終わりを迎えていたのだ。

その場で立ち止まり、上空をにらんでいると、謎の巨体が空間へと吸い込まれていく姿が目映る。

「まさか、あれが仮面の男だって言うのか!？ 急げ、バクたろう！」

ウバメの森で起こった謎の現象。

おそらくは怨敵が関与しているのだろうと結論付けてバクフーンを再び発進させる。

一度来た森だ。道順はある程度覚えている。

ほどなくしてゴールドは森の中心部にある祠へとたどり着いた。その祠からはまばゆい光が放たれている。

「……あの時と、同じかよ」

思い出したのは、初めて仮面の男と対峙した時の事。



あの時仮面の男は突如祠の中から生まれた光を目にして動きを止めた。そして光が止むと興味を失ったかのようにその場を後にした。思い返せばわかる。きっと仮面の男はこの祠をずっと狙っていたのだ。こうして光がずっと輝きを保っているという事は、今日が敵が目的を果たすのに都合が良い日であるという事だろう。

(ただ、どうすればいいんだ？ この祠が関係しているんだろうが、この光をどう対処すればいい？ やつはこの中にいるのか?)

見ると祠の内部には先ほど見た空と同じような歪な空間が広がっていた。

何の準備もなしに入るのは危険な気がする。この予感がゴールドの足を踏みとどまらせた。

しばし考え込むゴールド。すると、彼の頭の上に載っていたイェローのピチューがゴールドの頭をはたく。

「おっ?.. どうしたちびっ子?..」

ゴールドが衝撃に気づいてピチューに問う。するとピチューは祠を指さして周囲に電気を放つ。この電気が電磁浮遊を引き起こしたのだろう、ゴールドの体が宙に浮く。

「お、おいおい!..」

突然の浮遊感に戸惑うゴールド。しかしピチューは放電を止めず、祠をジツとにらみ続けていた。

「まさか、本当に行くのか!.. あの祠の中に!..」

正気とは思えない。

あの未知の世界に知識も準備もなしに突入して無事でいられるのか。

ただ、このままでは何も解決しないというのもまた事実であった。

「.....よしっ、行けっ!..」

ならば選択肢は一つ。ゴールドはバクフーンをボールへ戻すと、ピチューに突撃のサインを送る。

指示に従い、ピチューの電撃は強まった。すさまじい加速を得てゴールドは時間のはざまの中へと侵入する。

全身をピチューの電気が纏っているおかげなのか、体に違和感が生

じるがそれ以上の事は起きなかった。

そしてゴールドがまず目にしたのは、やはりサツキと同様過去の記憶の映像である。

「なんだこりゃ？」

『俺はゴールド。よろしくな』

『ポケモンの卵!？』

『俺は手段を選ばない。たとえ非合法と責められようとも』

『過去の出来事が、次々と現れては消えていく……?』

かつて自らが経験したものだからこそ、彼もすぐその光景の意味を理解した。

続々と流れていくかつての記憶。流れは順不同であって過去の出来事が前後しているものもある。

中にはつい最近の事件の事もあり、唯々この現象について考え始めようとした頃。

『あ、あなたは！——チョウジタウンジムリーダー、ヤナギ！』

『そうだ。私が仮面の男の正体だ』

「なっ！」

自分の物ではない記憶に、目を奪われた。

サツキの記憶か、あるいはヤナギの記憶か、その両方なのか。誰のものなのかはわからないが、これは間違いなく現実に起きたものなのだろう。今まで不明であった仮面の男の正体が明らかになり、ゴールドを驚愕に目を見開いた。

「ヤナギ！」

この場にはいない巨悪の正体を知り、ギリツと歯を食いしばる。

ポケモンリーグでのジムリーダー対抗戦から意識していた実力者ではある。ただ確信にまでは至らなかった。だからこそ敵の正体に驚きと怒りを隠せない。

『どけ！ 私に未来を取り戻す！』

『させない！ こんなやり方で人を傷つけた貴方を、これ以上好きにはさせない！』

その間に映像はさらに続いていく。

時間のはざままで発生した最終決戦。ヤナギとサツキの叫びが木霊する。

二人の実力者が全力でぶつかり合い、そしてその戦いにより生み出された結果が――

「――はっ?」

最後の映像が流れて、言葉を失った。

これより新しい記憶は流れてこない。先ほどと同様、ゴールドの過去の記憶をさかのぼるだけだった。

嘘だろうと呆然とするゴールド。信じられないまま時間のはざまの空間を浮遊して、そして決着の場にたどり着いた。

「おいっ。嘘だろ。こんなっ、こんな決着があるかよ!」

思わずゴールドは叫びだす。鬼のような形相で絞り出した声が時間のほころの中に響き渡った。

仮面の男は、手持ちポケモン全てが倒され、時間のはころの圧力に耐えられず事切れていた。

サツキは、やはり手持ちポケモンが皆戦闘不能となり、氷の槍に貫かれて呼吸を止めていた。

最終決戦の結末は相打ち。ヤナギは願いを叶える事が叶わず、サツキも巨悪を裁く事が出来ずにこの空間で力尽きている。あまりにも残酷すぎる結果だった。

「くっそっ!　なんで、なんでこんな事に!」

怒りの矛先をどこに向けてよいかもわからず、ゴールドはひたすら声を荒げる。

せめてシユンの代わりに彼が救おうとした人を守り、敵の思惑を止めたかった。

しかしそんな思いは届かず、ゴールドは最後の戦いに参加する事も出来ない。最悪の結果を全てが終わってから目にする事となってしまう。目の前の現実をすぐに受け入れることなどできるはずがない。

「――ああ。やはり、こうなってしまったか」

「ッ!?　誰だ!」

茫然自失になりかけたゴールドの耳に、低い声が届いた。  
敵の新手か、警戒を強めて振り返るゴールド。

「……えっ」

その声の主を見て、ゴールドは目を見開いた。

呼びかけたのは40歳近くになるであろう男である。しかもその姿は先ほど、セキエイ高原で見たばかり。あの時は仮面のせいで顔を窺う事は出来なかったが、今はその仮面がはがされてその下にあった素顔が明らかになっていた。

「すまない。これはきつと私の無力が引き起こした結末だ」

驚き、言葉を失うゴールドに男は淡々と話しを続けていく。

「そんな私が、君に大役を任せるとするのは恥の上塗りであることは承知の上で、どうか頼む」

男は伝説のポケモン、仮面の男も欲したセレビィを繰り出してゴールドに願いを託す。

「どうかあの子達を救ってやって欲しい」

「——あんだ、まさか」

最後まで言葉を続けることが出来ぬまま、セレビィの時間転送が始まった。

ゴールドの周囲の空間がゆがむ。

ふと強烈な浮遊感に襲われて。

直後、この時代からゴールドの存在が消え去った。

セレビィの時代を行き来する能力、ときわたり。

過去、未来、あらゆる時代に飛ぶことが出来るセレビィはゴールドと共にある過去の一点へ跳躍していた。

「——う、おっと!!」

突如自分を襲っていた謎の浮遊感が消え去る。

ただでさえ特殊な空間にいたのだ。感覚が正常にもどった事で逆に戸惑う事となり、体がふらついた。転倒の寸前でバランスを取り、

地面にしつかりと足をつく。

足元には一面に地面が広がり、周囲には森が生い茂っている。どこか自然の多い土地に飛ばされてしまっようだが。

「どこだこころ？ 一体、あの人は俺に何をさせようってんだ？」

先ほどの男、昔からの顔見知りの相手の話を思い出し、ゴールドは頬をかいた。

救ってやって欲しいと彼は言っていた。この言葉から察するに、まづ過去のどこかへ飛ばされたと考えるのは当然だろう。ただ一体何をすればよいのかはわからない。

見ると、いつの間にかゴールドの腰には先ほどまでなかったセレビイの入ったボールがある。過去に飛ばされた事でおやが自分に移ったという事なのか。

「さすがにすぐにこのポケモンで元の時代に戻る、ってのは。……まあ、ありえねえよな」

当たり前の事をつぶやいて、ゴールドは甘い考えを捨て去った。

今から元の時代に戻ったところで仕方がない。すべての決着がついた時に戻ってはゴールドにとっても益はないと言える。

むしろゴールドにとってもあの結末は変えたいもの。ならばそれを変える為にもまずはあの男の願いをかなえるべきだろう。おそらくはそれがゴールドにとっても最も良い結果につながるはずと考えた。

「とりあえず、現在地の確認からだな。あ、待てよ。ひよっとしてポケギア使えば場所だけじゃなくて飛ばされた時間もわかるのか？」

良い考えだと自画自賛する。ポケギアは高性能のトレーナー補助支援器械だ。電話機能だけではなく地図としての機能や時刻の確認なども可能。つまり、これを見ればセレビイによって飛ばされた場所、時間すべてが把握できる。

善は急げとすぐにポケギアを起動する。

「……えっ？」

そして再び驚かされることとなった。

今ゴールドがいる時代は、先ほどまでいた時代と全く同じ日。戦つ

ていた為に時間間隔は確かではないが、一時間も変わっていない時代であるのだ。

唯一大きく異なるとしたら、それは場所。セキエイ高原でもウバメの森でもなく、エンジュシテイの郊外にゴールドがいるという事だ。

「この時間にこの場所。つてことは」

まさか、と息を飲むゴールド。

本当に自分の願いが叶うのではないかと目を見開いて。

——落石が生じたのではないかと疑うほどの轟音が響き渡った。

「がっあ……あああああっ！」

痛みを抑えきることなど出来るはずもなく、口からは自然と叫びが発せられる。

森林がかすかに和らげてくれたものの落下の衝撃は大きかった。

感覚から察するに左腕が、逝った。それだけではない。肋骨もおそらくは。……まだ動けるところを見ると、臓器には刺さっていないはず。それだけが救いだろうか。

「ぴ、ピジョット……。すまん、戻れ」

「ピ、ジョオ……」

苦しげに、呻き声を上げながらピジョットはボールに収まった。

俺を庇ったせいかわが酷い。おそらくはウバメの森で負傷したとき並にひどいだろう。

何とかボールにしまうことは出来たけれど身動きは取れない。

徐々に、こちらへと迫ってくる馬の足音が大きくなる。やがてサツキさんに乗せたギャロップが辿りつき、俺の目の前で停止した。

俺を見つけるとサツキさんはギャロップから降りて俺の腹の上にまたがり、両腕を首に重ねる。

「——殺す」

力を加えると同時に、また彼女に似合わぬ言葉を繰り返した。

「殺す」



「サツキさんへ体当たりし、彼女を俺の上から吹き飛ばす。」

「ッ」

「サナギラス!？」

ニドクインが彼女の体を受け止め、すぐさまメタグロスが彼女の前に立つ。

警戒を強める敵に対し、サナギラスも闘争心を露にする。

「馬鹿。やめろ、サナギラス! もうお前は戦える状態じゃない。やめろ!」

静止を呼びかけているのに、サナギラスは聞く耳を持たない。

メタグロスに向かって突撃して——鋼鉄の腕にはじき返された。体の亀裂がさらに歪に広がっていく。それなのに、着地すると再びメタグロスへと向かって行つた。

いくら攻撃力が高いサナギラスといえど、敵は防御が硬い鋼タイプだ。ボロボロの状態で向かっていったせいで、攻撃したはずのサナギラスの方が傷ついていく。ついにサナギラスの体全身に亀裂が走つた。

「サナギラス!」

これ以上はもう見ていられない。強引にでもボールに戻さなければ。

左腕が満足に動かせないせいで掴みにくい左腰のボールを手にし、サナギラスへ視線を戻す。

ボールへ戻そうとして、サナギラスの体の亀裂から眩い光が発せられた。

「えっ。これはまさか」

今まで何度か目にしてきた、進化の兆候。

サナギラスが身に纏う殻を打ち破って——ニメートルはあるであろう怪獣のような巨体、バンギラスへと進化を遂げる。

「進化。……バンギラス」

今まで待ちわびていた最終進化が、このタイミングで生じた。

バンギラスはメタグロスの鋼鉄の腕を受けきり、はじき返す。バンギラスが片腕を振るっただけだというのに、メタグロスは後ずさり、



地響きが生じた。

まるで動く災害。たったひと振りでその力強さを敵味方に示すバンギラス。

「バンギラス。お前……」

先ほどまでボロボロだったはずなのに、バンギラスはこちらを振り返ると『任せろ』と言わんばかりに息を吐く。

いや、バンギラスだけではない。

ピカチュウもバクフーン達も、皆勝手にボールから出てきて俺の前に立った。

「皆、なんで……」

なんでそこまでして戦う。

俺の命令さえ無視して、どうして俺を守ろうとする。

何も、わからない。

『どうしても守らなければ、救わなければならない存在ひとができたときだ』

またしても父の言葉が脳裏をよぎった。

「……お前達も同じということか。俺を守ってくれるというのか」  
理解すると申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

先ほどまでは俺も同じ思いで戦っていたはずなのに、それさえ忘れて諦めて、ポケモン達に思い出させてもらえるなんて。

「みんな、すまない」

こんな俺についてきてくれたポケモン達がボロボロの状態でまだ戦ってくれるというのに俺だけ諦めるわけにはいかない。

覚悟が決まった。やはり、何としてもサツキさんは救わなければならない。

(だけど——)

しかし同時に、冷静になつて戦力差が大きすぎるとい壁に再び衝突する。バンギラスはメタグロス達にも太刀打ちできるかも知れないが、他のポケモンはそうではない。最終進化を果たした状態でさえ皆呆気なく敗れたのだ。しかも回復が出来ていない。

勝てる方法はまずないだろう。——たった一つを除いては。

「サツキさん。今一度あなたとの約束を破る事を許してください」  
本当は考えてはいけない選択肢だが、それでサツキさんを救えるならば。

やるしかない。集中力を高め、辛うじて自由が利く右腕を前にかざし――

「――いいや。悪いっすけど、例えその人が許そうとも俺が許さないっすよ」

その右腕が、背後から伸びた腕によって制せられた。

「……えっ?」

まず、二人だけだと思っていたはずのこの場所に人が残っていたという事に驚かされた。

次に、聞き覚えのある声と口調に目を見開いた。

最後に、振り返り声の主である少年の姿を確認して、言葉を失った。

「ご、ゴールド? どうして!」

「今回は間に合った。すべてを捨てて特攻だなんて無しだ。さあここから大逆転と行きましようか、シユンさん!」

ここにはいないはずの悪友、ゴールドがこの場に駆け付けていた。

## 第四十二話 VSメタグロスIII 導く者

「ゴールド？　なんでここに？」

本来ならば彼は今も仲間と共にセキエイ高原で仮面の男を調査しているはずなのに。

思わぬ形の悪友との再会に、シユンはすぐに現状を受け入れる事が出来なかった。

「……お前、自分の役割を忘れたのか！　クリスは。イエロー先輩はどうした!？」

だがいつまでも驚いてばかりというわけにもいかない。彼と行動を共にしているはずの少年少女の姿がシユンの脳裏をよぎり、後輩に怒声をぶつけた。

「今はこのジョウト地方全体を脅かそうとしている敵との戦いの最中なんだぞ！　お前は今の現状をわかって——」

「わかってねえのはあんただろうが」  
「——はっ？」

『すぐに戻れ』と諭そうとするシユン。だがゴールドは彼の声を遮り己の強い意志を示す。

「今のあるたの姿を見て『戻れ』はないでしょうよ」  
そう言つてゴールドはシユンを見た。

皮膚のあちこちに傷と打撲痕が見られ、口からも出血も見られる。見えない内側も含めてすでに彼はボロボロ状態だ。このまま一人で戦えば命を落としかねない程に。

——いや、違った。間違いなく彼はこの戦いで本当に死ぬことになる。それはゴールドがよく知っている。この人ならば文字通り死ぬまで戦い続けるという事を。

「俺は退く気はないっすよ。あの女の人やばいってのはオーキドのじいさんから聞いてるんで。だから俺はここに残る！」

説得は無駄だとゴールドは強い口調で断じた。

「……ふざけるのも大概にしろよ。早く戻れ。この間に仮面の男が動いたらどうなる？　ここは俺に任せて——」

「そう言って一人で死ぬ気かよ、あんたは」

「ッ」

なおも食い下がるシユンにゴールドはあえて厳しい視線を向ける。核心を突かれたシユンは息を飲んだ。

その通りだ、彼は今から死ぬつもりだった。死んでもサツキを救おうと思っていたからこそ、言葉に詰まる。

「……ふざけないでくださいよ。俺がいかりの湖で音信不通になって、それで旅に出てくれたのがシユンさんじゃなかったんすか？　なのに、同じ思いを俺にさせるつもりっすか？」

そう言われてシユンの記憶が次々とよみがえった。

オーキド博士やウツギ博士にゴールドが仮面の男の調査中に連絡が取れなくなつたという事を知らされ、旅を出る決意をしたあの日。

あの時ほど信じたかと思つた出来事はない。親しい人間が、自分の知らないところで斃れたなど。

「——じゃあどうしろっっていうんだよ!?　もう俺には自分の命をかけるしかないんだよ！　これ以上俺にどうしろと！」

だからこそ、今も必死になっているのだと訴えた。

ゴールドと同じようにサツキもまた失いたくない大切な存在となつている。そんな彼女を救うには、全力を尽くして敵わない今、もう命をかけるしかないのに。

他にどうすればいいのだと、シユンは声をかすらせながら問いただした。

「だから俺が、ここにいろだろ！　『一緒に戦え』って言えばいいんじゃないのかよ！　仲間じゃねえか！」

だから俺がここに来たのだと、ゴールドはシユンの肩をつかんで力強く答えを示す。

二人とも目の見えない場所で親しい人間が傷つくのは二度と味わいたくなかつた。今こそ共にこの窮地をひっくり返すのだと、声を張り上げる。

「……ゴールド」

「こんなつまんねえ所で死ぬなんてゴメンだ。そんなにセキエイ高原

の方が心配なら、さっさとあの女の人の仮面引きはがして、Uターンと行きましようよ」

シユンの表情から怒りや焦りが消えた。それを確認してゴールドは手を放し、サツキの方へと向き直った。今はサツキ本人が大人しいためポケモンたちも援軍であるゴールドの出現を警戒し、様子を見ていたようだがいつ動き出してもおかしくない。

数ではこちらが勝る。ならば手早くこの場を制して不安の種を取り除こうと、ゴールドは笑みを浮かべた。

「……ああ。頼む。ここでサツキさんを取り戻す。そのために、お前の力を借してくれ」  
「うっすー！」

ならば今はその考えに乗るしかない。

シユンもゴールドの横に並び立ち、サツキの姿を見据えた。

二人が臨戦態勢に入ったことを見てこれ以上の警戒は無意味と悟ったのか、サツキの元からサンダースが真っ先に飛び出す。

“でんこうせっか”で速度を増しつつ、軌道を見破られない様にと俊敏に左右へステップを踏んで揺さぶりをかけた。

「ゴールド、エイパムを！ ハッサムにつかまれ！」  
「了解！」

敵の速攻に対し、シユンはハッサムを繰り出すとその体にエイパムが尻尾の手でつかまり、共に飛び出す。ハッサムは“こうそくいどう”で身を軽くするとサンダースへめがけて直進。そして付近まで近づいたところで旋回した。

その遠心力を勢いに変えて、エイパムは両手で地面をなぞってサンダースへ“すなかけ”を放つ。両手で放たれた砂はサンダースの視界を一瞬で奪い去った。たまらずその場で停止するサンダースに、砂の中から突撃するピジョットの“でんこうせっか”が直撃、その体を吹き飛ばす。

(エイパムは尻尾だけで木の枝にぶらさがり、枝から枝へと飛び移る時には尻尾だけで体を支えて反動を利用する。ハッサムの素早い動きが加われば、サンダースも捉えられる！)

エイパムの習性とハッサムの得意技を活かした連携だった。

本来の展開と異なりシユンのポケモン達には身体能力の向上は見られないが、それでも互角以上のサツキのポケモン達と渡り合う。

するとサンダースは一度大きく後ろへ飛び上がり、サンダースがいた場所を通過してスターミーの“ハイドロポンプ”が放たれた。

「ちっ。ラプラス！」

「ニョたろう！」

『ハイドロポンプ！』

負けじとラプラス、ニョトロノが同じ技を繰り出し迎え撃つ。

強力な水流が衝突。威力を相殺し、水流は四散した。

すさまじい勢いが掻き消えた直後、休む間もなくサツキのギャロツプが“とっしん”する。

「——その速さは厄介だが、エーフィー！」

だがその速さも到達する前に止めてしまえば問題ない。

シユンの掛け声と共にエーフィーが“サイコキネシス”で一瞬だけ動きを止めると、地中に潜っていたサンドパンが“あなをほる”でギャロツプを突き上げた。

「ナイス！ ウーたろう！」

そして空中に浮かんだギャロツプをゴールドのウソツキーが地面へと“たたきつける”。ギャロツプの短い鳴き声が木霊した。

「よっしや。もう一発！」

「いや、待てー！」

さらに追撃を加えようとゴールドが仕掛けると、そこへニドクインが前が出る。

とどめを刺そうとしたウソツキーをサンドパンごと殴り飛ばした。

「いっ！」

「真っ向からぶつかるな！ レベルは皆段違いだ！」

ウソツキー達が吹き飛ばされる姿に驚愕するゴールドに、シユンは冷静に諭す。

二匹はエーフィーが念の力でさせたおかげで地面にたたきつけられることはなかった。

(だが、本当に助かる。ゴールドがいるおかげでかなり余裕がある)  
ゴールドはあまりバトルが得意ではない。

お調子者で戦局に対して感情が幾度も揺れ動いたため落ち着きがなく、共に戦う身として気を配ることは避けられなかった。

(今ならいける！)

だからこそ、彼が様々な感情を見せるからこそシユンは下手に揺れることなく振舞う事もできる。手持ちポケモンが多いという事もあって一人の時とは精神的な余裕が全く違うものだった。

「ゴールド、ヒマナツツでサポートしろ！ 仕掛けるぞ！」

「オツケー！」

対応するだけではないられない。

ゴールドがヒマナツツをボールから出すと “にほんばれ” で日差しを強くした。これにより炎技の威力が高まる環境とすると、二匹のバクフーンが “かえんほうしゃ” を繰り出す。

補佐が加わった炎はニドクインを容赦なく襲った。両腕で防御を試みるも、完全に防ぎきれず、両腕にやけどを負う。満足に腕を振るう事は難しくなった。

——だが、ひざしが強くなった影響は相手にも及ぶ。後方で控えていたクレイハナが前準備もなしに “ソーラービーム” を打ち出したのだ。

「はやっ！」

「ちっ。ピカチュウ、頼む！」

「マンたろう！」

突然の猛威にピカチュウの “10まんボルト” とマンタインの “エアスラッシュ” が迎え撃つ。電撃と空気の刃が光の光線を打ち消した。

衝撃が小さな爆発を生み出す中、土煙の中をメタグロスが突撃する。

先ほどもシユンを襲った “アームハンマー” を “繰り出して——鋼鉄の腕は、バンギラスの鎧に阻まれた。

「——無駄だ。バンギラスの体はどんな攻撃だろうとびくともしな

い。抑え込め！」

進化を果たしたバンギラスはメタグロスの攻撃さえ受けきる。

バンギラスが誇るのは攻撃力だけではなかった。この強靱な鎧も大きな武器。これを信頼しているからこそあえてシユンはメタグロスが攻撃を仕掛けるまでバンギラスを動かさなかったのだ。

(バンギラス。嫌な事を思いださせてくれるぜ。だけどやっぱり、オーキドのじいさんの言う通りだったな)

そのポケモンの姿にゴールドはかつてライバルとの戦いを思い出して冷や汗を浮かべる。

同時にシユンが強力な相手と互角以上に対峙するその姿を見て、この大戦を前にオーキド博士から受け取った手紙の中身を脳裏に思い浮かべていた。

『わしが見出した凶鑑所有者たちの7つの能力。さらにそれらに次ぐ8つ目、シユン君の能力についてここに記す』

凶鑑所有者は各々が皆独自の力を持つ。

その手紙にはかつてオーキド博士より旅立った7人のポケモントレーナーたちがそれぞれ持つ力について書かれていた。

戦う者——レット。

育てる者——グリーン。

癒やす者——イエロー。

捕える者——クリスタル。

化える者——ブルー。

換える者——シルバー。

孵す者——ゴールド。

それらに次ぐ第8の凶鑑所有者であるシユンの能力。

『これまで彼はジムリーダーを探り、ロケット団員が集う中に単騎で突撃し、仮面の男とも幾度と戦った。その中で明らかになった彼の地域に伝わる力も大きな力じゃがそれだけではない』

あらゆる場所で戦い抜いた彼の力。それはワカバタウンに伝わる特殊な力——だけではなく。

『捕まえる事無くポケモン達と友好的関係を築き上げ、あらゆる不利



な場面でもポケモン達の潜在能力、あるいはそれをも上回る力を発揮して乗り越えてきた」

地形を活かした戦闘、敵の本拠地を奇策で乗り切った戦略、凶鑑にも記載されたポケモンの真の力を引き出す彼の力。

野生ポケモンたちに対するカリスマの発揮、ポケモンたちの能力を状況・戦術に応じて相乗効果を生み出してきた。

『――『導く者』じゃ』

『導く者』

シユンの代名詞が指す意味は、ワカバの力による能力の向上及び治療能力の向上だけではない。

あらゆるポケモン達を率い、現状の打破のため最適解を導き出せる、その為のポケモン達の力を引き出し、導く事。それが彼の力だった。

「そして、ニドクインがやけどを負い、メタグロスを抑えている今なら、サツキさんに接近戦を抑えられる相手はいない」

相手の格闘戦ができる二匹の行動を止める事に成功。

これでサツキの守りが薄くなった今を見逃す手はなかった。

付近の森林へと身を隠していたヘラクロスがサツキを横から突撃し――

「――サツキさんを、返してもらおうぞ」

ヘラクロスの腕が、サツキの顔面から仮面を掠め取った。

第四十三話 V S ??? 真相

サツキを縛り付けていた仮面に大きな罅が生まれ、瞬く間に全体へと広がっていった。

やがて仮面は形を保つ事さえできなくなり、音を立てて崩れ落ちる。

「あっ——」

顔を覆っていた支配の塊から解放され、ようやくサツキの整った顔立ちが全て露わになった。突然の解放感に体が追いつかなかったのか、サツキはバランスを失い、その場で尻餅をつくような形で地面に座り込む。

「サツキ、さん？」

どっちだ。

まだ判断がつかなかったシユンは彼女の様子を見て、果たして本当にサツキが仮面の男の呪縛から解放されたのか、あるいはまだ支配下にあるのか判断すべく、半信半疑のまま恐る恐る彼女の名前を呼ぶ。

「シユン君？ 私——」

「……よか、った」

名前を呼び返される事でようやく彼女が正気に戻ったのだと安堵の息を吐いた。

目的を達した事で力が抜けたのか、シユンもその場に座り込む。

戦いの時はアドレナリンが放出されたために気づいていなかったのだろうが、今更になって痛みがぶり返してきたが、今はその感覚さえ彼を安心させる材料だ。

（よかった。俺も、彼女も、生きている）

痛むという事は生きているという証。

一度は死を覚悟したとはいえ死にたかつたわけではない。ましてゴールドに諭された後である今ならばなおさらの事だ。

誰一人欠ける事無く、失われたと思われた大切な人を取り戻す事に成功。これ以上ない戦果に満足し、表情が緩むのを抑えきれなかった。

「——ふう。とりあえずこれで一件落着つすか」  
先輩トレーナーの穏やかな笑みを目にし、ゴールドも満足げに頷く。

サツキの奪還、シユンの救命。現時点におけるゴールドの目的は果たされたと言えるだろう。

（しっかし俺も想定が甘かったとは言え、このねーちゃんの強さどうなってんだよ？ さすがに俺とシユンさんの二人がかりなら余裕で勝てると思ってたのに、トレーナーの指示抜きでも互角だったぞ。……冷静に考えると悪の組織に洗脳された味方（しかも女）を男二人でボコったってヤバイ絵柄なのに。そりゃシユンさんも命を賭けるわけだわ）

あまりにも厳しかった戦いは内心冷や汗ものであったが、わざわざそれを口にする必要はない。

（ま、いっか。俺の役目はここまでだ）

とにかく彼の役目は終わったのだ。

——ゴールドは体の末端から始まった変化を目で確認し、うつすらと笑みを浮かべる。

ここから先はもう自分の出番はないのだから。後はただ彼らに託すのみ。

「んじや、シユンさん。ひとまずこっちはもう大丈夫つすよね」

「ああ。悪かったな、ゴールド。お前には散々助けられた。ありがとうな。——はっ!？」

「なら、よかった」

声の方へと振り返り、落ち着いた声で悪友へ礼を述べるシユン。

しかし、相手のゴールドの姿を目にしてシユンは言葉を失い、腹部の痛みさえ忘れて即座に立ち上がる。

焦った様子のシユンに対し、ゴールドは変わらぬ調子で話を続けた。

「後はもう大丈夫だ。俺が介入できるのはここまでみたいなんで」

「……ゴールド？ お前、何を言っている？ どうしたんだよ。なんで、お前、消え——!？」

「—  
ゴールドの言っている事も、彼の身に起きている事も何一つ理解できない。彼は両の手足をはじめとした体全体から小さな光がぼつぼつと浮かび上がったかと思えばその光は空中へと浮かんで消えていき、少しずつゴールドの体が薄れていった。」

「すみません。俺、この時間帯の俺じゃないんですよ。あんたも知ってるでしょ？ 少し先の未来から、仮面の男も狙っていた伝説のポケモンの力を借りて、時間を戻って来たんすよ」

「……つまりお前は、未来の世界から来たゴールドって事か？」  
確認の言葉にゴールドが静かに頷く。

本来ならば信じがたい事であるが、遠くの地・セキエイ高原にいるはずのゴールドがタイミングよく現われた事、すでに伝説のポケモンについて説明を受けていた事からこそ、目の前の前代未聞の事態と相まって説得性が増していた。ゴールドの声色が今まで聞いたことのないほど真剣さを帯びていたという事も大きい。

「で、ここで未来が変わったからなんでしょうね。そもそも俺がここまで飛んできたのは、まあなんつーか……シユンさんが、力尽きたって聞いたからなんで」  
「ッ」

死んだと直接言葉にしないゴールドの言い回しがかえって強く現実を叩きつけた。

『馬鹿な』と声を荒立てる事はない。

もしゴールドがいなければどうなっていたか、他でもないシユンがよく知っているから。

「だから、よかった」

もう一度ゴールドは重ねて口にした。自分が消えていくという未知の体験に驚きはあるが、恐怖はない。消えるとしても戻るだけだと楽観視しているという事もあるが、この世界の自分がきつとやっつけられるだろうという自信もあったからだ。

「……ゴールド」

「もう死なないでくださいよ？ じゃねえと俺がばからしくなるし。」

……それより、シユンさん」

複雑な表情でゴールドを呼ぶシユン。

この空気を払拭すべくゴールドは明るい声でいつものように場を和ませ、そして今は彼のために少しでも何か情報を残そうと口火を切る。

「この戦い、俺達が考えているよりも裏があるみたいっす」

「裏？ どういう事だ？」

「さっき言ったように俺は未来から来たんですよ。で、その未来で見たんです」

おそらくは彼が想定もしていないだろう事実。

多大な衝撃を与える事になるだろうが、物語の核心に迫る情報だ。何としても伝えなければならなかった。

「ロケット団の、仮面の男の下にはまだトレーナーがいるんですよ。その人物がシユンさん、あんたの——」

そしてその人物の名を告げようとして。

しかしゴールドの説明は言葉になる事無く。

彼の体から零れ落ちていた光が一際大きくなり、彼から言葉を奪っていた。いつの間にか背後が透けて見えるほど薄くなっていた。ゴールドの光は口元まで及んでいたのだ。

(……マジかよ。ふざけやがって。これ以上はまた未来が変わるから言わせねえってか?)

ゴールドはもはや見えなくなった腰の一角めがけて睨みつける。

おそらくは伝説のポケモン・セレビィの仕業だろう。これ以上の未来の改変は許されないと判断したのかもしれない。そうでなくても本来は一つの時代に同じ人物が二人も存在するなど許される事態ではなかったのだから。

「ゴールドー」

もう今にも消えそうなゴールドを見て声を荒げるシユン。

本来なら何か声をかけてあげたいところだが、もはや手足を動かすどころか言葉を発する事さえできないのだ。何もできるはずもない。

(くそつたれ。でもいいさ。覚悟しとけよ仮面の男)

ただ、それでもいい。

(テメエらの好き勝手にはさせねえぞ。俺だけじゃねえ。こつちには、この人達もいるんだからな)

もはや未来は動き出したのだから。

せめて最後にと、ゴールドはシュンに向けて糸のように目を細めた。

「……ゴールド」

消えていった悪友を見届けて、今一度名前を呼ぶシュン。

「ありがとう」

もはや届くことはない。そう分かったうえで改めて礼を告げた。

こうしてサツキを助けられたのは、自分が生きているのは間違いなく彼の助力のおかげだ。それは疑う余地もない。

(それに、最後のあいつのセリフ)

加えて最後にゴールドが残した情報も大きなものだった。

『ロケット団の、仮面の男の下にはまだトレーナーがいるんですよ。その人物がシュンさん、あんたの——』

確かに言葉としてシュンに伝わってはいない。

しかし消えゆく中で薄っすらと見えたゴールドの口の動き。その情報と前後の話をつなげる事で、シュンはゴールドが言い残そうとした言葉を正確に受け取っていたのだ。

「そういう、事かよ」

このおかげでシュンはこれまでの旅で抱えていた疑問を解消する事に成功した。

信じられない情報ではあるものの、今日の前で未来からやって来たというゴールドの存在が彼の考えを後押ししている。

改めてゴールドの存在はシュンにとって大きなものとなった。

「……ただ、そうだとするならば」

「シュン君」

「うっ!？」

シユンが考えにふけっていると、突如背後から謎の柔らかい衝撃が襲う。

それがサツキが抱き着いてきたのだと理解したのは、彼女の声色を脳がしつかり判断してからだった。

「本当にごめんね。よく覚えているよ。——ありがとう。助けてくれて」

表情を悟られぬようにと、サツキは顔をシユンの体で隠しながら感謝の言葉を綴る。

やはりこちらの世界でもサツキは操られている時間の記憶も残っていた。

どのような戦況下になろうと、傷つこうとも諦めずに戦い、そして救ってくれた少年は彼女の中でどれだけ大きな存在になったか計り知れない。

「……あの、サツキさん。そう言ってもらえるのはとても嬉しいですし、この状況は男として役得みたいな感じなんですけど」

「なに？」

「えっと。非常に言いにくいんですけどね」

「うん。なんでも言って」

言葉を濁すシユンにサツキは淡々と用件を尋ねた。

確かに久々のサツキとの会話、ボディラインが鮮明に出るようなボディスーツに身を包んだ女性と密着するというこの状況は本来ならば男として喜ぶべき事態であるのは間違いないのだが。

「あのですね。実は俺、結構重症なんですよ……」

「——あっ」

シユンは涙交じりに訴えた。

言われてサツキも思い出す。

ピジョットに乗って空を飛んでいた彼が、メタグロスによって地面に勢いよくたたきつけられた瞬間を。

木々によつて多少は衝撃を抑えられたかもしれないが、それでも重症なのは間違いない。この他にもハイドロポンプを受けたピカチュ

ウ諸共木に叩きつけられたりと、シユンの体は満身創痍の様相だった。

「…………ごめんね」

「いえ、大丈夫です」

そつと手を放し、サツキは深々と頭を下げる。シユンは彼女の謝罪を涙を浮かべながら受け取るのだった。

「…………さっきの子が、オーキド博士たちも仰っていた子?」

サツキが不在であった頃の情報を含めて軽く状況確認を済ませると、気を紛らわせるようにとサツキが新たな話題を放り投げる。

話の流れを切らないようにと口を挟まなかったが、消えていったトレーナーの顔はサツキも目にすることがあった。直接彼と出会った事はないが、この旅が始まる前にオーキド博士やウツギ博士が提示した写真で目になっている。

「ええ。ゴールド。俺の友達です。——うずまき島で再会したんですよ」

「そっか」

場所が場所なだけに話しにくい事であったが、サツキに気にするそぶりは見られなかった。それだけゴールドの存在、そして彼の話していた言葉の衝撃が大きかったのだろう。

「彼の言う通りだとするならば、やはり伝説のポケモンを使って仮面の男は時間を移動して何かを企んでいるって事ね」

「はい。オーキド博士たちもそう考えているようでした」

「私も仮面の男の命令を覚えているから間違いないでしょう。敵はエンジニアシティの伝説のポケモンの捕獲も目論んでいた。おそらくすでにゲットしているかもしれない」

「そこは俺も同感です」

とはいえいつまでも感傷に浸っているわけにはいかなかった。

今も動いている巨悪の動向に対応すべく、二人は今後の方針を話し



合う。

敵の狙いは確実につかんだ。今ならば敵の次の動きを読む事も不可能ではない。

「向こうも私が洗脳から逃れた事はすぐにわかるかもしれない。なら、きつと新たな手を打つかも。さつきゴールド君が言っていたトレーナーの事が気になるけど」

「あつ、それについては問題ないです」

「ん？ どういう事？」

戦況の変化は相手も読み取ることは容易に想像できた。

となればゴールドの話していた相手の下にいるという存在が鍵になる。まずはそちらの人物について対応を考えようと話すサツキだったが、シユンが彼女の言葉を遮って意見を述べた。

「そのトレーナーについては、見当がついています」

「……えっ？」

「間違いないはずですよ。正直信じたくないというか信じられないですけど、おそらく相手は——」

これまでならば至るはずがなかった答えだ。

だが今ならば断言できるとシユンはゆっくりと口を開き、その人物の名前を——

「——ならば話は早い」

声にしようにして、その台詞は第三者によって遮られた。

二人は即座に振り返り、警戒を強める。

すると茂みの中から二つの人影が姿を見せた。

どちらも顔には仮面の男と同じ仮面を顔全体につけているため顔立ちは不明だ。だが幅広の骨格や体つきから二人とも男であろうことは推定できる。

「お前は俺がここで消してやる」

そのうちの一人、隣の男より少し背丈が小さいほうの男がシユンの方へと顔を向けて告げた。

彼からは強い殺意のようなものがにじみ出ている。明らかに狙いをシユンに定めていた。

咄嗟にサツキがシユンを庇うように前へ出たが、シユンはサツキを手で制す。

「やっぱりな」

「シユン君?」

サツキは相手の正体に合点がいかなかったが、シユンにはすでにこの二人が誰なのかわかつているように納得の表情を浮かべていた。

どういう事だとサツキに尋ねられると、シユンはこれまでの旅を振り返りながら自分の考えを述べていく。

「前から疑問はありました。俺達の動向を知っているような仮面の男の動きの数々。それに、決定打となったのはサツキさんの事です」「私?」

突如自分の名前を呼ばれ、困惑するサツキ。一体彼の言いたい事が何なのか予測がつかないため、聞き返すにとどまり先を促すと、彼は苦し気に表情を歪めながらも話を続けた。

「……うずまき島での戦い。あそこでサツキさんが氷漬けにされ、さらわれ、オーキド博士からまず命はないだろうと告げられて、俺はひたすら自分を恨みました」

「それは!」

「取り返せなかったという事もそうですが、それだけじゃありません」「えっ?」

サツキが即座に反論しようとするも、自棄になったわけではないシユンは冷静だ。やんわりと彼女の意見を否定しつつ、話を再開する。

「俺ならば、助けられると思ったからです」

「……どういう事?」

「俺の力は決してポケモンだけに作用するわけではありません。今まではポケモンしか対象にしてこなかったけど、生命エネルギーを譲渡できる相手ならば相手を選ばない。そして対象となるのは全く同じ細胞や組織による再生だ。——たとえば氷による細胞の死であろうとも。サツキさんも助けられたと、考えたんですよ」

ワカバの力は人間にも対応できる。

そして彼の力の特殊な点は治癒というよりも再生に当たるのだとシユンは語った。

これこそがイエローたちの持つトキワの森に伝わる癒しの力との相違点。彼は知らぬことではあるが、仮にイエローではなくシユンがかつてレッドのピカが負った怪我を治したならば、耳の傷跡でさえ残る事無く完全に消えていたことだろう。

「だから、そんなサツキさんが生きている時に『どうして』という気持ちになりました。それも今となってわかったわけですけど」

「……賢いな。自力でそこまで考えるようになったのか」

するとここまで静寂を決め込んでいたもう一人の背の高い男が言葉を発した。

相手はそう言つて顔を隠していた仮面へと手を伸ばし、ゆつくりと剥がして地面へと落とす。40代ほどだろうか、厳つくも精悍な顔立ちが露わになった。

「しばらく見ない間に、お前も成長していたんだな。我が子の事とあつて何とも喜ばしいものだ」

「……我が子？」

「俺の父・エイジです。ゴールドが話そうとしていたのは、この人の事ですよ」

敵——エイジの、シユンの言葉にサツキが目を丸くする。

確かに言われてみればどこか顔つきが似ているように感じられた。本人が言うのだから間違いないのだろう。だとするならば、先ほどの彼の話にも理解できる。

「そう言う事。それじゃあ私を氷から助けたのは——」

「いや、それは違いますよ」

『あなただったのか』と続けようとしたサツキの言葉はまたしてもシユンによつて発せられることはなかった。

この否定に再びサツキは混乱する。彼の言いたい事から察するに、サツキを治したのは彼と同じ力の所有者であるはずなのに、

「理由は単純です。父は力を持っていません」

「……えっ？」

「前に話したかもしれませんが、力の出現自体が珍しいんですよ。少なくとも俺の知る限りではこの力を持っているのは俺だけです」  
「どういう事？ それじゃあ先ほどの話と辻褃が合わなくならない？」

答えを示されても結論に直結する事は難しかった。

彼の言っていることが全て正しいならば矛盾が生じる。ワカバの力の持ち主ならば助けられたサツキが生きていたのだから、相手側にも同等の存在がいるはず。にも関わらず現時点でそれはシユンしかない。これではやはり話が合わないはずなのだが。

「合いますよ。俺しかいないというなら、それが答えだ。だからこそ父さんがそつちにいる事も納得できた」

「……そうか。そこまで結論を出したのならば、俺もこれはもう不要だな」

ありえない答えを排除し、残った答えがこれなのだとしユンはハッキリと断じた。

するとエイジの隣に立っていた男も彼の説明に感化されたのか、顔を隠していた仮面に手をかけ、そして忌々しげに地面へと叩きつける。

「……えっ？」

そして現れた顔を目にし、サツキは言葉を失った。

相手の顔を凝視し、一度シユンへと視線を移し、もう一度戻す。

——ありえない。

多少彼女が見知ったシユンよりも成長しているのだろうか、顔立ちがわずかに違うように映るが、間違いない。

「——シユン君？」

自分を助けた少年と全く同じ存在が、そこに立っていた。

## 第四十四話 V S ピカチユウⅡ 過去からの刺客

「どういう事？ そんなことがあるわけが」

「ない、とは言い切れない。」

未来からやって来て、そして消失したゴールドという存在を思い返し、サツキはその先の言葉を紡ぐことは出来なかった。

少年——いや、もはや成人したようにも見える顔つきの彼にこの表現は不適切だろう。相対しているシユンとよく似た顔つきの男は容姿だけでなく背丈も伸び、骨格もしっかりしている。たとえ時を渡ったという話が本当だとしても、少なくとも先ほどのゴールドのように時を渡ってすぐの存在、という事ではないのだろう。

「それがありえるんですよ。サツキさん」

彼女のつぶやきを肯定したのは、まさにその大人びた男だった。

シユンに対して向けていた殺意とは打って変わって親しい者に対して向けられる柔らかい笑みを浮かべている。どうやら彼の中でサツキをここで害そうという気持ちはないようだった。

「あなたも、私とは面識があるの？」

「もちろん。おそらくその点に関してはそこにいる俺とそう大差はないはずだ。——逃げ帰って来た俺は、あなたと共にこのジョウト地方を駆け巡り、調査をしたんですから」

「……逃げ帰ってきた？」

果たして答えが返ってくるのか半信半疑の問いは、意外にもあつさりとは返答がなされる。

やはり予想通りの内容で、その中でただ一つだけ理解できなかった言葉が引っ掛かり、その言葉を反芻した。

「お前が、この時代に来たのはいつだ？ そもそも、どのタイミングでこの時代に来たんだ？」

新たに生まれた疑問が解決しないまま、シユンが未来から来たであろう自分へと質問を投げかける。するとまたしても表情が一変し、厳しい視線が彼へと向けられた。

「……この時間軸でいうならば、今からおおよそ二年後の世界から来た、

と言っておこう。二年後から、四年前のこの世界に」

「四年前」

つまりシユンから見て目の前の男は六歳年上、二十歳の自分という事になる。

やはり予想通り未来からやってきて、しかも今よりずっと過去の世界にやって来た。そっしてこの世界で成長していたという事は驚きの事実だ。

加えて重要なのは、四年前という時間である。

（父さんが失踪した年——）

それはシユンの父・エイジが姿を消した年と合致していた。

（それじゃあまさか、父さんが失踪したのもこいつの影響か……？）

さらに推測が広がっていく。

今まで父の失踪の原因は思い当たる点がなく、ずっと謎のままだった。仕事熱心で家族も大切にしていた父がそう簡単に消えるはずもない。家族よりも大切なものがあるのかと、憤りを抱いた事もあった。

——だが、もしもその家族から何かしらの要請があったとするならば話の展望も変わってくる。未来からやって来た、この世界では孤独の息子。信じるのは難しいだろうが、逆に信じれば父ならばきっと助けになるために動きだすだろうことは容易に想像できた。

「……わからないな。お前は『俺と大差はない』、『調査をしていた』と言った。ならばなぜその仮面の男に味方する？ なぜサツキさんに俺を殺させようとした？ お前の目的はなんだ？ なんのためにこの世界に来た？」

その一方で先ほどのセリフが正しいならば明確な矛盾がある。

もしも相手の言葉通りならば、未来の世界の自分も同じように仮面の男と敵対し、調査をしていたはず。それにも関わらずこの世界に来て仮面の男を手助けするように父と行動を共にしていた。しかも親しいはずのサツキを操り、過去の自分を殺害させようとして。

「味方じゃない」

「はっ？」

「俺はやつの味方じゃない。一番の目的を達成したならばあいつも俺が倒す予定だった。できなければ後は父さんに全てを託すつもりだった」

そう言って淡々と過去の自分の疑問を切り捨てた。大人の自分からの想像に反した答えにシユンは拍子抜けする。

「あいつを止める以上の目的があったというのか？」

「ああ。それ以降の問いに関しては……ここで言うつもりはないな」

さらに問いを重ねるも、大人シユンはサツキを一瞥して言葉を濁すに留まり、未減を避けた。彼女がいる中で話すことはためらわれたのだろう。

「……サツキさん。一足先に仮面の男の下へと向かってくれませんか？」

「あなたはここに残るつもりなの？ あちらは戦う気のようにだけだ」

「今の俺の体では絶対に遅れが生じます。足並みを崩すわけにはいかない。それに、ここに残ることで情報が色々掴めそうなので」

その様子を察し、シユンはサツキに先に行くように促した。

どちらにせよ仮面の男の行く手を阻むために出発しようと考えていたのだから妥当な判断ではある。

ただ、気になるのはやはり自分同士の戦いが繰り広げられようとするこの現場を放棄してよいのか、その一点だったが。

「私からも頼む」

そんな彼女に、エイジが一步前に出て嘆願した。

「息子が言ったように、少なくとも仮面の男を倒すという点に関してはこちらも目的は同じだ。私も同行するので、どうか彼ら二人だけにしてほしい」

「……その言葉を信じろと？」

「信じられないという気持ちはわかる。だがそれを承知の上でお願いしたい」

敵であった者の言葉をそう簡単に受け入れられるはずもない。その気持ちを重々理解した上で、エイジは重ねて頭をさげた。

「もうあいつには、時間がない」

エイジは大人シユンを一瞥し、悲しそうな声をあげる。告げられた情報に、シユンとサツキも視線を戻し、そして瞳を見開いた。

大人シユンの体から小さな光がこぼれ始める。

先ほども目にした、未来から来たゴールドと全く同じ現象が起こっていた。

「これは……！」

「……驚くことではない。時渡りの目的がなされないとしても、未来が変わった事で矛盾する存在が生じたとなれば消えるのは当然の事でしょう」

「未来が変わった……？」

驚くサツキに大人シユンは静かな声で諭す。

矛盾する存在というのは今の彼自身の事だろう。

ただ、未来が変わったという点がシユンは引かかった。

「こいつがいても、時間を遅らせるのがやつとか。——まあいい」

腰のベルトに刺さったモンスターボールに視線を落とし、大人シユンは短く舌打ちする。

だがそれも一瞬の事。すぐに表情を正すと、彼は目的を達成するべく標的を睨みつけた。

「消えるとしても、このままでは終われない。せめて最後に、お前はここで消し去る！」

自分へ向けるものとは思えないほどの鋭い視線。

ここで存在を抹消する事になんの躊躇いもない、覚悟を決めた気迫が籠った姿であった。

「行ってください、サツキさん。——父さん、信じるよ」

その思いを真っ向から受け止め、シユンはもう一度サツキの出立を促し、そして久しぶりの再会でありながらほとんど言葉を交わさなかった父に、せめて最大限の気持ちを伝えようとシユンは真面目な口調で言った。

「……後からちゃんとついてきてね」



二人の様子を察したサツキは手早くシユンのポケモン達の回復を  
行い、そしてメタグロスの背中に乗る。

「ああ。二人とも、こちらの事は任せてくれ」

エイジも手短にそう告げるとヨルノズクに乗ってサツキ共々その  
場を後にした。

こうして二人の同じ存在だけが残り、真っ向から向かい合う。

どちらからともなく互いに自慢の先鋒・ピカチュウを繰り出し、臨  
戦態勢に入った。

「どうしても、戦うんだな？」

「そちらにその気がなくてもな」

「なら仕方ない。聞きたい事が山ほどあるんだ。情報を聞きださせて  
もらう！」

和解の道はなく。その言葉を最後にピカチュウとピカチュウ、同じ  
個体がぶつかり合った。

「二〃でんこうせっか〃！」

瞬く間に加速し、黄色い光を残して突撃するピカチュウたち。

ちようど二匹の中間の地点で両者が頭から激突。

威力は拮抗し、周囲には衝撃波が広がって――

『悪いな。母さんにもよろしく伝えといてくれ』

そう言つて調子のよい声色でゴールドがポケギア越しに新たに友  
達となったトレーナー・ゴロウへと告げる。

ようやく探し求めていた家族のようなポケモン・ニヨロモのニヨた  
ろうと再会できたのだ。喜びが声に籠められていた。

『もちろん。で、ニヨたろうはどーするでやんすか？』

『それなー。今ジョウト地方全域で通信ができねえんだろ？ 仕方ね  
えから連れ歩くしかねえな』

『そうでやんすねー』

一方で、本来なら家にいるべきこのニョロモどうすべきかとゴロウに話を振られ、ゴールドは頭を悩ませた。

二人の言う通り、まだジョウト地方ではポケモン・通信システムがシステムダウンの状態。少し前までのようにパソコンを使ってポケモンを送る・受け取るという事が出来なくなっていた。

『全くだ。通信システムさえ無事だったなら、俺もわざわざ出てくる必要なかったのかもしれないのに』  
『ん?』

彼らの意見に同調する声が近くの草むらから現れる。

突然ではあるがどこかで聞いたようなことがある声の響きだ。

ゴールドはゆっくりと後ろへ振り返り、声の主を確認して頬を緩ませた。

『しゅ、シユンさん!!? シユンさんじゃないっすか! どうしたんすか!?!』

『久しぶりだなゴールド。届け物だ。——ついでに、ちよつとお前に同行しようと思つてね』

歓喜の声をあげる後輩トレーナー、ゴールドにつられるように、シユンも笑みを深くする。

ここから彼らの旅は始まったのだった。

「ツ!? ……なん、だ? 白昼夢?」

突如脳内をよぎった記憶にシユンは立ちくらみする。

あまりにもリアリティにあふれた過去の記憶の再現のような映像だったが、シユンには全く覚えがなかった。見えたのはゴールドと自分がジョウト地方のどこかで再会したようなものだったが、二人が再会したのはうずまき島のはずだ。このような経験はしていない。

「今のは、まさか……?」

突然の情報に流されかけたが、それでも何とか持ちこたえてピカチュウに新たな指示を飛ばす。

このような幻覚に惑わされてたまるかと、体を引き締めた途端――  
再び、覚えのない情報の波が押し寄せた。

シユンの知らないシユンの記憶が、再びシユンを招き入れる。

今まで目にした覚えのないほど大量発生したギャラドスが所せま  
しと湖の内外を暴れまわっていた。

## 第四十五話 VSギヤラドス IFの世界

『うおおおおー!』

『な、なんだあ!?!』

崩壊したエンジュシティを発ったシルバーを追って急ぎいかりの湖に向かい、ようやく到着したゴールドとシユン。

走ったために乱れた息を整えようと膝に手をつく二人だったが、突如として湖の中から現れた大量のギヤラドスが彼らを驚かせた。

逃げ惑う近隣住民に続くようにゴールドたちも湖を後にしようと背を返したその瞬間、彼らが追いかけていたトレーナー・シルバーが一人湖の中心部へと向かって行く光景が目に見界に入る。

『シルバー! あいつの『指令』ってのはこれの事か!?!』

『……とはいえ一人ではこのギヤラドスを抑えきれないだろう。俺達も向かおう!』

『了解!』

大量発生したギヤラドスの群れはとても単独で制圧できるとは思えなかった。

見捨てるわけにもいかず、二人は即座にシルバーの後を追う。

『おい、シルバー!』

『……来たのか』

『そうあしらうなよ。こんな大事、一人で解決なんて無理だろう』

『オレらにも手伝わせろって。——あの『指令』でお前は何かをつかんだんだ?』

エンジュシティから後を追ってきた二人のトレーナーに、シルバーの冷たい視線が突き刺さった。常人ならば怯んでしまいそうな雰囲気であったが、初対面というわけでもないゴールドたちには通用しない。

ゴールドは単刀直入に、彼とのバトルとの際にシルバーのポケギアにかかって来た『指令』の内容を問うのだった。

『よく見れば馬鹿でもわかる』

『なにつ!?! うおっ——!?!』

『ゴールド！』

するとシルバーは煽るようにそう言うと、突如ゴールドを背後に突き飛ばす。

いきなりの暴拳にゴールドが不満をぶつけようとすると、先ほどまでゴールドが立っていた場所を一匹のギャラドスが突撃した。もう少し移動が遅かったならば重傷を負っていたことだろう。

『この湖の周囲に怪電波が流れている。この電波がもともとこの湖に住み着いているコイキングたちを強制進化させている。これがこのギャラドス大量発生の原因だ』

『つまりギャラドスが突然現れたのではなくコイキングの同時進化が起こつていると……？』

『なら話は簡単だ。その電波の元さえ叩いてしまえば——つておい！  
待てよシルバー！』

野生のポケモンを強制的に、しかも同時多発的に進化させている。シルバーの説明にシユンは耳を疑った。

だが、確かに元々コイキングで有名なこの湖の状況を考えればその考えが最も可能性が高い。

ならばいち早く発生源を抑えようとゴールドが提案するも、シルバーは一人ヤミカラスにつかまり宙に飛び立ってしまった。

『お前たちはそこでギャラドスたちの足止めをしている！』

『はあ!? なんてお前の命令に従わなきゃなんねーんだ！』

『ゴールド、危ない！』

『うおっ!』

『ピカチュウ、10万ボルト！』

勝手な言動に苛立ちをぶつけるゴールドだが、その間も危機は待たてられない。

ギャラドスの巨体がゴールドに迫った。

危うくシユンのピカチュウが電撃により迎撃したものの、次々とコイキングがギャラドスへと進化していくため数が減る様子は見られない。

『固まっつては的にされる！ 別れよう！』

『オツケー！　じゃあ俺は右に！』

『左は任せろ！』

このまま二人一緒にいては集中砲火を食らう。敵に意識を割くためにゴールドとシユンは二手に分かれて迎撃に当たったのだった。

『マグマラシッころがる』！　ゴルバット　『つばさでうつ』！　サナギラス　『いわなだれ』！』

ピカチュウだけでなく、シユンは手持ちポケモンを総動員してギャラドスの群れに対峙した。

地面を転がったマグマラシが突撃し、ゴルバットの翼が弾き飛ばし、サナギラスが降り注いだ岩がギャラドスに突き刺さる。

特に相性をついた技は威力が凄まじい。

ゴルバットの攻撃を受けた個体は何とか持ちこたえ、反撃せんと襲いかかるもの――

『ゴルバット　『ざいみんじゅつ』！』

ゴルバットが眠気を誘う暗示をかけると、ギャラドスはたちどころに眠ってしまった。ギャラドスの巨体が大きく揺れ、湖の中へと沈みかけようとしたその瞬間。

『今だー！』

ここぞとばかりにシユンはモンスターボールを放り投げた。

ギャラドスの体が沈み切る前にボールは頭部に命中、無事に捕獲に成功する。

『さすがにこの乱戦でねむりの状態で沈ませるのは危ないからな。よろしく頼むぜ』

敵味方構わず暴れまわるギャラドスの群れの中、『ねむり』のまま放置させる事はできなかった。一瞬の判断で捕獲に切り替えたシユンはボールを回収すると、眠りこむギャラドスに一言添えて再び戦闘に戻っていく。

『とはいえこのままじゃキリがない！　アンテナはどこだ！』

何とか凌いでいるが、このままではジリ貧だ。

元凶である電波を飛ばすアンテナを探るシユンだが、一向にそれらしき人工物が見当たらない。

湖の中なのか、それとも他の場所なのか、空中なのか。ありとあらゆる場所に視線をめぐらした。

『むっ!?!』

すると湖の中心部で一匹の際立つ存在感を放つ一匹のギャラドスが目に止まる。

そのギャラドスは色違いなのかうろこが通常の青と違い、赤く光り輝いていた。しかもどこか目がうつろで正気を失っているようにも見える。

『なんだ、あのポケモンは!』

特殊なポケモンなのか。警戒心を強めると、突如怪電波が強まったのかポケギアから響くノイズが一層激しさを増した。

『まさか、こいつがアンテナの役割だっていうのか!?!』

『俺も同意見っすよ!』

『ゴールド!』

赤いギャラドスが放つ『ハイドロポンプ』を避けながら、シユンは冷静に分析する。

信じられない事だが、彼だけではなく駆け付けたゴールドもその意見に同調した。

『シルバーがこのギャラドスを捕まえろって言ってるっす! そうすればアンテナも消えるはずだっ!』

『わかった。じゃああいつの動きを止めよう!』

『ニョたろう、うずしお!』

『ゴルバット、さいみんじゅつ!』

方針が固まれば動きは速い。

ゴールドのニョロトモが作り出したうずが赤いギャラドスを渦の中心部に閉じ込め、身動きを封じたギャラドスをシユンのゴルバットが眠りにつかせた。

『シルバー!』

『捕獲を頼む』

『よし!』

絶好の捕獲チャンスだ。後は空中で最も湖に近いシルバーがモン

スターボールを投げ、無事に赤いギャラドスの捕獲に成功する。

アンテナのポケモンが捕まると瞬く間に怪電波は止み、他のギャラドスたちも冷静になったのか湖の中に戻っていくのだった。

『これで終わりか。危なかったー』

『そうだな。一件落着だ』

無事に事件が解決し、ゴールドとシユンは安堵の息をこぼす。

多少地面がえぐられたり柵が壊されたりなどの被害は出たものの人的被害はないのだ。最良の結果と言えるだろう。

『よしっ。じゃあ俺は一度チョウジタウンに行つて逃げて行つた人たちに終息したつて伝えてくるよ。ゴールドは一応何かの時の為に備えていてくれ』

『あー。そういや一般人どもが逃げてましたねー。了解つす』

後は避難した人々に無事にこの騒動が収まった事を伝えるべき。

もしも逃げた先でさらに騒ぎが大きくなっては大変だ。

ゴールドに万が一の時の事を考えて後の事を託すと、シユンは一人来た道に戻り、チョウジタウンへと足を運ぶのだった。

『——フッフッフッ。またお前たちか。よく我が眼前に何度も姿を見せられるものだな』

この時の判断を、迫りくる巨悪に気づけなかった愚かさを、シユンは後悔する事となる。

『……………ハッ、ハッ、ハッ、ハッ！』

茂みに隠れ、様子をうかがうシユン。

荒れた息を必死に抑えようと努力するが、呼吸がそう簡単に整う事はない。

口に両手を当てて必死に音を殺し、気配を消し、敵に気づかれなないようにしつつ目の前の惨劇を捉え続けた。

(なんなんだよ、あいつは!? あれが、仮面の男!?)

デリバードにつかまって空を飛んでいる、顔に大きな仮面をつけた



存在。

シユンが巨悪と対峙するのはこれが初めてだった。ゴールドはかつてウバメの森で対峙し、大けがを負ったがその時のシユンは傷ついたポケモンとトレーナーを運ぶために別行動をしていたために遭遇しなかった。

ゆえにこれが彼にとって初めての仮面の男との遭遇。

しかし、あれこそがゴールドやシルバーたちと共に立ち向かおうとしている仮面の男であると理解しているのに、身体がいう事を聞かず、仲間を助けるために飛び出す事すらできなかった。

(勝てない。勝てるはずが、ない……)

戦う前にシユンの脳裏に敗北がよぎる。相手の尋常ではない実力ですでに戦意が喪失してしまっていた。

とはいえそれも無理のない話であろう。仮面の男が放った氷技は湖はおろかそこに住むポケモン、周囲の木々一帯までをも完全に凍り付かせ、かつての自然豊かな光景は完全に失われていた。

『所詮はその程度か。あれほど』私を倒す』などと戯れ言を吐いていたわりには随分とたたいないものだな』

『てんめえ……!』

凍り付いた湖の上で膝をつくゴールド。そんな彼を嘲笑う仮面の男の不気味な声が響き渡る。

ゴールドは傷ついたエイパムを庇い、仮面の男を睨み返すもそれだけだった。

すでに万策尽きた。もう、打つ手は残っていない。ただひたすらに歯を食いしばった。

『安心しろ。そう悔しがる必要はない。……今すぐにあいつの後を追わせてやろう』

そう言つて仮面の男は背後へと視線を向ける。

その先には一部分だけ氷が砕けている場所があった。

しかもわずかに見える水面からは気泡が浮かび上がっている。つまり、その真下には誰か生きている人がいるということだろう。

(……まさかシルバーもやられたのか!?)

信じられず、シユンの目が見開かれた。

シルバーはゴールドを圧倒するほどの腕を持つ実力者だ。そう簡単に敗れるとは思えない。

だが、負けたわけではないのならこの場にはない理由がわからなかった。

仮面の男はシルバーも警戒していたはず。こうしてゴールドと共にこの場にいるのだからきつと彼も鉢合わせしていたはずだろう。

ならばやはりシルバーさえも仮面の男によって湖の底に沈められたというのか。

『……何故だ？ もうテメーとの決着はついていただろ。あいつにはもう戦う力は残っていないかった。それなのに……それなのに何故シルバーにとどめを刺した!?!』

そのシユンの最悪の考えを肯定する叫びがゴールドの口から発せられた。

怒りに満ちた声は長年付き合いのあるシユンでさえ今まで聞いたことがないものだ。

それでも、そんな必死な訴えを耳にしても仮面の男は全く心が揺れ動かない。

『答えるまでもなからう。あやつは敵だ。敵を生かしておく理由がどこにある?』

こともなげにあっさりと言った。思わずゴールドは空の手を強く握りしめる。

『それに——』

『……あ?』

『やつは私の元を去った裏切り者だ。私の駒にもなれないような使えない男。……殺して当然であろう』

『なっ!』

それどころか、仮面の男はシルバーをさらに貶めるようにそう続けた。

人を人とすら思っていないような発言に、ゴールドの怒りは膨れ上

がっていく。

駄目だと、シユンは叫び、止めようと思ったけれど。

まだ体の震えが止まらない。立ち上がる事すらできなかった。

『……ぎげんな。ふぎげんじゃねーよ!! 他人の存在価値を、テメー一人の価値観で決めつけるんじゃないやねえ!!』

そんなシユンの様子など知る由もなく。

はち切れんばかりの声でゴールドが叫んだ。

だが、凍り付いた仮面の心にはその思いは掠りもしない。仮面の男は少年から視線をそらし、右腕をゆつくりと上空へ掲げた。

それは最後の合図だった。

直後、突如としてゴールドの足元の氷に巨大な影が映る。

彼が気づいたときにはすでに手遅れだった。異変に気付き、視線を上げた時にはすでに巨大な氷塊が眼前まで迫っていた。

』

ゴールドの絶叫は空しく響き——そして消えていく。

誰もいなくなった湖でただ一人、仮面の男だけが立っていた。

しばし湖面を見続けたあと、何事もなかったかのようにその場を去っていく。

ようやく仮面の男が見えなくなってから、シユンは草むらから飛び出したのだった。

『……ご、ゴールド? シル、バー?』

名前を呼ぶが、当然ながら返事はない。

湖の底に沈んだ者が声を発せられるわけもなかった。そもそも彼らは傷つきボロボロの状態だったのだから。

『た、助けなきや。……でも、どうやって? ギャ、ギャラドス!』

混乱する思考のなか、必死に二人を救出すべく思索に耽る。

しかし助けようにも凍り付いた湖の中へ子供である彼がひとりで飛び込めるはずもなかった。先ほど捕まえたギャラドスを出そうにも、急いでいたためダメージはもちろん「ねむり」からも回復できていない。

何もできることなど、なかった。

『だ、誰か！ 誰か、誰でもいい！ いないのか!? お願いだ、助けてくれ!』

目に涙を浮かべ、シユンは必死に助けを呼び続けた。

すぎるような思いで声を出せども、期待に応えるような人物がその場にいるはずもなく。

シユンが必死の思いでチョウジタウンまで戻り、ようやくいかりの湖の中の搜索が始まったころには、すでにシユンもシルバーも湖の下から姿を消してしまっていた。

「うっ……! あ、ああ、あっ!?!」

意識が現実に戻り、シユンは体を震わせて身もだえした。

息苦しさが、身を襲うけだるさが、今こここそが現実なのだと彼自身に真実を伝える。

「今のは、あの時に見た記憶……!?!」

間違いなかった。

あれはあの日、ワカバタウンを旅立つ日に見た夢と同じ光景だ。

シルバーとゴールドが仮面の男に敗れ、沈められたというあの戦い。それが今、まさに彼の脳内で再現されていた。

「なんなんだ、これは。さっきのと言い一体どうしてこんな……」

「これがこいつの能力だ。対象の人物の過去をなぞるように辿っていく。本来は特別な場所でしか起こりえない事だが、同じ存在が並び立っているんだ。こういう事もあるだろう。俺にも、お前と同じことが起きている」

突然発生した異変の連続に混乱する中、未来から来た自分がベルトのボールの一つに触れながら問いに答える。

実は大人シユンにも同じような現象が起きていた。彼にもこれまでの冒険で見てきた過去が次々と現れては消えていた。

全ては全く同じ存在がぶつかり合うという異常が生んだ出来事。互いに辿る事のなかったIFの自分を目にしていったのだ。

「――ならば、このままの方が話は早いかな？ お前の言う目的とやらも見させてもらう」

「良いだろう。どうせ俺でも止められはしないのだから」

二匹のピカチュウが放つ「アイアンテール」の威力は互角だった。

金属音が木霊し、衝撃は相殺され、お互いに距離をとる。

ならばと電撃を撃ち放つがこれも決定打にはかけた。

すかさず未来シユンはピカチュウを引っ込めて新たにバクフーンを繰り出すと、シユンも負けじとサンドパンに交代する。

バクフーンの「かえんぐるま」とサンドパンの「ころがる」が勢いよく衝突し、火花を散らして。

再び、意識がぼんやりと遠のき始めた。

## 第四十六話 VSエレキッドⅡ 終わりの始まり

『何をやってるんだ俺は』

故郷であるワカバタウンへと向かう道中。シユンの表情は優れなかった。

本音を言えば、今更知り合いに会わせる顔もないのだが、起こった出来事とその顛末を知らせなければならぬ。そのため自分やゴールドに任務を託した人々に伝えるべく、旅した道のりを遡っていた。その間も絶える事なく襲ってくる自責の念に駆られ、まともに心境を整理することさえできない。

手持ちポケモンのマグマラシが寄り添って歩く彼の姿は非常に痛々しいものであった。

『助けるどころか、戦うことすらできなかった……!』

倒すべき巨悪と遭遇していながら、大切な仲間が戦っている光景を目前にして、彼を見殺しにした。

勿論、自分がいれば相手を退けられた等と自惚れるわけではない。相手との力量の差を理解していないわけではない。むしろ誰よりもわかってしまったからこそ足がすくんでしまったのだから。

たとえシユンがあの場合に参戦したところでゴールドやシルバー共々返り討ちに合っていた事だろう。そういう意味では彼の判断は間違っただけではなかった。

それでも、そこまでわかっていても傷つくゴールドの隣に立てなかつた、己の心の弱さを彼はひどく悔やんでいた。

『助けたいと、思っていたのに……!』

元々シユンはゴールドのように冒険に出るつもりはなかった。

だが、ウツギ博士研究所の襲撃事件、復活したと噂されるロケット団の暗躍、通信システムの不通など度重なる事件の連続を耳にし、彼は己の向上心と好奇心を抛り所にワカバタウンを旅立った。

彼も冒険に対して強い関心を持っていたのだ。

この世界の彼は年相応の成長を遂げており、父親との離別もなかったために強い覚悟を抱くこともなかった。

『考えが甘すぎたんだ』

普通に各地を歩き回って、普通にバトルをこなして、普通に友達と笑い合えればいい。

そんな甘い幻想を抱いて、そして、打ち砕かれた。初めての挫折は幼い心に大きな影を産み出した。

『ごめん、ゴールド！ごめん、ごめん！』

もう謝罪を告げる相手もない。

それでもシユンは涙を流しながら同じ言葉を何度も繰り返した。

次の機会があつたならば、次は必ず迷うことなく戦う。たとえどんな状況だろうと敵を止めてみせる。そう決心して。

この決心が、後に最悪の結末を生むことになるなど、当時のシユンは知る由もなかった。

『うわああああ！』

『……なんだ？』

シユンがワカバタウンに到着してすぐの出来事だった。

街の中心部から突如前触れもなく響く悲鳴のような声。シユンはつられてそちらへと視線を向けると、少し先のところでポケモントレーナーとポケモンが共に横たわっていた。そんな彼らのすぐ目の前には一匹のポケモン——黄色い体に走る黒いラインが特徴的なポケモン——エレキッドが得意気に腕を合わせ、笑っていた。

『……野生のエレキッドか』

周囲にトレーナーらしき人物の姿はない。そもそも人通りの多い場所でトレーナーかポケモンバトルをするはずもないのだから間違いないだろう。

『どいてください』

『えっ？ いやでもこいつは……おっ、シユンか！ 帰ってきていたのか！』

シユンは足早にエレキッドの近くへと歩み、動向を見守っていた男性の肩を叩く。

男性は野生ポケモンは簡単に倒せる相手ではないと注意を呼び掛けようとしたが、相手がシユンであることに気づいてあっさりと引き下がった。

新手が現れたことに気づき、エレキッドもすぐさま臨戦態勢に入る。

しかし。

『行け、サナギラス』

シユンが繰り出したポケモン、サナギラスと相對して、エレキッドの体が縮こまってしまった。

サナギラスの身から醸し出す威圧感と、鋭い視線に当てられて、

『悪い。今はちよつと気分が悪いんだ。手荒に行くぞ』

そして何より、トレーナーの口から発せられた冷たい声色から、エレキッドは多大なるプレッシャーを感じ取っていた。

『仮面の男がいかりの湖に!?』

『そんな。まさか、ゴールド君が……!』

ウツギ博士の研究所でシユンからの知らせを聞いたオーキド博士、ウツギ博士は驚愕の余り言葉を失った。

突如出現したギャラドスの大量発生、それを引き起こしたという敵の首領の襲撃とその圧倒的な実力、犠牲となってしまったゴールド。たった一時間ほどの間で起こったという出来事は直接見聞きしていない博士たちにも敵の強大さを伝えるには十分なものだった。

『申し訳ありません。何もできず、ゴールドを発見することすらできないまま、俺だけが戻ってきてしまいました……』

『シユン君……』

震えた声でそう答えるシユンの姿は今にも折れてしまいそうなほどに悲壮感が漂っていた。



昔から交流が深かった、悪友と呼べる親しい友を目の前で失ってしまった。その喪失感には計り知れない。何と声をかければ彼の救いになるのか、ウツギ博士は判断がつかず口を閉ざしてしまった。

『いやそれ程の相手であったならば、たとえ他の誰が一緒であったとしても結果を覆すのは難しかっただろう。むしろ君だけでもよくぞ無事でいてくれた。——こちらからも改めてゴールドや共に湖に沈んでしまったというトレーナーの搜索を要請する。君は少し実家に帰って休んでくれ』

しかしこのまま放っておくわけには行かない。オーキド博士はあくまでも彼の冷静な判断を称え、しばし休養するようにと指示を出した。

これ以上の搜索は地元の住民や警察の協力が求められる。その間シユンには何とか鋭気を休めて次に備えて欲しかった。

『……わかりました』

その意図を察し、気力が尽き果てていた事もあってシユンは二つ返事で領きその場を後にする。

彼が研究所を後にした事を見届けて、オーキド博士とウツギ博士は善後策を講じはじめた。

『わしらの認識が甘かった。ウバメの森の襲撃が起きた時点で、もっと慎重に動くべきであったか……』

『ゴールド君の安否は心配ですが、こればかりは我々が直接できることは少ないです。彼の無事を祈りつつ、これからの事を検討しませんと』

『うむ。仮面の男の調査は続けなければならんが、その為には相手を目撃しつつ、逆に向こうからは認識されておらんシユン君の存在は重要であろう。彼をサポートしながら、戦力の補充を考慮するとして』

生死不明のゴールドの搜索は専門の者に任せ、祈るしかない。

それまではいまだ明らかになっていない敵の正体を探る手段を講じるべきだ。

ウツギ博士と同じ結論に至ると、オーキド博士はしばし思考に暮れ、そしてポケギアである人物へと連絡を繋いだのだった。

『ただ、いま……』

『あら？ まあ、帰ってきたの！ おかえりなさい、シユン。疲れてない？』

『おお、シユン。久しぶりだな！ 旅はどうだった？ 少し休んだら、色々話を聞かせてくれ』

その頃。

シユンが実家へと帰宅すると両親が揃って笑顔で出迎えた。

少し間が空いた親子の再会。旅の事情を知らない二人は深い意味もなく息子へ明るい調子で語りかけたのだが。

『……父さん』

『うん？』

心なしかいつもより幾分かトーンが低い声が耳を打つ。

呼ばれた父・エイジは相槌を打つにとどまり、どうしたのかと息子の次の言葉をうながした。

『ダメだった……』

『ダメ？』

『父さんの言った通りだった。俺は、何も、何も、できなかった……！』

空の手を握り締め、力の限り食い縛った口から流れた血がそつと頬を伝う。

彼の脳裏には、かつて父親から受けた教訓が甦っていた。

『いいかシユン。強くなければ何もできない。お前にも戦わなければならぬ理由ができるはずだ。そのときのために、後悔しないためにお前は強くなっておけ』

『大きくわければ理由は二つある。一つは、どうしても倒さなければならぬ存在が現れたとき。そしてもう一つは、どうしても救わなければならぬ存在ができたときだ』

話を聞いた当時は深く考えることもなく、ただ感心しただけで終わっていた。

だが、今自身が全く同じ状況に置かれ、危惧する通りの結末で終わったことで、その意味の重さを思い知り、彼の精神は限界を迎えていた。

『……場所を変えて聞こう。何があつた？』

ただ事ではない息子の様子を察し、エイジは手にしていた本を机の上に置き、真剣な表情でシユンと向き合う。

母親に余計な心配はさせないように二人はエイジの自室へと移動し、ゆつくりと当時の事を思い返しながら、シユンは父に事の顛末を話し始めたのだった。

『ゴールド君が……そうか……』

エイジも見知った少年が生死不明に陥つたと聞き、衝撃を隠しきれなかった。片手で頭を抑え、悲しみに暮れている。

近所の少年が旅に出ると聞いて、息子がその後を追って、それから話は特に何も話を聞いていなかった。連絡が無いことがかえって二人が無事に旅を続けているという事の現れだと思っていたのだが、その予想は最悪の形で裏切られてしまった。

『それで？ それでお前はもうするつもりだ？』

『……えっ？』

『ゴールド君の捜索は地元警察が引き継いだ以上、もはやお前にできることはないだろう。彼が無事に見つかるとして、お前はもうする？』

元々は彼の冒険をサポートするためにこの街を旅だったんだ。彼がない今、目的がないだろう。一体どうするんだ？』

息子が友の喪失に立ち直れていない中、あえてエイジは少し厳しめに彼に意見を聞いたのだ。

シユンが少しでも早く立ち直れるように。少しでも負い目から脱出できるように。彼に新たな目的を見出ださせようと。

『……力が欲しい。今度こそ逃げずに、立ちはだかる敵を有無を言わず倒せるだけの力が。その為に、鍛えたい』

父の言葉を受け、シユンの脳裏には仮面の男の姿が、歪な笑い声が鮮明に甦っていた。

思い返すだけでも腹ただしい。

あの巨悪は許せない。許してはならない。

明確な倒すべき敵への闘争心。それがシユンの心に深く刻み込まれていた。

『……そうか。救うためではなく、倒すためにか』

『そんなのはどっちでも良いだろう！』

エイジの言葉遊びのような確認に、シユンは声を荒げ、切り捨てた。もう嫌だったのだ。仲間が傷つき、倒れる様を見ていることしかできないう現状は、一度で十分だ。

どんな状況でも、どんな相手でも、自分で敵を打ち倒す。そんな力をシユンは望んだ。

これがこの世界のシユンと、元の世界のシユンの最も大きな差異だった。

それから五日が経過した。

シユンはこの期間、手持ちポケモン同士でトレーニングや模擬戦を繰り返して、経験値を積んでいた。

圧倒的に不足している戦闘の技量を補うため、日々鍛練に励む。目の前の物事に没頭し、未だに行方すら明らかになっていない友の姿を考えすぎないように。

『ああ、やはりここにいましたか。シユン君ですね？』

その日も手持ちポケモンとトレーニングに励んでいると、ふとシユンは背後からかかる声に気付き、振り返った。

『はい。あなたはウツギ博士の……』

『ええ。助手を勤めているものです。ウツギ博士、そしてオーキド博士がお呼びです。研究所に来てもらえませんか？』

『そうですか。わかりました。——よし、トレーニングはここまで！』  
ウツギ博士の助手と名乗る者の言わんとすることを察し、シユンは二つ返事で頷いた。

指示がなくても戦い続けるポケモン達に指示を出し、手元に呼び寄せる。

『行こうか。ピカチュウ、サナギラス、マグマラシ、クロバット、ギヤラドス、エレブー。もう一度、今度こそ何も失わない旅へ』

六体の手持ちポケモンが揃い、再び冒険の旅へと出るべく歩みを進めた。

手持ちポケモンの数もレベルも、この時はまだこの時代のシユンの方が上回っていた。

ここまではまだ良かった。

シユン自身は知る由もない事であるが、ゴールドとシルバーの両名が意識こそ無いものの健在であり、さらにこれからジョウト地方には彼らに味方する戦力が集う事になる。まだいくらかでも取り返しようがあった。

しかしここから歯車は、狂っていく。

## 第四十七話 VS バンギラス 破壊の果てに

「危うい」存在。

それがこの時代で初めてシユンと出会ったサツキが抱いた彼の人物像だった。

この時間でもオーキド博士から依頼を受けた彼女はシユンと共にジムリーダーを調査する任務に励んでいる。その過程でシユンの、そして彼のポケモンの実力をみて、鍛えようと励んでいた。

手持ちのポケモンはまだ荒削りだが、その辺りのトレーナーには遅れを取らない程には鍛えられている。シユン自身も多少はポケモンへの指示に遅れを見せる時が見られるものの、知識などは申し分なく、これからの成長を見据えれば及第点と言える実力と言えた。

『俺はどうなっても良い。とにかく、次に戦ったならば、必ずや仮面の男は邪魔する奴も含めて俺が倒します。たとえどんな手を使ってでも……!』

危険視したのは彼の考え方だ。

この時代でも行われていた、くらやみの洞穴での二人の談話。ここではラプラスには最低限の治療と、きのみなどの持ち物を手渡して終わったためかラプラスはシユンのパーティに加わっていない。

ラプラスの群れと別れた後にサツキが問いかけた、彼の戦う目的。怒りの感情が満ち満ちていた当時の彼はひたすらに敵の殲滅を望んでいた。

それ以外は何もいらないと語る彼からは余裕が微塵も感じられない。別の時間軸の彼と似た捨て身の意気込みも、その有り様は真逆のものであった。

守ることよりも倒すことを意識する。理念が変わった事はのちに彼の行動も、運命も変わっていく事となるのだった。

『……そう。行方不明という二人の為にも、まずは強くならないとね』  
『はい。わかっていますー!』

サツキは彼の思想を耳にして肯定も否定もしなかった。

目の前で親しい人間を失くしてしまったという彼に、出会ってから

あまり日が経っていない自分が何かを告げても説得力はない。何より今の彼にはどんな言葉を投げかけても心には届かない、そう感じたからだ。

これからも旅を続け、いろいろな人に出会い、ポケモンたちと交流を重ねていけば自然と彼の心も安らぐだろう。そう未来に希望を抱いて、サツキはそれ以上は深く立ち入らずに会話を終える。

その後の旅は順調だった。

あまりにも順調すぎた。

旅の経路は変わらず、ウバメの森でも二人は敵とは一切遭遇する事なく終わり、この地で時間を費やすことがなかった二人はコガネシティでも最低限の調査を済ませるとすぐに次の街へと向かう。

エンジュシティのジムリーダー・マツバ、アサギシティジムリーダー・ミカンとの戦いを経て、次第にトレーナーとしても成長していた。

しばらくアサギシティで時間を潰し、クリスタルとイエローとの合流するとタンバシティに向かう一向。

『ゴールド!? シルバー!? 生きて……!?!』

『うおおお! マジか、起きてこんなすぐ会えるなんて!』

『……お前は無事だったようだな』

その道中、うずまきじまにてシユンは生死不明だったゴールドとシルバー、旅立ちの目的であった二人との再会を果たす。

かならず取り戻すと誓ったものの本当に無事であるのかどうか保証はなかったために心の底で「あるいは」と覚悟していた。それゆえにこの喜びは一際大きかった。

『抵抗するな。これ以上抵抗すれば殺すぞ。……貴様の仲間たちを』

『ッ!?!』

『すでにルギアは我が支配下にある。私だけでなく伝説のポケモンまでも敵となればどうなるか。それほどの実力があればわからないはずがあるまい?』

そしてその後に再び訪れた衝撃も。

こちらでの時系列での大きな違いは、情報がなかったために仮面の男の奇襲は行われず、サツキが仮面の男と互角以上に渡り合っていたこと。しかしその上でもう一体の仮面の男が生成した分身体によるルギア捕縛が実施され、その情報が伝えられたことだった。

『……好きにしなさい』

彼らをここで失うわけにはいかず、サツキが自らポケモンたちをボールに戻し、仮面の男の指示に従い拉致された。

両者の間のみで行われたこの密約は当然他の者たちに知られる事はなく、

『なんで、なんでだよ！ ようやくゴールドたちが無事だってわかったのに！ 今度はサツキさんが……！』

守られた事を知らないシユンは、また身近な人間が消息不明となつてしまった事実にくく打ちひしがれる事となる。

その後は搜索依頼を出し、彼らはセキエイ高原へと向かう事となったが、ここでも大きな変化が見られた。

それがシユンのセキエイ高原での作戦参加だ。

サツキの具体的な安否が不明なためにガンテツから詳細な説明がなされなかったこの世界ではシユンはエンジュシティに向かう事なくセキエイ高原で仮面の男の動向を探る事となった。

やはりジムリーダーたちの対抗戦の最中に行われたロケット団の強襲、ジムリーダーの会場からの隔離、そして伝説のポケモンたちを率いた仮面の男の登場と事態は止まる事なく急展開を呈していく最中。

『……バカな。なんで、サツキさん!?!』

敵の洗脳下に陥ったサツキが会場に現れるや次々と建物を破壊していく。

シユンの叫びは正気を失った彼女には届かず、被害が増すばかり。彼の自慢のポケモンたちも止めようと向かっていくものの、圧倒的な力に敵う事なく蹂躪されていった。

『や、やめろ』

あるいは彼が持ちうる力を解放すれば抵抗はできたかもしれない。



だが、この時代のシユンはそうしなかった。

彼には覚悟が足りなかった。

父親との離別もなく、何かを救うという決心を抱くこともなく、巨悪との直接的な対決を迎えることもなく。

ただ敵を倒すという目的だけに囚われていた彼は、咄嗟の場面で寿命を縮めても構わないという余裕を抱けなかった。

『やめてくれ!』

それでも、サツキが蹂躪を繰り返し、人々の悲鳴がこだまする惨劇を見て、ただ見ているわけにはいられない。

守らなければ。

でも止められない。

普通に戦ってはただ制圧されてしまう。

どうしようもない状況の中、『邪魔する者はたとえどんな手を使っても倒す』とそう誓った彼は。

『バンギラス、はかいこうせん!』

彼のポケモンが持ちうる中での最大火力の発射を命じた。

山一つくらいならば容易に吹き飛ばしてしまうというバンギラスの必殺の一撃、この技は。

彼女のポケモンごと、サツキの胴体を貫いた。

「なっ、えっ……!?!」

目にした光景を受け入れきれず、シユンの目が見開かれた。

「エレキブル、グロスチョップ!」

「——ヘラクロス、メガホーン!」

敵が怯んだ隙をついたエレキブルの猛攻、しかしシユンもすぐにヘラクロスに迎撃の指示を下す。

格闘戦を得意とする両者の攻防。エレキブルの二振りの手刀とヘラクロス的一本角が何度も交錯し、火花を散らした。

「お前！」

両者の実力は拮抗している。レベルでは相手の方が上回っている印象だが手持ちポケモンの数で優位に立っている事もあってシユンはうまく立ち回っていた。

そして戦いが膠着している間に、シユンは未来の自分へ声を張り上げた。

「サツキさんを、殺したのか……！」

「——ああ、そうだ」

問いかけに短く肯定の言葉だけを告げる。

決して本意ではなかった。

ただあまりにも力も決意も足りなかった、その甘さが呼び起こしてしまった悲劇。今更取り繕う気はない。

「気づいたら、指示を出していた。気づいたら、サツキさんの体が地面に崩れ落ちていた」

他に選択肢が思い浮かばなかった。

自分を犠牲にする事なく。目の前に障害を排除する事だけに意識が傾いてしまった。

「すぐに彼女の元へ駆け寄った。だが人手がなく設備も崩壊した現場ではどうしようもなかった。でも微かに息はまだあったんだ。だから何度も呼びかけた」

あるいはこの時、せめて彼女の最期の言葉が、彼への憎しみや侮蔑であったならば、救いようがあったのかもしれない。

むしろ未来のシユンはそう言って欲しかった。憎しみや、恨み、呪い。それを言葉にしてくれれば、それを抱いてくれれば彼女の死をも自分は背負っていったのかもしれない。

「なのに——」

『——ありが、とう……』

それなのに優しすぎる彼女は、最期まで負の感情を向けてはくれなかった。

自らを殺めた少年に、感謝の言葉だけを告げて。

彼女はその瞳を、永遠に閉ざした。

『あああああああああああああああああああ!!!』

この一瞬の判断の過ちが未来のシユンの心を閉ざす事となる。

自ら犠牲となることに怯え、目の前の敵を倒した。

大切な人を救おうとして多くの人々の命の叫びにゆれた。

その結果勇氣は消え去った。信念は壊れてしまった。100を救うために1を殺した。無力であるがゆえに、サツキを救うことができなかった。恐怖と動転により自分を犠牲にすることさえなく。

これまでの全てが偽りになった。敵わない理想や淡い希望を抱いた結果が、現実がこれだ。

この現実には信じられるものなど何も無い。絶望と孤独と罪悪感、そして自責の念——負の感情だけが残り、思考を支配する。

「なのに！ 世間は俺を英雄と謳った。ジョウトを巨悪から守り抜いたポケモントレーナーだと。そしてサツキさんを、罪なき彼女を罪人だと罵った。ジョウトを混乱に陥れた反逆者だと」

仮面の男の正体が明らかにならなかったからこそ、意識は他へと向く。そして観客の一人が撮影し、ネットに出回ったサツキが会場内で破壊の限りを尽くす映像が世間を批判に駆り立てた。一方でそんな相手と戦い、観客を逃がして戦っていたシユンたちを讃えるようになっていく。

『フッフ。まさかあの女に助けられて生き延びたこんな子供に追い詰められる事になるとはな』

「——それは違う。断じて違う！俺は英雄などではない。大切な一人守れないような弱者で。好きな女性さえも天秤にかけ、その結果手にかかるほどの愚か者だった！ サツキさんこそが、本当に讃えられるべき英雄だったんだ!!」

後の仮面の男との戦いで耳にした真実、自分たちを逃すために囚われたという知らせはより彼を追い込んだ。

何も褒められる事はしていないのに賞賛され、操られていた事実も知らずに不当に悪評を流す世間の声。

守りたかったものは消え、結果として守り抜いた彼らはサツキの名さえをも貶めた。一度被せられた汚名はもう二度と消えることはな

い。永遠に残り続けることになる。

ありとあらゆる事象が苛立ちばかりを加速させた。

「そうか。だからお前は過去この時代に戻ったのか。俺から父さん理想を奪い、血に濡れた未来過去を消し去るために。全ての悪を消し去るために」

ようやく全て合点がいった。

シユンは鋭い視線で未来の自分を射抜く。

元々彼が戦う理由の原点は父親との出来事に起因したものだ。それが一つのトリガーとなつてしまった。その切掛を減らすために。

「それだけじゃない。父さんならば職業柄ウバメの森での異変にもすぐに気づけると思つた。だからこの時代にきてすぐに父さんと接触し、行動を共にした。そして仮面の男と交渉し、かつての自分の行動になぞつた情報を教え、サツキさんとの葬儀の際に出会ったパーバスにも話を通した」

「……パーバスもお前が！」

かつてコガネシティ近郊で激闘を繰り広げた強敵の名前に驚愕する。

確かにあまりにも情報が正確すぎると思つていた。

まるでこちらの情報を読んでいるかのような正確な敵の配置に、シユンは誰か内通者がいるのではないかと一時は疑問を抱いていたほどだ。

それがまさか未来の自分が自分を潰すために用意周到に準備していたとは考えられるはずもなかった。

「そうだ。俺はこんな結末を望んでなんかいなかった！俺はこんなことのために旅に出たんじゃない！——ずっと憎かつた。何もできない自分も、全ての元凶であつたヤナギも！そして何よりも、何も知らないいくせにサツキさんを穢したこの世界のことか!!」

怒りに声を振るわせる未来のシユン。

かつては敵対し、止めようとしていた巨悪に一時でも力を貸した原因。

それこそが己という存在の抹消であり、不意を突いて巨悪も消し去り、そして大切な人を侮辱した世間への攻撃なのだ。力の限り吠え

た。

「サツキさんは許しただろう。だけど俺は許さない。彼女を救えたとしても、そんな彼女を消した存在が未だ存在することは許容できない。だから——ここで消えろ！」

目の前の敵を撃ち倒す。

もうそれしかないのだと、未来のシユンは感情を露わにし、再び過去の自分へと攻撃を仕掛けたのだった。

## 第四十八話 VS バクフーンII 覚悟の差

あまりにも衝撃的な光景の連続だった。

自分が経験してはいないとはいえ、自分や親しい人たちがたどったかも知れないというもう一つの未来<sup>F</sup>。

鮮明な映像は実際に目にしたかのような感覚を刻み込み、シユンの心に少なくない影を落とした。

先のゴールドとの一件はもちろん、もう一人のシユンの抱く強い怒りの本気度から今さら真実かどうかを疑うことはしない。全ての体験を目撃して相手の怒りの理由も察したからこそ、シユンは今一度目の前の敵をあり得たかもしれないもう一人の自分として理解して、

「ふぎけるなよ」

そして強い怒りを露にした。

確かに共感できる点もある。もしも自分が全く同じ立場に立ったならば同じことをしていたかもしれない、そんな予感を脳裏をよぎった。それだけサクキという存在を大切に思い、その強さの裏返しとして憎しみが激しくなったという理論は理解できる。

だが、たとえそうだとしても、シユンには許せない点があった。

「暴れる、バンギラス！」

「おんがえし！」

もう一人のシユンがくり出すバンギラスが見境なく「あばれる」のをシユンのバンギラスが迎撃する。巨体をその場で抑え込んでいる間に、さらにシユンのハッサムが飛び出し――

「メタルクロー！」

鋼鉄の両腕が敵のバンギラスの右膝を殴打した。

弱点をついた一撃にその体が大きくよろめくと、一瞬の隙を逃さずバンギラスが敵を地面に叩きつける。

さらに追撃を、とシユンが指示をくり出そうとした、その時。

「ギャラドス、アクアテール」

もう一体の大型ポケモン、ギャラドスの体が大きくしなり、その尻尾がハッサムごとバンギラスを側面から叩き飛ばした。

「受け止めろ、エーファイ！」

宙に投げ飛ばされ、無防備になった二匹をエーファイの念で受け止める。

やはり年季で上回れているぶんレベルは相手の方が上。技の威力も比例して向上していた。

休む間もなく、今度は素早い動きで空を自在に舞うクロバットが突撃してくる。

「さいみんじゅっ！」

「しんぴのまもりだ！」

クロバットが口から敵の眠気を誘う波動を繰り出すと、エーファイはそれを無効化する空間を展開して防ぎ切った。

得意の攻撃を受け切られたクロバットはそのまま宙に浮かびつつも今度は高速で翼をはためかせる。

「エアカッターで吹き飛ばせ！」

「ピジョット、つばめがえし！」

そして鋭い風の刃をエーファイめがけて打ち出した。

凄まじい速度の斬撃。くらえば他のポケモンたちも被害を受けてしまうであろう一撃。

これをピジョットが高速旋回を行い、自慢の翼で全ての攻撃をはたき落とした。

「バクフーン、かえんほうしゃ！ ラプラス、れいとうビーム！」

すかさず反撃の指令を命じるシュン。

バクフーンの炎がクロバットを直撃し、ラプラスの冷気をまとった光線がギャラドスに命中する。

まともに受けてしまった二匹の体が大きく仰け反り、後退する。

「チイッ！ スペックではこちらの方が上のはずなのに！」

何年も年齢が下である忌々しい自分という存在の奮闘に、もう一人のシュンはたまらず舌を打った。

この時代に来る前も、来てからも励んで来た年月は確かにレベルとして効果を示している。それでも今、打倒する相手を圧倒できない。確かに戦うポケモンたちの数の差もあるだろう。この世界の自分は

かつての自身よりも多くのポケモンたちを捕まえ、鍛えてきた。

だがそれでもここまで善戦されるとは思いもよらなかった。

「同じ自分だとしても、違う道のりを辿ったのならばそれは別人だ。確かに前のお前の気持ちは理解できなくもない。——ただ一点を除いて。俺も、その一点に置いてお前を許さない！」

シユンの鋭い視線が未来の自分を射抜く。逃しはしない、と言外に告げるその目に当てられ、もう一人のシユンはわずかに気後れした。

「ただ一点？　なんのことだ？」

「なぜだ。なぜお前は俺を彼女に、サツキさんに殺さそうとした！」

それは先ほどの戦いの顛末そのものだ。

あの戦い、本来ならばシユンはあの場で死んでいた。

他でもないサツキとの戦いで。

そしてそれを仕組んだのは紛れもないもう一人の自分だということとは明白だ。

「——彼女には、俺を殺す理由があった。だから！」

かつての時間で自らが犯した罪。その意趣返しなのだと、そう告げるもう一人の自分に。

「ふざけた事を言ってるじゃねえよ！　本当にお前が俺なら、そんな事しようとするはずがない！」

容赦のない怒声を浴びせる。

これこそがもう一人の自分との確実な差異だ。自分ならばたとえ同じように時間を巻き戻したとしても、それだけはしなかっただろうとシユンは口にする。

「大切な人を死に追いやって、後悔しておきながら、同じ気持ちをあの人に味合わせるなんて。自分の事しか考えてないだけだろうが！」

お前は戦うのも、死ぬのも怖かっただけの、ただの臆病者だ！」

語気を強めてそう訴えた。

戦うのを恐れて巨悪との戦いから逃げて。

死ぬのを恐れて力の行使を避けて。

結末を恐れて自らとの決着にも他人を利用して。



ただ逃げてきたただけだと己に告げるシユンに。

「……黙れ」

「そんなやつに負けてやるものか。所詮お前は、自分の我儘で戦っただけの」

「黙れよ！」

もう一人のシユンはどす黒い炎を燃やした。相手の言葉を途中で遮り、血が出るほど拳を強く握りしめる。

「エレキブル、かみなりパンチ！」

「かわらわりに、ブレイククロー！」

エレキブルが雷を纏った拳を振り上げると、ヘラクロスがその腕をかちあげ、隙ができた胴体にサンドパンの鋭い爪が襲いかかった。

強力な一撃を受けたエレキブルが膝から崩れ落ちる。

そして先ほどまでエレキブルの頭があり、隙間となったその空間から飛び出したのは先ほどもシユンのポケモンたちを吹き飛ばしたギャロスの尻尾。

アクアテールが絶え間なく襲いかかった。

「バンギラス、受け止める！」

同じ轍は踏まない。

すでに技を一度見ていた今度はバンギラスが正面から受けきった。苦手であるギャラドスの攻撃だがトレーナーの信頼に応えて堪えたバンギラスはそのままギャラドスを地面に叩きつける。ギャラドスの口から大きく息が漏れる中。

「ラプラス、かみなり！」

ラプラスが点高くから振り下ろした雷がギャラドスに降り注ぐ。

弱点である高威力の大技が致命傷となり、ギャラドスの体は完全にその動きを止めた。

「ギャラドスまで……！ クロバット！ かみつく！」

「遅い！ でんこうせっか！」

ここで反撃の芽を繋ぐべく、もう一人のシユンはクロバットに攻撃の指令を下す。

しかし素早さ自慢のクロバットをさらなる速さで突撃したピ

ジヨットによりその攻撃は中断。大きく跳ね返されて、

「打ち落とせ、サイケこうせん！」

エーファイの念が纏った一筋の光がクロバットを撃ち抜いた。

凄まじい速度で放たれた一発を前にクロバットも地面に沈む。

「……………くっそ！ なぜ！」

「終わらせる！」

『ピカチュウ10万ボルト！ バクフーンかえんほうしゃ！』

手持ちポケモンの消耗が激しくなる中、二人の指示が完全に一致した。

勝負を決める場面でピカチュウとバクフーン、シユンの手持ちポケモンの中でも特に彼との繋がりが強い二匹が前にでる。

そしてピカチュウの電気袋から放たれた電撃とバクフーンの口から飛び出した炎が激突した。

同じポケモンが繰り出した同じ技。四匹のちょうど中間地点で拮抗した状態でせめぎ合う。

「っ」

しかし、徐々にシユンのポケモンたちが繰り出した電撃と炎が、もう一人のシユンのポケモンたちの技を押し込んでいく。

「どうして、ここまで差が……………」

決して実力で劣っているとは思えない。年齢の分だけ戦闘経験はもう一人のシユンの方が上のはずだった。

「負けられない！ 自分自身に負けるわけにはいかないんだよ！」

差があるとするならば、これまでの経験の内容の差だった。

シユンはこれまで多くの強敵との戦いを経験してた。仮面の男との直接対決はもちろん、パーバスやロケット団をはじめとした難敵たちを相手に如何に突破口を見出すかという経験を積んだ。

冒険の過程で覚醒したシユンの図鑑所有者としての力。従来ならば一人のトレーナーが持てる一番バランスの良い数字である6体という枠組を超え、多くのポケモンたちを勝利という一つの結果に導く能力。これはもう一人のシユンに足りないものだった。

加えてこれまでシユンが酷使してきたワカバの力も影響している。

確かに瞬間的な回復及び強化は一時的なものに過ぎない。だが、その力に引つ張られるように、体に刻まれた感覚が努力の値としてポケモンたちの力となっていた。

「行け、ピカチュウ！ バクフーン！」

最後の一押しと言わんばかりにシユンがパートナーたちに声援を送る。

するとその声に後押しされたように。10万ボルトとかえんほうしやの威力はさらに増して——相手のピカチュウとバクフーンを降りかかり。さらにもう一人のシユンをも捉えたのだった。

「——ちっ。ここまで、か」

自慢の相棒であるポケモンたちと全く同じ姿の敵から得意技を受けて終わるとはなんとという皮肉か。

電撃と炎に身を包まれる中、もう一人のシユンは悔しげに歯を食いしばった。

もう一人のシユンとの手持ちポケモンの相違点

同一個体

・ピカチュウ：出会いの流れまで同じである唯一のポケモン。

・バクフーン：同一個体ではあるが、エイジが失踪していないためにエイジから直接バクフーンの卵を預かり、孵している。出会った順番も手持ちポケモンの中では二匹目となった。

・バンギラス：出会った場所は同じだが、この世界線では普通の治療を行っていたために最初は懐くのが遅かった。

・エレキブル：こちらでは手持ちポケモンとして同行。時渡り後、エイジとの通信交換を経てエレキブルに進化した。

その他

・クロバット… シュンがゴールドと合流するために旅立ったその道中でゲット。折角の機会と言うことで新たなポケモンとの出会いをしたかった模様。

・ギヤラドス…いかりの湖のギヤラドス大量発生時に捕獲。

ゲットしなかったポケモン

・ピジヨット…時系列がわずかにずれたことで遭遇がなくなった。

・サンドパン…同上。

・ラプラス…この世界線では普通の治療で終わったためにラプラスも群れと行動を共にした。

・ヘラクロス…情報の漏洩がないためウバメの森で仮面の男の襲撃が行われず、そもそも出会う機会が喪失。

・エーフィ…手持ちポケモンに空きがあるためオーキド博士からマサキへの要請がなく、コガネシティの滞在期間も短かったために遭遇せず。

・ハッサム…むしとり大会に不参加。

## 第四十九話 VS メタグロスII 最後の奇跡

連続で生じた二つ目の戦いもようやく終わりを迎えた。

エンジュシテイ郊外で幾度も木霊していた轟音がなりやみ、ようやく静けさを取り戻した空間。

勝者であるシユンはポケモンたちをボールに戻すと、何かを噛み締めるようにゆっくりと歩を進める。相手のポケモンたちも完全に戦闘不能になっているのを見届けて、その主のそばへと歩みよった。

そして片膝を地面につき、木に背を預けて倒れるもう一人の自分を表情一つ変えることなく見下ろす。

「……何だ、その顔は？ ……倒した相手、それも自分を殺そうとした相手が消えるんだ。いつそ清々しいと考えたらどうだ」

ボロボロの体からは光が溢れ、すでに腰から下は消滅していた。今にも消えそうな自分をなんとも言えない顔で見つめる自分と目が合い、もう一人のシユンは自虐気味に笑う。

「そんなこと、できるかよ」

戦っていた時は戦闘の熱もあってあのように語っていたものの、目の前の存在はあるいは自分が辿っていた可能性なのだ。割りきることは難しい。

短く、そう返すにとどまった。

「お前が気にする必要はない。……本当は、時渡りをしたあとでも、まだ選択の余地はあったはずなんだ。仮面の男だって伝説のポケモンを捕まえようとしたのは、過去の失敗をやり直すため、そう聞いた。だから俺も今度はサツキさんが苦しまないように、力になる道だった」

思わぬ形で突然敵の目的を知らされ、シユンの瞳が驚愕に見開かれる。

ロケット団の残党たちを従え、伝説のポケモンたちを手中に納め、多くのトレーナーたちと敵対してでも成し遂げたかった願い。

それが野望の達成でもなければ大望の成就でもない。あの巨悪でさえもそんな人間らしいことを考えるのかと、シユンは正体も知らな

い大敵の心の内を知って、共感に似た感情を抱いたのだった。

そんなシユンの考えを知ってか知らずか、もう一人のシユンは話を続ける。

「だが、俺はそうしなかった。俺がサツキさんの命を奪っておきながら、俺が彼女を助けるだなんて虫が良すぎる話だと、そんな資格はないと、そう思ったから」

彼も敵の真意を知ったときは同じ想いに至ったことだろう。

しかしもう一人のシユンは違う道を選択した。

罪悪感が他の全ての感情を勝ってしまったからこそ、救済よりも破壊を選んだのだと悲しげに語る。それだけ自分の手で身近な存在を破滅に追いやってしまったことが彼の心に影を落としたのだろう。

「だから、これで良いんだ。……あの日、セキエイ高原で彼女を失った時からきつと、こうなるべきだったんだ」

今でも過去の自分の選択を呪っている彼は、この結果を受け入れていた。

たとえ誉められたものではない行動だとしても、その根本にあったのは誰かのためという願いがあったからこそ。

「……そうか」

それをシユンも感じとったからこそ余計な口出しはしなかった。

互いに言葉は尽くした。これ以上の問答に意味はない。

シユンはふらつく体に力を込めて立ち上がった。

随分と遅れをとってしまった。早くサツキたちに追い付かなければならない。

「待、て」

しかし。

背を翻した直後、もう一人のシユンが力のない声で呼び止める。

もうすでに脅威は去った。相手もただでさえ体の消滅が起きていた上に電撃と炎を一身に浴びたのだ。もはや身動きができないうとは明白である。それを知っているためにシユンは特に身構えることなく相手の次の言葉を待った。

「これを、持っていけ」

胸元からあるものを取りだしてシユンの眼前に掲げる。

シユンが受け取ると、それは黒いカバーに包まれた二本の羽のようだった。

「なんだ、これは？」

「にじいろのはねとぎんいろのはねだ。おそらくこの先の戦いで役に立つだろう」

「これが!？」

教えられたのはオーキド博士たちとの会議で話題に上がっていた大切なもの。

伝説のポケモン捕獲に必要とされ、仮面の男も手に入れようとしていた羽だった。

「なぜお前がこれを持っている!？」

「先程セキエイ高原でイエローから奪ってきた。本人は知らないことだが、彼女は肌見放さず持ち歩いていたんだよ」

「お前、イエローさんにまで……!？」

「言っただろう。仮面の男を倒すつもりでもあったと。そのためだよ。さすがに、こいつを渡すのは無理なようだから……」

新たに明らかになった悪事を糾弾する自分をスルーして、もう一人のシユンは腰のボールを撫でた。

先程の戦いでは繰り出さなかった、ときわたりポケモン。彼がこの時代にもこれた要因であるポケモンは時代を逆行して以降、ボールからでようとすらしめない。だから代わりに用意していたものを仮面の男を止めるために託そうと、シユンに手渡した。

「それと、もうひとつ」

「なんだよ?」

まだ何かあるのかと、シユンは彼が話しはじめるのをじっと待つ。

もう一人のシユンは大きく息を吐き、瞳を閉ざし、覚悟を固めると意を決して言葉を紡いだ。

「消える前に、最後に、お前に、ワカバの力を、つかわせてくれ」

「はっ!？」

突然の提案は信じがたいものだった。

先程まで敵対していたもう一人の自分が、今度はシユンのために力を奮うと言うのだ。しかももう自信はいつ消えてもおかしくない現状で、何をしても自身の結末は変わらないと言うのに。

言葉を失うシユンに、もう一人のシユンは笑みを深くして説明を加える。

「何を驚く。お前も言っていたことだろう。俺達の力はポケモンだけに使えるわけではない。まして本来は同じ人間であるお前に使うんだ。あるいは、お前がこの度で費やした生命力をも補えるかもしれない」

理屈はわかる。

そもそもサツキが存命である事からもその効果は認められた。

だが、気がかりなのはそれをどうして今になって消そうとしていた相手に使うのかということ。

「どういうつもりだ？」

「見ての通りだ。俺はもうじき消える。未来が変わった今、おそらく俺と言うあり得ない存在は最初からなかったことになるだろう。なら、ここで力を使い果たしたとしても、何もデメリットはない」

「だが俺は……！」

力の代償はなくなっただとしても、目的は異なるだろうと反論するシユンの言葉を遮って、彼は話し続ける。

「頼む。良いんだ。いや、きつと最初からこうするべきだったんだ。俺は我が身可愛さに多くの人を傷つけ、失った。誰かを助けるための力を持って生まれたはずなのに……」

彼が持つ力に元々秘められた意味を思い返して、こうせざるを得なかった。

「だから、頼む、」

重ねて訴えるもう一人のシユン。

「せめて最後に、俺にも誰かを救わせてくれ。そして叶うならば……お前は何かあっても絶対に守り抜け」

「——言われるまでもない」

今度こそ正しい道を進みたいのだと聞いて、シユンも反論はできな



かった。

かつての世界でピカチュウ、そしてこちらの世界に来てサツキに行使した二度目に続き、これが三度目。

もう一人のシユンは残された生命を全て振り絞り、願いと共に託したのだった。

力が、抜けていく。

体が、溶けていく。

存在が、光となって消えていく。

これまでの過程が、結果が、全てが、失われていく。

「……あるいは、あの世界で、あなたに力を使っていたならば、変わっていたのかな……」

後悔ならある。

あの日、あの場所、あの瞬間。行動に移せなかった自分の不甲斐なさ。

あれからずっと悔やみ続けていた。

もう会わせる顔がない、そう思ったからこそ彼女を救う道よりも自分を抹消する道を選んだ。

「結局、あの人とは、まともに出会えなかったな……」

こちらの世界で面と向かって会えたのは彼女が拉致された後。仮面の男が支配下に置かれたため、彼が力行使した時だけだ。あとはこの場で遭遇し、状況を把握しきれない彼女と軽く話を済ませただけ。

結局最後まで守りたいと思った存在としつかりとした再会を果たすことができないまま終わってしまう。

「……因果応報、か」

だが、仕方がない。

今さら彼女の隣を歩こうだなんてそれこそ都合が良すぎるというものだ。

だから、もう仕方がない。

そう考えて、自虐気味に笑って、瞼を閉ざした。

ふと、人の気配を感じて目を開け、後ろを振り返った。

「……………なんで？」

あり得ない。

この世界の彼女は、父と共に決着の場へ向かった。先程この世界の自分も二人を追って向かったのだ。間違いない。

なのに。

女性は腰まで伸びる青い髪を揺らし、ゆっくりと歩み寄り、手を伸ばす。

「あり得ない。俺は、だって、なのに……………」

幻覚か。いや、たとえそうだとするとあり得ない。虫が良すぎるなんてレベルではない。

もう二度と見ることはないだろう。そう覚悟した彼女の笑みが、

「……………サツキ、さん！」

目の前に、あるなんて。

手を伸ばせば届く距離。だが、もう彼の両手は光となって消えた。肩より上しか残っていないこの状況ではもう何も出来はしない。

あまりにももどかしいこの小さな距離にもう一人のシユンが齒を食い縛る。

そんな、彼の残った頭を、サツキは優しく抱き寄せた。

「…………ごめん、なさい。あり、が、とう……………」

それは、セレビイの優しさが見せた最後の奇跡。

もう一人のシユンは最後の最後に救われ、満足げな表情を浮かべて消えていった。

くしくもその最期の言葉は、彼が行動を起こす切欠となった、大切な人のものと全く同じものであった。

ジョウト地方の各地で繰り広げられていた激闘も分岐点を迎えていた。

エンジュシテイ郊外の戦いは決着し、リニアに閉じ込められていたジムリーダーたちも危機を脱し、セキエイ高原で発生した戦いも一先ずの終末を迎えている。

そして舞台は場を移して、伝説のポケモンが眠るといふ言い伝えが残る地・ウバメの森へ。

「まったく。なんとか間に合ったと喜んでいたのに。記念するこの時に、招かれざる客が多いことだな」

デリバードから降り立った仮面の男が何も無い空間へ向けて言葉を発する。

「何者だ？」

中々でてこない敵へ問いを投げた。

やがて草むらから二人の影がポケモンたちと共に飛び出した。

サツキとエイジ。シユンよりもいち早く仮面の男の迎撃に向かっていた二人である。

「私よ。遅かったわね」

「待ちわびたぞ。お前の好きにはさせせん！」

「……なるほど。貴様たち二人が敵に回ったということは、エンジュの攻防はあの少年が勝ったということか。予想が外れたな」

サツキのメタグロス、エイジのフーデインが険しい目付きで睨み付けるなか、仮面の男は余裕を崩さない。

意外だと言いながらも問題はないという様子であるが。

「こつちにもいるぜー」

敵は彼らだけではない。

さらに仮面の男が来た方角からもう一人のトレーナー、仮面の男を追跡していたゴールドが姿を表した。

「……ふん。しぶといやつだ」

「ゴールド君！」

「ウツギ博士たちも話していた先程の……」

「あつ？ ……つてええ!? シュンさんの親父さん!? と、超美人！  
——マジかよ。こんな場面じゃなきやこの出会いを両手あげて喜んでいたところだったのによ」

普段と変わらない調子の良きで語りかけながら、ゴールドは鞆からビリヤードのキューを取りだし、視線を細めて仮面の男を睨み付けた。

「じゃあねえ。さつさとこの戦い、終わらせてやるか」

「うずまき島での借り、しっかり返させてもらうわよ」

「援護する。一斉に行くぞ」

ゴールドのバクフーンが放つ咆哮を契機に、三人のトレーナーは一連の事件の黒幕へと意識を強める。

「どいつもこいつも邪魔物ばかり。だが……今さらここで足を止めた  
りするものか！」

三人のトレーナーの包囲を敷かれる中、仮面の男は空間を切り裂くほどの声量で叫び出す。

直後、彼の声に応じるように周囲一面に氷の槍が瞬時に形成され、敵へと襲いかかる。

ジョウト地方全土を揺るがした事件の最期の戦い、その火蓋が切つて落とされた。